

奇譚クラブ

奇譚クラブ

THE KIFAN CLUB

Published Monthly for the Kifan Club

12 Issues Annually

2



1972

2



新しい民俗文獻誌

雑誌 3835-2

2月号 ¥350

1972・2

奇譚クラブ 臨時増刊
 女体緊縛写真集 Ⅴ 定価一〇〇〇円(送料50円)



天然色写真

柔肌に喰い込む麻縄 前田真知子
 首縄横臥二態 前田真知子
 典型的後手縛り 前田真知子
 自由な肢のもたえ 前田真知子
 麻縄と続肌の明暗 前田真知子
 厳しい縄目を味う 前田真知子
 準備態勢OK 前田真知子
 股間縛りの表情 前田真知子

女体緊縛の華 本誌写真部構成

金髪碧眼の美女	シラ・ケ	金髪碧眼の美女	シラ・ケ
答打ちの態勢	関谷富子	答打ちの態勢	関谷富子
鞭撻の痛苦	長井葉津子	鞭撻の痛苦	長井葉津子
洗腸責の序曲	左近麻里子	洗腸責の序曲	左近麻里子
亀甲縛りの美態	中河恵子	亀甲縛りの美態	中河恵子
麻縄と白肌の対照	左近麻里子	麻縄と白肌の対照	左近麻里子
陽を浴びた柔肌	中河恵子	陽を浴びた柔肌	中河恵子
猿ぐつわに喘ぐ	中河恵子	猿ぐつわに喘ぐ	中河恵子
緊縛裸身の放心	中河恵子	緊縛裸身の放心	中河恵子
責め疲れの境地	中河恵子	責め疲れの境地	中河恵子
没我の末の悦	中河恵子	没我の末の悦	中河恵子
痛打の人の悦	中河恵子	痛打の人の悦	中河恵子
沖繩美人の緊縛	中河恵子	沖繩美人の緊縛	中河恵子
剣玉子の縛り	中河恵子	剣玉子の縛り	中河恵子
狂変する裸女	中河恵子	狂変する裸女	中河恵子
責めくたびれて	中河恵子	責めくたびれて	中河恵子
紅毛碧眼の白人を責める	中河恵子	紅毛碧眼の白人を責める	中河恵子
海老責の狂態	中河恵子	海老責の狂態	中河恵子
ボリウムの挑戦	中河恵子	ボリウムの挑戦	中河恵子
鞭打の下に挑	中河恵子	鞭打の下に挑	中河恵子
祭壇の人身御供	中河恵子	祭壇の人身御供	中河恵子
稚妻は縄を知りぬ	中河恵子	稚妻は縄を知りぬ	中河恵子
開股の正面と背面	中河恵子	開股の正面と背面	中河恵子
華麗な開股責め	中河恵子	華麗な開股責め	中河恵子
イルリガートルを前に	中河恵子	イルリガートルを前に	中河恵子
非情な責めの終末	中河恵子	非情な責めの終末	中河恵子
両手吊りの晒し	中河恵子	両手吊りの晒し	中河恵子
柱縛りの完了	中河恵子	柱縛りの完了	中河恵子
処女縛りとまどう	中河恵子	処女縛りとまどう	中河恵子
麻縄に身をゆだね	中河恵子	麻縄に身をゆだね	中河恵子
盗視するSMの目	中河恵子	盗視するSMの目	中河恵子

緊縛女体の光と影 編集部構成

両手挙げ棒責め	川路 叢子	これから、どうするの？	長井葉津子
柱宙縛りに浮く	長井葉津子	苦痛か悦楽か	前田真知子
後手吊りに苦しむ	中河恵子	逆エビ縛りの魔術	中河恵子
どこでも責めて	佐々木真弓	愛撫の責め	三浦純子
ムチが痛い、許して	関谷富子	黒縄と白肌	前田真知子
柱を挟んだ連縛	関谷富子	身動きできぬ境地	中河恵子
花と蛇の静子です	中河恵子	浮上した女体	中河恵子
針責めをして頂戴	中河恵子	麗しき背面	中河恵子
二つ折りの女体	中河恵子	汚辱の縄本縛り	中河恵子
猿ぐつわの哀飲	中河恵子	高手の小本縛り	中河恵子
日本式縛りの白人	中河恵子	責め手の陶酔境	中河恵子
マソの女王に答	中河恵子	失神したマソ女	中河恵子
柱しばりの恥らう	中河恵子	前手縛りの悶	中河恵子
夫婦の淫姿	中河恵子	柱の彼方の天国	中河恵子
長襦袢の艶姿	中河恵子	荒縄の海老責	中河恵子
豊満ボディを誇る	中河恵子	美と縛の女神	中河恵子
美女今縛られる	中河恵子	可憐な置物	中河恵子
海老責への展開	中河恵子	酒の肴になる	中河恵子
責めてみたい碧眼の女	中河恵子	妖蛇の洗礼	中河恵子
日本式高小手縛	中河恵子	奔弄されるまに	中河恵子
猫の目のような女	中河恵子	柱につなかれた女	中河恵子
足吊りの媚態	中河恵子	痛さをこらえる異国	中河恵子
亀甲縛りの花	中河恵子		
M女二輪の黒髪	中河恵子		
苛責に乱れた黒髪	中河恵子		
開股縛りの幻想	中河恵子		
鏡の前での放恣	中河恵子		
愉悅のひととき	中河恵子		
ハリツケ晒し	中河恵子		

カメラ・ハント楽我記 辻村 隆
 女体緊縛の醍醐味を語る 塚本 鉄三

◆本誌創刊二十五周年記念◆
百万円懸賞原稿募集

女性モデル募集

勇敢な女性の出現を望む

○本誌の内容充実刷新のため、並に本誌の文献資料性向上のため、女性の写真モデルを募ります。本誌の女性読者の方で写真モデルとして活躍を望まれる方は、どうか勇気を奮って御応募下さるよう、お願い致します。

○本誌愛読者の女性の方でしたら、国籍、年令、遠近は問いませんから御遠慮なくお申込み下さい。採用の方には壹万円以上拾万円までの謝礼を差し上げます。

○応募されました方々の個人的な秘密は絶対に漏洩致しませんから御安心の上御応募下さい。尚その際、お好みの傾向を出来るだけ詳しくお書き下されば幸いです。

○誌上掲載を原則としておりますが、若し掲載を望まれない方がありましたら、その旨添記して下さい。御都合に依つて分譲用又は助手介添え或はプレイのみの出演をして頂きます。その時の報酬については改めて御相談に応じます故御照会下さい。

○モデルに關してのお申込みは、年令、略歴の他に身長と体重をお書き添え願います。写真と同封下されば尚結構ですが、若しお手元に適当なものがなければ、なくとも差支えありません。

申込先 大阪市住吉郵便局私書箱第41号

曉出版株式會社編集部宛

▽内 容△

選外佳作	佳作優秀	入選作品	入選作品	入選作品	入選作品	入選作品
品	品	品	品	品	品	品
		第五席	第四席	第三席	第二席	第一席
五	一	二	三	五	十	二十
千	万	万	万	万	万	万
円	円	円	円	円	円	円
10	15	10	5	3	1	1
篇	篇	篇	篇	篇	篇	篇

今月号のハイライト『二人のマダム』

○十一月号の誌上に登場した二人のマダムの責められていた姿態を直接印刷紙に焼付けた極鮮明なフットにて、お楽しみ下さい。

開股縛りの強烈さ

福井 桃三枚一組 五〇〇円
略号ハチお
爛熟した色気に満ち溢れた全裸の肢体から滲む開股縛りの凄さ。

逆エビ責めに喘ぐ

福井 桃三枚一組 五〇〇円
略号ハチと
逆エビ縛りで前面を露呈した女体が軋々として悶えこころがる。

一直線の開脚縛り

福井 桃三枚一組 五〇〇円
略号ハチう
踊りで鍛えた柔軟な肢は真一文字に開かされて責め抜かれる。

菱縄縛りの種々相

福井 桃三枚一組 五〇〇円
略号ハチま
きつちりと皮肉に喰い込む厳しい菱縄が悶える度に描く花模様。

抜きとるズロース

福井 桃三枚一組 五〇〇円
略号ハチむ
純白のズロース、それも後手に縛られた上に剥ぎとられてゆく。

逞ましき臀部強調

福井 桃三枚一組 五〇〇円
略号ハチも
脂ぎって肉の乗った臀部を惜しげもなく晒して緊縛女体は行く。

後手縛りを見せて

福井 桃三枚一組 五〇〇円
略号ハチめ
身動きの出来ない厳重な後手縛りで全裸の姿態は羞恥にもがく。

赤裸々な羞恥責め

福井 桃三枚一組 五〇〇円
略号ハチろ
剃員のようになり前面を晒し或は両脚を高々と挙げ徹底的に責める。

悦虐涕泣のポーズ

福井 桃三枚一組 五〇〇円
略号ハチえ
縛られた全身からにじみ出るSM愛好マダムの涕泣を見よ。

柔肌に喰い込む縄

福井 桃三枚一組 五〇〇円
略号ハチほ
牝豹のようなしなやかな肢体も縄によっていびつになる。

高手小手縛り哀感

江口 淑三枚一組 五〇〇円
略号ハチよ
マダム淑子の裸身のすべてを緊縛によってあからさまに暴く。

苦悶するエビ縛り

江口 淑三枚一組 五〇〇円
略号ハチん
女体の神秘を探る縄は油汗を流させながら体臭をかきまくる。

翻弄されるマダム

江口 淑三枚一組 五〇〇円
略号ハチひ
縄尻を握られて振り回される縛られた女体は法悦境を彷徨う。

愁いある目と猿轡

江口 淑三枚一組 五〇〇円
略号ハチゆ
齒と齒の間に猿轡を噛まれたマダムの目は妖しく輝く。

悦虐天国への階段

江口 淑三枚一組 五〇〇円
略号ハチそ
床の上に投げだされた女体は、みずみずしい芳香を放って泣く。

いたぶられる媚態

江口 淑三枚一組 五〇〇円
略号ハチわ
まかせきつた全裸の女体は縄の媒介によって火と燃えたぎる。

紅閨へのいざない

江口 淑三枚一組 五〇〇円
略号ハチは
向うに見えるのは閨の室か猿轡の白さも鮮かにマダムは濡れる。

後手高手小手三態

江口 淑三枚一組 五〇〇円
略号ハチい
変幻きわまりなきポーズの型に依り高手小手の縛りも変化する。

開股縛りの醍醐味

江口 淑三枚一組 五〇〇円
略号ハチし
手摺りを利用した開股縛りによって女体の魅力がたまらない。

強烈股間縛り点描

江口 淑三枚一組 五〇〇円
略号ハチへ
双臀に深々と埋まれるように喰い込める股間縛りの見事な描写。

強烈足吊りの苦痛

江口 淑三枚一組 五〇〇円
略号ハチせ
厳しく締めつける縄にも増して揃えた足を吊られる激痛は凄く。

T字型生理帯着用

深田 菊三枚一組 二〇〇円
略号ハチあ
T字型の生理帯を着用し始めより終りまでを連続写真に纏めた。

前開型バンド着用

深田 菊三枚一組 二〇〇円
略号ハチか
前開き式のメンスバンドを着用しているところを連続撮影した。

◎御注文はすべて前金にて略号御記入の上、大阪市阿倍野局私書箱第14号天星社宛お申込み下さい。送料当方負担にて急送致します。

奇

譚

ク

ラ

ブ

二月号目次

△昭和四十七年△

△第二十六卷△第二号△通刊第二八八号△

本

文

フォト「清純なる変身」△四方清美△……………T・T生……………(9)

懸賞入選告白『夕陽よとまれ』……………浦 紗登子……………(10)

カメラ・ルポルタージュ△芸者福竜(松本たえ)の巻△……………塚本 鉄三……………(24)

『縄に恋した女』…………………………………………………………………(24)

SMショート・ストーリー「二人の客」……………………………………………………(48)

懸賞入選創作『フラスト族の叛乱』(下)……………………………………………………(52)

マゾヒスティック 石原道代の四楽章……………………………………………………(70)

まりこのプレイ「マゾ女の台詞」……………………………………………………(82)

Mフィクション「SMクラブの夜」……………………………………………………(84)

連載小説「大噴火」△第四十一回△……………………………………………………(96)

M女通信『プレイに徹したい』……………………………………………………(104)

小説「拷問クラブ」△美しく獲物△……………………………………………………(116)

告白「生きた蛇を用いた責め」……………………………………………………(128)

切腹研究夜話「文芸切腹史」……………………………………………………(131)



奇クサロン

(232)

夫婦プレイを楽しむ方々へ	三浦 敬一
短歌「玩具妻」	大野 伶子
サロン楽我記 第九十二回	辻村 隆
「理恵女」再生	沢潟 しの
躍進新年号	東村 和年
女性同志	福井桃子に魅せられる
被虐を求めあった二人	小杉 千恵
通信「一輪花、慶子よ」	小西 一郎
新年号読後感	夢幻境の世界に遊ぶ
プレイレポ	浣腸タバコ責め
山光純氏のパロディ	梶 美鬼
「花と蛇」に期待する	編集部
編集部だより	左根 情雄
奇ク最近号を読み	堀 真彦
イメージ画「お帰りはご自由に」	北川まりこ
艶夢「静子の歌」	佐野みさ子
告白 剃毛式と辻村先生	乃美 対造
M女通信 深田菊子様へ	佐原陽一郎
短信往来 柴利好さまへ	縛理 大造
牝犬みさ子へ	土田 純一
フォト通信 手製チュール衣裳	早木 夢二
股間縛りについて	夫婦プレイヤー
映画「性倒錯の世界」を観て	中村 純
イメージ画「ドブ川」	丸鬼怒又奴
最近の緊縛映画	東山 映史



連載・アブ紳士行状記 M派交友録 (24) 鬼山 絢策 (134)

SMカメラ・ハント 田中美佐子の巻

『緊縛妊婦第一号今昔』 辻村 隆 (146)

「D感覚」を考える 浣腸愛好の感覚 上条 直 (172)

パロディ『花と蛇』 (3) 山光 純 (174)

マダム美美代の告白「ムチ打ちは大好き」 福井 桃子 (184)

式服はオムツカバー ヲウエディング・ベビー 江原美那子 (194)

Mモデル体験記「被虐夢幻陶醉境」 淀 真曾夫 (198)

連載・時代S小説『紫蘭の門』 (6) 風流極道軒 (204)

告白「バトックス (お腎の双丘) 讃歌」 杉本 弘志 (220)

緊縛写真撮影行 途方に暮れる那津子 城 章夫 (222)

読者通信 編集部選 (252)

イメージギャラリー「狂乱劇開幕」岡たかし (15) 「しみ入る

熱さ」志羽利也 (19) 「次はこれだ」須坂旭 (23) 「ヒビの

惑星」小川茂正 (51) 「ペット手入れ」室井亜砂路 (58) 「

「熱涙」府和糸男 (65) 「熱いかい？」春川ナミオ (88) 「

「重いかい？」岡たかし (92) 「回転展示品」須坂旭 (122) 「

「共腹」桐原紫門 (133) 「これでもかッ」春川ナミオ (138) 「

「夜盗の本懐」岡たかし (143) 「絢爛たる騷り」岡たかし (213)

目次フォト 左近麻里子 〽 〽 〽 カット 〽 K O J I ・ S 〽

〔極最新版〕 新人M女性羞恥責め写真集

V組 百態 大手札印画紙 (9×13寸) 極鮮明焼付写真

各組 一組一枚 (送料共)

五組五枚	八〇〇円
十組十枚	一五〇〇円
二十組二十枚	二八〇〇円
五十組五十枚	五〇〇〇円
百組百枚	八〇〇〇円

(郵便番号545-91) 天星社
大阪市阿倍野局私書箱14号

複写による不鮮明な緊縛写真が出回っているようですが、これは全部特殊マニアの蒐集用として一粒選りのネガから直接印画紙に焼付した極めて鮮明な逸品揃いばかりです。きつとファンのアルバムを最高に充実させると信じます。大阪市阿倍野局私書箱14号天星社へ前金にてお申込み願います。

☆

- 1 足挙げ羞恥責め(深田 菊子)
- 2 トイレ排泄強要(三浦 純子)
- 3 完全二つ折締め(三浦 純子)
- 4 逆エビ凄絶苦悶(前田真知子)
- 5 超強烈エビ責め(三浦 純子)
- 6 荒縄柔肌いじめ(前田真知子)
- 7 全裸縛玄閑晒し(三浦 純子)
- 8 ネどうでもして(高村 浩子)
- 9 蠟燭責後手縛り(富田由美子)

- 10 羞恥の源を扶る(江口 淑子)
- 11 妊婦縛りの圧巻(富田由美子)
- 12 菱縄縛正面開放(江口 淑子)
- 13 正面の妊婦縛り(富田由美子)
- 14 麗しのマドンナ(荒尾 慶子)
- 15 両手挙前面晒し(福井 桃子)
- 16 強烈浣腸ポーズ(高村 浩子)
- 17 後手吊上げ猿轡(高村 浩子)
- 18 胡坐縛りの羞恥(江口 淑子)
- 19 ゴム人形の恐怖(江口 淑子)
- 20 菱縄股間縛前面(深田 菊子)
- 21 柱縛り開股強要(福井 桃子)
- 22 鮮烈股間縛の縄(深田 菊子)
- 23 本格的な麻縄責(前田真知子)
- 24 強烈麻縄の緊縛(前田真知子)
- 25 正面股間縛晒し(高村 浩子)
- 26 両足吊りの苦悶(江口 淑子)
- 27 店での全裸縛り(福井 桃子)
- 28 豊満な女体開陳(福井 桃子)
- 29 恍惚バイブ責め(江口 淑子)
- 30 マダム責の哀愁(江口 淑子)
- 31 開股強制棒責め(前田真知子)
- 32 大の字片足挙げ(高村 浩子)
- 33 雁字搦目の女体(江口 淑子)
- 34 足挙げ責の羞恥(江口 淑子)
- 35 淫虐蠟燭の挿入(福井 桃子)
- 36 海老開脚強制責(深田 菊子)

- 37 全裸立像後手縛(富田由美子)
- 38 麻縄逆エビ惨酷(前田真知子)
- 39 美女の全裸縛り(荒尾 慶子)
- 40 マダム全裸開陳(江口 淑子)
- 41 後手錠吊上げ責(江口 淑子)
- 42 女体美を晒して(深田 菊子)
- 43 高々と後手緊縛(福井 桃子)
- 44 猿轡に悶える女(高村 浩子)
- 45 太鼓腹全裸正面(富田由美子)
- 46 菱縄股間縛猿轡(前田真知子)
- 47 苛酷の宴果てて(高村 浩子)
- 48 美しき緊縛女体(荒尾 慶子)
- 49 エビ責めの序曲(江口 淑子)
- 50 猿轡に呻く麻縄(高村 浩子)
- 51 料理される女体(高村 浩子)
- 52 美肌に映える縄(荒尾 慶子)
- 53 両手両足開責め(三浦 純子)
- 54 剃毛責めの結果(荒尾 慶子)
- 55 人の字型羞恥縛(江口 淑子)
- 56 浴室での浣腸責(江口 淑子)
- 57 股間に喰込む麻(深田 菊子)
- 58 浣腸責めのあと(福井 桃子)
- 59 黒髪前に垂れる(福井 桃子)
- 60 スナックで縛る(福井 桃子)
- 61 喰込む股間縄責(江口 淑子)
- 62 責めに呻くM女(高村 浩子)
- 63 片足挙げ開股縛(江口 淑子)
- 64 菱縄悲し女泣く(江口 淑子)
- 65 M女を責め尽す(前田真知子)
- 66 引回される全裸(江口 淑子)
- 67 尻立蠟燭悦虐責(福井 桃子)
- 68 羞恥責を待つ女(深田 菊子)
- 69 凌辱に捧げる体(高村 浩子)
- 70 剃毛の女体展開(荒尾 慶子)
- 71 被縛者のマダム(江口 淑子)
- 72 縄の山と浣腸器(福井 桃子)
- 73 強制足挙臀部晒(高村 浩子)
- 74 嚴重菱縄緊縛責(江口 淑子)
- 75 両手両足吊り責(江口 淑子)
- 76 白肌に喰込む縄(荒尾 慶子)
- 77 全裸一直線開股(福井 桃子)
- 78 裏門を開放する(深田 菊子)
- 79 豆絞りの猿轡縛(深田 菊子)
- 80 後手胴締股間縛(深田 菊子)
- 81 強烈海老責地獄(江口 淑子)
- 82 大の字縛り正面(高村 浩子)
- 83 足挙げ強制開陳(高村 浩子)
- 84 海老責の耐久度(荒尾 慶子)
- 85 猿轡咽喉輪縛り(三浦 純子)
- 86 後手吊上げ責め(三浦 純子)
- 87 羞恥責臀部露出(三浦 純子)
- 88 柔肌に喰込む縄(荒尾 慶子)
- 89 淫虐に晒す女体(高村 浩子)
- 90 マダム開股の図(福井 桃子)
- 91 がっちり後手縛(深田 菊子)
- 92 無惨白肌の縄痕(前田真知子)
- 93 妊婦大の字縛り(富田由美子)
- 94 開脚を強要せよ(富田由美子)
- 95 引回される妊婦(富田由美子)
- 96 強烈麻縄掛け(前田真知子)
- 97 股間縛の引回し(江口 淑子)
- 98 正座する股間縛(荒尾 慶子)
- 99 荒縄後手二つ折(前田真知子)
- 100 椅子開股羞恥責(前田真知子)

奇

譚

ク

ラ

ブ

1972年2月号

<第26巻第2号・通刊第279号>

清纯なる変身……モデル・四方清美

屋上の陽だまりで紺の事務服姿の彼女を見かけたとき、私はこの清纯派らしく見える娘の裸身を見たいと思った。いや、紺で縛られてあえぐ姿を見たいと思った。それから一カ月後、私の念願が実現されたが、最初のイメージとは百八十度転換して妖しい色香をそこに見た。女は変身する——裸になって、そして縛られたら。

(T・T生)



懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表



カット・KOJI・S

夕

陽

よ

と

ま

れ

うら
浦

さ
紗

と
登

こ
子

「眼から鱗が落ちたように」という言葉があるが、ある日突然、今まで見えなかったものがハッキリ見え、過去から現在にいたる時間も空間も、その様相を一変するといった経験を誰でも持つに違いない。

今まで真実だと思っていたことが、フィルムを取替えたように、思いもよらない角度と感覚で別な把握を迫る。思えば人間とは一生こうした『発見』と『把握』を、くり返しながら、しかも、お互いに決してその時を同じくしないですれちがう、孤独な生きものなのだろうか。

昨年一月の終わりに、私はひどい風邪をひいて三カ月近く臥てしまった。セキがひどく熱も高い。ノドにきつく繃帯を巻き、マスクをして横たわった途端、名状しがたい『あの感覚』が、あつという間に全身を浸した。そう、ほとんど痛覚に近い甘い充溢感。初めてでは、なかった。

遡ってみれば、もの心ついた頃から芽生えは確かにあったようだし、成長するに従ってそれも大きくなっていったのに違いない。風邪をひいた時に、きまって襲う甘美な興奮が何となく恐ろしく、ここ十年位、私は風邪を

ひかなかった。

そして去年初め、ベッドに呻吟しながら、私は病氣の大へんな苦しみと比例する、奇妙な欲情をハッキリ自覚した。マゾヒズム、これが私のセックスに他ならないと、はじめてそして不意に私は叫ぶ想いであつた。

セックスは、その人間の顔だ。私は始めて自分の顔を見た。これが私の顔だったのか。今まで三十何年、鏡に見て来た顔は何だったろう。

来る日も来る日も烈しく咳きこみながら、転々反側、考えるほどハッキリ浮かんでくる心象風景の幾層かがあつた。今まで全く忘れ去っていたかのように、実は意識の深層に深く刻まれていたそれらのネガは、まことに鮮明で生々しく、整然とした意味を持って現像を私に迫ったのだつた。

* * *

小学校五年位だったろうか。ゆきつけの理髪店でいつものように整髪も済み、顔剃も終わろうとしていた。床屋のお兄さんが、蒸したタオルを持って近づく。

顔の上に熱いタオルを数分のせてから拭きとり、クリーム、パウダー、オーデコロンという、いつもの順序とばかり思って待っている。

た私は、彼の異様な気配にハツとした。

アツと思う間に大きな、それもヤケドしように熱いタオルが首からグルグルと巻きつけられ、口をふさぎ、眼だけ残して鼻の上までビッシリ覆って、とまった。

「ムッ、ムムムッ」という声を、くぐもらせのけぞる私に、彼は鏡から眼を離さず、猿轡をしていったのだが、その時の彼の眼は、みる間に真赤に充血し、顔全体が赤黒く怒脹するの、子供心にもよくわかつた。首から下は白布をすっぽり被せられ、調髪用の高い椅子にのせられ、自由の利かない身で、ただ鏡の中の彼を必死に眼で追う私。不思議なことに恐怖心は殆どなかつた。困惑、いや羞恥、今思えば、まさに成熟した女のそれに近いものであつた。

すぐはずしてくれると思いきや、彼は鏡の中に苦悶する私を楽しむようにニヤニヤ笑つて眺めている。そのうちに鏡続きの他の四組の、客と理髪のお兄さん達が気づいて、みんな一瞬、呆気にとられ、我にかえって騒ぎ出した。

「オイ、よせよ。かわいそうに——」

同僚にいわれて、彼はニヤニヤしながら、「前から一度やってみたかったんだ」と、小

声で私だけに聞こえるように言い、やっと蒸したタオルの拘束は解かれたが、それからどうして家に帰ったかわからないほど、私の受けたショックは複雑だった。

父に「床屋さんにいっておいで」といわれるのが恐ろしく、別の床屋さんに行く口実を毎日、考えたが（軍人である父には、事實は死んでもいえない破廉恥なことで、感じていた）思いつかず、ついに一週間位で又、おそるおそる、その店へ行つた。

彼は、いなかった。店主が私の気嫌をとりながら、しきりにあやまり、とんでもないことをしたからクビにした、といった。

大学三年の冬だった。

女ばかりの、それもいわゆる『名門』と称する古い大学の文学部には、単一の性集団独特の抑圧ペダンティズム？があり、それぞれの個性は屈折した表現をとって、ぶつかりあう。

誰か風邪をひいた人が最初にマスクをし、咽喉に白い繻帯を巻いてきてから、それがいつの間にか隠微にファッションとなつていった。風邪をひいていなくても、心中ひそかに期するところある者は（心中でなく、生理的

衝動だったのであるが）次々と、眼を僅かにのぞかせるだけの大きなマスクで顔を覆い、真白で分厚い繃帯を痛々しく咽喉に巻いて登校する。

幸運にも、私は本当に風邪をひいた。

もともと病気で、ものうい上に、こんなに猿轡と首枷で締め上げられたのでは、どんな勇猛な女性でも、捕われの姫君のような被虐感覚のトリコになってしまう。勿論、意識は全くしていないのだが、何となく動作が、しつとりと憂愁の風情を帯びて来る。

授業中に紙が廻って来た。

「マスク美人ベスト5」とあり、私が二位にランクされていた。但し、マスクをしないと見られないという意味だから念のため」と誰かが私のところに書きこんである。

そんな或日の帰りだった。いつもの四、五人のグループと、横断歩道を渡ろうとした私は、グイと引き戻された。それまで度々、熱烈な手紙を受け取ったり、灼けるような四六時中の視線を感じたりしながら、私の方では避け続けていた顔が近々と寄って来たと思うと、アッという間に右手を背中に握じ上げられ、髪の毛をグイと掴まれ、

「あなたという人は！ あなたという人は！

私の気持が判っていないながら、又そんな恰好で私を苦しめる！」

繃帯で締め上げた咽喉をのけぞらせ、マスクの奥でかすかに呻きながら、嫌悪よりも痺れるような恍惚に私は呆然となった。

何という刺戟的状况。グループの仲間たちはもとより、周囲の誰もが夢想だにしないことが白昼、駅前雑踏の、信号待ちの瞬間に行なわれていようとは。

向こうに渡り切った彼女等は、無心におしやべりしながら、渡り遅れた？ 二人を見るときもなく見て待つ様子。髪拘束は、さっと解かれたが、彼女は次の信号で横断する間、ずっと素知らぬ顔で私の右手をピッタリと背に握じ上げたまま……。

渡り切ってパツと放され、「お待たせしてごめんなさい」とマスクの口でいうのがやっとの私は、暫くの間は縛られて市中を引き廻されているような「夢見る心地」。「又そんな恰好で私を苦しめる！」信じられないほど甘美な、この言葉を噛みしめながら……

その一瞬の痙攣が、まぎれもなく私の性の原体験の一つであり、強烈な何かを私の性感覚に刻印したのだったが、当時はむろん知るよしもなく、彼女に対する嫌悪は一層、募っ

ていった。

彼女の態度が公然化するにつれて、私の忌避も公然となり、遂に級友多数の同情をバツクに、絶縁宣告劇を打ったのだった。

涙に濡れて、私を睨みつけていた恨めしげな三白眼が、永く眼底に残った。

当時の心理を分析してみると、マゾヒストは、心情的には、むしろサディストであることを思わずにはいられない。相手が自分に執着すればするほど、それも加虐的に愛したがっていることを知れば知るほど、避けて嫌って心理的に苦しめ、苦悶にのたうつ相手の有様を窺い見て愛を確かめ、同時に、こちらの肉体が加虐される口実（罪の意識）を用意する、この罪深さ。

エロスの衝動とは所詮シーソーゲームであり、食うか食われるかというエゴの斗いであろうが、私はマゾヒストに、その極限を見るような気がする。

肉体を拘束されることが、強ければ強いほど、精神は無限解放を逍遙する、この不思議なメカニズム。

一九六〇年安保の年は、私にとっても革命的な記念の年だった。社会的にも、女として

も、「めざめ」た年であった。

但し、マゾヒスティンとしての自覚は殆どなく、二十八才で本当に男を「愛し」「愛される」意味を知ったということである。それにしても驚いたことは、当時の夥しい歌を最近、整理してみて、全首に共通する被虐ムードである。

打ち給え打ち給えその鞭に

死なんおごりの果もなき身は

を始めとして、自分ながらオヤオヤ恐れ入りましたという歌ばかり。ハッキリと自分の性を自覚した現在でも、鞭打ちには何の感興も覚えぬ、というより、むしろ嫌悪を感じる（たとえ描写だけでも）私にして、こういう歌を詠んでいるのだから、女の恋愛感情の基調は、やはり被虐ムードなのであろう。いわゆる「許されぬ恋」だったので一層その色彩が強まったのだろうし、彼の愛し方も、まさに嗜虐的であったことに、今にして思い当たるのだ。

この年の十一月頃、友人を送りながら夕方浅草に出た。

国際劇場の前の本屋の店頭で、男性ばかり異様に群がっているのを別に気にもとめず、何気なく一冊の雑誌をとりあげ、パラパラと

めくってハツとした。

黒沢明監督の映画『用心棒』の、司葉子が縛られた写真が眼に飛込んで来たのだ。映画批評かと思って読み始めて、驚いたことにはこの一篇は、司葉子がどのように縛られていたか、それだけの緻密な追求に終始しており「驚いたことに、それだけでなく彼女は、腰縄をつけられていたのである！」という一行に、何かを感じとった瞬間、全身がカーッとなり、吸いよせられたように貪り読んだ。

不思議な雑誌があること、この店頭はそういった雑誌ばかりらしいこと、男性ばかり群がっていたのは、そのためだったことを一瞬にして悟った私は、呆然としながらも見てはならぬものを見てしまった後めたさ、恥ずかしさ恐ろしさに、あわてて店頭を離れたのだ。雑誌の名前は『奇譚クラブ』だった。

五、六歩も歩いただろうか。

「あの失礼ですが」

背の高い、色白、やや角顔にメガネをかけた角型のハンティングを被った男性が、私をのぞきこむようにして並んでいた。

「……」

「いま、貴女は黒沢明の『用心棒』の記事を読んでいらっしやいましたね」

「……」

「映画は好きですか？」

「……ハ、ハイ」

やっと蚊の啼くような声。

「実は、僕も映画関係の者なんです、あの黒沢作品には感激しました」

「……」

「如何でしょう。よろしかったら、いろいろ映画の話などしてみたいのですが。ほんの三十分でも」

「……」

「決して怪しい者ではありません。名刺も差し上げますし、そのへんの喫茶店で、映画の話だけ」

「……」

「実は、本屋で読んでいらっしやるのを、お見かけして、是非とも、お話してみたいと思って……。わかって頂きたいんです」

「……」

十年経った今でも、この一言一句は殆ど正確である。思えば千載一遇のこの時、私は無言、というよりショックと恐怖で口が利けなかったのだ。

見てはならぬものを見た靈頭が、余りに立ちどころに著われたという驚きと、夢中にな

っていた自分を観察されていた恥ずかしさ、
気味悪さ。感じのいい人だけれど、ホンモノ
のサディスト？ が目の前にいて、恐らくは
蹴いてゆけば私を縛るだろう。そして苦痛、
死という連想の恐怖。

「あの、急ぎますから」私の頭の中は、どう
やって逃げるかしかなかった。

「じゃ、五分だけ、その喫茶店で」

「別にお話もございませんし」

と切口上。

「今日は御無理でも、御差支えなければ御連
絡先なりと伺わせて頂いて次回に」

「あの、『用心棒』という映画に関心があっ
たので、つい読んでしまっただけです」

と、見えすいた嘘をキツパリという。

「では、せめて僕の名前と電話番号だけ御聞
きとり下さい。御氣が向いた時に御電話頂け
たら、ありがたいのですが」

「……」

「すぐでなくても、いつまでもお待ちしてい
ますが」

「いいえ、結構です」

脱兎の如く、信号無視で横断。

* * *

昨年春、絶え間のない咳の苦しみの合間か

ら、初めて全貌を現わした、おのれの性を自
覚して、更に苦悶にのたうちまわりながら、
私の頭に去来する、これ等の顔の中で、最も
痛切に想われたのが、この浅草の、奇巧の映
画関係？ の男性である。

（ごめんなさい。あの時あんなに冷たくあし
らった天罰を今、受けて、こんなに、やり場
のない欲情に苛まれています。おそらく必死
だったでしょう。貴方の氣持が十年も経った
今よくわかって、どうしようもなく泣いてい
る女がいます。正直でなく、勇氣がなく、自
分に対して不誠実であった女。無知で、つま
らない女が、貴方の罰を受けたくて泣いてい
ます。あなたは今どこにいらっしゃるの。あ
の頃は、まだまだ若さもあった私ですが、四
十近くなった、この十年。一体、何をして来
たというのでしょうか。恋。仕事。革命志向。
何よりも何よりも、啓示を受けながら、それ
を、おのれの性と知らずに、ノホホンと過ご
して来たことの残酷。いいえ、一生、知らな
いままならともかく、十年後のいま、突然、
風邪と共に世界が変わって終まったことの方
が、もっと残酷。おお、これをしも罰といわ
ずに何としましょう）

十年前の、その顔。つまり私の知る、ただ

一人のサディズム嗜好者——と勝手に決めて
いるのだが——最も身近にして最も慕わしい
人の顔に向かって、こう、私は囁き続けるし
かなかった。

何より苦しいことは、すぐに慰めとなる本
が枕頭になかったことだった。

『奇譚クラブ』ああ、それは彼の本か、群書
中に独りありしは。この名が切実に思い出さ
れ、椿姫のように私は恋うた。そして、又し
ても黒雲のような不安と後悔、自責、呪咀に
悩むのだった。

何故あの時、勇氣を出して買っておかなか
ったろう。あれ以後、忘れるともなく忘れて
いたせいか、本屋で見かけたこともない。

ことによると廃刊？ まさかまさか！ あ
あ、どうしよう。癒ったら、すぐ神田の古本
屋へ行って見よう。もし、なかったら。いや
ある訳がない。あの月だけ出た本かもしれな
いもの。古書展は？ でも古書展で聞く位な
ら、死んだ方が！ ああ。私は枕に頭を打ち
つけて懊悩した。

必死になって考えるうち、大仏次郎『照る
日くもる日』白井喬二『金欄戦』に確か美女
が縛られ折檻されるシーンがあったと思い当
たり、高熱も忘れて押入れの隅まで本探し。

むさぼるように肝腎の描写を繰り返して読んだが、まるで物足りない。十年前にチラリと垣間見てしまった奇クへの渴きは一層、募るばかりだった。

それにしても、人間とは何と不思議な生物

だろうか。結婚こそ出来なかったが、私なりに充実した生き方を、ひたむきに送って来たと思い、同性、異性たくさんのよき友人に恵まれて、このことを誇りにして来たのに、この苦しみを訴える相手が、この世にたった一人

もないとは。

肉親には死んでも知られたくない、女の友人も絶対イヤとなるのも不思議なことだ。結局、いつの場合も本当に頼りになるのは男性の、それも年来の友人達である。

「ヤプー読みましたか？ あれを読まなくちゃ駄目ですよ」その時は、全く気にも留めずに聞いたセリフが、天来の声のように思い出される。ことによると、あの著者かもしれないとさえ、思えてくるのだ。

奇クを何としても手に入れること。

男友達に打明けて力になってもらうこと。

ただ、この二つを一縷の望みとして、絶望の中から一日も早く立ち直りたい。その為に一日も早く健康を回復しようと、切実に思う私だった。

二カ月以上、経っても、まだ全快はしなかったが、無理に私は街へ出た。それこそ『疾犬』のように渴いて。

そこには、寝つく前とは全く別な街があった。街も、人々も、音声の故障したテレビの画面のように無縁だった。華やかなネオン、忙しげな車、幸福そうな母親、恋人たち。

その間を縫って歩いている一人の女の、切



イメージギャラリー

『狂乱劇開幕』

岡

たかし

実な願望を知ったら、人々は、どんなに驚くだろう。群衆はキャッと叫んで逃げ出すだろうか。石でも投げて見るのだろうか。気味悪がって、なるべく近寄らないようにするか。ことによると、一一〇番に連絡するかもしれない。戦前の「アカ」に対するそれのように『その事』を知る前には、私に対してだって「先生、先生」と、別な意味で、別人格視していた癖に。

世を憚る私の、いわれない後ろめたさは書店に入る時から犯罪者の、それとなる。店主をはじめ、すべての人間の眼が自分の一挙手一投足に注がれているという意識は、私を用もない棚の前に三十分も釘づける。しかも、ようやく辿りついたピンク書コーナーの前は、秒単位の速さで通り過ぎねばならない。どの店もどの店も。来る日も来る日も。本屋がそこにあると思っただけで、胸が騒ぎ、身体中が切なくなり、一步入って、すぐ出て来た日もあった。

室生犀星の、「いまははや、しんに淋しいぞ」という詩句を噛みしめ、涙ぐみながら、こうして私の「奇ク」への旅が始まった。

「奇ク」との再会。見つけたものの今度は買

うことの出来ない悶々の数カ月。思いがけない旅先での入手から、四十年以後刊行の三分の二が手許にある現在まで、語れば長い道程であったが、それについては又の機会を期したい。

やや平安を得た今日思えば、この時期の苦しみは夢のようではあるが、それだけに私にとっては、動物としての自分と、いやおうなしに対決させられた貴重な「発見」の時であった。しかし又「奇ク」と親しむにつれ、この「発見」の時が遅きに過ぎたことが、むしろように悲しく呪わしかった。

映画やテレビ等で、縛られて猿轡をされた美女が出てくると、息もとまる程昂奮し憧れることと、女としての性の営みとは全く別次元のことと考えていた無知は、私だけが責められなければならないことだろうか。

一般的な形の行為に悦びを感じられない自分と、奥深くに潜在する願望と夢にも結びつけて考えることなど思い及ばず、結婚が具体化すると逃げ出したりしたことも、私だけが責められなければならないことだろうか。

幼くして母を亡くし、軍人の超ストイックな家庭に育った私が、長じてからあらゆる権力に反撥し、人間解放のための運動に心身を

燃やすようになっていったのは、まことに必然ではあったが、それが観念だけの人間解放であったことは、去年、おのれの肉体に裏切られて、いとも簡単に証明されてしまった。先ず解放されるべきは、おのれの性の呪縛であったのに。

せめて十年前のあの時「奇ク」に対する縁が生じていたら、おそらく私の人生は又全く別なものになっていたであろうと、貪るように一字一句読み進みながら、私は嘆息せずにはいらなかった。「奇ク」を知らなかったこと、いや、知っても買おうとしなかったことも、私だけが責められるべきなのだろうか。運命は自分がつくるものと信じて来た私が、つくづく人間の一生と運命との相関を考えるようになった。

それにしても「奇ク」の世界の驚きと、シヨックは大きかった。アブノーマルと一口にいわれる営みの、何と多様なこと。そしてその追求の何とあくなきこと。「孤独な性の失業者たち」(寺山修司)の何と多く、性向の何と個別的なこと。

人間。たかだか五十年の有限の生を、無限の欲望を背負って生きる、この惨めで、汚らしくて卑しくて、醜くて、しかもなお終わ

の日まで営々と生き続ける、奇妙に美しく、限りなく、いとおしい動物たち。私は、この不思議な動物たちに強い「仲間」を感じたのだった。

テレビで得意気に「パンティ泥棒」（ごめんなさい）との武勇談を語る新婚の夫「警察につれてゆかれる時、そいつは泣いていましたね」。アナ「へえ、変態の癖に泣いてね」私は心の底からこの夫を憎悪し、「泣いていたそいつ」に連帯を、いや私自身を感じたが、ついこの間までの私だったら、この夫に無条件に拍手を送っていたであろう。

僅か一年で、このように世界観？ が転倒するとは、人間の経験世界や認識などというものは、何といい加減なものであろうか。

「君はもっと不可知論者にならなければ、カベは破れないよ」と、逢えば私に忠告してくれた友人の言葉は、こういう事だったのか。人間の可知領域がどんなにちっぽけなものを知ったことは、私を奇妙に安心させた。自分の内部が不思議に自由に、しなやかに、なつてゆくを感じた。観念でなく、まるで、との人間の手応えがそこにあった。私は、はじめて私として実在したのだ！

三十代も終わりの女が、今頃おのれの性を

発見して、自由を実感したことを、おそらく人々は嗤うだろう。しかし、人間いろいろあっていいではないか。どんなに滑稽でも、私は私を生きるしかないのだから。

第一目標の「奇ク」再会が、達成されたところで、第二段階の、男の友人に打明けて、adviceを受けることに移らねばならない。しかし、いざとなると、多年の友人であり、よき理解者であっても、おそらく、性的には、common であるに違いない人間に、打明ける気には、なかなかない。特に私を苦しめたのは吉行淳之介「砂の中の植物群」の中の幾つかの言葉である。少し長くなるが、引用させてほしい。

「——将来において痴漢の復権が行われる予感を私は抱いている。ただ、すべての痴漢や変態的性交の上に、復権が行われるとはおもえない。そこが難しいところである」

「私は——両腕を縛られている女の、悲のある乳房の上に乳白色の宝石を飾った。しかしすべての痴漢、すべての被虐的嗜好のある女に、花や宝石を飾ろうとはおもわぬ」

『かつて私は、被虐的性欲の持主である男の訪問を受けたことがある。初対面であったが

私には直ぐに、その人物が変態性欲者であることが分かった。——その男の鈍く濁っているにもかかわらず、粘りつくような強い光を底に満たしている目や、漿液が滲み出ているように、それと悟らせたのだ。

彼は性の中に溺れこんでいる顔つきをしていた。しかし、細胞が充実し、光り輝いている印象はない。充実しているのは、いや、肥え太っているのは、彼の背に貼りついて「性」なのだ。その肥大した性は、彼を押し潰すほどに大きく、彼の背におぶさったまま傲然と彼を指図し、彼を振りまわしている。性が巨大な怪物に育って、彼に襲いかかり、彼を支配している。

彼の目の強い光や、皮膚の靨したような頑丈さは、彼の背の「性」から投影しているもので、彼自身の細胞は漿液を吸い上げられ萎え、潤んでいる。私は、その時、その男に性的顔を見たとようにおもった」

この描写は、「奇ク」以前の私を戦慄させるに十分だった。ここを読んで、すぐ鏡に真剣に見入ったものだ。恐ろしいとしか、いいようのない気持だった。

『伊木一郎は、斜面を、ずり落ちてゆく。』

斜面の下に在るものは、いわゆる性の荒廢とか性的頽廢とか、いったものである』

『縛って』

その声が彼を、かえって冷静に戻した。

『やはり、その趣味があるのか』

京子は烈しく首を左右に振りながら、言った。

『腕を、ちょっとだけ縛って』

『京子の顔は、歪んだまま光に満ちてゆき、一方、彼は、しばしば取り残されてしまう。』

取り残された彼は、むしろ京子に羨望を感じ、すぐにその羨望を打ち消し、この情況から何とか抜け出さなくてはならぬ、と苛立ち焦りながら考える』

『京子の軀を締めつけている、数多くの紐を彼は、ほどきはじめた。しだいに京子の軀の歪みが直り、正常な形に戻ってゆく。最後の一本を取り去ったとき、』

『これで、京子との関係は終わった』

という言葉が、彼の頭に浮かび上がった』伊木一郎と京子は、やがて融和にいたるよう暗示されてはいるが『砂の上の植物群』とは、所詮、不毛の性という意味ではないだろうか。

ここには、よしや異土の乞食かたいとなるとも

いわゆるノーマルな男に加虐を求めてはならぬ、マゾ女への教訓がある。この断絶には、微塵の妥協もない。

男は、それと知って急に目醒め、女は興奮させている男に、ちょっとでもいいから縛って、と卑屈になってゆく。女が溺れれば溺れるほど、終わりの時ばかり探す。私は、性的頽廢とは、特殊な性向そのものよりも、むしろ決して調和のない性行為にこそ、感ずるのだ。砂漠にも花は咲く。

その花は、砂の上にしか咲かない故に、異端の花なのであろうが、砂の上でさえあれば精一杯、美しく咲こうとするのだ。『調和』があれば、どんなものにも存在の意味は、許されるように思うのは甘すぎるのだろうか。

とはいふものの、吉行の感受性と描写力はすばらしい。この作品を読んでいると、この世にサディストがいるなどというのは、幻想に過ぎないと思えてくる。すべての男性は、伊木のように冷酷な、軽蔑と嫌悪の目で、縛られて酔う女を観察するのではないか。

軽蔑され、嫌悪されることが恐いのではない。『水』と『油』が、無理と知りつつ安易に禁忌の儀式にふみこむ、その無意味さに、許せない頽廢を感じるのだ。

更に恐いことは、こうした異和は、『調和』が予定される。たとえばSとMの組合わせにも程度の違いこそあれ、内在しているということである。一口に、サド、マゾと言ってもその加虐被虐願望の内容は千差万別であることを『奇ク』によって痛いほど知らされた。

「しんから厭がる女を、痛めつけるのが本当のS」「マゾ女性には、決して縛ってやらないのが真性S」等の意見をよく見るが、一方通行の加虐や、厭がる相手に頼んで苛めてもらう被虐等という関係は、私の美意識からすれば最も醜なるものに思える。

「孤独な性的失業者」が、やっと手にした就職先で、又も嘔みしめる異和は、絶望的なものであろうと思われる。

ともあれ、私はA、B二人の友人に話すことにした。お互いに十年以上それぞれの問題意識をぶつけ合ってきた仲である。私にとって、大問題が起こったのだから、それが、どんなに恥ずべきことであろうと、ありのままに問題として提出し、客観化してみようと決心がついたのだ。先ず、ジャーナリストであり、評論家でもあるA。『ヤプー』の著者かと、病後の私に希望的推理をさせた人。

A「どうしました。性的開眼したって？ っいに奇蹟が起こったね。じゃ目下、実践中ってわけ？」

私「違うわよ。今年始めに、ずっと寝てたでしょ。あの時、本を色々読んで悟ったのよ」この歯切れの悪さ。

A「なるほど。貴女の専門は古典なものな。」

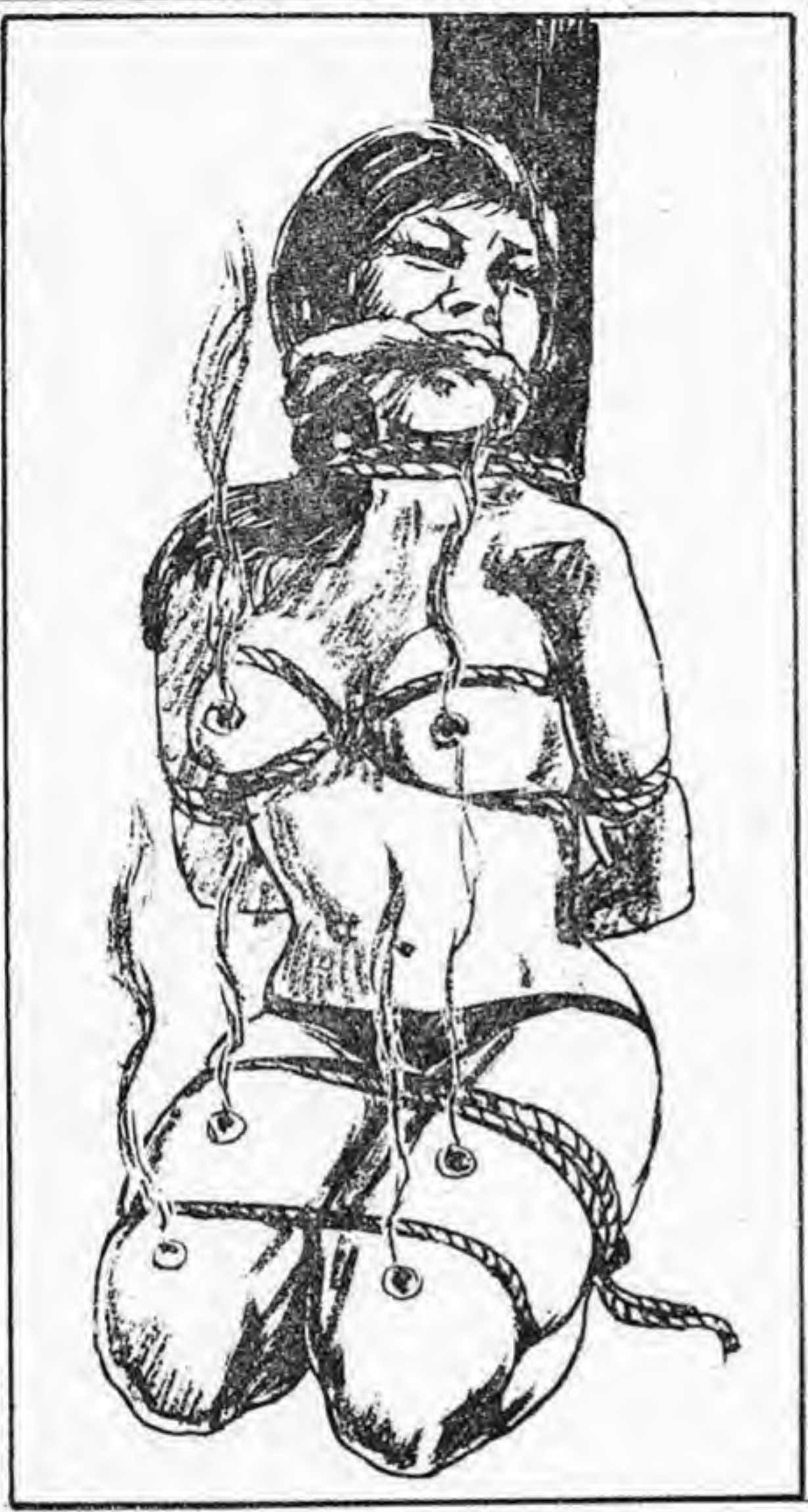
「義経×××」（又は「壇浦×××」だったか、bull name は覚えていないしですね」

私「なあにそれ。そんなんじゃないって、あのう、貴方いつか「ヤプー」のこと、言ってたでしょ」

A「ハハア。そう来なくちゃ。男性をああい風に苛め抜いて、女王として君臨してみたいというわけだ」

いきなり反対のことを云われ、意気阻喪するが、気を取り直し、

私「苛めたり、苛められたりって、貴方なら



……イメージギャラリー……『しみ入る熱さ』……志羽利也……

どう？」

A「いいですねえ。美女に、黒いストッキング、黒ガーター、黒ブーツで苛められたいものと、最近、切々と感じてますよ。僕は、これでも長い間、KITANCLUB（あまりにも明快な発音に、こちらがあわてて赤面）裏窓、風俗奇譚、等々の愛読者でしたからねえ」

やっぱり同志だったのか。もう大丈夫。

私「そう、それなのよ。今おっしゃったような雑誌を実は読んだのよ。つくづく、人生感じちゃった」

浮き浮き云ったところが、

A「なあんです。性に開眼したなんていうから期待したら、あんな雑誌なんて。小さい小さい」

冷水を浴びせられたように、ハッとして窺い見れば、問題にならぬといった表情で、又例の源平発禁書が語られる。

A「ただし、ただしですよ、浣腸だけは、してみたいね。厭がって身も世もなく咽び泣く美女の、真白いおしりを無理矢理に押し拡げて、やがて落花狼藉ってところを、思いきり嘲笑してやる……男にとって最高の憧れだねえ。夢だなあ」

私「浣腸だけは絶対、いや。どうしても理解出来ないのよ。一口にマゾっていても、妥協の余地がないほど、違いは厳然としてるのね」

A「えっ？ 貴女マゾだったのか。ふうん、なるほどな。よし、わかった。鞭で打たれたいんだね。そうだ、僕の友人に一人サディストがいてね。女を縛り上げて吊るして、鞭で打ちのめしたいと、言い暮しているんだが何十年の願望、未だに叶わず、仕方なくセツセとS小説を書いてるよ。じゃあ、貴女も彼に吊るされて鞭打たれてみますか？」

私「いやよ。鞭打ちなんて、大嫌い」

私は、いや、大嫌いなも鞭打ちと浣腸だけに限って言ったつもりだったのに。

A「そうでしょ。サド、マゾは厳しい世界でね。貴女なんか何となく懂れるようなもんじゃないですよ」

私「……」絶望。

A「それよりね。(と又しても例の本) 社の方に持って来て置くからね。いつでも取りにおいでよ。貴女はあれを読まないことに於いて不幸なんだよ。すべてはそれからですよ」

ああ。何をかいわんや。サド、マゾは厳しい世界と仰せられたが、私には現実の厳しさ

の方が、ひしひしと身に沁みだ。

次は、短大教授のB。東大在学中に治安維持法で逮捕され、拷問の連続。終戦まで下獄した。今まで一緒に食事したりする時、きまっって途中で眉をしかめるのだった。「例のテロられた傷が痛むんでね」私の英雄崇拜は、一段と募る。「拷問のこと？ 本当に鬼のような人たちね」後年、自分が拷問されたがるようになるとは夢にも想わず、ひたすら拷問者を罵ったものだった。天罰というのは観面なものである。

父親のようなBには、カウンセラーに甘えるように、ありのままに話して相談した。

B「そりゃあ、一寸、困ったことになりましたねえ。弱ったねえ」と難かしい顔つきで考え込んでいる。

B「僕の友人に、一人サディストがいましたね。奥さんが、何度も僕らの家庭に逃げて来てね、本当に殺されるって。身体中、鞭傷やら斬り傷やらで、一年中、熱を出してたな。

あれは一種の狂人だね。終まいには、子供達に見せないと昂奮しないって、子供達の前で昼間ね。このままにしておく、いつか必ず殺すと思って、僕が別れさせたら、僕と怪しいなんて友人間に言いふらして歩いて。後で

よく調べたら、精神病の家系なんだね、これが」

私「まあ、何てこわいこと——というより他ないではないか。

B「貴女は今のうちに何とかして治療して終わらなければ、大変な不幸ですよ。なに、今のうちなら単なる空想的願望だから、ノーマルな行為の悦びさえ知るようになれば、ケロリと悪きものが落ちますよ」

私「そうでしょうか」その位なら、こんなに苦勞はしないのに。

B「よかった、よかった。貴女は、ぼくに話してよかったんだ。こんな事、二度と他の人に言っではいけませんよ。友人に病院長がいるから、そいつにばくから相談しときましよう。次第によったら治療してもらうように頼んでみましょう」

私「そうお願い出来たら……」全く意に反した成行ながら、こう答えるより他ないではないか。間もなく、呼び出しが掛かった。

B「病院長と食事しながら貴女の事、切り出してみたんだ。そしたら笑われちゃってね。

サド、マゾなんてのは肉食人種にして始めて可能な嗜好なのであって、土台、日本人みたいな脂っ気の足りない人種には、有り得ない

んだって。貴女は余りに厳しい家庭に育った為の歪みなんだから、簡単な心理療法でイチコロだそう。その気があれば、いつでも、いらっしやいて」

私「まあ、そんなものだったの」人の気も知らないで、Bは至極、愉快そう。

B「行きますか。行くなら、ぼくがついて行ってあげるけれど。でも、行く必要はないと思うな。忙しくなれば、そんな事、考えちゃいられませんよ。そう、貴女は踊りをやめたからだ、きっと。又、教え始めたら、どうです？」

私「そう……かもしれませんね」

ああ。何をかいわんや。AもBも、正統？は異端の情念など、わかるよしもないのだ。誠意があればある程、正統の方へ何とか引き戻そうと躍起になってくれるのだ。お前は本来異端などではない、正統なんだと力づけてくれるのだ。

私は異端の友が切実に欲しかった。一緒に渴き、一緒に飢え、慰め励まし合う戦友が欲しかった。

その後、彼等との間で、SMが話題になる事はない。ただし、Bとは一回だけハプニングプレイ（の真似？）があった。

ある日、何を思ったか「今度研究して来て悪漢ごっこして上げようか」といった。私は黙って笑っていたが、勿論、本気にはしなかった。次の時、真面目くさった顔つきのBはペーパーバッグを私に覗かせた。細い荷造り用の三メートル東位の麻紐を見て、私は何故ともなく、がっかりしたが、「まあ」といつて思わず顔に血が昇るのが、わかった。

縛って上げるだけという彼について、仕事の離家へ。老大な本の山に圧倒され、いろいろ聞いているうちに「さあ」と促されるが何とも照れ臭く、それぞれが、ちぐはぐな緊張で、ぎこちないこと夥しい。

まるで手術に臨む外科医のような態度の彼を、黒いワンピースの私は、恨めしげに見上げては、うつむくばかり。

思い切ったように立ち上がって来たBは、正座したままの私の後ろへ回った。正統人間？というの、女に縄をかける、かけ方など、まるでわからないらしく、物凄いスローテンポで細い紐が胸の前につき出された。両手を自分から後ろに回すのも可笑しいし、坐ったまま、縛られる女が、縛る男の不器用な手つきを、じっと見ているのも、何とも珍妙な、間のわるいものだ。

しかし、胸を二巻きした縄が、後手首に懸かると、生まれて始めて男の手に縄がけされるといふ実感が湧いて来た。気がついた時には、縄目のゆるさにもかかわらず、「イヤイヤイヤ」を、まるで「ヤイヤイヤ」と聞こえるほどの、夢中な連呼。

しかし、驚いたことに、イヤイヤが終わらないうちに、彼は縄尻で私を打ち始めた。今度こそ、本当の「ヤイヤイヤ」である。

精一杯「やめて」と私は叫んだ。嫌悪が表に出たのだろうか。縄は、さっと解かれた。

はっとして見ると、胸を突かれるほど不気嫌な顔で書斎に入って終まった。

この時ほど、この道の厳しさを感じたことはない。いたたまれぬ思いの私は、鞆の中から、10月25日号の『朝日ジャーナル』をとり出し、赤瀬川原平の漫画を見せた。

伊藤晴雨画、原平代筆とある、一頁大の画面には、腰巻一枚の美女が菱縄をかけられ、太い柱に括りつけられている。胡坐縛りにされた足首の縄は、横木の錨に結ばれ、海老責めの姿勢。がっくり垂れた頸に、無残に乱れかかる島田髷。口は、豆絞りの手拭いで、きつく猿轡をかまされ、美女は目を閉じて、息も絶え絶えの風情である。——『原平クン、

縄がゆるいよ。いいかげんだなア。梱包して
るんじゃないんだからねエ……『晴雨——と
コメントがある。

「今週号、さっき買ったのよ。お読みになっ
た？」と言いながら、こうして欲しかったの
にという、私としては精一杯の抗議のつもり
だったが、Bは「フン」と云ったきり、何の
興味も示さなかった。

索漠とした唇を噛む想いであつた。縛ると
言いだしたのはBであり。私は、いいなりに
なっていたのに。

戯れにSMプレイはすまじ。私たちは、以
後、二度と、その事に触れない。

それにしても、鞭打ち願望は、S男性だけ
に固有のものでなく、むしろ、すべての男性
に共通する欲望なのではないだろうか。

＊ ＊ ＊

この稿も、やっと終わりに来た。

去年の二月から二年足らず、思えば長いと
も、短いとも云える時間の流れであつた。

今、私は何を書き、何を言おうとしている
のだろうか。

「奇ク」を入手して間もなくは、ただただ、
人の供給する食物（作品）を食って癒すより
他ない、飢渴の状態であつた。

どの作品にも「この世で最も身近な仲間」
の血を感じ、どの人とも（たとえ性向は異な
っても）逢って、思い切り話してみたい衝動
に駆られた。

しかし、だんだんと落ち着いてからは、受
身の慰めだけでは、本当に解放はされないこ
とを、強く感じ始めた。

つまり、書くこと（行動）によって、現在
までの自分を解き放ち、内面に区切りを与え
なければ、前へ進めないと知ったのだ。とは
いうものの、ペンを執るまでに一年以上を要
したのである。今となつては、何を怖れ、何
を躊躇していたのかと不思議な位であるが。

これを書いたことによって、半分、解き放
たれた私は、いま、次の、二つのやみがたい
願いを抑えることが出来ない。そして更に精
神の自由と、みずみずしい充足を獲得したい
と、ひたすら願うのだ。

◎創刊以来の、増刊をふくめた「奇ク」を全
部読みたいということ。思い出の「用心棒」
とも是非、再会したいのだ。何とか、お力に
なって頂けたら、お礼に裾ひきや振袖の衣裳
を、お貸ししたいと思う。

◎一生、交際願えるような、同好の男女性の
友人が欲しい、ということ。これは、プレイ

の相手が欲しいということとは違う。

プレイをしたいか、と聞かれれば、素直に
イエスと答えよう。しかし、ではプレイをす
るか、と聞かれれば、ノウと答えざるを得な
い。刺戟は、一たん手に入れば、必ず終わり
の日までエスカレートする。

人間は、この事実の前に謙虚でなければ、
必ずこの事実によって罰せられる。

「戯れにプレイは、すまじ」という私自身の
決意は、当事者間の具体的なマイナス等のこ
とを問題にしているのではなく、そのことによ
って、プレイそのものが、プレイ恍惚と耽美
が、不当に傷つくことを恐れるのだ。

女性特有の保身と、人は嘲るだろうか。

保身。硬軟二種の『先生』生活を昨年、や
めた私。家庭も、財産も、若さも、美しさも
ない私。

「旅のつばくろさみしかないか」という境涯
の、一人の女にとって、失うことを恐れる何
があるうか。保身でなく、負け惜しみでなく
まして、勿体ぶっているのでもなく、この二
年間の、苦しい思惟と試行が、私を一層、欲
張りにしたのだ。

欲望が強く、快楽が深ければこそ、一生、
楽しみ続けたいのだ。強弁といわれるのを覚

旭 須坂 『次はこれだ』 イメージ
ギャラリー

悟で、「両者の見解さえ一致すれば、案外プレイ抜きの交際の方が、思いがけない友情が生まれ育つのではないか」と言いたい。

折角、この広い空の下でめぐり合った、お互いに貴重な少数者なのである。かりそめの「生」を生きて、巡り合えた奇蹟を大事にしたいのだ。「かけがえのない」友人として、身内？ として一生おつきあいしたいのだ。

失ったら、二度と同志を得ることは困難であろう。目前の欲望のために軽挙妄動するこ

とは、どんなに勿体ないことか。去年来、心に沁みて私を離れない歌が二つある。

一つは、ジョーン・フォンテーン、ジョセフ・コットン主演の、古い映画「september song」（日本名「旅愁」）の主題歌「九月の歌」である。

And it's for a long long while, from May to December.

And the days grow short when you reach

September.

And the autumn weather turns the leaves to flame.

And I haven't got time for the waiting game.

The days dwindle down to a precious few September, November.

For these few precious days I'll spend with you.

These precious days I spend with you.

人生の九月に在る自分を自覚した女の、夕映えに似た己がいのちを愛おしむ、痛切な叫びは、詩うほどに、歌うほどに迫ってくる。

長い一年も、九月となれば、秋の陽はつるべ落しである。一刻一刻がまさに precious なのだ。秋たけなわの今日夕ぐれ、巷に流れるこのメロディを聞きながら、「かけがえのない」いまを、共に spend する you がいないことを私は泣く。もう一つは、生涯子為さず奔放に生きた歌人杉浦翠子の歌である。
あめつち
天地におのれ淋しと想うとき

浅間は燃ゆる陽の入りぎわに
夕陽よとまれ。しばしとまれ。

夕映えに全身を赤く染めて立つ女を、その命いっぱい照らせと、私は一心に祈る。



「カメラ・ルポルタージュ」

縄に恋した女

《芸者福竜（松本たえ）の巻》

塚 本 鉄 三

前ぶれもなく、突然私を訪ねてきたので、京都は東山に近い一旅宿で激しいSMプレイを混じえた狂乱の一夜を楽しんだ。

その時撮影した福竜の緊縛写真のDPEが出来上がる頃にはペンの早い私は『全日空機で来た女』と題した詳しいルポを書き上げていたので速達で編集部へ送っておいた。

九月上旬、私が友人と共に四国の道後温泉へ遊びに行った時、はからずも知り合って、一夜、かりそめのひとときを過ごした、芸者福竜こと松本たえが丁度一カ月後の十月上旬

甘い思い出を残したあの日から数えて、早や十日近くも経って十月もすでに半ばになっていた。あの日の私の執拗な責めに対して、よく耐え、そのうち涕泣にも似たむせび泣きと共に、白い肢体を縄のようにねじって悶えた、あの福竜とのSMプレイが、つい数時間ほど前の出来事だったように思えたり、或はまた遠い遠い過ぎ去った日の、はかない幻影だったような気もした。

十月という月は例年のことながら、仕事も

滅法忙しいが、何かといえは会合がやたらと多く、飲み歩く機会も連日のように続いた。

気候がよいので、足を伸ばして郊外の料亭で松茸狩りを兼ねて一寸一杯というわけで遠出することも多く、十月に入ってから外泊する日がかさなった。そんなわけで、このところ女房殿の御覚おんおぼえも決して良くはないので今日あたりは、一つ早く帰って女房孝行でもやらかさねばなるまいと考えていた。

人間は生まれたときから全く不公平な条件を与えられている。容貌の美醜から体格、それに才能、それなどから比べれば生まれた家の貧富の差なんか、まだましかもしれない。しかし神様は、人間に対して時間だけは公平に下さっている。すべての人間は一樣に一日二十四時間という持ち時間を与えられているのだ。

これが或る者は三十時間、或る人は十五時間というのだったら不公平であるが、一律に二十四時間というのは泣かせる。どんなに忙しい者でも一日は二十四時間、どんなに暇を持て余している奴でも二十四時間である。

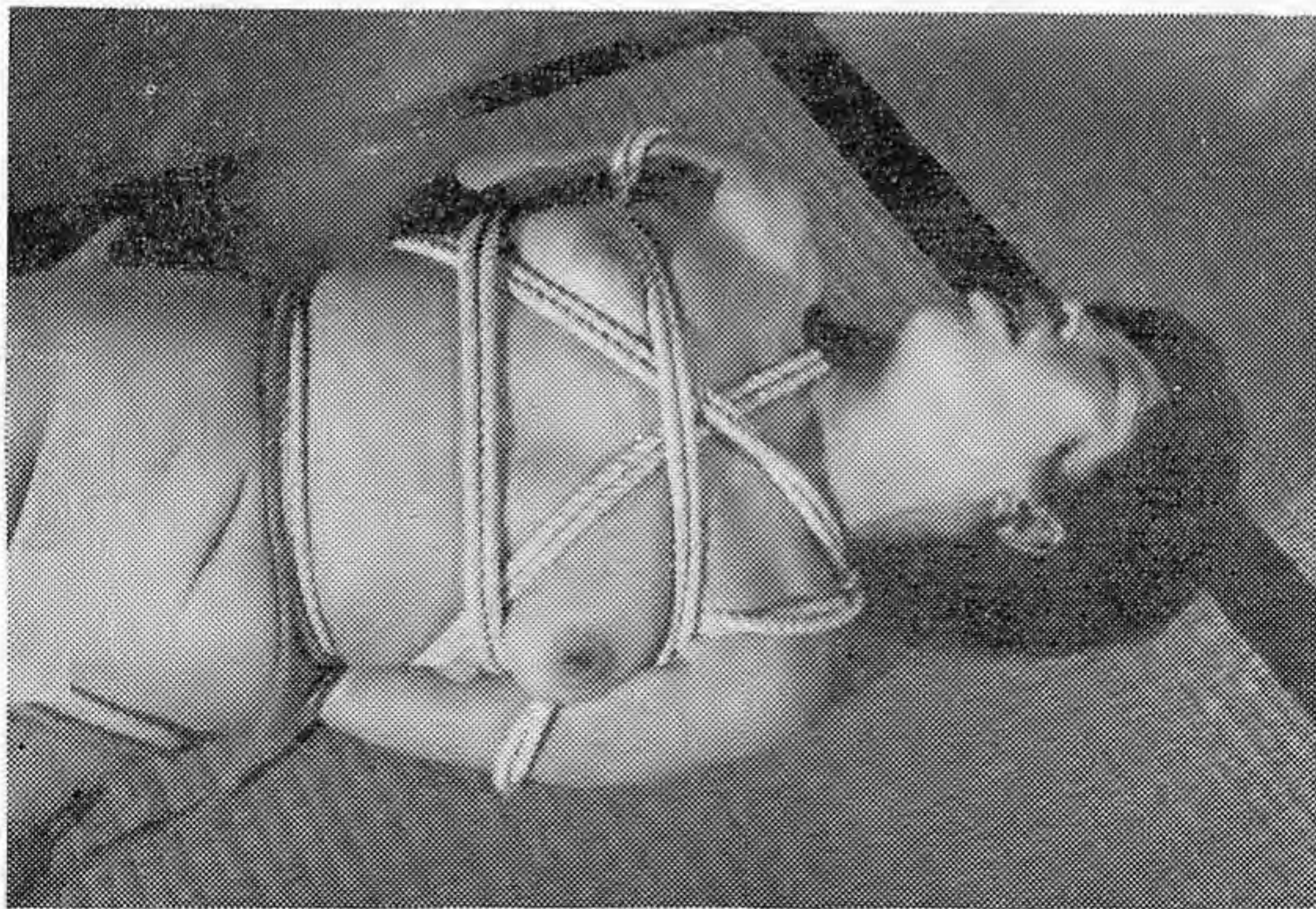
私はこのところ時間不足に悩んでいた。一日三十時間から四十時間はほしいと思うくらい仕事に追われていた。しかし、二十四時

間という持ち時間に変わりがないので、なんとかやり繰りをしなければならなかった。

高村浩子さんから何度も誘いの電話があったが、五度に三度は残念ながら断わらなければならなかった。そして例のマダムこと福井桃子さんからはボリニームのある肉体で爆弾的な波状攻撃をしかけられて、とかくカメラ持つ手もびびり勝ちだった。明眸の深田菊子さんにはMの深淵に触れて、更にその奥底を探索したい気持が、しきりにした。

荒尾慶子さんを再度取材せよという編集長からの厳命もあったが、身体は一つで持ち時間が二十四時間というのでは如何とも、なし難く、全くとお手上げの状態であった。

せめて睡眠時間を減らすことと、仕事を敏速にやることぐらいでカバーしなければ仕方がないが、本職よりもサイ





ドワークの方がこのように多くなつては、とかく家庭サービスの方が滞り勝ちになるのも、やむを得なかった。

今日は罪ほろぼしに、一つ早く帰つて家内と一緒に北の紙ナベでも食べに行こうかと机の上を片づけているときだった。目の前で電話のベルが鳴った。

受話器を把ると、細くてよく透る例のオクターブの高い福竜の声が耳に響いてきた。

「あの、松山の福竜なんですけど塚本さん、おいでになりますか？」

「ああ、松本さんですか。私塚本です。先日はどうも、遠いところを、わざわざおいで下さいまして、お疲れになったでしょう」

「いいえ、私こそ、突然お伺いしまして、いろいろお手数をかけてしまつて……」

先方から掛かってきたのだ

から私は何の用かと思って待つてみたが、そのあと、一向に彼女からの発言がない。帰り支度していたときだったので私は事務的な口調で言った。

「もしもし、何か御用だったんですか？」

「あの、この間のお礼を言いたいと思つてお電話しただけなんです。それに、どうしておられるかと思つて……」

あとは何か、口の中でつぶやいているようだったが、私には何の意味か聞きとれなかった。或は彼女の吐息だったのかもしれない。それにしても、海を隔てた四国の松山からの電話にしては、よく聞こえるものである。

「ええ、まあまあ、元気でやっています。貧乏ひまなしで仕事の方は忙しいんですが、余り働きすぎたんで、今日はこれから家へ帰ろうかと思つていたところなんです」

「お忙しいんですのネ。あれから、なんの郵便りもないもんですから、私、気になって、昨日もお電話したんですが、丁度お留守でしたので、今日またお電話しましたんです」

「いや、それは失礼しました。私も気にはしていたのですが、仕事に追われていて、御無沙汰してしまいました。もしお暇があったらお手紙でも下さいませんか」

「はい、私、筆不精なものですから、お忙しくて御迷惑とは思いますが、つい、お電話してしまつて、ごめんなさい」

ということ、第一回目の電話は簡単に終わった。彼女も芸者稼業の身であつてみれば秋のシーズンを迎えて、非常に忙しい毎日を送っているのではないかと想像された。

私にしても四国の松山まで遊びに行くという時間的余裕はなかったし、彼女もまた何度も大阪まで出てくるという身体的自由はないのではないかと思つた。

その次に、福竜から電話がかかつてきたのは、夕方近く、私が来客と一緒に用件で外出しようとしていた矢先だった。彼女は多分、お座敷先の料亭かなんかから掛けていらした。もう五分でもおそかったら、行き違いになるところだった。私は中腰のまま受話器を把つた。

「ああ松本さん、今日はどんな御用ですか」
「あの、ただお声が聞きたくて……。今、お忙しいんですの？ 私、近々もう一度お伺いしたいと思つてゐるんですけど……。ええと、十月十八日と二十二日、それに十一月二日が私の方、都合がいいんですが……」

「すみませんが、今、丁度、私、お客と一緒に

に外出しようとしてゐるところなんです。出来ましたら、お手紙でも、詳しく御連絡下さいませんか。改めてお返事、差し上げますから」

「そうですか、それじゃ、また後ほど、お手紙で……。お忙しいところを、大変お手をとめまして申し訳ありません」

日が暮れるのが早くなつて窓の外はもう既に暗くなつていた。ネオンの灯の点滅が、客を待たせて一緒に外出しようとしていた私の心を、一層いらいらさせた。

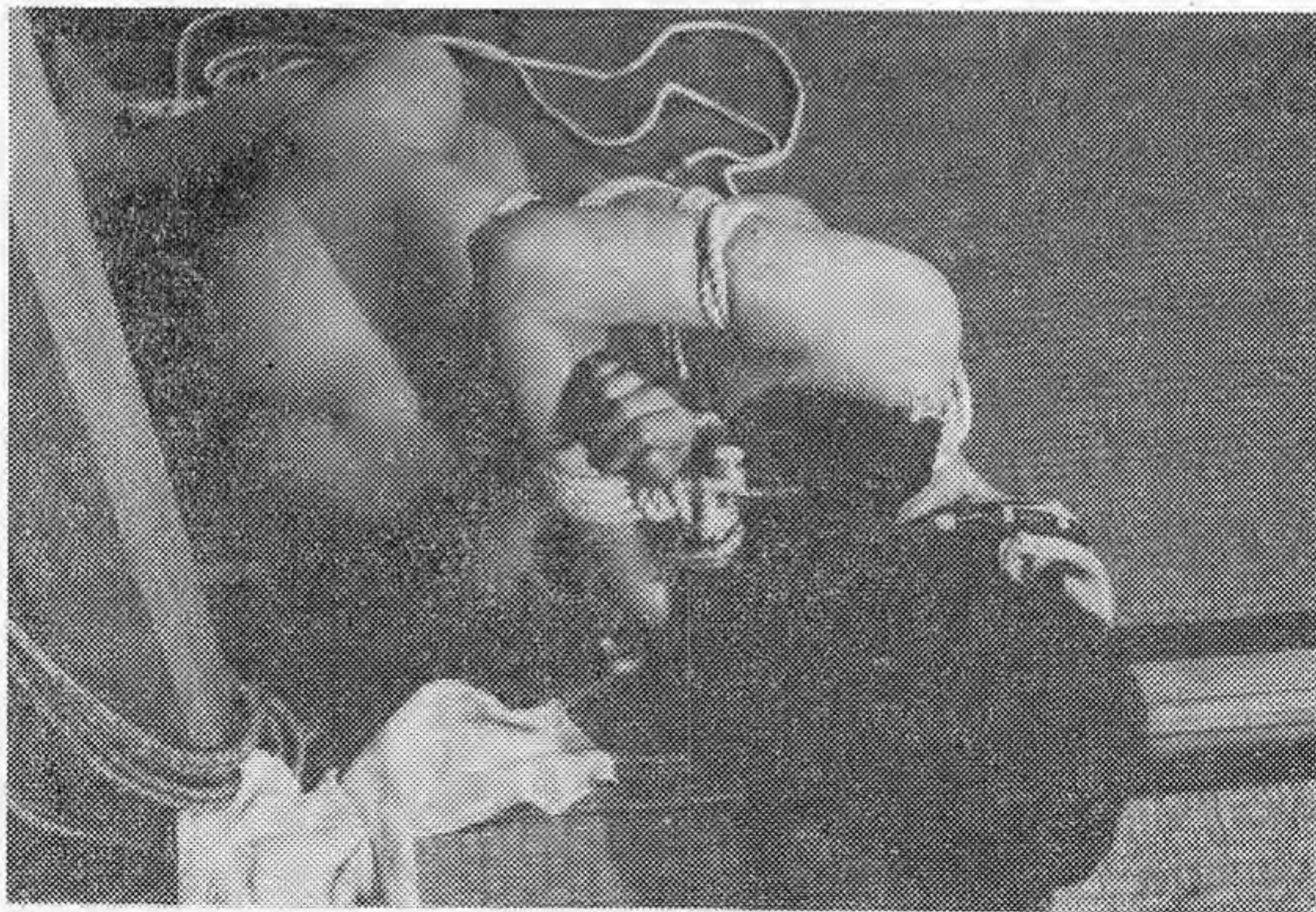
その翌日、福竜から速達の手紙が届いた。

ボールペンで力を入れて書いたらしく、便箋の裏にも透るような勢いで、細い字がびっしりと詰まっていた。

私は早速、読んでみた。

○

塚本様、先日は御多用のところ、わざわざお逢い下さり





ほんとうに有りがとうございました。早くお手紙をと思いながら、生来の悪筆と筆不精のため、今日までのびてしまいましたことを、どうかおゆるし下さいませ。

貴男様にお逢い致しましたことは、私にとりまして、この上もない喜びに思っております。と申しますのは、女としての本当の悦び

を生まれて始めて知りました。今まで心のすみで縛られたい、責められたいと思って望んでおりましたことを、貴男様の手にかかり、責め抜かれて身も心も燃え立ち、悦びにわれをわすれてしまった自分が、今も思い出されてなりません。

私は縄の持つ妖しい誘惑にまけてしまった

のです。そして縄に恋してしまいました。

夜ねていても、責められている夢ばかり見ます。目がさめれば、お恥かしいことですがぬれているのです。私は知ってはならない悦びを、体の奥深くきざみこんでしまったのでございます。このしびれるような刹那的な悦びからぬけだすことは、もうとても出来ません。それよりも、この前より以上に激しく責められたいと思うようになりました。

麻縄で雁字搦目に厳しく縛られ責められたいと願っております。もう一度縛られ責められたいと思う心をおさえることが出来ないのです。今さら、ここでくどくど書かなくても私が縛られ責められることが、どんなに好きな女か、貴男様が、よく御存じのはずです。浣腸責め以外ならば、どんな酷い責めでも、喜んでお受けします。

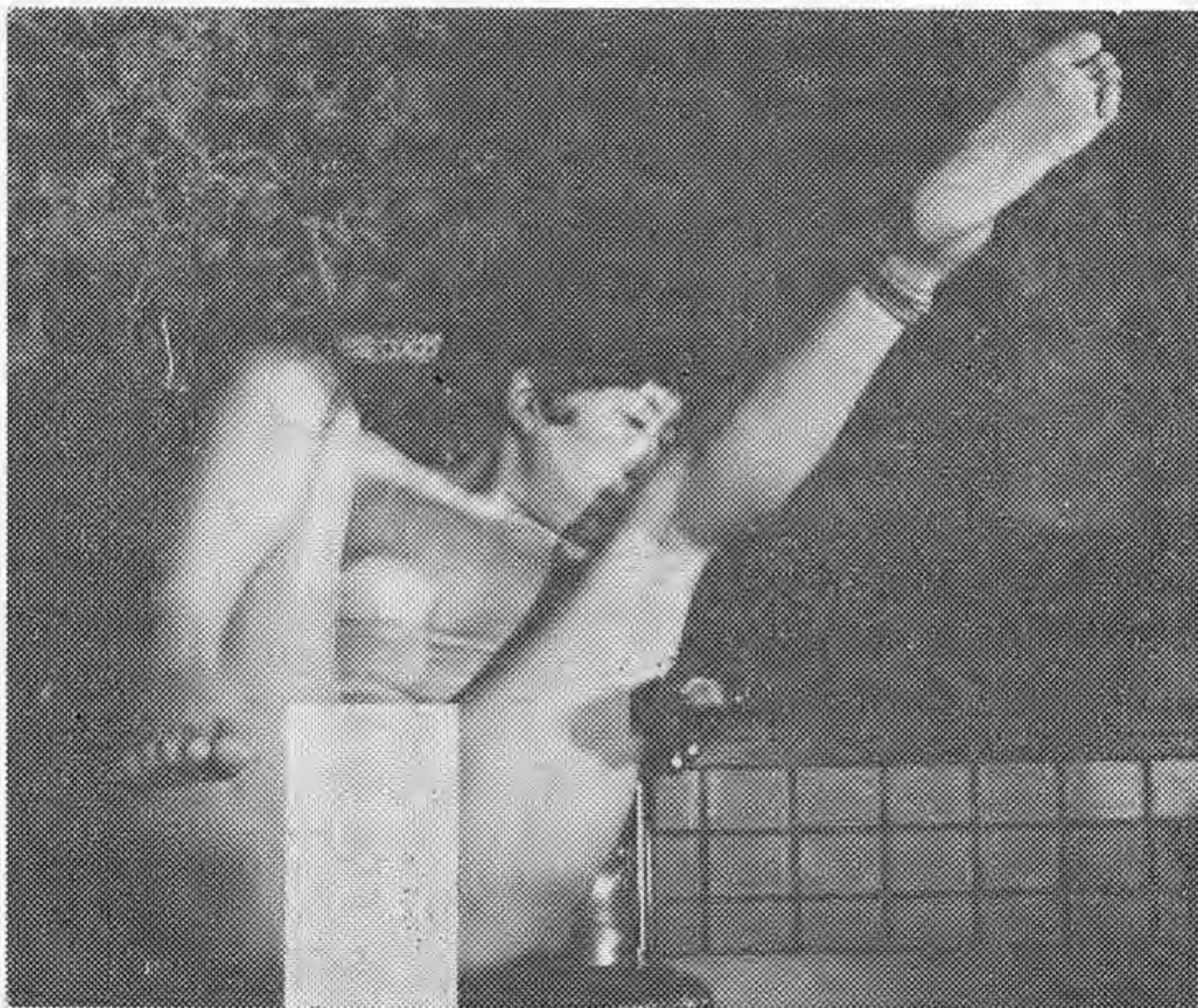
このような恥かしいお手紙を書いたのは生まれて始めてのことなのですが、なぜか体は悦びにふるえております。いや、ペンを持つ手もふるえております。

大変自分勝手なお願いでございますが、本日もお電話しました通り、十月十八日、二十二日、十一月二日でしたら、お休みがとれそうですね。もしおゆるし下さるなら、この

前と同じように一泊の予定で全日空便でまいりたいと思います。御迷惑のことはじゅうじゅう承知しておりますが、何卒まげて私のこの切ない願いを、おききとだけ下さいますよう、伏してお願い申し上げます。どうか、よろしくお願い申し上げます。

一日も早くお返事下さいますように、またよい便りがありますように神に祈っております。書面では自分の思っていることの十分の一も書けないもどかしさ、それに筆のつたなさ、さが悔まれてなりません。まだまだ申し上げたいことは山ほどありますが、気ばかりあせっても筆は前へ進みません。お目もじの上、お話し申し上げたいと思います。もうお逢いできると思いこんでおります私を、どうかお笑い下さいませ。一日も早くお逢い出来ることを楽しみにお待ちしております。

なお、塚本様の御都合が私の書きました日以外でありましたら、どのようなにも致しますゆえ、どうかお電話、下さいませ。



電話は〇八九九―二三―〇×六八です。福竜とって呼び下されば、午前九時から九時半、午後三時半から四時までの間でし

たら必ず電話の近くでお待ちします。一人よがりのことばかり書いてしまいました。たことを、どうかおゆるし下さいませ。

十月八日

かしこ

松本たえ

○

福竜の手紙を読んでいると、私の心の中に彼女をいじめていじめて、いじめ抜いてやりたいという鬱勃とした嗜虐心が湧いてきた。彼女の手紙の中には、Sの心をかき立てずにはおかない、妖しいマゾ的な要素が含まれているような気がしてならない。

この前逢ってプレイしたとき、確かに縛られ責められた結果、彼女の身体はそれに対して感度抜群の反応を示していた。それが、無遠慮なほどの私の問いかけに対して、口では余り答えてはくれなかった。恥かしたがって答えない彼女に、そう無下に追究してもいけないと思って手加減していたのだ。

彼女の手紙の中にあつた人繩に恋してしまいましたVという文句が、

私にふと、京都の宿でのことを思い出させていた。

縛ったままで行ったときと、縄を解いてから行ったときの、彼女の燃え上がり方、悦びように格別の相違があったのを、そのときは余り気がつかなかったのだが、今、彼女の手紙を読んでいて、はつきりと、その反応の違いを思い出していた。

『縄に恋した女か』——たしかに、福竜は縄に恋したのであって、人間に恋したのではなかったのだ。

縄に恋した女——縄に恋した女。福竜こそは縄に恋した女なのだ。

そうだ、この俺も、福竜という芸者を一夜妻のなぐさみものとして金で買ったのだ。

縄で縛ったり、足で蹴ったり、ムチで叩いたり、面白半分に弄んだ女なのだ。別にどうということはないさ——。そう思った。

だが、ちょっと気になることがあった。

ホテルを出る前に、私は福竜に対して「これは交通費ですから」と言っって白封筒に入れた紙幣を渡した。松山から大阪までの航空運賃にタクシー代を含めて、それに若干プラスアルファした金額だったが、勿論彼女が芸者の花代として受取るのだったら、それは決して

て多い金額ではなかった。それなのに彼女は「こんなものは受取るわけにはいかない」といって頑なに手にすることを拒んだ。

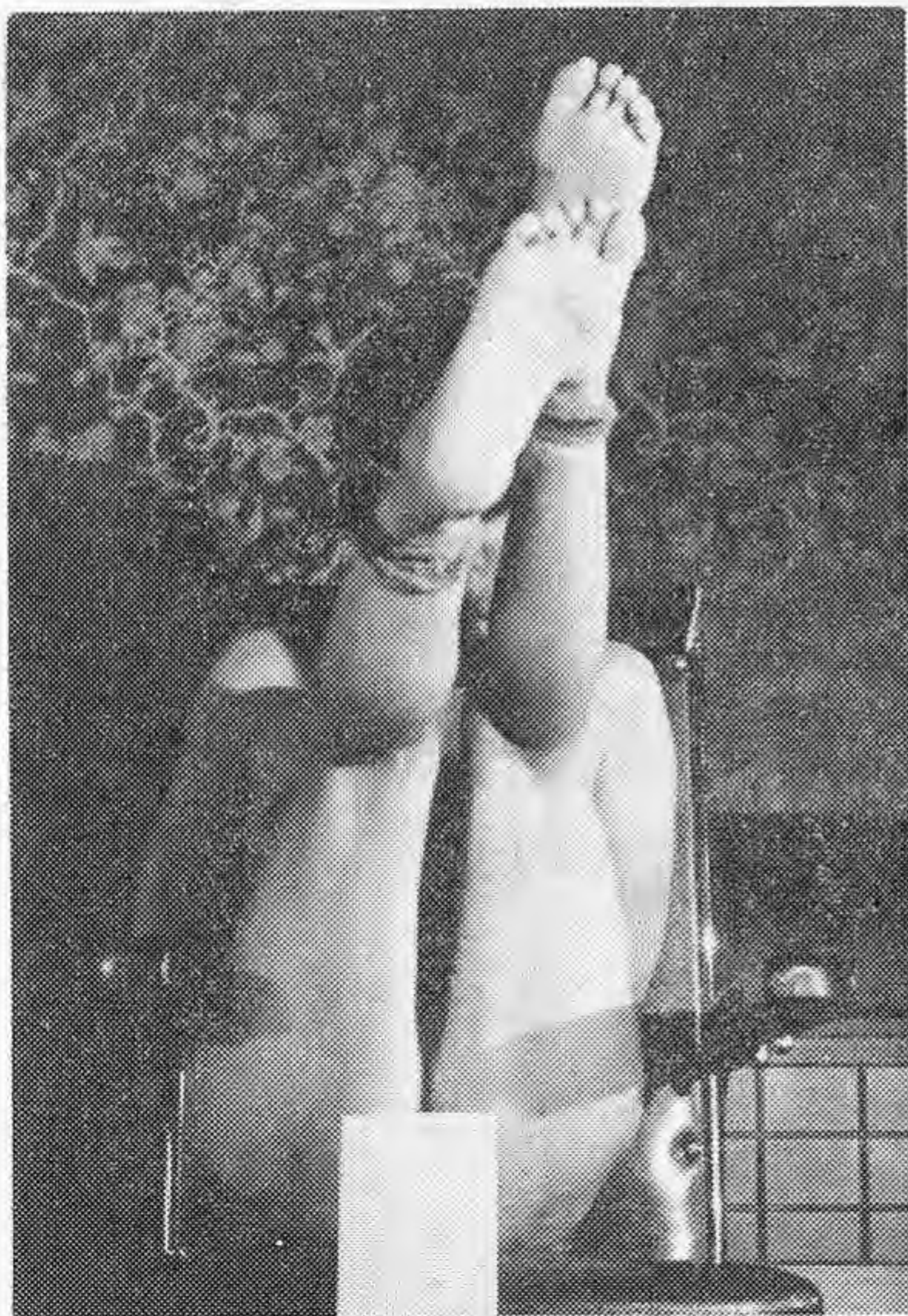
「貴女が支払われた航空運賃を私が負担するんだから、遠慮せずに受取ってほしい」

そう言っって私は無理に、その白封筒を彼女の手に握らせた。むき出しで渡して彼女のプ

ライドを傷つけてはいけないと思って、わざわざ白封筒を準備してきていたのだ。

彼女はくると私に背を向けて、白封筒の中の金額を数え終わると私の方を向いた。

「交通費にしては多過ぎます。これだけはお返します。今度は私の方から押し掛けてきたのですから、旅費も私持ちでいいのです。





これからは、こんなことしないで下さいね」
 そう言って、封筒の中の紙幣の何枚かを私に返して寄こした。どうしても受取らないという彼女に手を焼いて、ホテルの売店で彼女のために買った、お土産を入れた紙袋の中へそっと、その金をすべり込ませておいた。
 帰りの車の中でそれに気のついた彼女は、

「何故あんなことをなさいますの？」怨じた眼で私をにらんだが、「ええ？ なんのことだ」と、私はとぼけておいた。

しかし、心の中では、「何を言やがる。俺は金で一晩お前を買い切って弄んで楽しんでやったんだぞ」と考えていた。だが案外、彼女の方でも、「お金で私を自由にしたと思っ

ているんでしょうけど、そうは参りませんからね」と考えているかもしれない。
 私が気になるというのはそのことであつた。そもそも、福竜とのなれ初め自体が、酔客と芸者という関係であつた。だから、なんでもかんでも、金で解決する

という契約が最初から成り立っている筈である。それが金銭抜きということになれば、そこに気重い圧迫感が私の心を、いささか暗くするのだった。

だが——、福竜の私に対する手紙は、そんな私の心の葛藤を押しつけて、私の心を彼女との第二回目のプレイへと、かき立てるのに十分だった。

私はあわてて予定を書き込んだ日程表をくって見た。十八日はもう日が迫っていてとても駄目だし、二十二日は出張撮影の予定があつて駄目となれば、残るは十一月二日しかない。三日は文化の日の休日で幸い身体がいているので、この両日は、まあいいだろう。

私は早速、彼女の時間帯を見はからって電話をした。

十一月二日、大阪国際空港午後十二時三十分着、全日空五四八便で上阪することに話がかきまつた。

○

当日。十一月二日は天気予報では下り坂とということだったが、朝から秋晴れのよい天気だった。三十日には全国的に前線が日本上空を掩ったせいもあって、終日雨であつたが、三十一日の日曜日の昼頃から、すっかり青空

を取り戻していた。そして十一月に入ってから、一日、二日と晴天続きなのだ。

午前中に仕事をあわてて片付け車で伊丹空港へ向かった。阪神高速道路から空港駐車場へ通じているランプウェイを下ると、頭上をジェット機が轟音と共に通過していった。

⑥のボールの前に車を駐めて見上げると、折柄発進した727が二本の黒煙を吐きながら北摂の山へ向かって機首を上げているところだった。まさに全日本や全世界を航空路という大動脈でつなぐ力強い基地の姿だった。

福竜のいる松山市とは、航空路から見た時間的空間は、たった一時間に過ぎない。瀬戸内海という海を隔てた四国というイメージは今は全く失われているのだ。私は横断歩道を渡りながら、そんなことを考えていた。

三日が文化の日で休日ということもあって私は特に今日の日のために有馬温泉の有馬Gホテルの一室を予約しておいた。

伊丹空港から有馬までの道は、今までのように、もうごたごたとした街中を走る必要はなかった。中国縦貫道路が出来ているので宝塚までは四車線の高速道路で一気に走ることが出来た。宝塚から有馬までは二車線ながら完全舗装の坦々とした道が山と山の間を縫っ



て走っている。

青い空に明るい空気、陽が射し込むので暖房はしていないのに車内の温度はどんどん上がってくる。ベンチレーターから外気を入れながら私は上衣を脱いでハンドルを握った。

SMプレイの話をすると彼女は極端に羞かしがって無口になってしまったので私はつとめて話題を今通過している宝塚や蓬莱峡、それに目的地である有馬温泉の説明に費やした。

福竜は私の肩に頭をもたせながら、移り変わる窓外の景色をうっとり眺めているようであった。そんな彼女の心中、何を考えているか、私には推量できなかったが、私の心は既にSMプレイの方に指向していた。

『今日はどういう方法で責めてやろうか。浣腸責め以外だったら、どんな酷いことでも構わないと言っているのだから、ぎゅうぎゅうの目に合わせてやろう。さて、どんな方法が一番効果的だろうか。海老責めか、吊り責めか、或はムチ打ちか。若しくは極端な羞恥責めで内臓までも露呈させてやるか』

そんな事を考えているうち、車は有馬の街へ入った。ホテルへ着いて四階にある部屋へ案内されると早速浴衣に着替えて、大浴場へ一緒に行こうと誘ったが、福竜はどうしても

部屋の風呂へ入るといってきかないので仕方なく私は一人で大浴場へ向かった。折角、温泉へ来たのだから、プールのような大きな風呂へ入って伸び伸びと手足をのばしたら、と思うのだが、彼女はプレイでホテルへ来たということが頭にあるのか、ロビーに入ったときから、いやに羞かしがっている。

大浴場には浴客は誰もいなかった。ガラんとした広い浴槽の中央からは、どんどん熱い湯が噴き溢れて、ざあざあ洗場に流れ、その湯水に硝子窓から射す陽が光って美しく輝いている。私は、ザブリと湯に飛び込んで平泳ぎで向こう側まで泳いでいった。そこには熱帯樹が植えてあってトンネルのような樹林をくぐると更に、もう一つ別の浴槽があった。

話相手もなく、たった一人で、広い浴室をうろうろしているのは、なんとなく、佗しかった。そして、一人で部屋にいたろう福竜が恋しくなった。身体を洗うこともせず、そこから中を歩きまわった上で浴室を出た。浴客は、それでも誰も姿を見せなかった。

部屋へ戻ると、福竜も入浴をすませたらしく、三面鏡に向かって長襦袢姿のままで化粧しているところだった。

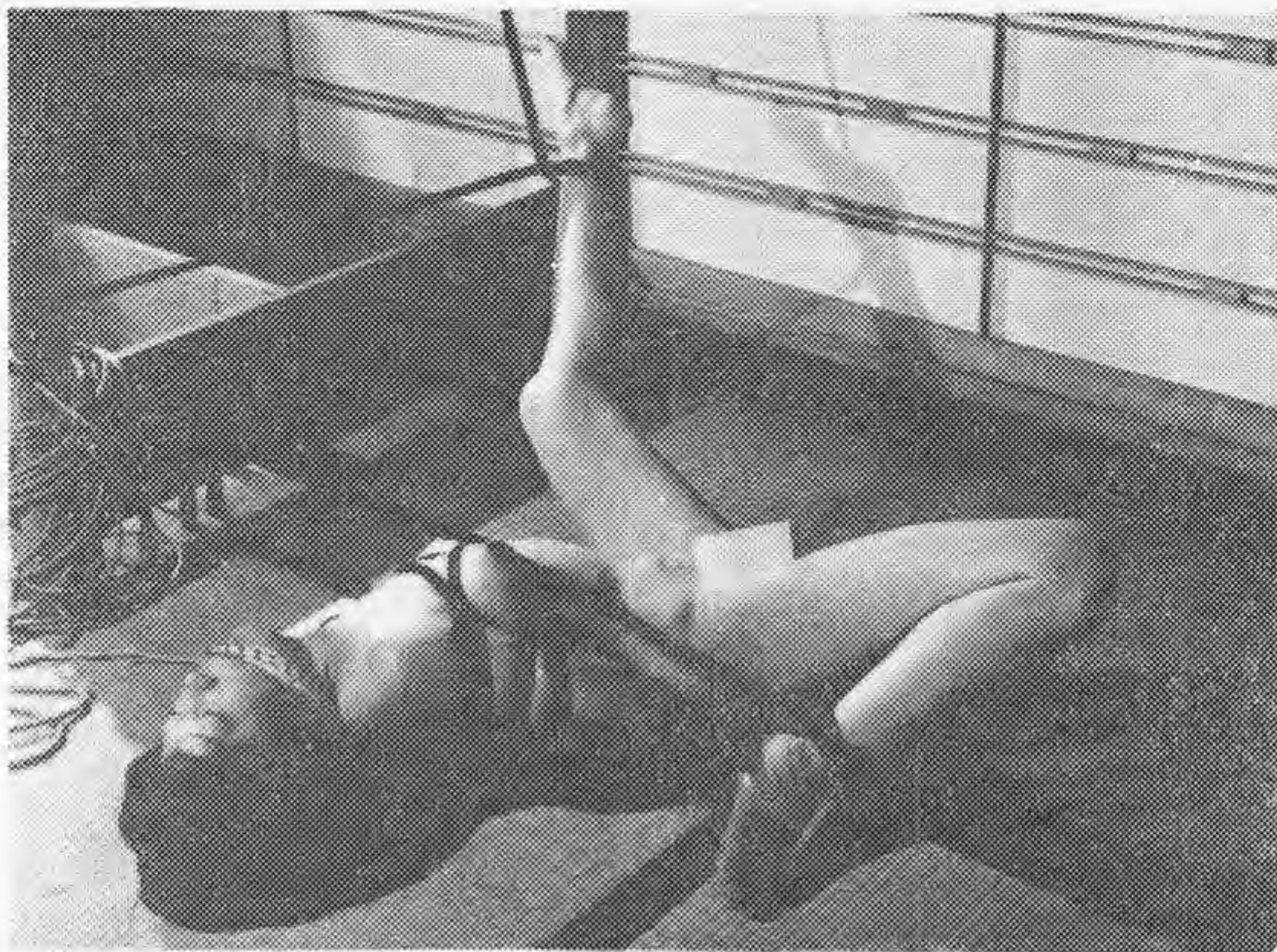
私は今度のプレイを大体三つに分けて計画

を樹てていた。夕食までを第一回、夕食後から就寝までを第二回、そして翌朝起床後から出発までを第三回という風に時間的に分けてみた。どの時間帯が最も彼女が燃え上がり、また私もハッスル出来るか、それは分からないが、とにかく、SMプレイを主体にして、写真は撮れたら撮るという態度で、一応ストロボの配光だけは、しておいた。

プレイの進行程度に依っては、お互いに第一回目でダウンしてしまうか、第二回目でダウンしてしまうか、第三回目でダウンしてしまうか、それはわからないが、前回での経験によると、第三回目まで十分遂行出来るという自信は、あった。

湯上がりの汗がとめどもなく流れ浴衣の襟をじっとりと濡らしているが、拭いても拭いても額には汗がにじんでくる。しかし、汗が引くのを私





は待っておれなかった。
「福竜、裸になって、こ
っちへ来るんだ」

私は彼女の長襦袢の襟
をつかんで引き寄せよう
とした。

「いや、いや。一寸待っ
て……」

彼女は私の手を払いの
けて拒んだ。

「何を言ってるんだ。こ
れから、お前は明日の昼
まで、私の奴隷として仕
えるのだ。文句を言わず
に、言う通りにしろ」

「はい、それはよく分か
っております。おっしゃ
る通り何でも致します。
もう少しですから、お化
粧だけはさせて下さい」
「奴隷にお化粧なんかは
いらん。さあ、こっちへ
来て、ハダカになれ」

廊下からドアを開い
て中へ入ると、玄関があ

った。そこに下駄箱があって靴を脱ぐようにな
っている。右側にはトイレとバスが続いて
いて玄関の正面が八帖の間、奥が十帖で蒲団
が敷いてある。植込みのあるベランダがつい
ていて、このホテルでも、まあ上の部に属す
る部屋なのだろう。これから、翌朝まで、こ
の部屋が福竜にとっては、文字通り八責めの
部屋Vになるわけである。

私は福竜を無理矢理、捻じ倒して長襦袢を
剥ぎとり、それを部屋の隅に投げすてた。脱
がされることがわかっていながら長襦袢の下
に更に白い晒の襦袢を着ている。それも剥ぎ
とって投げすてる。御丁寧にも白足袋までは
いているので、それもむしり取る。

剃玉子のようにしておいてから、ぱっと素
早く麻縄を掛ける。

この女の腕は後手に組ますと非常によく上
がる。左右の手首をXの字に握り拳を組ませ
ると肩口近くまで上がってくる。総体に瘦身
で小柄なので腕でも肢でも思い通りに自由に
なるし体重も軽いので、手軽に場所を移動さ
せることも出来て便利だ。とにかく、いじめ
て、いじめて、いじめ抜いてやりたい——と
いう気を起こさせる被虐タイプである。

後手に縛ってしまうと、福竜は途端に大人

しくなったが、次に私が行おうという責めの意図を知ると急に抵抗しだした。最初にこんな羞恥責めを行って、彼女のエネルギーを爆発させてしまったのが、果して成功であったかどうか、大いに疑問なのであるが、八帖の部屋に置かれてあるハファスト・ヘルス・チエアーVという例の按摩の椅子が私の目についた。この按摩椅子を利用して、羞恥責めをやってやろう——と咄嗟に私は思いついた。

「さあ、この椅子に坐って……」

そういう私の命令に彼女は矢庭に抵抗を示して、「いや、いや、それだけは許して」と足をバタバタさせて逃げようとした。

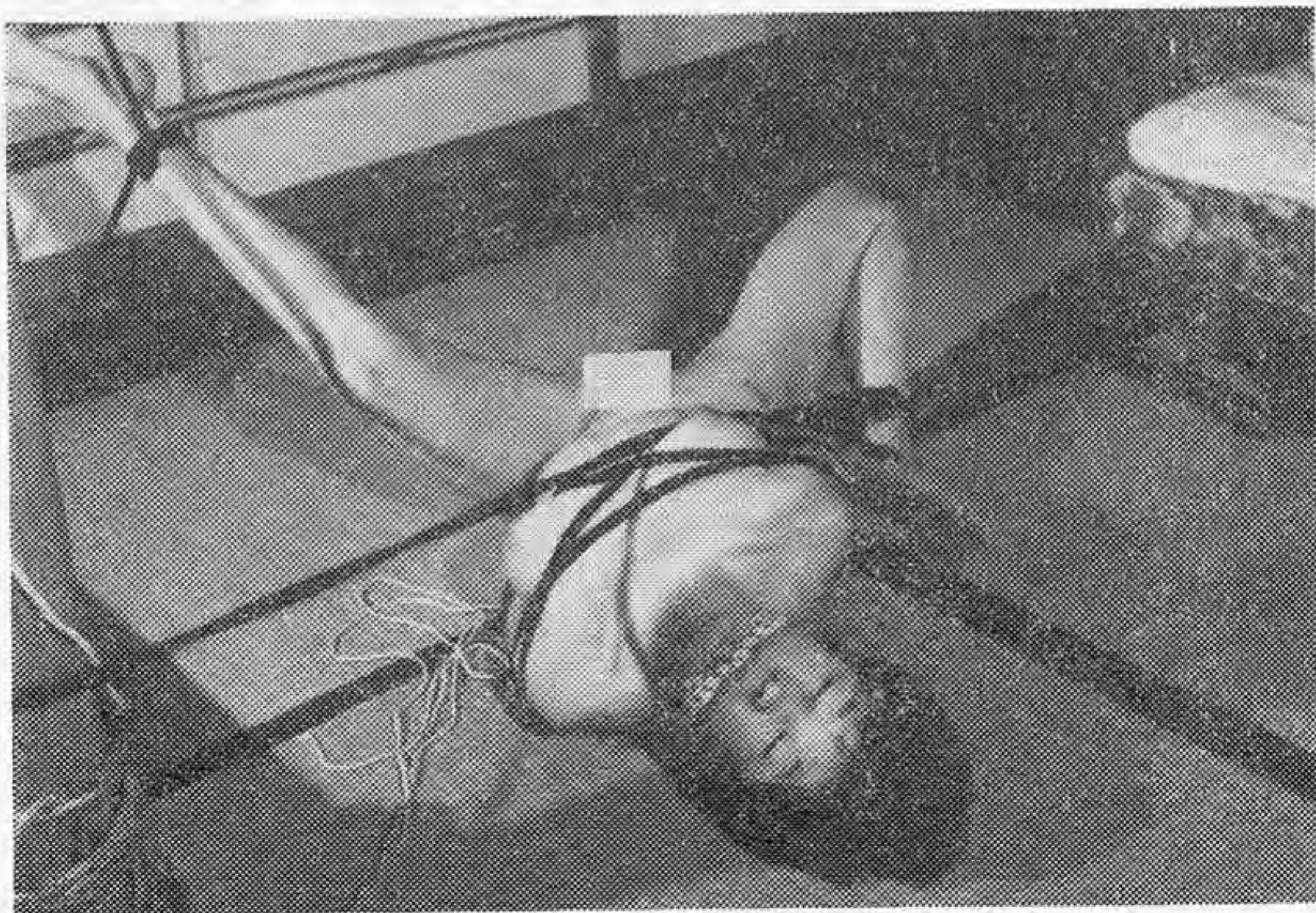
私は彼女を抱き上げると、按摩椅子の上にポンとほり上げておいて、後手首を縛った縄尻を按摩器の腕に結びつけた。これでもう彼女の上半身は動けない筈である。こうしておいて右足首に縄を結わえて引き上げた。

上がる上がる。まことによく上がる。頭の上より更に上へ上がる。これも按摩器の腕に縄尻を繋ぐ。カメラは三脚に据え正面に置きそれにエヤーレリーズをシャッターにセットしてあるので、私は肩にかけたゴムホースの先のゴム球を押しさえすれば、シャッターは落ちる。同時に四個のストロボがシンクロで

同調して発光することになっている。最近ではアメリカ製のウエインのマイクロ・スレイブという便利なシンクロスレイブが発明されて大変便利になった。

何本ものシンクロコードを引きずりまわさなくても、この提灯のような小道具をぶらさげておくだけで、カメラのシャッターを切ると何灯でも完全に同調発光してくれるから助かる。

残った右足首にも縄を掛けて引き上げる。両足首が頭より更に上に位置し、そして思いきり開股のポーズを強要した。身近かに按摩椅子があったことで、急に私が思いついてやり始めたのだが、ピントを合わせたために点灯した三〇〇Wの写真電球に照らし出された彼女のその部分が、異様なばかりの変化を見せているのが、私の目についた。





縄に恋した女——縄の大好き女。その縄に魅せられた女が、縄によって縛られたときの肉体的変化をこれほど如実にあらわしているのは、今まで接したM女性のなかで匹敵する人を挙げれば中河恵子さん位であろうか。△呼吸をする△という言葉がある。△いみわれる△という言葉がある。△露に濡れそぼつ

花△という言葉もある。

しかし、そんな諸々の言葉も私から見れば不十分な気がする。華麗な牡丹の花をスローモーションカメラで撮った開花の模様といったらよいだろうか。いや、開花だけではなく開閉といった方がよいだろう。

後手に縛られた不自由な身体をねじまげて

悶えている福竜の表情は恍惚境から法悦境を通り越して、今や忘我の境に達している。

五度、六度、と私はシャッターを切った。

「彼女のそんな様子を眺めていて、私の方がたまらなくなってきた。慌てて縄を解くと、福竜の身体を抱え上げて隣室の蒲団の上へ運び込んだ。一旦解いた縄を、再び縛り直すという気分的な余裕は私にはなかった。」

明日の昼頃まで、時間はまだまだたっぷりある筈だ。それなのに、ちよっぱなから、こんな仕儀になってしまつて、自分ながら、あきれ果てるより仕方なかった。

○

部屋の風呂で汗を流すと元氣は忽ち回復した。鞆から黒い縄を取り出してしごきながらいささかバテ気味の福竜を促した。

「さあ、これから、いよいよ本格的な責めに入るぞ。今までののは、いわば序の口だ。覚悟しろよ。起きるんだ、起きるんだッ」

蒲団の上で長々と伸びている彼女は、うっすらと薄目を開けて私の方を見たが、一向に起き上がる気配はない。

「なんというザマだ。それでも奴隷の誓いを立てた女と言えるんかッ」

私はムチで彼女の尻を力まかせに叩いた。

ピシッという小気味よい音と共に、手に快
い手ごたえが返ってくる。

適確な反応である。彼女の肢がピクツと痙
攣し、上半身がそりかえる。肩口へ、背中へ
そして再び臀部へ。忽ち皮膚が赤く染まる。

このムチは、嘗て関谷富佐子さんを責める
とき用いたもので、打擲した時の音は大きく
広範囲に皮膚を刺戟するが、肌を傷つけると
いうことは絶対にならないものだ。

「これでもか、これでもか」

私はムチの雨を福竜の全身に降らした。ご
ろごろころがって蒲団の上から畳へ落ちた。

ここで黒縄縛りが登場する。

40mの中細の真黒の縄二本。これを二つ折
りにして一本を緊縛に使い、他の一本を片足
にからませて引き揚げたり、首に掛けて引き
ずり廻したり、逆エビに、そり返らせて体の
前面をむき出しにさせたり、もう私の思いの
ままに福竜を弄ぶのに使った。

福竜の裸身は強く縛り上げれば上げるほど
燃え上がって、それが更に強い縛りを誘発し
た。もう、そうなれば、どんな痴態でも演じ
たし、それが更に、次のハレンチな姿態へと
展開していった。そして、セックスに対する
スタミナも、そこに縄が介在する限り、それ

は爆発的な盛り上がりを見せた。

美しくお化粧してお召の着物を着て澄まし
込んだときの福竜の姿は、今はその倅すらな
い。全身汗まみれになって、動物的な姿態を
あからさまに、私の目の前に露呈している。

人格を喪失して一個の愛玩物と化した女体
ともいべき芸者福竜のそんな姿は、私の嗜

虐心を一層あふりたてた。

Sファンの中には、対象の女性が激しく抵
抗してこそ、面白味があるという人と、責め
ることによって対象の女性が悦びを感じなけ
れば、面白くないという人がある。

後者の人達はフェミニストに多いのではな
からうか。いわば、女性の喜びを自分の喜び



とする部類の人である。福竜をいじめ、ムチで追い廻しながら、彼女が悦びにむせび泣くを見て、ふと、そんなことを考えてみた。

責められることに喜びを感じようような女を縛ったって面白くないじゃないか、というSファンの心理も私にはよくわかる。SMプレイともなれば、そこはよくしたもので、嫌がり強く抵抗する女性を無理に責めたてたいというSの気持を本能的に理解しているM女性がいいて、激しく責められたいのために、形式的に拒否し、抵抗することがある。

その拒否が、羞恥心のためのものであるのか或は、より厳しい責めを誘いだすためのゼスチュアであるのか、それは二人の間に心のつながりがあれば、すぐにわかってしまう。目は口ほどに物を言うというが、如何に無口の女であっても目を見れば、本当に嫌なのか形式的な軽い拒否なのかはすぐにわかる。そういう前置きがなければ、それは単なる暴行になってしまって、SMプレイの範疇を逸脱してしまうわけである。

SMプレイとしては、そのいずれが正統派であるのか私にはわからないが、私自身はどうやら、抵抗する女性を無理にいじめたいというタイプでは、なさそうである。

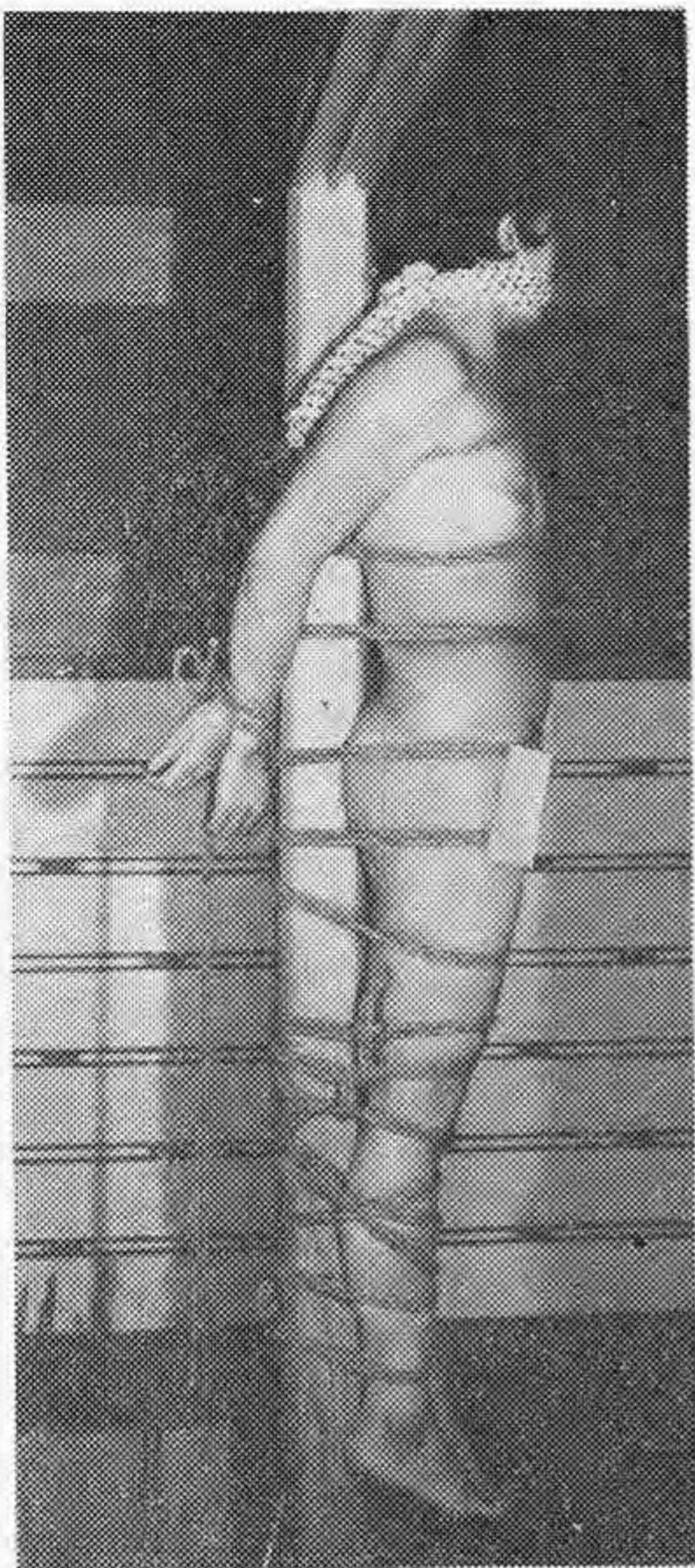
△観念するVという言葉そのままに、今の福竜は、私に対して主導権をすべて譲り渡したような形で、なすがままになっている。

黒縄と皮ムチを、片方宛の手に持った私はSマニアの読者の方だったら、こうして無抵抗になって忘我の境地をさまよっているM女性に対して、やりたいと考えておられるだろ

うことを、私なりに演じてしまった。「いやいや、もう辛抱できないから許して、お願い。ねえったら……」

そんな言葉を途切れ途切れに、ウワゴトのように洩らしている福竜。しかし、そんな言葉とはうらはらに、彼女の体の方は最大限の悦びを、はっきりと私の目に見せている。





私は左右の手から皮ムチと黒縄を捨てた。そして、首に巻いていたエヤレリーズのゴム球をはずすのもどかしく、黒縄で肌をくびられている福竜の体を抱き上げていた。ゴツゴツした縄のタッチを両腕に感じつつ。

この前、10月号の八縄とカメラのルポVの『深田菊子のSM生活について』の文の中でポルノの責め映画を制作してみたいと書いたことがあったが、それを読まれた一読者の方から、若しポルノの責め映画を作るのだったら、無条件で五、六十万円の資金を提供するから作ってみては、というお申出があった。その時、私は深田菊子、高村浩子の二嬢を

対象にして構想を練って、そういうことを書いたのであるが、資金さえあれば、カラーのVTRで撮ったら、極めて美しい、そして素晴らしいポルノの緊縛責め映画が出来ることだろう。責め——緊縛——ポルノ——SMプレイをテーマに、そうした映画を趣味的に制作するとなれば、この福竜はきっと、一役も二役も買うスターになれることと思う。

高村浩子さんから、私のところへ写真を撮りながらのプレイは面白くないので、写真抜きで責めだけをやってほしいと言ってきたが彼女の特に好む「流腸責め」なんか、被写体が動く方がよい映画は、最も適当していると

思う。もっとも、それはいずれも奇ク誌上に発表出来る性質のものでないだけに、あくまでもプライベートなお遊びに過ぎないが。

閑話休題——

私は、ぐったりとしている福竜の縄を解いてやる。いつものことながら縄をほどく時に思うのだが、何故こんなに厳しく、結び目をいくつも作って御丁寧に縛ったのだろうか。

縄を解くと、私は浴室へ向かう。

窓を開けると浴槽につかたまま外を眺めることが出来た。暮れかかった樹々のシルエットの彼方に有馬の街が見えた。早くもネオンの光が黄昏の中に二つ、三つとつきはじめ、入浴をすました頃は、釣籠落としの秋の陽は、すっかり落ちていた。やはり山あいの湯の街は日暮れも早いのであろう。

夕食まで、もう一責めと思っていたのであるが、第2ラウンドは、あとの楽しみに残しておき福竜を促して一階のホテルへ向かう。ホテルの浴衣に半纏姿で部屋の外へ出るのを恥かしがって嫌がる福竜を無理に連れ出す。シヨップングコーナーからゲームコーナーを冷やかしてグリルへ入る。メニューを見ると全部、洋食である。福竜は日本食でないと嫌だという。私は実際は洋食の方が好きであっ

た。いや本当は、油ぎった中華料理か、先年韓国旅行をして味を覚えたニンニクと唐辛子をたっぷり使った韓国料理などを、心ゆくまで食べたいところであったが、今は福竜の好みに従うより仕方がない。彼女は大切なお客さんなのだから。

地下のお好み食堂へ行けば日本食があるというので、階段を下りて地下へ向かう。

食事をすましてから売店で有馬名物の炭酸センベイを買う。街を散歩してみないかと誘ってみたが、寒いから嫌だという。どうやら早く部屋へ帰りたい素振りである。

そこで第2ラウンドが開始された。

二つの部屋の間を仕切る襖を取りはずしてしまうと柱が一本あらわれてくる。

この柱を利用して、両手を左右に開いた格好でハリツケにしてやろうと考える。両手首を後手にして一本の棒のように柱に縛りつける。これとは逆に足首を上、頭を下にして逆さに柱に縛りつける。後首を柱に縛っておいて、両足を高々と頭より高く引き上げる。

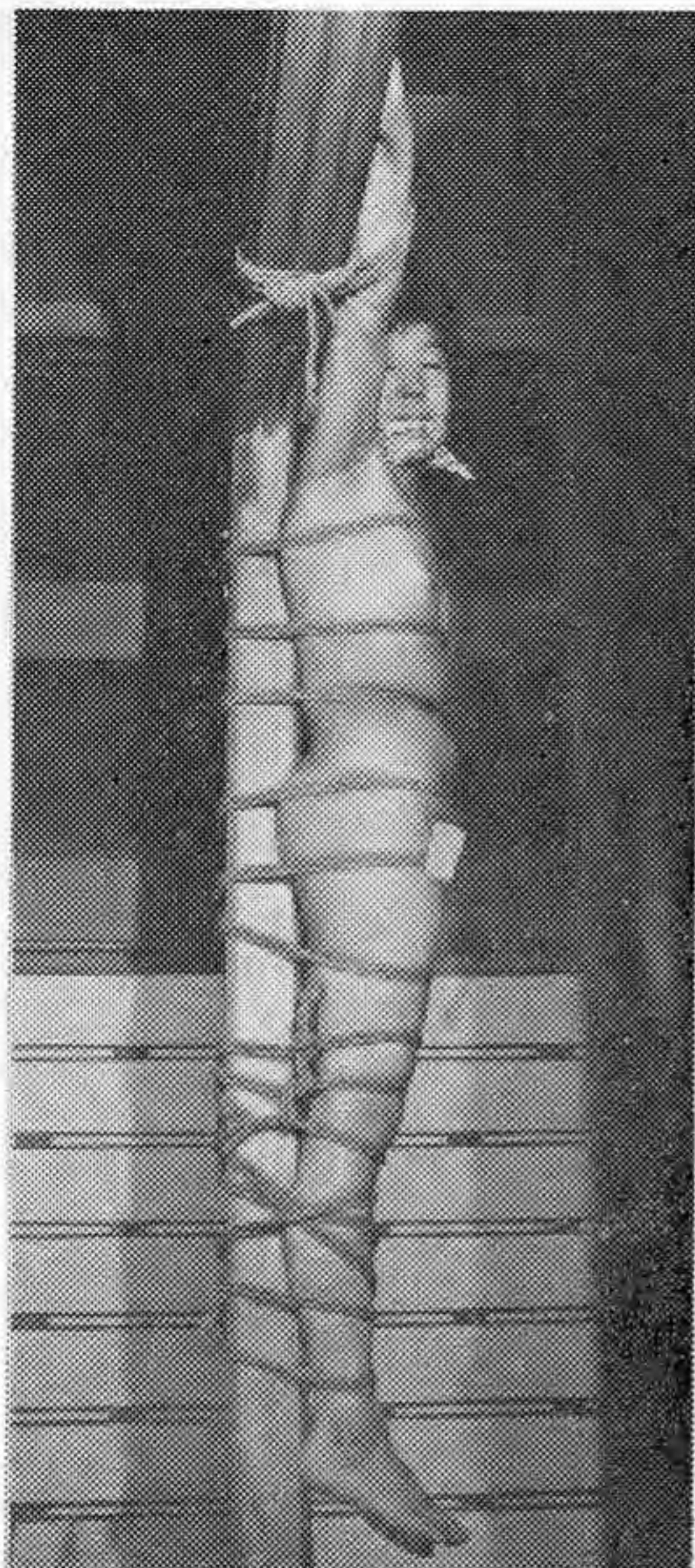
こうした構想を私は練っていた。天井は余り高くはないので、高々と宙に浮かすということは出来ないが、いずれのポーズも畳からは離れているので彼女の受ける肉体的苦痛に変わりない。私としては写真にした際の構図

のよさというものを、どうしても頭にしまわうのだが、福竜としては、そんなことは考えていない。第一、モデルとして来ているわけではないので考えないのが当然であろう。縄で縛られ、責められる楽しさだけが、彼女の念頭にあると思わねばなるまい。

彼女には、いささか申し訳ないが、その時の私は彼女を責めることよりも、どんなポーズで、どんな配光をしたら、より素晴らしい縛り写真を撮れるかということを考えていた。それには、柱の位置がどうも片寄りすぎているのだ。ストロボの位置をあれこれ変えてみたが、柱の位置がよくないので、どうすることも出来ない。手持無沙汰な福竜を待たせておいて、やっとカメラの位置とライティングの準備が終わった。勿論、満足すべき配光ではなく、ぎりぎり妥協した線であった。

宙に浮かして柱に縛りつけると、彼女は恐怖心から私にしがみついて来ようとした。畳の上から僅か数センチ宙に浮いているだけでも不安定感に変わりはないのだろう。見ている者にとっては、何でもないように思えるが、縛られている本人は怖ろしいのだ。

両手を上げたハリツケポーズ、一本棒と縛っては写し、写し終わると解いて又縛り直し



てシャッターを切った。逆さ一本棒で足首を上を頭に下にして柱に縛りつけたとき、ずるずると滑って頭が畳についてしまった。再び縛り直すのも面倒なので、そのままシャッターを切って縄を解く。

このような縛り方は、彼女の肉体的苦痛ばかり多くて、被虐的満足が薄いのか、或は肉体的苦痛に比例して被虐的満足も高まっているのか、彼女が何も言わないので、私には判らない。私がそれを聞くと、彼女は極端に羞らいを示して嫌がるし、私もそれを無理に訊ねるのは悪趣味のようであつた。もっとも、こうして女を縛って責めるのも、大い

に悪趣味には違いないが――。

さて、この諸々の柱利用の宙縛りの中で、圧巻ともいふべき最後の責めに於いて、私はまたまた福竜の感度抜群の様相を目のあたりに見ることが出来た。

これは縛りとしては、そうむずかしいものではなかった。私一人で極めて容易に勞せずしてやれるものであつた。柱を背にして、その前に立たして、両腕を後に柱の両側から回して両手首を縛り上げる。二の腕、胸から乳下にかけて柱諸共、縄を掛けて固定する。こ

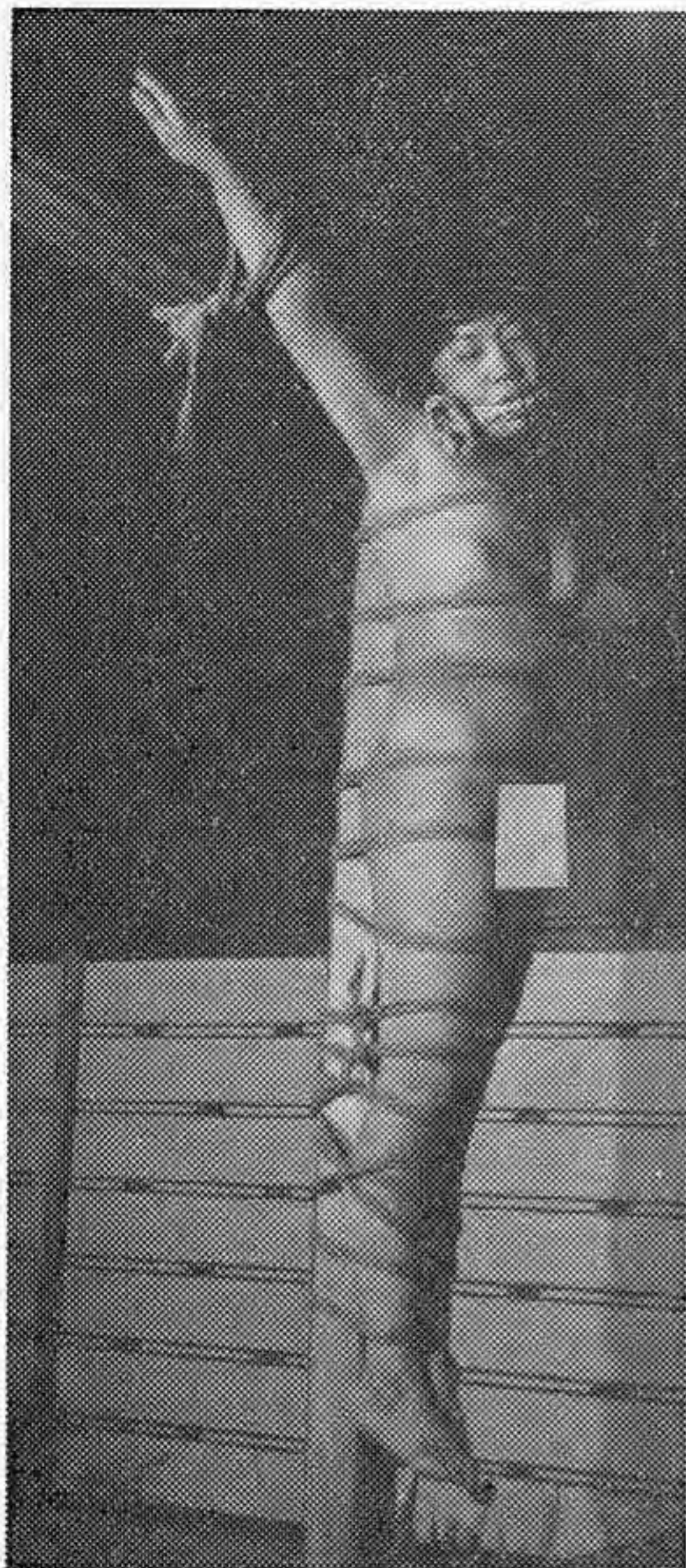
こまでは柱縛りとして普通のコースである。これから厄介なのは、両足首を彼女の頭上

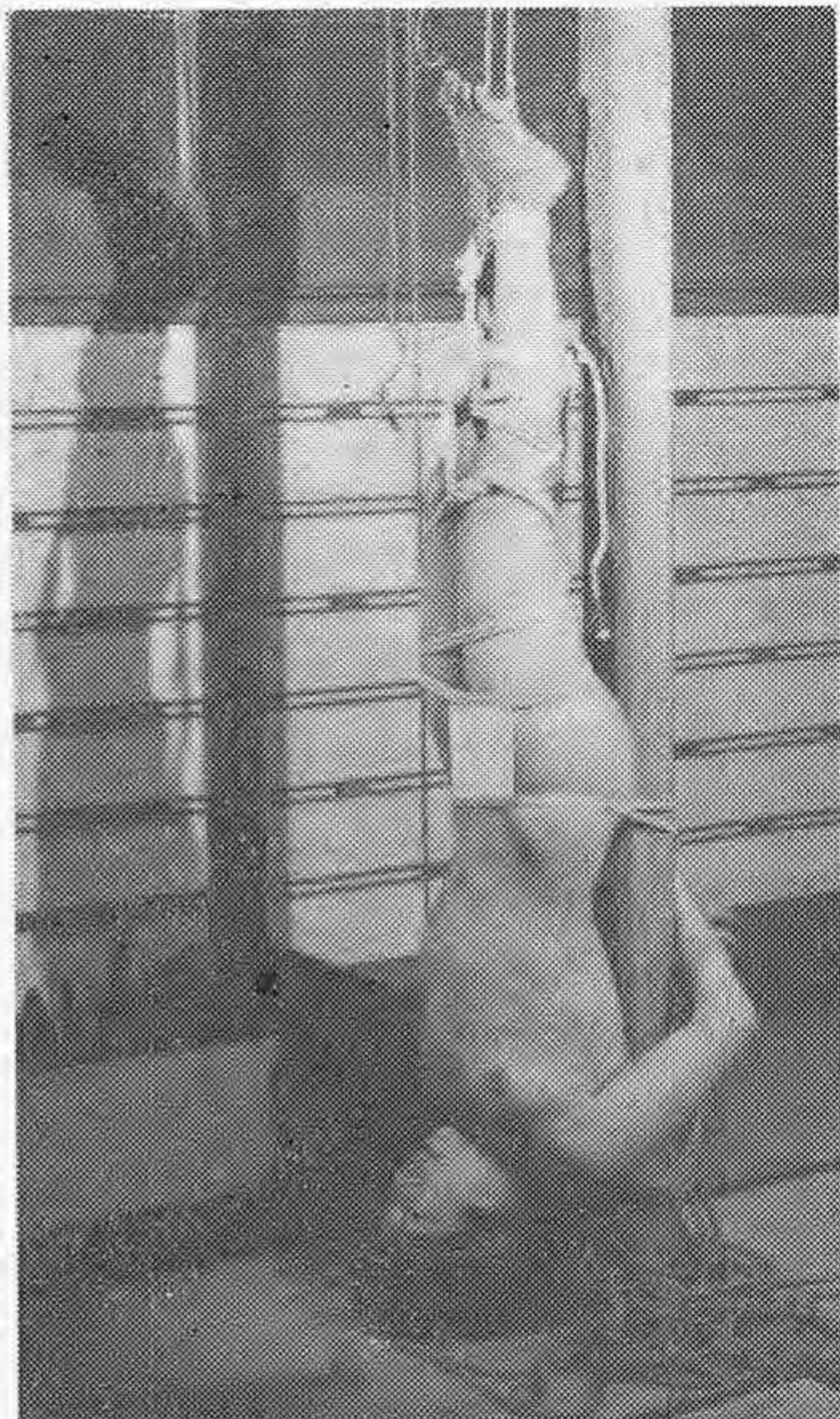
高く挙げるまで引き揚げる作業である。しかし幸いに私は金属製の大型の滑車を一個用意してきていたので、それを柱の上部へ縄で固定しておいた。福竜の両足首に縛りつけた縄を、その滑車に通して引っ張った。

「いや、いや、いやッ」

と、彼女は当然のように、足を挙げることを強く拒否した。だが、そんなことでひるむ私ではない。滑車に通した縄を引きつけておいて浮足立った彼女の足に足払いをかけて難なく宙に浮かすことに成功した。途端に二の腕から胸へかけて縛った縄が恐ろしいほど、ぐっと喰い込む。全体重がそこに集中したのだから無理もない。

一旦両足を宙に浮かしてしまえば、滑車に通した縄を引けば面白いように足首は上がってゆく上がってゆく。彼女の頭よりも高く両足は挙がり、お尻を前面に突き出した格好になる。こうなればもう観念して、ぐうの音も出ない。柱に縛られた後手首、二の腕はテコのようにこじられて凄惨な緊縛感である。胸や胴に巻いた縄は肌に埋没するくらい激しく喰い込んでいる。二つ折れの女体は、かくすべきところをあからさまにさらけ出して、今や責め地獄の中を彷徨している。





私は三〇〇Wの写真電球二個を左右から赤々と照らして丹念に観察を開始する。

見よ、福竜の女体のすさまじい変化を。それは今までに見たこともないような華麗な変身であった。私は、やおらパイプを取り出していた。前回で私は、福竜に対するパイプの特別な使用方法を研究しておいた。

ストロボが幾度となく閃光し、立木にはりついた蟬のような女体は、周囲から眺めるだ

け眺めつくされた。五分、十分と時間が経過したが、福竜の口からは、苦痛を訴える呻きは洩れなかった。ただ、悦虐の叫びは、女体の或る部分からだけ、とめどもなく流れつづけた。十五分、二十分。彼女の限界よりも先に私の方の限界が訪れた。

パイプを投げすてた私は、そんな奇妙な縛り方をされている福竜に近づいた。

ひっそりと静まりかえった夜のしじまのな

かから宴会場で唄う流行歌のドラ声が地の底から聞こえてくる地獄の声のように私の耳に響いてくる。長い長い時間であった。SとMとが、十と一とが、陽と陰とが、火花を散らして相剋する刹那としては、それは予想外に長い時間であった。

私はボロ布のようになり果てた福竜の身体を柱の下に投げ捨てたまま、浴室へ向かっていた。さすがに夜ともなれば、冷んやりとした山あいの空気が汗ばんだ肌に、そこはかとなく忍び寄ってくる。

私は浴槽の中で長々と身体を伸ばして、しばし物思いに耽った。

さっき福竜は、「私は朝早く起きるのは辛いけど、夜おそくまで起きているのだったら慣れていくから平気だわ」と言っていたが、それは今晚はおそくまで責めてくれという謎なのか。次はどのような責め方で彼女の被虐度の限界を確かめてやろうかと考えていると再び全身に元気が漲ってきた。

部屋へ戻ってみると、福竜はカラーテレビのスイッチを入れて一人で眺めている。まだまだスタミナがあると見える。私は頼もしく思った。ふと時計を見ると、もう十一時を過ぎていく。時間の経つのが早いのに驚く。自

分では一時間ぐらい経過したような気持なのだが、夕食後、部屋に戻ってきてから、すでに四時間以上も経っているのだ。

これでは第2ラウンドのあとのプレイの時間は、そう長くはない。私は福竜に入浴を促しておいてから、落花狼藉、足の踏み場もない責場の後始末と、次の責場の形作りを行った。次は愈々^{まないた}姐の鯉を料理して福竜の内臓の奥の奥まで、さらけ出してやろうと思った。

卓の上に置いてあったものを冷蔵庫の上に移しておいて卓を部屋の中央に運んできて据えた。一枚板なのか、この卓は馬鹿に重くて、ずっしりとしている。福竜という活^{いき}のよい鯉を料理するのには格好の姐である。

私はストロボとカメラ位置の変更をし、写真電球を卓の上を丁度、照らすようにする。

いやに入浴が長いと思っていると、福竜は化粧直しをして長襦袢に白足袋という姿で部屋へ入ってきた。私はそれが当然であるかのように、長襦袢を剥ぎ白足袋を脱がした。

素裸にひんむいておいて彼女の背後に回り後手首を逆十文字に組合わして縄を掛ける。二の腕の筋肉が、ぐっと盛り上がる処を締めつけるように寸分の隙間もなく縄を捌く。忽ちのうちに厳しい高手小手縛りが完成した。

両足だけは自由である。お尻をこづいて歩かせ、卓の上へごろりと、ころがす。

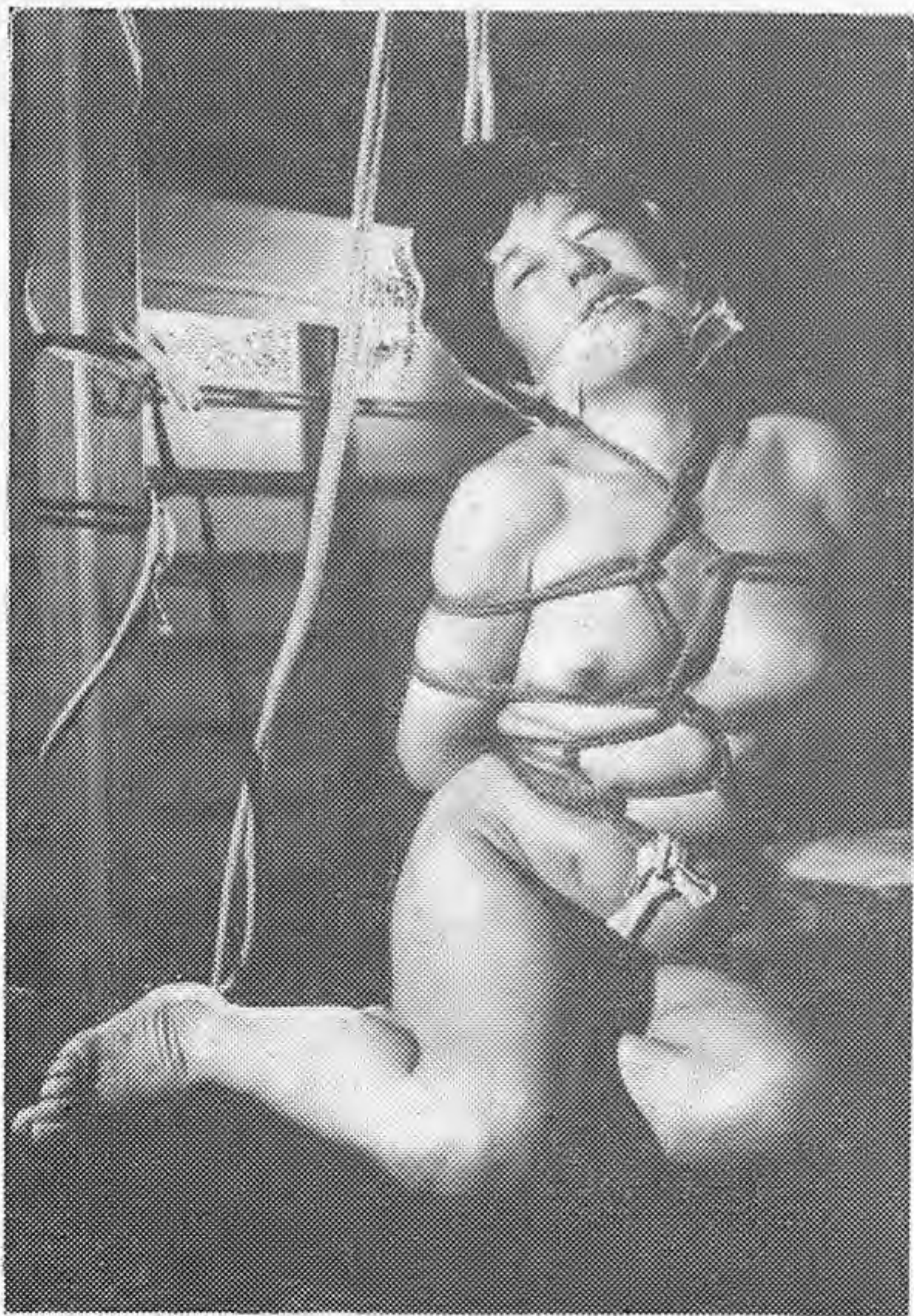
なんと縄に対して敏感な女であろうか。上半身を喰いちぎるように締めつける麻縄の縛りで、福竜の白い肢体は紅色に燃え上がり、卓の上で蠢動をくりかえしている。

二回、三回、と私はシャッターを切った。

もうストロボの充電時間を待っておれない逸りに逸った気持であった。

卓の上を輾転する福竜の体目がけて、皮ムチを揮った。弾力性のある女の肌の快い手ごたえが手もとに返ってくる。一打、二打、ポーズを見定めてはシャッターを切った。

彼女は益々昂揚し、「許して——」と笛を





吹いたような澄んだ声で哀願した。それが次の責めを求める合図になった。ここで私はパイプの助けを借りることにした。大体、私は大人のおもちゃ式の小道具を用いることは好まなかった。多くの場合はそんな姑息的な手段を用いなくても対象を十分満足させることが出来たし、如何にも千変一律的なあの面構えが気に入らなかった。だが、今回は違っている。私は第三者的な傍観者の立場で冷徹な観察の目を働かさなくてはならないのだ。

自分だけが楽しんで事足りりとする単なるSMプレイヤーであってはならない。

この場面を自分から突き放して、冷静に観察し報告するSMポライターでなければならぬ。

そこで考えたのがパイプ付股間縛りというヤツである。

といって、別にむずかしい仕掛ではない。浴衣の紐をお尻のこの縄とお臍のこの縄に連結して、飛び出してこようとするパイプの底をがちちりと押さえさせてやるのだ。この簡単な仕掛は大成功だった。

にぶい音が奥深くくぐもって、福竜の白い裸身は白蛇のように、うねうねとくねった。口からは言葉にならない、うめきとも叫びともつかぬ音声が、やたらに吐き出された。

三〇〇Wの電球二個がずっと照らし続けているので、部屋中は十一月というのに、むんむんする熱気が満ち溢れ、甘酸っぱい福竜の汗の香りが立ちこめている。

コマ廻しのように卓上の女体に私は皮ムチの雨を降らした。卓の上から、ころげ落ちそうになると、私は足を挙げて蹴上げた。

麻縄にがちちりと縛られた女体は、固い卓の板の上で、どのように痛かろうと思ったが喰いちぎるように喰い込む麻縄と、肌や関節に直接当たる板の痛さが一層彼女の被虐心をあふり立てているのだろうか。彼女の途切れ途切れに漏らす世迷言の中には、「痛い」という言葉は一度も聞きとれない。

なんとなく聞きとれるのは、「許して」とか「勘忍して」とか「もうたまらない」とい

った言葉である。私は冷やかに、そんな彼女の狂態を眺めていた。

パイプ付股間縛りは、その与えられた任務を忠実に果していた。私は意地悪く彼女がどんなに哀願しても只冷徹に眺めているだけであつた。自由になる二本の肢だけが、縄をよるようによじれ、一きわ高い叫声が彼女の口から洩れたと思うと、さすがの彼女も悶絶してしまつて動かなくなった。

私はここが限界とみて股間縛りはずして縛つたまゝの福竜を抱きあげて蒲団の上へ運んだ。汗まみれの額には、おくれ毛がべったりとはりついていて、半ば口を開けたまま、忘我放心の状態に見えた彼女も、私が抱え上げると途端にアニマルの本性をあらわした。

四十二キロか三キロかといった、このか細い瘦身のどこに、こんなスタミナが貯えてあつたのだろうか。彼女は私の耳もとに口を寄せてつぶやいた。

「私、ダメになつてしまったの」

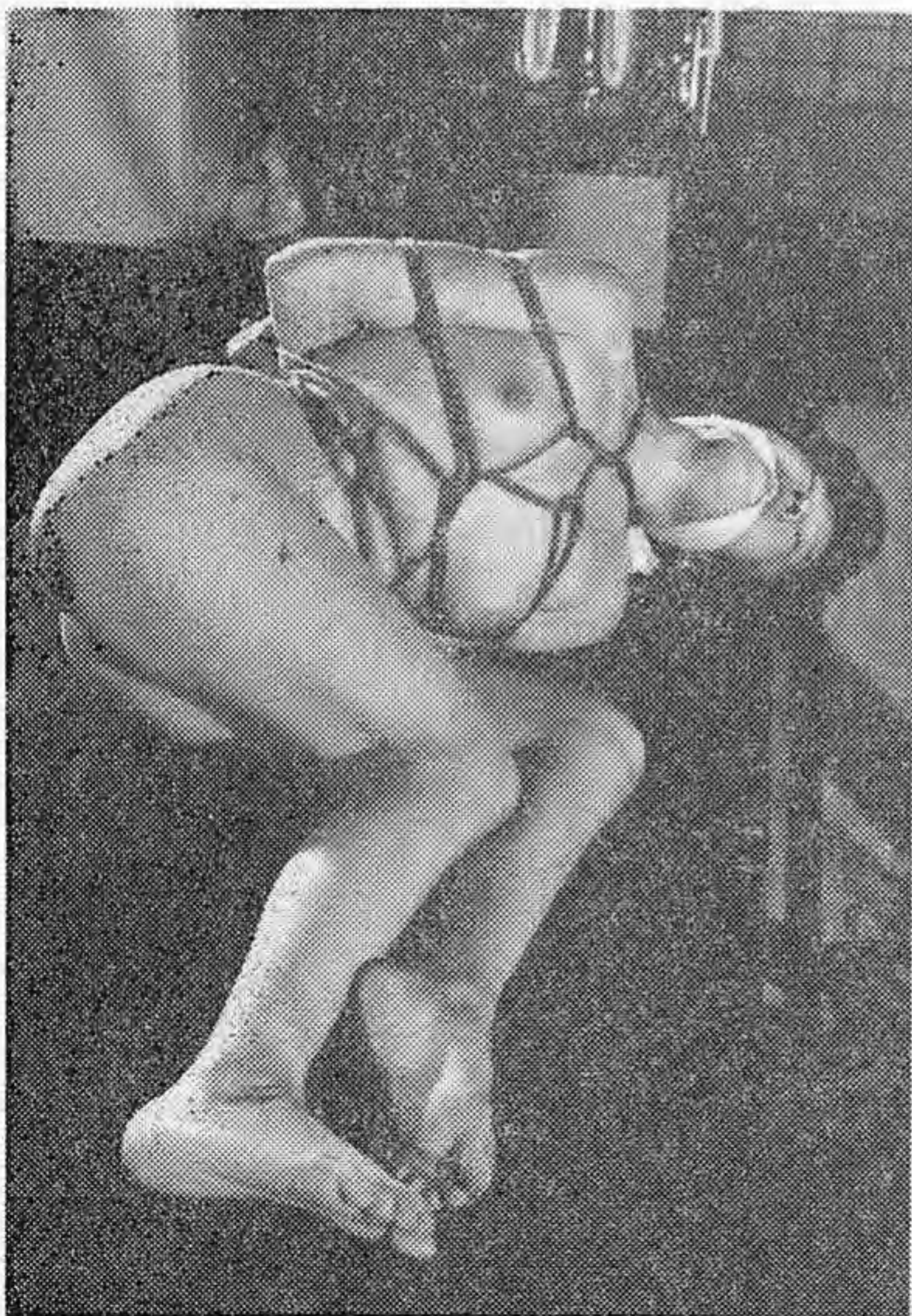
なにがどう駄目になつたのか、私にはわからなかつた。彼女に何度訊ねても、口をカキのようにつぐんで、そのことについては話そうとはしない。そのダメの意味を私が知つたのは、大分してからであつた。

麻縄でぐるぐる縛つた女を抱いた感触を存じだろうか。ゴツゴツとした縄ざわりがまたかつた。しかし、福竜こそは縄に恋した女なのである。私という人間ではなくして、縄こそ彼女の恋人なのであつた。ここで縄を解いてしまつては、彼女の興味は半減してしま

うのを私は知っている。

私こそ、ていのよい縄の道化師ではないのか。福竜を弄び、玩具にしていると思ひ込んどつたが、それは浅墓な思ひ過ごしてあつたのだ。彼女こそ縄の恋人という主人公だ。

私は彼女の縄も解かず、ふらふらと浴室へ向かつていた。これで入浴するのは六回目



か七回目か、さすがに足がふらつき、頭の芯で鈍い痛みを覚えた。

汗を流して戻ってみると、急に睡魔が襲ってきた。写しかけのカメラを始末する気持ちも起こらなかった。福竜の縄を解いたのか解いてやらなかったのか、それは遠い忘却の彼方に消え失せて、私は思考をなくしていた。

遠くで潮騒がしていた。

青い海で潮の香が鼻についた。健康的な明るい光の中で私は泳いでいた。

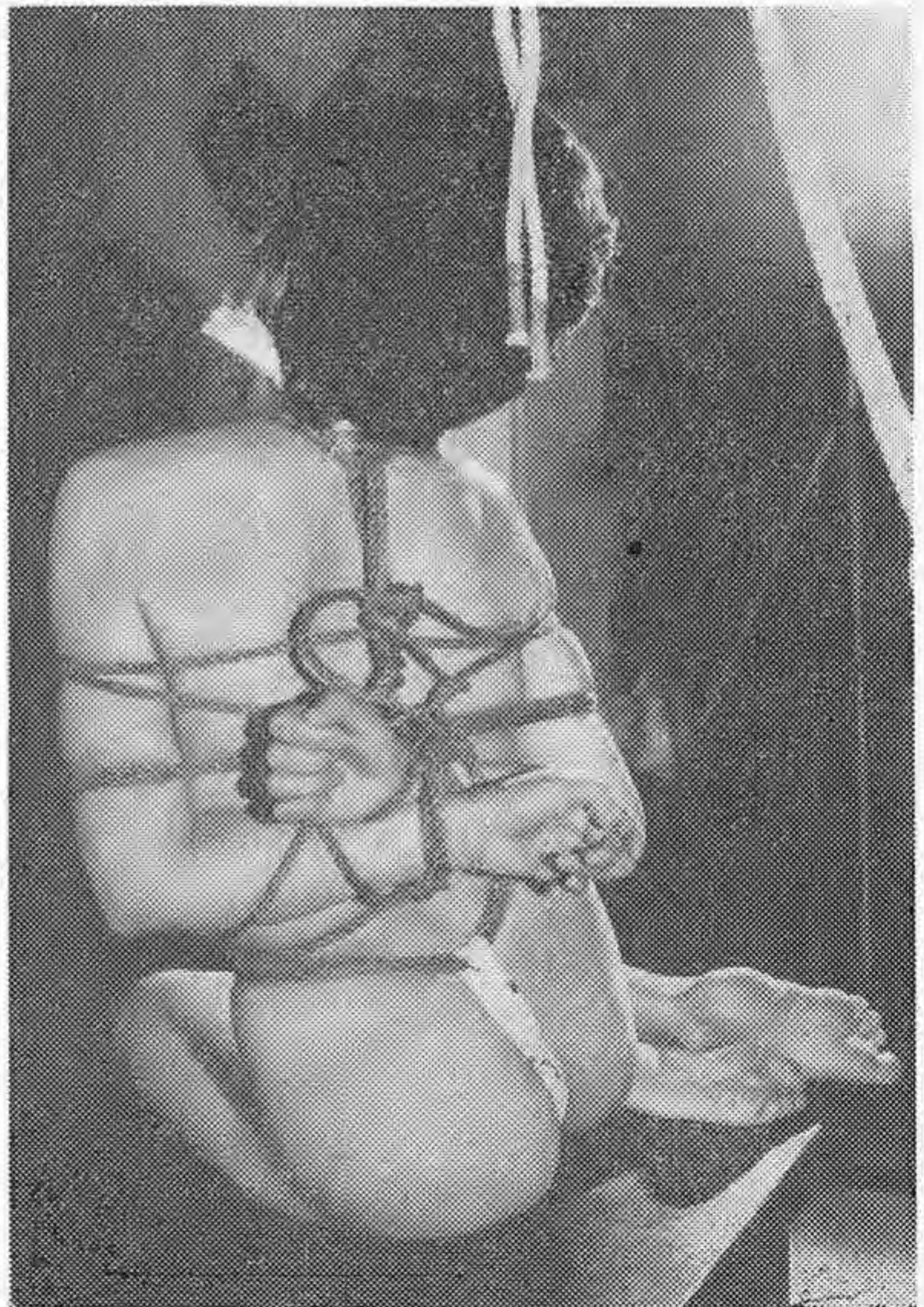
いくら手足を動かしても前へ進まず、同じところに漂っていた。泳ぎには自信がある筈だったが、泳いでも泳いでも前に進まないのが苦しくなってきた。それにしても、なんとこの明るさだろうか。海面に反射した太陽の光がきらきらと目の中に飛び込んでくる。

明るい、明るい、まぶしい――。

そう思った途端、私は夢から目がさめた。

私の目の前に福竜の白い顔があった。すでにお化粧をすまして着物をきちんと着こなして私の傍に坐っている彼女の姿は、あでやかにも美しい芸者姿の福竜であった。そこには汗にまみれて麻縄にきびしく縛られた裸身を悶えさせているM女の倅はなかった。

彼女が窓のカーテンを開けたので明るい陽



ざしが私の目の中に入っていたのだ。

「なんだ、もう起きていたのか」

私はまぶしい思いで、彼女の顔を下から見上げていた。もし、この世の中に八女神Vというものがあったとしたら、このような顔であろうか。満ち足りた笑みが、こぼれ落ちそうに満面に浮かんでいる。

「もうお昼前なんですのよ。あなたはよくお寝みになってらして、大きな軒をかいていらっしやいましたわ」

「そうか、軒をかくクセのない僕が、かいていたとすれば、余っ程疲れていたのだな」

そう言って起き上がってみれば、あたりはすっかり片付けられていて縄は一本一本丁寧



に束ねて並べてある。昨夜、彼女を縛ってのたち廻らした卓は綺麗に拭かれて、熱い茶が湯気を立てていた。

「よっぽど早く起きたんだな」

「ええ、何度もお起こしましたんですけど、うんうん、返事をしながら、少しも起きられないもんですから、私、失礼して先にお風呂へ入れて頂きましたわ」

「ゆうべ、僕は君の縄を解いたかしらね？」

「ええ、半分ほどお解きになって、あとは自分で解けて、おっしゃいましたわ」

「そうか、酒に酔ったみたいで、何も覚えてないんだ。すまなかったね」
私は蒲団をはねのけると、熱い茶を一杯ぐっと

口にふくんで浴室の扉を開けた。

十一月三日、文化の日。薄日はさしていたが雲の多い空模様だ。私の企画していた第3ラウンドは、どうやら時間切れのようだ。寝足りた私の肉体は十分元気を回復してはいたが、今晚のお座敷には是非出たいという福竜を止めておく自由は私にはなかった。約一時間後、私の運転する車は芦有道路の七曲りの峠道を芦屋を指して疾駆していた。大阪国際空港へ向かうために――。「一度松山へお遊びに来て下さいね。松山市内や道後を御案内しますわ。その時は写真機はお持ちにならず縄だけお持ちになって下さいね。私、松山空港までお迎えに参りますから、お電話下さいましね」別れしなに福竜は、そんなことを言った。大阪―松山間、たったの一時間か。午後発って翌日には、もう帰れる。これは雲隠才蔵をきめ込むのには最上かもしれないぞとふと思った。それにしても、あんなことを言っただけ彼女はまだ大阪へは来ないつもりなのか――。ゲートで見送っている中、小柄な福竜の後姿は人混みの間に消えてしまった。つんざくような飛行機の爆音が突如湧き起こって、黒い煙が硝子窓の向こうに見え、それが視界の中で次第にひがっていった。



SMショート・ストーリー

二人の客

久留木 栄

カット・伊達 忍

美しい姉妹の経営するバー・ポレロ。姉はしとやかな丸顔の美人で松子。妹は長顔で、ヤンチャな美人で杉子といった。

そのバーの常連で年配の、しとやかな老人とエネルギーでエッチな青年がいた。ともに画家で、老人は南画家として有名で名前を南宗山といった。五十二歳である。青年は中央美術の会友で北玲二郎といい、三十二歳であった。

二人は不思議と、そのバーで顔を合わすことが多かった。

姉妹は、ともにその二人が好きだったが、どっちかという姉の松子は北を、妹の杉子

は宗山が好きだった。姉が北の方が優しいというのに対し、妹は、宗山が金持で、頼りがある主張した。

二人の画家はこのバーに来るようになって友人となったのだが、近くのストリップ劇場に二人そろって見に行くほどになっていた。ある日、演し物の替わったばかりの劇場から出た二人は、きょうのは興奮したな、と話しつつ、バー・ポレロに入ってきた。

おしぼりを出しながら、商売用ばかりではない笑顔で姉の松子が聞いた。

「何をそんなに興奮したんですの」

「裸さ。八頭身というのかね、体がすばらし

かったよ」

と宗山。

「いやそうでない。ボクは脇役のチビちゃんに感心したんだ。感心より同情かな。なにしろ一幕じゅう、小一時間も縛られっ放しだったもん。すげえや」

と玲二郎。

「いったい何というショウなの」妹の杉子も話に、わり込んで来た。

「エッチ大作戦さ」

と玲二郎。

「一度、見に行ってみらん」

と宗山。

そのあとで、チョット紙ないかと、色紙を要求した宗山は、職業柄か、いつもズボンのバンドにさげている矢立から筆をとり出し、その面相の先をペロペロなめながら薄墨を活かして、宗山はさすがに鮮かな筆運びで、スイスイとその情景を描いて行った。竹林の中にたたずむ裸女という構図で、野太い孟宗竹の間にソソとした白い美女の裸が夢のように浮き出て、何ともいえぬ気品があった。

「こんな、感じだったかな」

と宗山。

「多分」

と言いながら、玲二郎も、タナからスケッチブックをおろして鉛筆を走らせ始めた。ごつい手で無器用に鉛筆をにぎる玲二郎の筆の運びは、画家とは思えぬほど遅々として、宗山の活達さには及びもつかなかった。きっと細かい線など使わない画風なのだろうと姉妹は思った。

できあがった絵も好対照だった。仔牛のように筋肉の発達した女が、天井からつるされ拷問に泣いている図だった。

「こんなシーンだったかな」

と玲二郎。

「多分」

と宗山は言いながら、二人は顔を見合わせ絵を見比べてカラカラと笑った。

その夜、浮気心を刺激されて早めにスタンバーした姉妹は、男二人に食事に行かないかと誘いかけた。

「OK」異句同音、四人は、ただちに近くのそば屋に行った。ソバをたべるうち、玲二郎は珍しく、姉の松子を口説いていた。

「あの裸女が目について、今夜はネムれないだろう。いっぺんでもよい。縛ってみたい。」

松ちゃん、ともかく今夜いいだろう」

かなり、こわい口説き方だった。だが松子は、こわいとは受けとっていなかった。玲二郎の口から出ると、こわいせりふも、なんとなくオッチョコチョイに聞こえ、いったいこの人は、どんな愛し方をするのか、浮気してみたいような気持になる。

一方、妹の杉子の方は、男より女の方が積極的に露骨に口説いていた。

「ねえ、一晚、五千円なら安いでしょう。宗山さん、いかが。この杉子が、たったの五千円なのよ。煮ても焼いても、いいのよ。この若鮎は今がシュンなの。それが一尾五千円」

杉子はそう売り込みながら、宗山なら承知してくれる。優しく優しく愛してくれると期

待していた。

そしてその結果、希望どおりに二人は、あいついで、ナイトホテルに入って行った。

玲二郎は松子と一緒に梅の間に通った。真ん中に鏡があり、桃色のシェードのついたスタンドにはえたダブルベッドが、それにうつっていて、なまめかしかった。

「ともかく疲れたネ。フロに入ろう」

と玲二郎は優しい。松子といっしょにフロに入り、あんな武骨な男がどうしてこんなに器用になれるかと思うほど巧みに、松子の体を洗ってくれた。

「和服は、きついでしょう。だからボクは、着物というヤツは、きらいなんだ」

と、ゆかたに着替えたあと、松子がぬぎすてたウールの着物を、ちゃんと衣紋掛けにかけて洋ダンスに吊るすし、床に入ってからもいたわるようにしてくれた。

松子は心から優しい人だなと思った。それと同時に、女を縛りたいなどといった、あんな絵を描いて見せた人とも思われなかった。ので、寝物語に、そんな感想を語ると

「おや、松ちゃんはマゾなのか。ボクは正常人とみていたんだが——。あんなものは絵を見て楽しむものだよ。実際にするもんじゃ

ないさ。とくに自分の好きな人にはネ」

と、こともなげに言った。

「スカン人なら縛るの」

「いや、逃げ出すよ」

北の返事は、まことにあっさりしていて、松子を吹き出させた。

そして松子を、がっしりした腕で抱きかかえながら、徐々に、紳士的で優しく、それでいて実に行きとどいたテクニックで愛してくれた。このため松子は再三、再四、女としての幸福を味わせてもらった。

「ボクは、いつかはこうなると思っていたんだよ。その時にはどうしようと、そのことばかり心配していた。あんたが本当に、しあわせになれるだろうか——ボクにはそんな資格も何もない、そんなことばかり考えていた。だがいま、女を幸福にするのは男だし、男を幸福にしてくれるのは女の柔肌しか、ないとわかったよ」

北の、たくましい腕に抱かれたまま、松子は夜のふけるのも知らなかった。

一方、自ら売り込んで宗山を口説いた杉子の方は、どうだっただろうか。

「ふむ、五千円か。よし、やろう。じゃあ、今夜の君はボクのドレイなんだな」

二人だけになると老人はすぐ金を払った。

その金を杉子がしまう、いと間もおかず、老人はどこにかくし持っていたのか、強くて、太くて、頑丈なロープをとり出すと、あっという間に杉子を、しばりあげた。

「あれー。あつ、あつ、何を、何をするの。あれー」

という悲鳴を樂しむように、老人は杉子をすぐに裸に剥いた。このため着物は皆、手首に集まったが、それをそのままにし、余った縄を胸に回して締め厳重に菱縄に仕上げた。杉子をイスの上に追いあげ、天井に縄尻を固定したあと、からだをかかえあげてイスをのけると、全身の重味でナワが胸にしまり、体はぐるぐる廻りながら、ずり落ち、足先だけで、やっと届いた床をささえ、辛うじて体のゆれを、とめることができたという状態だった。

杉子は思わず悲鳴をあげる。その口にさつと、汚いマクラカバーを押しこんでサルグツワをかけられ、まさに、いきたえだえになるくらいの苦しさである。

老人は、杉子をそんな形にしたあと、ハブラシのようなもので足のウラや脇腹をくすぐる。鼻の穴にコヨリを突っ込む。いやはや無

茶苦茶である。縄をムチ代りにしてシリを叩く。手当り次第に素肌を嬲り、いたずらをす。それはもう、その風格からは想像も出来ない変態の限りをつくすのだ。

杉子が失神すると、それをよいことに、すべての着物をはぎとり、こんどは、さらに厳重にナワをかけ直したのち、舌をかまないよう、ワリ箸ではさんで固定したあとで活を入れ、水プロにつけた。水からひきあげると、こんどはエビ責め、と責め手を、つぎからつぎに変える。その間に老人は、あられもない女の拷問図をカメラでとり、絵筆でノートにスケッチした。無残というほかはなかった。

北玲二郎と松子が、いい気持で、この旅館をあとにしたころ、杉子は逆エビに縛られ目かくしをされていた。そんな惨めな杉子を床に転がしたまま、宗山はひとりこつそりとその部屋を出ると、ボーイにチップをやり、そのまま、マゾ女を愛するよう頼んだ。ボーイは喜び勇んで部屋に戻り、杉子に襲いかかった。宗山は、それを見ていたが、ボーイが去ると杉子の右手首のナワだけをゆるめ、さようならとも言わずにホテルをあとにした。

杉子が不自由なからだをくねらせ、ゆるんだ右手のナワをとく、ようやく自由を回復し

て家に帰ったのは、もう白々と夜が明けかけているところで、杉子は、家のくぐりをくぐると同時にたおれ、玄関のじゅうたんの上に寝込んでしまった。

そして、その夜、この二人の姉妹は、とり

すましてバー・ポレロで顔を合わせた。

「どうだった？」

と聞く杉子に、松子は

「北さんって人は、変態も変態、まるで気違いよ。カワのカセを持ってきていて、一セン



イメージギャラリー

『ヒトの惑星』

小川茂正

チも身動きできないようにされたの。そして
おいて、乳房を捻り上げるやら、腰をぶつや
らで、めっちゃめっちゃに虐められちゃった。も
う死んだ方がよかったワ」

とポロポロ、涙を流してみせた。

いっぽう杉子は

「まあ、そう。それとくらべると、まるで月
とスッポンね。やはり老人は、しとやかで優
しく、すみずみまで愛撫の手がとどくの。な
んたって、老人は時間が長いでしょう。二度
も三度も失神しかけたワ」

と、いかにも楽しそうに話していた。

「じゃ、乾杯ネ」

「チェリオ」

と女どもが乾杯したところへ、不良老年と
洋画家が、あいついで入ってきた。

北は、いたずらっぽい目をし、宗山は、ま
じめな表情をして二人を眺め、ふたたび青春
について議論を始めた。

——この人たちは、どうしてこんなに見た目
と実際の違いがあるのかしら——

期せずして松子も杉子も、そう思った。そ
れから、いつものように二人に、ハイボール
とジンフィズを出すのだった。

——(了)——

△懸賞入選創作▽

フラスト族の叛乱

(下)

城崎恭介

カッタ・志羽利也



五

その夜、伊万里の車で送られて、アパート

「指切りしてよ、指切りげんまん……」
伊万里は、小指を立てた。先刻までの女王
然とした威厳は消え失せて、茶目ツ気のある

の前にたどりついた時は、
すでに深更になっていた。
かれこれ十時間も責めにつ
き合わされ、彦六は、憔悴
しきっていた。

「あッ、ちょっと……」運
転台の窓をあけて、歩きか
けた彦六を、伊万里が呼び
とめた。「今日のことは、
これきりにしましょうね、
先生」

「勿論、約束しますよ」

女子学生に戻っていた。

彦六が小指をからませると、伊万里は強い
力で自分のほうへ引きよせ、いきなり頬に接
吻をした。

「伊万里のこと、悪い女子大生だなんて思わ
ないでね。あたし、好きな人みると、苛めて
みたくなるの。男の人でも、女でも……」

と、熱い息と共に、彦六の耳へ囁きかけ、
「バイバイ！」と快活に手を振って、車を発
進させた。

彦六は、尾灯の消え去るのも見届けないで
自室のドアへ向かった。たまらなく佻しい気
持になって、一刻も早く、フトンにもぐりこ
みたかったのだ。ところが、彦六の部屋には
客がいた。浩平である。

「どうしたんだよ、今ごろ……」

浩平は、不気嫌な声でいった。そういいなかったのは、むしろ彦六のほうだ。

「心配して来てやったのに、病人不在じゃあカッコがつかねえじゃねえか……」

呆けたように突っ立っている彦六に気づかわしげな視線を投げかけながら、浩平は真実心配そうだった。

彦六は、どっころしょと腰をおろし、浩平の飲みものジュースを、うまさうに飲んだ。日頃、潔癖な彦六に似つかわしくない、投げやりな態度だった。

「おい、六さん、酔っ払ってるのか？」

「いいや……くたびれただけだよ」

彦六は卓に頬杖をついて、きょとんと目を見開いていたが、やがてポツリと呟いた。

「竜さん、インポって、直るもんかねえ」

「インポ？ お前、験してみたのかよ？」

「そうさなァ……」

と、ひどく気のない返事をして、白昼夢のような椿事を、むしろ冷淡におもしろいおこしていた――。

新入生歓迎のセレモニーが終わると上級生たちのデモンストレーションに移った。

SMの模範演技である。

新人たちは、全裸のまま壁際にすわらせられて、先輩たちのレスビアンまがいのSMプレイを、泣きはらした目で見守っていた。

明子とトキ子の演ずる浣腸プレイを皮切りに、洋子と伊万里、トキ子と洋子、伊万里と明子というふうには、SとMの立場を交換しながら、逆吊りあり、股裂きあり、擦り責めあり、バルトリ責めあり、息もつかせず展開された悦唐絵巻は、華麗といおうか壮絶といおうか、まさに目もくらむような迫真力が、こもっていた。

中でも圧巻だったのは、トキ子の愛犬をつかって、人間犬伊万里に施された獣姦責めだった。ブラックサンダー号と呼ばれる血統書つきの名犬は、その名の通りに漆黒の毛並みを誇り、稲妻のように敏捷だった。

コサック縛りというのだろうか、しゃがみこんだ膝の間に、両腕を捻じこまれて、手首と踵を括られた格好で、伊万里は黒犬の襲撃をうけた。顔、乳房、下腹部、内腿、膝と、要所要所に、香りのよいシユークリームを塗りつけておいたので、哀れな人間犬は、たちまち仰向けざまに尻餅をつかされ、無防備の肌を、犬の舌で舐めとられ、濡れた鼻頭で抉りまわされた。

人畜一体の妖しい戯れを、まのあたりにみせられて、年端の行かない新入生たちは、あるいは目を覆い、あるいは泣き叫んで、狂おしい昂奮状態に陥った。伊万里の白い肌を犬の足が蹂躪し、獐猛に牙を鳴らして、桜色の長い舌が、総毛立った皮膚に襲いかかるたびに、自分が齧りとられるような恐怖を覚えたらしく、悲鳴をあげ、伊万里に代って許しを乞うのだった。

――倒錯美の極致だ。

彦六は、犬の捕捉から逃がれる術もなく、あがき悶え、結局、犬の玩弄に身をまかせ、やがて、自分のほうから犬を挑発し、使喚するようなポーズをみせはじめた伊万里に、深い感動を覚えた。

洋子らは、ひとまず犬を引き離し、虚空に足を向けて跪いている伊万里を、俯伏せにした。顔を床に擦りつけ、臀を高くかかげたポーズで、ようやく平衡を保った伊万里は、犬ならずとも挑みたくなるような無残な艶姿を晒したのである。

「先生、すみませんけど、本番中、伊万里の頭を抑えていただけませんか？ あんまりあばれると、ワンちゃんのやつ、気が散ってインポになっちゃうんです」

と、明らかに企みのありそうな顔つきで、洋子ら三人が、やって来た。

まさかデモンストレーションには狩り出されはすまいと、多寡をくくっていたのが、まちがいった。彦六の動揺の虚について、洋子と明子は、有無をいわさず腕をとると、刑場の真中につれ出した。

そうして、目にもとまらぬ早業で、肘と肘とを括りあわせたベトコン縛りにすると、明子が前に回って、ズボンのベルトを抜いた。

「おい。ど、どうしようっていうんだ」

「先生にも、フレンチ・キッスのサービスをさせてあげますわ、この犬に……」洋子は、彦六と伊万里を見くらべながら、平然といい放った。

「ちよっと、まてよ。おい……」

と、衆人環視の中で、幼児が母親にされるように、明子の手でズボンを脱がされ、赤くなったり蒼くなったりしている彦六に、トキ子らは猛犬をけしかけて脅迫し、完全に抵抗意欲を奪った。

「あは、は……傑作やわ！」トキ子は、ステテコ姿の彦六に狂笑を浴びせた。「牝犬を同時責めにするなんて、前代未聞やね」

「肉の猿轡か。あーあ、あたしも、かまされ

てみたいよ」と、明子。

「あんたの口やったら、どっちでも同じこっちゃ。どっちやも、お、お、ぐち」

「いったわね、この艶なし娘」

と、『花と蛇』のズベ公みたいなセリフをぼんぼん交わしながら、明子とトキ子は、競争で彦六を裸に剥いていったが――。

「ひゃあ、先生かて、こどもやわア」

と、トキ子は、頓狂な声を挙げた。

彦六は、羞恥の火柱が脳裏を貫くのを覚えた――彼は包茎だったのだ。

トキ子の不遠慮な一言のおかげで、彦六は完全に役立たずになってしまった。ブリーフの中では威張っていたくせに、包まれる布がなくなると、彦六に似て小心者らしく、しよげ返ってしまったのであった……。

こうして今、自分のアパートに戻って来ても、無遠慮に嘲笑を込めて這いまわる無数の指先の感触が残っていて、彦六を不快にもしたし、悲愴にもした――ほんとに、不能になったんだろうか。

「おい、六さん、頬っぺたについてるぜ」

浮かぬ顔をして黙ってしまった彦六に、話の継穂がなくて困っていた浩介は、頬に残った口紅の痕をみつけて、ニヤリとした。

「え？ ああ……」彦六の反応は、間がぬけるほど鈍く、浩介をやきもきさせた。キスマークを発見されても、羞らいもせず狼狽もせず、依然として沈鬱な顔をしている彦六に、浩介は、むしろ畏敬の念を抱いた。

「どうもわかんねえな。ホルモン失調症なんだか、過剰症なんだか……」ホルモン失調症とは、彼らの陰語で、失恋を意味していた。「キスマークつけて、インポの話してるとみると、好きな子ができて、行為ができなかったということかな」

浩介の話ぶりは、まことに論理的だった。しかし、ほんの十日ほど会わないうちに、彦六が老けこんだせいなのか、浩介の単純なきめつけかたが、奇妙に、こどもっぽく感じられた。

――人間という奴は、複雑なもんだ。

加奈子に会い、伊万里のSM集会に参加して、彦六は人間性の限界をはるかに超えた無間地獄を垣間見た。彼女たちは、たしかに地獄の使徒のような異常人間だ。彦六は異常の世界に入りさえすれば、一切のフラストレーションが解消して、安住の地があるように夢想していたが、そこでも疎外され、いっそうフラストレーションを昂めたのは、なぜか？

「竜さん、おれに、たった一つだけわかることがあるとすれば、人生は複雑怪奇だってことだ。そして、おれは永遠のフラスト族として、常に、おいてけぼりを喰う運命にあるんだ」

「おい。キザない方は、よせよ。ははあ、わかった！ お前は、キスマークの彼女を縛ろうとして、ふられた。そうだろう？」

「ちがう、ちがう……」彦六は、うんざりしたという調子で、いった。「今日だけでも、おれは七、八人の女の子を責めたよ。ぴちぴちして、若くて、純真無垢な可愛い子ちゃんたちを……」

「嘘つけ！」
「嘘じゃない。嘘じゃないんだよ……」彦六は、むしろ悲しげに強調した。「充ちたりた不幸は、救いがたいと、いつか竜さんはいったけど、本当だな」

「こりゃア、ただごとじゃねえぞ」
と、浩介は膝を進めた。

彦六は、淡々と今日の出来事をものがたった。伊万里と加奈子の関係だけは、用心深く伏せたが、伊万里が本屋にラブレターを預けたことにすれば、話の筋は通る——。

「ふーむ。話六分としても、これは相当なも

んだ……」

浩介は、昂奮のあまり瞳をうるませて聞き入っていたが、大きな溜息をついた。

「確かに、話六分だよ。ただし現実には、もっと、ものすごい、人間性なんて消しとんじやうんだから。ベトナム戦争みたいなものだ」

彦六は、三井香苗の話を、もちだした。

写真撮影が済んでも、陰険な先輩たちは、一向に解放しようとせず、大きな鏡を持ち出すと、開股縛りの彼女を鏡面に曝して解剖学的な呼称を、一つ一つ覚えこませ更には「洗礼式」と称して、腔洗浄と高圧浣腸を施し、先輩に反抗した仕置きとして、両手片足吊りに吊りあげて、四人が交互に鞭の雨を降らせた。

「竜さん、限界以上に責めたと、不思議なものでね、泣きも笑いもなくなる。能面みたいに凝り固まっちゃうわけだ。この香苗って子も、おれが抱き降ろしてやったんだがお面みたいな顔して、口の中で、お母さん、お母さんで、うわ言いつてるんだナ。おれはつくづくアウシュビッツの獄卒みたいな気になったぜ……」

「へんな同情はよせよ、みっともない。たかがブルジョワ娘じゃねえか」と、浩平は直線

的な断定を下し、「どうせ、つまらねえブスだろ」と、ケチをつけた。

「いや、やせっぽちだけど、可愛い子ちゃんだぞ。奥村チヨっていうとこかな」

「だったら、うんと責めたてたがいい」と、どっちに転んでも、浩平は自説を主張する。

「辻村隆の哲学によれば、責めは愛だ。おれの説も愛ということには変わらないが、要するに憎しみに昇まった愛だ。美への憎しみ、富への憎しみ、体制への憎しみ、おれたちの人生を虚妄にしたものへの憎しみ……」

「いやあ、理屈じゃねえんだよ、竜さん。愛とか憎しみとか、そんなコトバになるようなことを超えてしまつて、人間の本性といったらいいか、業^{ごう}みたいなのが、ぶつかり合うのが責めなんだ……」

彦六は、横路美千子のことを、おもいだした——ちょっとしたグラマーの、岡田可愛ばりの娘だったが、この子の抵抗はものすごく容易なことでは刑場へ引き出せなかった。

「今日は許して下さい。軀の具合が悪いんだから、かんにんして！」と、縛り役の洋子に泣訴嘆願したが、結局、許されるはずもなく下穿きを剥がれた。彼女が泣いてたのむのも道理、生理日だったのだ。

血まみれの生理綿は、猿轡にかまされ、生理用タンポンを装填されて、写真撮影、名称呼称と、セレモニーは進行し、まさかとおもった洗浄まで強行された。

「洗浄器にたまった水は、血の色で真赤さ。それを、先輩と称する獄卒は、分けあって飲むんだぜ、ワインか何かのように……吸血鬼というか、野性への本能というべきか、おれの頭も混乱しちゃって、いいようがねえけど責めという世界の中じゃ、きわめて自然だったということだ……」

「いやあ、人間的だ。まさしく人間的だよ」と浩平はむきになって断定した。「おれが夢みていたフラスト革命は、原始への回帰なんだぜ。秩序もモラルも破壊して、人間性の源泉に、たち戻る……それは血だよ、メンスの血だ。女の胎内、女の子宮、女の子海……人間の生命は、そこに宿り、そこに戻るべきなんだ。すばらしいことだ。フラスト族の叛乱はすでに、はじまり、だ……」

やらせておけば、浩平の神がかった演説はいつ果てるともなく続くだろう。

かつての彦六ならば、その魔力にひきこまれて、たとえ、わからなくても合槌の一つや二つは、うったものだが、今の彦六は疲労困

憊して、ひたすら孤独を欲した。

「竜さん、そんなに叛乱がすばらしいものなら、お前も参加したらいいじゃないか。奴らの電話番号ぐらい、教えてやるぜ」

と、からかい半分にいうと、浩平は窺うような目つきで、しばらく沈黙考していたがやがて、「教えてくれ」と身をのりだした。――ピラニアみたいな女どもに、喰われちゃうがいい。

彦六は、ひどく悪魔的な気分になって、トキ子のマンションと伊万里の電話番号を、のろのろと教えだしたのである。

いかに飽食し、辟易したといっても、それは、ほんの二、三日のことで、彦六は、前にも増して熾烈になった責めへの欲求に、悩まされだした。トキ子のマンションの地獄絵図も、日がたつにつれ、だんだんに純化され昇華されて、やがて朧ろに霞む妖しい幻夢となつて、心の襖にしみこんだ。

乱取り責めと称して、柔道の乱取り稽古のように、新入生、上級生の別なく、手に手にロープを握りしめた、うら若い裸女たちが、互いに獲物を求めて縛り合いをするのが、その日のフィナーレだったが、この頃になる

と、新入生の潜在的な嗜虐性が喚起されたのか、まるでゲームでもたのしむように、弱者を求めてのしかかり、腕を捻じり、髪を掴んで、犠牲者の捕獲に狂奔した。

彦六は呆気なく洋子に縛りあげられて、ソファで仕切られた牢に抛りこまれたが、次々に押しこめられる全裸の麗囚が、彼の上につきみかさなり、肉の狭間に顔を埋め、ぐえた体臭を心ゆくまで味あわされたのも、今にしておもえば、甘美な体験だった。

プロレスのバトルロワイアル式に、最終勝者がその日のチャンピオンになり、敗者に対してどのような責めを加えてもよい特権をもつことになっていたが、この日は三井香苗の大奮斗によって、大番狂わせが続出し、ついに明子とチャンピオンの座をかけて争うところまで行ったが、明子の老獪さが一瞬の虚をとらえて勝ちを制し、野望空しく香苗は牢入りとなった。

彦六は、肘掛にふんぞりかえった明子の前に引き据えられて、口唇による愛撫を強要された。彼が舌尖をちろりと覗かせただけで明子は大仰に呻いて、身を振らせ、どちらが責めているのか、わからないような乱れかただったが、彦六にしてみても、こめかみに痛

いようにくいこんだ、両腿のむっちりした弾力や、彼の頬に擦りよせてきた内股の火のよ
うな熱さが、いつになっても抜け去らず、思
い出ただけで、黒い血が燃え滾った。

あれほど心配したインポテンツの一件も嘘
のようにかき消えて、彦六、独りになれば、
前にも増した逞しさを誇るかのようにだった。

彦六は一回性の不能だったのに安堵すると
ともに、あまりにも自分に似て、小心で内弁
慶なやつに、哀れみをもち憎しみを抱いた。
——お前は、永久に傍観者で未遂者なのか。
ぐずめ！

これは自分自身に対する詰問でもあった。
チャンスに恵まれなかった以前ならいざ知
らず、加奈子にあい、伊万里を知り、トキ子
をはじめ多くのうら若い女子大生たちにめぐ
りあいながらも、何の行動もできなかったの
が、うらめしくもあり、意気地なかった。

こどもの頃、彦六はつねに遊びの輪の外に
おり、日ねもす、こどもたちのあそぶのを、
眺め暮したものだ。格別あそびたくなかった
のではなく、遊びの輪に加わるキイが、どう
しても見つからない、ブキツチョな子であっ
たのだ。

必死の覚悟で敢行した女性遍歴の、不毛な

結果から推しても彼の性向は少しも変わって
いなかった。キイの見つからぬ人間なのだ。
SMという嗜好を、大人の遊戯として捉え、
あそびの中に身を投げかけて行く勇氣もなか
ったし、心の余裕もなかった。

彦六は、あまりにも、ひたむきに愛を夢想
し人生の伴侶を求めすぎたのだ。

しかし、幾たびか悦虐の極致を窺い見るう
ちにストイックな女性崇拜の信仰は無残にも
崩壊し、むしろ女性の赤裸々な本能、獣性の
うちに女性本来の至高の美が潜んでいるかの
ようにおもいはじめたのも、否めない心境の
変化である。

——三度目の正直だ。

彦六は、次のチャンスに賭けるつもりだっ
た。しかし、あいかわらず引っ込み思案で、
自らチャンスを開く気概に欠けていた。

加奈子の下腹れの天女のような顔をおもい
うかべると、恋しさがつのって気もそぞろに
なるのだが、正志クンの存在と、彼女の背後
に光る伊万里の眼をおもんばかって、迂闊に
手を出せぬ焦ら立ちを覚えた。

伊万里には、尚のこと、気がねがあった。

浩平に電話番号を教えたしまった一件だ。
ストリップ劇場の入場券も買えない浩平のこ

とだから、まさか単身のりこむようなことは
あるまいとおもったが、その後、浩平の家
に連絡をしたら、泊り込みでシナリオを書い
ていて、家には当分、帰らないという。

彦六は、本能的に『臭い』と、おもった。

「旅館じゃあ気が散って書けない」が、浩平
の口癖だったからだ。伊万里のところへ行っ
てるかもしれない、というのは根拠のない臆
測ではあったが、万が一にでも、伊万里のと
ころで例の奇怪なる哲学をやられたら、目も
あてられない、とそればかりが気がかりだっ
た。

そんな彦六を嘲笑うように、伊万里の方か
ら電話があった。

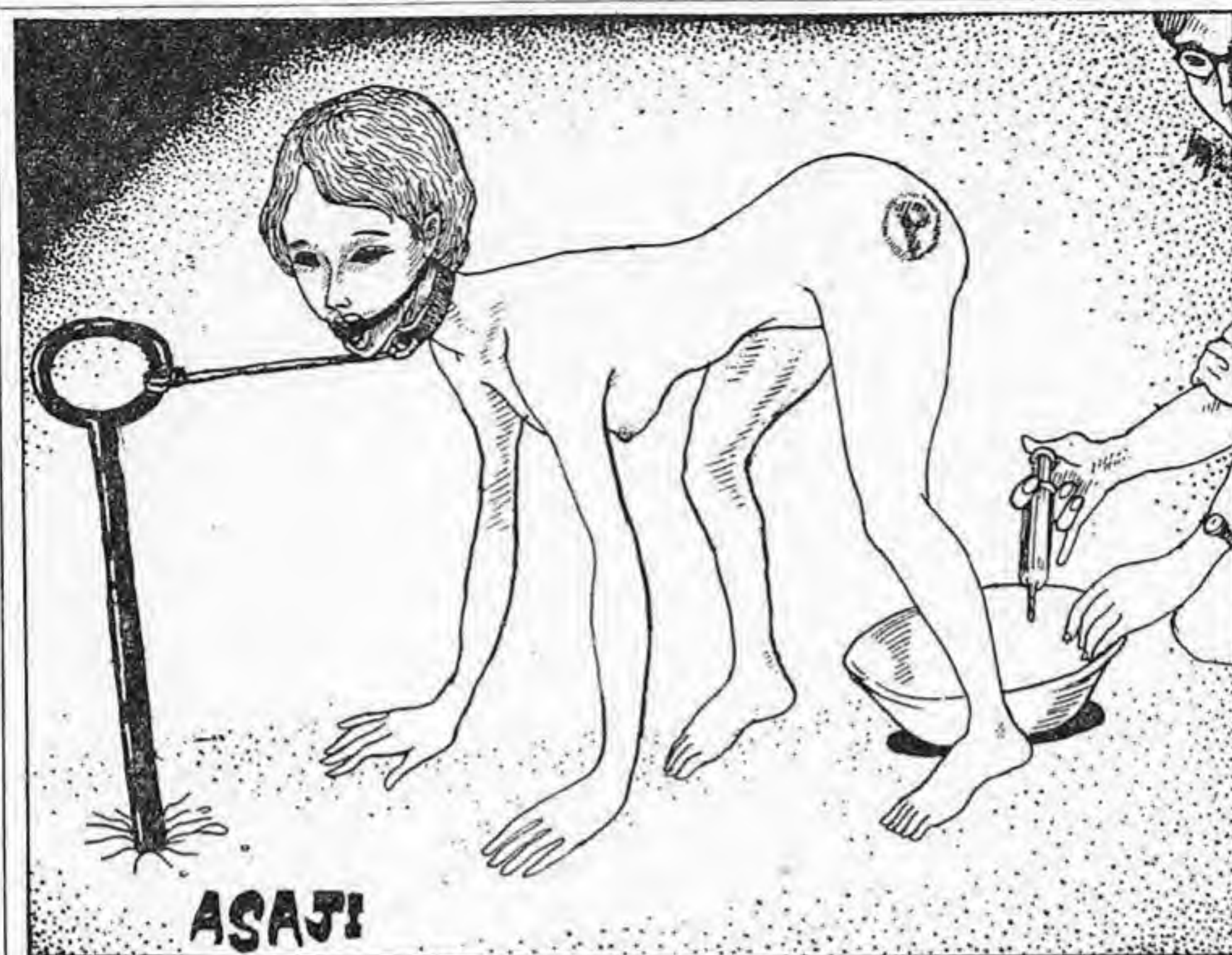
「先生の推薦して下さった奴隷、たしかに預
ってるわよ」

「奴隷……？」

「あら、そうじゃなかったの？ まア、どっ
ちでもいいわ。結構、いい線、行ってるんだ
から。相当おじさまらしいけど、先生よりも
可愛気があって、飼育してても面白いわねっ
て、いまトキ子と話してたところなの」

とんで灯に入る夏の虫とは、このこった、
と彦六は慨嘆した。まさかフラスト族の教祖
が、女子大生のペットに堕ちるとまでは想像

僕のイメージ画集『ペット手入れ』 室井 亜砂路



してなかったが、話の具合からみて、また、かすかに受話器に入ってくる男のくぐもり声からして、浩平が捕虜になったことは、まちがいなさそうだ。

「いまねえ、オッパイやってるの。先生、うらやましいでしょう」

と、底抜けに明るい伊万里の声。彦六は、ぐっとこみあげる嫉妬の情を噛みこらした。

「ほ、ほ……安心してよ、哺乳瓶で飲ませてるんだから。あたしとトキ子のリトル・ウオーターを、ミックスしてやってるの。うふ、ふ……おしめなんかしちゃって、机の下でハイハイして、なかなかいかすスタイルよ」

「いつから、伺ってるんです、浩平……つまり、その奴隷は？」

「先生とお別れした次の日。先生の身代りになるんだって、このこやって来たわ」

「反抗はしなかったですか？」

「ぜんぜん……いきなり縛ってくれて、手を後ろに回してね、それっきり奴隷になっちゃった。若い子に苛められるのが、うれしくてたまらないらしいの。例会のたびに、S・M・L全員で、ひどい目に合わせてやるんだけど、馬鹿みたいに従順……」

彦六にとっては、加奈子の正体を知った時よりも、衝撃的だった。自分にも、現在の浩平と同じ境遇になる可能性があり得た、ということで、直撃的驚愕と、恐怖と、嫉妬を、同時に体験した。

「ほら、先生にお電話してごらん」

と、伊万里にせきたてられて、受話器の向こうから唐突に、きこえてきた浩平の声に、おもわず耳をふさぎなくなった。

「ちえんちえい、ぼくちゃん、トキ子のママに、おちめ、きえいきえい、してもらってまぢゅ。ぼくちゃん、ママたちの、かわいい赤ちゃんに、なりまぢゅ……」

甲高い男娼のような声だった。

たちまち、伊万里とトキ子の哄笑が湧き、それにまじって、「いゃん、オカンチョ、ぼ

くちゃん、きらい！」などと、甘えるような
浩平の声。

彦六は、自分が侮辱されているようにおも
えて、「それじゃあ、伊万里さん、失礼」と
受話器をおきかけると、「あッ、まって、先
生」と、伊万里はコトバを継いだ。

「先生に、こんなに可愛いペット、紹介し
てもらったでしょ。だから、お礼というわけ
じゃないけど、今日は加奈子とこの正志ち
ゃん、あたしの実家に預けさせてあるの。よ
ろしかったら、あの奴隷、つかってやってい
ただけませんか？」

意外な申し出である。

「そうですか、お手数かけましたね。まア、
考えておきましょう」

と、わざと不気嫌な声でいうと、伊万里は
かなり真剣な声で、

「先生、ほんとに、あの女を、どうなさって
もよろしいのよ。あたしには、お荷物になり
だしたの。兄さんの遺産なんて、そういつま
でも背負って歩くもんじゃないわ。あの女に
は、意志なんかないんですから、先生のお気
持次第よ」

と、念を押して電話を切った。

彦六は、フーッと溜息をつく、自分の意

志とは関係なく顔の筋肉が緩み、抑えても抑
えても、しのび笑いがもれて困った。

——やったぜ、浩平。悪くおもうなよ。

六

接吻は、いつ果てるともなく、颯々と続い
た——。彦六にとって、このように甘美で濃
厚なヘヴィ・キスは、はじめてだった。

加奈子を拘束したものは、後手にかけて革
手錠一つだったが、浴槽の中で彦六に横抱き
にされていたので、抱き締めた腕が少しでも
弛むと、そのまま遊弋して行きそうな不安に
かられるらしく、舌尖をひしと絡ませて彦六
に縋りつくようにする風情は、妖艶で、しか
も可憐だった。

かつて指を銜えさせた時にも、その舌技の
完璧さに驚嘆し、欲情を唆られたほどであっ
たが、こうして舌と舌とを絡まりあわせてみ
ると、それは、みごとに練りあげられた至芸
であった。

彦六の唇を割って侵入した生温い甘美な肉
塊は、あるいは絞るように、あるいは這いま
わるように、彦六の舌の根までおしつっんで
ひたむきに蠢動し、音をたてて口中に溢れた
唾液を吸いつくすと、今度は口蓋を擦るよう

に叩いて、刺激の鮮度を昂めた。

彦六の舌先が、加奈子の巧みな誘いによっ
て、蜜のような唇門を潜って訪問しようもの
なら、舐り、抉り、わななくように歯を立て
たかとおもうと、舌の根も引きちぎるばかり
に吸引し、随喜の情を炸裂させた絶妙の舌技
に、彦六は、しばし陶醉境をさまよった。

兄妹二代にわたって、厳しい調教を施され
た結果なのだろうか。それとも、この女の持
って生れた性なのだろうか、加奈子は拘束さ
れると、かえって精彩を放ち、細目の及ばぬ
一点に、ありったけの至情を傾けてかきずく
いじらしさと凄艶さを、かね備えていた。

ぬめぬめとまつわりつく唇を、ようやく引
き離して、首に回した手を伸ばし、女の頬を
撫んで仰向かせると、いまだ恍惚境にあるの
か、かすかに睫毛をそよがせながら、捲くれ
あがった唇を顫らせていた。

「加奈子、好きだ、おれ……」

かつて美女イレーヌでリハーサルしておい
た、いささか紋切型の殺し文句を、彦六は夢
遊病者の如く口走り、瞑目した臉から、小鼻
をふくらませた鼻頭、豊かな頬、涎に濡れた
唇から顎へ、啄むようなキスの雨を降らせ
ると、加奈子も踊るようにして軀を寄せ、随

喜の泪を迸らせるのだった。

彦六は、事態があまりにも好都合に進展するので、なんだか空恐ろしい様な気もした。

加奈子を縛るまでは、死しても戻らじと、悲壮な覚悟をかためて、のりこんで来たものの加奈子の被虐に賭けた執念も凄まじく、彦六に不退転の決意がなかったら、拮抗する術もないくらいハッスルぶりだった。

海老に疊んでも、逆吊りに伸ばしても、厳しい縄目に身を竦ませて捻じりこみ、熱口ウで灼かれても、針束を突きたてられても、むしろ責めの矛先を甘受するポーズをとるべく身を振じらせ、いささかも怯まぬ氣力に、彦六が、たじろぐシーンもあった。

正午からはじまった責めも、黄昏どきになると、さすがに疲れ、小休止のために入浴することになったのだが、

「先生、手錠だけは外さないで」

と、加奈子に懇望されて、玉なす肌にも黒ずんだ革手錠をはめたまま、裸身の美女を抱いて、温湯に漬かる破目になったのである。

彦六は、ザブリと水音をたてて、加奈子を抱きかえした。膝の間に加奈子の尻を据えて跨がらせ、背後から抱き締めることにした。このほうが、疲れもしないし、壁面に填めこ

んだ鏡に、自分と加奈子の姿を映して、たのしめたからだ。額や頬にまつわる黒髪を捌いて、ほんのりと上気した加奈子の顔を覗けてやると、黒目がちの麗眸を輝かせて、しっかりと彦六の腕に抱えこまれていた自分の裸身を、まぶしそうに見つめた。

彦六も、いつになく自分の顔がいかめしく帝王然としているのに満足した。

「先生の縛り、ずいぶん、お上手ね」

鏡面の彦六に語りかけるように、加奈子は呟いた。彦六は、頬を歪めて嗤った。

「伊万里さんに、仕込まれたからな」

「ちよくちよく、伊万里さんには、お会いになるの？」

「うん……まあな」

彦六は、コトバを濁して、加奈子の反応を見た。一瞬、眉根をふるわせて、嫉妬めいた色をうかべた加奈子も、争う資格なしと悟ってか、睫毛を伏せ、

「あんなに若くって、きれいなんですもの。」

お会いになると、あたしのことなんか、忘れちゃいますよね……」

と、案外、さばさばと、いつてのけた。

「お前、いくつだ」

「二十二です」

「二十二……」彦六は、若そうだとはおもっていたが、まさかこんなに若いとは、おもいも及ばなかった。「すると、正志クンは、いくつのときの……」

「十七になったばかりでした。あたしは、宮井家の子孫を生むために、利用されただけなんです。こどもを生めば生んだで、宮井の家から抜けられなくなっちゃうし……どころか、奴隷の身分なんです」

「いまでも、いい人がいたら、かけ落ちするかね？」

加奈子はハッとした様子で、縋りつくような視線を、鏡面の彦六に絡みつかせて、

「やっぱり、だめです。伊万里さんて、恐い人だから……」と、呟いた。

「その伊万里さんが、ぼくらのことを、承諾したとしたら？」

「考えられないわ、そんなこと。……何かの罠かもしれないし……」

「君は、うたぐり深いんだね」

「だって、例のラブレターも、伊万里さんがあたしを苛めて書かせたものなんです」

「なんだって？」これは、初耳だった。「すると、あれは、心にもないことを、命令されて君が書いた……」

「ちがいます。本屋さんで、先生にお目にかかったことは、先生だって覚えておいでですよ。あたしの本心だったから、伊万里さんに見破られてしまったの……」

「見破るって、どうやって？」

「そんなこと、お知りになりたいの？」

「知りたいね。どうしても知りたい」

彦六は、気負って訊ねた。先刻まで、加奈子を責め苛んだ手が、おもわず伸びて、背後から、乳房を掴んだ。掌から溢れるくらい豊かな胸の双丘は、ハツ手のような指に揉みだかれて、醜く歪んだ。

「あたしの……軀にきいて……先生。あたしの軀が……白状したんですから……」

彦六の膝にかかった尻を握り、ずっしりと加虐者の胸に軀を預けながら、加奈子は、きれぎれに口走った。しかし、その口調には、やるせない悲しみと怒りがこもっていて、彦六の自制心を喚起した。

「ごめんね、加奈子さん。君は罪人じゃないんだ。ぼくだって牢役人じゃない。愛し合った二人だってことを、忘れてたよ……」

と、白い肩に手をおいて、慰めるように声をかけてやると、加奈子は突然、嗚咽をもらしながら、軀を捻じって彦六の上膊部に唇を

おしあて、

「先生……加奈子は……加奈子は……」

と、声をつまらせて、嚙り泣いた。

「加奈子さん。ぼくは、伊万里さんとは何でもないんだ。あれから、たった一ぺんだけ会うには会ったが、勿論、潔白だよ。君という人がいる限り、他のだれにも心を許しはしない。君だって、そうだったんだろ？」

と、いつてやると、加奈子は胸にもたれていっそう激しく泣きじゃくり「ハイ、ハイ」と、女学生のような返事を繰り返していたが、やがて気が晴れたのか、涙に濡れた瞳の奥に、キラッと星の輝きをみせ、

「先生を信じます、あたし……だから、先生を、あなたとよばせて下さる？」

と、急に鼻にかかった甘え声を出した。

こうなると、彦六は、からきし意気地がない。肩口まで羞恥で赤くなって、気もそぞろに加奈子を抱きあげると、せいぜい新婚気分を出すつもりで、

「さ、いつまでも漬ってちゃあ、軀に毒だ。

お前の軀を洗ってあげようね」

と、浴槽を跨いだのである。

この浴場も、亡夫の偏執狂的嗜虐心の産物なのだろうか。家庭風呂にしては珍しく八畳

敷もあろうかとおもわれるほどの広さで、贅をこらした岩風呂と、鏡ばりの壁面が異様なムードをかもし出し、天井からは装飾にみせかけた無数の鎖が垂れ下がり、あちこちにおもわせぶりの鉄環が埋めこまれてあった。

彦六は、とりあえず洗場の中央のゴムマットの上に、濡れそぼった加奈子を降ろすと、未知の大陸に迷いこんだ異邦人のように、浴場の中を見てまわった。

岩屋風のシャワー室があって、中に入ると一方に大きな姿見の鏡が埋めこまれ、その逆の側に滝を模してつくられた岩細工が施されており、ちょうど滝を形どった部分に滑らかな肌をみせた巨岩が鎮座し、その周囲を苔むした巖がとり囲んで、石組絵を成していた。

滝口にあたる部分に、排出孔が覗いているのを見ると、実際に湯水を流すらしい。滝壺には窪みがあって、排水口の金具が埋けてあった。しかし、注意深く観察するうちに、この滑り台にも似たつるつるの巨岩は人体を吊るして洗浄するためにあるのだと気づいた。

滝口には、鎖をからみつけた鉄鉤が、ひそんでいたのだ。風雅な岩に吊るして洗う——奇抜な創案である。

「加奈子、お前の旦那は、責めの天才だった

ようだな」

彦六は、岩屋の中に加奈子連れこんで、後手錠を前手錠にかけかえながら、いった。

加奈子は、フツと視線をそらせて巖の滝口をふり仰いだ、やがて太い吐息とともに、

「責め滝にかかるの、何年ぶりかしら」

と、呟いた。彦六はその機会をのがさず、

「やっぱり、死んだ亭主のことを、おもいだしてるな。おれは、亭主の替玉なのか」

と、責めのムードづくりのために、わざと荒い口調でいった。加奈子は怯えた目つきで

二度、三度、頭を振ったが、口を衡いたのは「加奈子は、悪い女よ。あなたを、心の中で

いつも裏切ってるのです。責めて。たくさん苛めて！」

と、被虐を願望するセリフだった。

加奈子に、かくしボタンのありかをいわせて、鉄鉤のついた鎖をガラガラ降ろすと、前

手錠の両手を頭上高く挙げさせて、手錠の鎖と鉄鉤を連結させた。ボタンがUPに入ると

鎖は軋みながら巻きあがり、つるつるの巨岩を背に、加奈子の軀も、せりあがった。

——人体滝だ。

彦六は、加奈子の前夫の心憎いばかりの美意識に舌を巻いた。

黒々と踞^{うずく}まる苔むした奇岩に囲まれて、も

ともと白い加奈子の肌は、いっそう眩さを増し、吊り下げた裸身の曲ねりのある輪廓線は

水の流れのように間断なく震えおののき、苔岩の雅趣と人体の生韻を組みあわせた趣向は

活きた水墨画の妙味があった。

彦六は、眉間に深い縦じわを刻んで苦悶する加奈子に、鼻をつき合わすほど顔をよせ、

「お前の亭主は、はじめに何をしたのだ？ シャボンを塗りたくって、馬のように洗ったのか？ それとも水責めにしたのか？」

と、囁きかけると、かすかに頭を振って、

「あなた……軀の中を洗って……」と、囁き返した。

「軀の中というと、浣腸だな」

加奈子は、はっきり頷いてみせた。

「裏向きにするのか？」

彦六が、豊かな裸身を反転させようとする

と、加奈子は、じれったそうに腰を振り、「ちがうのよ。もう少し上の方に、膝掛けの石があるでしょう。あそこにひっかけて」

と、上目づかいに、視線を走らせた。

彦六は、自分の迂濶さ加減を恥じた。なる

ほど、滝の中途より下の辺りに、突出した岩が二つ、滝をはさんで向かい合わせになって

おり、岩陰を覗くと、部厚い革を嵌めこんで半月形の鉄の施錠があつて、この岩の目的を明瞭に、ものがたっていた。

そのまま脚を抱えあげようとして失敗し、

鉄鉤を更に摺りあげて、あらかじめ岩に跨がらせて、施錠しておいてから、じりじりと鎖

を降ろすと、左右の膝掛け石に両腿を引き裂かれて、みごとに軀を彎曲させながら、加奈

子は開股のポーズとなった。

それは、苔むした黒い獣の腕に抱きとられた生け贄の女をおもわせた。また見かたによ

っては巖の陰に咲く大輪の名花でもあった。

彦六は、次の責めも忘れて、むくつけき巖石と、麗わしい女体をオブジェとした、超現実的な責め絵図に見とれていた。

「あなた……加奈子の軀を、早く……浄めてほしいの。きれいさっぱり……洗って……く

ださいまし……そうすれば、きつと……加奈子は、あなたのものよ……」

両手吊りの拷苦に加えて、両膝を抱えあげられ海老に折られているので、加奈子は氣息奄々となりながらも新しい苦痛を求めて、震

え声で囁きつづけた……。

彦六には、それが受難の聖女のように映っ

て、胸が疼いた。自らを傷つけて罪を贖おう

と悶えつづける瀕死の聖女のように……。

加奈子の指示に従って、巖の陰をまさぐると、イルリガートルの嘴口を、探りあてた。彦六は、これほどまで入念に責めの装置をつくりあげた男の執念に煽られる、おもいであった。

このイルリガートルは嘴口とゴム管の一部が覗いているだけで、多分、岩屋のどこかに内蔵されているはずの容器の大きさは分からなかったが、嘴口についたリモコンの円ボタンを押すと、どこかで電動モーターの唸りがきこえだし、かなりの圧力で大量の液が送りこめるようになっていた。しかった。

注入をはじめても、しばらくの間は、微動だにせず、加奈子は甘受していた。その盤石の構えをみていると、厳しい訓練を経た稀にみる強靱な腸の耐久力に驚嘆もしたが、角度をかえると、自動車に注油しているかのように、味気なくもあった。

ところが、一定限度を超えると、突如として開伸した臀肉を擦り合わせて、加奈子ならではの淫靡な蠢動を、みせはじめた。

「あ、あ、あなたァ！」

いつのまにか、茹でたように加奈子の顔は赤らみ、断続的に喘ぎながら舌たらずの悲鳴

をあげるのである。

「どうだ、参ったか？ 降参か？」

と、プロレスのレフリーよろしく加奈子を窺うと、歯をわななかせながらも、頭を振りつづけ、いっそう強く嘴口を呑みこもうとさえするのである。

——いったい、人か、獣か……。

ぐいぐいと嘴口を握る手に伝わってくる衝撃は、沖釣りで大魚をひっかけた時のように力強く、人間放れがしていた。

薬液は、すでに飽和状態に達したらしく、嘴口の間隙をぬって黄金色の液が、したたり落ち、自らの腿部によって圧迫された下腹は妊婦のように膨らんでいた。

「加奈子、もういいな」

「もっと、もっとよウ……あなた」

被虐に狂った加奈子は、哺乳瓶を放したがらぬ大食漢の乳児のようにダダをこねる。

——そんなに、いつまでも、支えてやっていられるかい！

彦六は、一瞬、興醒めがして、嘴口から手を放した。しかし加奈子は、まるで曲芸のよう、彦六が潰出を予想した嘴口をしっかりと支えつづけたのだ……。

かつて、「女って貧欲ね」と、やはり醒め

た表情をみせた伊万里の気持が、つくづくとしのべれた。こうして、もののみごとに開陳

したポーズを眺めていると、眼前にある不自然な双臀が、何か人格から離れた別の生物のようにもおもえてきて、不気味さを増した。

浩平が、いみじくもいったように、人間性の源泉は、奇怪にうごめく軟体動物なのだろうか——彦六の冷えた眼に、優婉で豊かな裸形も虚しく映った。

「あなたァ、加奈子……悪い、子。お仕置きよウ……ううん、まだ足りないの……もっとひどくウ……苛めてよウ、あなたァ」

加奈子は虚空に向かって訴えながら、嘴口を翻弄するかのように揺れおののかせ、股越しに見える鏡面の自分を、朧ろな目で見た。

彦六は、突然、その訴えている人物が、自分でなく、死んだ前夫であるように、おもえてきた……すると、加奈子を抱きかかえた巖の群れが、彼女に想いを残した男の幽魂にもみえて、なぜか慄然とした。

「うう、る……る、る……」

加奈子は、失語症に陥った様に舌を捲くりあげ、二声、三声、断末魔の悲鳴をあげた。

彦六は、それを幽暗の彼方に棲む、亡き夫への呼びかけのように聞いた。

決潰を直前にした臀肉の妙なるうねりも、自分と隔絶した世界の景観であった。

——エゴが踊ってるんだ。

加奈子独りが、悦楽を求めて別世界へ飛翔してしまつたような寂寞感の中で、嘴角が揉み落とされ、黄金の大瀑布が、滝壺に飛沫をあげて落下するさまを、彦六は、遠い出来事のように傍観していた。

黒檀の豪華なベッドに腹這いになって、彦六は悠然とビールを飲んだ。

彦六の目の前に、和服姿もあでやかな加奈子が、肘掛椅子のアームに跨がされて、鎮座していた。浅黄地に黒と赤の渦巻模様をあしらつたモダンなお召しの裾を大きく割って、生白い腿が目にも眩く露出した図は、浮世絵の責め絵のように、濃厚なエロスを発散していた。

肘掛板に懸かつた膝は、内側に折られて、両足首を括り合わされ、宙で胡坐をかいたように固定されてしまつていたので、身を振ることも、尻を落とすことも、ままならず、足指を反らせて苦痛をこらえるばかり……。

下半身の嚴重な拘束とは対照的に、帯から上には一筋の縄も施されていなかった。匂う、

ような衿足を覗かせて、いかにも上流名家の若奥さまらしく着こなした清婉な美女は、責め椅子にかけられた上に、ビールのお酌まで強要されて、優雅に袖を捌いて、彦六の突き出すコップに瓶を傾けるのだった。

いふなれば、半人半魚の人魚責めである。「どうだね、お姫さま。丸出しにして馬に乗った気分は……?」

彦六は、悪党を気取って、じろりと睨みあげる。加奈子は、今さらながら狼狽して、「そんなに見ないでよ。いじわる!」

と、小娘のように、羞らつた。全裸にして縄掛けすると、いかなる責苦にあつても、凜とした気性をみせて、むしろ潑刺としているのに、着衣の加奈子は、どこか頼りなげで、嫋々とした風情をみせる。

加奈子をはじめ、女子大のSM集会で、いやというほど裸の女をみせつけられ、秘奥の奥まで観察してしまつた彦六には、着衣に包みこまれた女らしさが、新鮮な魅力だった。「見ないでといわれると、余計、見たくなるのが、人情だね……」

酒に酔つたふりをして、彦六は、名残り惜し氣に加奈子の太腿に絡みついている着物の裾を、ばたばた煽いだ。

「いゃん、先生……」

加奈子は、泣きベソをかいたように顔を歪めて、自由になる手で潜りこもうとする彦六の頭を抑えた。

「抵抗する気だな!」

彦六は醉眼を血走らせて身を起こすと、割れた裾に手をかけて、ぐいと引き裂いた。帯が摺りあがり、臍のあたりまで曝け出して、加奈子の下腹は剥き出しになった。

白々とした柔肌に、青々とした剃りあげの跡が明瞭に区切られてあつた。浣腸責めの釈然としない気持を晴らすために、哭いて許しを乞う加奈子を見無視して、彦六が剃毛したのである。

「はおん。尼さんの頭も、こんな具合につるなんだろうかね」

彦六は、いくら眺めても見飽きぬ様子で、青磁色の輝きを帯びて滑らかな光沢をみせる生々しい剃り跡に顔を寄せ、果物用のフォークで啄んだ。

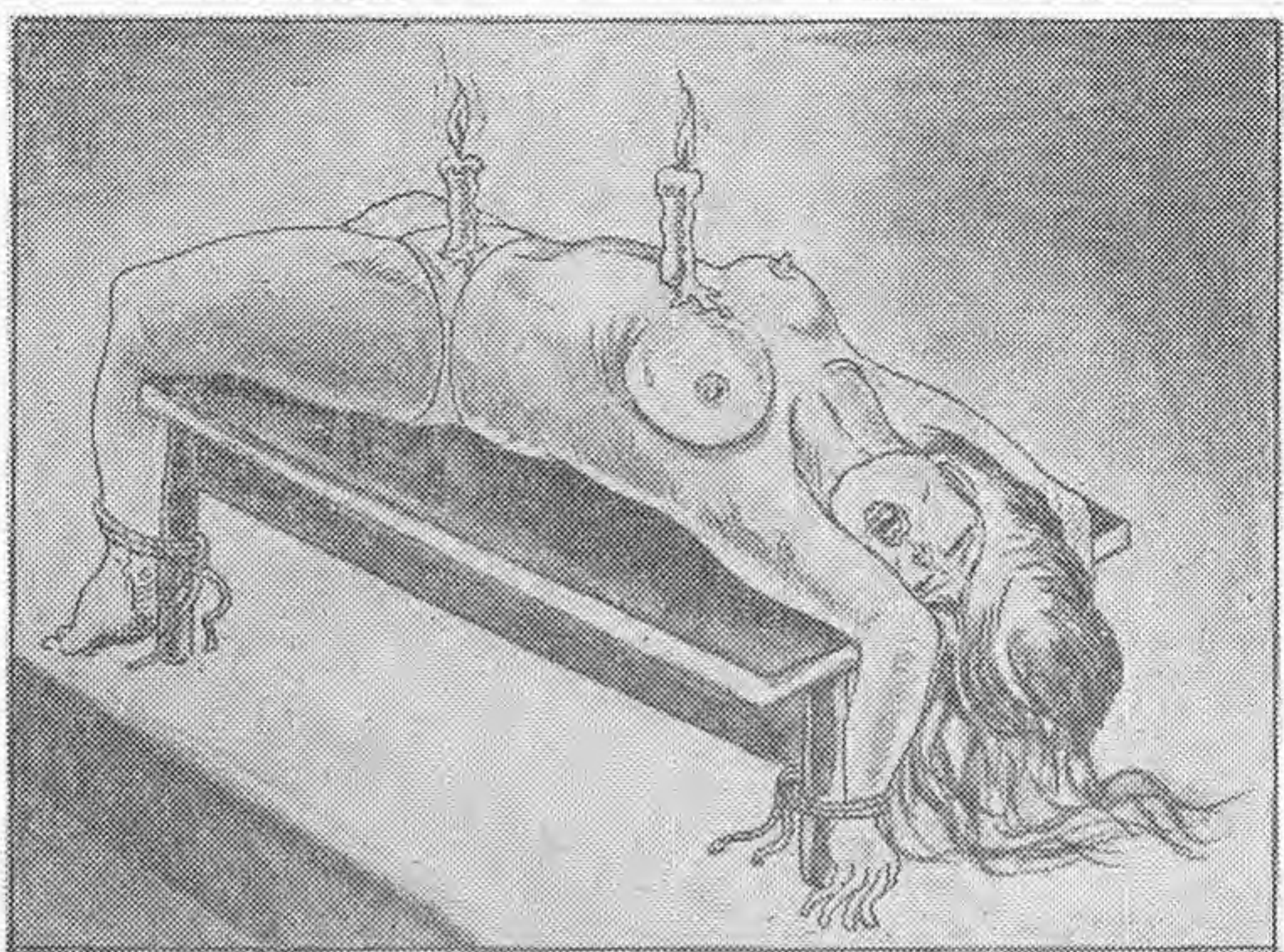
「悪趣味よ、やめて下さい」

加奈子は、手のやり場に困って、結局、剃り跡に蓋をした。

「こら、手をはなせ」

「いや、いや」

イメージギャラリー『熱 涙』府 和 糸 男



「いやもへったくれも、あるもんか！ 手をはなして、首の後ろへやれ。命令だ」

「命令でも、いやです」

「反抗したなッ。ようし、お仕置きだ」

彦六は、ゆっくりと足首を縛った縄を、ほどきだした。平衡を失って、片手を椅子の背にかけたものの、もう一方の手は、しっかり剃り跡を覆っていた。

クッションの厚いベッドの上に、荷物でも抛るように加奈子の軀を投げ出すと、彦六は、俯伏せになって逃げようとする白足袋を穿いた踵を掴み力まかせに手繰りよせた。

無抵抗の加奈子を縛るのに慣れていた彦六には、強姦魔のように和服の美女を襲い、格闘しながら縄を捌くスリルが、何ともいえなかった。

足首を捻って、加奈子を横転させると、力なく足掻く蠢

動をたのしみながら、肘を抱えこんで、はかない抵抗を試みる生白い腕をさぐり、強引に引きずりだして、踵と手首を括りつけた。

軀を反転させて、もう一方の手をとると、今度は従順に彦六に預けた。肘を内股に通させて手首を捻り、掌で足袋を掴むようにさせて足首と連結すると、いつか伊万里が獣姦責めにあった時のように、自らの腕で自らの脚を制すコサック縛りになった。

加奈子は、彦六に背を向けて、横臥したまま、久しぶりに味わった全身拘束の味を噛みしめている風だった。天井とベッドの側壁に填めこまれた鏡が、捕われた貴婦人といった風情の加奈子を、静かに映し出していた。

「先生……」おし殺した声に、情感がこもった。「今日は、捕まえた女として扱って下さいますわね。燃やすだけ燃やして、帰っちゃうなんて残酷よ……」

「加奈子……」

彦六は、バツタのように、加奈子にとびついていた。そうして、艶っぽい衿足といわず、紅らんだ頬といわず、舐めるように唇の愛撫を這わせながら、衿を開いて玉のような乳房を掴み出した。帯が摺りあがって、胸を圧迫するらしく、乳房は括れて歪んだ。

「裸にしてやろうか？」

「いいえ、このままで……」

「苦しいだろ、着たままじゃ……」

「いいんです。苦しめられながら、先生に抱かれたい……」

「加奈子……」

彦六は加奈子の顔に自分の顔を落とした。

唇を吸われながら加奈子の軀は、ゆるやかに半転して、仰向けになった。自らの腕を搾木として、加奈子の足首は宙に引きあげられ、むせかえるように豊艶な腰が、着物の裾を割って、水蓮が開くように屹立した。

彦六は、気もそぞろになって、下着を脱ぎ捨てた。疼くように燃えさかる、いまだかつてない隆々たる征服欲が、情欲とともに炎を吹き上げていた。

——童貞よ、さらばだ！

そう決意したとたん、彦六は、いささか感傷的になると同時に一抹の不安を抱いた。

耳年増というコトバがあるが、彦六の場合は覗き年増で、あからさまな女性の秘奥は、いやになるくらい眺めて来たが、実際行為は見たこともなかった。ブルー・フィルムやエロ写真の類にも縁がなかったので、完全に盲目だったといってよい。

神社の拝殿に忍びこむこどものように、おそるおそる加奈子の裾にしゃがみこむと、遅い豊臀にまつわりついた淡紅色の腰巻を摺り下ろした。かなり見慣れた光景ではあったが、不甲斐ないほど心が高鳴った。

彦六は自分の創造物を慈しむように、青い剃り跡に手を伸ばした。

「あッ、いや……」

加奈子は、自由になる膝を擦り合わせたがかえって軀が反りかえって、あられないポーズを曝け出す結果となった。

「おや……」

その時、彦六は異様なものを発見した。ちようど、恥骨のあたりに、黒ずんだ、みのようなものを見た。毛穴に塵がたまっているようなしみをたどると、それは文字となり文章となった。

——ボクノ ドレイ カナコ

と、たしかに刻みこんであるのだ。

「加奈子……」彦六は、五ミリほどの小さな文字を、指で突いた。「何だ、これは？」

加奈子は、高々とかかげられた足を、かすかに揺がせながら、声がなかった。

「刺青したんだ……」

迂濶にも、文字が小さかったことと、すっ

かり色褪せてかすれていたので、剃毛という行為に酔っていた彦六は、見のがしてしまっていたらしい。三行に彫りこまれた稚拙な文字は、どうみても、加奈子の亡夫が、素人芸で刻みつけたものに相違ない。

彦六の意識の中で、それらの文字は赤く燃えあがり、やがて青々と冴えた色彩を滲ませて迫った。陰火のような文字は、加奈子の所有者が自分であることを、誇示していた。

幽瞑の彼方から、亡夫の眼が注がれているような錯覚がした。嗤い声もした。嘲けるような声もきこえた。

——お前は、おれの身代りだ。たんと、たのしむがいい。ただし、加奈子の心は、おれが擱んでるんだってことを、忘れるな……。

またしても、彦六の心は屈辱にまみれた。

苦心惨憺、最後の洞門にたどりついたら、すでに先客が控えていたようなものだ。

あれほど淫虐をきわめた伊万里すら、加奈子の叢だけは聖域として手を触れなかったのも、兄への思いやりか、この屈辱感を味わいたくない自尊心のせいだったのだろう。

彦六は、急速に心が醒め、それと同時に、情欲も冷えてくるのを感じた。

疼きが消えたのも道理、幽鬼の呪いにかか

ったように、彦六が無意識にさぐった分身は意気地なく表皮の中に身を埋めていた。

——インポになった！

彦六は、むしろそれに愕然とした。

「あなた、どうなすったの？ 怒ってらっしゃるの？」

加奈子も横向きになって、彦六の顔を窺おうとしながら、陶酔から醒めた声でいった。

彦六は、呆けた顔で、おしだまった。

「あなたを、だますつもりはなかったのよ。

わかってちやうだい……あたしだって、辛いわ。一生、奴隷の印しをつけてるなんて……一生あの人から逃げられないなんて……あたしは、どうすればいいのよ！」

加奈子の頬を涕滴が列をなして流れ落ち、思いきり軀を彎曲させて、嗚咽の声を、おし殺した。

——どうすりゃいいのか、おれがききたいよ……。

彦六は、加奈子よりも大きく身を屈めた。

狂ったように揉んでも引いても、驚愕した亀の子のように頭を擡げぬわが分身を驚懼みしながら、彦六は、またしても味わう三枚目の苦惱に、目の前が暗くなった……。

「あたしたち……もう、だめね」

涕泣を途切らせて、加奈子の呟いた声を、彦六はきいたか、きかなかったか……。

エピローグ

半年ほどして、一通の封書が舞いこんだ。

意外にも、加奈子と浩平の結婚通知で、媒

酌人は、宮井伊万里の両親になっていた。

彦六は、嫉妬というよりも、あまりに複雑な人間関係に、疑惑の眼を向けた。そして、この結婚の背後には、伊万里の差し金があると睨んだ。

あれからというものの、加奈子とも伊万里とも没交渉だった。勿調、浩平も、いずこへか連れ去られ、彦六は完全に孤独だった。あんなに旺盛だった責めへの希求も、性欲の減退とともに嘘のように、かき失せ、彦六は、めつきり白髪のかきた頭をかきむしりながら、経理士試験の勉強に没頭するようになった。

しかし、こと加奈子に対しては、一つの負い目を背負っていた。それは、彦六自身の滑稽な挫折によって、加奈子を亡夫の呪いのかかった煉獄から救い出してやれなかった悔いであり、一方的に交渉を絶った原因が、加奈子にあるのではなく自分にあったことを知らさずにしたことだ。

彦六は、加奈子に電話しようとした。そして、卒直に結婚を祝福（これは、ずいぶん努力を要することではあったが）し、できれば挫折のわびをするつもりだった。

ところが、電話に出たのは、意外にも伊万里だった。

「あら、先生、どうしたのよ。いま、何してるの？」

伊万里の声は、あいかわらず、若々しく澄んでいたが、どこか蓮ッ葉な、投げやりな調子が滲んでいた。

「先生は、ウルトラCのサジストね」

挨拶もそこそこに、伊万里はしゃべりだした。

「ずいぶん味な責めかたをしないと、またまた、放っばり出して帰っちゃったんですってね。牝犬のやつ、めためたに荒れちゃって、あとが大変だったのよ。先生、先生って、責められるたびに、泣いて騒ぐんですもん。めろめろの甘ったれになっちゃった……」

「ほんとに、悪いことをしたよ」

「剃毛した跡、みたわ。お兄さんの刺青みて怒っちゃったんですって、先生？ だらしないな、純情可憐なサジストには、手を焼くわね。あれから奴隷のやつ、刺青の上にお灸

をすえられると、よろこんでるわよ。灼けただれれば刺青が消えるとおもってるのね。先生に見られたのが、よっぽどショックだったらしくて、お灸責めだけは、どんなに酷くやられても、失神するまでがんばってるわ……先生に苛められてるみたいな気がするんでしようね」

彦六は、おもわず口を噤んだ。

責め椅子の上で身悶えた、和服姿もあでやかな加奈子の姿が、幻夢となって胸をよぎった。

「未亡人の慎しみも忘れて、色気狂いみたいになっちゃったから、あたしの雄奴隷と結婚さすことにしたわ。これなら管理が行き届くもんね。先生に預けるつもりが、また背負いこまされて、えらい苦労やわ。いまも責め部屋で、シックスナインの稽古させてるの……ふ、ふ、面白いわよ。責め部屋に、切り換えて、なつかしの声の対面させてあげましょうか。加奈子のやつ、ハッスルするわよ」

と、伊万里は彦六の気を引いたが、彦六は惘然として電話を切った。

——畜生、なんてこった！

今度という今度は、欲求不満の火の玉となった。間が悪いといってしまうには、あまり

にも運命的すぎる……青々と剃りあげた跡に艾の煙をくゆらせて、必死になって贖罪をねがう加奈子の姿を想像すると、いても立ってもいられなくなった。

それは、やり場のない怒りだった——。

結婚通知を、ずたずたにしてみても、嚴肅な事実のほうは消え失せるはずもなかった。

珠玉にもかえがたい（と、おもったから、自分のほうから手を引いた）加奈子が、えりにえって、彦六の無二の親友、しかもつい半年前まで、ともにフラストレーションをかこちあい慰めあった同志に、犬のように譲渡されるとは、容認しがたい破廉恥行為だった。

もとはといえば、自分の責任かもしれないが、余人ならばともかく、浩平にだけは、渡したくなかった、というのが、偽らざる本心だった。

美女イレートを抱き、自淫に耽ったところで、ざっくり口をあけた傷痕は、癒せるはずもなかった。

加奈子の豊艶な裸身を知りつくしてしまっただけとなつては、イレートは、本来のたんなるゴム人形に還元してしまった。

どうして、自分独りが、ゴム人形に、しがみついてなきやならないのか——。

SMという異常世界に飛びこんでも、彦六だけは、孤独だった。いや、余計者だった。社会の陽の部分でも疎外され、陰の部分にまわっても置いてけぼりをくって、いったい自分は、どこに棲息すればよいのか？

彦六は、三十五年の人生を虚妄にした全てを憎んだ。憎しみのるつぼの中で、今や森羅万象を敵にまわしても、壮麗な大叛乱をおこさずにはすまない、怒りの火柱が立ちのぼるのを覚えた。

——ようし。おれは、全世界を縛りあげ、鞭打ってやるのだ！

はじめじめした万年床の中で、そんな想念を燃やしていた時、突然、二人の刑事がやってきた。

「畑彦六だね。婦女暴行、脅迫の容疑で逮捕する」

一言の弁解もできぬうちに、若いほうの刑事が、ずかずかと上がりこんで押入れの襖を一気に開いた。

美女イレートを先頭に、浩平から預った春本、艶書、秘具、責め写真の類が、どっと雪崩のように落下した。

刑事たちは目を合わせて頷き合い、確信をもって彦六の腕をとった。

N署の日あたりの悪い調べ室で、訊問にあたった刑事からきいた容疑のあらましは、こうであった――。

三井香苗という女子大生が、スポーツカーを運転中、誤って事故死を遂げた。

遺族が遺品を整理していると、香苗の定期入れの中から、あさましい姿で緊縛され、男に髪の毛を掴みあげられている写真が出てきた。

香苗の父親は政界の有力者であったので、娘の受けた暴行凌辱の事実を告げる、この無残な写真をみて激怒し、ただちに告発の手続きをとった。

さっそく、香苗の交友関係が洗われて、あつてなく、犯人の目星は、ついた。

何人かの親友が、同じ男に暴行されている写真を刑事に示し、一様に「畑先生と名乗る男に、暴行の限りを尽くされた」と証言したのである。

「それで、宮井伊万里という学生も、調べたのですか？」

五十がらみの風采のあがらぬ捜査主任に、彦六は、おそろおそろ、訊ねた。

「勿論さ。宮井さんというお嬢さんは、街でお前に誘惑されてだ、自分が暴行されたばかりか、

りか、友達を紹介しないと生かすの殺すのと脅迫されたので、仕方なしに三井さんのお嬢さんたちを、お前に会わせたいと。まず、こんなところだろ……」

「それから、三浦トキ子という学生のマンションも調べましたか？」

「こいつ、警察官をつかまえて、訊問する気か！ 勿論、調べはついとる。お前が三井さんたちを暴行した場所だろう。三浦さんも、黙ってなきやあ両親に報告して、学校に行けなくしてやるって、お前から脅迫されて、恐ろしかったと泣いていたぞ……実際、罪つくりな奴だ、お前という奴は！」

社会の正義を守る公明正大な捜査主任は、卓の上に置かれた空気の抜けた美女イレーヌを、さも汚ならしげにつまみあげ、

「三十五にもなって、何をやっとなんだ、お前は……こんなヘンタイ性欲者は、みたことがないぞ。ゴム人形とでもやるつもりで、前途のあるお嬢さんたちを、ひどい目にあわせたのか？ 社会がおかしくなると、お前みたいなヘンタイの癡癡野郎が出てくるから、油断も隙もならん……」

と、彦六の前へ抛ってよこした。くしゃくしゃになったイレーヌは、ところどころ

ころ絵具も剥げ、白く乾いた精液が、点々と滲みついていて、なんともはや、無残な末路だった。

彦六は、息もつまりそうな羞恥に、五体がわなないた。

その日は、留置場泊まりとなった。デモで規制され逮捕されたのだろう、血まみれになった学生たちが、所せましと押しこめられていた留置場の片隅で、彦六は小さくなった。

――結局、おれ一人が悪人になった。

彦六は、クスクス笑いだした。

「何がおかしいんですか！」

コトバつきは丁寧だったが、目を血走らせた髭もじゃの学生が、噛みつかんばかりの恐ろしい権幕で睨みつけた。

「すみません……」

笑いを途中で凍結させたまらない顔で、彦六はあやまり、鉄格子を仰ぎながら、心中で呟いた。

――叛乱は終わった。鎮圧されたんだ。すると、猛然と眠気が襲ってきて、彦六はつづけざまに、あくびを噛み殺した……。

マゾヒスチック・レディ

石原道代の
四楽章

ロマン派生

第三楽章 メヌエツト

『先日はお世話様でした。素敵なアバンチュールでとても楽しい一日でした。あれから数日は、ピアノのレッスン中にもふと思い出して頭がボーッとしたり、ひとりで顔を赤らめたりしていました。貴方様はいかがでしたでしょうか。なんだか一寸遠慮なさっていたようで、十分御満足頂けたかどうか、気にして居ります。貴方様のお好きなようになさって下さればいいのに。私は貴方の女囚です。どうぞ色々と命令して下さいませ。また責められる日が待遠しく、カレンダーに印をつけて一日何回も眺めて居ります。哀れな女囚道代より』

私達はまるで初恋の時のようにしばしば手紙をやりとりした。普通便では間に合わなくて、盛んに速達でやりとりをした。電話ではあまり立ち入った内容を話すことは出来なかったし、手紙を書くこと自体がとても楽しかった。初めは他人行儀で、万一他人に見られても困らない程度の手紙だったが、他人の目に触れる心配がないとわかると、だんだんとひどい内容になって来た。

二人称も、貴女から君に変わり、道代と呼

び捨てになり遂にお前に変わってしまった。手紙というものは面と向かっていないだけに会話より一層感情がむき出しになり、口では云えないようなことも、平気で書いてしまう傾向がある。昔、だれかが『熱烈なラブレターは、むしろ恋の終わりである』などと云っていたが、確に熱烈すぎるラブレターは実際に会った時とのイメージに落差を生じてしまう怖れがある。

私は前回のプレーでは、かなり思い切って振舞ったつもりだが、それでもどこか心の隅に、道代に対する敬意というか遠慮があったのは事実である。それを道代は責められながらも敏感に感じとって『遠慮せずに思い切り責めて下さい』と手紙に書いて来たのは、彼女のMがもっともっと激しいものなのか、或いは私を完全に満足させたいというサーヴィス精神なのだろうか。

そこで私は、次の手紙に二つ三つ、要求を書き入れた。

『女囚道代は次のお仕置日には、黒ストッキング一足。胡瓜、太、細、二本。その他、道代の所蔵する拷問用具は、すべて持参して供覧すべし。拷問奉行より』

黒のストッキングは良いとして、二本の胡

瓜は本当に買って来るだろうか。また買う時の道代の気持はどんなものだろうか、想像するだけで楽しかった。

何回かの手紙によるプレイとでもいうものの、往復の後、やっと待ち兼ねた三回目の現実のプレイの月が、やって来た。

○

「こらっ、注文しておいた品は、忘れずに持って来ような」

「さあ、知りませんよ。そんなご注文を頂きましたかしら」

道代は、いたずらっぽく笑って小首をかしげていた。

「こいつめ、とぼけると承知しないぞ。さあ神妙にして、お上に申しつけの品を、素直に差し出すのだ」

「だって、知らないんですもの。一体なんのことですか」

「まだ、とぼけるな。よし、神妙にしないと痛い目に合わせるぞ」

私は道代を着衣のまま後手に手首だけをハンカチで軽く縛った。

「さあ、お前の持物をすっかり調



べてやるから、ここに持って来い」

「だって縛られちゃったから、持って来られ

ないもの」

「口でくわえて来るんだ」

「それじゃあ、くわえるからここまで持って来てえ」

「こいつめ、女囚のくせに甘ったれるんじゃない」

ピシヤリと道代の頬を叩く。軽く叩いた割に大きな音がして一寸びっくりする。道代はヨロヨロ立ち上がり、自分の手提げ袋を口にくわえて持って来た。その中には大きな紙袋に入った荷物があつた。

「こんなに沢山、持ってきたのか。

何が入っているんだ」

「お願いいっ。私が、お風呂に入っている間に中味を調べて」

道代は自分の目の前で荷物を見られるのが恥かしいらしい。甘ちゃんの私は、すぐに道代の後手のハンカチを解いてやった。

道代は逃げるように風呂場にかけて込んだ。その紙袋はセロテープで嚴重に包装されていたが、出て来たものは、まず注文しておいた胡瓜が二本、続いてシリンドー式とゴムポンプ式の浣腸具が二種類、中にお湯を入れるというゴムのこけし人形、そ

れに皮製の拘束具一式等だった。私は、これは亡くなった道代の夫が遺したもののかなとも思ったが、それよりも何となく、道代自身が手に入れて、自分で使っているもののように思えて仕方がなかった。

風呂から上がって来た道代は、自ら黒いストッキングを、はいて出て来た。

黒いストッキングで覆われた足と、それより上の部分の肌の白さが、鮮かなコントラストを示し、ひどく肉感的なムードを、発散する。西洋の娼婦は、必ず黒いストッキングをはくというが、まさに黒のストッキングをつけた裸体は、男心をとりけさせる魅力が一杯にあふれている。

早速にプレイ開始。

部屋には丁度、良い具合の柱があつた。私は道代を立ったまま、柱に縛りつけ、白布で目隠しをした。足も揃えて縛って見たが何となく迫力が出ないので片足を後に吊り上げてみた。(写真①)

そのままの姿で鳥の羽根を使って攻撃を加えたが、不安定な姿勢の故か今一つ気分が盛り上がらない。そこで柱を背負ったまま敷居の上に尻をつかせ太股に縄をかけてぐっと吊り上げた。その上、更に足にも縄をかけて左



右にぐっと大きく上げた。思わず道代は頭を下げて顔を伏せるが、大切な所はワイドオープンの状態となってしまう。少なからず露出傾向のある道代は自分の意志でなく他人の意志で無理矢理に開かされることに、強い快感を感じているようだ。私が何も攻撃しないうちから息を荒くしている。

私は鏡台を動かして来て、道代の正面に据えると、道代の側面から、鳥の羽根や、兎の毛皮を使って、ソフトに優しく責め立ててやった。道代は、僅かに動かせる頭だけを、やたらにふるわせて身もだえた。私は責めのあい間あい間に、いろいろなアングルから、その姿を狙い、何枚もの写真をとった。その度に道代の表情が色々と変化するのが楽しかった。(写真②)

柱から解き放した道代を菱縄に縛り直し、ベッドの上に押し倒した。ベッドの向こう側には大きな鏡が壁一杯にはめ込まれていたから、道代自身にも自分の縛られかたが、よく見えて好都合だった。私は前回のプレイの時に写した写真を、縛り上げたままの道代に見せてやった。

道代は「いやあん」とか「恥かしいわあ」などと云いながらも目を輝かせて、自分の縛

られた写真に見入っていた。

「これは、あまりにもひどい写真だから、見せないでおくか」

「ずるいっ。全部、見せてくれるって約束じゃないの」

「でも、ひどいぞ、これは」

十一月号に載せた写真のノーカット判で、それこそレディが見るべからざる写真だが、道代は息を殺して見ている。

「顔が写ってないと、よけいに、いいんだけれどなあ」

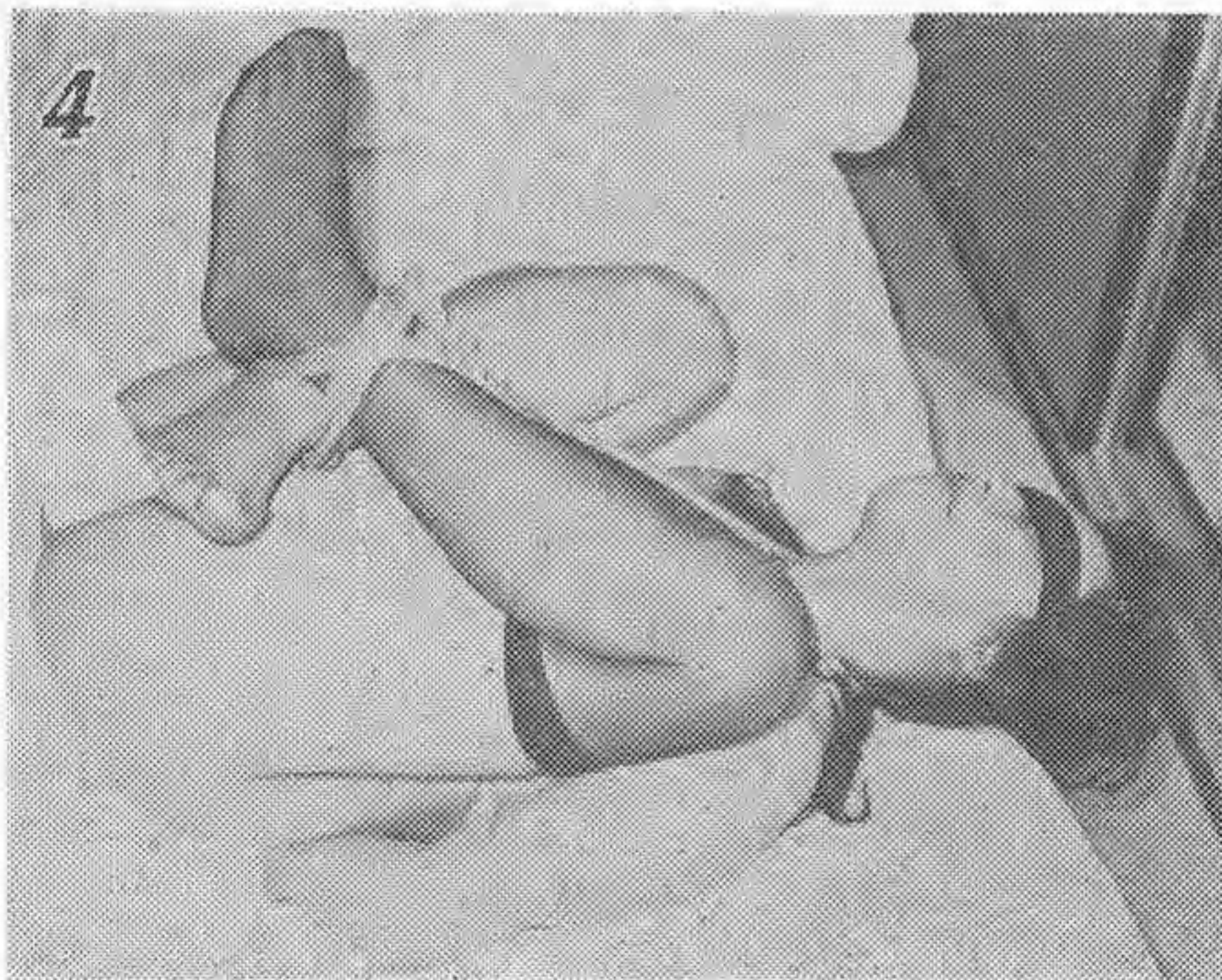
「冗談じゃない。顔が写っているからこそ、いいんじゃないか。折角の美人が首なしじゃ仕方がないし、誰の写真だか、わからなくちゃ、興味半減だよ」

「だって、当人は、やはり恥かしいわよ。でも、いいわ」

自分のあられもない写真を見たり鏡に写っている縄つきの自分の姿を見たりしているうちに、道代はすっかりナルチズムに浸っているようだ。(写真③)

私は道代のストッキングを片方だけ脱がせるとそれで目隠しをした。薄いシームレスなので、目隠しを透して多少は外が見えるようだ。

そうしておいて、両足を交叉させて縛り上げ、縄尻を首にかけてひきしぼった。えび縛りになった道代を



ベッドの中央に寝かす。そこは普通に寝れば丁度、腰の位置にあたり、ベッドについているボタンを押すと、そこだけが適度なスピードで持ち上がったたり下がったりする仕掛けになっている。

私は、道代の尻が丁度そこに当たるようにしておいて、まず道代が持参した胡瓜をとり出した。

「おい。これは、よく洗ってから持って来ただろうな」

「知りません」

「洗ってないと、農薬なんかがついて、後で腫れ上がるぞ」

「……」

「まあいいや。ところで、サイズのほうは合わせて来たろうな。これはまた随分と太いよ。うだが、買う時に八百屋の店先で、ちゃんと合わせてみたか」

「いじわる」

「それに少々曲っているけど、このカーブの具合も、よく測定してから選んで来たんだらうな」

私はベッドの上下するのを止めておいて、胡瓜をとり上げた。

太い方のは、サイズもカーブもぴったりの

のか、スムーズにおさまったが、細い方のは、なかなか上手く行かない。どうしても、はじき出されてしまう。

「こらっ。自分の好きなものを、どうしてそんなに嫌がるんだ」

私は道代の見事なヒップを平手でピシャピシャ叩きながら作業を続ける。

「だって、こんな形に、縛られると、あっ、あっ、無理だわっ。痛いっ」

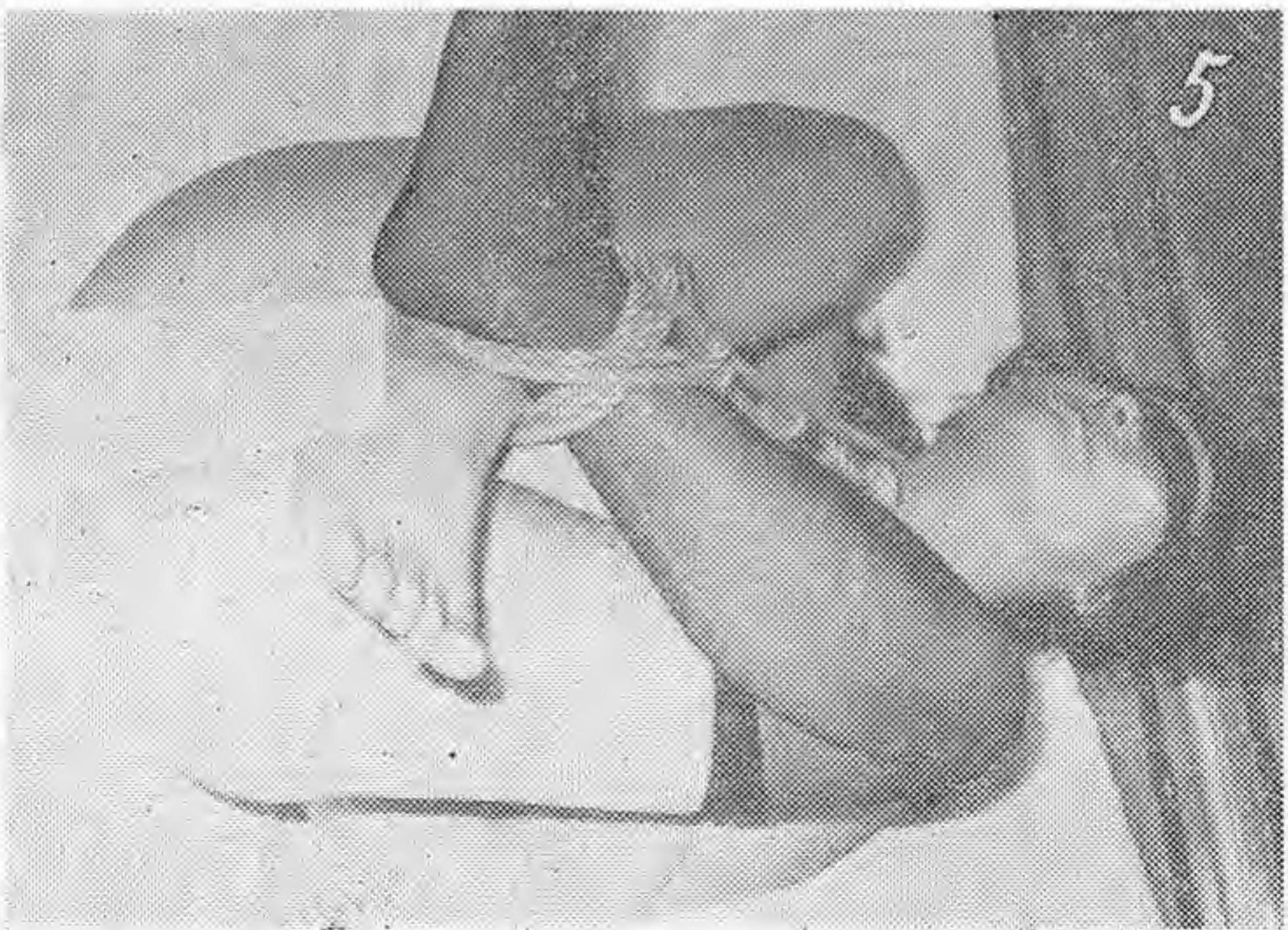
私は少々強引に計画を押し進めて、再びベッドのスイッチを入れた。

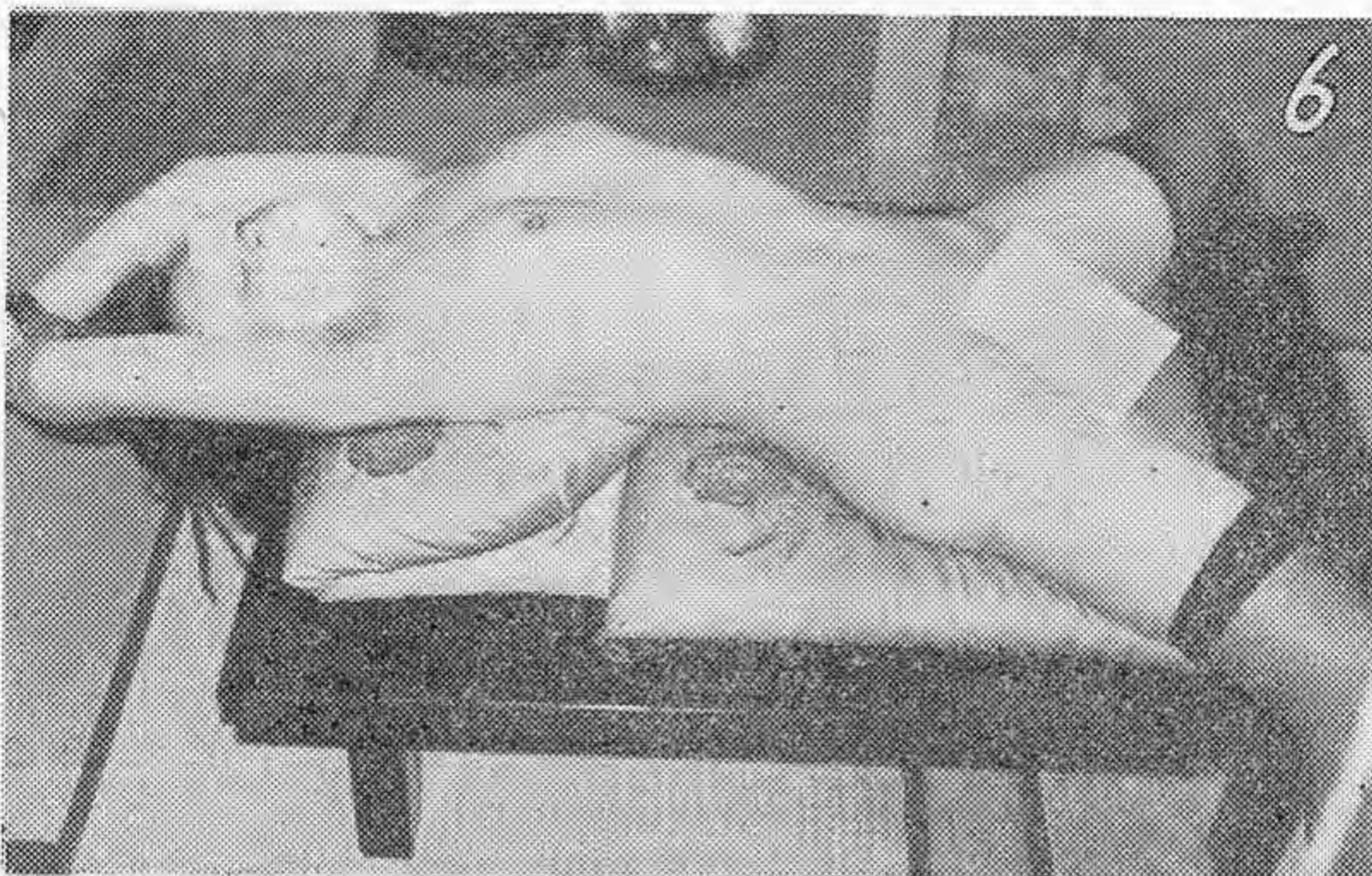
ガクン、ガクンと揺れるベッドにつれて、道代の挙げる声が次第々々に大きくなる。私は枕もとについているラジオのFMのスイッチを入れると、何やらオペラの aria が流れて来た。そのソプラノの絶叫のような aria が、丁度、今の道代の燃焼状態に、マッチしているようだ。

更に、ベッドの別のボタンを押すと、ベッ

ドは全体がレコード盤のように、ゆるく回転を始めた。

ベッドの回転につれて、尻尾の二本あるメ





ス犬の姿態が、あらゆる角度で壁の鏡に写っ

た。えらくモダンで豪華なベッドや調度品と

大柄で美しい女体に較べて、あまりにも粗野で、場違いな二本の胡瓜。そのコントラストがユーモラスといえバユーモラスだが、不思議なエロチズムを発散した。

ナルチストの道代も、もう自分で自分の姿を鏡の中に見ようとする余裕もなくなったらしく、ウツ、ウツと低い呻き声を上げ、身体中から汗を絞り出していた。(写真④)

私はベッドの上に立ち上がったたり低い位置にしゃがみ込んだりしながらストロボを光らせた。

ふと気がつくと、またもや細い方の胡瓜はベッドの上に落ちていた。胡瓜は汚れてもいないし、さして臭いもしなかった。

私はベッドの動きをとめると、罰としてそのままの姿勢で浣腸をしてやることにして、道代が自分で持ってきた一〇〇ccの浣腸器を見せつけてから、目の前で微温湯を入れ、ゆっくりと注入してやる。少し時間を置いて、一回、また一回。三〇〇cc

が体内に入ったが、まだ降参はしない。

前回の経験から、道代はかなりの大量に耐えられることは解っていたが、しかし、この場合は今まで散々責め上げた上、えび縛りのまま行方浣腸だから、それほど我慢は出来ない。その上あれだけきつく縛ってあるので、便意を訴えてもすぐには縄は解けない。万一粗相しては大変だと思つと、つい手加減してしまう。(写真⑤)

更に二〇〇ccを追加したところで、足の縄だけをといてやった。えび縛りが苦しかったか、道代は流石にぐったりしているが、それでも、まだ我慢している。

「どうだい、こたえたか」

「ウーン、いじわる。少しずつ何回もやるなんて、ひどいわ」

「一回に、どかんとやるんなら、ひどくないのかい」

「ムニャムニャ、でも、いいの」

「何がいいのかわかんないね。でも、あまり我慢すると身体に悪いから、トイレに行っておいで」

「ええ。じゃあ行ってきますから、縄をほどいて」

「足の縄は、といてやったじゃないか。それ



「嫌っ。それじゃ行かない。身体が悪くなるまで我慢する」

「じゃあ我慢出来ないように、もう少し追加してやる」

私は後手に縛られた道代の身体を私の膝の上にうつ伏せに寝かせ、手早く二〇〇cc追加してやった。これには、さすが強情我慢の道代も遂に降参し、後手に縛られたままトイレに向かった。

第四楽章 フィナーレ、プレスト

フィナーレとなった日は、意外に早くやって来た。

それは、五月下旬の、もう少々暑いぐらいの日だった。例によって、速達のラブレターをやりとりしていたが、道代の返事が、やや遅れ気味になって来たことが、私には、いささか気になっていた。

その日の道代は、定刻より二十分間ほども遅れて来たのだった。いつもは、きちんと時間を守る道代だっただけに最初から一寸、嫌な感じがした。

それでも、前回のホテルの柱の具合が気に入っていたので今日は吊り責めを道代に予告しておいてあったのだが、道代は、私が別に注文したわけでもないのに、自ら進んで黒のストッキングを持参していた。

私は黒のストッキングだけにフェチズムを感じるわけでもないが、道代の、このサービス精神が、とても嬉しかった。しかし一方では、あまりのサービス精神が、お互いのデリカシーの中で、いつか重荷になって来はしないかという不安もあった。しかし、そんな不安は、プレイが始まると、すぐに、ふっとんでしまうのだった。

まず手始めとして、テーブルの上に座布団をのせて道代の料理台を作った。それから、黒のストッキングだけの丸裸にむいた道代のヌメヌメした女体を、テーブルの上に仰臥させ、両手を頭の上で一緒に縛り、その縄尻を柱につないだ。

両足を、いやと云うほど開股させてテーブルの脚に結えつけてから頭の方へ回り、ガーズをまるめて口中にギッシリと詰め込み、その上から厚く折ったガーゼで、きつく猿轡をかませた。黒いストッキングで白いトルソーが一層、目にしみる。

で十分だよ。あとは始末してやるから、そのまま行きなよ」

例によって、二本のバイブが道代を責め、

早くも一汗かいた道代を、カメラに納める。どうしたわけか今日は、写真をとるのが、わずらわしく感ずるぐらい急速にプレイの中に没入して行く。(写真⑥)

あまり最初からこちらが燃え上がってしまったのは後が続かないので、あわてない、あわてないと、自分に云いきかせながら次のポーズに移る。

寝室との境にある襖をとり外すと、その鴨居が何かと役に立つ。道代の両手を万才型に縛って鴨居に結びつけ、テーブルの上に腰をかけさせる。膝の上には別の縄をかけて吊り上げ、おまけに足までも別に縛って、左右にある柱に結びつける。丁度、くもの巣にかかった蝶のような形となった。

道代の正面には、例の大きな鏡が壁にはめ込まれているので、道代は自分自身のこの蝶化の姿と、真向から御対面遊ばされているわけである。伏し目勝ちにしてはいるが、チラチラと上目使いに、鏡の中の自分を見ているのが、わかる。「どこを見ているんだい。ここかな。それともその目付だとこっちか。いや、や

っぱりここだな。そうだろう。自分のだから

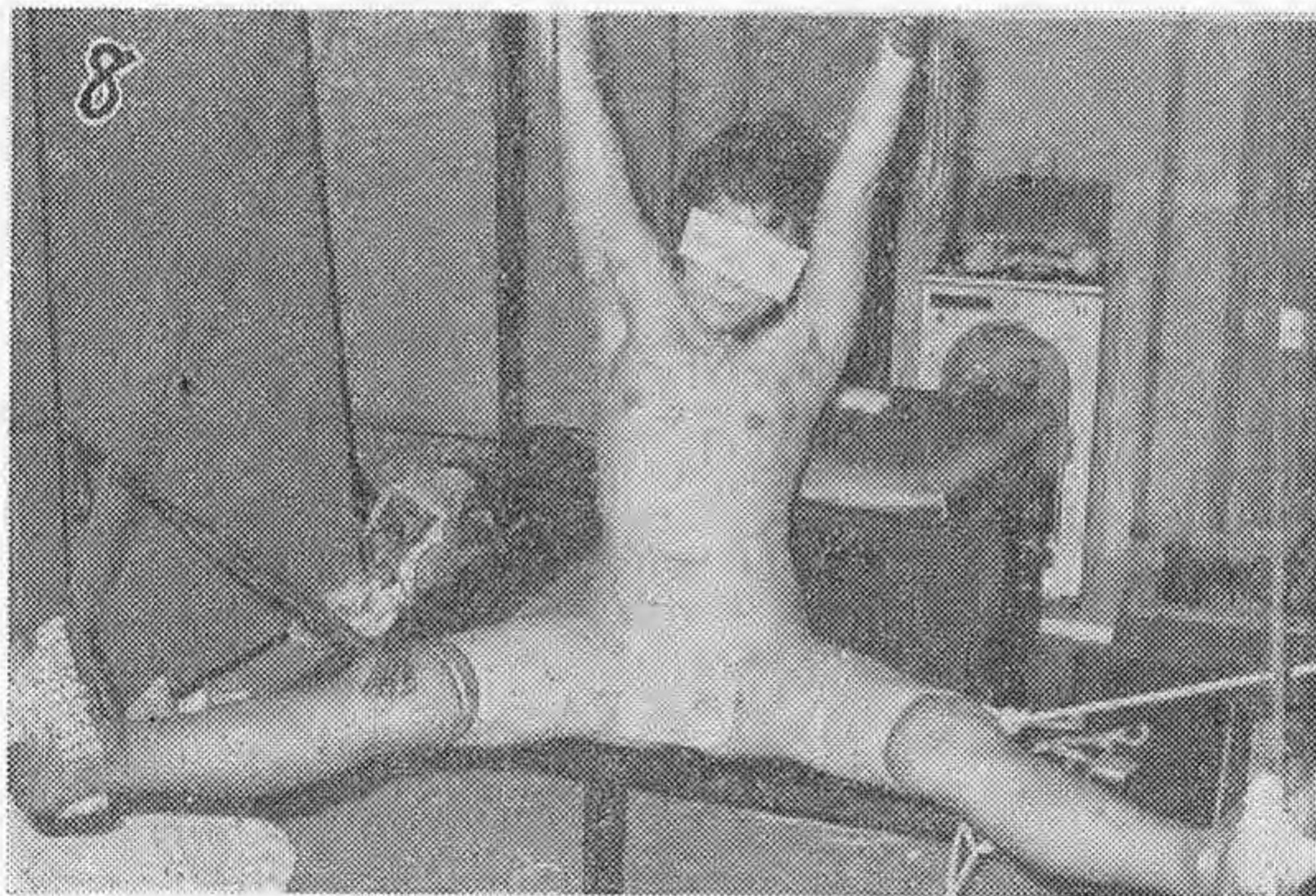
見慣れてるだろうに、そんなに珍しいのか」

操りの人形のように、縄に引かれるままに道代の女体は、色々とポーズを変えて行くが、道代にとっては、羞恥感は一二分にあっても、緊縛感や苦痛は、殆どないようだ。道代のようなマゾ女には、やはり或程度の苦痛を与えてやるのが、かえって、いたわりというものだろう。

私は、テーブルの上にテレビを乗せて道代の尻が乗せられるスペースをうんと狭くなるようににした。一寸もがくと、尻がテーブルから滑り落ちて、道代は宙吊りの股裂きになるだろうという、計算である。

こうしておいて剥き出しの腋の下や乳房やら臍やらを鳥の羽根を使ってくすぐってやった。道代はテーブルから落ちないように切なく身もだえる。しかし激しいくすぐり責めにもなんとか耐え切って股裂きは実現しなかった。(写真⑧)

やや期待の外れた私は、道代をテレビの上に乗せ、手首、足首に脱脂綿を巻いた上から、もう一度改めて縛り直した。こうしておいてからテレビとテーブルを外すと、こんどは間違いなく道代は空中



に奇妙な形でぶら下がり、足は裂けんばかりに開くはずである。(写真⑨)

道代は恐ろしそうに足を縛った縄を手で握りしめて防御を固めている。

さて、進水式とばかりにテーブルとテレビをとり外すと案の定、道代の体は重さで、ぐ

んと下がり「痛いっ痛いっ」と、さすがの道代が本気で悲鳴を上げた。私は、カメラアングルを考える余裕もなく、あわてて二、三枚の写真をとる(写真⑩)

後で現像してみると、道代の苦痛の割には迫力がなく、思ったほど面白くない写真だったのだが、実際は、かなり痛かったらしい。よく辻村氏が云うように、プレイに没頭すると良い写真がとれないし、写真に没頭すれば相手に気の毒だというジレンマを感じるが、プレイも楽しみ、良い写真もとれる達人になりたいものだと思う。

それはともかくとして後手、逆海老縛りにして、駿河問いスタイルに吊るすプランを昨夜から考えていたのだが、いざやってみるとグラマーな道代を安全に吊るす事は出来そうもない。色々苦心して手順を考えやってみたが、結局上手く行かないのであきらめて、開股逆さ吊りにとりかかった。

足首を手拭いで縛りその手拭いにそれぞれ別の縄をかけておく。

また先程使ったテーブルにテレビを乗せたのを利用して道代をその上に高く仰臥させる。手は万一の危険を考えて、吊るし上げてから縛ることとし両足を高く上げさせる。手早く両足を鴨居に結びつけ、解けないように十分縄目を確かめると、道代の身体を支えていたテレビとテーブルを外す。重さで、十纏ばかりずり下がったが、頭と敷居の間は、まだ二十纏ほど、あいている。道代は案外、平気な顔をしている。

両手首を別々に縛り、その縄尻を左右の柱に結びつけた。大の字型に逆さ吊りが意外に簡単に出来上がった。

私は、道代がこの逆さ吊りにそう長い時間耐えられるわけではないと思い、あわてて写真を撮ろうとした。ところが今まで使っていたカメラが見当たらないのだ。早く撮らなくてはと私は焦るが、カメラは、どこに行ったのか一向に見つからない。私はウロウロした。

すると、なんとしたことか逆さに吊るされている道代が「テーブルの陰にあるわ」と教えてくれたではないか。責めている方がすっかり興奮してカメラの置き場所がわからなくなっているというのに、責められている道代が、落着いてカメラの在り場所を教えてください



るとは、道代のマゾ根性をほめるべきか、私の意気地なしを笑うべきか、いささか照れ臭い一場面ではあった。

とにかくカメラを手にした私は、道代に近づいたり、離れたたり、汗を拭き拭きシャッターを押し続けた(写真⑩)

あいにくと、カメラと被写体の距離の関係で、例の鏡は道代の背面になってしまったので、道代は自分の逆さ吊りの肢体を見ることが出来ない。時々、首を

曲げて、後ろの鏡を見ようとするが、ベッドが邪魔をして、見えないようだ。

「まだ、大丈夫かい」

時間が大分たったような気がしてきてみた。

「まだ参らない。私は貧血症だから逆さ吊りにされると、頭に血が上って丁度、良いみたい」

私は、いささか馬鹿にしてるような道代のせりふに挑発され、写真をとるのを一時止めて攻撃を

始めることにして、クリスマス用の金色のねじれたローソクに火をつけると、ぐいぐいとローソク立ての代りにしてやった。ローソクが長過ぎたのでローソクによる熱さは、たいしたことはなさそうだし、道代が幾ら身もだえしても倒れる心配はなかった。私はローソクの熱で火災報知機がなり出しては困ると思い丁度その上に感知機がないのを確かめる余裕が出て来た。(写真⑪)

道代の大好きなもう一点を責めてやらないのは、画竜点睛を欠くものだと思いついた。割箸を一本、割らずにそのまま、きつく脱脂綿を巻きつけた。少々太巻きの上、滑りが悪いこの昔風の責め具も、またオツなものだと思いつながら、ぐりぐりと、こね廻してやる。

道代は顔を真赤にし目まで充血して呻いているが、まだ降ろしてくれと云わない。もう逆さ吊りにして何分位になるだろうか。私は夢中になって責めていたので、時間の経過がはっきりわからなかったが、随分長い時間が過ぎたような気がした。少なくとも十五分はたっているだろう。私はかねがね、逆さ吊りはせいぜい五分位が良い所と思っていたので、道代の頑張りは十分敬意を表するが、それでも心配で、たまらなくな

った。

「おろしてやろうか」
耳もとできいてみるが、道代は、うっとり陶酔しているのか返事もしない。



気絶してしまったわけでもないようだが、私は心配になって、道代が要求したわけでもないのに、手の縄をほどいてやった。道代は自由になった両手で、逆立ちのように自分の身体を支えた。私はローソクと割箸をとり、腰のあたりを支えると足の縄をほどいてやった。結び目がすっかり硬くなって、ほどくのに仲々骨が折れた。

畳の上におろされた彼女は流石にぐったりとのびてしまっただけで、しばらくは起き上がれなかった。

「随分、長い時間、頑張ったね」

「うん、経験あるもの。平気よ」

「こいつめ、誰に吊るされたんだ」

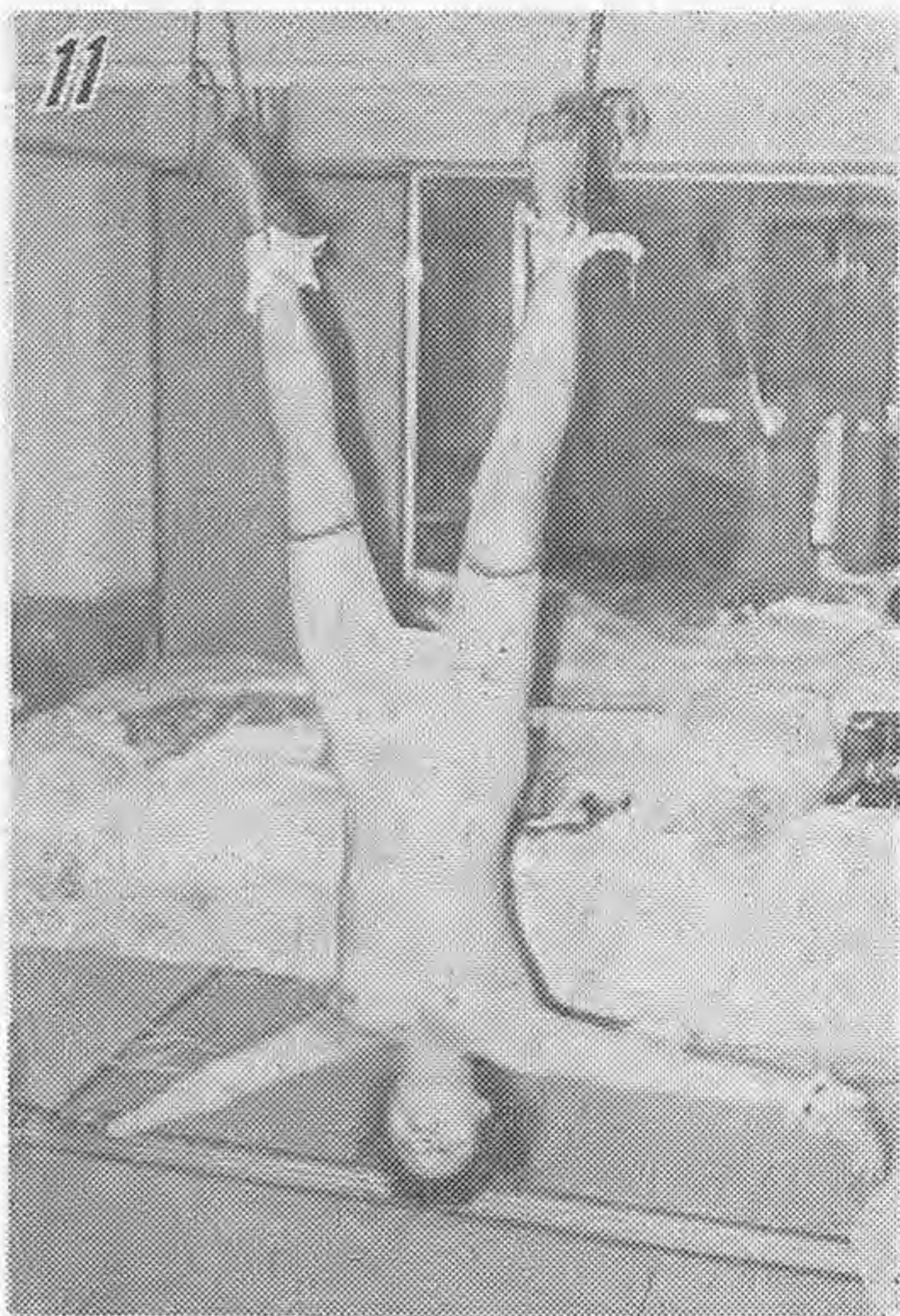
「秘密、秘密」

「Mさんだな」

「さあ、御想像にまかせます」

「吊るされている時は、どんな感じがする」

「そうね、ぼーっとして、よくわからない。夢みたいね」



「それで苦しくないかい」

「あなたの縛り方が上手だから、足があまり痛くなかったの。局所的な痛みはあまり気持ち良くないけど、じわじわくる責めは、いい気持ちなのよ」

「ローソクは熱くなかったかい」

「このローソクね。金色できれいなね。カラーで撮ったら良かったのにね」

私だって、もちろんカラーで撮りたかった

が、自分で現像出来ないカラーは、ポラロイドでもない一寸、具合が悪い。そのうちポラロイドカメラでも、買ってみるか。

道代は逆さ吊りが好きらしい。好きこそものの上手なれということもあるが、道代にこれだけ逆さ吊りを仕込んだ人に、少しばかりジェラシーを感じたが、一方では私のロマン派程度のサジズムでは、到底、道代のマゾヒズムに太刀打ち出来ないような敗北感を禁じ得なかった。私はスーパーマンではないが、道代はスーパーウーマン、いやスーパーレディなのだ。

プレイの後、道代は、わざわざ持参した大きなマスクメロンを手際よく切ってくれた。

甘い香りが部屋中に拡がり、さきほどのまでの動物的な匂いが植物的な爽やかな香りと交代して立ち込めた。

道代は、果物フォークまで準備してきてい

た。目にしみるような真白いナプキンにくるんだそのフォークを取り出すと、手早く畳みなおしたナプキンを皿代りのようにして、さりげない手付で私の前に置いた。

その動作の一つ一つに、いかにも教養を秘めた女性のしとやかさが感じられ、どうしてもプレイ中の道代と同一人とは思えないのである。

ついさっきまで、プレイの場だったこの部屋も、どこか上流家庭の一室に思えてきて、私は信じられない気持ちで見廻した。

何かひどく場違いな家庭的なムードの中では、あまりS・Mの話を、する気にもなれない。

話はモーターからゴルフの話に移って行った。話をしているうちに私はどうして

も道代とゴルフをしたくなり、次回はゴルフに行く約束をして別れた。

ゴルフ場の予約をとり、当日を楽しみにしていたが、その直前に、急用があるということで道代は電話で断わって来た。

その後数回電話で話し合ったが、仲々お互いの都合がつかず、そのうちにいつしか疎遠となり、連絡も途切れた。

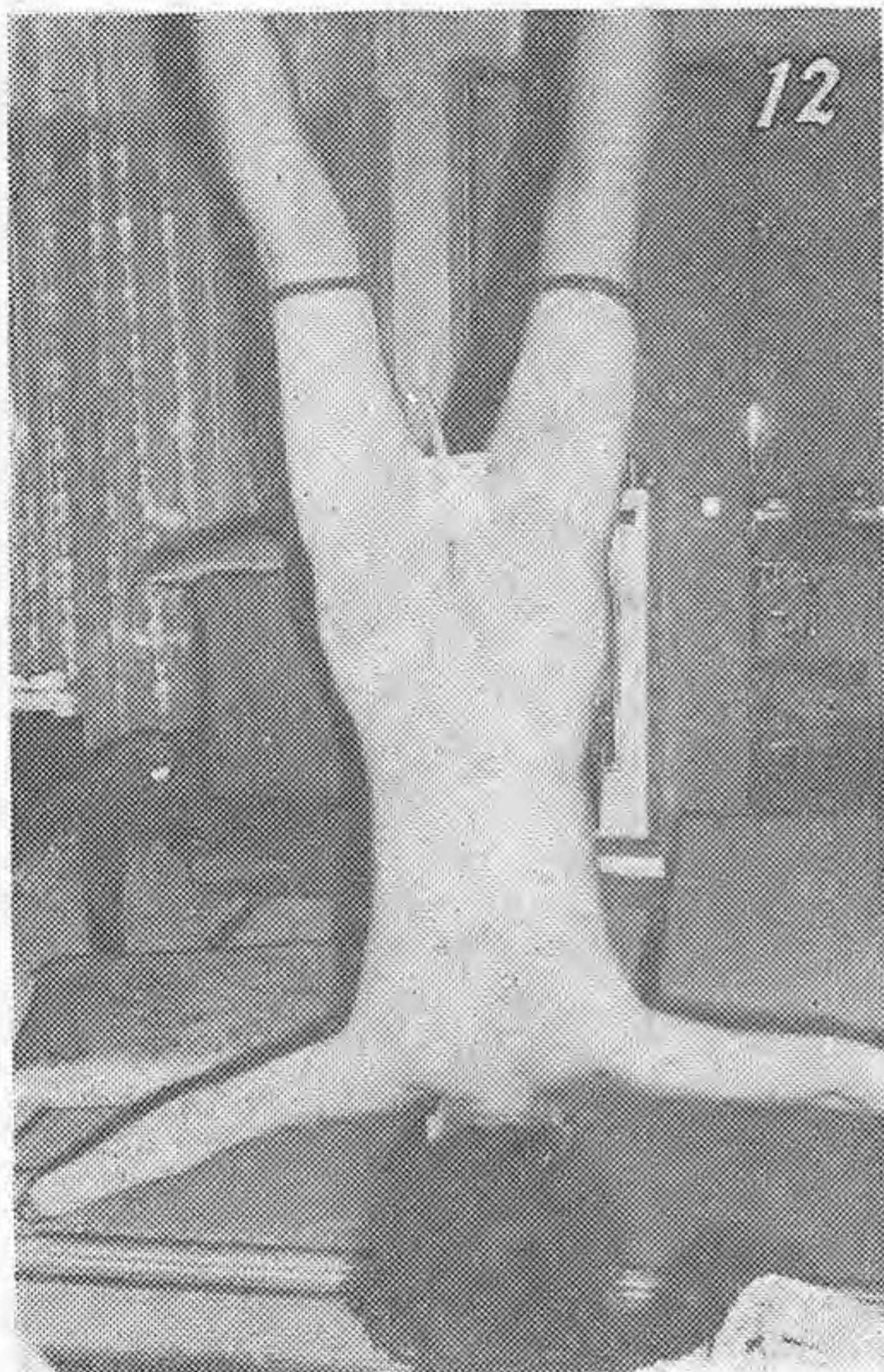
私は道代に強い未練があったが、ムードを気にしていささか感情過多な私のサジズムとビジネスライクというか無駄な感情を排してひたすらマゾヒズムに没頭する彼女との間に微妙な、ずれを感じていた。

このずれは、忙がしくやりとりしていた頃の文通面にも現われていたことで、道代の返信には必ずといってよいほど、もの足りなさを訴える字句が、教養のオブラートにくるま

れてひそんでいるのがよく理解出来て、よし次のプレイではと、その時には思うのだったが、いざとなるとどうしても私の本性が作用してしまう。

甘ったるい流行歌の文句ではないが、道代があまりにも素晴らしきマゾヒスチックレディだからこそ、あまり深追いしないで、さり気なく遠ざかるのが、私のロマンチズムに合致するゆえんではなからうかと、自分自身に云いきかせながら、撮り貯めた写真を見ている今日この頃である。

今年の梅雨は、やけに長く、いつまでも、じめじめしていた。





まりこのプレイ

マゾ女の台詞

北川 まりこ

毎月、貴重なページを、まりこの拙い文章の為に、さいて頂き、申し訳ございません。

最初の頃は、夫婦の間の羞かしい秘密とかマゾの女の心の奥に秘めている切なる願いを發表することに、強い抵抗を覚え、主人から無理に強要されるまま、筆をとってありましたのに、近頃では、自分から進んで原稿を書き、活字になった自分の文章を読むのが楽しく、今まで以上に、本誌の発行日が待遠しくなりました。

間違えないように口にします。

時には筋書きを離れて、主人の好きなように虐められることもございます。そのようなときは、大抵、肉体の苦痛を伴う責め、例えば鞭打ち、吊り責め、クリップ責め、寒さ責め、石抱き責め等が採用され、特別の台詞は用意してくれません。プレイ開始直後は、なるべく口数少なく、素直に主人の命令に従って、苦痛に耐えながらも時々、
「嫌嫌、そんなの嫌よ」とか、「ひどいわ。」

九月号の「まりこの裸になり方」に書きましたように、私共の夫婦プレイは先ず一糸纏わぬ丸裸にされる事から始まり、全裸緊縛の惨めな恰好で「静子被虐」の場面を演じます。主人が、シナリオ風に書き改めて呉れた静子の台詞を、徹底的に覚えこまされ、実演では一言一句

あんまりだわ」「後生です。それだけは勘忍して」とか、「お願い。あんまり、ひどくならさないで」等の、軽い抵抗を示す言葉を口走った方が、喜んで頂きます。

プレイの進行につれて台詞を、だんだん多くして、被虐の恍惚状態には涙を流しながら絶えず、まるで譫言のように、一人で喋りつけます。

勿論、そのような陶醉状態での、いろいろの羞かしい言葉、淫らな言葉は、平素の調教中に繰り返し繰り返し頭の中に叩きこまれており、それが身の、こなし方、表情に合わせて、ごく自然に口走るように飼育されています。責めの間は、ずっとテープレコーダーを使って録音され、プレイの後で、自分の浅ましい狂声を聞かされながら、主人に抱かれます。

録音テープから、まりこの、よく使う台詞を、いくつか拾って整理してみますと、

(一) 痛さ、辛さ、惨めさ、羞かしさ、を表わす言葉

「痛いわ。辛いわ」

「惨めよ。まりこ、とっても惨めな気持ちよ」

「羞かしいわ。まりこ、死にたくなる程、羞かしいのよ」

「痛いわ。あなたの鞭、すごくこたえるの」

「痛いわ。手首が、ちぎれそうよ」

「寒いわ、寒いわ。まりこ凍え死にそうよ」

……等々。

(二) 悦びを表わす言葉。

恍惚状態では、ただ無我夢中で、「嬉しいわ、嬉しいわ、嬉しいわ」を何十回も繰り返します。

羞恥責めでは、

「羞かしいわ。まりこ、死ぬ程、羞かしいのでも、とっても、嬉しいのよ」

苦痛を伴う責めの時は、

「痛いわ。辛いわ。でも、あたし嬉しいわ」また、

「あたし幸せ。あなたに虐められる時が一番幸せ。今が、まりこにとって最高に幸せよ」さらに、

「素敵よ。もっと、ぶって。まるで夢の様。ほんとに、あなたの鞭は素晴らしいわ」

……等々

(三) 自分を賤しい女と卑下し、また、賤しい女として扱われたい願いの言葉。

「あたし、あなたの女奴隷よ」

「まりこを奴隷にして」

「あたしは淫らな女よ」

「あたし、売春婦よ。パンパンよ。最低の裸パン助よ」

「まりこは、最低のパン助にも劣る女よ」

「あたしを虫けらのように扱って」

「あたし、雌犬よ」

「犬や猫にも劣る扱いが嬉しいの」

「あたしは汚れた女。あたしのような女でよろしければ、お相手をさせて」……等々。

(四) 今の惨めな境遇の継続を願う言葉。

「捨てないで。お願い。こんな、まりこだけれど、捨てないで」

「いつまでも、まりこを奴隷にしておいて」

「売ってしまったわらないで。まりこを、せり市には出さないで」……等々。

(五) 自らを、羞恥状態にかりたてる言葉。

「あたし、裸よ。まりこは丸裸。何もつけていないの。生まれたままの姿なのよ」

「まりこ、何もかも、お見せしたいの。詳しく御覧になって」

「いかが。まりこの裸、お気に召しまして」

「あたし、自慢のからだをお見せしたいの。嫌々、目をそらさないで。詳しくお調べになって。まりこの体、お気に召したかしら」

……等々。その他、女の身にとって、一番羞かしい部分の呼び名を混じえた、数々の淫らな言葉。

(六) 相手の責めを促す言葉。

ただし、奴隷の身分で、責めの種類を具体的に希望することは、絶対に許されません。被虐の最高潮には、ただひたすら「もっと」の繰り返し。その他、

「もっと、ひどく虐めて」

「お気の済むまで、もっと強くぶって」

「まりこに死ぬ程、羞かしい思いをさせて」

「あたしの体は、あなたのものよ。だから、何をなさってもいいの。どんなに、ひどいことをなさっても、いいのよ」

「まりこを、罵りものにして。あたしの体をオモチャにして」

「うんと淫らなことをなさって」

「まりこを辱かしめて」

「あたし、笑いものになりたいの。慰みものになりたいわ」

「まりこの浅ましい恰好を、写真にとって」……等々。

(七) セックスを求める言葉。

これは、羞かしくて書けませんわ。

マゾの世界に次第に目覚めてきた「静子」の台詞を、毎月、楽しみにしておりましたが「花と蛇」も近く終わりになるとかで、本当に残念でございます。今まで、千代奥様達に強要されて口にしていた淫らな言葉を、静子が、自分から進んで自然に口に出すことを期待しておりますのに。

最近の「花と蛇」は、第七十四章の「赤い唇」の節で、唇と舌で川田様に御奉仕をした後で静子が口にする、「ひどい方。でも静子嬉しいわ。御満足して下さったようだから」の台詞は、すっかりマゾに開眼した静子の心の奥底から、自然に出てきた言葉のように思え、大変、気に入りました。

(生まれたままの羞かしい姿のまりこより)

M
フ
ィ
ク
シ
ョ
ンS
M
ク
ラ
ブ
の
夜

カット・岡 たかし

松 山 壮 吉



このクラブのセールス・ポイントとはホールの片隅に置かれた檻である。檻の中には、裸に皮パンツ一枚で犬の首輪をつけた奴隷男が

減されていて、つまり、ごく軽いシヨウである。

又、女性客が、ある程度ふえると、奴隷は

入っていて、一晩に二回程度、ホールでS M ショウを演ずる。ロングブーツをはいたホステスが、奴隷男を蹴とばして引っくり返したり、プレイ用の房鞭で背中をピシピシ打ったり、馬乗りになって一種のロデオを演じたりする。もっとも、強い鞭はフロアに当てられ背中にあたる鞭は弱く手加減

床を這って客の足下に近寄り、布で靴を拭いたり、くちづけしたりするのも仕事の一部で彼は、勤務時間中は立ち上がらず、常にフロアを四つ這いで動き、原則として口をきかない。

こうして彼は、男性マゾヒズムを特色とするクラブのムード作りの、大きな要素となっているのである。

この仕事の報酬は、通常の給仕仕事に少し色をつけた位で、そう高いわけではない。しかし、そんな変わったアルバイトなら、一寸やってみようかという男も結構いるもので、今までの男が、ひよいと来なくなっても次を探すのに、そう困った事はない。店の手伝い

に来て簡単なカクテル等を作っている青年にしても、穴のあいた夜には、わりに気楽に奴隷男の役も勤めるのである。

若い女性を檻に入れて同様の役を勤めさせようと思えば相当、手間がかかるだろうが、男性奴隷の補充には手間のかからぬところが現代の面白さである。

夕方、開店して一時間位した頃から、だんだん客が入って来る。主として三〇〜四〇代の客であるが、女連れの客も決して少なくはない。こういうクラブに女を連れて来るのは世間の狭い女性に珍しい所を見せてやろうという案内者的情熱が中心になっているわけだが、心の底には、それによって彼女が、こういう事象に寛大になり理解を深めてほしいという願望。更には、あわよくば女性の本性の一部に存在する筈のサジスチンとしての目が開く契機になって欲しいという願望が潜在する場合が多いだろう。

クラブのマスターも、その趣旨には全く同感である。集まって来るお客は真似事のショウだけでは直ぐ倦きてしまう。もっと強烈な本物のサジスチンとマゾヒストによるプレイが、しばしば行なわれる様になれば、クラブの吸引力は大いに強まるに違いない。そのた

めには、お客の中からサジスチンが育って欲しいし、本物のサジスチンとまでは、いかなくても、お客の若い女性が軽い鞭打ちプレイでも楽しんでやってくれ、マゾヒストを楽しませてくれるのでなければ、クラブの将来は余り明るくないと思われるのである。

そこでマスターは、女性客のテーブルにつききり、SMが人間の本性である所以を弁じたり、自分がMに開眼した歴史を語ったり（もっとも話の筋は、往々にして変わるけれど）して、サービスに努めるのである、しかし不幸にして相手が素人の女性である場合、その効果は甚だ乏しい。

奴隷男が床を這って御靴を拭こうとする時大部分の女性は、急いで足を退いてこれを拒否する。中には、悲鳴をあげて椅子の上に立ってしまう女性もいる。女上位時代とは言いながら、女性の男性に対するイメージには牢固たるものがあり、首輪をした裸の男が床を這っている情景など、鳥肌が立つ程、気持が悪くという反応が多いらしい。表面は悠然として靴を拭かせている女性も、実は少なからず固くなって、足に力が入っているケースも少なくない。

美しい女性がクラブに入ってくると、夢の

サジスチンの御来臨ではないかという期待の目が集まるのだが、大体において失望に終わる場合が多かったようだ。

もちろん幾つかの例外は存在する。たとえば開店して、まだ一月足らずの七〇年の秋、クラブでは、もう暖房をいれるようになって間もなくの夜である。

二、三組のアベックを交えてボックスが大方いっぱいになった頃、自ら実践派のサジスチンをもって任ずるある女性が、やや道場破りの気負いをもって乗り込んで来たことがある。美青年をお供に連れての彼女の登場はまことに颯爽としてクラブの空気を一瞬にして緊張させた。

ホステスに案内されて奥のボックスに入った彼女が、キラキラ光る朱色のエナメルレザーのコートを脱ぐと青年が馴れた手つきで受取った。コートの下には黒のカーフのジャケットとミニ、そしてハイヒールのロングブーツ。すらりと伸びたロングブーツの足を一寸組み合わせ、くつろいだ姿勢をとり煙草を取出すと、青年がすばやくガスライターをさし出す。

こういう一連の動作も服装も、明かにサジスチンとしての効果を意識した演出であり、

しかも同じ演出としても、このクラブの檻や奴隷男よりも、もっと本物くささを感じさせるムードを持っていた。

大いに張り切ったマスターは、つききりで懸命に御機嫌を取り結び、奴隷男を呼出して足下に跪かせた。ぜひ鞭をお試し下さいと、やや芝居がかった表現で熱心に勧められた彼女は、プレイ用の房鞭をこわって、細い革を編み合わせた長い本鞭を取上げてホールの中央に進んだ。彼女が鞭を構えた時、すぐに彼女が相当、豊富な経験を持っていることが分かった。

初めて鞭を振る女性に共通する手首だけで振るやり方と違って、腕全体を十分に使うスタイルをとり、足を軽く開いた彼女は、四つん這いになった奴隷男の背中に見事に第一撃を振り下ろした。奴隷男はすさまじい悲鳴をあげ、背中には鮮かに一筋の痕がついた。その鞭痕と、ゆるく交叉するように第二の鞭がうちこまれると、奴隷男は悲鳴をあげて、はね上がり自分の役目を放棄して立ち上がり、まっしぐらに逃げ去ってしまった。

決してマゾヒストではなく、単なる一寸した好奇心だけで、真似事の奴隷役を引受けていた彼は、気の毒にも、本物の容赦のない鞭

を受けて、甚だしい苦痛と恐怖に圧倒されてしまったのである。

やっと盛り上げて来たお芝居が、たわいもなく底が割れて白けた現実に戻った感じで、お客達は苦笑してざわめき、マスターは取り繕う言葉を見つけるのに苦労し、女は冷笑して「もう少し、ましな奴隷はいないのかしらね」と一座を見渡した。

引っ込み思案で何時も、だいたい一瞬を逃がしているこの男が、この時ばかりは決然と声に応じて立ち上がり、「ここに居ますよ」と名のりをあげたのは、幾分かは時間潰しに營めていた水割りの所為に相違なかった。

クラブは水を打ったように静まり、人々の注目が一身に集まっていたのを意識しながら男は、やたらに落ち着いて悠々とホールの真中に出た。上気し易い女の子が土壇場で妙に落着くのと同じ心理が働いて、立ち上がると同時に現実の世界を離れて舞台上の別天地に入ったようである。

「あなたは大丈夫なの」と威嚇的に鞭を弄びながら女が尋ねる。「ええ。決して音は、あげないから、存分にやって下さい。私は、やる時は徹底してやらなければ気がすまない方だし、まあ、死ぬ一寸、手前ぐらいまでなら

構わないのですよ」「それは面白いわね。でも、大きな事を言って、後悔しないことね」「大丈夫ですよ。それより女の人、いざとなると、なかなか徹底、出来ないものだけけれど、まあ出来るところまででいいですよ。いっさい、お任せしますからね」女はキツくなって「おしゃべりは、もういいから、早く服を脱いで来なさい」と命令する。

男は傍の小柄な色白のホステスに「じゃあ手洗いを借ります。一寸、手伝って下さい」と言い残して、万一に備えて何時も持ち歩いている鞆を持って手洗所に入り、手早く裸になって脱いだ物を風呂敷にくるむ。

さきほどのホステスが入って来て「あそこで脱いでも良かったのに」と言いながら、奴隷男用の皮パンツと首輪を手渡そうとするが男は皮パンツは断わって黒の細いゴムサポーターをつける。「この全頭マスクをつけたあと革の轡轡をつけますから手伝って下さい。それから、その首輪をつけてホールに連行して、この布ロープで両手を梁に吊るして固定してくれませんか」と頼む。「大丈夫なの。あのひとは、きっと、ずいぶん、きついわ。それに、あんなこと言うから機嫌悪いわよ」大丈夫ですよ、と答えて、テキパキ自分の

責められ方を指図しているところ、如何にも大丈夫に見えようが本心は、そうでもない。奴隷男への二鞭を見ただけでも鞭のきつさは分かっている。その上、衆人環視の中で言葉の針で刺激してあるから、意地でも責めは、きついであろうと思うと、恐怖と興奮とで全身が燃え上がるようである。

奴隷スタイルを整えて四つ這いになると、「まあ、呆れた。好きなのね」とホステスがブーツの先でサポーターのあたりを一寸、蹴とばしてから、首輪に付けた革紐を曳いて、「さあ、新しい奴隷の登場ですよ」と披露する。

カーペットの柔らかいホールの真中へ曳いていき、女が早速、鞭を取り直すのを「一寸待ってね。今、処刑の態勢を作りますから」と制して、もう一人のホステスと協力して、万歳の形での半吊りの姿勢に固定する作業に掛かる。「猿轡か、なるほど。あれなら音は上げられないやな」等という客の野次の中で作業が終わると「どうぞ」と合図してボックスに退く。

女は、もう一度、冷笑を浮かべると、十分に間隔をとって鞭を構え、全身の力をこめて見事に、被処刑者の背中に打ち込んだ。男は

思わず、そり返って、猿轡の奥から意外に大きい唸り声をあげる。十や二十の鞭では唸り声は、あげない自信のある男だったが、従来のプレイの鞭とは全く強さの違う烈しさが、一鞭で身にしみて、これはえらいことになった、と一瞬、たじろぐ思いだが、女は後悔する暇も与えない。実践派のサジスチンたる面目を賭けた女の鞭は、容赦なく空を切って、次々と叩きつけられる。

しなやかな革鞭だが、背中を強く一撃された感覚は棍棒で、したたか、なぐられたようなショックがある。だがそれは、まだ耐え易い。鞭の先端が腕や太腿に当たったり、巻きついたりする時が凄まじく痛み、意地も張りもなく、のどの奥から甲高い呻きが洩れる。背中には一鞭毎に鮮かな痕がつき、そのあちこちから血が滲み出してくる。鞭音と呻き声の交錯する背中全面に、鮮かな鞭痕が、したたかに重ねられると、女はようやく手を休めて「反対側を向けて頂戴」と命じた。

ホステス二人に、女のお供の青年も協力して、一旦、両手のロープを解く。小柄なホステスが「大丈夫なの」と耳元で囁くと男は、はつきり、うなずいてみせる。

今度は両手を一つにまとめて、梁から半吊

りにした形になる。女は、やや大柄の、きつい目をしたホステスに「顎をあげさせて」と命ずる。爪先立ちで半吊りになった男がガックリうなだれていて、鞭さばきに、やや不便だからだ。ホステスが革紐を上手に顎に引っ掛けて顔を上げさせると、振り下ろされる女の鞭が、肩から袈裟掛けといった調子で見事に、きまる。猿轡の奥から、クウツと言うような切迫した呻きが洩れる。それに構わず、女は冷静に狙いを定めて、胸と腹とに次々と激しい鞭を炸裂させていく。

一鞭毎に、男の体は呻きとともに感電したように硬直し、そりかえる。体の前面の皮膚は背面より余程、弱いのか、美しい血の玉がはじけるように盛り上がり、幾筋もの細い糸になって流れしたたる。

「やめて！」と、客席から悲鳴が、あがる。「やめて。可愛そうだから、もうやめて」と追い詰められたように叫んだボックスの若い女性も、とうとう手で顔を覆ってしまった。

同伴の男が彼女を励まして見させようとするが、なかなか目を開かない。そのような声には少しも動かされず、女は的確な鞭をふるい続ける。鞭音と呻き声の響くクラブの中で、男達は目を輝かせて、この予想外に濃厚なプ

ナミオM画廊 『熱いかい?』 春川 ナミオ



レイをみつめ、鮮かに鞭を振るうサジスチンの姿に陶醉する。

やがて女は鞭打つ手をとどめ、革紐で顎を引き上げていた、やや大柄のホステスに、もういいわ、と手を離させ、ガクリと首を垂れ

る被処刑者に「頭を上げて! 真っすぐ立ちなさい」と厳しく命令する。男は、ハッとしたように半吊りの体で精一杯に姿勢を正そうとする。革紐を離して、腫れ上がった鞭痕を一寸、触ってみたりしているホステスに、女

は「いかが」と鞭を手渡そうとする。

このホステスは、巧みな鞭さばきでファンを持っていてのだが、営業上の立場があるから、血の滲むような強い打ち方はしないように手控えている。今日のプレイは、一寸きつ過ぎるのではないかという気持もあるが、自分こそ本物のサジスチンだという顔で、これ見よがしに振舞われているのは、あまり面白くない。先程から少し癪に障っている処だから、ここで後には退けない。

無感動な面白くなさそうな顔で、黙って鞭を受け取ると、先程からの鞭打ちより少し間合を詰めて、真横からピシリと打ち込んだ。鞭が、くると、ほぼ胴体を一周して巻きついた奴を引き剥がすように、グイと手元に引く。体が半ば横に向く。すかさず、も一度、打ち込み、引き剥がして大きく向きを変えさせる。あるいは一旦、横に向いた体がグラリと揺れて元に帰った処を、今度は逆から打ち込む。

冷静に鞭と鞭との間合を空けながら、繰り返し打ち込み引き剥がす度に、男の体はウーッ、ウーッという呻きと共にグラリグラリと揺れ、斜の痕で覆われた体に、今度は真横に丸く鞭痕が刻み込まれていく。

腹部に絡みついた鞭がグイと引き剥がされ、離れる鞭を追うように赤い血が飛び散った時「やめてー」という悲鳴が上がり、先程の声の主と反対側のボックスにいた女性も固く目を瞑ってしまった。女性は優雅に心優しきものであるべきだという観念——特に男性同伴の場合には、まだまだ根強く日本の女性を支配している。これは、やはり幸いというべきことであろう。

鞭と鞭の間合が長いから鞭数はそう多くはないが、鞭打ちは延々と続いた感じである。マスターが「もういいだろう。そこまで、そこまで」と、ドクターストップをかけて、彼女はようやく鞭打ちを止めて、女に鞭を返した。男は全身を鞭痕で覆われ、各所に血を滲ませ、流して、ぐったりと吊られている。

処刑台に拘束しての鞭打ちは臀部を中心とすることが多いが、吊るしての鞭は比較的、上半身に集中して、鞭に最も耐性のある臀部には行届かぬものである。女は吊られた男の前に歩み寄って、鞭の柄で男の顎を持ち上げながら「まだ尻は手つかずだよ。尻も可愛がって欲しいかい」と問うと、かすかにうなずく。一座に、ホーと呆れるような声のない、どよめきが渡る。女は再び冷笑して、上に挙

げた手を解かせると「その汚いサポーターを脱ぎなさい」と命令する。黒いゴムサポーターの裏側は、何時の間にかベトリ汚されている。女は冷笑を浮かべて男をフロアに跪かせる。と猿轡を取らせ「この汚れ物を、こいつに嘗めさせてやって頂戴」と先程のホステスに命令する。

ゴムサポーターの裏面は全体がグッシヨリ濡れている。多少は血が付着している。ホステスは汚なそうにつまんで、汚れた部分を男の口に押し付けて「さあ、お嘗め」と命令する。男はペロペロと嘗める。

先程、鞭打ちの時に、やめてえと、叫んで目を覆った、客席の若い女性は、自分まで胸が悪くなったような妙な表情である。こんなことまでする男は不潔そのもので、通常の人間の枠内に入らない。こんな奴なら、いくら責められても同情する必要はない、という感覚が出て来たようである。

女は、ゴムサポーターを丸めて男の口の中に押し込み、その上から、もう一度、厳しく猿轡をする。壁に掛けてある革手錠を下ろし、使用法の説明を聞きながら厳しく拘束する。巾広の革で後手に拘束して胴体に、しっかり固定する方式である。女は同伴の青年を呼び

出して手伝わせる。三人がかりで男の両足首にロープを縛りつけ、大股開きの形で梁に、さかさまに吊るし上げる。一汗かいて逆さ吊るしが成功すると、女性の場合のような美しさはないが、なかなか派手で面白い眺めである。

女は慎重に間合いを計りながら、二回、三回と肛門部を狙って鞭を打ち込む。鞭の先端がY字形の中心に見事にきまると、ツーツと血が流れ出す。

女は、クラブで卓上照明に使っている大蠟燭五、六本を取り寄せると、ナイフで、その一本の下端を削って少しとがらせ、片手で押し開くようにしながらグイと蠟燭を押し立てた。男はウーッと切ない唸り声を立てる、思わず息を詰めた女性もいるのは何か納得出来る。経験者は、よく御存知のように、少なくとも最初の時は激痛のあるものである。

女は構わずに、大部分が没した蠟燭に火を点じた。逆さに吊るされた人間燭台に大きな火がともって、真に奇妙な眺めである。「これは面白い。特別照明にクラブで使うと、いいよ」と大声で批評する客もいて、女性も含めて一同は興味津々として成行きを見守る。女は鞭を取り直し太腿の内側にピシリと一撃

を加える。吊られた体が揺れる拍子に、たった蠟涙が一方に流れて、痛んだ皮膚に、ぶつかる。太腿の内側への鞭は非常に痛む。まして、この熱さは……。

プレイの経験者は、よく承知しているように、蠟涙は皮膚に痕は残さないが、その瞬間は非常に熱い。個人差はあるが、少々の鞭には声も出さず耐える人でも、蠟涙責めでは転げ廻る人もいる位である。まして傷のついた場所に至近距離から蠟涙が流れ込んだのではたまったものではない。

猿轡の奥から、ヒーツというような悲鳴があがる。しかし、いやが上にも嚴重な猿轡をしてあるから大した悲鳴ではないし、第一、スタイルが滑稽である。当事者の苦痛は甚しいが、見ている方には余裕があるのか、やめて、という悲鳴も上がらない。太腿の内側と臀部に、ひとしきり鞭があてられ、太腿の内側は傷つき一面に腫れ上がり、蠟涙の焰も燭台を焼きそうになる頃、女は最後の鞭で器用に火を消して手を止めた。

蠟燭を取り出して紙に包んで捨て、又、三人が共同で、ぐったりとなった男を静かにフロアに下ろし、横向きに寝かせる。男は、さすがに大分、参った様子である。逆さ吊りに

されていた結果、黒ゴム全頭マスクの内側は一杯の汗で、顔は真赤に充血しているであろう。今しがたの責めで体中に汗が玉になって噴き、汗に血をまぜて体中が濡れて光っている。

「少し、そのまま休ませて置きましょうね」と女が宣言すると、一座の緊張が解けて雑談が始まる。

マスターが膝をついて、男に「大丈夫ですか」と尋ねるとうなずく。色白のホステスが猿轡を外してコップの水を飲ませてやる。横向きの姿勢で一寸、飲み難いので、ブーツをはいた足で、少し頭を持ち上げてやる。通常なら膝枕という処だが、この際は最も心優しい女性としても、靴で頭を上げてやる方がルールに、かなっていて、自然なのである。

こちらのボックスでは、女が同伴の美青年に指図して、大蠟燭をナイフで削って卓上の大きな飾り灰皿に入れている。しきりに勧められて、ためらいながらも先程、やめてーと悲鳴をあげた若い女性客も、果物ナイフで削る手伝いをしている。削り屑を盛った灰皿の、片方の柄のような出張りを何枚ものハンカチを重ねて掴み、卓上燭台の焰にかざすと案外に簡単に溶けて行く。男は、水を飲んだ

あと「もう一度、お口を、ふさいで置きましょうね。ハイ、アーンして」と優しく、しかし厳しく猿轡をかけられて、転がっている。腰を下ろして一服した女が、もう一度、立ち上がると、一同は雑談を止めて期待を持って注視する。

女は男の両足を革紐で固く緊縛させると、卓上の燭台の蠟燭を取り上げ、ハイヒール・ロングブーツの片足で男をしっかりと踏まえて蠟涙を、背と尻の、鞭で皮膚の傷んだ部分を選んで垂らして責めて行く。生体解剖のような苛酷な責めで、呻き悶えて転がり廻ろうとするのを、踏みしめ踏みしめ責めていき、今度は荒っぽく蹴とばして仰向けにすると、胸と腹の傷を狙って責めていく。これは余り深追いせず一通りで終わると、もう一度、蹴転がして、うつ伏せにし、両足でその上に乗ってグイグイ踏みつける。

骨折もさせず、内臓破裂も生じさせない範囲で厳しく踏みつけ踏み締めるのは、簡単なようで案外、技術を要することであり、一般に、適当な踏みつけはマゾヒストを喜ばせるサービスである。

女は又、蹴とばして仰向きにし、適当に踏みつけると、今度は手を伸ばして両乳首を優

しく刺激する。始めに奴隷スタイルで登場した時、下半身と同時に男の小さい乳首が小さいなりに充血しているのを素早く目にとどめMに有り勝ちな、乳首の固くしこり易い、乳首の感覚の開発されている男だと、ちゃんと見究めているのである。

へとへとになっていた男も、踏み付けサービスと巧みな乳首の刺激で、めざましく元気を回復する。「まあ、いやだ」という女性客の声があがる。常人以上の隆々たる男性美を発揮していて女性客の関心は甚だ高い。

それを見届けて女は、一人のホステスを足の上に、もう一人を胸の上にすわらせようとする。すわるようにいわれたマキシドレスの彼女は血と汗で汚れるのを厭がり、檻の上に掛けてあったゴムシートを男の上半身に被せてからドッシリと腰を据える。

女は、美青年から溶けた蠟を満たした灰皿を受け取り、下半身の中心に狙いを定める。一同が息をつめて見守り、二人のホステスがぐっと力を入れる。灰皿を傾けて溶けた蠟を注ぐと凄まじい絶叫と共に男の体が、はね上がる。嚴重な猿轡がなければ、厚いドアとコンクリートの壁を通して近隣を驚かしたに相違ない。はね飛ばされなかったホステスは、

ようやく立ち直って抑えつける。

下腹部一帯が白く固まると、抑えつけていたホステスが、立ち上がってゴムシートを取り除く。ゴムにくるまれていた男の体全体に又新しく、ひどい汗が噴き出している。女は改めて燭台の蠟燭を取り、両方の乳首に蠟涙を垂らして止めを刺す。直前に下腹部への大量の蠟液という苛烈な責めをやっているのもう反応は鈍っている。男が完全に、へたばったことが、誰の目にも明らかである。

女はボックスに帰ってコップを取り上げ、色白のホステスが男の足の緊縛を解いて扶け起こすのに、「手はそのままにしといてね」と声をかける。ホステスが頷いて、「そちらに侍らせましょうね」と首輪に手をかけて引っ張り、女のボックスのそばに跪かせる。フロアのカーペットは汗で、びっしょり濡れて色が変わっている。

「やるもんだねえ」と、感嘆というか、呆れ果てたというか、嘆息気味の客の声が、ざわざわと湧き上がる。

「もっと鞭をあててほしいかい」と問われて男は首を振る。「さすがに参ったねえ」と同じボックスの客が笑う。「もっと蠟で責めてあげようか」と問われて、男は周章でて首を

振る。「もう、降参かい」と問われて、大きくうなづく。「なんだい、大きな事を言っただに我慢も出来ないで。ちゃんと御詫を言いなさい」と命じられても、嚴重な猿轡で唸り声以外のものが出るわけもない。

「よしよし、御詫の言えるまで、そこにひれ伏して居なさい」と命令されて、男が、後手で正座したまま精一杯、頭を下げるのを、グイと頭を抑えつけて、更に低く下げさせ、膝行前進させてテーブルの下に上半身を入れさせる。テーブルに頭を抑えられて、否応なく平身低頭の姿勢を、継続することが強制される。テーブルの下から後革手錠の手と尻が出て、頭隠して尻隠さずの形である。女は男の正座した太腿の上に足をのせると、そのまま忘れたように話題を転換させる。

緊張の反動で各ボックスは賑やかになり、新しいグラスの注文で、ひとしきりホステスが忙しい。

楽しい歓談のテーブルの下で、サジスチンのブーツに踏まれているのはマゾヒストの夢であるが、正座して無理な角度まで頭を下げているので、長びくと案外、楽ではない。通常は、責めが終われば後に痛みは残らぬものだが、今度は、さすがに、あちこちが痛む。

イメージギャラリー 『重いかい?』 岡 たかし



溶けた蠟で傷められた処が、ヒリヒリする。太腿の内側が、ひどく腫れて来て、踏まれている処が痛む。何よりも無理な角度にしている背中が、だんだんと強く痛んで来るのだった。

本日のメインイベントは終わったという判断であろう。宵の口から粘っていた客の一人が立つと、終電車の時間を気にする客達が次々と立って行く。ぼつぼつ看板にするバーも出る時間になったのか、お客と連れ立ったホ

ステスらしい二組、三組も入って来て、クラブは、通称ホステス・タイムに接近して来たことが感じられる。

同伴の美青年に、そっと耳打ちされた女は時計を見てうなずき、ふと下に跪いている黒ゴムマスク、猿轡、後革手錠の鞭痕だらけの男に視線を移して、ちらと悪戯気のある笑いを浮かべ「そのままじゃ退屈でしょう。もうひとつ、サービスしてあげようね」と言っ

女は先程、蠟燭を削ったナイフを青年から受け取り、ナイフの背部の錐を起こし、男の顔を仰向かせてロング・ブーツの両足で、しっかりと、はさみ、錐の先端を鼻中隔に当てて、よく狙いを定め、「動いたら、きかないよ」と念を押して、グッと鼻中隔に押しあてる。強い手応えがあり、ウツと呻くのを構わずに思い切って、もう一度、押すと、グサリと鼻中隔を突き抜く。

錐を抜き取り「仰向いて。血は上手に飲み込むんだよ」と叱りつけながら、ハンカチで鼻孔外に出た血を拭き取り、同じボックスの中年の客に「あなたの靴の紐を一本、下さいな」と注文する。「お安い御用で」と大分、

古びた靴から靴紐だけは、まだ新しいのを抜き取って渡すと、無雑作に、その靴紐を、今あけた鼻中隔の穴に通し、鼻孔の前で輪を作って締め、残りの紐を、もう一つ固結びにして、端を持ったままシートから立ち上がり、「こちらに來なさい」と命令して引っ張るから、たまらない。男は鼻孔から血を流しながら、ぶざまに膝行してお供する。

男を檻に入れ、檻内で跪かせて仰向かせると、顔が檻の天井の真下になる。余った靴紐を檻の天井の格子に結びつけると、丁度、仰向いて身動き出来ない形になる。

「これでいいわね。まだ夜は長いから、おまえは、そうやって、ゆっくり楽しませて貰いなさい」と言い残して、女は青年を連れて勘定をして出て行く。このクラブの勘定は、場所柄から考えても、ごく通常の相場であって決して高くはないのである。

送り出した色白のホステスが、檻の傍に寄って来て「痛いでしょう。出してあげましょうか」と尋ねて、「あら、返事が出来ないのね」と、靴紐を解いてもう一度、問い直す。男は首を振る。「もっとこうして居たいの」と問われて、うなづく。「でも体中、ひどい傷だし、鼻からも血が出ているのよ。大丈夫

？ まあ、本当に好きなのね。よく、あんなにやるって皆、呆れてるわよ。水、飲む？

じゃもう一度、前のように繋いでおこうね」と、もう一度、靴紐を檻の天井の格子に結びつけ「おしっこしたい時は唸るのよ。そこでしちゃ駄目よ」と言い残して離れて行く。

今まで居た客のいくらかは更に、ここで帰る、店の引けたホステスやトルコ嬢などが次々に入って来て客の半ばは女性になり、クラブの空気は、一転して、はなやいだものになる。客がホステスを連れて来たのか、遊び代を負擔させる道具に客を利用するのか、ホステス二、三人で客一人を囲んで入って来る例は、いくらもあるが、純然たる女だけの客はないようだ。大分、酒が入っているから男客も景気良く、おだをあげるし、知り合いのホステス同志で派手に挨拶し合ったり、大体において妙に緊張した静かな、このクラブも、通常のバーやクラブのように賑やかなる。通常と違って、鮮かな鞭痕に覆われた奴隷男が繋がれている様子は、たちまち注目を惹き、クラブのホステスや前からの客に説明を聞いて「あら、惜しかったわね。もっと早く来ればよかった」等と大袈裟に嘆息したりする。檻の側まで見に来て「まあ、ほんとね」

「これ、靴紐じゃない。呆れた」等と驚く者も、いる。

一旦、逃亡した元来のクラブの奴隷男も出て来て、ホステスとの間に平常よりは気合の入ったSMシヨウを展開して見せ、服を脱いで相手役を買って出る客も出る。常連のホステスの中には、プレイ用の房鞭を持って、服を脱いでフロアに出た、お客をピシピシ打って喝采を博する者もある。アルバイトの若い奴隷男を自分のボックスに侍らせて、頭を撫でたり、靴にキスさせたり、足に顔をすり寄せさせたりしながら、優しく口説いているホステスもいる。厭なお客から口説かれたり、おさわりされたりしているストレスの解消には大いに有効に相違ない。あれもこれも、ごく軽いプレイであるが、烈しいプレイの証拠が眼前にあるだけに、全般に平常よりはプレイの度も強い賑やかな情景になる。

こうなると檻に繋がれた男は、檻の一部分となつて、いわば壁に掛けた拘束具と同様のムード作りの道具建ての一部となつたようなもので、誰も特に、かえりみる者はない。鼻孔から、のどに流れる血は、どうやら止まったらしいが、ズキズキと痛む。正座している、したたかに打たれた太腿と尻とが痛む。

少し熱が出て来たのか、悪感がついて小刻みに慄えそうになる。全頭ゴムマスクの中で、顔は汗に蒸れて上気しきっており、口中が乾いて革とゴムの感触が、きつい。賑やかなクラブの騒ぎを背にして、一つの置物になりきって、鼻中隔の痛みに悩み、悪感にふるえながら、むき出しの下半身だけが妙に興奮し、興奮の印を見られまいとして、痛む太腿を、しっかりと合わせていた。

閉店の時間が来て檻から出された男は、洗面所に行つて、手早く服を身につけ、顔を洗ひ髪を掻きつける。(洗面所の鏡に映る自分の裸体が、予想以上に見事な鞭痕で、いろいろに写っているのを見て、男は一瞬、新鮮な快感を感じている)

代金は、いらぬと云うマスターと、正規の飲み代は払うという男とが、しばらく押し問答をして、結局、若干の金を支払つて男は帰っていく。

化膿止めを六時間おきに飲んで、一日中アパートで寝て、ほぼ熱も痛みもとれたのだが鞭痕が消えるのには相当の期間がかかった。特に太腿の腫れた跡は真黒になつて、執念深く残っていた。衣服の外に出る部分に跡はないから社会生活に支障はないが、シャツの下

の鞭痕は、ひとつの感覚的な秘密であり、夜はアパートの自分の室で、手鏡で不自由な小さな合わせ鏡をしたりしながら、だんだん薄くなつていく鞭痕を眺めて、よく出来たポルノを読む以上の満足感を得たのである。

その日のプレイは、常連の客達にクラブの吸引力を強める上では、たしかに有効に作用したが、マスターの判断は、おのずと異なっていた。冷静に事の経過を再点検してみた時どうも少し危険であつたと彼は考える。たとえば、Y字型に吊るして臀部を鞭の先端で打つた時、もう少し間合が狂つていれば、鋭い鞭先は「ふぐり」を叩き潰して、男はショック死していたかも知れなかつた。又、男が自己覚しない胸腺肥大体質であつた場合は、あの程度の鞭打ちでも、鞭打ち中にショック死する危険はあつただろう。万一そんな不幸が起これば、それでなくとも醇風美俗に、もとの営業だとして、取り締まり法規の研究に熱心な警察は、たちまち営業許可を取り消すだろうし、マスターもホステスも、殺人の共同正犯で検挙されるかも知れない。ムード的、微温的なプレイに飽き足らぬお客の強い要望はあるが、これに押されて行過ぎるのも、余程考えものだとは彼は判断していたのだ。

数日後に再び現われた、この女に、マスターが明確に、その意向を表明し、気分を害した彼女が、もう来なくなつたことは、男にとつても多くの客にとつても、真に残念な成り行きであつたが、如何にも止むを得ない。

マスターの甚だ微温的な、かつ、かつてのバーS Mのような暴利追求に陥ることを慎重に避けていた営業方針にもかかわらず、所管の警察では、このクラブを指に立つた吸針のような気になる存在として、何とか抜きたいと考えていたし、反復される注意の度に営業方針は、ますます慎重になり、遂に七一年の夏に及んで閉鎖の日を迎えることになった。一年たらずの短い寿命であつたが、詐欺的な営業態度によつて客から見離されたのではなく、本格派ではない、いわば奇ク版でなく大衆版であるとの、本格派の批判を受けながらも、一部の本格派をも含めた顧客からの強い支持を得ている状態で、取り締まりによつてダウンしたという点で、決してマスターの名誉になるものではなからう。それにしてもお互いに大人の楽しみであつて何処にも迷惑する人はいないのに、どうして是非クラブを閉じさせる必要があつたのか、男には、どうしても理解しかねたのである。

◎あとがき

この話の舞台(又は枠組み)として、本文同様七〇年秋から七一年夏まで新宿御苑前に存在した「ヤプーの館」を借り用いている。

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

一月分	1冊	三五〇円(送32円)
三月分	3冊	一一〇〇円(送共)
半年分	6冊	二二〇〇円(送共)
一年分	12冊	四二〇〇円(送共)

郵便番号
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたらという御要望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下さるのには大阪市住吉局私書箱第四十一号曉出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何力月分と御指定下さい。

○六月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分三十二円の御負担を願います。

○御送金下さる場合は、「現金書留、小為替、定額小為替、(切手代用は一割増)振替

私見によれば「……館」を借りることは、多くのの人にとって、次の利点がある。

①仮空のモチーフは漠然として捕え難いが、現実の枠組みに入れてみることで具体化し

(大阪四二七八三番)のいずれかをご利用願います。現金の場合、普通郵便封入は違法です。必ず「現金書留」にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代送料三八二円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何力月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添付致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたします。御留意願います。

○予約金が切れましましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印致します。継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りになりたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とお知らせ下さい。ば、当方では御指定の局留としてお送りいたします。数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

易く、いわば空の彼方に消失拡散しがちな風船玉を地上に繋ぎ留める重石になる。

②実際のプレイ経験は、かえって文としての表現が難しく、また表現することが相互に不都合で、以後のプレイが、し難くなるような場合も多い。その点「……館」は公開の場として存在したものであり、しかも既に過去のものとなったのであるから、経験したプレイを「……館」に結びつける事で安全に「無責任に」表現欲も満足出来る。ついでに言えば私の借り用いた「……館」は週刊誌等の紹介や若干の創作によって人々の脳裏に定着しているイメージとしての「……館」であって、必ずしも現実の「……館」ではない。たとえば現実の館はイメージよりも小規模だし、本文中の二人のホステスのモデルは、私が訪れた一夜、たまたま、遊びに来ていた二人の若い女性であって、館のホステスではない。警察の「プレイ場所の提供は黙認するが従業員のプレイサービスは認めない」という方針は、私の訪れた夜について言えば、案外忠実に守られていたのである。ただし、暴利ではなかった事は、ほぼ本文の通りであったし、また館の閉じられた理由も大要、本文の通りであったと、これは後日、仄聞した処である。一時期有名であった実在の「ヤプーの館」をヒントにした小文なので、借り用いた趣旨と方法とを老婆心ながら、ここに明らかにしておく。

愛欲卍 (まんじ)

夕霧の局と敬称される加藤カツ代と、その「お枕」に指名された佐瀬直美の二人は夫々二名ずつのお末に抱かれてお錠口（奥と表を区切る扉口）へ出頭した。

二人共、一昼夜の精進潔斎をして、五臓六腑から清めあげ、いやが上にも磨きあげた白磁の裸身にはシミ一つもなく、ひたすらに、この夜、一夜の栄光に戦っていた。

表のお錠番が朱房を引くと、奥の方でガラランという鈴の音がして、純金で覆った

扉がサツと観音開きになった。

「夕霧の局、お枕共々、お召しにより、参内いたしました」

付き添っていた表年寄の伊原直子が丁寧に言った。お錠口の向こうに迎えに出ていた数名の女官の中で、奥の上臈が一人、進み出て「夕霧の局、お召しの由、承っております。お預りいたします」

と、これも丁寧に会釈を返した。

白絹に包まれた二人の裸身は、表のお末から、奥のお三（サン）の手に渡される。

お錠口が、音もなく閉ざされた。

第四十一回

前号まで『有明の独裁する秘密裸女王国で、彼のよき協力者、大后貴和を頂点とする数千の美女群は、それぞれの材質に応じて五段七階級に分類され、有明に畜従隷従している。貴和、サラ、エミー司令など、天位地位を占める貴妃達を別にして、お手付として闇に奉仕するのは上臈に限られ、夫々局を賜わっている。夕霧の局もその一人で、久しぶりに伽を命じられた。彼女は枕の中臈としてニューフェイスの佐瀬直美を伴うことに決めた。夕霧が貧農の娘だったのに比べて、直美は豊かな実業家の家に育った。



二人宛のお三が、夕霧の局と直美とを抱いて豪華としか言い様のない回廊を、奥へ奥へと進んだ。

はなやかな笑い声が聞こえた。右手の居間の一つで、貴和が有明に何か面白いことを言ったのであろう。しかし、夕霧の局も、まして枕の中臈である直美などは、こうした大奥での団らんに加わる資格はない。二人共、その戸口を素通りして寢室へと運ばれて行く。

「夕霧の局の参内ですわ。もう夕霧が、かかって参りましたものね」

シェリーのグラスを飲み干しながら貴和がいたずらっぽく、言った。

「下手なシャレだね」

プツとふき出しながら、それでも有明が悪口を返した。

それぞれ八人の女体で構成された人肌椅子に、ゆったりと、くつろいでいる。

わずかに十畳ばかりの小部屋だったが、天井を除いて、床から四方の壁にいたるまで、呼吸をする裸女の素肌で覆われているのだ。普通なら、ひといきれや発熱のため、ムンムンする筈なのだが、巧みに配置された空気清浄装置、その他の空調設備のおかげで、室内はすがすがしい初春の雰囲気そのものである。

給仕が右往左往する煩を避けて女体テーブルの真中に純金の花模様で飾られたリフトがあった。それを股にはさむようにして、下半身をテーブルに埋めた姿勢のお次が二人、それぞれ、リストから上がってくる山海の珍味を有明はじめ貴和、星など列座の貴妃たちに配ってゆく。生きたテーブルは、その度毎に冷たい皿には粟を生じ、熱い皿に焼かれて小刻みに慄えるのだった。

ここではナイフもフォークも使う必要がない。脇待する、お次ぎ二名の指が、その代りをする。もちろん彼女等は爪を短く切り、手術をする前の外科医の手みたいに、二重三重の洗滌消毒をさせられている。それよりもっと難しいのは有明や貴妃たちの心を読みとることであつた。次に、何を口に入れたかと思っているのか、そのテンポは、どうかとか、又、一回に口に入れてあげる量は、どうかとか、一切を素早く察知して、過不足のないようにサービスをしなければならない。もっと厄介なのは、こうした嗜好には定式がないことである。同じ人物でも、日によって又、時によって変わってくる。だから、時には小声で「キャビアを召上がりまますか？」などと聞くことも許されている。これとても相手の

気分次第でウルサがられたり、無視されてしまふ事も多い。

酒が又、大仕事となる。この部屋にいき、有明は盃を持たない。すべて美女達が口移しにして捧げるのである。有明の唇に触れることが許されるのは、お手付き以上、つまり一品の上臈以上でなければならぬから、お次ぎ二名が脇待する他に「酒（ささ）の上臈」という、お役が有明の側に控えることになる。貴妃たちは自ら盃を使って飲むが、時々、有明に近づいてサービスをすることもあつた。すべてが、有明を中心とし、有明の欲望を満たすために奉仕されるわけだ。

充分、欲をつくした頃、有明が左手で一寸した会図をみると、宴の責任者である上臈がポンポンと手を打った。

すると、それぞれ大小のクリスタル製の壺を捧げたお次ぎ女中が膝行して入ってきた。

部屋の一隅にみると、大きい方のクリスタルを持ったお次が仰臥すると膝を曲げ、膝頭と両手で壺をはさむように、おさえた。豊かな乳房が壺の底に、つぶされそうに見えた。

もう一人の裸美人はフラスコのようなクリスタルカットを股の間に、はさむようにして

仰臥した女中の膝に腰かける。

カチツと音がして、夫々の硝子器の蓋が、とられた。

これが合図であるかのように有明が立ち上がると、女の膝に、またがるようにして坐った。即席の便器なのである。二人の女中によって、大は、小は小のクリスタルに別々にとられる。二人が器をおしつけるようにしているし、体と体とがピッタリ合わさっている、音も臭気も殆ど洩れない。

「よし」

小声で有明が言うと、二人の女は争うようにして各自のカットグラスに蓋をして、横へ出した。有明がドッカと乗っている下でやるのだから、容易ではない。二つの硝子器は直ちに他の女中たちによって持ち去られた。

上の女中がグーツと上体を反らせ、後手で上半身を支えるのを追うようにして、有明も胸を合わせて行った。下の女中が濡れた部分を舌と唇で巧みに拭き取ってくれた。ここでは紙も使わないのである。

隣室は浴場になっていた。

用を足した有明がくるのを待つようにして中央の湯舟に温水が満たされる。大きな純金

の湯舟には、いうまでもなく数名の肉体家具が貼りつけられていた。水底に沈む裸女の口には、あらかじめシュノーケルが含ませてあった。

風呂頭の中臈が指図をして、裸女のマッサージ台が組み立てられる。

むしあがった有明の全身に香油が、ふりかけられ、お次ぎたちがマッサージを、してゆく。たっぷり一時間もかけてマッサージが終わると、いよいよ寝室に入る段取りとなる。

厚い絨氈を敷きつめ、善美をこらした二十畳ばかりの寝室は、すべてルイ十四世時代の装飾で満たされていた。しかし、ベッドだけは例によって肉体家具の構成であった。

隙間もなく組み合った裸女のベッドには白絹のベッド・カバーが、かぶせられている。夜詰めの中臈が、そのカバーをとり除くと、ベッドの上に、夕霧の局と、お枕の中臈、佐瀬直美の二人が平伏していた。

有明は無造作にベッドに腰をかけた。遅しい重量に圧しつぶされる柔肌が、ググツと沈む。幽かなタメ息が床下から聞こえる。ベッドの表面には絨のような乳房、腹、そして豊かな臀部などが様々の曲線を画いて波打っているだけで、彼女等、肉体家具は、その頭部

を無理に曲げて、床下の方へ出す様に組み合わせられているのだ。

「今夜の枕はニューフェイスだな」

有明の質問に、夕霧の局が上ずった声で答えた。

「はい、左様でございます。中臈C—十三号俗名、佐瀬直美でございます」

「覚えがあるぞ」

つと有明の手が佐瀬直美の顎をとらえて、顔を、あげさせた。自然に伏目になった、まぶたから、美しく反った睫毛が、こぼれ出てそれが怖れとも歓喜ともつかぬ複雑な感情の動きにピクピクと慄えていた。深窓に育ち、汚れを知らない二十才の頬は、まだ固い桃の実を連想させる。

「いい女だ。可愛いがってやろう。一生懸命に、つとめるがいい」

枕に声をかけるのは極めて異例のことだった。感激のあまり、佐瀬直美は呆然として、お礼を申し上げることさえ、出来ない。代って夕霧の局が、

「お言葉、有難うございます。お心に、かないまして、幸せに存じます」

と小声で言上した。

そんな、やりとりを微笑しながら眺めてい

た太后、貴和が言った。
「さあ、今夜も楽しく、
やすませていただきますし
よう」

佐瀬直美が手足を真っ
直ぐ伸ばして仰臥すると
その左側、ソフトな曲線
が浮き沈む人肌ベッドの
上に、太后貴和、有明、
夕霧の局（加藤かつ代）
が横になった。直美の滑
らかな下腹部が有明の頭
を支え、従って、その豊
かな乳房が太后、貴和の
頬に触れる。貴和の方を
向いた有明の、脊中を抱
くように寄り添った夕霧
の黒髪は、直美の腿の上にちらばっていた。

嫉妬の感情は誰にでもある。特に、それが
愛する相手であれば、尚更であろう。貴妃た
ちの間に有明をめぐるの妬情がないといっ
たら現実的では、あるまい。そんなこと一切
を承知の上で、有明は強く、そうした感情や
行為の抑制を、要求していた。刑罰は、ただ



一つ。有明の側近から外されるといふこと
である。それが何にもまして貴妃たちを怖れさ
せていた。有明に近づけるといふことが出世
の尺度である、この国で、その反対が、どん
なに屈辱であり苦痛であるかは、想像を絶す
るものがある。事実、自殺をしてしまった女
の例さえ、あるくらいなのである。

自殺も又、この国では大きな罪の対象とな

る。有明に捧げた生命は、自
分勝手に処理する自由が与え
られていない筈である。だか
ら自殺者は、たとえ如何なる
高位者であっても、その名誉
を剥奪され、遺体は大勢の面
前で、凌辱を受けることにな
る。一人の自殺した女官は、
狂人に恥かしめられた上、ピ
ラニアの池に投げ込まれてし
まった。僅かに残った白骨さ
え、粉々に砕かれて「家畜」
の飼料にされたということだ
がある。

はげしい愛の、いとなみで
あった。

有明の精力は貴和をも夕霧をも巻き込んで
しまい、更に枕の中臈である佐瀬直美にまで
及ぼうとする勢いであった。

膝頭や肘でグリグリされるベッドの方こそ
災難だったというべきであろう。その上、三
人の男女から流れ出る滝のような汗を、ま
とに受ける気持悪さにも耐えなければならな
いのである。たとえ、どんなに訓練し抜かれ

た人間家具であつても、なま身である限り、辛抱しきれない苦痛だったろう。あちこちから、こらえ切れない悲鳴が噴き出してきた。もつとも、堅くギヤグを噛まされているのだから、声にはならない。有明たちにはベッドの軋む音としか、聞こえていなかった。絶頂に達した貴和が声を放って、ぐったりしてしまったというのに、衰えを見せない有明の情熱は、忽ち夕霧の局をも覆っていた。ここを一期と夕霧は燃えに燃えた。そして火のようなものを自らの体を感じた瞬間、歓喜と充足感に全身が融けて流れてしまいそうな気がする。

「あ、ありがとうございます」

大粒の涙を拭いもせず、ただ、むせび泣く夕霧の局だった。

その夜、一休みした有明は、佐瀬直美にも情けをあたえた。彼女はお手付きとなり、上臈の地位を授けられることになる。

お胤(タネ)番

さつき、夕霧の局が、そうした通り、佐瀬直美はスグに正座して、キレイに舌と唇で拭きあげて仕末をする。

さすがの有明も、グッタリとなつてしまつて、佐瀬直美のするままに、まかせ、反応を示さなかった。

「おなさけ、有難く頂戴いたしました」

ビシヨリと濡れた人肌ベッドに顔を、すりつけるようにして、お辞儀をした佐瀬直美はベッドを降り、腰を高々とあげた四つ這いの姿勢で隣室に退つて行つた。これも夕霧がしたのと、全く同じだった。

隣の浴室には不寝番の医官(もちろん、現役の美女である)が待ち受けていて、佐瀬直美をマッサージ台の上にあげ、婦人科の診察をするときのような姿勢を、とらせる。

ジージー、という音が、した。

小型のサッキングマシンが、作用する。

有明のものほど神聖視され、貴重に扱われるものはなかった。

このようにして採集されたものは、直ちに保存液と共に特製のアンプルに封入され低温容器に格納される。そして、その夜のうちに予め定められた順位に従つて十名の有資格者(三品以上の高官)に配給される。

これを運ぶのは「お胤(タネ)番」と呼ばれ、通常、奥上臈が交替で引き受ける。

深夜、アンプル一〇個を入れた黄金の容器

を、二人のお次ぎ番にかつがせ、音もなく各局を廻つて行くお胤番の姿は、魔女のように不気味だった。

指定された十名の高官は、お胤番が廻つて来るまで、幾晩でも斎戒沐浴して待つていなければならぬ。万事が、有明の気分次第で決まることだったから、お胤の届くのも深夜ばかりでなく、時としては宵の口であつたり又、明け方であつたりする。

アーティフィシアル・インセミネーションだからといって粗略にすることは許されない。すべてが礼儀正しく為されなければならないのである。

お胤番は有明のモノを忠実に模した軟質プラスチック製のものを持っている。

礼式は、含頭礼をすることから始まる。有明が目の前にいるかのように平伏してから、「お胤、有難く頂戴いたします。願わくは聖なる、み子を与えたまえ」

と申し上げ、先ず下の唇を触れ、次に体をずらせてローぱいに頬ばるのである。

ついでながら、有明は自分のお手付きに、ドシドシ妊娠することをすすめている。子供

を作らなければ女として本当の美しさ、色気を持つことは出来ないからである。しかし、自然分娩まで置くと女体を著しく損耗するので、僅か三カ月で人工流産させ、あとは特殊な培養器の中で肥育させる。その点、ドクター・ウィリーが豊富な人体実験を駆使して開発したこの国の技術水準は地上のそれを遙かに凌いでいた。ただし肥育されるのは女の子だけで男児はデイスカードされる。

正常分娩期に達した乳児は、地上に送られ強大な秘密機関の手で慎重に選択された養父母に托される。血統、経済力、その他、詳細な条件をパスした若い両親は、自分の知らない間に、本当に自分たちが作った赤ちゃんを有明のそれと、スリ替えられてしまうのである。スリ替えは分娩直後、巧妙に行なわれるから、全くわからない。

誰の腹を借りた児を、何処の夫婦の娘としてスリ替えてしまったかということは有明しか知らない極秘事項であった。生みの母親とて、タッタ三カ月で取りあげられてしまった赤児？ に愛着心の持ち様もないというのが現実だったであろう。

有明の意図は、あくまで慎重そのものであった。すなわち、自らの血をひいた娘たちの

生長を注意深く見守り、材質の点で、この国に最高位をもって受け容れられると見極めたものだけを再び誘拐して来ようという、計画だったのである。言いかえれば、一定の水準に達せず、又、有明の興味を惹かない娘は、そのまま、地上の某々の娘として幸福？ に生涯を過ごすことになるであろう。

とはいっても、この制度が採用されたのはウィリー博士の技術が確立した五年ほど前からのことで、秘かに地上に送られた赤ん坊の数は未だ五十八名でしかないし、年令にしても最高で四才にしかなくていないから、有明の企図が実現されるには、これから先、十数年はかかる気の長い話だったのである。

有明たちは、再び入浴して汗を流し、ベッドに戻った。勿論、ヌルヌルになってしまったベッドは、あたらしい美肌と入れ換えられていた。

そして、決い疲労感が健康な眠りに皆を誘って行く頃、夜も次第に深まって行ったのである。

もちろん、四肢を極端に折り曲げてベッドを形造っている物位の裸女たちは眠るところではなかった。長い夜が明けて、ネグラに戻

れる時がくるのを、ただ齒を喰いしばって待ち焦がれているのである。

眠れないのは夜詰の中臈も同様だった。ベッドの下手、約一メートルほど離れて、ベッドに脊を向けて正坐して、夜を過ごすのである。

もっとも、夜詰の当番が決まると、その日の昼間は、睡眠薬を飲まされてグッスリ眠らされてしまっているから、ほとんど眠気を感じない筈である。

その上、脊後には物凄いシーンが展開している。見ることは許されなくても、一メートルの近さでは、かえって生々しく想像を力キ立てざるを得ない。

又、音は容赦なく耳にとび込んでくる。お手付きになることに唯一の望みを托している中臈にとって、これは残酷な試練だった。情感をこらえ切れずに、濡らしてしまう中臈が多い故か、絨氈の、その位置には丸いシミがついてしまっていた。

その点、扉の外で直立して番をするアマゾン将校の方が、まだしも我慢しやすいのかも知れない。

とにかく、このように、中臈一人、近衛将校一人が徹宵して有明の眠りを守るのが仕来

りだった。

もう一人、眠ろうとしても眠れない女性がいた。はじめてお手がついた枕の中臍、佐瀬直美だった。

今夜を最後に、もうお枕番ではなくなるのである。有明、貴和、そして恩人である夕霧の局、三人の頭を自らの体で支えながら、とうとう行きつくところまで来てしまったと思うと、万感が胸に迫って、ますます目が冴えてしまうのだった。

熟睡した三人の頭（みかしら）は、いっそう重たく感じられる。喰い込むように胸乳、下腹、そして太腿を圧迫する。しかし、このような勤めも今夜が最初で、しかも、最後だと思うと、少しも辛く感じられないのであった。

——もう四年も経ってし

まった。

鼠蹊部に跡（いれずみ）されたC—O—三号という肉体番号を見れば、彼女の捕獲年次が四年前であることがハッキリしている。

四年といっても、平凡な地上の生活に当てはめたら四十年にもなるであろう。

はじめの二年間は、それこそ血の涙、血の

汗を流す日々が延々と連なっていた。泣きわめき、のたうちまわって、自らの悲運を呪った。

桎梏は自由な筋肉の動きを抑圧し、その代り、使ったこともないような筋肉の運動が強制された。

大実業家の愛嬢として恵まれた少女時代を過ごした彼女には人一倍の屈辱であり、又、苦痛そのものだった。

しかし皮肉にもその苦難が彼女を再発見させる結果となった。

審問廷での判決はBCBAFで、最初は、畜位にランクされてしまったのである。

幸せすぎる境遇では特に勉強する必要もなかったし、又、特に美しくならねばならないという意欲



も持たなかった。

その上、健啖な美食家だったから、どうしても太り過ぎの傾向があった。

そんなことが、彼女の材質を見誤らせてしまったとしか考えようがない。

経験豊かな審問官たちも、有明自身でさえC—O—一三号を、それほど高く評価しなかったのである。

ところが、家畜舎に収容されて厳格な調教が始まった途端、目立って贅肉が落ちたことは勿論、家畜食では栄養価はあっても、余分なものは少しも与えられなかったから、めきめき健康になって行った。

そんなわけで三カ月もすると、誰が見ても畜位にいるべき女囚とは考えられないほど美しくなってしまった。

勿論、刑罰として上級者が畜位あるいは物位に落とされる事例もあるから、一般には、有明に何か考えがあつて、したことだと思われていた。

しかし、当の有明はすっかり忘れていて、見ることがなかったのである。

その見落としを最初に発見したのは、貴和だった。

C—O—一三号が彼女に与えられた家畜だった故もあるが、ある日、調教所へ行って、この美畜が、思いがけないほど、綺麗になっているのを見て、びっくりしてしまったのである。

早速に、カプセルに収められたマイクロフィルムを拡大して、審問調書を精査してみると、地上での家柄といい、教育程度といい、非常に恵まれた環境で育っていたことが、わかった。

又、測定しなおすまでもなく、智能指数、情緒反応も最高に近い。

それならばというので一計を案じた大后貴和は、有明に内緒で、この家畜を自分のステに引きあげて、畜位のまま特別の教育を、あたえたのである。

その間、剃りとられた四カ所の毛髪、特に頭髮が伸び揃うのを待つという、ねらいもあった。

幸いなことに、四年前には未だ、毛根電気分解の制度が定められていなかったから、体毛は容易に回復することが、可能だったのである。

貴和の、さりげない誘いを受けてスエテをたずねた有明は、佐瀬直美を再発見すること

になった。

そのいきさつを聞いて、審問の方式を大改革したほどのショックを受けたという。

夕霧の局にあずけられ、この局一流の厳格な仕込みを受けて佐瀬直美は一層、磨きあげられて行った。

来し方、行く末を思い出して行くと、佐瀬直美には地上の生活が遠い遠い過去のようにさえ思われてきた。

それほど、今夜の充実感は大で、彼女は幸せだった。

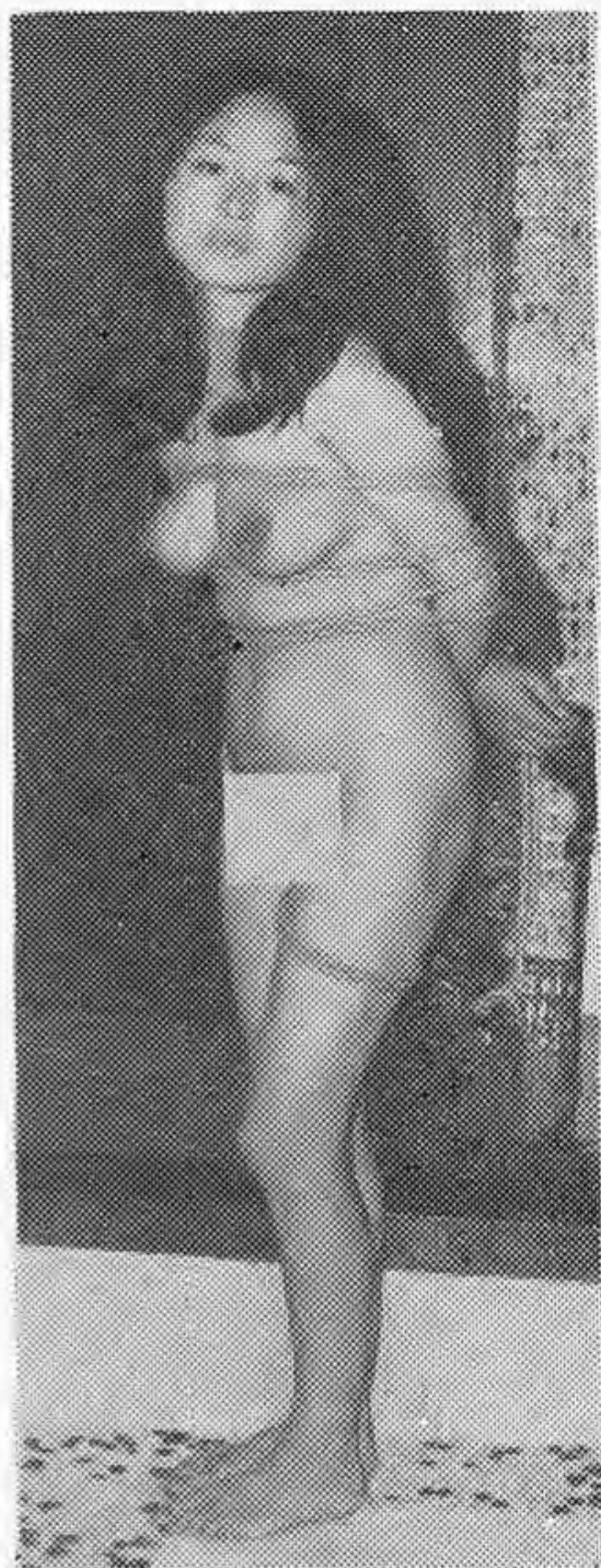
明日から、彼女は上臈となることができるのだ。

そして、自らの局を持つことを許されるのである。

有明が寐返りを、うった。

そして、貴和の頭越しに、佐瀬直美の乳房をギョツと握んだ。勿論、夢うつつのことだった。

痛みに一瞬、眉をくもらせながら、それでも佐瀬直美は有明の手の上に、自分の手をソツと重ねたものである。



M 女 通 信

プレイに徹したい

高 たか

村 むら

浩 ひろ

子 こ

私は七月に今までお勤めしていたお家^{うち}をやめました。始めて都会に出てきた私には、住む家ありませんでしたので、住込みで三食

付きのお手伝いさんは、その時のお仕事としては大変な魅力でした。都会の習慣も、それに地理もわかりません

ので、私のような田舎出の娘にとっては最初に、お手伝いさんを選んだことは大変よかったと思います。

都会の生活にも大分、慣れてきましたし、アパートを一人で借りることの出来るくらいの貯金も出来ました。今までのお手伝いさんですと、お給金のこともありますが、休みがきまっていませんし、それもお家の都合で、いろいろ変わったりしますので、七月のはじめに思いきってお暇をいただきました。

今、お勤めしている喫茶店も決してよい待遇とは申しませんが、お手伝いさんをしていたときよりは時間的に自由なので二十一才の青春と都会生活を一人で楽しんでおります。とあって、のんきにもしておれないのです。来年の四月には妹も都会へ出てきたいといって私のところをあてにしているらしいので、それまでに少しは、ましなアパートへ移ってきたいのです。今のところは私一人だったらいいのですが、妹と二人ということになれば手狭なのです。

最初、私が奇ク編集部へお便りしたときはプレイだけ——とお願いしておきました。とてもモデルになるなんて自信がなかったんです。せめてプレイだけでも、させて貰えれば

有難いという淡い希望を抱いていたのです。それがモデルにして頂き、その都度、頂戴するモデル料も、お給料から比較して私にとっては勿体ないくらい多く、私の貯金をふやすのに大変、役立ちました。

そして、すすめられるまま、五月号では拙い告白「被虐こそ私の夢」という文章を載せて頂き、生れて初めて原稿料というものを手にしました。そして七月号では、辻村隆さまのカメラハントで『華麗な衝撃』として取材され、その頃より塚本鉄三さまのカメラの前に立つことが多くなりました。といっても、その頃の私のお休みが月に二回くらいで、それも、いつといて、はっきりしないので、どうしても回数といっても、限られていました。

それが、お仕事が変わって身体に自由が来てきますと、もう自分の身体を責めてほしくって、たまらなくなってきました。それで何度もお電話しました。五回くらいでしょうかしら。八月は私の方から押しかけて行って緊縛モデルに使って貰いましたが、私の被虐心は、そんなことでは、おさまりません。

そこで私は、長い長い手紙を塚本鉄三さまにあてて書いたのです。

写真をつつすために、縛ったと思ったらシャッターを切り、また縛り直してシャッターを切るといったことの繰り返しでは、私の気持はどうしても満足されませんので、どうか写真を撮るのはやめにして、責めばかりにして下さい——と書きました。モデル料はいりませんから責め抜いて下さい——とも書きました。

股間縛りや剃毛、それに特に浣腸責めをしてほしいと、お願いしました。

『私は貴方様に折り入ってお願いがございました。』

す。私を貴方様の奴隷にしてほしいのです』という書き出しで、私は一生懸命にその手紙を書きました。書いているうちに、私は次第に自分から昂奮してきて、本当に羞かしいことまで書いてしまったのです。どうせ、塚本様おひとりだけが読まれる手紙なのだからと思って、はしたないことまで書いてしまいました。

『いつもの写真撮影を、やめて……イジメて……ただけでいいでしょうか。私はこの一言を書くために、二晩考えてしまいました。ど



うか、この私の願いをお聞きとどけ下さい』

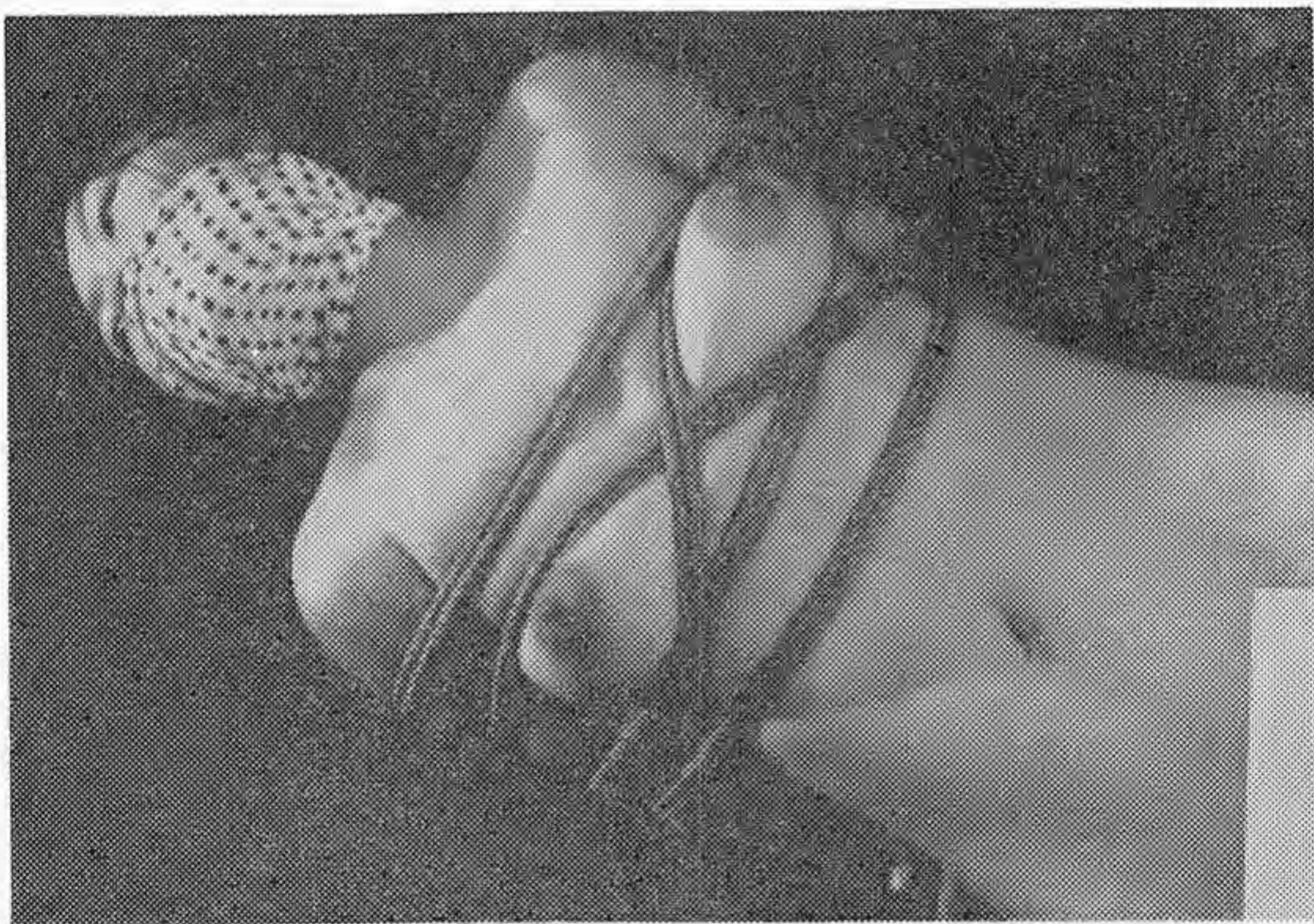
そこまで書いて、私は頭が、ぼーうとしてしまいました。まだまだ、私は自分の思いのたけを書かなければならないという気持ちに追われていました。

『一度乱暴にあつかわれてみたい——そう思っていた私です。今までモデルに使っていただいて、たしかにきびしく縛られました。でも、いつも大切にされていました。縄も、すぐ解かれてしまいました。』

深く乳房にくいこんだ縄、ギリギリの限界まで開かされた足。私は、そうして貴方様のナグサミモノにしてほしいのです。考えるだけでも体がふるえます。

その他、ローソク責め、タテ縄、ヒシ縄、座禅ころがし、海老責め、鞭打ち、乳房責めなど、どんな事でも結構です。特に浣腸責めは、してほしいです。私を思いきり縛りあげ責めて下さい。私は貴方様の従順で忠実な奴隷になります』

そこまで書いて私は、もう一つ忘れ



ていることに気がつきました。それはほんとうに恥かしいことながら剃毛されたいということが私の願いでした。

でも、今まで、どうしても、それを口に出して言えずにおったのです。口に出して言うなんて、とても羞かしいことですが、お手紙だったら、目をつぶって書けます。どんなことがあっても口では言えません。

『この私の切なる願いをお聞きとどけ下さいます事を信じております』

そこまで書いて、手紙は終わりました。速達にして投函しました。ひとときも早く、自分の手元から手放したい気持ちだったのです。

三日して私は塚本さまに、お電話しました。何度も何度も、お電話するのは御迷惑とは思いましたが、私はお返事を一方的に、ぼんやりと待っておれない気持ちでした。

「ああ、貴方から手紙が来ていましたっけ。ごめんごめん。忙しくて、まだ読んでないんだ。ちょっと、待って下さいな」

彼は、封を切ろうとしているようで

す。

「いや。今、読むのは、いや。封を切るのは待って、お願い。それより、あした逢っていただけないかしら？」

私の切ない思いをこめて必死に書いた手紙が、彼の机の上で封も切らないで放ってあったのかと思うと、ちよっぴり悲しくなりました。そして、今、電話をつないだままで、その手紙を読まれることは、恥かしさで耐えられようありません。私はあわてて、明日のデートを約束して電話を切りました。

いつも控え目な私としては少し強引な申し込みようでしたが、彼が私の手紙を読んでいなかったのが或は幸いしたかしれません。とにかく、事情がわからず、まごまごしている彼を引き出すことに成功したのですもの。

その翌日、いつもの場所で落合いました。

顔を合わすなり彼は、「速達の手紙、読ましてもらいましたよ」と言って、意味ありげにニヤリとしました。私はもう耳まで真赤にして、うつむいてしまいました。顔が紅のようにほてっているのが、自分でもよくわかりますので、私は顔を、よう挙げませんでした。

あんな恥かしい手紙を書いた、はしたない自分が汚い女のように思え、穴があれば入り

たい気持でしたが、その反面、これから、彼の手によって自分の身に加えられる責めのことを考えると、胸がわくわくして、思わず知らず足も軽くなるのでした。

顔を真赤にした私の気持を察しられてか、塚本さまは、手紙のことについては、それから何もおっしゃいませんでした。

「それじゃ、今日は写真をうつすのはやめにして責めだけにするか。僕も縛りのトレーニングという意味でリラックスして、いろいろと研究してみようかな。僕の責めに対して貴女がどこまで耐えられるか、興味がありますね。ひょっとしたら、貴女が辛抱でけんくらしいヒドイ責めをするかもしれませんよ」

そう言われて、私は心の中では、どんなヒドイ責めでも辛抱しますから、どうかイジメテ下サイ——と思っていました。口に出しては、どうしても言えません。ただ黙って彼のあとについて行くだけでした。

でも、その日に私に加えられた責めは、今まで受けた責めの中で、一番、私を満足させてくれました。今、そのときのことを思い出しても、私は身ぶるいするような思いです。

部屋へ落着きますと、塚本さまは

「今日はカメラはいらないから、縄とムチと

ローソクと浣腸器とパイプ、これだけは出しておこうね。先ずお風呂へ入ってきなさい。風呂から上がった途端に、君は僕の奴隷になるんだから、覚悟しておきなさいよ」

そう言われても、私は部屋の隅で小さくなつて坐っていました。写真の道具と責め道具とを区分けしておられるのを眺めながら、もじもじしておりました。そうしますと

「さあ、早く入ってこんか。ぼやぼやしてる、時間がなくなるぞ」

と、どなられました。私はあわててタオルを持つと風呂場へ入りました。浴槽が大きいので、お湯はまだ半分ほどしか入っておりません。あんなお手紙を書いたから、どなられたのでしょうか。私は悲しい気持と、うれしい気持の入りまじった複雑な気持でした。

お風呂から上がった部屋で、もじもじしておりますと

「なにを、ぼやぼやしてるんだ。早く入ってこんか。これから奴隷の誓いをするんだ」

と、きびしい声をかけられました。私がおずおずと部屋に、いざり寄りますと、矢庭に左手首を握られて着ていた浴衣を脱がされ、右手を逆にとって、両の手首だけ縛られました。

彼は机の上に腰を下ろして、私にその前にひざまずけと命じました。私は夢遊病者のようにふらふらと彼の前にひざまずきました。

「今からお前は私の奴隷として飼育されるのだから、どんなことでも従順に言うことを聞くんだ。先ず奴隷の誓いを言ってみろ」

私は何のことだかわからず黙っていましたら、次の怒声がとんできました。

「はいと言わんか、このノロマが」

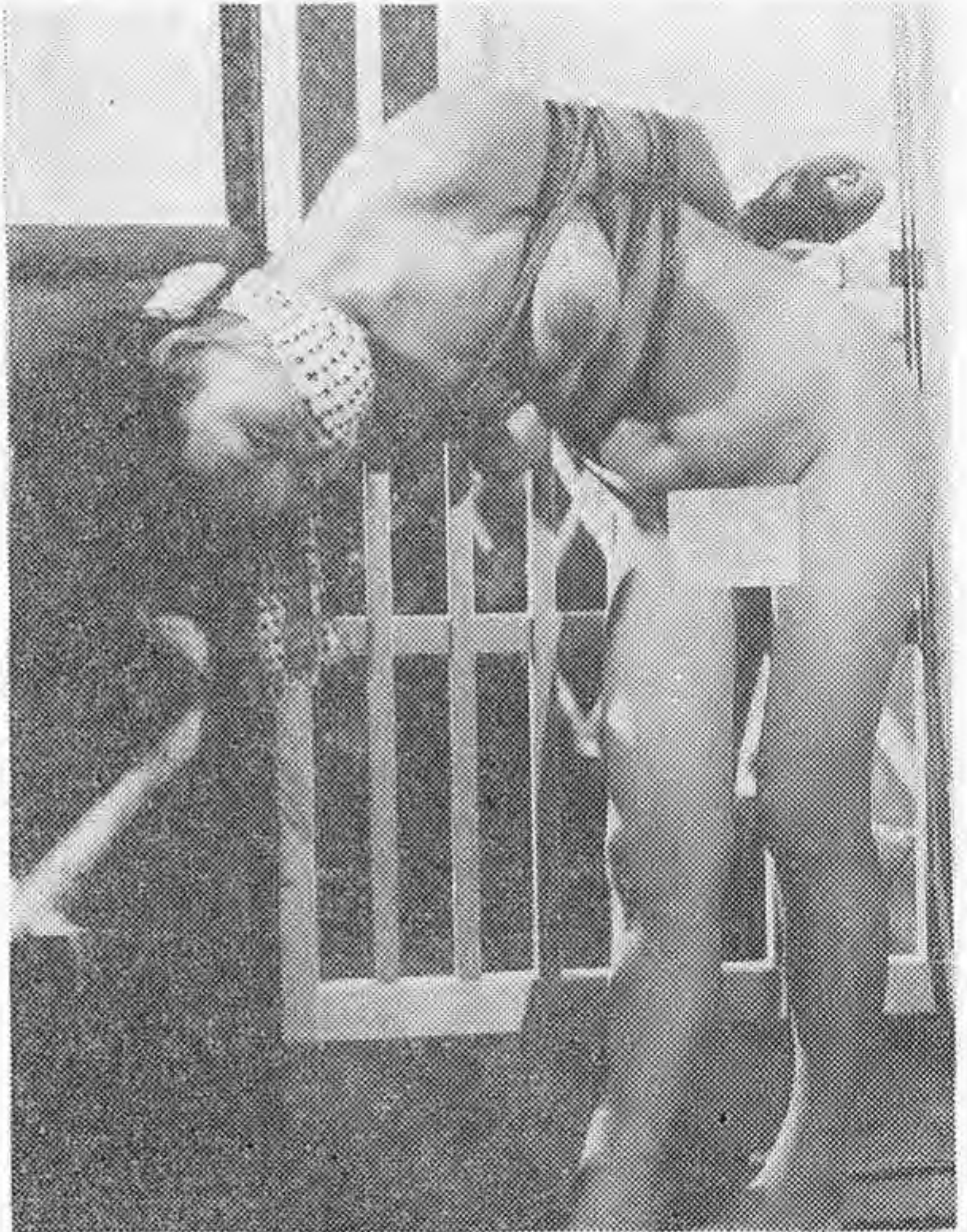
私の目の前で、ぶらんぶらんしていた右足が私の頬にとんできました。「は、

はい」私は、あわてて返事をしました。

「うつむいてばかりいず、顔を上げろ」

私の両頬をべつとりと脂足の足裏が挟んで起こしにかかります。

「奴隷の誓いが言えないんなら、代りに足の指と裏とを舐めて、奴隷であるという証拠を見せてみる。今日はまだ風呂へ入っていない



から、たっぷりと汚れているぞ」

私は目の前の脂足に口を寄せて舌をペロペロと出して舐めようと思いました。でも、私は両手首を後で縛られているので、どうしてもうまく舐められません。足は意地わるく右へ行ったり左へ行ったり、ひっ込めたりするものですから、いくら舌を長く出しても、じっ

と舐めていることは出来ません。

やっと口にはおぼって指をしゃぶろうとしますが、ひよいと足をひっ込められると、口から指がすぽっと抜けてしまいます。追いかけてようとして、思わず安定を失い肩口から、ころりところがつてしまいました。

「この不器用な、奴隷めが——」

足の指で鼻や耳を挟まれさんざんおもちにされた挙句、足の甲を首のところへかけて起こしてもらいました。今度は膝で組んで足を差し出して下さいましたので、やっとゆっくり足の指から裏まで舐めさせていただきました。塩辛い汗の味のする素足を舐めているうち、私はほんとうに身も心も、この人の奴隷だという気持が、心の底からしてきました。

これが奴隷の誓いというのでしょうか。

「御主人様はこれから入浴してくるから、そ



続けておりました。

「さあ、立ち上がるんだ」

という声に顔を上げますと、いつの間にもやら御主人様はバスタオルだけを腰に巻かれて右手にムチを持って立っておられます。ムチで追い立てられて隣のベッドの部屋へつれてこられました。後手首を縛った縄尻で二の腕から胸を縛られてからスプリングのよくきくベッドの上へ放り投げられました。

ふわっとした掛蒲団のやわらかい感触。私は本能的に両膝をすぼめて横向きになろうとしました。丁度、御主人様に背を向ける格好です。だが、すぐムチがとんできました。

「上を向いて股をひろげるんだッ」

お尻と、太股にムチが激しい、はちきれるような音を立てて炸裂しました。お尻から、はずれて両股の間に伸びたムチがジーンと灼けるようなショックを全身に伝え、思わず身体が熱くなって汗がふき出てきました。

「許して、それだけはカンニンして……」

演技ではなしに、そんな言葉が自然に口をついて出ました。自分の言葉で、自分が一層みじめになり、そして、今、とうとう御主人様の奴隷になったのだという気が、ほんとうにしてきました。

れまで、この姿勢でじっと待ってるんだぞ」

机の前にひざまずいたままで私は御主人様のお風呂から上がって来られるのを待たされることになりました。湯上がりですので裸でいても寒くはありません。身に何もつけていなくて、後手に縛られて放っておかれるということは苦痛はないのですが、なんとなく頼

りない気持がして仕方ありません。

この部屋は和室になっていますが、襖の向こうは洋室になっていて、豪華なダブルベッドが部屋の中央にでんと据えられています。上眼使いにあたりを見廻していましたが、いつ何時、御主人様が帰ってこられるかわかりませんので、私はじっと同じ姿勢を辛抱強く

「勘忍してほしかったら、御主人様に命令された通りにしてみろ」

私は、仰向きになりました。まだ股を開ききらないうち、別の縄が膝のうしろに掛かってぐっと引きしぼられました。それで左足は大きくひらいて胸近くまで曲げた格好になりました。

「お前の好きな浣腸器も、ローソクも、パイプも、ここに揃っているんだぞ。次は、こちらの足も挙げるんだ」

左足が簡単に上がったので、御主人様は安心されて右足をも挙げさせようとされたのですが、私はローソク、パイプという言葉聞いて急に恥かしくなりました。

「それだけは、いや。開かさないで——」

僅かに自由な右足をピンピンはねて抵抗しました。御主人様は私の権幕に一瞬ひるんで手を止められましたが、すぐ思い直されて、私に掩いかぶさるように押さえつけて右足の



膝に縄を掛けようとなさいました。御主人様が本気で私を開股縛りになさろうとしておられるのを見定めてから、私は右足を、ばたつかせて、あばれまわりました。

「他のことでしたら、どんなことでも、おきしますから、それだけは許して——」

足に縄が巻きつけられても私は足をばたば

たさせて、すぐそれはずしてしまいました。もがいているうちに、左の足の方も、だんだんとゆるんできます。暴れまわる私を押さえつけようと抱きしめておられた御主人様は足を縛るのを諦められて「許して、許して」と囁言のように呟く私の口に唇を寄せて来られました。それを避けようとして、私はのび上がりもがき、そして、とうとうベツドの上から上半身が、ずり落ちてしまいました。

掛蒲団と一緒に上半身がずり落ちて下半身だけがベツドの上に残っているという恰好になったのですが、蒲団が下にありましたので首が急角度に曲っていてもそう痛くはありませんでした。今日は写真をとられるということはありませんので、休みなく責められました。御主人様はそこで、くると姿勢を変えられて私の顔の方へお尻を向けられ、丁度身体の中で、一番汚いところが、私の口の真上にくるような位置になります。



した。

どんと御主人様の大きなお尻が私の顔の上に掩いかぶさるように据えられましたとき私は、無意識のうちに、その一番汚い個所に、唇を当てていました。

なんとも言えない香ぐわしい味、とてもたまらない舌ざわりが私を夢中にさせてしまいました。身も心も捧げきって御主人様の奴隷の身分になったみじめな自分が、ここではっきりと自覚させられたような気持でした。むしゃぶりとくようにしながら、私はそんな境地に、ひたりきっていました。

御主人様に奉仕している自分が幸でした。一番汚いところ、御主人様であるが故に何よりも美味なのが不思議でした。もっとも、御主人様の他のところも舐めさせていただきたい。そう思っ

るとき、御主人様は私の両脚を持って、ぐっとお開きになりました。それからの貴重な時間は、私にとりましては、何物にもかえがたい汲んでも汲んでもつきない悦楽の深い深い時間でした。

プレイに徹するというのが、こんなに楽しいものであるのか、それは私が想像していたより遥かに奥深いものでした。しかし、慾深い私は、もっともっと未知の悦楽を求めたくて貪婪でさえありました。拒否と抵抗のあとに訪れる甘美なSMプレイは、私の身も心もしびさせるのに十分でした。

私は唇をはなして「いや、いや」と叫びながら、両脚で御主人様の御顔を挟んでいました。両手で私のお尻をくすぐられたので、私はくすぐったさに、思わず身をよじり、そしてベッドに僅かに残っていた下半身も折り重なるように床に落ちてしまいました。

私が余り激しく拒否して、その結果御主人様が私に興味を失われて私を責めて下さらなくなるのを私は恐れました。私の体をイジメテ、イジメテ、その上、ケガシテほしいのです。それなのに、もし私が適当に抵抗しなかったなら、御主人様はいつも中途半端なところで、私に対する責めを中断されることがあ

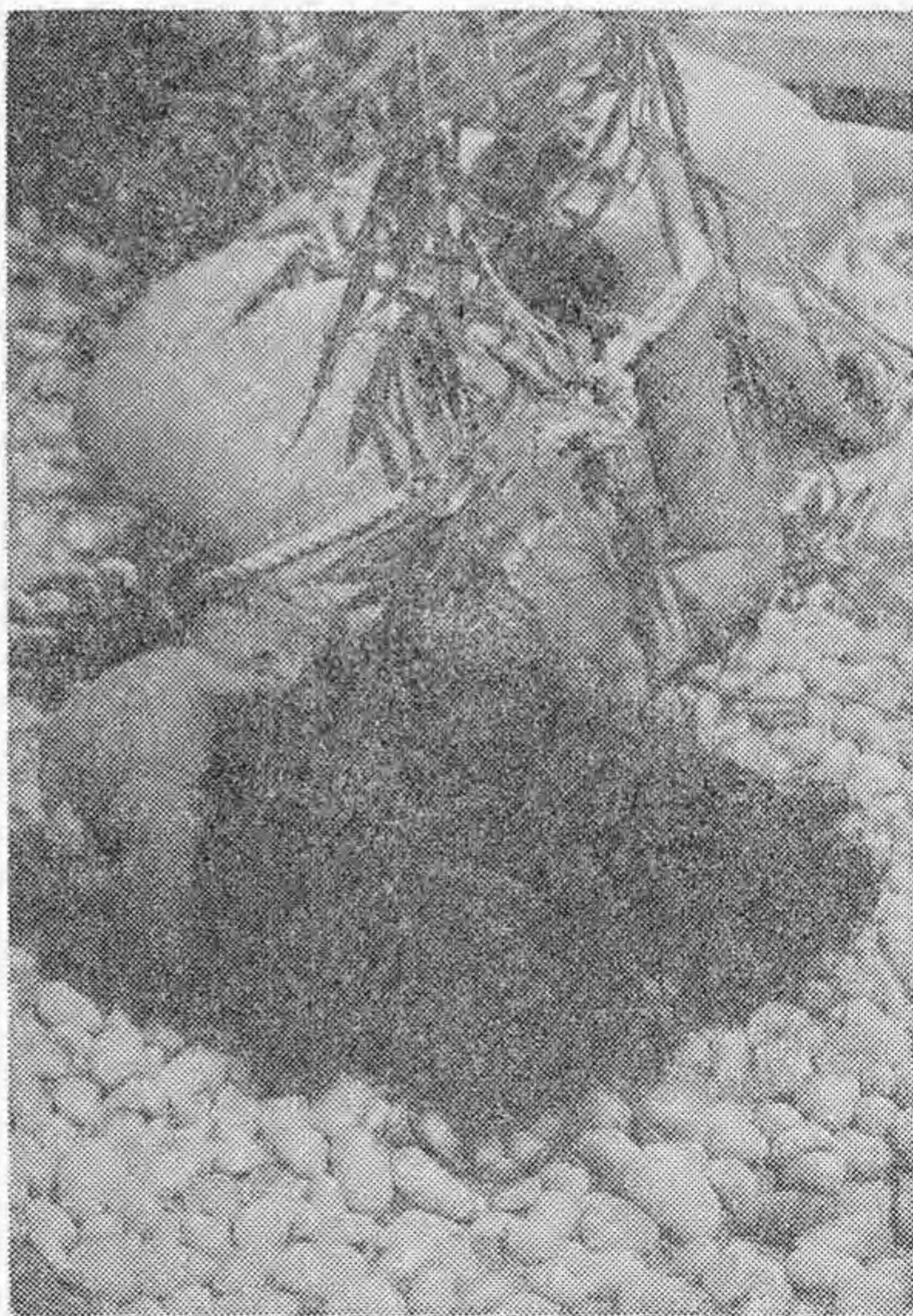
りました。写真を撮影されるがために、そう
なったのだと思いました。でも、でも、私の
ようなMの女性は、それだったら、不満で不
満でたえられないのです。

今日もベッドから折り重なって床の上へ落
ちたところで、御主人様が私の身を案じられ
て、この素晴らしい責めを、いやSMプレイを
中断されるのではないかと心配しました。そ
れで、恥かしかったのですが

「いや、いや、許して。それだけは許して下
さい。お願いです」

思わず、そう言っていました。何がいやな
のか、何を許してほしいのか。Sの方だった
ら、きっと私のそんな心を、さとして下さっ
た筈です。身も心も捧げて悔いがないという奴
隷の誓いをした私が、御主人様のお情けを、
乱暴に、最も野蛮な行為の中で賜りたいとお
願ひしていたのです。

それなのに、御主人様は私の身体から離れ
てからバスタオルを腰に巻かれると、右手に
皮ムチをお持ちになって、私の太股をパシッ
とお打ちになりました。御主人様は開股縛り
が不成功に終わったので、お怒りになってい
られるようでした。私はころろと転がって
お尻や胫もムチ打たれました。左膝に巻かれ



ていました。縄も、いつの間にやら、ほどけて
しまつて、両足は自由になっていました。

縛られたままで、御主人様から手籠めにさ
れたい——そんな大それた願いを私が抱いて
いたとしても、どうして、それを口に出して
言えるでしょうか。手紙で書けたことが、口
では、恥かしくて、とても言えません。

「縄は痛くありませんか」

さっきの、プレイをしている時とは、うっ
て変わった言葉使いで聞いて下さいました。

「いいえ、ちっとも痛くありませんわ。まだ
まだ辛抱できます」

そう答えましたが、本当は痛さを通り越し
て、もう手首も二の腕もしびれきってしまっ

ているのです。只、肘と肩とが、だるいような不快な痛さですが、それも辛抱できないという程のものではありません。

「それだったら、貴女の好きな浣腸責めを、

これからやりましょう。写真を撮らないというのは残念だが、まあいいでしょう。このままで浴室でやってしまおう」

私は引き起こされて、浴室へ連れてこられ

ました。このホテルは建ったばかりなので浴室も至って広く、ヒョウタン形の浴槽と円形の浴槽とがあつて、その間の洗場も大人が何人も寝ころべる程の広さがあります。その向こうには四帖半ぐらいの一段高くなった寝台のようなところがあつて栓をひねると、お湯がその上を流れるようになっていきます。

なんでもヨーロッパの王宮の浴室を真似て作つたものとかでこのホテルでも一つしかない特別室になっているそうです。

目の前に運び込まれてきました浣腸器具のかずかずを見て、私の心は妖

しく騒ぎはじめました。ガラスで作られた注射器のような形をした先が、まるくふくらんでいる大中小と三個の浣腸器。それに真中がゴム球で両端に管のついているエネマシリンジ。コップを大きくしたような筒型のイルリガートル。それを一まわり大きくした黒いゴム管をたらししたイルリガートル。ピカピカした金属製の冷たい光を放ちながら、タイルの上に並べられてあります。

私は洗場の中央に腰掛けさせられて御主人様が石鹸水をおつくりになる間、待たせられていました。大きな窓から光線がさし込んでいますので、それがまわりのタイルに反射して凄く明るいのです。これから人身御供の実験台にされる私としては面映ゆい気持です。

嫌がり激しく抵抗する私を無理矢理、押さえつけて大量の浣腸液を注入し、その上、排泄するところを大勢の男の人たちに眺められるという場面を私は、ひとりで空想していました。でも、今、ここで私が暴れたりしてガラスの浣腸器が、このタイルの上で破れたりしたら、それこそ大変です。私は腰掛けに腰を下ろしたまま大人しくしていました。

「さあ、これから浣腸をするから、じっとしてるんだよ。動いたら痛くてもしらないぞ」



御主人様は洗面器にいっぱい作られた石鹼水を中型のポンプで吸われて私の左足を開けようとなさいました。

「羞かしいから、そんなことしないで……」

そう言っ私は足をすばめようとしましたが、でも御主人様の手がしっかりと私の足を握っておられましたので、私のお尻から腰掛

けがはずれて横に飛び出し私は横倒しにタイルの上に、ころんでしまいました。

そんな片足を挙げたままの恥かしい格好で私は流腸器の嘴管の冷たい感触をアークスに受けていました。秘められた花を開かれるゾクリとした身ぶるいするような一瞬でした。

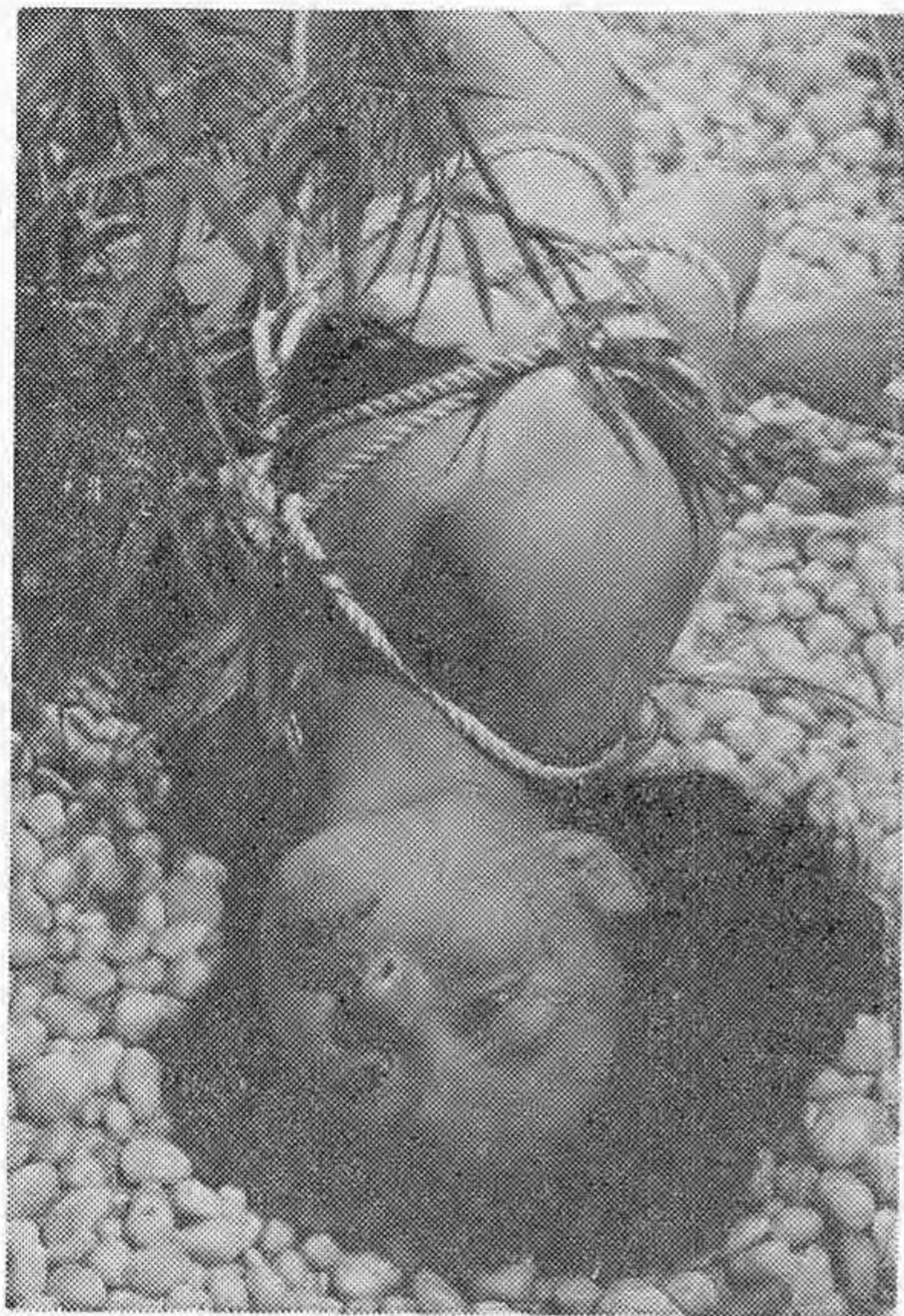
ジーンとお腹の底にしみわたる感触。一回

二回、三回——と石鹼液は続いて注入されましたが、表面的に私が何の反応も見せないの、次はエネマシリンジを洗面器の石鹼水の中に浸けて、ゴム球をキュッキュッと押し続けられました。その度に、直腸の粘膜に加わる水圧がなんとも言えない快さで、私は全身を思わず強直させました。

落着いて、落着いて——。私は、ともすれば燃え上がろうとする全身を必死になって冷静でいてもらおうと努めました。私の身体の一部は、きっと敏感に反応しているに違いありません。私の目の前に見えています足の指が自分では押さえよう押さえようと思っていますのに、私の意志とは逆に、思わず力が入って、そりかえったようになっています。

そんな私のじっと耐えているような気配がきつと御主人様にも伝っているのでしょう。

一生懸命、無言でゴム球を押しておられますが、二個の浴槽から立ち上る湯気で、じっとりと額に汗しておられます。心持ちお腹がぶつくとふくれてきましたが、その反面、最初の頃よりは、却って刺戟は薄らいできています。もっと、もっと入れてほしい。もっと沢山入れてほしい。お腹が裂けるくらい。もう行きつくところまで、極限状態まで早く行



ってほしいというマゾの心境です。

脇腹が痛くなったかと思うと、急に激しい便意が起こってきました。それは、お腹をしぼり上げるような痛さです。今、すぐ大便が出てしまうような差し迫ったお腹の痛さに、私は狼狽してしまいました。

「ああお腹が痛くなったわ。トイレへ行かせて——。早く、早く、トイレへ」

「したけりゃ、ここでするさ」

御主人様は平気でエネマシリンジのゴムを押しておられます。

「だったら、それだけでも止めて——」

「そうか、ここで排泄するんだな。それだったら、これで勘忍してやろうか」

御主人様はそうおっしゃって、自分の両足で私の両足を股裂きのような格好にされて、私の方をじっと見ておられます。いくらなんでも、こんな格好で排泄出来る筈はありません。私はなんとかして、両足をすぼめようとしましたが、御主人様の両足が、がっちり私の両足を捉えておられますので、どうすることも出来ません。

一時おさまっていました便意が再び激しさを増して、お腹の中が煮えくりかえるような痛さです。ゴロゴロと腸が蠕動しているのが

わかるのは少しおさまった時です。激しくなってくると、両手で思わずその脇腹の部分を押さえたくりますが、私の両手首は背後でしっかり縛られていて、もどかしいけれど、それも出来ません。

トイレでなくて、こんなタイルの上で、それも御主人様の見ておられる前で、どうして排便なんか出来るでしょうか。私は必死になつて便意をこらえました。お腹が煮えくりかえるような痛さの時は、脂汗をにじませながら耐えに耐え、少し痛みがおさまった時は、「神様、ありがとうございます。どうか、このまま、終わらせて下さいませ」

そうお願いしました。でも、神様はそんな私の願いは、とても聞き届けては下さいませんでした。そんなことを繰り返しているうち背筋から首筋へかけて、悪感のようなものが襲ってきて、それはとても気持ちわるく、私は不安感に襲われました。

私の意志の力で、自分の括約筋を支配するのにも、もう限界がきました。御主人様の目が、そこに注がれているのですから、なんとかしても、そんな恥かしいことだけはしたくありません。神様が私の願いをお聞き下さらないのだったら、自分の意志で働く括約筋でも

頑張っていて下さい。そう願いました。

でも、最後の頼みの綱であり、防波堤であった括約筋も怒濤のように押し寄せる奔流には耐えきれなくなってきたのが、自分でもよくわかりました。脂汗をにじませて必死に耐えているのに拘らず、ちびちびと漏れはじめてきたのです。一たび、漏洩したら、もう押さえることは出来ません。と、言いますより、私のMの心が、そのとき爆発してしまつたのです。

「ヒュー」というような声が咽喉の奥からしぼり出しました。両足を思いきり開かされたままで、私は爆発的な奔流を目の前五十センチばかりも、黄金色の帯で彩ってしまったのです。それから後は、とめどもなく、後から後から排泄しました。

顔を両手で掩うことが出来ませんので、私は頬を肩口に寄せて泣いていました。

「ヒドイわ、ヒドイわ。こんなことするなんて。トイレへ行かせてって、あれほどお願いしてたのに。バカ、バカ」

Mの昂奮がさめてしまいますと、私は羞かしさとみじめさだけが身体中に残っていて、急に縄目の痛さが身にしみ、ひとときも早く縄を解いてほしいと思いました。

小説「拷問クラブ」シリーズ(2)

美

し

き

獲

物

鶴 見 浩 一



カット・豪 城 二

吉川真理子は、始めて化粧を試みた。

二十年間、素顔の自分を通し続けてきたのだが、秋風のように気まぐれな乙女心は、ちよつとしたアクシデントで変化する。

——今日はデートだもん……。

真理子は、一人クスンと笑った。約束の相手が若い男であれば、化粧するという心境にならなかつたかも知れない。真理子のデートの相手は、銀髪の老人であった。

真理子は、松山と名乗る写真家の老人に、モデルを依頼され、報酬の魅力と小さなアパシチュールの気持に負けて引き受けてしまったのである。

温厚な感じの老紳士は、二時間五万円で貴女の和服姿を撮らして欲しい、と、新宿の街で真理子に声をかけてきた。二日前の事である。真理子は、松山老人の瞳が、秋空のように澄んでいる事に信頼を置き、今日の夕方を指定したのであった。

——二時間で五万円か、悪くないわ。決して小遣いに困っている真理子ではなか

ったが、それにしても学生の真理子にとって五万円の現金は魅力がある。冬のスキー旅行もできるし、以前から欲しかったカミユの戯曲全集だって全巻、買える。

——でも、まさかヌードでは……。

そういう危惧が、真理子の頭をかすめない事もなかったが、相手は六十近い老人であるという死角が、真理子の不安を一掃した。

——ふふ、きれいになった……。

大学のトイレで化粧し終わった真理子は、自分の顔に女としての満足を憶えた。処女の素肌が化粧によって、女らしいお色気をも出し出している。

廊下に出た所で、友人達に冷やかされた。

「あら、どうしたの、真理」

「今日は凄くきれい。さては、固物の真理子にも、ついに恋人ができたな」

「ふふ、そんなんじゃないのよ」

真理子は楽しくなった。美しいと賞められて、嫌な気持ちになる女性はいない。

真理子は、松山老人との約束の場所へ急ぐべく、校門前でタクシーを拾った。

それが地獄への道とは、夢にも想わない真理子であった。

松山老人は、いかにも若い女性が好みそうな、フランス風の小さな喫茶店で、静かにコーヒーを飲んでいた。

——あと十分か……。

間もなくやってくるであろう美しい獲物を想像すると、松山老人の胸は若者のように躍った。

素晴らしい獲物だな、と松山老人は思う。

二日前にあの娘を見た印象が忘れられない。スナナリと伸び切った若い四肢、豊かで弾力がありそうな胸、あどけない顔……。

その全部を心いくまで虐め、いたぶる事ができる。髪の毛一本から皮膚の一細胞に至るまでその死活は自分の気分委ねられる。

松山老人は、獲物を待っているこの時間が好きだ。あらゆる想像で、女体を責める楽しみがあるからだ。実現不可能な責め方も、想像するだけは自由である。

もっとも、この想像によって、松山老人は次々に新しい拷問具を考案してきた。空想と機械力が一致する時、そこには世にも恐ろしい責め道具が実現する……。

月一回の拷問ショウも、回を重ねる度にマシネリ化するの当然である。ここらあたりで、強烈で新鮮な責め方を考えなければなら

ない。それが観客に対するサービスであり、松山老人の義務であった。

——楽しい義務だな。

と松山老人は思う。表面的には観客の為にあっても、終局的には自己の快楽に繋がるのだ。その上、責める方法は無限にあった。プレイとしての拷問ではなく、女体の破壊そのものを目的として、さしつかえない。すでに松山老人の行為は、趣味を超えて犯罪といえるものであった。

時間きっかりに真理子は、きた。

「おじさまごめんなさい。待たれました？」
美しき獲物は、ニツコリと首を傾けた。

「いや、私こそ無理なお願いをしてすみませんでしたな。さあ、行きましょう」

松山老人は腰を上げた。

真理子は頷くと後に続く。その腕を、松山老人は軽く掴んだ。あと数十分後に、この腕には自分の手の代りに、冷たい鉄の鎖が固定されるのだ……。

松山老人は満足そうに微笑した。

二

信次の身体の下で美佐は呻いた。

信次の動きにつれて、美佐の裸体は波のよ
うに躍り狂う。

「ああ……」

甘い呻きをくり返す美佐の表情を、信次は
冷たい顔で見つめた。

こんな可愛い娘が、あの松山老人の一人
娘とは、今になっても信じられない気持だ。

動きを止めた信次に、美佐は濡れた目を向
けた。

「ねえ……どうしたの……」

この娘は父親の二重生活を何も知らない。

もし知れば、ショックで気を失うだろう。信
次は全てを教えてやりたい誘惑にかられたが
かろうじて自制した。

——まだ早い。美しい獲物は時間をかけて虐
めるものだ……

信次は遠くを眺める目つきになった。不気
味な程、暗い憂いを帯びたその顔は決して松
山老人には見せた事のない表情であった。

信次には秘密がある。松山老人に知れては
ならない素顔を持っていた。それを隠すべく
老人の忠実な部下となり切っている。

信次の隠れたる目的であり、松山老人の唯
一の人間らしい宝物は、信次の下で身体を波
打たせていた。

「ねえ……」

美佐は甘い声で催促した。

始めて信次に身体を許して数カ月、すでに
美佐の肉体は、女の喜びを知りつつあった。

突然、信次は美佐の乳房を強く噛んだ。

「痛い……」

美佐は鼻声で抗議する。

信次は美佐の裸身を所構わず噛み始めた。

痛がっていた美佐は、何時しか快感の呻きを
あげていた。心よい愛咬が、痛感から歓喜の
いびれへと変化していく。

全身を回っていた信次の歯と舌が、再び乳
房へ戻ってきて、小さく尖った頂点を柔らか
く責めた時、美佐は四肢をケイレンさせた。

肉体が、内部から真赤に溶けていくような甘
美な感覚に、思わず熱い喘ぎ声をたてる。

「ねえ……もう……許して……」

たまらなくなった美佐は、シーツを強く握
りしめた。

信次は、無言で静かに立ち上がった。

「……どうしたの」

無表情のままの信次は、服のポケットから
小さな針を取り出した。キラリと光るその針
を美佐の目の前に突き出すと、低い声で、さ
さやいた。

「もっと楽しもう……」

美佐は驚いて目を見開いた。

「それ……針じゃないの」

「これで楽しむんだ」

「嫌よ、痛いわ」

信次は薄く笑うと、美佐の裸体をあおむけ
に横たえた。

「嫌。ヘンな事は、やめて。お願い……」

美佐には、その針がプレイのためののだとは
分かっていてもキラキラ光っていて気味が悪い。

大丈夫だ、と信次は首を振って、その針で
美佐の身体を刺激し始めた。

信次の指の針は、デリケートに動いた。チ
クリと感じても、美佐には我慢できぬ程の痛
みではない。全身を柔らかく刺されている内
に美佐の肌は熱く汗ばんできた。生まれて始
めて経験する刺激に、美佐は何時しか身体を
大きく波打たせていた。

「ああ……あッ……」

乳首の周辺を刺された時、美佐の感覚は快
感をとまなう電流を捕えた。もう、美佐には
我慢ができなかった。甘美なその針は、執拗
に柔肌を舐めつくす。

「ねえ……お願い……抱いて……」

信次は美佐の哀願に答えず、針を乳房から

下へと、ずらしていく。敏感な場所を刺されて狂ったように四肢を突張り、甘い呻きをあげる美佐の痴態に、始めて信次の表情が変化した。信次は口を歪めた。

信次には自信があった。サドの権化みたいな松山老人の可愛いこの一人娘を、マゾ的な倒錯性欲へと溺れさせていく自信が……。その教育の第一歩が、この針である。

信次の針は、若い女性の肉体を柔らかに愛撫し続けた。美佐は、突き上げてくる甘美な電流に全身を弄ばれ、狂ったような熱い喘ぎを、くり返していった。

三

細い長い針が、眼の前で光った。

「何をするんですッ」

真理子は思わず悲鳴をあげた。不気味な不安が、縛られた全身を貫く。

松山老人は、ニコツと笑った。

「お嬢さん、先刻から何度も言っているように、どんなに暴れても無駄ですよ。その鎖はハンマーで叩いても切れない」

「あなたは騙したのね！」

キラキラ光る針の先を見ながら、松山老人

は楽しそうに答えた。

「そういう訳です。だから、もうあきらめる事ですな」

「帰してッ。ここから出して下さい！」

「悪いが無理な相談です。このまま帰すには貴女は、あまりにも美しすぎる……」

「ああ……」

真理子は心の底から後悔した。何故、この老人の後をついて来たのだろう。最初、この部屋に案内された時、嫌な予感がした。何に使うのか、まったく分からない種々の道具、歯車が無数についた鉄のベッド、鋭角の長い台、天井から下がった何本もの鎖……。この不吉な臭いがする部屋から、すぐにでも飛び出せばよかったのだ。

あのジュースに薬が入っているとも知らず飲み干した真理子は、気が付いた時すでに今の状態で縛られていたのである。幸い、衣服はそのままだったが、両手足をベッドの四隅に鎖で固定されていた。

ああむけに横たわっている真理子の目の前で、再びキラリと針が光った。

真理子の身体は小刻みに震えた。自由がきかないだけに、何をされるのかと思うと、恐怖が潮のように全身を駆けめぐる。

真理子は、今までの非難の口調をやめて、弱々しく哀願した。

「お願いします。何もしないで、ここから出して下さい」

「駄目ですな」

真理子は必死だった。

「約束します。誰にも、今日の事は話しません。だから、お願いですッ」

松山老人は目で笑った。

「貴女が話さないという保証は、何かありませんかな」

「嘘は言いません！」

松山老人は針を見つめたまま、静かに言った。

「私は非合法に近い事をしている。秘密がバレるのが一番、怖い……」

「ああ……」

真理子は絶望的な溜息をついた。

「一体、私に何をしようと言うのです」

「ふふ……その内に分かってきます。さて、そろそろ、始めますかな……」

長いハサミを取り出した松山老人は、静かに質問した。

「貴女は処女ですか」

「……」

顔をそむけた真理子に、松山老人はニヤリとすると、ハサミで衣服を切り刻み始めた。ミニのワンピースが切り落とされた。

「や、やめて！」

松山老人は、黙ってハサミを動かす。スリッパもストッキングも切られ、ブラジャーとパンティだけの、真理子の若々しい身体が露わにされた。

屈辱で真理子は悲鳴をあげた。

「やめて下さいッ。お願い！」

松山老人は答えず、乳房の谷間へハサミを入れ、プツンとブラジャーを切り落とした。

「ああ……」

年頃になってから、親にも友人にも見せた事のない、真理子の形よく盛り上がった双の乳房が、明りの中で露わにされた。

「ふむ……」

満足そうに、松山老人は独り頷く。何時見ても若い女性の弾力に富んだ乳房は、きれいだ。そっと両の手で掴むと、固いゴムマリのような感触が伝わってくる。真理子は縛られている身体を振って激しく抵抗してきた。

松山老人はニヤリとすると、先程の質問をくり返した。

「貴女は処女ですか？」

「答える必要はありません」

真理子は顔を、そむけて叫ぶ。

「ほう……では答えやすいようにしてあげましょうか……」

松山老人は、小さな細い針を真理子の乳房の谷間に触れた。

「あッ……な、何をッ」

不安で真理子は目を見開いた。

ふふ、と笑って、松山老人は針を押す。

「痛いッ」

「痛い筈です。五ミリ刺さっただけで、この痛さだったら、二センチも中へはいったら、どうなりますかな……」

グイと松山老人は針を押した。

「ギャッ」

一瞬、真理子は悲鳴をあげた。自分の肉体がキューンと縮む程の鋭い痛みが、そこから走った。

松山老人は、刺さったままの針を、ぐるりと回した。

「アッ……痛う！」

激痛が、真理子の全身を駆ける。

松山老人は、優しい口調で問いかけた。

「さて三度、聞きます。貴女は処女ですか」
真理子は夢中で頷いた。黙っていると、こ

れ以上、何をされるか分からない。

松山老人は満足そうに微笑んだ。

「よろしい……」

やっと針を抜いた松山老人は、壁のブザーを押した。

頭を下げて、信次が入ってくる。

松山老人は、不機嫌そうに目を光らせた。

「何処へ行っていた？ 先程から呼んでいるというのに」

「申し訳ありません。お嬢様に頼まれて、買物のお供でデパートまで……」

松山老人の顔色が変わった。

「馬鹿！ 美佐に近づいちゃいかん。あれは何も知らない。信次、君は私の書生だ。家の方は何もしなくていい。こちらだけを手伝ってくれればいいのだ」

「はい……」

信次は、素直に頭を下げた。

「おや、新しい娘ですか」

信次は、可憐な娘が縛られているベッドに近づいた。

「きれいな身体ですねえ……。責め、いがありそうだ」

松山老人の機嫌は、すぐに直った。
「そうだろう。やっと見つけてきた」

「前の順子より、きれいだな」

信次に褒められると、松山老人の頬は子供のようにゆるんだ。

「女子大生だ」

「今日から責めるんですか」

「ふむ、それを考えているんだ。次のショーまで三週間以上もある。最後の二週間は本格的な教育にあてて、それまでの二週間は、どのようにするか悩んでいる」

楽しく、素晴らしい悩みである。

ふと、信次は進言した。

「神経的な拷問は、どうです」

「神経的……」

「ええ、外的な苦痛は与えず、神経のみを責める……」

「ふむ」

松山老人は目を閉じた。その頭の中には、すでに神経拷問の地獄絵が描かれていた。

「よし、明日から、やろう。今日中に準備しておいてくれ」

「どういう方法の……」

「何時か話さなかったかな」

松山老人は、壁に設置された本棚の中からノートを取り出した。

「この中に書いてある。△赤い部屋▽という

私が考案した拷問部屋だ。作るのが大変かも知れないが、なるべくノート通り忠実に再現してくれ給え」

「はい」

突然、黙って二人の会話を聞いていた真理子が叫んだ。

「お願いッ。ここから出して下さい。早く帰して下さいッ」

その目は恐怖で大きく見開かれている。真理子は不安で震えていた。この男達は自分に何をしようとするのか……。△拷問▽という言葉が、さっきから、何度も耳に飛び込む。

△拷問▽とは、何かを白状させるために、体を痛めつける事ではないか……。

「私は何も悪い事はしていません。だから黙って帰して下さいッ」

松山老人は、薄く笑った。

「お嬢さん、私はうるさいのが大嫌いです。

静かにして貰えませんか」

「帰してえッ」

真理子は絶叫した。

松山老人の瞳が、キラリと光った。

「信次、少しうるさいな……。黙らしてやりなさい」

「口枷を使いますか」

「いや、あれは後でいい……」

松山老人は、半裸で悶えている真理子を冷たく眺めた。信次には、今の松山老人が何を考えているのか、よく分かる。

「乳房……ですか」

松山老人は、乳房に対する責めが、特に好きである。

「ふむ、乳房圧迫器にかけて、その先に重しでも下げてみよう」

信次は頷くと、ベッド操作のボタンを押した。不気味な電動の音とともに、ベッドが傾き始めた。

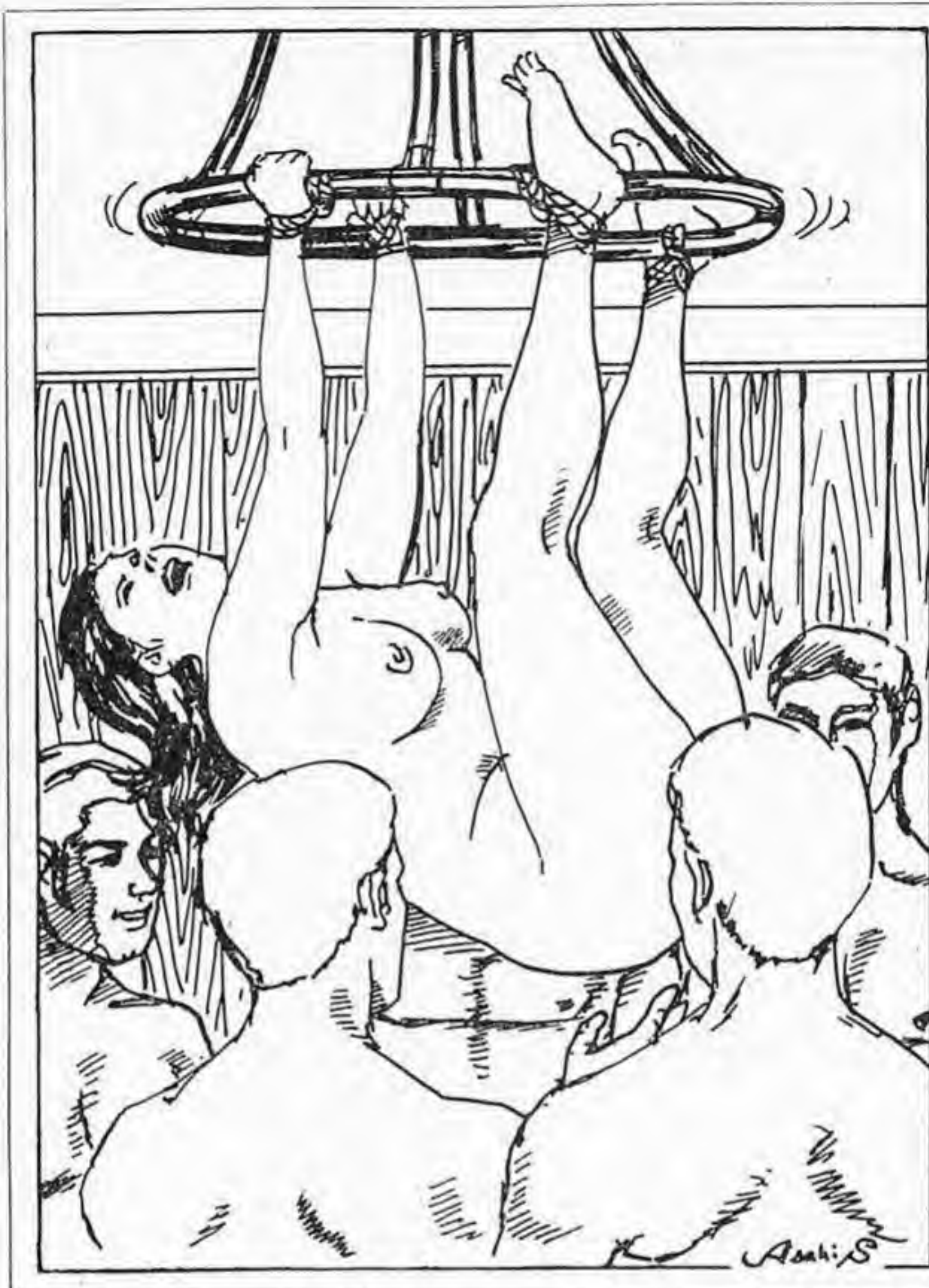
真理子は、いいような不安と恐怖に悲鳴をあげた。ベッドが大きく反転して、さかさまになったからである。

真理子の身体は、下を向いて天井に縛られたような状態になった。手足の先をベッドの隅に固定されているので、真理子の頭、胸、腰が自らの重みで宙に浮き、ベッドと背中とは半円を描いて空間を作った。

「ふむ……」

松山老人は満足そうに唸った。このベッドは数十種の歯車を内蔵しているために、どのような角度へでも動く。一年間程、考案して製作したものである。重症精神病患者用にと

……イメージギャラリー……『回転展示品』……須坂 旭……



いう病院の院長である松山老人の注文に機械メーカーは何の疑問もなく作ってくれた。

そのベッドが松山老人の意のままに、美しい獲物を固定したまま、宙に浮いた。真理子

の乳房は、ブルンと垂直に下がった。「ウウッ……」

真理子は苦痛の悲鳴をあげた。両の手首と足首に、全身の重圧が激しくかかってきたの

である。

信次は針金の輪を二つ持ってくると、真理子の垂れ下がった双の乳房に、静かに固定した。

「な、何をするのッ。やめて！」

乳房の根元に冷たく、はめ込まれたその針金を見て、真理子の不安は増した。

信次は無表情に、その輪を締めた。

「ギャッ」

肉がちぎれるような激痛に、真理子は悲鳴をあげた。

信次は、構わずその輪を締め続ける。その円の直径が五センチになった時、真理子の全身から油汗が噴き出した。

「ギャッ！」

真理子は身体をケイレンさせた。乳房がねじ切られ、心臓が飛び出すのではないかと思う程の苦痛が襲った。

針金の輪が四センチになった時、豊かな真理子の乳房は根元から大きくくびれて、野球のボール程のきれいな円を描いた。そのボールは紫色に充血している。

「グワァッ！」

獣のような悲鳴が、真理子の形よい唇から洩れた。地獄の苦痛に、真理子の全身はピク

ピクとケイレンを繰り返す。彼女の本能は、この苦痛から逃げ出す唯一の道として失神を誘った。真理子の意識は、スツと地の底に引き込まれそうになった。

が、非情な注射によって、真理子は現実の地獄へと再び引き戻された。

「ギャアッ……」

血が逆流するような苦痛が、真理子の神経を再び責め始める。

全身から噴き出した油汗を、したたらせる真理子の耳に松山老人の声が聞こえてきた。

「重しをつけてみよう……」

真理子の乳房を強力に締めつけている針金の先に、鉄の固りが結びつけられた。信次が手を放すと、双の乳房から下がったその重しは、ブランと重圧をかけてくる。

「ギャアッ」

真理子は鋭い絶叫をあげた。圧縮され、きれいな円を描いた紫色の乳房が、鉄の重みによって不気味に歪む。米粒程の小さかった双の乳首が、血液の圧力によって異様に大きくとび出した。

松山老人は、下がっている鉄の固りを軽く引っ張った。

「ウグァッ！」

真理子の口から、異様な叫び声と、黄色い液体が飛び出した。

松山老人が、もう一つの鉄の固りを結びつけた時、真理子の乳首から真赤な血液が、しただり落ちた。

真理子の感覚は、ズタズタに切り裂かれ、再び地の底へと意識が落ち込んでいった。

四

「注射を打ちますか？」

と口を開きかけた信次は、ふと言葉を飲み込んだ。松山老人は、ソファに深々と坐り目を閉じていたからである。

こういう状態の時に話しかければ、松山老人は機嫌が悪い。それを承知している忠実な部下である信次は、静かにその場を辞した。

松山老人は、信次が立ち去ると薄く目を開けた。興奮のあとの何時もの虚脱感が、松山老人の胸の中で重く沈んでいる。

松山老人は、ぼんやりと拷問室を眺め回した。あらゆる性能を秘めた種々の拷問具、複雑なメカニックを内蔵するベッド、椅子、台そしてベッドに死骸のように下がっている若い娘の身体……。何時も見慣れている風景で

ある。

が、今日の松山老人には、全てが空しく見えた。

——私も疲れたのかな……。

と松山老人は思う。こういう事を始めて、すでに三年近くの時が経っている。女体拷問に明け暮れたこの三年は、興奮と刺激のくり返しであった。

異常な倒錯性欲のために松山老人の髪の色は、完全なる銀髪に変化していた。精神と感情の移り変わりとともに、肉体的変化も生じていたのである。非合法的な快楽という禁断の果実を食べた松山老人の人格は、すでに正常には戻り得なくなっていた。

——何時頃から私は……。

松山老人は、宙を眺める目つきになった。始めてサドの世界を垣間見た時の事が、走馬灯のように頭の中を駆けめぐった。

悪妻は男の人生を変える。松山老人の場合が、それであった。結婚して一年も経つと、気の強い妻は、その性格を惜しみなく松山老人に押しつけていった。子供が生まれると妻はすでに他人になりつつあった。恩師の娘というだけが取得の、この嫌悪すべき動物は、

デリケートな夫の感情を、まるで、省る事なく横暴を極めた。当然、夜の生活に於いても主導権を握られ、何時しか、松山老人は不能への道を歩んでいた。

そういう時であった。偶然の機会に、西洋の宗教裁判、魔女狩りの生々しい記録を読んだのは……。

針責め、木馬責め、指潰し、火責め……等の残酷極まる拷問の描写場面に、松山老人は体内の血が異様に騒ぐのを憶えた。それは、倒錯した性欲となって松山老人を興奮させるのに充分な刺激であった。が、その性欲を収め得る唯一の妻は、すでに別居していた。

普通、空想は頭の中だけで終わるものだが松山老人の場合は違っていた。どうにも収まらない悶々とした性欲と妻への憎悪が、彼の神経を、むしばんでいた。

松山老人は、拷問場面を再現したいという強烈な欲求を、自己の職業上の場に於いて可能にしてみたのである。

松山老人は精神病院を経営していた。院長として、自ら外科手術を執刀する事もある。

松山老人は、ある日、患者の脳障害神経除去という手術を麻酔なしで執行したのである。

若い女の患者が、頭を切り刻まれ、この世の

ものとは思えない苦痛の絶叫をあげた時、松山老人の性的興奮は最高に達していた。それは、生まれて始めて経験する異常な快楽のしびれだった。その日が、サドへの転落の第一歩となったのである。

それから十数年が経った時、松山老人は自宅の増築を口実に、家族に秘密で、この部屋を含めた広大な地下室を建造したのであった。重病患者用の特別室という事で、工事関係者は少しも疑わなかった。

そこには、サドの快楽のために、あらゆる拷問具と資料が取り揃えられた。金にあかせて古道具屋を買いあさったのである。

その内に、松山老人は自己の快楽を他人にも分かち与える事を考えた。そこに、秘密を前提として、金銭と信頼を仲介にした『拷問クラブ』が生まれたのである。

ウウ……と真理子の唸る声で、松山老人は現実に戻った。

松山老人は機嫌が悪くなった。後悔じみた回想にふけていた自分に腹が立ったからである。

——私は後悔なんかせんぞ……。

自分にそう言い聞かせた松山老人は、立ち

上がった。

真理子は意識が戻って、再び襲ってきた苦痛に吐きそうになった。

その耳に、地獄の使者のような松山老人の言葉が遠く聞こえた。

「今の責めは、まだ遊び程度だ。明日からはもっと非道くなる。覚悟していなさい。明日は八赤い部屋Vに貴女は入れられる……」
「ウウ……」

絶望と苦痛に、真理子の長いマツゲの下から涙が、こぼれ落ちた。

五

普通のベッドがある、小さな部屋に入れられても、真理子は一睡もできなかった。手足も自由にされ、食物と温い毛布が与えられたが、先程の強烈な地獄絵がデリケートな乙女心に大きなショックを与えていた。

責めさいなまれた双の乳房に、そっと手を触れると、飛び上がるように痛い。乳房の根元には、真赤な線の跡が生々しく残っていてなおも激痛を送っていた。

——私は、どうなるのだろう……。

真暗い不安が真理子の頭を襲う。明日から

も自分は虐められるのらしい。理由もなく、本当に何の理由もなく責められる……。

——ああ！

絶望で気が狂いそうになる。

「助けて！」

思わず真理子は叫んだ。が、その声は、空しく壁に吸い込まれるだけである。

頭をかかえて床にうずくまった真理子は、ふと激しい尿意に気づいた。緊張の連続で忘れていたものが、自由になった状態で排尿の欲求を引き起こしたのらしい。

部屋の中を見回したが、もちろん、その設備はない。床にしゃがむ事は、処女のプライドが許さない。

我慢できなくなった真理子は扉を叩いた。意外にも早く、扉は開いた。

信次が顔を出した。先刻から隣の部屋で詰めていたのらしい。

「何か用があるのか？」

「あのう……」

若い男性に尿意を告げる事は、真理子にできそうもない。羞かしそうに、もじもじしていると、信次は分かってくれたらしく、小さく聞いた。

「トイレか？」

真理子は夢中で頷いた。

信次は扉を開けると、素直に真理子をトイレまで案内してくれた。真理子は、ほっとした。それを口実に、何か責められるのではないかと心配していたのである。

——ヘンなトイレ……。

真理子は、また不安になった。ここだ、とドアを開けてくれた所には便器はなく、ただ階段があった。

「……？」

「上だ」

信次は、そう言うのとドアを閉めた。

もう耐えられなくなっていた真理子は、仕方なく階段を登った。与えられている衣服は小さなパンティー一枚だったので、目の下が気になったが、信次はすでにいない。

階段を上った所に、トイレがあった。真理子の想像に反して、きれいな場所である。安心した真理子は、パンティーを急いで、ずらすと白い便器に跨がった。

「キャッ」

次の瞬間、真理子は悲鳴をあげて飛び上がった。便器の底に、人がいたのである。

が、それは真理子の思い違いであった。浅い便器の底一面に、鏡が張りつけてあると分

かったのは、その後である。

「ああッ」

意地悪い仕掛けに真理子は慄然となった。しかし、もう尿意は限界まで、きていた。真理子は涙ぐみながら、しっかりと目を閉じてその上に跨がった。

屈辱で気が遠くなりそうだった。

しかし、真理子はこのトイレの真の意味を知らない。もし気がつけば、処女の羞恥で失神する程のショックを受けるだろう。

便器の底に張りついている鏡は、実はマジックミラーである。裏から見れば、素通しのガラスとなっている。階段を登った高い所にあるこのトイレの下は、小さな部屋になっていた。その部屋の天井が、そのガラスであった。下から覗く者にとって、上の便器に跨がる女性の下腹部は全くの無防備のまま、心いくまで見る事ができる。

松山老人が設計した部屋だが、すでに松山老人の趣向は、この程度の刺激では満足し得なくなっていた。それ故、最初の犠牲者に使用しただけで後は打ち捨てている。

信次は違っていた。彼は松山老人に比べてあまりにも若く、その神経も、まだむしばま

れてはいない。

信次は並の若者のように、女性の秘密の場所を見たいという欲求を、健全なものとしてまだ持ち合わせていた。

ジッと上を見つめている信次の目に、白い液体が映った。ジャツと音がして、それは直ぐに水で流された。一応は水洗式である。

立ち上がった真理子の白いパンティを見て信次は外へ出た。

ドアを開けると、真理子が胸を両手で押さえて出てきた。

どうもすみません、と頭を下げる。そのあどけない美しい顔を見ていると、信次の頭の中に、二年前までは美しかった清純な恋人の顔が想い出されてくる。明子というその処女のままだった恋人は、今は、この病院の鉄格子の中で狂態を示している……。

——明子……。

信次は胸の中で、自分のたった一つの宝物であった恋人の名を叫んだ。

——明子、待ってくれ、もうすぐだ。もうすぐ君の仇を……。

信次の計画は、少しずつ進行していた。自分でも恐ろしくなる程の残酷な計画が……。

明子の事を想うと、信次の胸の中は、あら

ゆる憎悪の感情で煮え滾^{たぎ}った。自分と自分の素晴らしい宝物であった明子の人生を、ズタズタに引き裂いた人物に対して、信次の胸の中はドロドロに燃え上がる。

——しかし、もっと、しっかりしなければならぬ……。

信次は恐れていた。自分の中に倒錯性欲の芽が、激しい勢いで伸びていくのを恐れていた。ミイラ取りがミイラになる悲劇を恐れていた。そのミイラは信次にとって、非常に魅力ある禁断の果実であったからである。

「あのう……」

真理子の声で、信次は現実に戻った。

「あのう、どうしても私はここから出られないのでしょうか……」

恐怖と不安の色をその目に浮かべて真理子は恐る恐る聞いた。

「ああ」

「いつまで、こんな所に閉じ込めて置かれるんですか」

真理子は必死な態度で信次を見た。

すでに、信次は松山老人の忠実な部下に戻っていた。自分の感情、気持は極力、抑えなければならぬ。

「ここには、あと四週間だ」

信次は横を向いて答えた。

「四週間も！」

暗い絶望の色が真理子の表情を横切った。

「そのあとは……私、どうなるのです」

「そのあとは……」

信次は言葉を切った。この美しい生贄に非情な運命を教えていいものかどうか……。

「そのあとは……精神病院での暮しが待っている……」

「精神病院！」

真理子は悲鳴をあげた。

「ど、どうして私が精神病院へ！」

「その訳は、明日から判ってくる……。さあ早く寝たまえ。寝てないと、明日は余計に苦しむことになる……」

「明日……」

「そうだ。明日から君は眠れない。いや、寝かせない」

真理子は、再び新たな恐怖で震えた。この人達は何をしようとしているのか……。

突然、姿の分からない不安に、耐えられなくなった真理子は叫んだ。

「嫌！ もう嫌！」

「うるさい。静かにしないか」

真理子は狂ったように暴れ始めた。じっと

しておれない戦慄が全身を走る。

信次は拷問を始める前の、あの無表情な顔つきになると、ポケットから万年筆のような物を取り出した。

無言で、それを真理子の腕に触れる。

「ギャッ」

一瞬、真理子は身体を突っ張った。強力な電気が全身を襲ったのである。心臓が波立ち

膝が震えて真理子は、しゃがみ込んでしまった。

「分かっただろう。ここでは君は絶対、服従の身だ……」

眼をカッと見開いたままの真理子は、急にズルズルと床に伏すと、子供みたいに声をあげて泣き始めた。

——お母様、助けてえッ。

真理子は恐ろしかった。

この地獄にいる自分に気づいて心臓が潰れる程、恐ろしかった。

真理子は大声で泣き喚いた。捕えられてから今までの異常な経験の恐怖が、堰を切ったように溢れ出た。

信次は、うるさそうに首を振ると、電気の棒を真理子の身体に押しつけた。

そこは、虐められ痛められた白い乳房の先端であった。

「ギャア—ッ」

真理子は心臓が掴み出される程のショックで一声、鋭い絶叫をあげると、失神してしま

った。

吉川真理子という、この美しき獲物は翌日から地獄の底を歩かされた。

真理子にとって△赤い部屋△という精神拷問は想像を絶する恐怖と苦痛に満ちた地獄の釜だったのである。

赤い部屋——その名の通り、その拷問の第一歩は、真理子の体内の真赤な血潮の採集から始まった……。

——(この章・終)——

△強烈な被虐女性△

川路むら子子の狂態

本誌二月号のカメラハントで性村氏もあつた驚いた典型的なM女。性川路むら子さんの要望によつて彼女のあらゆる被虐の狂態を再び刻明に描写し、ここにフアンの手元に提供することにします。

股間縛りにうめく

大手札三枚一組 略号△八〇〇円
川路むら子 一糸もまとわぬ裸身に只悪魔のような執拗な顔目だけが柔肌をじわじわと痛めつけてやまない。

羞恥責めに泣く女

大手札三枚一組 略号△八〇〇円
川路むら子 如何に被虐を求めているとはいへ、余りのことに泣き叫ぶのか、それとも悦びに泣いているのか？

妖気溢れる開股責

大手札三枚一組 略号△八〇〇円
川路むら子 ねっとりとした脂肪を浮かした素足に細をからませて、左右に引き開けば忽ち妖気が充満してくる。

全裸縛りの引廻し

大手札三枚一組 略号△八〇〇円
川路むら子 細尻をとられて追いついては、うしろめたく開陳してゆく。

臀部晒し浣腸責め

大手札三枚一組 略号△八〇〇円
川路むら子 後手に縛られたまま、臀部を高く持ち上げて肛門を晒せば恐ろしい浣腸器が近々と迫ってくる。

露出した全裸肢体

大手札三枚一組 略号△八〇〇円
川路むら子 締めつけた表情で若々しい肢体をマニアの眼前にあらわした。

両足挙げ羞恥責め

大手札三枚一組 略号△八〇〇円
川路むら子 自分の顔面より上に両足を開いて、挙げてせられた姿態をかくすこともなく身震えて耐える。

壮絶臀部責の妙技

大手札三枚一組 略号△八〇〇円
川路むら子 ありきたりのM女性であつたものの、このような責めは許容できないものがあるが彼女はやはり選んだ。

悶絶海老縛り地獄

大手札三枚一組 略号△八〇〇円
川路むら子 身体が二つ折りになつた苦痛もさることながら羞恥の個所があからさまになる無防備感はいどい。

片足吊りの全裸像

大手札三枚一組 略号△八〇〇円
川路むら子 不安定な片足吊りで全身を歪めるように見られる羞しい苦痛。

再びむら子子の狂態

本誌五月号で塚本鉄三のペンで八片えくぼのマリア△で再登場した川路むら子は耐え難い被虐の妄想に駆られて三度、四度、鮮鋭なレズの前で、その緊縛の裸身を晒箱第14号、天里社宛へ、どうぞ。

開股責と強烈縛り

大手札三枚一組 略号△八〇〇円
川路むら子 両膝を縛りにて開股縛りにした横臥にて開股させたり椅子を用いた縛りなどむら子好みの責め。

緊縛と鼻責め悦楽

大手札三枚一組 略号△八〇〇円
川路むら子 身動き出来ぬまで縛られたむら子の鼻を煙草、ドライアイス、手指などに徹底的にいじめぬ。

トイレの排泄縛り

大手札三枚一組 略号△八〇〇円
川路むら子 全裸で後手に縛られたむら子をトイレに追い込んで無理矢理排泄させるところをスナップする。

逆エビ責にあえぐ

大手札三枚一組 略号△八〇〇円
川路むら子 細を用い棒を用いて逆エビ縛り責め、一と悲鳴を上げて泣く。

棒責めの全裸女体

大手札三枚一組 略号△八〇〇円
川路むら子 細を用い棒を用いて逆エビ縛り責め、一と悲鳴を上げて泣く。

椅子責めでいためる

大手札三枚一組 略号△八〇〇円
川路むら子 椅子を使ったグルグル巻きで乱れた髪を揺られ恥辱の恐怖に激しく悲鳴を放つむら子の妖しい顔。

柱に縛る全裸女体

大手札三枚一組 略号△八〇〇円
川路むら子 部屋中央にある柱に全裸のまま両腕立て縛りにされたむら子は周りの視線を全身に浴びるのだ。

後手縛り顔面玩弄

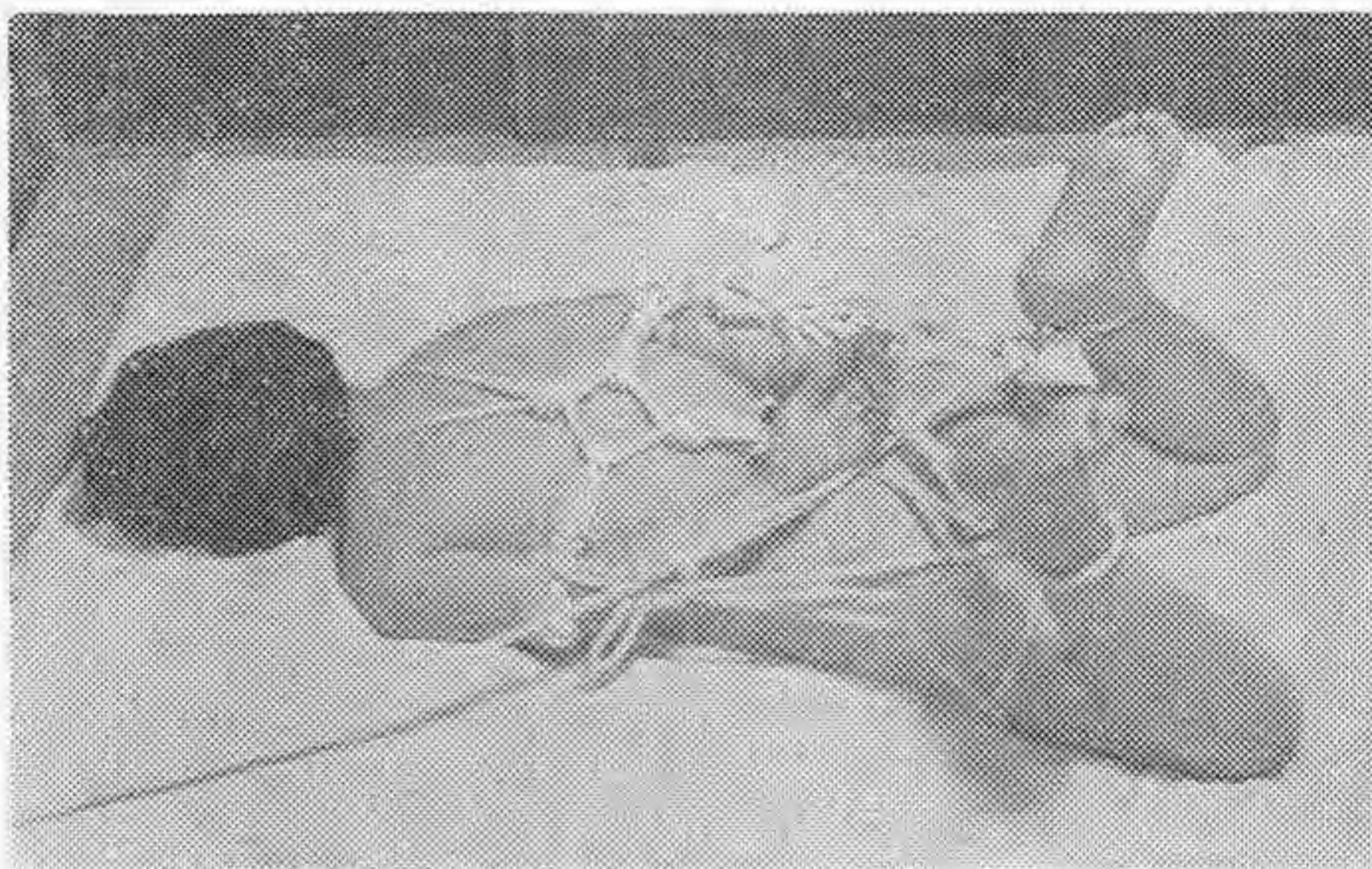
大手札三枚一組 略号△八〇〇円
川路むら子 羞しい縛りに悦びとして悦楽の境をさまよっているむら子の髪を掴んでいたが、縛る悪魔の触手を

両手挙げ縛り媚態

大手札三枚一組 略号△八〇〇円
川路むら子 両手を掲げて頭の上へ挙げさせぐるぐる回すにすればむら子は振る解こうとして、もがき狂う。

悦楽責めアツプ集

大手札三枚一組 略号△八〇〇円
川路むら子 柱と棒利用の開股責めを初めとなど痛めつけた大写真。



二年余り前から奇クを愛読しておりますが現在、誌上を賑わしています『縛り』『鎖責め』『パイプ責め』等の責め、SMの限りを尽くしてのプレイに、私も心から賞讃を呈し

告

白

生きた蛇を： ：用いた責め

司

竜 二

たく思っております。

私も御他聞にもれず、二年程前から一人のパートナーを得てSMプレイを楽しんでおりますが、私は現在この女性を相手に『生きた蛇』を使つての責めをやっております。今まで皆様が何故『蛇』を使つてのプレイをなさらないのか不思議です。一度も誌上で拝見しません、誌上に発表されないのか、それとも皆様に経験がないのでしょうか。女の責めということ自体、変わっています、それに『生きた蛇』を使うという事は責

めという点では皆様と一致していても、私は又皆様と違った趣向を持っているということと言えるかもしれません。

二年前に知り合つた十九才になる女性に対して『蛇』を使おうと思つたのは一年ばかり過ぎた頃でした。その頃になりますと、一応普通のハ縛りVや色々の小道具を使つてのプレイは卒業し、写真撮影についても全面的に協力してくれていました。むしろ、そのように、はじめに縛られた姿を撮影されることに彼女自身も喜びを感じていたようです。

今年の七月のことです。梅雨もあがって、愈々本格的な夏を迎えようとした日です。もう裸になっても少しも寒さを感じないSMプレイには、もってこいの季節です。

いつものように全裸にして縛り上げた上で蒲団の上へ仰向けに寝かした彼女の乳房の所へ、ナイロンの袋に入れた『蛇』を置いてやりました。この蛇は、まだ小さい一mにも足りない青大将で、私が田圃の土手で捕まえて馴らしておいたものです。

ナイロンの袋に入った蛇は、女の肌の温か味を感じて袋の中でニョロニョロと動いておりますが、彼女はまさか、その袋の中に蛇が入っているなどとは思いませんから、動く気配を感じて「袋に、何が入っているの？」

と余り気にしないそぶりで寝ています。

「今日、これから責めに使う、いいものだよ」

私は気持持たすような口ぶりでニヤニヤ笑って

いるばかりです。袋の中の蛇は、ますます活発に這いまわっています。

「なによ、見せて、見せて——」

まさか袋の中に蛇が入っているとは知りませんから、私に見せてくれと、せがみます。彼女は後手に縛られて、仰向けに寝かされていますので、少しそりかえたように顔面が下がっているため、袋は目に入りません。

「ねえったら、見せてえヨ——」

と、甘えた声を出していますので、私は心の中でオカシクテ仕方ありません。少し間を

おいてから、真面目な顔で「蛇だよ」と言っ

てやりました。もともと動く袋の中の生き物が蛇だと聞かされた途端、彼女は、「キッ」と魂をつぶすような声を立てました。

「いやよ、いやよ、怖いわ」

少しでも袋から離れようと、縛られた身体をころがして蒲団の上からはみ出し、畳の上へころがり落ちました。

実は私のアパートの一室でしたので、彼女の悲鳴が隣の部屋に聞こえてはと私はあわてて彼女の口に手を当てたほどでした。壁一つへだてて隣の部屋ですから私も大きな声を出せず、彼女の耳へ口を当てて、「びっくりさせるなよ」と言っ

てやりました。

その日は彼女は恐怖に顔も青ざめ、身体をぶるぶるふるわせている始末でしたので、袋の蛇を出すことも出来ませんでした。

それから一カ月ばかり、私は蛇は可愛い小動物で人間には絶対に危害を加えないということを彼女に強



調し続けて、やっとのこと、袋から出しても怖がらなくなり、八月の中頃になると部屋の中には、いつも二匹の蛇が仲よく放し飼いされるようになりました。

二匹の蛇が彼女に大分馴れてきた頃、プレイの最中、胸の上やお腹の上、また髪の中、首筋のまわりというように直接、彼女の肌の上を這わしても、怖わがらなくなりました。

やはり馴れるというものは不思議なもので全裸の体を縛り上げると、彼女の方から肌の上へ蛇を這わしてくれと頼むようになりました。最初、私がびっくりするほど悲鳴を挙げて蛇を怖がった彼女が、今では自分から蛇と遊ぶようになったのです。縛られた肌の上を二匹の蛇がニョロニョロと這いまわるのは、異様な感触を覚えるらしいのです。

九月になりますと、同封しましたフォトに



ありますように、只単に肌の上を這いまわらすだけではなしに、彼女の女性自身の中へ蛇を入れるようになりました。この責めは彼女も非常によろこぶのですが、最初のうちは、写真をとることだけは固く拒み続けました。

それも、最近ではやっと観念して撮らすことも納得しましたので、同封フォトのような大写真を含めて何十枚と撮りました。このような作品は誌上に発表出来る筈ありませんが、せめて奇ク編集部の方々に、御参考まで

に御覧頂ければと考えてお送りしました。

谷山久美子様や渡部好美様のように、M気充分の方達なら、このような『生きた蛇』を使った責めも最初から甘受されるかもしれません。一般の人なら生来、蛇に対する恐怖心がありますから、直ぐに蛇責めというわけにはゆきませんでしょう。

やはり、なんといっても八蛇責めVの圧巻は女性の一番大切なところへ、生きた蛇を入り込ませることですが、私の彼女は現在二十才になったばかりですが、この八蛇責めVを大変、気に入っているようです。

同封しましたフォトは、私の写した四百枚ばかりの中から選出したものですが、もし誌上に発表出来る作品がありましたら、不出来ですが、掲載して頂ければ、歓びの一語につきます。文才がありませんので、さぞ読みづらいことと思いますが、このような文章でよければ、又書かせて頂きます。

切腹研究夜話

文芸切腹史

＜驚尾雨工篇＞

通 弘 康 中

覇者交代

こうした戦国武将の、壮絶な割腹、そう、切腹というより、割腹と呼ぶにふさわしい凄烈な最期を描く文章は、驚尾雨工独特のものであった。

たとえば太閤記に、こういう一節がある。

○ 押祖テ一尺五寸有ケル脇差中巻シ 介錯ニ向 信長ノ実檢ニ入ル首ナレバ 能ウテト宣声ノ下ヨリ 脇差左手ノ脇へ突立テ 妻戸へ曳ヤト引廻シ 又心本ニ立 臍ノ下マデ引下シ 刀ヲ持ナガラ両手ヲ突テ首ヲ差出シ給ヘバ 静間首ヲ打落ス

○ 天正九年二月、死屍の肉を喰らうまでに飢えた鳥取落城に際し、吉川式部小輔經家が降伏の条件として、城兵の生命にかわって羽柴秀吉の使者を受けて切腹したときの状況を描いたものである。

それが「覇者交代」では、

○ 經家は、檢使の役とむかい合った。この役目は、最初から交渉にあたった堀尾がつとめた。經家は具足を脱いで、羽織を着てい

た。挨拶がすむと、具足櫃に腰かけ、静間と呼ばれる側近の臣を顧みて、

「わしの首は、安土におはす信長公の実験にそなえられるものゆえ、よく打てよ！」
そう言いつけてから、おもむろに肌をひらき、一尺五寸の脇差の刃に中巻をして、

「ええっ！」
と、脇腹に深く突っ込み、

「やおっ！」

と、またも声をかけて一文字に、右脇まで引き回し、それから静かに鈍子尖^{ぼうしき}を腹から抜いて、中巻を握り直し、ぐさッと心窩^{みぞおち}の下へ刺した。

檢使の堀尾が、思わず、

「見事っ！」

と、言わずにはいらなかった。

經家は、

「ううっ！」

呻きながら臍の下へ、刃を押しおろした。

○ この間、堀尾茂助ら、檢使がわの人々の眼は、またたきもせず、余りにも凄烈な切腹のさまをみつめている。

○ 檢使の副は、一柳市助であった。

あまりにも見事な腹の切りようなので、おぼえずうんっと唸り声を発しながら、正使の堀尾茂助の顔をながめた。だが茂助の目はまばたきもせず、切腹の動作に吸い寄せられていた。

横に左から右へ腹一ぱいに切った上、縦にも胸元から臍下まで切り下げた経家は、ふたたび鉈子尖を抜きとって、刃を握ったまま、両手を膝の上につき、

「辞世の歌——」
と、言った。

辞世を詠んでから切腹するのは常の型だが腹を切ってから詠む辞世は、おそらく前代未聞だったろう。

「——武夫の取りつたえたる梓弓かえるやもとの栖なるらん」

経家は、そう口ずさんだ。それから介錯人の静間へ、

「よく打て、よく！」

と、声をかけながら、自分の首をぐっと差し伸べた。

○

原典は「太閤記」その他の戦記であろうが切腹の叙景に加えて、見届ける側の緊迫した空気をも書き込んで、一層劇的效果を昂めて

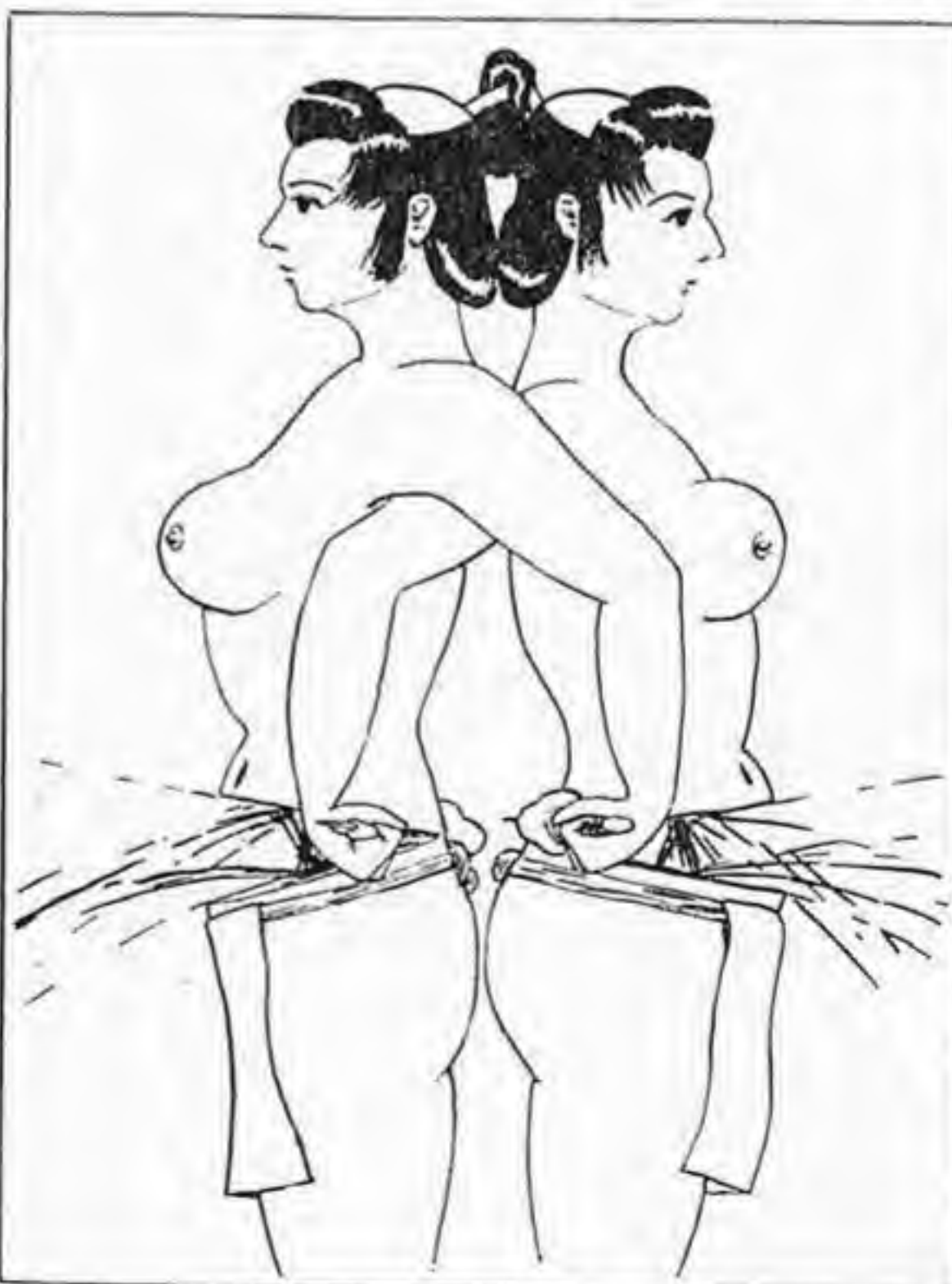
いるのは、さすがに雨工一流の雄勁な文章の力である。敗北に悪びれもせず、敢然と腹十文字に切る経家の心境を、雨工の筆は無駄なく、しかし刃を抜くさまを書きそえて効果的ならしめている。

「覇者交代」は、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康と、三代の覇者のあいだで天下の覇権が移動して行く経緯を描いた大作である。

こうした大作は、他にも、雨工の直木賞受賞作品であった「吉野朝太平記」、あるいは「織田信長」など、史書に立脚して展開される戦乱と興亡の人間絵巻として、あたかも大河シリーズとして執筆されている。

「吉野朝太平記」における、「太平記」での切腹相の描かれ方については、後日にゆずるとして、最後に戦国ものの長篇から今一例引いておこう。

美女無惨絵秘帖『共 腹』桐原紫門



伊達政宗

全く虚弱愚鈍の嬰兒と見られた梵天丸が、後年伊達政宗と成長して、奥羽に覇を唱えるまでの生涯を描く、これも雨工らしい長篇だが、この中では史上有名な、母子相憎み、兄弟相食もうとした俊宗誅殺の悲劇が、政宗謀殺に失敗した俊宗の痛恨をこめた切腹で終わることに描かれているので、その一節を引い

ておこう。

米沢城内西館の俊宗が設けた茶会の席へ、政宗は愛姫とともに轎かこを連ねるが、愛姫を外露地に、迎えの母の保春院、俊宗の妻直姫を内露地に残し、栗野喜右衛門に従って茶立口から屋内に入る。そこには遠い松籟ささやながらの炉の釜を前に、俊宗が待っていた。

俊宗が濃茶をたて、居直って政宗にすすめようとしたとき、政宗は「毒見」を所望し、俊宗は蒼ざめる。

「飲めッ！」

政宗は、こぼれ残った茶を、指さして叫んだのであるが、弟は面を伏せて、なお緘黙

「伝言板」○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則としては取り扱いは致しておりません故御諒承下さい。○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

を続けた。

藤五郎成実が、すつくと立った。

数寄屋の勝手からは、狼狽ろうたの声が聞えていた。それは保春院と直姫の、狂おしい悲鳴にも似た喚きと、諍い遮る喜右衛門のさけびであった。

「面をあげい！」

「ウウウ！」

呻きと共に、拾もたげられた凄愴な面魂が、無念の形相ではったと睨んだ。

おお政宗でなかりせば、たじろいだであるう物凄さだ。

この時、保春院が、

「館——館っ！」

小座敷へ転びこんできた。

○
政宗は、人倫にもとる母と弟を叱咤し、情理をつくした言葉のなかに、「さあその毒茶呑み下して罪に死ね！」と弟に宣告した。

「おう政宗どの！」

保春院は、ただそう叫ぶのが精一ぱい——わあっと激しく泣き崩れた。

……と。そのとつさに。

俊宗は脇差を抜いて諸肌をひろげた。

愛姫夫人と喜多女の姿が、内露地から飛石伝いにあらわれたのは、その時であった。

「む、尋常に腹を切るか」

と、政宗が、片膝を立てた。

「ご免ッ」

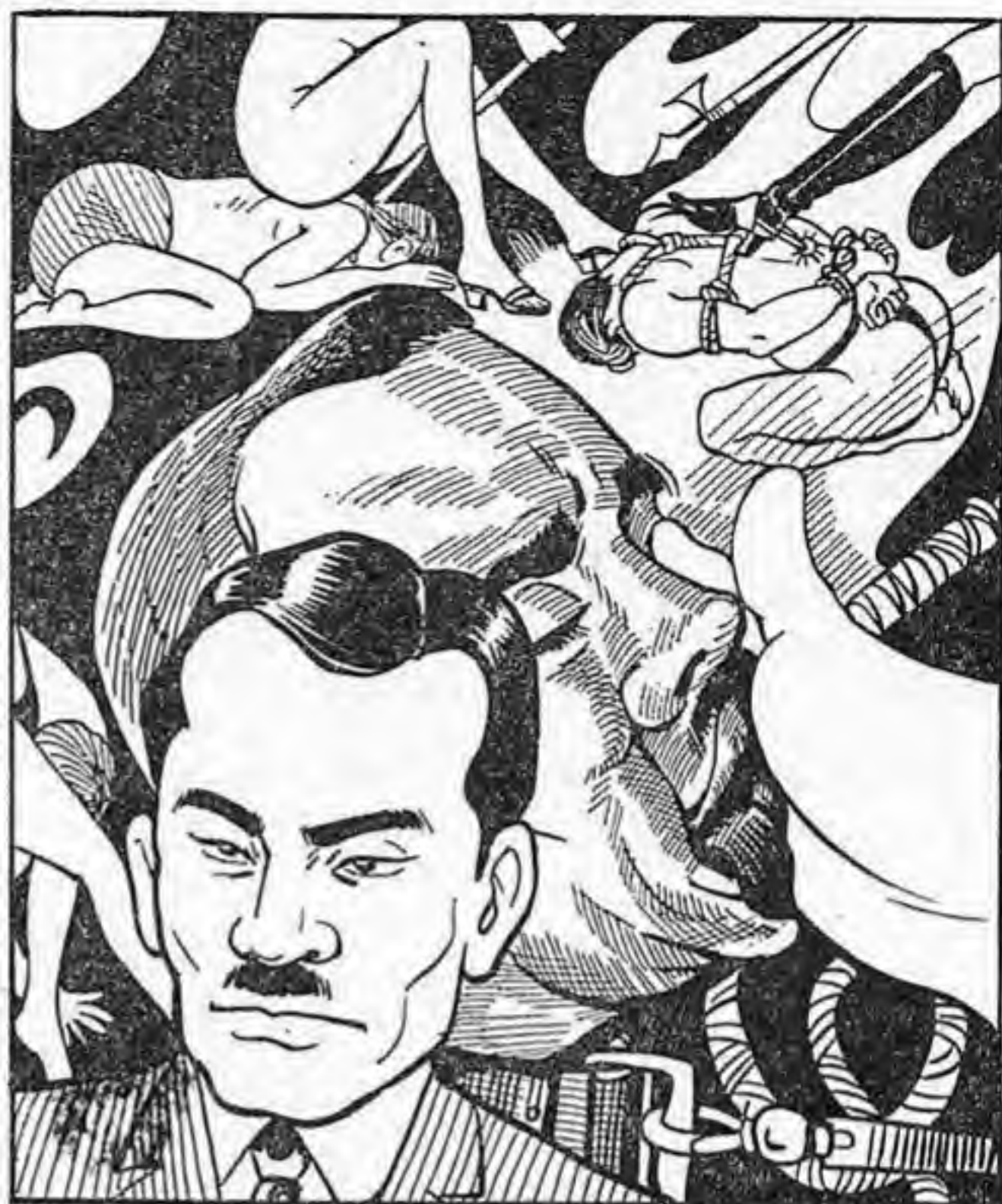
俊宗は、鈍きつ子尖を脇腹に突きたてて、ええっと引き回して、かぎ十字に掻かき切りあげた。どろどろッと切口から湧きあふれる血潮が、畳を染めて、毒茶の茶碗を浸した。

「栗野喜右衛門、死出のおん供つかまつるッ！」

○
数寄屋座敷の闕くわぎわへ、茶立口からとび込んできた喜右衛門は、すでに立ち腹を切っていた。

○
この凄絶な切腹の景が、危うく命を保った政宗の室愛姫、愛する俊宗の腹切るさまを見送らねばならなかった直姫、二人の女人の、たたずまいを周辺にして描かれていることは戦国の武将とその妻のきびしい生き方をうかがわせて、単なる悲壮哀傷の域を超えていると云えよう。

△追記▽ 著作権法の規定により以上に引用の文章は何れも出典を明記してあります。なお鷲尾雨工著「覇者交代」「伊達政宗」は何れも浪速書房に拠っております。



カット・岡 たかし

ストリップ盛衰

当時、私は大阪へ行くと、ストリップを見るのが、楽しみのひとつだった。

既に十何年も前のことになるが、ようやく全ストが全国的に流行し、恐らく当時がストリップの全盛期と言えるのではなからうか。

最近でも、たまにストリップ小屋へ入って見る。やっっていることは十何年前と全く同じ

である。ちっとも進歩がない。僅かにレスビアンが新しいくらいのもので、こっちも二十何年もストリップを見続けていれば、感激もなくなるのが当たり前かもしれないが、それにしても現在のストリップを、つまらなくしているものに、二つの重要な原因がある。

その一は、ストリップの質がガタ落ちしてしまったことである。

ちよっと、お面がいいかと思うと、身体の方が貧弱だったり、身体の線がいいと思うと

M 派 交 友 録

(24)

連載・アブ紳士行状記

馬場庄平の巻(5)

鬼 山 絢 策

ツラの方がオカチメンコだったりで、なかなか揃わない。それと芸の方が、また凄く落ちている。洋舞にしても、日舞にしても満足なのは、ひとつもない。芸で見られるのが出てきたかと思うと、それは何回も見たことのある、かつて全盛時代のスターの、なれの果てである。既に四十才を越えているのではないかとさえ思えるオバアチャンである。

大体、一回のショウでストリップパーは七人から十人、出てくるが、トリを勤めるスター

だけが、やや見られるというのでは淋しい限りである。全盛期には、大阪の温劇や、天満座、京都の千中ミュージックの如き、十人のうち、七、八人まで、大げさに言えば絶世の美人で肉体の線もピンと張りきっていて、舞台もだらけたところがなく、猛ハッスルして勤めていたものである。

その二は、観客の熱が、さめてしまったことである。

全盛期には、割引きから、ドカドカと詰めかけた客で満員になり、掛け声はかける、拍手はする、突き出しに踊り子が出てくると、耳が痛くなるぐらいの拍手と怒号、かぶりつきに殺到してくる客で、最前列の客は押し潰されてしまうぐらいの人気だった。

これだけの熱意をもって迎えてくれれば、ストリップパーも、はりきらざるを得ない。さまざまな演技や、アイデアが案出されたのもこの時代であって、現在でも、十年前に使い古されたテクニックを、そのまま、やっている。工夫が、ちっとも見られなくなってしまう。

いまは「突き出し」で踊り子が、しゃがんで足をひろげても、せいぜい二人ぐらいしか覗きに來ない。全盛期の頃は、踊り子の足元

に客の顔が鈴なりに重なり合って、西瓜を積みあげた真ん中に、しゃがむようなもの、ウツカリすると両膝で、お客の頭をゴツンと、やりかねない。そんな中で、彼女達は器用にしゃがむ。足と足の間には、一番下に四つぐらい、その上に三つ、その上に二つと顔が積み重なり、更に横から踊り子の足に顔をこすりつけて、割りこんでくるのがある。後ろから押されて、踊り子のデルタに顔をおしつけてしまうことも始終、あった。

忘れえぬ「恋人」

馬場氏が大阪へ移り住むようになってからは、ストリップ通になってしまった。

前記の小屋をはじめ、九条OSや、九条花園、東洋劇場、神戸の三宮ミュージックまで見に行っている。

私は仕事を済ませると馬場氏と一緒に、彼の推薦するストリップ小屋へ出かける。

「いまはね、伊丹ミュージック（現在のA級伊丹）が、いいですよ。この外人のストリップが凄いですよ」

ちょうど外人ストリップパーの、ぼつぼつ出はじめた頃である。その頃、白系ロシア人の

ストリップパーで、有名なものが居た。何が有名かと言うと、このオバサン（年は、その頃で四十を越していたから、まあ、おばさんだろう。ただし、メイクアップして出てくると、顔は、かなり綺麗で、ちょっと見は二十代に見える。さすがに身体の方は、かなりダブダブにぜい肉が、ついてしまっているが）はバスタオル一枚、持って出てきて、かぶりつきの客の顔を太い両足の間でピタリはさみこんでしまう。その上からバスタオルをかけてお客の頭に両手をかけて、グイと手前へ引き寄せる。そのまま、しばらく離さない。

「イイニオイシタ？」

やっと放免されたお客を見下ろして、かたことと、そう言うのである。

だが、匂いどころか味まで堪能させて、サツにあげられること数十回という、猛女である。

馬場氏が、なんでこれを見逃がそう。彼もまた、オバサンの味みをした一人である。

それから病みつきとなって外人ストリップパーの名前があると、見に行くようになった。いや、見に行くのではない。味わいに行くのである。

だが、そういつも、うまい具合には行かな

い。

時には見せびらかされただけで味わえないことがある。そういう時はトルコへ行つて、ウップンを、はらすのだそうである。

従つてトルコ嬢の方もかなり委しかった。

私も誘われたが、どういふものか私はトルコが嫌いで、というのはオスぺとかいふ奴が大嫌いだから、あんなくだらないことには興味がなかった。もちろん馬場氏も、トルコへ行つてスペシャルをやるのではない。特別に頼んで女の子にSになつてもらふのである。これこそ特別サービス、すなわち、スペシャルだと思ふのだが……。

「うまくやつてくれる子が居ますか」

「一応はね。こっちの注文に応じてはくれますが、やっぱり底には職業意識が、ながれていきますからね。向こうが、ほんとに好きでやつてくれる子は少ないですよ。ぼくは割合、年増の女の方が好きですね。それというのも倉田由起さんが忘れられないからです。何といつても、あんな素晴らしい、ひとは居ませんね。トルコの女にしても、顔のどこか由起さんに似ているか、身体の一部でも肌ざわりとか、何かで由起さんに似ていると、その子が気に入るんですよ」

馬場氏にとっては、由起さんは生涯、忘れ得ぬ「恋人」として深く、きざみこまれたのだらう。だが、心と心で結ばれた恋人ではない。セックスの上での「恋人」である。しかし肉体関係といつても、通常の肉体関係は全然ない。馬場氏は何だかだといつても、結構肉体関係（通常の）を結んだ女性を知っている。しかし、それ等の女性は「恋人」とまで深く忘れ得ぬほどの女性には出くわしてないといふ告白している。

「恋人」と言つても相手の由起さんは、馬場氏を奴隷としか思っていないのだから片想いの恋人である。にも関わらず馬場氏の脳裡には、理想の女神として、倉田由起さんのイメージは一生、灼きつけられたまま消え去ることとはないだらう。

そんな風にして年に二、三回は大阪出張のたびに馬場氏と会っていたし、文通は月一度ぐらいの割りで続いていた。

玉井ひろ美との再会

あれは、昭和三十九年頃だったと思う。

大阪の道頓堀劇場で、深井俊彦氏が、田村泰次郎原作の「肉体の門」を演出して評判と

なったという記事を、スポーツ新聞の演芸欄で読んだ。

深井氏も新宿の内外ミュージックが閉鎖して大阪へ行つたということは聞いていたが、ようやく、ひとやま当てたなど、思ったのである。

深井氏が演出しているなら、きっと玉井ひろ美も一緒に出ているに違いない。久し振りで、ひろ美にも会いたいと思つていた矢先、大阪出張の用事ができた。

大阪へ着いて、用事が意外に早く済んだので、すぐ道頓堀劇場へ行つてみた。

生憎「肉体の門」は終わってしまった次の公演に移っていた。「肉体の門」は、昭和二十三年、浅草のロック座で大当たりをとった芝居で、新宿でも浅草でもロングランを続け、たし、映画にもなったが、私は映画も芝居も何度か見ている。田村泰次郎の原作を、小崎政房演出だったが、それを深井氏が、どんな風に演出するか、楽しみだったが、見られなかったのは残念だった。

劇場前のスチールを見ると、果たして玉井ひろ美の写真が大きく張り出されていた。

小屋へ入って見ると客はパラパラである。いかにも淋しい入りだった。「肉体の門」で

は当てたかもしれないが月並みのストーリーでは、お客は、ついてこないのである。

間もなく道頓堀劇場は潰れてしまったが、これは無理もないことである。

何故なら、大阪には特出し専門のストリップ小屋が何軒もあって、当時は、はりきって妍を競っていた。道頓堀劇場では特出しはやらない。その代り舞台装置は、ストリップ小屋よりも立派である。芝居をやるから男優の数も多いし、衣裳も次の公演毎に替えなければならぬし、演出やら何やらで経費が、かかる。その割りに高い入場料も取れない。

舞台の華麗さという点ではOS劇場には到底、及ばない。つまり中途半ばなのである。

世相を風刺したユニークな芝居は、大阪の人の肌に合わないのかも知れない。「肉体の門」のような、どぎつい異色の芝居をやれば受けるかもしれないが、そうそうヒットする脚本はないのである。

私が入場料を払って入ったのは、必ずしも玉井ひろ美に会うつもりはなく、どんな様子か、ちょっと覗いてみようという、軽い気持ちからだった。後ろの方の席にポツンと坐ったが、何ともウソ寒い感じである。

芝居が終わって、丁度ストリップの時間だ

った。一応、粒は揃っているのだが、やはり特出しをやらないというのは、一般客には面白くないと見え、拍手も少なかった。

最後に玉井ひろ美が出てきてウエスタンを唄った。パンチのある、はばのひろい声で、いまの唄い手に比較すると和田アキ子みたいだが、高音に、ひろ美の方が、はばがあり、唄も和田アキ子よりは段違いに、うまい。踊りも本格的な修行を積んだだけあって、しっかりしている。

やがて舞台の突き出しへ出て来ると、たちまち見つかったしまった。

彼女は私のそばへ来て、

「しばらくね——」

と笑いながら話しかけてきた。足の下から見上げると、さすがに彼女の肉体は抜群である。上背があるし、ボリニームのある乳房は乳頭を左右へひらいて、お椀型の美事な、ふくらみが、何とも魅力的である。だが、彼女の肉体の一番すばらしいところは、そのバストにある。このバストは、かつて全盛時代のジプシーローズしかなかったものだ。

「いつ、来たの？」

「今日さ、出張でね。早速、かけつけたよ」
パンティ一枚だが、前の部分が盛り上がった

ているのが悩ましい。このパンティの中を知っている見物人は私を除いては、あるまい。

「いつまで、居るの」

「あさって……」

ひろ美は踊りながら、話しかけてくる。

足の下から眺めた彼女の肉体は、ものすごい迫力がある。このアングルで撮ってみたいと私は撮影意欲がムラムラと湧いてきた。

「今晚、めしでも食べない？」

「楽屋へ電話して」

と言うなり、私の傍から離れた。

彼女がトリを勤めているので、彼女が引込むと、すぐフィナーレになった。

踊り子全員が舞台に並ぶ。中央のひろ美が

私の方へ向かって笑いかけ、ウインクした。

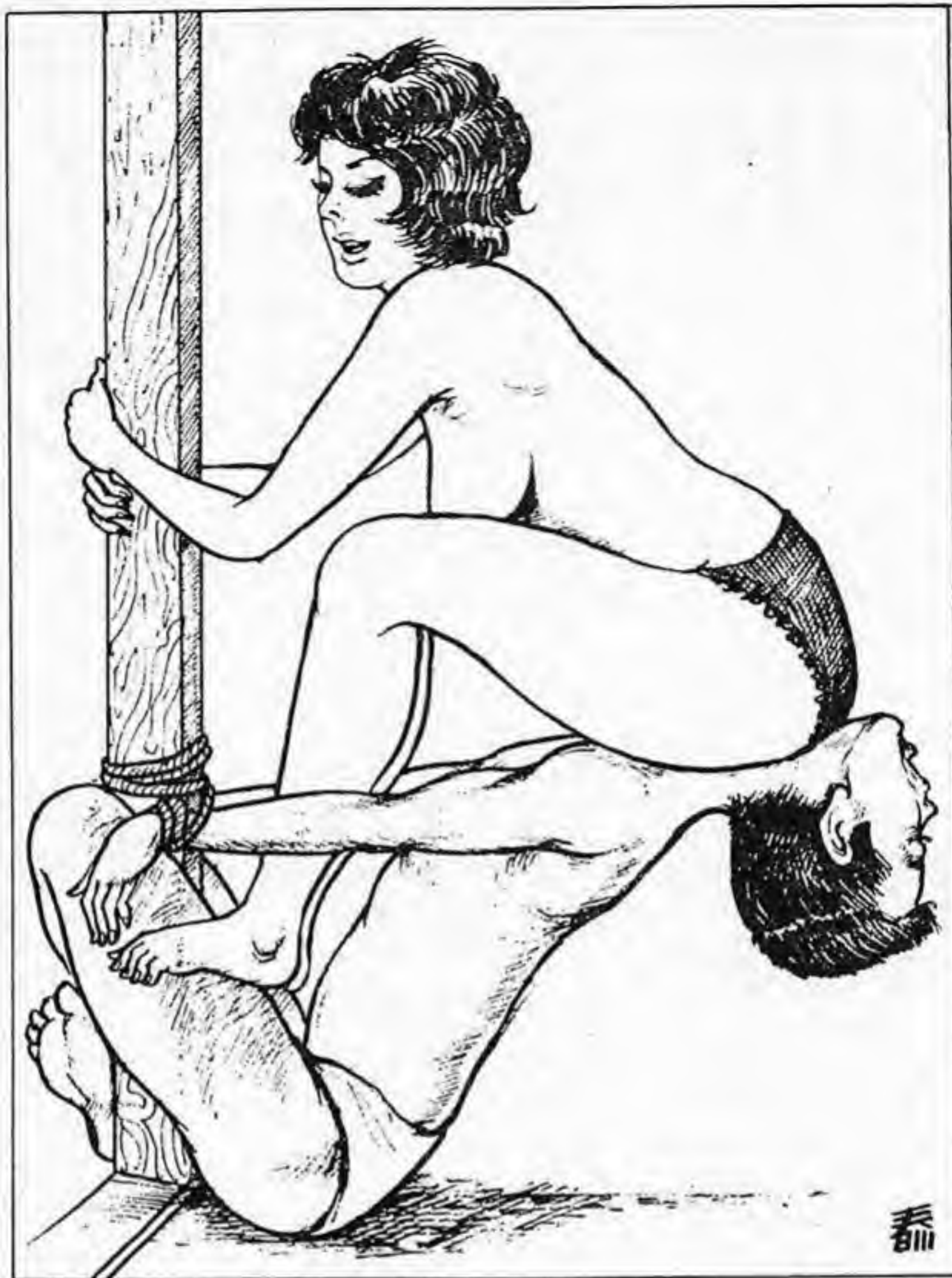
隣の踊り子まで私の方を見ながら、ひろ美にささやきかけ、ひろ美が何か言うと、中央の踊り子、四、五人の視線が全部、私の方へきた。

私の近所の客までジロジロ私を見る。テレくさくなって、ひろ美に手を振ると、そのまま小屋を出てしまった。

劇場の前の喫茶店から電話すると、直ぐやってきた。

ブラジャーとパンティだけの裸の上に、レ

ナミオ M 画廊 『これでもかッ!』 春川 ナミオ



インコートみたいなオーバーをひっかけただけで、ひろ美らしい無難作な恰好だった。化粧もおとしていず、ステージ用のメイクアップのままだった。

「大阪へは、ちょいちょい来るの?」
「うん、二カ月に一度ぐらいはね」
「相交わず写真、撮ってる?」
「いや、あんたが居なくなっただけで、あれか

ら、撮ってないよ」

サンドウィッチとピザパイをとって、ムシヤムシヤと喰い始め、あっという間に二つとも平げてしまった。えらい食欲である。

「よく食うなあ」

「重労働だもん。フッフ」

「あんたを見たときに写真を撮りたくなかったよ。やってくれる?」

「だって、あいかたが居ないでしょう」

「それが居るんだなあ。あんたの強烈なファンだよ」

「エ、大阪にも居るのかねえ。センス、顔が広いわね」

「いや東京から、こっちへ移ってきたやつなんだよ。さっきかぶりつきから、きみを見上げたとき、圧倒されたね。あのアングルで撮って見たいな。やってくれる?」

「いいわよ」

「じゃ、今晚でも、いい?」

「うん、だけど今日は家へ人が来るのよ」

「じゃ、明日の晩は?」

「明日なら、いいわよ」

「じゃ、ちょっと待って。先方へ電話してみるからね」

私は早速、馬場氏に電話した。

「……いや今日、来たんです。ところで、あなた、明日の晩、あいてますか。あいてる。それじゃ私と、つき合ってください。イヤ、それは、あとで話します。いいですね」

馬場氏は、まだ話したそうだったが、私は非情に電話を、きった。

「久し振りに、小屋がハネたら飯でも食おうか。どこか、いいとこ、知らない？」

「シャブシャブなんか、どう？」

「いいね」

「ラ・メールって店、知ってる？ ジャ、ジャン、横町を突ん抜けて、通天閣の傍よ。そこは安くて、おいしいの」

「じゃ、そこにしよう」

小屋が十時頃ハネるといので、十時半にそこでおち合うことにして、喫茶店を出た。

亭主現わる

私は直ぐ馬場氏に改めて電話し、北浜二丁目の「ポルカ」という喫茶店で会った。

玉井ひろ美の名は知らなかったが、道頓堀劇場へは二度ほど行って「肉体の門」を観たという。そのひとがモデルになってくれるのだという、

「じゃあ、あの『肉体の門』の時の、何といったかな、主役の女優さんですか」

「サア、私は見てないので分からないが、多分、彼女が主役をやったと思いますよ」

「ああ、あのひとだったら、すばらしいですね。とても肉感的な美人ですよ。ほんとに、あのひとが、やってくれるんですか」

「今晚、一緒に飯を食うんです。何なら、あなたも一緒に、どうです」

「そうですね——」

馬場氏としては一緒に行きたかったのであろうが、しばらく話をした後、

「いや、きょう、ぼくは遠慮します」

やはり、テレくさいのであろう。私も強いては誘わなかった。

「ラ・メール」へ電話して道順を聞き、十時半に行ってカウンターに名前をつけ、「あと一人たずねて来るから」と断わって先に一ぱい、やっていたら、十一時近くになって、

「遅くなっちゃったわ。ごめんなさい」

と、ひろ美は黒のワンピースを着て、やってきたが、後から若い男が一人ついてきたのは、ちょっと驚いた。

「コレ、バンドやってるの」

「北島です。ひろ美が東京で、お世話になったそうで——」

気さくに愛想笑いしながら、サキソフォンらしいケースを傍に、おいた。

玉井ひろ美に亭主が居るとは、知らなかった。東京に居た頃は亭主の居る気配は感ぜられなかった。もっとも彼のアパートへ行ってみたわけではないから、たしかんことは分からないが、恋人や遊び友達は居るとしても、亭主持ちには見えなかったのである。

私は一瞬、とまどいを見せて、

「やあ、どうも——」

と、あいまいな挨拶をした。

「コレがセンセに一度あって御挨拶したいって言うんよ。センセと、あたしの間は色気抜きやから、コレ連れてきても、かまへんと思つてさ」

初対面の硬さを敏感にさとしたひろ美が硬さを、ほぐしにかかった。

「でも全然、色気ないってこともないわね。色気がなかったら、あんな写真を撮らしまへんもんね」

どうやら、写真のことも亭主に話してあるらしい。それなら、こっちも度胸が据わるといふものだ。

ウェイトレスが注文とりにきた。ひろ美は日本酒、亭主の北島はビールだった。

「こいつは、酒は弱いんよ。何もかも弱くてハハハ——」

大きな声で、あたり構わずバズバズ言っ男のような野太い声で笑いとばした。

「やっぱり東京より大阪の方がいいだろう」

ひろ美は、もともと大阪で育った女であることは知っていた。

「うん、でも、だめね。あたし、近いうちにあすこをやめて、また東京へ行くわ」

あのパラパラの入りでは道頓堀劇場も経営困難だろうことは明らかだ。私は何となしに亭主の北島を見た。北島は、ひろ美が東京へ行くと言った時、何ともいえない哀し気な顔をした。

始終ニコニコして愛想のいい北島が、急にシヨンボリした。その時の表情は、いまでも想い出せるが、これは後になって、なるほどと思ひ当たることになるのである。

だが現在の二人の収入は、かなりよい方らしい。北島の方はキャバレーのバンドをやっいて十万以上かせいでいるし、ひろ美も、それ以上、かせいでいる。十何年前の事だから、二人合わせれば、かなりの収入である。

ひろ美は、お酒を二本、飲むと、もう御飯を食べ出した。

「飲まないの、もう」

「うん、今夜、家へ、よっちゃんが来るからね。あんまり腰据えてられないのよ。センセ今夜の宿は？」

「まだ、きめてない」

「だったらセンセ、うちへ泊まってたら」

「エッ？ あんたのところへ？」

「どうぞどうぞ。狭いところですけど、泊まって下さい」

と北島は、愛想がいい。

夫婦二人きりのところへ泊まるなんて、これが堅気の世帯だったら泊まらないのだが、ストリップパーの生活は、どんな暮らしをしているのかという好奇心が手伝った。

「でも、わるいな。二人きりのところへ」

「かまわないのよ。その代り、何もかまわないわよ。アレ、これシャレになんないかな。」

センセだって宿賃、浮くでしょ」

「アハハ、じゃ、泊めてもらおうかな」

ツンパの品さだめ

ひろ美のアパートは天王寺の、アパートと

言ってもマンシヨンに近い、かなり、ぜいたくな二DKだった。当時は、まだマンシヨンなどというのは少なかった時代である。

部屋には、ぜいたくな家具が揃っていたが中でもステレオの大きなやつがデンと坐っていた。当時、このくらいのステレオは、十五万ぐらいしたと思う。

「お風呂へ入る？ センセ」

「いや、いいよ」

「一緒に入る？ フフフ」

部屋へ入るなり、ひろ美はワンピースを頭からスッポリ脱いで、ブラジャーとパンティ一枚になって浴室へ入って火をつけてきた。

亭主の方はキッチンの方へ行ってゴソゴソやっていたが、チーズとサラミソーセージを切って、セロリやトマトをオードブルのように器用に盛って、盆に載せて持ってきた。

「何もなくて——」

棚からサントリーの角ビンとグラスを取り出して、すすめた。

そこへ「今晚は」と、かわいらしい声がして、はたちぐらいの、かわいらしい娘が風呂敷包み、ひとつを持って現われた。

「あ、よっちゃん。いらっしやい」

「あら、お客さま？」

「いいんだよ」

その子はジュリー美鈴というストリッパーだったが、こうして見たところでは普通の娘と、ちよつとも変わらない。

「ねえさんは？」

「お風呂、あんたも入る？」

そこへ、ひろ美がタオルを頭へ巻いて真っ裸で出てきた。私達の方へ、あけっぴろげなヌードを丸出しにしてバスタオルでサツサと拭くと、それを胸へ巻きつけてやってきた。

「よっちゃん。あさって、発^たつんだって？」

「そうなの。今度は、知らないひとばかりだから、いやだわ」

「ツンパ、持ってきた？」

「うん、見てね」

よっちゃんは風呂敷包の中から、ビニールで包んであるツンパを五つ六つ、出して拡げた。ステージ用のパンティで、ビーズだの羽根などで、いろいろ飾りつけてあった。

「きれいだね。これが、いいわ」

「うん、それ一番、好きなの」

「これもいいじゃないの、変わってて」

「そう？ あたし、嫌いなんだけど」

「あーら、これ、いいよ。こうして見ると、なんだけど、つけると、見ばえがするんよ。」

こういうのは

ひろ美はタオルをパツと脱ぎ捨てて裸になると、私の方を向いて、そのパンティをはきにかかった。

「あっ、あたしじゃダメだ。小さくて」

「ウフフ、無理よ、ねえさん」

よっちゃんは小娘のように笑う。

ひろ美の腰は、男を威圧するような、豊かさである。

それでも無理やり太腿の上の方まで、はいて見せて、

「ホラ、いいじゃないか」

何とも珍妙な恰好で、肝心のものが、まる出しになっている。

「ウフフ、へんだわ」

「そりゃ、チャンと、はいてないからだけどいいよ、これ」

ひろ美は踊りのステップを踏んでクルリと一回転してポーズをとった。

何しろズッコケパンティでは、さまになら

ない。亭主の北島はニヤニヤ笑いながら、私のグラスにウイスキーをついだ。

「あんた、はいてごらんよ。あたしじゃダメだから」

「そうかしら。ごめんなさいね」

と、よっちゃんは私に会釈して、スルスルと裸になった。小柄で、やせぎすが、均斉のとれた、身体だった。向こうを向いてパンティを脱ぐと、そのツンパをはいて、こっちを向いた。

「あーら、いいわよ。すてきだわあ」

手を腰にあててポーズをつくる。

「ねえ、センス。似合うでしょ」

「そうねえ、かわいらしいね」

「あたしは、こっちの方が、いいと思うんだけど」

よっちゃんは赤いツンパを、とりあげた。

「ダメダメ、そんなの、月並みよ。デザインだって平凡だよ」

あれだ、これだと二人で、いつまでも議論している。北島が、

「どれだって、いいじゃねえか。どうせ、すぐ脱いでしまふんやろ」

「そうは行かないわよ。あたし達の身だしなみだもん」

ひろ美は野太い声で反対した。

よっちゃんは、とうとう一枚一枚、はき変えて、ひろ美に見てもらっている。はじめのうちは私達の方へ背を向けてやっていたのがだんだん馴れてしまつて、正面を向いて平気

で、はき変えるようになった。

その前の部分は、よく手入れが行き届いていて、まるで刈られた植木のようにチンモリと刈りととのえられてあった。

片足をあげてツンパをはく時などは、チョリと見えたりしたが、それでいてワイセツな感じが全然なかった。ワイセツどころかエロチックにさえ、感じられない。

それよりも、これが似合うとか、この方がキレイだとか、ひろ美と二人で、いっしんに相談している図は、洋服の柄を選んでいる女の子と何ら変わりなく、いかにも女らしい面が、あらわれている。

「きまったわ。ねえさんの言う通り、これとこれにするわ」

よっちゃんは、ふと私の視線を意識して、ニッコリ笑ったが、それは娘らしい、あどけなさだった。

その間、北島は私に気をつかって、話相手になってくれた。だが彼が、いつ頃から、ひろ美と一緒になっているのか、そのへんのところが分からなかったし、また聞くのも具合が悪いので、話題は、もっぱら演劇と音楽に限られた。

ひろ美と、よっちゃんがテーブルへ戻って

きた。

「すごいステレオが、あるじゃないか」

「センセ。レコード、聞く？」

出してきたレコードは全部、あちらもので私には分からない。

「いま、あたし、これ勉強してんのよ。聞いてくれる？」

深夜なのでボリュームを下げてレコードをかけ、ひろ美はハミングで唄い出した。

ひろ美の唄は全く、すばらしい。しかも真剣に唄っている。私と、よっちゃんは聞き惚れていた。北島は五線紙に自分で譜にとったらしく、鉛筆でところどころにマークを入れていた。

「ねえさんの唄、ほんとに、いいわね」

「ストリップパーなんかやっているの、もったいないだろう」

ひろ美は自分で言って、アハハと笑った。

冗談から駒

「あら、もう一時半だわ。帰らなくっちゃ」

「遅いから泊ってけば、いいじゃんか。センセも泊まるんだしさ」

「四人で仲よく、雑魚寝するか」

と北島は言ったが、だしぬけに、

「先生、何なら今晚、女房をお貸ししましょうか」

と無雑作に言っただけだ。

「大きく出たね」

と、ひろ美はハハハと笑った。

「それで、あんたは、よっちゃんと寝るの」「よっちゃん、どうする？」

「あたし、帰るわ。歩いて帰れるもん」

二人が引きとめたが、よっちゃんはツンパを風呂敷に包んで帰って行った。

「あんな、おとなしそうな子でストリップパーが、つとまるのかね」

「あの子一ぺん、子どもをおろしてるのよ」

「ヘエー、一体、いくつぐらいなんだろう」

「二十一よ。子どもをおろしたのは、三年ぐらい前かな。亭主が、やくざでね」

「純情そうで、とても、そうは見えないな」

「あれでもメーキャップすれば結構、色っぽくなるのよ。もう一人前だわ」

「亭主が、やくざじゃ、かわいそうだな」

「悪ヒモよ。あたしと同じだわ。ウフン」

「おいおい、俺は悪ヒモかい。こんな、いいヒモは居ねえと思うんだがなあ。ねえ先生」

「さあ、まだ今日、会ったばかりだからね、

何とも言えないが、ひろ美ちゃんに悪ヒモなんか、つくわけないよ。悪ヒモだったらズタズタに、ぶっちぎられちゃうよ」

「そうですよ、ねえ先生。ホレ、見い。先生だって保証して下さったよ」

「うぬぼれるんじゃないよ。亭主なら亭主らしく、女房を満足させるのが一人前の亭主だろ」

「だから、お前に不満な思いはさせてねえ、つもりだが、この上、何が不満なんだい」



イメージギャラリー

『夜盗の本懐』

岡

たかし

「フン、不満だらけさ」

「何がよ」

「言っているのかい。言ってやろうか。ねえセンセ。こいつときたら、本番は四分で終わっちゃうんだよ」

「そんなことねえよ。二十分ぐらい、もつことだって、あるじゃねえか。大体、お前が本番より、あの方が好きだから、あっちでサービスを十分してるじゃねえか」

「バカヤロ。舐めりゃ、いいってもんじゃないんだよ。てめえもよくなって、そいだけ消耗しちゃうから、イザという時にダメなんだよ」

ひろ美は啖呵をきるときは、歯切れのいい東京弁になる。

「おいおい、もうこのくらいにしとこうや。」

先生の前で、みっともねえじゃねえか。あんまり恥かかせんなよ」

私は、ほとんど飲まなかったが、北島は家に帰ってきてからは、かなりウイスキーを飲んでいて。ひろ美に、こきおろされても、口で言うほど、テレでもないなかった。

「ねえ、センセ。今晚、あたしと一緒に寝ようよ。こいつが折角、ああ言うんだからさ。センセ、あの方、強いんでしょ」

「いや、最近はメッキリ弱くなったよ」

「でも普通の男並みには行くでしょ、標準ぐらいいは。標準の男性が何分ぐらいもつか、こいつにストップウオッチ持って、はからせてやるから」

「ええ？ 御亭主の見てる前でやるのかい。」

「そりゃ、ダメだよ」

「何がダメなのよ。いいもんよ。最高なんだから」

ひろ美の言ってることは無論、冗談だと思っていたが、かなり真剣な顔つきである。

「アラビアンナイトにも出てるでしょ。亭主にかくれてやるのもいいけど、見てる前でやるのは、それ以上だって。これは何千年も昔から変わらないセックスの原理なんだから」

ひろ美はジロリと亭主の北島を見すえた。

その、まなざしにはサジスチックな、ひかりが流れ、そういう時のひろ美は、たとえばうのない妖しい魅力がある。

しかもバスタオルを巻いただけの、胸からむっちりした乳房を半分のぞかせ、タオルを押し分けて片膝立てた腿は、きわどいところまで、あらわにして挑発的である。こうまでされたら若い人なら、おさえきれなくなってしまうだろう。私も、

「ようし、それじゃあ一発……」

と言う気は十分あるのだが、どこまで本当なのか冗談なのか、ひろ美の気持も北島の真意も、はかりかねていた。

「少し寒くなってきた。あ、センセ。着替えたら？」

ひろ美は、隣の室から自分のネグリジェとクリーニングに出してあった浴衣を持ってきた。私が洋服を脱ぐと、そばから北島が私の洋服をハンガーに通して壁にかける。

ひろ美はタオルをパラリと脱いでヌードになると、浴衣を羽織った私を後ろから肩に手をかけて、クルリと前を向かせると、ギョッと抱きしめてきた。

あっという間もあたえず、私の唇に唇を合わせて吸ってきた。

接吻しながら、裸の腰をグイグイ私の体に押しつけてくる。

「こんなにサービスされると後が恐いな」

よっぽど口に出して言おうかと思ったが、かえって機嫌をそこねるかと思ってやめた。

ひろ美が何で、こんなに積極的に出るのか私には、その真意が、つかめなかった。

ひろ美が私を好きになるファクターは、なにひとつない。色男でもなく、金持でもなし

これまで特に、ひろ美を援助したこともないし芸能界に顔のきく存在でもない。

従って私から何かを得る目的でやっているのではないとすれば、これは結局、亭主のためにやっているのだと思った。

北島という男も多分にマゾヒスティックなところがあるのだろう。その亭主を刺戟するために私を道具に使っているのだと思った。

こういう「道具」にされるのは大変、結構なことだし、ひろ美のような、すばらしい女性のセックス・パートナーに選ばれることは光栄でもある。喜んで「道具」になりたい。

だが私の臆病さが、ここでも邪魔をした。

イザという時になって「あら、センセ。本気だったの。センセも純情ね」などと突っ放されるのではないか。そんな懷疑が頭を持ちあげる。

ひろ美は唇を離すと、また続けざまにキスしてきた。そして眼近かに私の顔を覗きこんで、ほほ笑んで見せた。もはや、ここまできでは冗談とは思えない。

だが、何とだらしないことに、私は帯を両手につかんだまま、ひろ美を抱こうともせずかかしのように、ただ突っ立っていただけなのである。

「ああ、しびれた。ワンダフル」

きざな、せりふを吐いてテレ笑いする意気地なさだった。

北島と目があつた。北島は、ちょっとテレ笑いして視線を私の腰のあたりにおとした。

卑 怯 者

結局、私は踏みきれなかった。

頭にタオルを巻きつけただけの、ひろ美のヌードは全くすばらしい。私の全身に押しつけられた体は弾力があって、湯上がりのムンムンする体臭とともに、私を昂ぶらせたのだが、それでも私は怯んだ。

そこに、私の卑怯で狡猾な打算があつた。

「もはや、ひろ美が冗談でやっているのでないことは分かったし、気持は昂ぶっているが、

果たして、ひろ美に満足を与えることのできるほど、力が発揮できるか?」なんだ。セン

セも大したことないわね」と、やられるんじゃないか? ひろ美に軽蔑されるのはいいが北島に軽蔑されるのが、つらい」

「それに、明日の晩、馬場氏との撮影の時にまた、チャンスがある」という風に考えた。

常々、誰かの見ている前でセックスしてみたいとは思っていたし、時には、そのための設定を、あれこれ妄想したりして、憧憬を絶やさなかった。に、現実に、その場面に直面してみると、かなり勇気の要ることが分かった。然も見ている相手が、女の亭主であるというのは最高の設定である。

普通の人なら、いとも簡単に、激情の迸るままに押し流されて、できたかもしれないのだが、私には、できなかった。亭主の北島と

いう男の、ひととなり全然わからないところ

ろに一抹の不安があつた。イザとなつて、つともたせめ、おどしに出るのではないかいや、これは、つまらぬ臆測である。

二人の収入が二十万もあるのだから、差し当たり、金に困っているようには見えないしひろ美はズベ公時代には、つともたせめ、よくやったと私に話したことがあるが、いまはもう、そんなことをやる身分ではない。亭主にしたって、ひろ美の尻に敷かれっぱなしのように見えるし、とても、そんなことを言ひ出す男ではない。また、万一そうになったら、なお面白い。私は、つねづね、一度つともたせなるものに、ひっかかってみたいと思つていたので、そうなりつこないが、なつたら面白い。そういう方面には、私は、くそ度胸が坐るのである。だから、亭主の気心が知れない不安さ——というのは、私のちゅうちよした理由にはならない。もし仮に亭主の心が、よく分かっている場合だったとしたら「あまりにも亭主を、よく知りすぎているので、やりにくい。これが初対面か何かだったら気がおけないのだが」という、全く反対の弁解をしただろう。要するに、私が臆病だったという一語に、つきるのである。(続く)

天星社刊

△限定版グラビア写真集▽

在庫案内

山原清子「刺青の魅力を探ぐる」一部一〇〇〇円(送共)略号「美?」

◎刺青の女王の魅力を抉り出し、その美しさを最高度に発揮した緊縛フォト結集版。

M写真集「女王様に飼育される日々」一部一〇五〇円(送共)略号「M特」

◎男性が色々の女王様に奉仕し、飼育される生体のかずかずを網羅した写真資料。

◎この写真集は一般の書店にては一切販売しておりませんから、直接、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号天星社に代金同封の上、お申込み下さるようお願いいたします。

S M カ メ ラ ・ ハ ン ト

緊縛妊婦第一号今昔

—— 田中美佐子の巻 ——

辻村 隆



テレビ攻勢に押しまわられて、最近の映画人口は、激減の一途を辿っているのは周知の通りである。

かなり人後に落ちぬ映画好きだった私にしても、この頃では、よくよく変わった映画かSM的要素ふんだんのものしか観に行かなくなってしまう、前宣伝で、どぎつい感じを受けるポルノ映画も、見にゆきたい気持はあっても、そのうち、そのうちにとまっている間に日が経って、大概は見落としてしまう現状である。

それでも流石に、私自身出演の『性倒錯の世界』だけは、東映撮影所の試写と、ミナミの国際東映でと、二回も見ってしまった。

試写の場合、一部の関係者許りなので、さして気にもならなかったが、ドクター氏が、やいやいいうので、彼に誘われ、それならいいっそう、その時登場の野村信子さんも一緒にと声をかけ、三人でミナミでみたが、かなり酔った気嫌のドクター氏が、
「あッ、うつった、うつった。おい、バカにすましてるじゃないか」
とか、

「羽根針をピュンピュン投げているの、あんまり判っきり分からないぞ」

とか、大声で盛んに喋り立てるものだから隣席や、前の席の客が振り返り、野村信子は小さくなって、うつむいてしまう始末で、もうどうしようもなく照れてしまったのであった。

すっかり酔っ払い、昂奮したドクター氏は劇場を出ると酔歩漫散として、大人の玩具屋へ入り、手錠を買ってノンコの片手に嵌め、鍵を抜いて、

「さあ、これから道頓堀をこうして歩こう」と、嗜虐にぎらつく眼付きで、蔽いようもなきノンコの手錠をみつめて、ウソブクのであった。

ノンコもノンコである。案外ケロリとしてハンドバッグを手錠の嵌まった手首にかかえ悠々と私達と並んで歩く。女はイザとなると至極、大胆であった。

ホテルの一室へ三人落ち着き、人妻を巡っての怪しげなるプレイ——。

私は残念にも、その夜、ハントの準備なく唯、酔い戯れ、ノンコの強烈極まるエクスタシーの極限に、啞然とし、この平凡なる人妻の、どこにこの様な激しさが隠されているのかと一驚したのであるが、いずれ日を改めてハントしてみたい野心に、猛烈に駆られたの

であった。

こんな思い出のある映画のあとの、ひとときであったが、同好者は有難いもので、日頃は劇場に足を運ばなくても、私の出演を知って、かなりの人が東映さんに儲けさせてくれたようである。

感想の手紙や電話が、頻繁にかかるようになり、私も、多少は自己嫌悪に陥りつつも、体よくお返事していたが、こんな機会に思いもかけぬ人からの連絡があつて、それが私には嬉しかった。

嘗ての映画「徳川女刑罰史」と、そのあとのイレブンPM出演によって、音信の途絶えていた梨花悠紀子から電話があり、熱い撚りが戻って、前後数回、激しいSMプレイに耽溺したことがあつたが、今回も、既に忘却の彼方にあつた人からの電話で、咄嗟には思い出さなかつたくらいであった。

「田中ですが、覚えておいででしょうか？」といわれても、平凡な田中姓には一寸、推察しかね、はて、どの田中さんかと、めまぐるしく脳裡を回転させてみたが分からない。「九州へこられて家内の妊婦フォトをお撮りになったでしょう、七年ばかり以前に……」

「ああ、あの田中さん。これはこれは、お珍

しい。今、どちらから？」

「転勤しまして、現代、東大阪に住んでいるのですよ。辻村さんも、あの頃にくらべて随分、有名になりましたね。もう私どもは、とてもお近づきになれない、遠い距離の方に思えますよ」

「いや、とんでもない。私は、ちっとも変わっていないのですが、バカの一つ覚えみたいに、ハントばかり書き続けていたら、いつの間にか、こうなってしまったんですよ」

「いやいや、映画を拝見しましたが、とても堂々として御立派ですよ」

「お恥かしい。あがっているんです」

そこで田中氏は、私の記憶の戻ったのを好機に、映画について一しきり喋り、

「実は家内も一緒に見に行ってるんですよ。とても懐かしがりましたネ。一度、会ってみたいなんて、又ケ又ケというのですよ。何かと御多忙でしょうが、近くですから、是非お遊びにお越し下さいよ」

「私も懐かしいですよ。それで、プレイの方は、その後、如何です」

「いやいや、もう二人の子供の親になってはサッパリですわ。辻村さんの仰有る緩々も、いいところでしょうね。でも、偶に気の向いた

時などやりますが、かなり強烈ですよ。所詮はセックスの前戯ですが……」

「御夫婦の場合、それは当然でしょう。しかし貴方がたを折角、九州まで訪れましたのに遂々理由があつて書けませんでしたよ。いわば、私にとって、妊婦緊縛の第一号だったのですがね」

「分譲フォトになっていましたね」

「ええ、そうした約束でしたから。でも、露出のものや、きついのは渡していませんよ。今も筐底で眠っていて、実に惜しいと思ひますよ。今なら堂々と発表するんですがね」

「なさって結構ですよ。遅蒔きながらも、チツとも構いませんよ。それより、一度、私どもへ、お越し下さいよ。その気になって協力いたしますよ」

「本当に——。じゃあ、近々に是非」

田中弘氏との電話をきって、私の胸裡に、七年前の出来事が、ありありと昨日のことのように浮かび上がってくる。

それは、書きたくてウズウズしながら、遂に書けなかった。妊婦緊縛の、懐かしくも苦しい追憶である。

× × ×

昭和三十九年六月号の、読者通信欄の最末

尾に、こんな通信文の掲載されていたことを御記憶の方は、もうおそらく皆無であろう。

そこには、次のように記載されている。

(はじめに、お便りさせていただきます。

私は、御誌の数年来の愛読者ですが、いつも興味深く拝読しております。誌上では、

妊婦マニアの方々も、相当おいでの様子ですが、私の家内も只今、妊娠中で、分娩予定は五月中旬です。大阪に近ければ、お伺いして撮影のモデルにさせてもいいのですが、汽車で十数時間の行程ですから、一寸無理だと思ひます。妻も、自分の初産の腹部の、大きいところを是非、撮影してほしいと申しておりますので、若し編集部の方で、おでむき下さるのでしたら、お願いできれば幸いです。そのうち、いずれ私達夫婦のSMのプレイについても、書かせていただこうと思ひています。その節は、どうかよろしくお願い致します。

福岡市 田中 弘

平凡ではあるが、当時としては、真面目な画期的な通信であった。

ちなみに、この六月号には、私の拙稿「奇譚三十九夜物語——第三十六夜」が掲載されており、団鬼六さんの、名作「花と蛇」は第

十二回で、油の乗り切った、面白いさかりの頃であった。

田中弘氏の、この一文が、読者通信に掲載される以前から、既に私は、彼の妊婦緊縛フォト希望の便りを箕田氏から聞かされて知っていた。

そろそろ三十九夜物語も終焉に近く、次の構想として、SMカメラ・ハント着稿の準備をしていた頃だから、大いに意馬心猿になって心を燃やし、早速この話に飛びついたのは当然の心情である。

とはいふものの、九州福岡まで唯その一件のみで出掛けるにしては、流石に距離の遠さを感じる。しかし、愚図愚図しては出産してしまふし、そうそう妊婦のチャンスもなく、そのうち又、どう気が変わるかも知れない。

思いきって、四月上旬の、土、日曜日にかけて、夜行列車を利用して出掛けることに腹をきめる。

私一人では何となく心細く、箕田氏の同行を、しきりに誘ったが、彼も編集や出版の仕事を停滞して、かなり遅れているとかいうことであつて、わざわざ九州くんだりまで、唯妊婦フォトを撮りに行くという旅には、二の

足を踏んだ。

その代わり、編集部より往復の旅費と、宿泊料を出すから、なるべく分譲用のフォトの方も撮るよう依頼されてしまった。かくて私は、ただ一人大阪駅より夜行列車に乗り込んだのであった。

私にとっては、それこれ始めて撮る妊婦である。過去、数多くの緊縛モデルを撮ってきたが、妊婦フォトを撮る機会には恵まれず当時未だ、それほど勇氣ある女性の出現もなかったのである。

妊婦は、まだまだタブーと羞恥の世界に息づいていた。

田中美佐子さんという、彼の奥さんの顔も年令も勿論、知らない。初産婦というから多分、若いのだろうと勝手に想像をめぐらせ、車中、未だ見ぬ田中夫人の、豊満な膨らみの腹部をあれこれ想像しては、寝台車に横たわっても到底、寝つかれそうもなく、緊縛の幻影や妄想にとり憑かれて頭は冴えてゆく一方であった。

夜明け近くウトウトと仮睡して、ハッと眼醒めたら、もう博多駅に到着していた。

顔を洗う暇もなく慌てて飛び出し、構内から出て赤電話を探し求める。

到着したら、彼の自宅の方へ電話することになっていた。と、いっても呼び出し電話であるが――。

福岡へは、戦前に一度、行ったことはあるが、社用のトンボ返りで殆ど大都会の記憶はない。戦後になってからは始めてでもあるせいか、未知の街といってよかった。

うる憶えの駅前には、すっかり様相が変わっていて、見当もつかぬ私は、免も角も、公衆電話で、田中弘氏を呼び出してもらおう。

彼にしてみても、私という人間に対する予備知識は、何もなかったらしい。

おそらく、編集部から来た者とも考えていたらしかった。それは無理もない。

私はその頃「奇譚三十九夜物語」のみ一本を、毎月コツコツと発表しているに過ぎなかったのであるから、いきなり辻村と言われても、ピンと来ないのは当然であろう。

電話口に出た彼の声は、予想に反して意外によそよそしく、いかにも事務的であった。受話器から響く声のウラには、むしろ当惑めいた感すら覚え、私は咄嗟に、遙々きたハントへの期待が裏切られたようにすら思えたのである。

駅に到着の旨を告げ、年令、服装、特徴、

所在場所などを知らせて電話をきる。

駅頭で十五分ばかり、待ちあぐねているうち、何故ともなく空しさが胸にそくそくと迫り、私自身の、猟奇を追い求める性^{さが}が、情なく思われてくるのであった。

果たして、遙々九州の地を訪れて、うまく妊婦の緊縛フォトを、ものにし得るのかと、期待と不安、軽い危惧を抱いて、当てもなくゆきかう人々の群れに、田中氏らしき人物を求めてキョロキョロしていたのである。

いつもながら、待つ時間というものは長く感じられる。

九州くんだりまで、未知の嗜虐の探求に訪れた自分の、物好きさ加減に、フトやり切れぬ自己嫌悪すら覚えて、彼の電話が妙によそよそしく、とりようによっては、素ッ気なくさえ感じられたことに、こだわり始め、或はあの通信も、心を燃焼させたさなかの、きおい立った勢いに任せて書いたに過ぎぬものではなかったかと、思われてくるのであった。

真に受けて、ノコノコ出掛けてきた私に、内心困惑し、今更断わりもならず、逡巡し、思いもかけずヒョウタンから駒が出て、美佐子夫人に拒絶をくっている彼を想像しては、あらぬ気さえ、廻すのであった。

その不安と危惧は、それから数分後、忽ちうたかたの如く消え去った。

駅前に滑り来んできたタクシーから、慌しく降り立った色白の青年紳士が、足早にスタスタと私に近づくと、柔らかい、はにかんだ微笑を泛かべて、

「奇クの方ですね」

と、ズバリ問いかけてきた。安堵の色をうかべ、思わず反射的に、

「ええ、そうです。辻村です」

私の顔は、きつと綻んでいたに違いない。

「お待たせしました。タクシーが、なかなか掴まらなくて……本当に遠方の処を、わざわざ御足労下さって恐縮です。免も角、お茶でも如何でしょう」

電話の声とは打って変わった、親しみと同好のよしみの知己を感じてホッと、うなずくと、彼は一步、先に立って、勝手知ったる博多駅前の、最寄りの喫茶店へ向かって歩き始めた。

彼は熱いコーヒーを啜りながら、

「まさか、本当に実現出来るとは、夢にも思いませんでしたよ。よく来られましたね」

と、沁々感懐をこめて、嬉しそうに言うのであった。

「あなたのお便りが、ひやかしではなくホンモノだと直感したものですから……」

（うそをつけ！ さっきまで不安と危惧にさいなまれて、自己嫌悪に陥っていたくせに）しかし、そんな心の動揺はオクビにも出さない。私は、泰然自若と納まりかえっていたつもりであった。

「信用していただいて嬉しいですよ」

「私も過去、かなりの緊縛モデルを撮ってきましたが、正直いって、妊婦の緊縛は始めてなんです。これは千載一遇のチャンスですからね、飛んできたのです。確か奥様は、現在妊娠九カ月の筈でしょう。そんな臨月近いフオトが撮れるなんて、とても考えられなかったのです。元来、探究心の強いほうなんですよ。うね。こんなこととなると千里の道も遠しとせずの意気込みですよ。それで、奥様の方は、御諒解すみなんでしょうね？」

「矢張り、かなりの抵抗は、あったようです。私どもは、結婚以来三年のあいだに、見様見真似、独りよがりのSM的なプレイをして過ぎてきました。結婚当初、全然M気のない妻でしたが、私なりに、相当飼育してきたつもりです。勿論、辻村さんのような第三者の前で、縛られ、裸をみせるのは生まれて

始めてなので、大分、嫌がりました。でも任して下さい。連絡があつて以来、毎夜の如く言い含めましたから大丈夫ですよ」

激しい嗜虐の好奇心が、全身に満ち溢れ、未だ見ぬ美佐子夫人の、妊娠九カ月の、べんべんたる太鼓腹を波打たす、あられもない裸身に心を疼かせ、沸々と、血のたぎる思いにかられてくる。

サンドイッチを運んできたウェイトレスの手前、言葉は一寸、途切れたが、立ち去るや田中弘氏は言葉を続けて、

「私はどういうわけか、精密器械には弱いのです。カメラも、買うことは買ったのですがピンボケばかりでダメなんです。勿論、自家現像なんて器用なことは、出来てありません。何度も、美佐子の緊縛を撮ることは撮ったのですが、現像に出す勇氣がなくて、結局抜き出して、焼き捨ててしまいましたよ」

「勿体ない、折角のものを」

思わず口を挟むと、

「それほどものじゃありません。ライトも何もしないで撮ったのですから、きつと見られたものじゃないですよ。近頃ではカメラの方は、あきらめまして、専ら、奇クグラビヤをお手本に、縛ることの一点張りですが、従

順な方でして、殆ど私の為すが俛になつてく
れます。美佐子が妊娠しました、これを機会
に、妊婦の緊縛フォトを撮っていただいて、
記念に遺しておきたいなんて、とんでもない
野心を抱いたわけなんです。フォトの方は、
私では到底、自信がありませんので、それで
此際、思い切って、ああした通信を出してみ
たのです」

「多分来月号の読者通信にのっていますよ」

「まさか——」

「いえ、本当です」

「弱っちゃったなあ。まあ、いいです。羽村
京子さんや、妊婦に興味をお持ちの方は、関
心を持たれるでしょうね」

「確かに……。過去、妊婦フォトは一枚もあ
りませんからね。正に画期的ですよ。田中さ
んが、そのように割切っておられるのなら、
申しあげますが、箕田編集長から、分譲フォ
トの依頼を、うけてきたのです。構わないで
しょうか？」

「ええ、美佐子の様な女でもよければ、いい
ですとも……。唯、家内の前では、そのことは
言わないで下さい。何かのことで、心配する
かも知れませんからね」

「心得ています。私が今、書いている『奇譚

三十九夜物語』にも、近頃はチヨクチヨク、
フォトを発表しているのですが、是非このこ
とを書かしていただきたいですなあ」

「ええ、いいですよ。愉しみに、しています
よ。改めて辻村さんのものを読み直して、認
識を新たにしたところですからネ」

快諾を得て、内心わくやくする思いにから
れ、来月号の三十九夜物語で、このトピック
を発表して呀っといわせてみせるぞと、心は
早くもプレイに飛び、最早、こうして会話に
時を過ごすのが、一刻も惜しくさえ思われて
きた。

「話に夢中になっていましたが、夜行でこら
れて、さぞお疲れでしょう。今夜は狭いとこ
ろですが、私方で、ゆっくりお泊まりになっ
て下さい」

「仕事もあって、そうもゆっくりしておられ
ないのです。出来れば、今夜の夜行で発ちた
いと思っています」

「トンボ返りですね。そりゃ大変だなあ」

「月曜日に是非ない用事がありますのでネ。
出来ますれば、お言葉に甘えて、一兩日、ゆ
っくりしたいのですが、そうもゆきません」

「私の為に、わざわざ日曜日を選んでいただ
いて恐縮です。若僧で、思うに任せぬ宮仕え

ですので、勝手休みも出来ないのです。本社
は大阪ですが、博多の営業所に転勤して、二
年目になります」

「と仰有ると、お生まれは大阪？」

「私は滋賀県の彦根なんですが、家内は大阪
です。おきまりの恋愛コースを辿っての、社
内結婚です。堅い会社で、恋愛が社内で噂に
なつて、家内は会社をやめました、それも
あって、左遷されたのでしょうか」

「恋女房ってわけですか。それで、妊娠は始
めてなんですかね」

「安月給ではシンドイし、かなりの間、バス
コンを実施していましたが、家内が淋しいと
いうので解除したら、忽ちバッチリですわ。
美佐子も、もう二十四才です、一人ぐらい
子供があつてもいい年ですので、踏み切った
というわけです」

田中弘は、フランクに身边を語った。私は
さりげなく腕時計をみた。それに気付いて、

「そろそろ、出掛けましょうか」

と彼は立ち上がる。

午前十一時、彼にすべてを任せて、駅前か
らタクシーに乗り込む。

行先は宝来町——。

その一面に、会社が借り切った、出張社員

専用のアパートがあった。

彼の声が、妙によそよそしかったのも、アパートの管理室の電話から掛けたと分かれれば電話口で何も言えなかったのは当然である。

タクシーに揺られながら、

「奇クは、ずっと、お読みなんですか？」と私。

「ええ、白状すると、結婚前から読んでおります。もう五年ぐらいになるのじゃないですか。辻村さんにお目にかかって思い出したのですが、グラビヤなどよく構成なさっておられましたね。羨ましいですなあ。私も、やってみたいですよ。といっても、そうおいそれとは、ゆきませんでしょう？」

「奇クは、ずっと、お読みなんですか？」

「奇クは、ずっと、お読みなんですか？」と私。彼の声が、妙によそよそしかったのも、アパートの管理室の電話から掛けたと分かれれば電話口で何も言えなかったのは当然である。タクシーに揺られながら、「奇クは、ずっと、お読みなんですか？」と私。ええ、白状すると、結婚前から読んでおります。もう五年ぐらいになるのじゃないですか。辻村さんにお目にかかって思い出したのですが、グラビヤなどよく構成なさっておられましたね。羨ましいですなあ。私も、やってみたいですよ。といっても、そうおいそれとは、ゆきませんでしょう？」



の傾向になってから、いつの間にか、こうなってしまう。でも、ハタで羨ましがらるほどラクでもないんですよ」

「そうでしょうか——私なんかから見れば、ぜいたくな悩みみたいです」

「現にこうして、唯、その目的のために博多まで、遥々来ているじゃありませんか。もし今、大阪にモデルがいるから、一緒に撮りましょうと言っても、田中さんは、そうおいそ

れとは行けないでしょう」
「いや、有給休暇をとってでも、出掛けますよ」

「そう仰有るだけで、いざとなれば、どうでしょうかね。私だって、緊縛モデルと待ち合わせして、何度、すっぱかされたり、待ち呆けをくったか知れないんですよ。女性は、いざとなつて、ヒョイと気の変わる時もあるし精神的な極度の緊張と不安で、思いもかけず

生理をみる時もあるのです。

電話や速達で断わってくる女性など、良心的な方で、黙って、すっぱかす人だって多いんです。そうした不測の場合を承知でも出掛けますか？

懼らく無理でしょう。今あなたは、約束を守って、こうして来て下さったけど、非道いヒヤカシになると、読者通信では綿々と訴え、希望しておきながら、当日になると、心が挫け、卑劣にも、待ち草臥れている私や箕田さんを、そっと物蔭から窺っていて、出て来なかったり、待ちぼうけ

の私達を、近くから眺めて、あざ笑っているような、悪質な連中もいるのです。忙しい仕事を放ったらかして、わざわざ指定の場所まで出掛けて無為に帰ったことも幾度かあるのです。それは、こうした狭い門の探究に憂身をやつす者の宿命かも知れませんが……。だから、九州訪問も、やはり一種の賭めいた冒険だったのです」

「よく分かりました。成程、仰有る通りラクではありませんね。私には、到底それだけの熱意がないかも知れません。所詮、妻を相手に、SMの想念を満足させているのが、一番無難なようです」

目的地に近い。専売公社の近くで車を捨てると、春日遅々の柔らかな陽射しを浴びて、並んで歩いていった。

× × ×

大阪並みのアパートを想像していたら、官舎めいた平家建ての棟続きで、一棟に六軒の独立した、こじんまりした家が、数棟並んでいる。

団地まがいの、同じ造りの家が数十戸も建っているのは、始めて訪れると、間誤つくこと請合いである。

田中弘は、その三筋目の道路を先に立って

案内し、家に近づいたのか、小走りに走ってその一軒の硝子戸を勢いよくあけて中へ入っていった。

日曜日なので在宅の家が多いようである。彼の家の前で立ち止まっている、鞆をさげた私に、表で立ち話をしていた数人の若奥さん連の視線が、何者だろうか？ という風に、一勢に、うさん臭げに投げかけられてきた。

狭い玄関から彼が手招きする。やれやれと視線から解放された思いで、心をそわつかせながら、三帖の茶の間に案内される。

小さいチャブ台に向かって所在なく煙草をくゆらせていたが、お目当ての美佐子夫人はなかなか姿を見せない。

耳をすませると、奥の間から、夫婦の声を殺した、ひそひそ話が伝わってくる。懼らくこの期に及んで逡巡し、尻込みする夫人を、彼は必死になって、口説いているに違いなかった。

無理もあるまい。夫婦の間の戯れの睦言には、快楽の谷間で、我にもなく応諾しているも、それがいいよ、ノッピキならぬ現実となってくると、妊娠九カ月の太鼓腹を、始めての第三者の眼前に曝せるだけの勇氣は、どうしても湧かないのであろう。ましてや、緊

縛を伴い、あられもなき羞恥をむき出しにするとなると、躊躇し、逡巡するのは、当然のように思えるのであった。

昭和三十九年の春頃は、まだまだSMブームには程遠く、奇クすらも、一部同好者の隠れた存在に過ぎなかった。現在普及された、SMという言葉すら、奇クや同一系列誌の中でのみ生きていて、嗜虐、被虐などという語句は、口にするのを尚、憚られていた時代である。

既に、数多の緊縛モデルのフォトは誌上を賑わしていても、妊婦フォトは皆無であったし、もし隠れたどこかにあったにしろ、公表はタブーのように思われていた。

それだけに、美佐子夫人にとっては、確かに勇氣のいる行為であった。

隣室から、私が口を挟む余地はない。すべては成行に任せて、実現の成功を内心、祈るより手段はなかった。

眉間に軽く陰を泛かべて、彼は茶の間へ戻ってきた。堅い苦笑で、頬をこわばらせながら、

「いやどうも、いざとなれば強情で弱りますよ。なかなかウンといわないんです」

「そうですか、弱ったですね。折角こうして

きたのですから、オメオメとその俣、帰りも出来ませんし……」

それは私の本音である。眉を曇らせると、彼は慌てて、

「ええ、ごもっともですとも。きつと口説き落としてみせますから……お茶も出さず本当にすみませんねえ」

困惑げな表情に、サツと決意が流れた。

「でも、御無理なさらないで」

「大丈夫です。もう少しだけお待ち下さい。」

ただ、おみかけ通りの安普請ですから、少し大きな声を立てると、

両隣に筒抜けに聞こえますのでネ、プレイだって正直の処、思うに任せぬ状態なんです。

しかも今日は日曜日で殆ど在宅でしょう。近所の夫人達が姦しくて心がその方に走るのかそんな気になれないっというのです。それにまだお昼前だから、ひよっとして近所の人が訪ねてくると困るって

いうのですよ。でも何とかしなくちゃ……折角、遠方のところ、わざわざいらっしゃったのですから」

彼は思考を練るように、拳でトントンとひたいを叩くと、深い決意をきめたのが、ピョコンと頭を下げて、再び隣室へ消えた。

美佐子夫人が必死に拒絶するのち、あながち無理からぬように思われた。

時間といい、場所といい、ムードといい、緊縛プレイをするには、確かにふさわしくない雰囲気であった。

SMプレイには、プレイし易いムードづくりが必要である。

私達夫婦のSMプレイにも、往々にして、そんなことがよくある。

夜の闇の睦言の間に間に、お互いがエスカレートしてくると、SMの強烈なプレイがしなくなってくる。

明日は幸い子供達も夕方まで不在で、夫婦二人きりだから、裏庭や芝生で野外の緊縛プレイをやろうと誘うと（ええ、そうしましう。きつとよ）と、妻は言葉のプレイで更に

歓喜に悶えて、喘ぎ応えるがいざ夜が明けて朝になると、電話がなり、定期的な八百屋魚屋の注文とり、不意の来訪者、仕事のことなどで、夜半のプレイの約束は、朝霞のように雲散霧消して、妻は日々のなりわい、炊事洗濯、私は私で仕事と、結局は何も出来ず、再び夜が訪れると、小半日、二人きりだった折角のチャンスに、強烈なプレイの出来なかったことを、二人で残念がるのであった。



所詮、こうしたS M的なプレイをする場合は、そのことに心を走らせ、プレイのムードに、ひたらなければ白々しかった。

懼らく美佐子夫人にしても、夫とのプレイの谷間では、私を交えての緊縛のプレイを、悦楽にのたうちながら応諾していたに違いない。

そのくせ、この昼前の明るい陽射しと、近隣の喧噪と、未知の来訪者に、心はかたくなに閉ざされ、そうした行為が、うとましく思われ、嫌悪すら覚えているように思われるのであった。

美佐子夫人の拒否する気持は、手にとるように分かってても、無為無策、なすすべもなく今更オメオメと引き退りも出来ない。といって、一面識なき人妻に、強引に勧誘する手段もなく、すべては、夫、田中弘の説得に任すより致し方なかった。

重苦しい焦燥感に捉われての待つ時間は、やけに長い。数本目の、苦い煙草に無意識に火をつけ、私はじりじりする思いで待ち兼ねていた。

昂奮で顔を充血させた彼が、勢いよく境の唐紙を開いて入ってきた。

「どうやら、その気になってくれましたよ。」

やれやれ、約束が果たせてホッとなりました」じつとりと、ひたいに汗を泛かべて、彼はやっと余裕をとり戻した顔付きになった。

「無理矢理の押しかけみたいで、何だか奥さんに悪いような気がしますよ」

と、口では一応もっともらしいことをいっても、内心ホッとして、途端にむらむらと嗜虐心が湧き上がってくる。

「いや、どうぞ御心配なく。家内も、やっと腹を据えたようです。本来なら、どこかの安直なホテルでも利用すれば、辺りへの気掛かりもなく、気分も転換出来易いのですが、あの身重の体じゃ可笑しく思われますからね。」

まして、臨月近い妊婦に男が二人もノコノコついていっちゃ、変な眼で見られるでしょうからね。ここで我慢するより、仕方ないんです。誠に御無理なお願いですが、余り大きな声で喋らないで下さいよ。気づかれると、あとと困りますので、なるべく静かにプレイしていただきたいのです」

「ごもっともです。十分注意しますが、うっかりしていたら、どしどし注意して下さい」嬉しさの隠しようもなく、私は大きくうなずいて答えた。

「じゃあ、早速、準備にかかります」

彼はソワソワと立ち上がると、玄関の硝子障子の錠をおとし、表通りに面した、窓のカーテンを引いて、隙間を押ピンで止めた。覗かれるのを怖れて、かなり念入りに外界と遮断している。

消えも入りたげな風情で、美佐子夫人が襖を開いて、滑り込むように、茶の間へ入ってきた。始めて見交す顔と顔——。我にもなく頬のはてるのを覚える。反射的に視線が、彼女の腹部の膨らみに走った。

羞恥が、美佐子夫人の全身を包んでいた。夫の強硬な説得に負けて、挨拶に出たものの困惑と怨嗟の表情は隠しようもなかった。細々と蚊の鳴くような声で、

「始めまして……田中の家内でございます。御遠方を、わざわざお越し下さいましたのに我儘ばかり申ししまして、申しわけございません。覚悟はしておりましたものの、いざとなるると、恥かしさのみ先走りまして、つい取り乱してしまいました。九カ月の身重な体で、醜くはございますが、こんな私でもよろしゅうございましたら、どうぞよろしくお願い申しあげます」

丁寧に挨拶して、深々と頭を下げるのであった。

「いや、私の方こそ、トンだ御無理を申し上げまして恐縮です。御主人のお便りを、その俣に受取って、あつかましく、やってきました。御厄介かけます」

と私も、つい丁寧な口調にならざるを得ない。

見るからにおとなしい、気の優しいような、苦奥様然とした美人である。殆ど素顔に近い薄化粧だが、すべやかな地肌、身のこなしに育ちのよさが全身に漲り、とりわけ、くつきりとした二重瞼が印象的であった。

さぞかし洋装の似合う人だと思われるが、腹部の脹らみを、幾分でも隠そうとするかのように着物で包み、エソジのうわっぱりをその上に羽織った常着姿で、淑かに顔を伏せている。

夫のいざないで立ち上がり、奥の間に通されると、ここは六帖で床の間もあり、夫婦二人暮しの世帯は、意外

なくらい整頓されていて、外見にくらべて内装は立派であった。

夫人の奥床しさを語るように、水盤には、四季の花が、かたちよく活けられてある。

「雨戸を閉めると、少々声が高くて大丈夫なんです、昼日中から繰れませんが、そのところ、よろしく」

田中弘は、くどい程、念を押した。両隣の同僚に気づかれるのを、極度に恐れているようであった。

奥座敷の障子を開くと、狭い濡縁があつて

三方、板囲いで、二、三坪ばかりの、ささやかな植込みの小庭がある。互い違いにうった両隣の板塀の隙間から、隣家の小庭が覗けていた。雨戸を繰れば、まだしも、成程、これでは大声を出せぬも道理と、彼の杞憂が分かる気がするのであった。

白い紙障子に、春の陽射しが明るく映えていた。

「何から始めましょうか？」

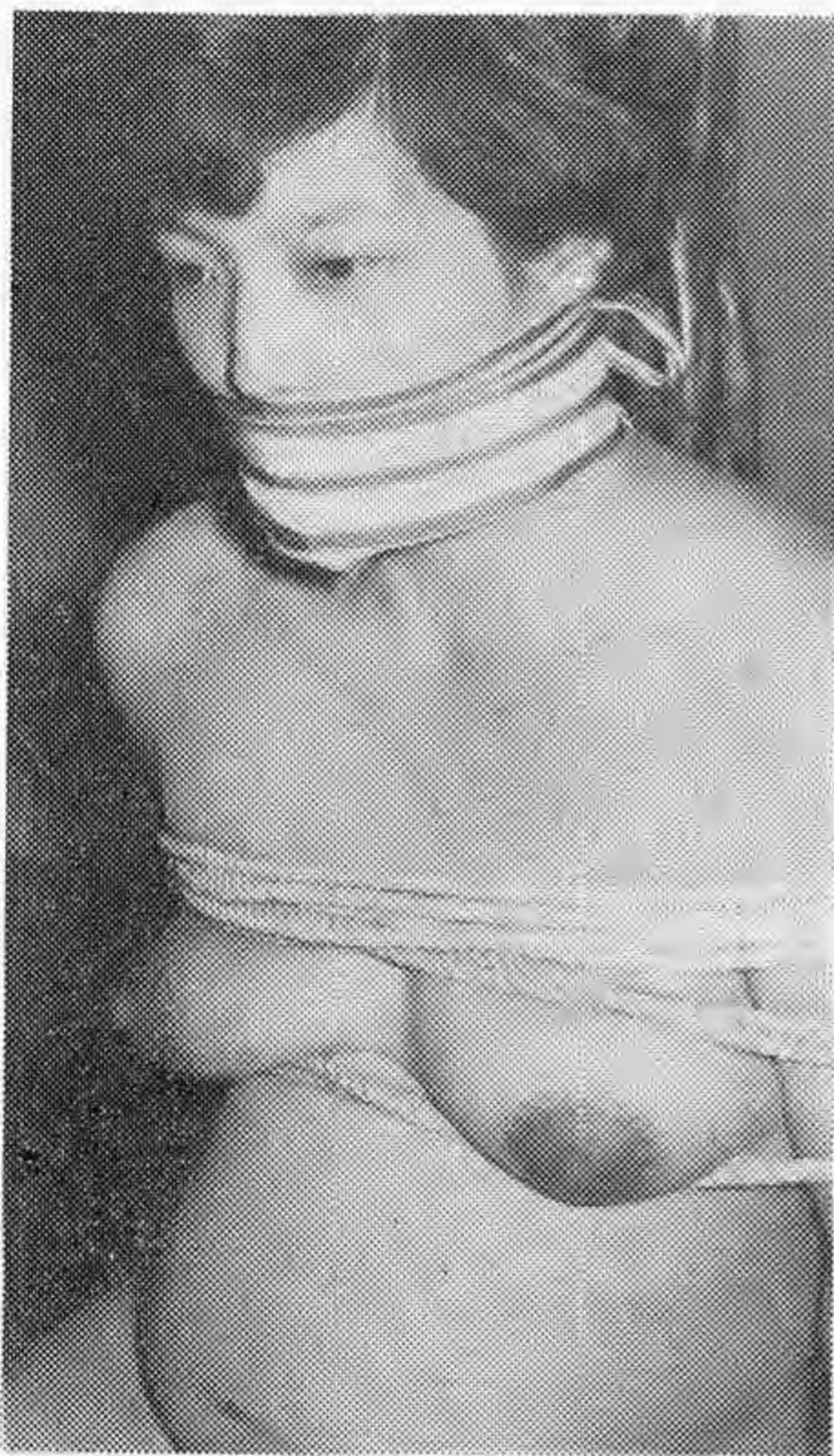
顔を近づけてきた彼は、まるで囁くように訊ねる。

「着物から順次、脱いでいてもらいましょうか」

昂ぶる心の盛り上がりを抑えて、努めて平静な事務的口調で告げると、私は撮影の準備にとりかかった。

外部に光が洩れぬよう、障子側から部屋の内部に向けて二基のフラッド・ランプを点じる。

計一キロWの点火と共に、一瞬にしてヒューズがとんでランプは残光をのこして消える。



慌てて彼は玄関に走り、太いヒューズと取り替えている。余り高量の電力は使えぬ仕組みらしい。

美佐子夫人は、茶の間で無然として、声もなく坐って、みじろぎもせず、深い思いに沈んでいるようであった。

間もなく否応なく羞恥を曝さねばならぬ。彼女の脳裡を去来する反発と諦観――。

辱かしめに怯えて、心労の影をおとして、心は蒼鬱めているのではなからうか。

やっと点燈し、狭い座敷は惶々と照らし出される。

今なら、ストロボで手軽にやるところだがその頃は、箕田氏も私も、常に嵩だかいランプやコードを持ち歩いていたものだった。

スタジオのように、惶々と輝きわたった部屋に肅然と立ちつくして、彼は心落ちつかぬ如く、しきりに障子の外の気配を気にして、窺うのであった。

一旦、腹を据えろと、女性は大膽である。むしろ夫の方が、外界を気にして、絶えずソワソワと落着きがなかった。

覚悟のホゾをきめた美佐子夫人は、既にうわっぱりを脱ぎ、細目の簡便帯を外ずして、

下紐もとり、両手で着物の前を合わせて佇んでいた。

ライトの熱気で、部屋の空気は急速に温まりつつあった。

「準備はいいですね。では始めましょうか」私に声をかけ、彼は妻に近よると、

「そろそろ脱いでゆくんだよ、いいね」

微かにうなずいて、カメラを構えた私に視線が走り、彼女はパツとうなじをそめ、刹那の緊張に頬をこわばらせたが、従容として、下着の肌襦袢もろとも、スローモーションフィルムをみるように、着物を足許に滑らせていった。

くろぐろと乳暈を拡大させ、大粒の黒いちごの実った豊かな乳房が、いきなり私の視野に飛び込み、臍窩の押しあげられた、九カ月の円々としたメロンの腹が眼前に展開した。

冷えないようにとの配慮か、長めの、水色の毛糸編みズロースが、はちきれそうな腰にピッタリと纏わりつき、スラリと伸びた脚線の、両足の白足袋のみが、奇妙なアンバランスで、私の眼に眩しく映じた。

昭和二十二年から二十七年まで、四人の子供を次々産んだ家内の、妊娠腹や裸身は、イヤというほどみてきたが、家内以外の妊婦女

性を眼近く熟視したのは、この時が初めてであった。

神秘を孕んだ若い人妻の、膨満の妖しい魅力に憑かれて、私はしばし息を嚙み、しげしげと直視していた。

ぐーんと胸をそらせ、美佐子夫人は、これみよがしに膨れた腹部を前面に押し出すようにする。屈辱と羞恥のかげらひは消えて、出産間近の、女の誇りを高らかに謳いあげるかのように、そっと両手で下腹を抱えて、持ち上げるようにして私をみつめた。

心は矢たけびに、いきり立ち、前後不覚になって慌しく、女体に向けてシャッターを、きりはじめる。

女房以外の若い女性の妊娠腹を、間近く拝する光栄に浴した私は、もう無我夢中であった。今でこそ物珍しくなくなった妊婦腹も、七年前では、珍奇きわまるハツモノの感激であった。

足袋を脱ぎ、毛糸編みのズロースをおろし更にその下に穿いていた白いパンティをとって、一糸纏わぬ原始の姿に還元してゆく美佐子夫人に、心を燃えたぎらせて、連続シャッターをきってゆく。

全裸のニンフの立ち姿、蹲踞のポーズなど

すべては、箕田氏に分譲フォトとして、ネガぐるみ、そっくり手渡したので、妊婦マニアの方は、美佐子夫人の、羞恥のフォトを手に入れた筈である。

引続き始まる、私達が交互に縛った、緊縛フォトは「奇譚三十九夜物語」が、将来の筆を予想していた「SMカメラ・ハント」用のとっときのネタとして、掌中に納めておいたのであった。

現時点から見れば、初歩のオーソドックスな、単純な縛りのポーズに過ぎないが、私にしてみれば、始めてモノした妊婦緊縛の一エポックを画するフォトとして、それこそ天にも昂るような嬉しさと昂奮の連続であった。

私の手が、妊婦の肌に触れ、縄が縛と締めつけていった時、彼女は訴えるような眼差しで、夫をみつめた。

しきりに空咳をして激しい昂ぶりを抑制しようとする夫は、妻の眼を無視して、第三者

の私による妻の縛られてゆくさまを、喰い入るように、みつめていた。

「どうだ、他人に縛られる感想は？」

顔を近づけ、声を潜めてきく夫に、妻は悲しげに眼を瞑って顔を背けた。

「さあ、その大きい腹で強姦されるのだぞ。」

俺の目の前で泣き喚き、欲ぶのだ」

汗でギラギラと顔を光らせ、彼は噂言のよう、張らな言葉を吐きちらした。

女体を乱暴に扱えぬもどかしさは、嗜虐的な言葉のプレイとなって、夫はいつしか耽溺の境地にあった。



言葉では、私に強姦させるといっておきながら、行為自体は、私の眼前で妻を押し倒しはや臆面もなく、彼女の柔肌の歓喜のツボを手を変え、品を変えては愛撫してゆく。ベンベンと太鼓腹をのたうたせ、妻は声を殺して喘ぐ。

交歓のプレイは、真昼の如き、煌々たるライトの下で、汗にまみれて続いていた。

遥々九州まで来た甲斐があったと、眼を血走らせ、烈しく心を燃やして、私はこの鴛鴦の戯れに焦点を合わせ続けていた。

所詮は筐底で眠る秘図であったにしても、単調な縛りの構図に較べて、その迫力は月とスッポンの違いであった。

喘ぐ表情に、ありありと喜悦と快楽が流れはじめ、声潜ませて人妻は、私の眼前で呻きの欲びを押し殺していた。

時偶、縄目が肌をしめつけた時、軽い苦悶の呟きを洩らしても、やがては陶酔の淵にどっぴりと身をつけて、ひたすらに忍従し、されるが俤になって、重い母胎は欲びに喘

いでいた。

すつくと彼は立ち上がる。欲望は、はかしくらず中絶させていた。その中絶が、爾後のSMのプレイに拍車をかけることを、彼は賢明にも考慮していたようである。

「ごらんのように、大分リラックスさせました。しばらく茶の間で一服しますから存分にいろいろに縛ってやって下さい」

嗜虐の旨酒に酔い痴れた夫は、心のゆとりを鷹揚にみせて、チラリと私にめくばせすると、茶の間に消える。

陶酔の余燼をくすばらせて、横ざまに打ち伏す美佐子夫人の側に近寄り、抱き起こそうと、そつと肩に手をかける。ビクリと痙攣が指頭に伝わって、彼女はねっとりとした表情で、うるんだ眸で私を見上げた。

「構いませんか？」

ゆっくりと、うなずく。表情に鮮烈な、はじらいのかげが流れたが、それは夫との、愧らしいプレイを、まざまざ見られた羞恥に繋がっているようであった。

緊縛のプレイの雰囲気には慣れたのか、手助けして体を起こすと、女体の硬さは、ほぐれていた。

緩んだ縄を解き、改めて締め直して縛って

ゆく。

彼女は私の為すが俚に、易々としてポーズをとってくれた。心の昂ぶりが、メロン腹の蠢動に現われ、大きく息を吐いて、臉を伏せる。辺りに気かねて、何がなし強ばっていた心も、いつしか雰囲気にとけ込んで、さして気にも止めぬ変わりようであった。

夫に遠慮して、おとなしく緊縛フォトを撮り続けていると、ズカズカと彼が闖入してきた。

「バカに遠慮しているのですね。こうするんですよ。ホラ……」

矢庭に押し倒すと、固く閉じようとする妻の両股を、力をこめて、こじひらき、これみよがしに、私の眼前に披露するのであった。

「呀ッ！」と微かな悲鳴をもらして、妻は羞恥から遁れようと、もがく。

夫は次第に露骨味を帯び始め、殊更に、胎児の隧道をみせようと努めた。

夫の手前上、そうした行為に走れなかった私にとって、それは願ってもない究極のカメラの対象であった。

臨月間近い妊婦の、はればったく変貌した隧道の出口に、熱い射るような視線を注いで気愧かしさの余り、必死に目を瞑る夫人の、

味わいを湛えた嬌羞のポーズに、カメラは近々と迫り、夫の指頭の動きにつれて、間断なくシャッターが、きられていった。

象徴は、私の胸裡に灼きつき、神秘は深々と心に印象を刻み込む。

夫の嗜虐の手は、それで終わらなかった。半ば引きずるようにして、女体を床柱に据えつけると柱にしっかりと坐位で縛りつける。

「さあ、辻村さん。見てやって下さい」息を弾ませ、彼は妻の両足を股一杯に広げてゆく。

ぐいと両手で足首を振りしめると、徐々に掲げ始める。

女体が屈曲して、充滿した腹部が圧迫されて盛り上がり、息苦しさで耐えかねて、美佐子夫人の紅唇から、始めて高い悲鳴があたり部屋の空気を、ふるわせて悶えた。

下腹部に、必要以上の力が加わったためカメラを構えて、息を殺して見守る私の瞳孔に、一条の液体がキラリと輝いて、ツツと走るのが、ありありと映じたのであった。

膨れ上がった子宮に圧迫された膀胱は、この程度の圧力でも、こらえようもなく洩れ出すのであった。

委細構わず彼は、尚も開股の揚げ足の幅を

拡げてゆく。

甘い露を泛かべて、肉感的な深窓に、絢爛と禁断の実は開花する。

花くれないを、とっくり拝見してくれといわんばかりに、夫の行為は継続し、妻は肩で息をして、鼻翼をふくらませて呻いていた。

彼の体が、俄破と妻の前でひれ伏すと、両手で掲げたV型の鋭角に、顔面が埋没していった。

苦悶が甘い吐息に変わったのは須臾の間であつた。

延々と続く、唇の愛撫――。

神酒のしたたりを吸い、愛液をむさぼる夫に、妊娠九カ月の女体は歓喜に喚く。

私は、そっと火と熱くなったライトを消した。一瞬の、めくらめく暗黒――。

慣れた眼に、床柱から女体を外し、打ち伏せにして豊かな臀部を抱えあげて、交互にパシと、愛撫の平手打ちを双丘に炸裂させ乍ら、烈しい息づかいで挑みかかる夫の姿がさながら影絵の如く浮かび上がるのを、私は放心したように見詰めていた。

それは、田中弘、美佐子夫妻の出来る、遠路遙けく訪れた私への、最大のサービスのつもりだったのかも知れない。

× × ×

幾分のフィクションを交えて、昭和三十九年八月号「奇譚三十九夜物語」――第三十八夜（第九十話）に『妊婦は告白する』と題して田中美佐子夫人の妊婦フォト数葉を添え、他の話のフォトと共に編集部へ送った。

この月号の三話は、すべて、SMカメラ・ハントのハシリの如きもので、今なら、一話を、一篇のハントとして書くところであるがまだ欲がなかったであろう。

第八十八話が『宇治さゆりと私』で、彼女との緊縛プレイの顛末とフォト。

第八十九話が『坐禅ころがし』で、T夫妻の連縛フォトといった調子で、フォトは、三話合わせて二十数葉にのぼっていた。

送稿して三日後、箕田編集長から電話がかかり、現在、自肅の折柄、美佐子夫人の妊婦緊縛フォトは、どうも時期尚早で、かなりの危険性もあるから、急拠、他の物語に書き直して欲しいと要望してきた。

私にとっては、正に心外至極である。遙々九州まで出掛けた苦勞が、水の泡になる思いで、分譲フォトならいいが誌上掲載は都合が悪く、悪くは、そりゃ聞こえませぬといったかつたが、災いがこちらに振りかかって困ると

思い直して、渋々納得したものもの、どうも今更、別の物語を書く気にもなれない。

そのうちに締切り日が迫り、私は遂々投げってしまったのである。

結局、八月号は『宇治さゆりと私』と『坐禅ころがし』の二話だけになってしまった。

私は内心、大いに拗ねて、その余憤が尾を曳いたのか、翌九月号と十月号は送稿せずじまいだった。

二カ月も抜けたのは、その頃としては珍しかった。

箕田氏の、石橋を叩いて渡る方針は、こういうところにも現われていたのである。

この時期、妊婦緊縛フォトを発表すると、必ずや、呀ッといわせたに違いないが、反面危険性も亦、大いにあったのである。

掲載しなかったのは、或は私以上に、彼の期待の方が大きかった筈である。何しろ旅費宿泊、一切を賄ってくれたのであるから――にもかかわらず、それを諦めたのは、潰そう、潰そうとかかっている、世論に対抗するためには、やはり安全第一でなければならなかったであろう。

だからこそ。

戦後、雨後の筍の一本として、カストリ維

誌の仲間だった奇クが二十数年の荒浪を乗り越えて今、尚健在。風俗雑誌の元祖として、不滅の金字塔を打ち建てているのであろう。戦後の群小雑誌の生き残りは、最早、一誌も存在しない。

暫く冷却期間をおいたら、箕田氏の苦衷も分かって、改めて書き直したのが十一月号掲載の『奇譚三十九夜物語—第九十話「牝犬のわな」—』で、フォトはない。第九十一話、第九十二話とも、フォト掲載の、SMカメラ・ハント式のものであったが、第九十話のみ、こうして闇から闇へ葬り去られたのである。

よくよく考えてみれば、彼に文句をいう筋合いは、なかったのである。費用負担の上、又と得がたい、妊婦モデルを紹介してくれたのであるから——。

唯、かなりの熱意をこめて書いた『妊婦は告白する』が、没になって握り潰された不満



が、心のどこかで内証していたようである。

又、折あらば、カメラ・ハントにでも書く気でいたのが、奇クの自肅の徹底で、グラビヤも全廃になってしまっただけで、妊婦フォトもそのせがたく、一旦つまづいた、ケチのついたフォトは、遂々発表する機会を失ってしまった恰好になった。

田中弘氏夫妻を訪問して、四カ月ばかり経った七月の末、彼から、一本の未現像のネガフィルムが届いた。

無事、出産。女兒を分娩して、母子共、健

全。体調も、もとに復したの
で、嬰兒ともどもホテルへ出
掛けて、出産後、はじめて美
佐子の緊縛を撮ってみたが、
DPEを、お願いしたい。

あの時のプレイの、ドキュ
メントを期待していたが、御
連絡によると、三十九夜物語
に書かれたのに、掲載不能に
なったとのこと、誠に残念だ
が、反面、内心ホッとしてい
る。

送ったフィルムが、若しう
まく撮れていたなら、発表して
いただいても結構。

美佐子は、妊娠していない自分を、機会が
あれば、もう一度、撮って欲しいと切望して
いる。SMプレイに、すっかり欲びを見出し
積極的に協力して、毎日が楽しい。

九、十月号は不掲載だったので、何かの異
常があったのかと案じている。

御健斗を夫婦で祈っている……。

と、いったような内容が、同封の便箋三枚
に、ぎっしりと細かく書かれてあった。

早速、現像してみると、どうやら撮影にラ

イトを使ったらしく、意外によく撮れていて、さしてピンボケもなく、大分、私を参考にし、注意を払ったあとが歴然としていた。

引き伸ばしたフォトと共に、便りを書き、奇クのサロン欄へでも、田中美佐子さんの手記の風にして、発表してみたらと、大いにハッパをかけて奨めた。

私の返信で彼もその気になったのか『臨月腹妊婦フォト・モデル 出産後のわたくし』というタイトルで、十一月号の奇クサロンにのった。(詮索興味おありの方は、同月号をひととかれるのも一興だろう)

掲載のフォト二葉は、簡単な手錠、着衣の至極、無難なのが選ばれてあったが、私が依頼されて、焼いて送ったフォト三十四枚中に女性自身のクローズアップが十数枚もあり、上部を残して両脇を剃毛し、クリップに細紐をつけて、挟んで引っ張りあげたものや、セロテープどめにして、奥の奥を探究したものなど、ドキッとする、夫婦プレイならではの強烈なものが多かった。

緊縛と銘うっておき乍ら、縛りらしきものは、前述の手錠の外、胸縄、両手足縛りなどを、それぞれ数葉、構図を変えて撮っているに過ぎない。やはり彼も、心逸って、悦楽の

SMプレイの方へ走りたがったのであろう。

奇しくも、彼女の手記の掲載された、昭和三十九年十一月号より、私は念願の、SMカメラ・ハントを発表し、青木順子が、そのトップバッターであることは、諸賢、つとに御存知の通りである。

次々と、現われては消え、又、現われてくるカメラ・ハント女性との応待に忙殺され、田中美佐子夫人のことは、いつしか念頭から去っていたというのが偽らざる本心である。

カメラ・ハントが軌道に乗るにつれ、私自身、増田みゆきの巨大なる双胎腹にタンノウし、木戸悦子、飯田カオル、金原奈加子、富田由美子など、妊婦にはことかかず、彼女達の緊縛やプレイにも、かなりの体験をつみ、かつは幾分の狎れもあって、オーソドックスな、美佐子夫人の過去の未発表フォトのことなど、忘れるともなく忘れていたのである。

× × ×

中学校時代の同窓会が、延々三十年以上も続いている、今年が廻り持ちの幹事役であった。相棒は、芸能会社の重役で、仲間にも、結構エライ連中が多い。

十一月中旬の土曜開催と決定し、私は打合わせがてら相棒のKを訪問し、話が弾んでミ

ナミを呑んで廻り、夜の九時過ぎ別れたが、

秋の夜の人恋しさで、何となくこの俚婦のが惜しくなり、酔余の脳裡に、フトその時、浮かんだのは、田中夫妻のことであった。

転勤してきた彼の勤務先は大阪。自宅は、東大阪市の八重の里方面に、建売住宅を買い、電話も引いていて、かなり豊かに暮しているようである。

ポケット手帖をとり出し、最近書き入れたばかりの、彼の電話番号のダイヤルを廻す。

「モチモチ……モチモチ……たなかですが」

受話器に幼い声が響く。どうやら、あの時産まれた、女の子の声のようである。おそらく小学一年生ぐらいであろう。

「パパ、いるの？」

「ハイ、少しまってください」

なかなか、お仕込みがよろしい。しばらくして、ハリのある男性の声が流れてくる。

「田中ですが……」

「突然の電話で恐縮です。辻村ですよ」

「ああ、辻村さん。一体どうしたのです」

びっくりしたような声が響く。同窓会の打ち合わせ云々して、一杯のんで、かくかくしかじかと、酔っているから、少しくどい。

「どうです、ミナミへ出て来ませんか」

と、誘う私。

「そうですね。出掛けてもいいですが、今からじゃ少し遅いですね。よかったら私かたで呑みませんか。多少の準備はありますから」

「御迷惑でしょう」

「とんでもない、大歓迎ですよ。妻もきつと喜びますよ。近鉄奈良線の各駅停車で、八重の里まで、お越し下さい。駅まで車でお迎えに参りますから」

と、逆に熱心にすすめてくれる。酔いが私を凶々しくしていた。その気になって、それじゃ十時頃にといったが、サラリーマン家庭なら、そろそろ就寝する時間である。

まばらな降客と共に、高架のプラットフォームを下り、駅前に出ると、田中弘が逸早く私をみつけて駆けよってきた。

七年間の時の流れで、彼の頭髮にも、幾らか白いものがまじり、容貌、スタイルも変わった中年肥りになって、若しどこかでスレ違っても、私には彼を認めることは出来なかったであろう。

未だ真新しい、ミニカ72の助手席に坐ると車は、暗い住宅街に向かって勢いよく走り出



し、ものの三分もかからないで彼の家に到着する。

最早、忘れかけていた旧交が、須臾にして復活し、そこは古いなじみの同好者の有難さで、彼は遅い時間にもかかわらず、心から歓

迎してくれた。

二人の子供の土産にと買ってきたエクレアも、既に就寝したとあれば明日へ持ち越す外あるまい。足の早いシュークリームでも一日ぐらいいは大丈夫であろう。

玄関脇の応接間で、絶えて久しき美佐子夫人と邂逅する。

七年前にくらべ、彼女は愛想もよく、よく喋るようになっていた。子供達を匆匆に寝かしつけたのも、私の来訪への配慮が、そこはかとなく言外に窺われるのであった。

しつとりと落着いた、課長夫人の貫録が、いつしか彼女の身に備わっていた。ビール、サントリイオールド、オールドブルなど、次々夫人は運び込んできてはしきりに私に奨めるのであった。

長女は小学校、四才の長男は、やんちゃ盛りと、笑みをこぼして一しきり子供を語る。

近況を彼にきくと、

「そうですね、月に一、二度、気が向けばプレイしますが、正直いって何もかも、やり尽したという感じですね。辻村さんの仰有る、
“緩々”の時期に入っているようですよ。大

阪へ昨年の暮、戻りましたが、課長になってからは、かなり多忙ですし、家内も、育ち盛りの二人の子供の母親で、結構、疲れるらしいですよ」

と、夫婦プレイの誰しもが通るルートを、彼等も亦、当然のように通ってきていた。

課長になって多忙な夫。

母であり、妻である美佐子夫人の日常も、平穏で、雑事に追われているようである。

謂わば平均的、中級サラリーマン家庭――

「奥さんも、三十才を一寸お過ぎのところでしょう。この年令頃の夫婦プレイが最近、多いですよ。こうしてお目にかかる、今ひとたびの思いにかられますよ」

冗談ではなく、脂の乗りきった、優艶な夫人の容姿に心動いて、誘い水をかけてみると淑かに、夫のかたわらに坐った夫人は、眼を細めて笑って、

「私は構いませんけど



もうすっかり体の線が崩れましてよ。それに二つもコブつきでは自由になりませんもの」
と、SMプレイの意欲は充分、認められる口吻で、眼尻に、微かな淫靡のかげを漂わせて、あでやかな笑顔で私をみつめるのであった。

三十過ぎの、女盛りのむっちりした肌に、SMプレイの成長が、ありあり感じられる爛熟さを発散させて、暗に夫への物足りなさを仄めかしているようであった。

軽く口にしたウィスキーで、頬が桜色に輝

いているのも、艶な美しさである。

「子供はボクがみてやるから一度、辻村さんとプレイしてこいよ。亭主公認でいいぞう。ハハ、こいつはね、カメラ・ハントのモデルには、もう無理かしら、なんて、ヌケヌケというのですよ」

「まあ、あなた、そんなこと……」

羞恥をつくって、美佐子夫人は、なまめかしく夫をにらんだ。

「妊婦フォトも、大っぴらに掲載出来る時代になりましたからね。何かの折、あの時のフォト、発表してもいいでしょうか」

懐旧の情にかられて、私は訊く。

「いいですとも。もう七年前の面影は全然ありませんからね。いいだろう、美佐子」

夫人はコクリとうなずく。

「とはいっても、随分、古ネタですからね。過去と現在のプレイを比較して、錦上華を添えたいところですわね」

「いいですよ、やりますよ。」

辻村さんと七年振りに出会う

て、俄にファイトが湧いてきましたよ。昔ならいざ知らず、今の家内は、むしろ自分からプレイしたがつています。なあそうだろう、美佐子——」

「いやですわ、そんな仰有り方。まるで私が余ッ程、好きみたいに聞こえるじゃありませんか」

「その通りじゃないか。大先生の前で、イイ恰好すんなよ。有体にいえば、ボクの方がタジタジなんだから……」

「うそ、うそ、知りませんわ」

夫人は羞恥に照れて、頬を染めるとビールの空瓶を手にして、代りをとりに立った。

夫は油然と湧き上がってきた嗜虐の興奮に頬を火照らせ、勢いよく呑んだ酒の酔いも手伝ってか、

「ねえ、どうです。明日といわず、これからやろうじゃありませんか。どうせ子供がおりますので、何処へも出てゆけないんです。いいでしょう」

と、しきりに奨める。

「そりゃ有難いけど、おみかけ通り、プレイの準備は何一つない、手ぶらなんですよ」

「縄やバイブレーターならありますし、カメラも、安ものですが持っています。私のカメ

ラで撮って下さいよ。先日、子供の運動会に撮して、未だ、十枚ぐらいは残っておりますから」

田中弘の勧誘は熱心であった。

「子供さん、起きて来ないでしょうか」

「毎晩、十時前には寝るよう、しつけてあります。子供部屋のベッドと、私達の寝室とは離してありますから大丈夫です」

思いもかけぬ果報に、私の胸は妖しく弾み出す。脳裡に描いた、女盛りの夫人とのSMプレイが、こうも早く実現しようとは、まさか想像もしてなかっただけに、こんなことなら、使い馴れたカメラの一台も持参するのだったのにと、今更乍ら悔まれてならない。

私は大きく頷く。

「ああ、すっかり愉快になった。久し振りのことですよ、アレとのプレイは……。じゃあ一度カメラを見て下さい」

彼は立ち上がって、カメラをとりに応接間を出てゆく。

入れ違いにビールを二本、盆にのせて美佐子夫人が入って来た。

「辻村さんに出会えて、すごく嬉しいのですよね。珍しくハシャいでいますわ」

柔らかな微笑みを泛かべていった夫人自身

が、顔のつくりを、し直して来たのか、一入あでやかに紅も濃く、挑むような、まなざしを送ってくるのであった。

「本当に突然にお邪魔した上、こんなことになるなんて、申し訳ないみたいです」

「辻村さんには突然でも、私達にとっては、ヒョッとしたら、唐突に、いつかもう一度、こんな機会があるのじゃないかと、かねがね話しておりましたのよ」

「でも正直いって、先日、御主人からお電話いただく迄は、御夫婦の存在を忘れておりました。手の届かない、九州にいらっしゃるところとばかり思っていたものですから」

「こちらへ移って、すぐお知らせすればいいものを、余り御無沙汰でしたから、言い出しそびれたのでしよう」

夫人は確かに社交的になり、ためらう風もなくハキハキしていた。二児の母、課長夫人の貫録が、にじみ出ている。

「御主人は、これから始めるのだと仰有ってカメラをとりに行かれましたよ」

「そうですか、何だかお恥かしいみたいですわ。だって体の線がすっかり崩れちゃって、もうオバアサンですもの」

「仲々……とんでもないですよ。今が恰度、

女盛りで、眩しいくらいに仇っぽく、つくづく見直しているんですよ」

「アラ、お世辞のお上手なこと。皆さんにそう仰有っては、毎月、次々といろいろなかとと会っていらっしゃるんでしょう。蔭乍ら、ハントは読まさせていただいておりますわ。主人なんか、いつも羨ましがって、溜息をついておりますのよ」

「相手変われど、主変わらずの、すっかり飽和状態で、情性みたいなものです」

「私も情性？」

「すぐ、そう仰有る。心を燃やしても歴つきとした課長夫人——そうじゃありませんか。ひとときの、嗜虐の炎、燃やして、うたかたの悦楽の夢を結ぶだけの私です。第三者の私を交じえてのSMプレイが、慢性化し、ややだれ気味の貴方がたのSMプレイに、一寸した刺激剤の役割を果たすということ、いいのではないでしょうか」

「主人は最近、忙しすぎるのです。それに近頃は、ゴルフの愉しさを覚えて、日曜ごとに御出勤で、つい土曜日も早く寝るようになります。ホホ、欲求不満なんですわ、私——。こんなこと判っきりいえる年になってしまいましたのネ」

「じゃあ、私、お伺いしてよかったようですね」

「精々、油をそそいでやって下さい。でも外の方、御紹介なんかしないで下さいね。その方へ熱をあげられると困りますもの」

SMには開眼しても、矢張り妻らしい配慮である。

妻は、究極には、夫を独占しておきたかったらしい。その癖、私とのプレイには、仄かな色気を見せている。

苦笑を洩らして、うなずく。

「もう一つ、お願いがございますの。私、現在PTAの役員をしておるものですから、最近の私の顔、大きくクローズアップして、正面からお撮りになったのは、のせないで下さいませね。どんな事でバレルかも知れませんが」

「以前の妊婦フォトもですか？」

「七年前のあの頃とは大分、表情が変わっておりますから、あの分は大丈夫と思います」

「じゃあ、なるべく、顔を撮らぬようにしましょう」

「主人の部下の方にも、奇巧のファンが一人いるそうなんです。知れたら恥かしいですもの……辻村さんのフィクションを信じており

ますわ」

艶に片眼つぶって、じっと直視され、私は美佐子夫人の、余りの変貌に、つくづく七年の歳月の、隔世の感を覚えるのであった。

小型のストロボと、カメラを持って夫が戻ってくる。

「話が弾んでいたようだな」

と、妻に声をかけ、

「これなんです。撮り易いのですが、も一つピントがシャキッとこないんですよ」

差し出したのを受け取って見れば、近頃、流行のEEカメラの軽量、小型三五ミリ判。連動距離計がなく、山型や、人間型などで、距離の遠近を現わして、謂わば、ペンカメラ式を三五ミリ判にした初心者向きのもので、野外晴天の日なら、それでも結構、写るが、ストロボを使つての室内撮影となると、ピントのかたい映像は少々無理のようであった。これなら、彼が九州で使っていた、リコー35mmの、古い型のカメラの方が、遥かに、ましであろう。マニュアルにセットしても距離は目測に頼らざるを得ない。

「あらかじめ、お越しになるのが分かっていたら、フィルムを買い込んでおくのですが、生憎と、入っているフィルムきりなん

です。残り、十二、三枚ある筈ですから、このところ、よろしく願います」

「始めてのカメラですから、うまく撮れるかどうか、自信がありませんが、兎も角、やってみましょう」

「子供は大丈夫だろうな」

と、彼は妻に声をかける。

「ハイ、先程、覗いてみましたら、ぐっすり寝込んでおりましたわ」

「そうか、それなら少々派手にやっても安心だ。さあ、早く脱ぐんだよ」

「まあ、ここで？ いきなり仰有られても、私……」

「今更、恥かしがることもない。さあ……」

意気込む夫は、短兵急である。思わずゴクリと唾をのむ私。

洪い柄の、大島紬を、キチンと着こなした端麗な和装の姿から、豊満な裸身を想像するのは、好色めいたストリップを想像させて、興味を魅いた。

ストリップパーは、ハナから脱ぐべく用意して裸身に衣類を纏っていても、思いもかけぬハプニングで脱ぐべき羽目に陥った夫人の、和装の下着の常の下着は、どの様なものを纏っているか、深い関心を、そそられる。

「それじゃ、一寸おトイレへ——」

それは女のたしなみであった。懼らくは決定的な、露出の場面を想定して、洗浄しようとする夫人の心構えも、夫に一蹴されてしまふ。

「ダメだ。したくなったら、させてやる。さあ、早く脱がんか」

「でも、私……」

ためらう夫人に、いきり立った夫は、待てしばしもなく飛び掛かると、既に帯に手をかけて、解こうとした。

めくるめくような、暴行に似たシーンが、眼前で、夢魔さながらに展開してゆく。

白いふくらはぎを散らつかせて、妻は倒れ夫は、のしかかって剥いでゆく。

緋の湯文字がまくれ上がり、白も鮮かな足袋の両足が空を切る。

長襦袢が、むきとられ、胸紐を結んだ薄い下着が、まくれ上がり、両手がスルスルと抜けて、頭部からぬがされると、ムッチリとした裸身が、惜しげもなく、私の眼下に曝された。

既にこの暴行的一幕に、夫の嗜虐の想念は激しく昂まっていた。こうした行為自体、プレイの予定の行動であり、私という傍観者の

存在が、殊更に刺激を、そそるかのようであった。

湯文字一枚の裸身がのたうち、押え込んだ夫は、懐から一条の縄をとり出すと、ええいと掛声をかけて、妻の両腕を背後に捻じ上げ両手首を重ねて、縛ってゆく。

あわただしく、一発、又一発、閃光が光り目測で、私はこの乱行をカメラに納めた。

眉間に縦皺をよせて、唇をかみ、悶える夫人に近々と、田中弘のサジスチックな容貌がありありとカメラに納まっている筈である。

「さあ、立て。立つんだ」

烈しい息づかいで、荒々しく夫は、美佐子夫人の手首を縛った縄を引っ張る。

緊縛とはいえなくとも、簡潔に、両手首を背後で縛れば、夫人の自由は完全に剝奪されていた。

「ああ、ゆるしてえ。ねえ、あなたあ……」

甘い響きの訴えは、既に愛虐の測を彷徨する、欲びに溢れた痴句の贅言であった。

夫は湯文字をパツと、むしりとった。幅広の、肉付き豊かな下腹を蔽うものは、薄地のへばりついたパンティ一枚きり。

妻は恥かしいという風に、その堂々たるおしりを左右に振り立て、女の最後の沽券を、

はかなくも誇示していた。夫以外の第三者の眼前に、羞恥の全裸を曝す妻の、本能的な拒否のしぐさであろう。

「辻村さん。そのパンティを脱がしてやって下さい」

夫は意気高らかに、最後の一枚の脱皮を、私に与えてくれた。

黙ってうなずき、前に回って、パンティに手をかける。

「ああ、いけませんわ。それだけは……」

すべてを許容し乍ら、拒否するところに、甘い女の愧らいがあった。

女は自らの言葉に酔い、パンティをずり下げてゆくと、易々として片足ずつ抜いてゆく。

夫の愛液を存分に吸った、華やかな女体にポツリと両足の白足袋が、奇妙なとり合わせで残って、その時いみじくも、九州の宿舎でこれと同じような光景に出くわしたことを、

まざまざと思い出したのであった。

美佐子夫人は既に、前後から二人の男性によって弄ばれ、犯されるこれからを想像して心は熱くたぎり、五感は沸々と疼いているかのように、熱い吐息を洩らしていた。

遅しく密生する蒼丘に、妊娠九カ月のあの時には、かくも繁茂していなかったのにと、愛欲に成長した妻の座の旺盛さに眼を瞠りながら、私は再び馴れぬカメラのファインダーから彼女を熟視するのであった。

「どうですか、すっかり女くさい体になった

でしょう。少し脂が乗り過ぎて、この処タジ

タジなんですよ」

そういつて、万更そうでもなく、夫は眼を細めて、妻の裸身を舐め廻すようにみつめている。

「お二人の夜を想像して、羨ましく限りですよ。女盛りですからねえ、奥さんは——」

お世辞でなく、私はつくづく白い裸身にみ入っていた。

「私達の部屋に行けば、ドッサリと縄があるのです。引き立ててゆきましょう。さあ歩く

んだ」

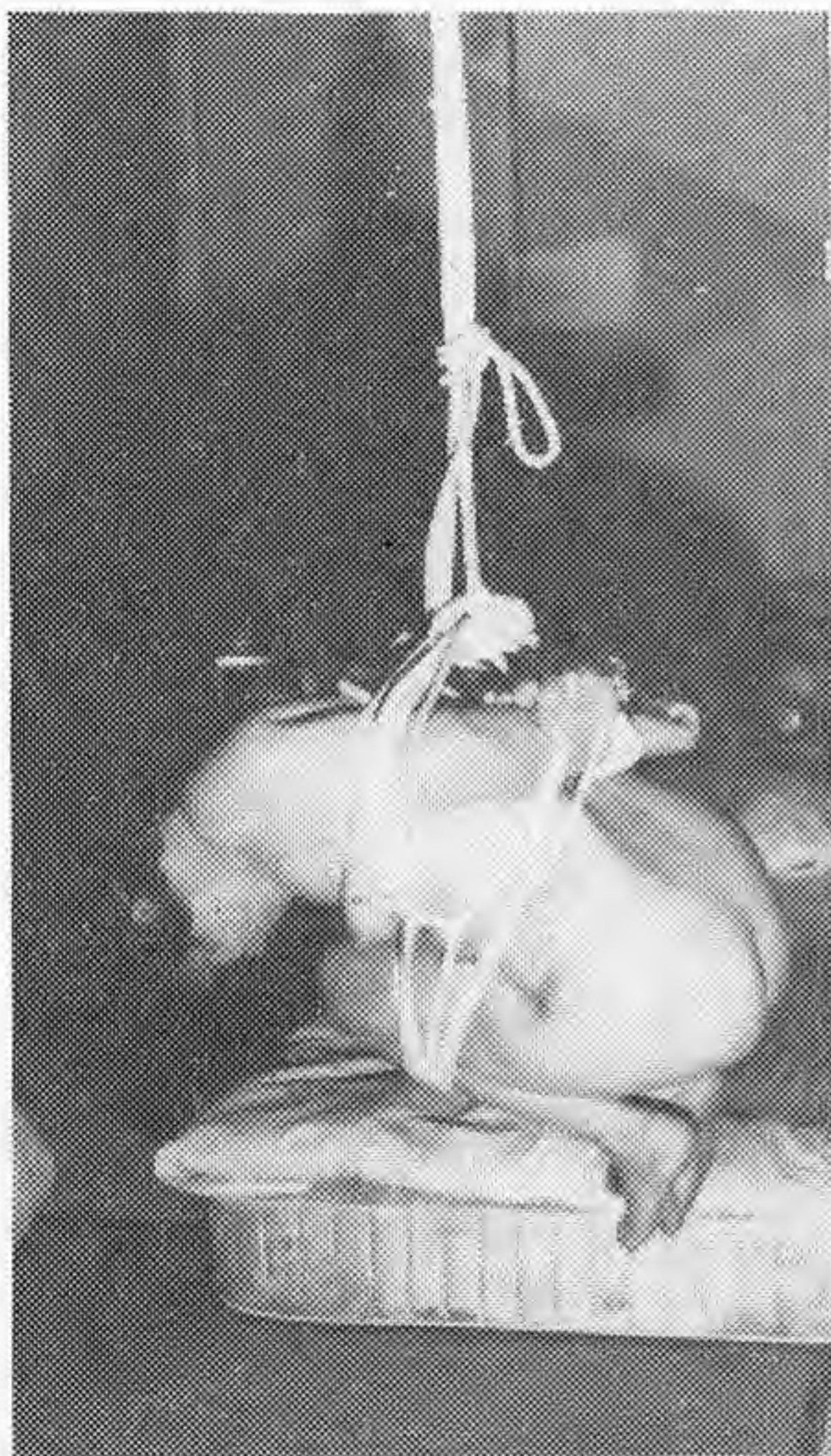
ドンと背を押し、よろめいて、素直に夫人は先に立って歩を運ぶ。既に夫婦の居間には、愛の寝床が敷かれてあった。

「どうですか、この鴨居に吊り下げてみては……」

「いいですね」と私。

「じゃあ、縛って下さい。縄を出しますからね」

彼は床の間の、引き違い棚をあけて、数条の縄をとり出してくると、私に縛れといっ



ておきながら、早くも乳房を挟んで胸縄をかけ、腰を落とさせて、折り屈めた両脚ごと、ぐるぐる巻きに縛り終わり、鴨居に太目の縄を投げかけていた。

プレイに逸る心が、彼をそうさせたのかも知れない。或は、カメラを握る私に、撮って貰う目的のため、咄嗟に気が変わって縛ったのであろうか。

一、二枚シャッターを押し、カメラを置いて、吊り下げに協力する。

ポリニームのある女体は、男二人掛かりでも、酒に酔っていては、息ばかりが弾んで、余り高くは持ち上がらない。

胸あたりまで、かつぎ上げ、吊縄をとめて手を離したら、縛った胸縄と吊縄が両方共に伸び、だらしなくも、畳上二十センチぐらいまで下がってしまった。

「まあ、いいでしょう」

彼は自分で納得して、ウレタンの茸型の空洞に、バイブレーター仕掛けをした愛用品をとり出してくると、ゆらゆらと空間にゆらめく、夫人の双臀を抱えるようにして、電動音を響かせた。

淫らに喘いで、既に彼女は、潤滑オイルをたっぷり自家製造して、隧道をうるおさせ

ていたのか、苦もなく振動の響きは私の耳朶から遠ざかっていった。

パシリ、パシリと平手が、双臀に飛び交いこの平均的、嗜虐の愛撫は、夫の馴れた手付きで至極あざやかであった。過去に数限りなく夫婦の間で交されたであろう愛戯の一コマもカメラを握る私の存在があるが故に一入、新鮮味を帯びるのか、夫の巧妙な操りの手は益々冴えていった。

押し殺して愛虐に呻き、快楽の吐息を洩らしていた夫人が突然、むせび泣くように一気に声を放って、絶え入る欲びの叫声をあげ始めた。

こらえ、こらえていた欲びの囁言も、肉楽の歓喜に堪えかねて、堰をきって爆発し、もう前後不覚、我を忘れて、ここを先途と喚き立てるのであった。

夫は一寸うろたえの色をみせる。我を忘れる妻に、いささかあきれたのか、照れ臭げに私をみた。

困惑を泛かべて私は立ちつくす。子供二人の存在が、フト気になったからである。

隣室に慌しく走った彼は、サロンパスを手に戻ってくると、セロテープ片を剝がして、ペツタリと口辺に押しつけ、叫声を防いだ。

その俛、裸身に両手をかけて、大きくゆする。鴨居がきしみ、女体は床すれすれに動揺して、隙間洩る叫喚は宙に流れた。

パシリ、パシリと、小気味よい音を立てて幅広の腰紐が、臀部に炸裂する。

ゆらめく女体に、閃光を放ち、私はカメラのナンバーを確かめて、あと四、五枚しか残っていないことに気付き、慌ててカメラを置いた。いつもの調子で、一つのポーズに数枚を費やす癖が、つい出てしまったのである。紐を捨てた彼は、三面鏡の台上の、コールドクリームを指に、なすりつける。

その指の目ざす処、私の推察違わず、近頃の私の、興味のゆきつく処に、当然のように指向していったのであった。

快楽は恍惚をいざない、エクスタシーはアクメの山を越えて、女体は空間でのたうつ。

田中弘は憶面もなく、私の眼前で脱いでいった。

× × ×

両脚を揃えて縛り、更に上から、脚に縄をかけて、極端に屈曲させた上半身は、見事に二つ折れになっている。

膝頭と乳房が、ピッタリと密着し、後頭部に縄をかけて、引絞って両脚に顔を押しつけ

ている。

双臀、下腹部には一条の縄もない。

夫婦プレイならでは出来得ぬ、苦悶の緊縛である。しかも深奥を責め、アヌ苛めにも最適のポーズであった。

一汗かいて、漸くにして果たし終わった彼は、放心の眼で、妻の無惨な緊縛図を、じっと見入っていた。

すべては彼の思うが儘にコトが運ばれ、終わった。まるで、九州での再現の様に――。

息苦しさに、切なげに喘ぐ美佐子夫人の、甘い呻きにも、激しさはなく、余韻を引いた愛の戯れのあとの、名残りめいたものであった。

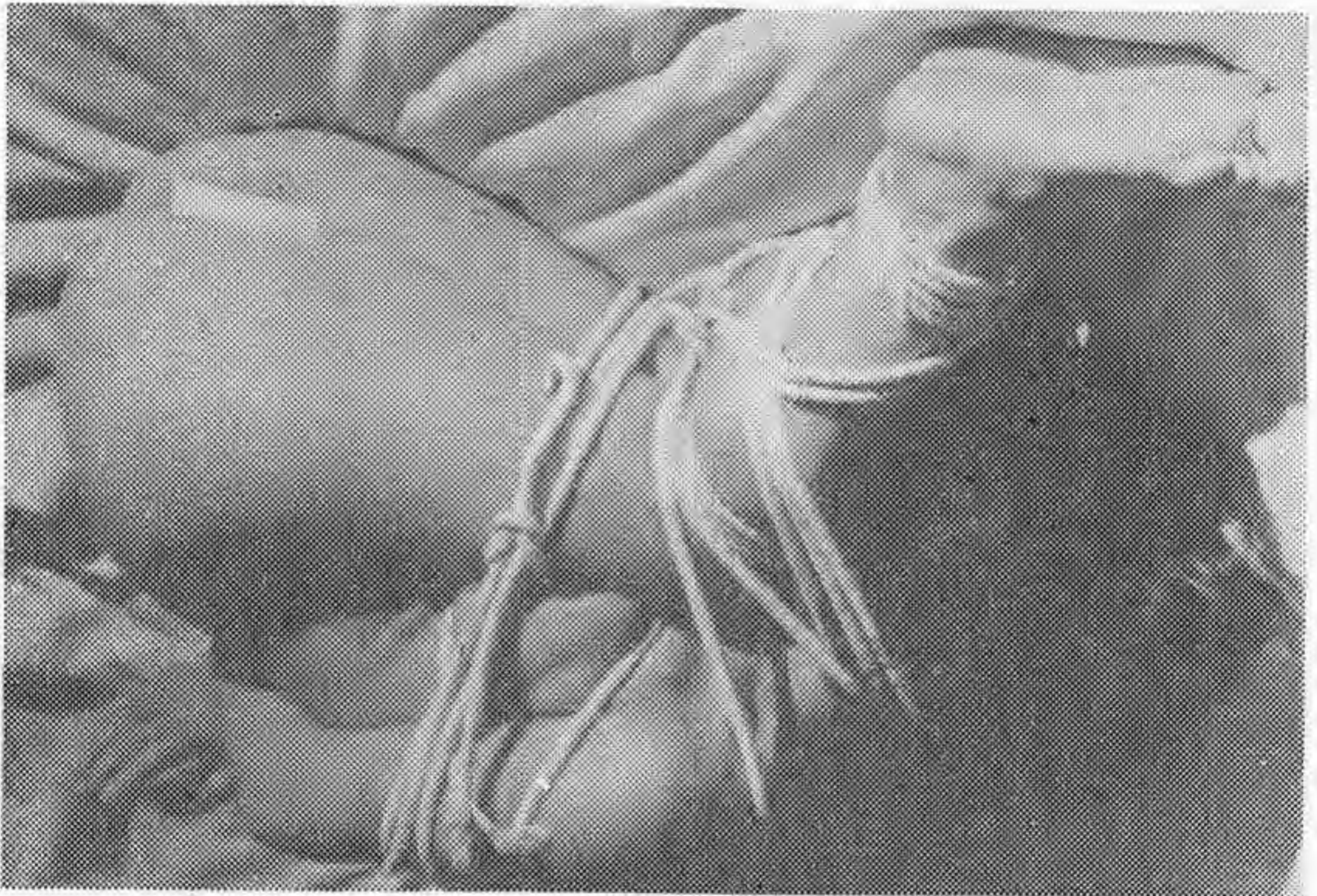
私は完全にピエロ――。

私は拱手傍観の、あわれな刺激添加物――

フィルムはこのポーズで終わっていた。

愛の営みの、ナマナマしさが一枚ある。

夫の縛った縄を解く気にもならず、些か白けてみつめていると、彼はやがて、狂痴のひとときから、正体を取り



戻していった。

ノソノソと、妻の体に近づくと、解くことすらも煩わしげに、縄を外してゆく。

「寝てろよ、いいから……」

呟くようにいって、身繕いすると、プレイの熱さめた索漠とした顔で、

「すみませんでしたねえ。つい夢中になってしまいました……」

「いいんですよ。とも角、フィルムは振り終わりましたよ」

無然としてフィルムを抜き出すと差し出す。

「いえ、とても写真屋へ出せやしません。御無理でも現像をお願い出来ないでしょうか」

虫の好さを感じたが、今更怒ってみても始まらないと、うなずく。私を無視したことに血の氣が上がった頭では考え及ばないのだろうと、寛大な心になつてくると、さして腹も立たない。

彼等夫婦は、結構、私のハントに協力したつもりなのだから――。

全裸の俤、夫人は滑り込むようにマッソレスに体をのせると、スッポリと

夜具をかぶってしまった。

秘戯の一部始終を私にみせつけた羞恥から顔を合わすのすら、今となっては愧かしかったであろう。

応接間に戻ると、残ったビールをしきりに契めて、田中弘は、いかにも恐縮した様子でいった。

「すっかり夫婦のプレイに馴れてしまいました、刺激に乏しいんですよ。今夜は久し振りにハッスルしました。辻村さんのお蔭です。こんな家内でもよかったら、次は家内にプレイしてやって下さい。いつも、安心出来る夫婦の方と、混合ダブルスでプレイしてみたい気持ちがあったのですが、よけいにかり立てられます。今夜は、辻村さんに申しわけなくって……。何だか私達だけが愉しんだ恰好になっちゃいました……」

分かっていれば、それでよし。今更、言及することもあるまいと、

「七年振りに出会って、チトお気持ちが逸ったようですね。しかしあの時も、こんな調子でしたよ」

と、なごやかな気分をとり戻した私は、笑みを投げる。

「写真の方は、余り間に合うのがないでしょ

う」

「ええ、夫婦のナマの姿が多くてネ。顔はのせないで欲しいと、奥様にいわれているのです。せいぜい、三、四枚、程度でしょう。まあ、いずれにせよ、今夜はハプニング。それでいいじゃありませんか」

田中弘は、機会があれば夫婦プレイの出来る相手を紹介して欲しいと頼んだ。私は、いっしか約束させられる羽目に陥って苦笑し、その代り、美佐子夫人の爛熟した女体と、思う存分の烈しい、一対一のプレイを、それとなく要望していた。

こうした希求も、夫婦プレイヤー達が、いつかは突き当たるマンネリの壁であり、より以上の刺激を求めようとする、究極の欲求でもあった。

交歓プレイ、混合プレイ——それも、夫婦プレイの、マンネリを打破する、一つの手段には違いない。

夫は積極的にそれを希むようになり、妻も又、内心、ダレ気味の倦怠を、そうした斬新な行為によって、解決しようとしているのかも知れない。

現に今こうして、私を迎えての、美佐子夫人の態度は、その現われの一つのようにも思

えたのである。

夜もふけて、寝静まった町の通りには人影もない。

振り仰いだ公害の空は、月も煙って、郊外地だったこの辺りも、今は空気も澄んで感じられた。

「御免なさい。家内のヤツがお見送りに出なくて——」

エンジンをふかせながら、彼は申しわけなさそうにいった。

布団をかぶって、美佐子夫人は今頃、何を想い、何を感じているだろうか。

羞恥のヴェールを剥いで、快楽と喜悦にのたうった、寝乱れた姿を、私の眼に曝したくなかったであろう。

そこはかとなく、後髪をひかれる思いで、私は車にのり込む。

「七年前とは、随分、変わられましたよ」

「家内のことですか。そう、世の中も変わりましたからね」

無雑作にいつてのけて、彼はアクセルを踏んだ。



二十年来、断続的に奇クを愛読している者です。ユニークな分野に鋭く切り込み、新しい世界を拓いて行かれる一方、常に一定の品位を堅持しておられる奇クの並々ならぬ御努力には敬服しております。

奇クの内容は、いずれも興味を感じておりますが、特に関心の深いものは浣腸に関するものです。最近では昭和四十六年七月号の並原新一氏「私の浣腸プレイ」十月号の黄好夫

「D 感覚」を考える

浣腸愛好の感覚

上 カミ

条 ジョウ

直 タダシ

氏「輪廻」十一月号の笠井勢津子さん「私は便秘マニア」十二月号の中野昭子さん「私と浣腸」等です。古いところでは羽村京子さん亡くなられた角皓子さんの文章が強く印象に残っております。

書籍や雑誌に、最近浣腸プレイに関する記事や写真が増加してきたようです。プレイとしての浣腸愛好者は随分古くから、大した数ではないにしろ社会の何処かで、ひっそりと自分の趣味を愛し育てて来たことでしょう。少数の特異性格者としての或る種の自責と孤独の念にさいなまれながら、やむにやまれぬ情熱を燃やし続けてきたものと思います。古くからと言ったところで、日本では西洋医学伝来以後には相違ありません。フランスではブルボン王朝の頃、既に貴族

の邸宅に浣腸室が設けられていたことは周知の事実で、これは美容の目的とされておりすが美容のためのものが、何時しかプレイにかわって行なった人もあったことを推察します。

医療や美容を目的とするものは別として、プレイとしての浣腸は二つの種類に大別することが出来ると思います。一つはSMの手段としてのもの、あとの一つは、浣腸そのものをプレイの目的としているもので、今までに書籍雑誌に発表されたものの大半は前者に属しています。

後者はSM感覚とは離れた浣腸自体の感覚を楽しむ、いわば真の浣腸願望と言えましょう。勿論、画然と一線が引けるものではなく前者には後者の感覚が一つの要素として入っ

ており、後者にもまた前者により、その感覚が増幅される場合がないとは言えません。私が、ここで論じようとしておりますのは後者の方で、以下、その感覚の仕組の分析を試みたいと思います。

浣腸の各段階を順次、追って行きますと、

(1) 嘴管、又は、カテーテルをアヌスに挿入
(後で脱去) する際の感覚。

(2) 薬液注入時の圧力、及び、温度差による刺戟感。

(3) 腸の蠕動による便意。

(4) 排泄の感覚。

(5) 排泄後の感覚。

(6) 排泄物に関する何物か。

この六段階に分けられます。第一段階は勿論、A感覚。第六はフェチズム、或は、おしめ願望につながるものと言えましょう。

第二、第三は腸で感ずる快美な感覚とでも言うもの。腸のドイツ語「ダウム」の頭文字を取って以下、本文では「D感覚」と称します。第四はD感覚にA感覚がプラスされたものとなります。D感覚は第二で柔らかい刺戟を受け、第三で次第に強烈となり、第四に至って最高潮に達するものと解釈出来ます。そこにA感覚が加わるのですから、この段階こそ、浣腸プレイのクライマックスと言うべきです。

更に第四段階を終えた後に於いても尚ソフ

トな快い感覚として持続するのが常です。この状態を第五段階とします。個人差が可成り大きいことは言うまでもないことで、各段階に於ける感覚の強さの程度はその人、その時点で、それぞれ多様な型を示すものと考えられます。

それではD感覚の正体は如何なものでしょうか。人体には各所に、殆ど全身と言ってよい程、性感帯が分布しており、それぞれの部位の感覚の強弱は人によって千差万別です。この理屈から或る人は腸で特に敏感に微妙に感ずるとの事情が、うかがえます。次に腸は性器官の近くに位置する故に腸の蠕動や、けいれんが、それらを刺戟する。女性の場合は卵巣や子宮等へ、男性の場合ならば輸精管等へ興奮を伝えるとの考えも常識的に受け入れることが出来ます。

次に限られた人だけがD感覚を自覚するに至った事情についても、検討されねばなりません。これは、なかなか難解な問題ですが、一面として人間の或る成長段階、幼児期なり思春期なりに腸に大きな刺戟、又は持続的な刺戟を受けたこと、例えば、その頃、腸が弱く便秘や下痢が続いたなど考えられます。

奇ク十一月号笠井勢津子さんの「私は便秘マニア」はじめ奇ク誌上に発表された浣腸愛好の方々の告白が、その状況を物語っていると解釈出来ます。又、腸の形、或は動き方が

普通の人と、ちよつぱり変わっているのではないかとの推測も出来ます。要するに持つて生れた素因に、その後の身体的な状態が重なった結果と言えましょう。大分、以前になりますが、奇クに下痢願望の告白が発表されましたが、この場合は浣腸によらず下剤によるD感覚を求めておられるものと理解します。

今の時点におきます私の一応の仮説的結論と致しまして、SMの手段でない独立した浣腸プレイの感覚の基調はD感覚とA感覚の組合せで、その内でD感覚が主役を演ずると言うことに落着きます。

ここで無視出来ない点としては、頭脳的、心理的な面です。アブノーマル・プレイの世界はいずれもノーマルなプレイに比べ頭脳プレイが大きく物を言うことは周知の事実ですが、浣腸の世界でも同様或は他以上に心理面が大きなウェイトを占めています。他のアブノーマル・プレイに比べ直接の刺戟は概して柔和なものです。微妙な心理プレイが内面の奥深くに作用することによって独特の甘美な感覚に昇華するものと思います。

然し一口にD感覚と言いましても、腸の内直腸、各結腸或は小腸の何処が最も敏感であるかの問題をはじめ、分からない面が多々残っており、まだまだ暗中模索の状態です。愛好の皆様方の御批判、御意見並に御体験を承り度い気持で一杯です。

(以上)

花

と

蛇

(三)

山 光

純



門^{かど}出^での宴^{うたげ}

関西の岩崎親分からの要望に応じて、人身御供にされようとしている桂子は、朱美の案内によって部屋に入ってきた二人の客人の前に、ふかく頭をたれる。

二人とも一見して世のすね者としれる卑しげな顔つきの男である。肩をいからせて先に入ってきた兄貴分の権田は、一座の会釈にかるくうなずきながら、あいているソファアに、どかりと腰をおろす。

——すぐ目のまえに桂子が肉づきのよい、むっちりした太股を揃えて正座している。一糸すらも許されていない若い全裸の姿を晒しながら両手首は、ゆるく後ろ手に縛られている。

盛り上がった乳房、滑らかに光った腹部、ぎゅっとくびれて豊かな双臀につづいているウエスト。ぴったりと太腿をとじているが、綺麗にそられた下腹部は、かくしようなない。

豊かにウェーブのかかった黒髪。ぱっちりとした明眸は伏せられて

いる。

その全身は羞恥にみちみちて、くれない色の思いを、たぎらせている。ようやく二十才をこえたばかりの彼女の「からだ」は、すでに観念している。しかし、「こころ」は観念できないのだ。邸の人間に丸裸を見られるのは、もとより辛かった。だが、見も知らぬ男たちに裸身を淫らな下心でねめまわされる辛さは、また格別である。ブラジャーもパンティも剥ぎとられてから、もうどの位になるのだろうか。これほどの恥辱をうけた若い娘はこれまで果たしていたのだろうか。

そんな美少女の無残な境遇を心にもかけず権田は顎をしゃくり、この女を連れて帰るのだな、と誰にともなく言った。

権田は岩崎組では若衆組といった格で、使者としてやってきたのも、以前、パン助たちの束ねをやったりしていた経験を買われたらしかかった。

もう一人の運転手がわりについてきた三下は、やっと二十才になったかならないかで、権田の前では、からしき意気地がない貧相な駄けだしである。名前も、たんに「政やん」と紹介されただけだ。目には、こすからそうな光がある。

政やんは、部屋に入るや否や全裸の桂子に目をとめ、挨拶のあいだにも、もう目をはなさなかった。ぎくしゃくしている様子が、あんまりはつきりとわかるので、一座から失笑がもれたほどである。

政やんの狼狽も無理はない。この豪華な応接にいる何者とも知れない男女の中にいて、桂子という、この若い女だけは、全くの丸裸なのだ。しかも、座の連中は、つつましく目を伏せて正座している裸女に、かわるがわるそのものずばりの嘲りの言葉をなげかけ、その下卑た冗談が次の笑いをよぶ騒々しさだった。彼等は、くつろいだ思い思いの姿勢で、あるいはソファアに腹ばいになり、じゅうたんにあぐらをかいたりしてリラックスしている。

政やんは肩をこわばらせ、しかし視線はピシクに染まった抜群のヌードから、すこしもはなすことができずにいた。

とうとう、この場で、いかにも尊大にふるまっている金齒と金盞眼のめだつ千代という女が皆を制した。

「おやおや、その若いお人は桂子が大変お気にめしたようね。まあ、あわててことはないのよ。あとでゆっくりとお相手をさせます

からね……さあさ、桂子、なにをぼんやりしているの。ご挨拶をしてカラダをお見せするんじゃないのかい」

いいながら千代は、年甲斐もなくペロリと舌を出し、

「そうそう、手を縛られたままでは三つ指をつくわけにはゆかないわね。誰か、解いておやりよ」

心得顔の竹田が、裸女の尻のわれ目あたりにある結び目に手をかけ、乱暴に上へひっぱりあげるようにする。思わず首をふって、いやいやをする桂子の双臀を、ぴしゃりと叩き「畜生、いいケツしてやがんな」と未練げにいうのだった。

両腕を、うしろで拘束していた赤いしごきを解かれて、桂子はがっくりと上半身の力を抜く。縛られている間には自由ではないのだという、ある緊張感があったが、いましめを解かれてみると、より一層みずからのみじめさがつのってきたのだろうか、滑らかな両肩に力がない。それでも、

「桂子でございます。これから岩崎ぐみの皆さまのお世話になることになりましたので、……よろしく……」

澄んだ声で、ここまで言って、彼女は万感

が胸にせまったように涕泣した。こらえにこらえた涙が頬をつたい、乳房の谷間を光らせながら幾筋もながれる。涙は、あとからあとからながれ、ついにグミのような乳首のさきにキラキラする雫をむすんだ。

無言でむせびなく美少女の涙は、ただ面白半分には彼女の肉体を弄んできた一同をすら、何かしんとさせる哀れさをもっていた。とはいえ、三下共が「マスの代りだ」などと悪態をつきながら、そのくせ真剣な目つきで、めちやくちやにしまった桂子の裸身は、まだまだ素晴らしい陰影にみち、二十才という若い女体のもつ、あのえもいわれぬ艶やかさにあふれている。

千代が「なんだか、あちらへ借し出すのはちょっと惜しいみたいね」と小声でいったのは、一同が桂子の発散している香氣のようなものに当てられたせいであろう。

「——もう、そのへんでいいよ。泣くのはおよし！」

朱美が、桂子の前にしゃがみこみ、まるで鞭をふるうようにきびしくいった。彼女だけは専属のセックス奴隷が、人間らしくふるまってみせるのに我慢がならないようだった。桂子は目に見えてピクリと両肩を震わせ、け

なげにも姿勢を、もとにもどした。

それというのも、あの調教とよばれる被虐を毎日毎日、肉体に叩きこまれてきたせいである。桂子は氣をとり直し、白く細い指で頬と乳房の涙をぬぐった。

「ほんとに、けしからん女なこと。あたいたちに恥をかかせる気かい。もしそうなら、あたいにも考えがあるわよ」

「ごめんなさい、朱美さん。桂子、つい泣いちゃったりして……」

可憐な仕草で詫び、媚態をつくるようにして微笑みをつくる。

「ご気嫌がなおったのかい。ちょっと甘い顔をみせると、すぐこうなんだから。あたい、実際、いやんなっちゃう」

「まあまあ、そこのお姉ちゃん。そんなに詫びを入れてるじゃねえか。まあ堪弁してやんなよ」

と、いかにも大様に権田が、はじめて口をはさんだ。

「桂子。お客さんが、ああおっしゃるんだから、ここはまあ、許してあげるよ。でも、よくよく、このお礼は、するんだよ。わかってるわね。ホホホ……あんた、テクニクもだいぶ上達したようだから……」

満座の中でのからかいに、桂子は又しても身のおき場もなく、うなじを見せる。しかしかすかにうなずいたのは、はっきりと分かった。

「といって、素っ裸の身一つで関西へいってもらうと、森田組の恥になるし。あんたは稼ぎが、ほんとに悪いときている。嫁入りじゃないけれど、お道具と衣裳の一つくらいないかねえ……」

朱美が、はじめから仕組んだ芝居をしていたのだということが桂子以外の誰にもわかった。桐の箱のお道具が、たちまちとり出されたからである。

「これはね、あんたにとってなくてはならないお道具なんですよ。さあ、よくごらんよ。スターもどきに泣いてみせたりして、本当はこのお道具を、関西をもってゆきたかったんだらう?……」

朱美は、いかにもけがわらしいものを扱う仕草で、桐箱の中身を取りだし、

「それにしても、よく使っているわね。ピカピカにみがきあげた上に、すこしばかり、すり減ったみたい。……ところで、これはあんなのサイズに合わせたオーダー・メイドなんだから、ずいぶん高価だったのよ。あんたの

これまでの働きじゃ、この先のふくらんだところも買えやしない。あははは……。そら、特出しのお嬢さん。そんなにおていさいをするんじゃありませんよ。——にくわえこんであんなにハッスルするくせに。どうなの？このお道具、出張する先に、もってゆきたいんだろ？」

「……ええ、朱美さん。よろしければ……あたくし」

「ええい、面倒くさい。じゃ、お前との、しばらくのお別れのしるしに、これを預けておこうよ。高価なものだから、しっかりと身につけてなきゃだめよ。手に持ったりしていて万一、置き忘れてもしたら大変だからね」

合成樹脂で作られた特別製の道具は、鬼源の商売仲間が念入りに製作した、しろものがある。もちろん、直径・長さ・くびれ具合などを点検するために、寸法測りなどと称して桂子は、さんざんに、転がされたものであった。……若い軀を代償にした道具は、本物以上によくでき、桂子のカラダの構造に、これくらいぴったりはまるものはありえないと思われるほどの、できばえであった。

「さてと、政やん……さん。このお嬢さんの軀の扱い方を教えておくわね。もっとも

このお嬢さん。これをみると鼻を鳴らすようにして嬉しがるんだから、言うとおりにしてやればいいのだけど。じゃ、桂子。いいわねいつものようにおねだりして」

といわれても、この邸で日常、行なわれている女体の扱い方についての約束ごとを知らない政やんに、桂子の口から、どうしてもそのようなことを言えようか。とっさに声もでない。

唇を憐れませて、オロオロする美少女の鼻先に、これもやっぱり用意してあった、塗り薬——媚薬をつきつけた。

「じゃ、これを使うからね。もう我ままは許さないよ。さあ、股をひらいて！」

朱美は、塗り薬をタップリ指先にとり、かがみこむ。指先が軀の芯に触れた時、桂子は「あっあっ……」と呻いた。もはやためらわない。首筋から喉もとにかけて、ピンクのうすくれない、みなぎらせながら、むせぶように言いだした。

「桂子、お客さまと仲よしになりたいの。おねだりしていい？ あなた。……あたくし、まだお道具をうけいられる体になっていませんのよ。だから——して、ねえ……」

そして、なよなよと尻を揺すりながら、政

やんの足元に這いより膝にとりすがる。可憐な唇は小さく開き、濡れた明眸で淫らな要求をするのだ。

「ねえ、あなた手伝ってちょうだい。権田さんやあなたの氣にいつていただける女になるために、どんなことでもしてよ。……ああ、桂子。男のひとの前でこうやってハダカをさらしていると、体のシンをワシ掴みにしてほしい氣持になってきますワ……だからね……桂子の弱いところは……おっぱい……お尻の割れ目のところ……そして……」

「そして、どんなところだ、ええ？」

「……おわかりになっているくせに……両脚のつけねのほう……腋の下……からだじゅうのぜんぶ……」

政やんは、やぶれかぶれになったように、しかし何くそ！ といった感じで裸の肩を、ひきよせた。そして、このヌード女を、どう扱えば、いいのかと言いたげに、ちらっと権田のほうに目をむけたが、けしかけているような兄貴分の視線にあうと、

「ようし、わかった。可愛がってやらあ。ありがたく思いな」

政やんは身をすりよせてきた桂子の背後から乳房を抱きかかえ、はげしい勢いで豊かな

隆起を揉みはじめる。まるで獲物を鷺づかみするときのような強さである。男の掌にあまる、こんもりとした双乳はゴムまりのようにはずみながらタプタプと、かすかな音をたてる。

桂子は目をとじ、性感のなかにおぼれこもると、全身を政やんに、もたせかける。両足を、ゆっくりと左右に拡げ、いつ男の攻撃をうけてもいいように、すこし尻を浮かすようにする。男のテンポに合わせてようと努力している姿態である。

「ねえ、……あなた。もうすこし、ゆっくりとなさって。おねがい……キスしながら……ゆっくりといじめてちょうだい……」

政やんは血走った目で、裸女をみつめながら、なおも性急に、いたぶりつづける。とうとう朱美が、あきれたように、

「まってよ、政やん。そんなにきつくしたらお嬢さんがこわれてしまうじゃないの。うふふ……もっと、ゆるやかな調子で、じわじわと追いこんでゆかなくちゃ……それじゃ、だめよ……」

政やんは滝のように汗をかいている。朱美に、そんな口をはさまれて屈辱感が、ぐっと胸にきたのだろう。滑らかな背を、ぴったり

と押しつけてくる桂子を、するりと離し、はずみで、おおむけに寐そべってしまう女体をぐいっと押しひらく。

まるでガマ蛙がたたきつけられたような不ざまな恰好である。

おおむけにされても、まったく流れない果実のような胸の隆起。まっ白く息づいている下腹部の、えもいわれぬ、なだらかなスロープ。乱れる艶やかな黒髪。それでも桂子は女の本能で片手を両足のつけ根において、満座の視線を、ふせこうとするのだ。

「まあまあ、そう焦らずに。ほら、こんなに羞かしがってるじゃないのさ。いいよ桂子、そんなにこわがらなくたっていいから……この人はね、すっかりお前が気にいったからこうなさるのよ。わかった？ そう。じゃそのままで、じっとしているのよ。いまに、とってもいい気持ちにしてあげるからね」

かすかにピンクの唇を半開きにし、皓い歯をわずかにみせて呻いでいる裸女の両乳は、いまの激しいいたぶりで、手型がついて、朱美は前を押えた桂子の手を、邪険にびし

やりと払いのける。

「さあ、政やん。桂子の両足のあいだに膝を

ついて。そうそう。そして左手で内腿をさすり、右手でおっぱいをゆるゆると愛撫してやって。さっきみたいにきつくしないのよ……おや、桂子、もっと両足を思いきってひらくんじゃないのかい？……」

螢光灯の輝きを反射して肉感にみちて、にぶく光っている太腿は、朱美の命令によって左右に徐々にひらく。

「ほほうっ！」と、嘆声とも溜息ともつかない声が一座からもれる。だらしなくソファーに沈みこんでいる者も、背をのぼして、のぞきこむようにするのだ。

しかも、開陳している美少女は、大胆に、しかし羞恥の果てにある、かすれた声で、のぞきこんでいる政やんを招く。

「桂子、こんなに、あなたにおねだりしていただきますのに……あたくしが、おきらい？ おきらいでなければ、ねえ。キスして……」

政やんは、すてばちになって、かぶりつくように唇を重ねた。だが周囲の目が気になつて、すぐに離れようとした。すると、まるで柔らかく熱いとさえ思われる裸女の両腕が、彼の首筋にまといつき、やさしく生え際を愛撫してくるのを感じた。媚薬が女を狂わせ始めているのだ。女の香ぐわしい舌は、ちょっ

と政やんの齒ぐきのあたりで戸惑い、やがて遠慮がちに奥のほうへ侵入してきた。それは別の生き物のように丸くすぼまって、男のこ

わばった舌の両側を撫で、先端をやわらかく搔くようにして、男の口腔の唾液を、ゆっくり吸引しながら、舌尖を自分のほうへ、いざ



イメージギャラリー……『ともしび』……志羽利也……

なうのである。政やんは一瞬、目まいのようなものをおぼえ、煙草のヤニくさい自分の舌を一息に女のひらいた唇の中へ、つきすすめた。

いつしか、女は彼の骨ばった肩中に、まっ白い、むきだしの両腕をまわし、あまつさえズポンをはいたままの彼の……のあたりに、ひらききった……をナヨナヨとすりつけるようにしてくるのだった。政やんはもう離れられなかった。

桂子の唇は、あたたかく、からみあう舌さきは、ときどきピクピクと震えた。ワイシャツごしに、いましがた彼の目の前に二基の機関銃のようにつきだされていた乳房が、べったりとおしつけられ、やわらかく潰されてくるのが、わかった。

政やんは、もうどうにでもなれと思う。ぴたりと、むさぼりあっていた唇を、ちょっと離して、全裸の女がささやく、
「あなた、いい方ね。あたくし、あなたのものになってよ……」

そして、美しく濡れた瞳を、男から離さずに、政やんのベルトを解こうと細い指をのばす。それに応じて、政やんも着ているものを脱ごうとしたとき、

「おい、もうそのへんでやめないか。調子にのるんじゃない。政」

権田も、一座のなかで一緒になって、このお遊びを笑いながら見ていたはずなのだが。お調子ものの政やんが満座の中で、そんな行為におよぶのが岩崎組の恥になると思ったのであろうか。

「だって兄貴。オレはただ、こいつの扱いがたのツボを、つかんでおきてえとおもって、それで……」

「ばかやろう。そんなことは、あちらへいつてからいくらだって研究できるじゃねえか。この場合は、森田組のあんさん方にまかせておきやいいのさ。こんな下等なスケのことを一々気にやむことはないさ」

桂子は、そのやりとりのあいだ、自分の振舞いのあまりの浅ましさが、再びつきあげてきたらしい。あわてて男の軀からとび離れて哀願するような眼差しを周囲にむけるのだった。

育ちのよい、この美少女に、どんな罪もあるわけではない。罪はないのだが、際限のない罰が彼女に加えられつづける。その罰も、直接の鞭打ちのように物理的に加えられるものなら我慢もできよう。しかし、この邸のそれ

は、桂子という女性の一〇〇パーセントを根こそぎ、さいなむ種類のものである。生殺しにすることは、殺すことよりも、さらに罪ぶかい。もし仮に桂子に何らかの罪があるとすれば、彼女があまりにも美しすぎるからだ。

「そうら、朱美。いわない事じゃないわ。お客人をおこらせてしまったじゃないの」と干代。「手っ取りばやく片づけて、おあとは、ゆっくりと復習してもらったらいいのよ」

朱美は、それもそうね、とべつだん悪びれもせずにながさき、周囲にいる若い衆の顔を見まわすようにする。すかさずヒョウキンな竹田が、手をあげんばかりに、

「おっと、これから先は、俺にまかしといっておくんなせえな」

「こんなことになる、すぐにあんたって人は乗ってくるんだから。なにも、あんたでなくたって……」

「いいや、やっぱり俺でなくっちゃ。そうさな、俺なら十分もありや充分にうるませてみせるぜ。こいつのツボを客人に知って頂けためにゃ、仕方がない。恥をしのんで一丁やるか。はばかりながら、ついさっきも、こいつと……」

と言いかけて、あわてて口を押さえる。

朱美は、三白眼を傾けて、チラと憎悪のこもったきつい視線を裸女に投げかける。朱美は、やはり竹田に惚れているらしい。もうそれ以上、さからわない。

「さあ来な、可愛いコちゃん。おれが天国をさまようような、いい気持ちにしてやるぜ。うれしいだろう。えへへ……」

桂子は肩を慄かせて、うつむいていたが、加虐者がきまると、うるんだ瞳を、新しい相手のほうに向ける。かすかに、こっくりとうなずき、濡れたピンクいろの唇に微笑みをうかべようとさえ、するのだった。

朱美は軽蔑しきった口吻で、
「どう、権田さん。この女、清純そうな虫も殺さぬ顔をしているくせに、相手かまわず誰とだって、こうなんだから——いやらしいったら、ありゃしない。女の恥だよ！」

竹田はそれに構わず、裸女のぐっとくびれたウエストに貼りつくような掌をまわし、あいた片手で乳房の下を撫でながら、

「グラマーのナオンちゃん、ひとつ尻振りダンスといこうぜ。おれが手伝ってやるから、感謝するんだぜ。いいか……さあ、ワンワン・スタイルになんな。そうそう、いやもっといやらしく足をひろげると何度も教えてやっ

たじゃねえかよ。そうそう、その調子」

いわれる通りに、しかし燃えるように赫く
なった全身を、わなわなと慄わせ、喘ぎつづ
けながら、そうした姿態をとる可哀そうな桂
子……

「どうでい、俺がツーといえ、こいつはカ
ーさ。わはは……」

と、平べったい顔を自慢げにゆるめて火の
ように熱くなっている女体の攻撃にかかる。
大きく丸くつきだした双臀をネチネチと撫で
時々ひょいと股間に指をさし入れる。思わず
含み泣くような吐息をつく女の黒髪に指をか
らませ、竹田は麗わしの胸乳をねらう。乳房
は火のように熱く、男の掌の中で悶える。

竹田は裸女の溜息、吸り泣きにテンポをあ
わせながらニヤリと嗤う。そのあいだにも、
慣れた手付きで裸女の弱いところ、弱いとこ

四馬孝画秀麗口絵八葉が巻頭を彩る 団鬼六作『花と蛇』特集第四弾

本誌S42/1よりS44/4までの連載
分を収録し、四馬画伯の華麗なる口絵を
附した集大成ですが、重版刊行は致しま
せん。只今、若干在庫がありますので、
未入手の向はお早めには是非蔵書の一部
にお加え下さい。申込は大阪市住吉郵便
局私書箱第41号 暁出版株式会社へ。
略号「花」 定価五〇〇円(送共)

ろを刺戟しつづけてやまない。彼は、女の耳
元で、なにか卑猥なことをささやきかけ、桂
子がいやいやをして黒髪をうちふると、下腹
部のあたりに指をさまよわせながら、赫く可
愛い耳たぶをなめすすり、やわらかく齒型を
入れる。

美肉の奥深いところに塗りこめられたクス
リの効きめと、竹田の巧戯のため頂上にむか
って桂子は、ひたすら、つき進むのだ。

桂子は竹田の意のままに、その姿態をかえ
る。こんどは白い茎に似た右足を男の肩にか
け内腿のきわどいところを責められるのだ。

ピンクのもやのかかった視線は、あらぬ方
をみつめ、ヌメヌメとした唇から唾液が糸を
ひく。やるせなげに、セクシーな吐息をもら
し、五合目、六合目へと追いあげられてゆく
のである。

「ああ……」

竹田が、又しても新しいところを刺戟した
らしく、桂子は呻きをもらす。

淫微な色責めは、さらにエスカレートし、
とうとうムダ毛のまったくない陵線がとらえ
られたのだ。間歇的に襲ってくる痙攣が裸女
の乳房をゆすりあげる。妖しく燃えあがる官
能の焰は、いまや見物の男女をさえ焼きつく

さんばかりである。桂子の白くて細い指先は
シャツを着込んだままの男の胸ボタンをはず
そうとして慄える。

「……脱いで……ねえ、お願い……あたくし
もう……」

いくら、くいしばろうとしても、ピンキ
な吸り泣きは、もれてくるのだ。わざと意地
悪に竹田は、すがってくる桂子の白い腕をふ
りはなし、陵線のあたりの盛りあがった部分
を左右から押すようにして、粘液性のかすか
な音をたてさせる。

竹田のテクニクもさることながら、体液
と充分にまざりあって、美肉の芯にふかく吸
収された媚薬の威力は今や最高頂に達してい
る。桂子の内部はピンクの花園である。その
もっとも奥ぶかいところから大浪のようなく
みつくせそうもない恍惚感が、ちかよってく
る。もうあと数歩のところに……

「お願い……おねがい……あなた……」

ヌラヌラする糸をひきながら桂子は竹田に
哀願している。巨大な、エクスタシーの中で
悶絶する以外に、どのような身の処し方もな
いのだ。濡れそぼった美少女は、いま、みず
からを破滅の淵におとしこみ、死ぬことだけ
がのぞみなのだ。彼女は思いのたけをこめ、

半狂乱で双臂をゆすった!

と——その時だった。

「そこでストップ! そこまでいいよ、竹田さん!」

突き放すように激しく言ったのは朱美だった。三角の目をし、口元がみにくくゆがんでいる。こんなに簡単に、そんなにやすやすと桂子を絶頂に到達させてたまるものかという表情が、くつきりとあらわれている。裸女を縛りあげて鞭うつのを残酷というなら、裸女をとき放ち、やる瀬なさの極に追いこんで再び引き戻すのは残忍としかいいようはない。

「竹田さん。その尻軽女から、放れるのよ。」

……この女、ほんとにメス犬そっくり」

竹田は、まだ未練たっぷりだが、不精不精まといいついてくる美しい牝のカラダを、もぎ放すようにする。

「ま、待ってちょうだい、あなた……朱美さん、おねがいですから、このままにしておいて……もう堪忍して。おねがい……桂子このままなら、狂ってしまいそう……だから、おしまいまで、させて……竹田さん、助けて……ねえ、あなた。桂子をおわらせて……」

桂子は、もう恥を忘れている。外聞も、満座の視線も忘れて、立ちあがろうとする竹田

「花と蛇」ファンの各位へ

山 光 純

「パロディ」「花と蛇」の弁

ここ数年、『奇ク』の魅力を「花と蛇」に絞って読みつづけてきました。きわめて耽美的なユートピア小説であるという理解をおこなって、読み手であることに満足してきたわけですが。

そこへ、このたびの「連載終了」の知らせです。一般に、読み手というものはきわめて貪欲なもののように、自分なりに育てたイメージと、作品が合致しないと、不服になる。マンネリだとか、筋の運びがなっていない、などと非を鳴らしたくなる。書き手の立場などには、理解をもたなくなる次第ではないでしょうか。

むしろ、作品は活字になったものだけで判断されるわけで団氏の多忙さとは関係のないものですが、それにしても「下らないからこのへんで打ち切るのが一番だ」などというのは、言いがかりもはなはだしいと思います。団氏による、この絢爛たる耽美小説を超える作品がこれまで絶無であることがそれを証拠だてています。

あるいは読み方が悪いのかもしれない。読み手がふくらませてきたイメージを、作

品の行間にそそぎこみながら読んだらどうなのだろうか。もっと積極的にあの耽美をさらに押しすすめるために、読み手があの世界に参加してはいけないのだろうか。団氏の許可をいただいて、あの蛇の邸の一員となり、その体験を自分なりの文章にまとめる——私が拙ない「贋作」パロディのいくつかを書いたのは、そんな風な考えからです。

一、二の方のご支持を頂きましたが、大方は黙殺で、きわめて当然のことです。多くの読者と同じく、私に団氏ほどの才能がある訳がない。お求めがあれば当分は続けられるかもしれないが、それから先はよく分かりません。書き手と読み手の間にイメージのずれがおこる、それが流行の断絶ということにすすんで、連載が中止となるプロセスが目に見えるようです。

たしかに『花と蛇』は終了しました。だが、そこに盛られた奔放なイメージは残りません。すくなくとも、あの作品を好んで読まれた方のすべてに、自分なりの希望や提案、アイデアがあったらうかと思われます。いつの日か、日頃、読み手として温めているアイデアが現実には蛇の邸の中で

の膝にすがる。

「竹田さん。あたくしを、このままにしておくつもりなの？ あたくしは、あなたのものなのよ。なんだってするわ……だから、おねがい……」

竹田は朱美のけわしい表情をみて、チエツと舌うちする。千代が、ケラケラ笑いながら朱美に加担する。三者三様のおもわくが、千代には面白くて、たまらないのだ。

「竹田さん。朱美もああいってるんだから、この場は引きさがって桂子の狂態でも一緒に見物しようよ。お客さんだって、ホラあんなむずかしい顔をして……」

形勢非とみた竹田は、畜生！ 俺を道化にしがってという感じで顔をゆがめたが、どっこいしょ、と立ちあがる。すがりついて泣泣してくる桂子の紅潮しきった裸体を引きはがすのには、存外、苦勞がいった。トリモチを引っ張りとりときのようになまといつく白い腕を、むしりとるのだ。……あとには、応接の床に這いつくばって号泣し、ただ身悶えてやまぬ若い軀をした元の令嬢が、とり残されるのだ。揺れうごく桂子のボツボツした双臀を前にして、野卑な男女たちは覚めようのない興奮で、ささやき合っているのだった。

行われる——そういう期待を漠然とだが、お持ちだったのではないだろうか……。

ここで、私の提案です。

私をふくめた読み手の皆さんにパロディ『花と蛇』に参加していただく。もちろんパロディは所詮パロディにしかすぎませんが、それでもいい。鬼源や千代たちと一緒に、もっともって、羞恥の底にのたうちまわらせたい——、そんなイメージをお持ちの方々に参加していただきたいと思うのです。

具体的には、愛読者の方々に、ほんのさわりのところだけでいいから私のほうまでイメージと、アイデアと、ご希望をよせていただきたいのです。羞恥と懊悩のアイデアです。

火つけ役は私ですから、作品にまとめることはさせていただきます。五行でも十行でもいいから、光るものがあるかぎり取りあげ、それを『パロディ』のなかに、ふくらませ、より淫奔な、より煽情的なユートピアの建設を、めざす試みをいたしますんか？

十月号には、西宮M・K氏の公開状がありました。あんなにまとまったものでなくともいい。静子を、京子を、それに美津子

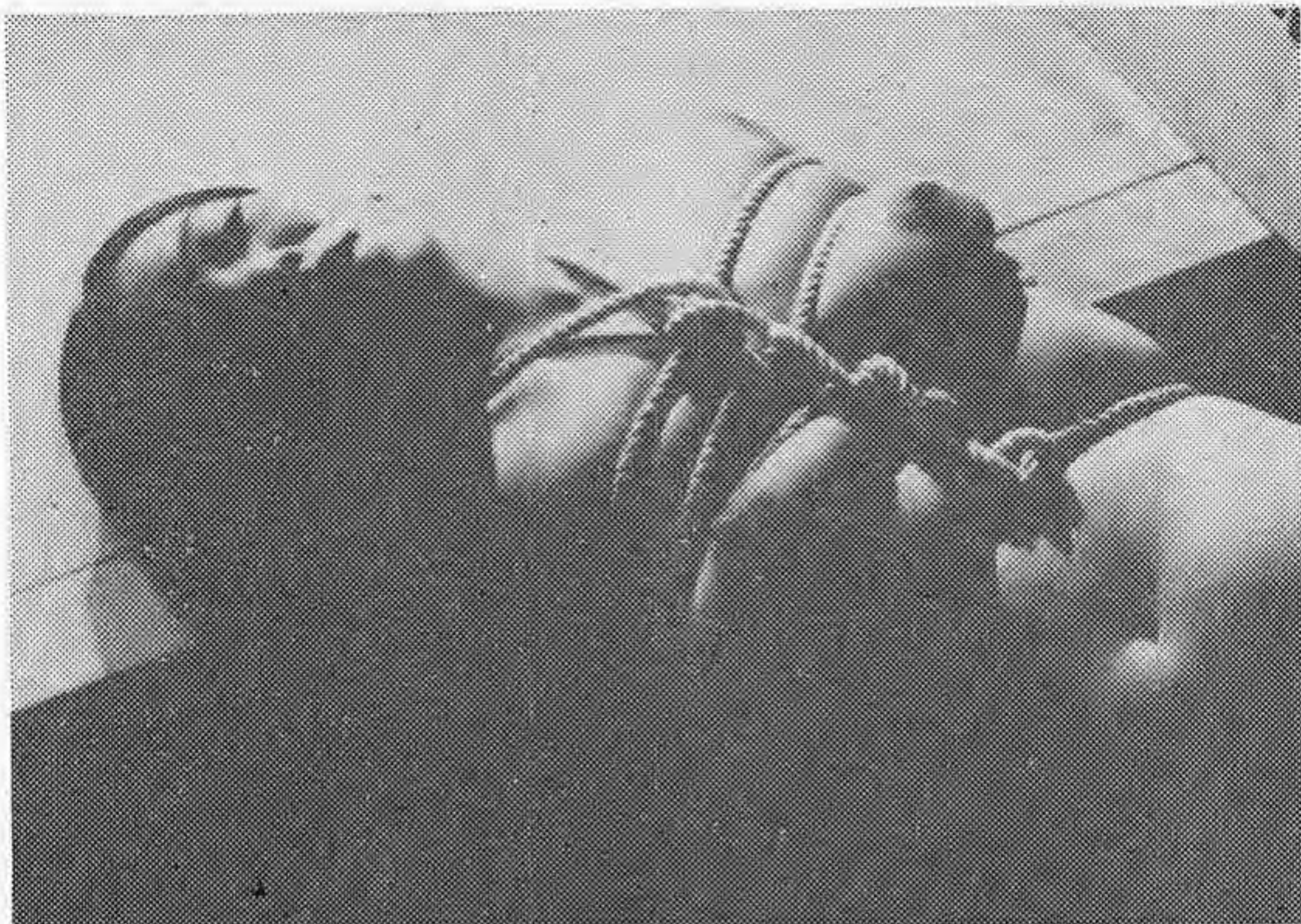
小夜子、桂子どもに、もっとけがらわしいことをさせるアイデアをお寄せいただきたいと思うのです。

語るに落ちましたので、このあたりで止めます。アブノーマルなどと照れないで、お便りをお寄せ下さい。

〔編集部より〕

山光純氏の提唱された、△読者の手による▽△読者のため▽のパロディ『花と蛇』のアイデア提供に御賛同の方は、是非編集部宛お寄せ下さい。用紙は原稿用紙、便箋、葉書でも結構です。山光純氏に送付して、今後の執筆に資して貰います。尚、優秀なものは誌上に掲載して原稿料をお支払いする外、参考資料として役立ったものには、編集部作成の△花と蛇写真集▽を贈呈いたします。

従来、団鬼六氏に対しても多数の資料や参考意見を数多く提供下さって、大いに活用させて頂きましたが、山光純氏に対して何卒絶大なる御声援を賜りますようお願い申し上げます。只今、次稿まで編集部に於て入手しておりますが、それ以降、愛読者の皆様のアイデアを大幅に内容に盛り込むことが出来たら、大層楽しいと思えます。



~~~~ マダム芙美代の告白 ~~~~

## ムチ打ちは大好き

福 井 桃 子

私って、なんで、こんなに欲ばりなんでしょうね。この前は思いっきり浣腸されて、お腹にあるものを、すっかり出してしまった上で尚さら、その上に腸をきれいに洗ってしまいくらい、お腹にたんとお湯を入れられたんですのねほんとに、おかしいですわねまだまだこの上、変わったことを経験したいと思っっていますんのですのよ。

今日、こうして、わざわざ

大阪まで訪ねてきましたのも、ほんこの間、私の経験しましたことを、お話したいと思ひまして――。

変ったお話を是非お聞かせするって、お約束しましたでしょ。だから参りましたの。ええ、新幹線のこだまで、岐阜羽島駅から乗りましたら、すぐでございますわね。実のところ、私、まだ新幹線は一度も乗ったことがございせんでしたので、一度乗ってみたいと思っっていましたの。それで、この際にと思って大阪見物を兼ねて寄せていただいたってわけでございますのよ。

だって、往復の旅費や宿泊代は、すべて出



して下さるって、お約束だったでしょ。だから大船に乗ったような気で。オホホホ。

お店の方はってですか？ それがね、この頃は例のドルショックって言いますんですね、さっぱりなんですのよ。だからお休みにしていますの。御心配なく——。

今日は、私の方から出かけてきましたんですから、言われなかったって、ドンドンなんでも喋っちゃいますからね、テープの方は長いヤツを十分用意しておいて下さいましよ。

ああ、それから、写真の方も、今日は、私休養十分ではりきっておりますんですから、ジャンジャン撮りまくって下さいね。今までのように眠い目をこすってプレイをやらなかったって、徹夜でも平っちゃらですよ。

ええ、その変わった話の方ってですか。それはネ、こうして雑誌にお喋りを載せていただいたお蔭で、ほんとにいいお友達とお知り合いにならしていただいて感謝しています。その方のお名前ってですか？ それは仮にAさんとしておきましょうか。今までに三人の方から、お手紙を貰いましたけれど、その中の一人なんですの。

三人の中から何故Aさんを選んだかってですか。別にこれといって、意味はないんです

が、近かったせいでしょうね。私の今住んでいるところが岐阜でしょ。Aさんは名古屋に住んでおられるんです。だから地理的に一番便利なんで、始めてデートしたのが犬山ってわけなんですのよ。

そりゃね、私が名古屋まで出向いてもすぐなんですけど、名古屋は地元だからイヤだっ

てAさんが言うもんですから、岐阜と名古屋から、お互いに犬山まで出かけて落合って、すぐ意気投合してプレイをおっ始めたってわけなんです。今日はその第一報をお知らせしようと思ってこうして出てまいりましたの。

私はこう見えても殿方に対してのサービス精神は旺盛のつもりですよ。そりゃ、嫌なも





のは嫌って、はっきり申し上げますがね。あら、私がお俠きやんな性質を持っているってですか。そんなとこ、あるかもしれませんね。

旦那さん、もう一杯頂戴させて下さいましよ。いや、酔っちゃいません。新幹線では時間がありませんでしたので、お冷ひやで一本だけちよいとひっかけましたけど、あれは、ほんの口よごしで、酔うというほどのものではございません。ああ、どこまでお話ししましたっけ？ えーと、お俠きやんな私のこと？

そうそう、私、こう見えてもヤキモチ焼きなんですの。好きな人や気のある人が、他の女といちゃいちゃしていると見たりしたら大変なのよ。いいえ、直接見なくたって、してるかもしれないって考えただけでも、頭がカッとするくらいなんですから、相当なヤキモチ焼きなんでしょうね。

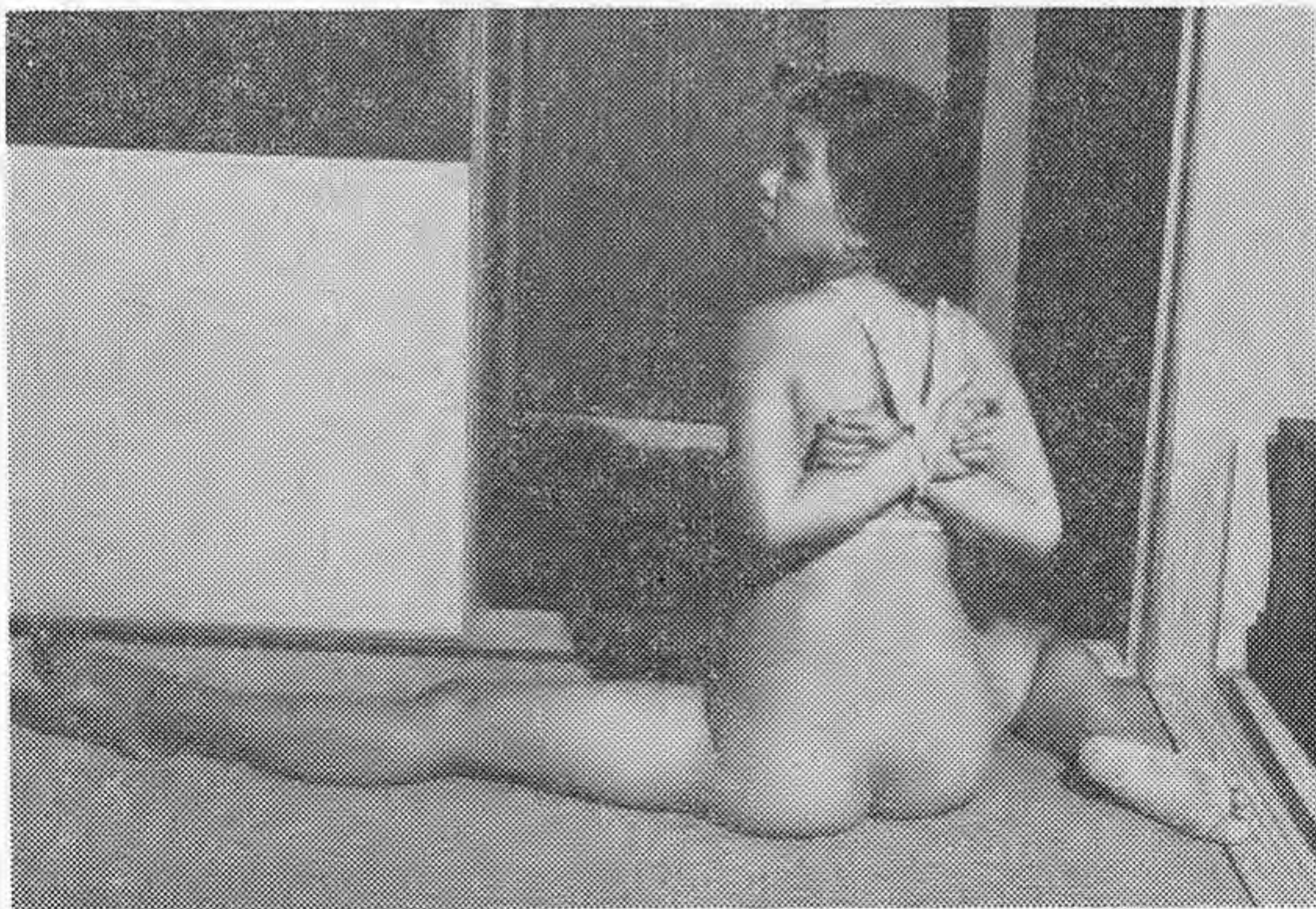
それに、あのAさんったらね、そんな私に輪をかけたヤキモチ焼きなんで、私、びっくりしてしまいましたわ。いやいや、もう大変なんですのよ。あれは、ひよっとしたら、S Mプレイをする口実だったかもしれません。

「お前は縛られるのが好きか？」って聞きますから、「ええ好きよ」って答えたら、「そうか、それなら縛ってやる」って言って簡単

に縛られてしまったんですけれど、それからが大変なんですよ。

何が大変かって、大体、あのAさんというのは、私以上の大ヤキモチ焼きの上に、乱暴者なんですよ。ちよいと、これ見てごらんなさいよ。この肩のとこのアザ。背中、見て下さいよ。いっぱいですよ。腕も、脇腹も、凄いアザでしょ。お尻の方はあとでお見せしますわ。写真にとって下さってもいいですよ。

今、手で押さえても、とびあがる程痛いですわ。あれから、まだ四日しか経っていませんもの。背中のとこなんか血がにじんでるでしょ。私、鏡で見たんですけど、あっちもこっちも、まるで赤い花を押しつけたみたいにムチのあとが残ってるでしょ。いえねムチって言ったって、ズボンのバンドなんですから、ヒド





イですわよ。

縛り方は大したことはなかったんです。両手首を縛られるときは、私、手首と手首の間にすき間をつくって、握り拳にしておいて、うんと力をこめていたんですものね。胸の方は二まわりほど、それも、ただ巻いたっていう程度だったんですから、今までの縛り方か

ら見たら可愛いもんですよ。

それが、いきなりズボンのベルトを抜いてなぐってきたのには驚きましたよ。

「痛いじゃないか、なにすんのヨ」って、怒鳴ってやっただんですが、その言い草がふるってるじゃありませんか。

「お前は大好きじゃ、大好きじゃ、お前は大



好きなオレの女だ。オレの女に手出ししやがったのは、どこのどいつだ。さあ白状せい。

お前の身体に手をふれた男の名前を、さあ、白状しろ。白状せんか」なんて、怒鳴り散らしてるんですから、最初、私はこの男、急に気が狂ったんじゃないかと思ったくらいでしたよ。でも、よく考えてみれば、これがAさんの手だったんですね。

私を責める理由がないもんですから、私の男の名前を白状させようと考えて、ベルトをふるってきたんですから、私の方がたまりませんや。こんなアザになってしまったんですよ。幸いなことに、胸に巻いた縄はゆるいし手首を縛られた縄も、うまく加減しておきましたから、肩口から縄をすべらしておいて、するりっと縄は抜けましたがね。

「男を白状しろ、男の名前を言え」って狂ったようにバンドを揮うもんですから、こんなにアザが出来るくらいぶたれてしまいましたのよ。でも、縄が解けてしまっただけからは、私も負けていません。バンドの下をくぐりぬけて、ドンとつき上げるように体当たりしたら、おかしいじゃありませんか。Aさんが仰向けに、ひっくりかえってしまっただけ。なにしろ、私って肥ってるでしょ。Aさん





がバンドを振りおろそうとして前かがみになったところへしゃがんでいた私が立ち上がる様にして体当たりしましたもんで、面白いようにAさんが倒れてしまいましたんヨ。

「おい、おい、なにをするんだ」って、Aさんのあわてようたら、おかしいくらい。

「冗談じゃないよ。私はね、あんたの女じゃないんだから男のことを白状するいわれなんて、これっぽっちもないんだからね」

そう言って仰向けに倒れているAさんに馬乗りになって手に持っていたバンドを奪って、首を締めてやろうとしたらね、左手でAさんがさえぎったんで、顔の上にかかりましてね。それがおかしいじゃないませんか、丁度両方の目の上にバンドがびったりとかぶさったじゃありませんか。急に目が見えなくなったので

Aさんもあわてましてね。

「おい、悪かった。許してくれ」なんて、今頃になって弱音をはいているんですよ。

私の肩から、背中、それにお尻にかけて、まるで火事のように、カッカしてるんですけど、不思議と不快な痛さっていうものがありません。やはり私のSM好みのところが大いに影響してるんでしょうね。

こうなったら、私もなかなかシブトイところがあるんですよ。両股でがっちりAさんの胸を挟み込んで馬乗りになっておいて、両方の耳のところでバンドを握った拳をすえてぎゅうと締めつけてやったんですよ。

「お願いだ、バンドをゆるめてくれ。もう何もしないから、ゆるめてくれ」なんて言ってるんですけど、私も言っちゃいましたよ。

「さっきは、さんざん、ぶっしておいて、馬鹿にしないでヨ。のいて欲しかったら、自分ではね返してごらん」ってね。そしたら、急にAさんは暴れだして、おかしいじゃないの。私の腋の下をくすぐったり、脇腹をつねったりすんのよ。私、平気だったけど、目からバンドをはずしてやったわ。

それから、もう大変な荒れよう。あんたに見せてあげたかったわ。今のようにカセツ



トテープを仕込んでおいたら、面白かったかもネ。組んずほぐれつつっていう有様なのよ。

Aさんの方は男だもんネ、やはり体力はあるんだけど、私の方には若さがあるよネ。持久戦になったら、断然、私の勝ちになるわ。Aさんたらね、フウフウ、大きな息を吐いてもう見ていて気の毒なくらい。「お前は力があった、かなわない」なんて言ってるのよ。

それでも、私、大分手加減してたんよ。なんととっても、私には、縛られたい、いじめられたいっていう気持が、心底からあるでしょ。だから、徹底的には抵抗しないの。

それにね、あのバンドで叩かれたの、あとで家に帰って考えたら、なんだかジーンとする位、よくってね。もっともっと叩かれてみたい、なんて考えたんですの。不思議な心理でしょ。きっと、あなたもそう思うでしょ。私って、変な女ね。

世話焼きで、お人好しで、その上、こんな変わった性格を持っていて、ヤキモチ焼きときているんですから、箸にも棒にもかからないっていうのは、こんな女のことをいうんでしょうね。

もっと、そのときの心理を話せ、って、ですか。そりゃ、お喋りの私ですから、自分で

わかっていたら、いくらでも、どんどんお話しましてよ。それがね、どうなんだか、自分でも、よくは分からないんですのよ。

ぶたれた跡がアザになってるでしょ。そのあとを指で押すと鈍い痛みのあることと飛び上がるほど痛いこととありますのよ。どちらかといえば肩先の骨や肩胛骨に当たったところ

ろは痛く、筋肉ばかりのところは痛さは鈍いですわね。そこを指で押してみても、やはり自分ではムチでぶたれたんだわ、っていう気持がしみじみとしますわ。

ねえ、こんな話ばかりさせないで、私を麻縄でぎりぎり縛ってから逃げないようにしておいて、思いきりムチでぶって下さいよ。







ほら、こんなに、まだ赤いアザが残ってるでしょ。このアザの上をぶって貰ったら、どんなに痛いかしらね。

あら、そんなことはないですよ。あなたにだったら、絶対に抵抗なんかいたしません。もしお疑いになるんなら、手も足もダルマさんのように縛っておいてから、好きなところ

をお打ちになったらいいじゃございません？ 私や、今日はもう覚悟して、家を出てまいりましたんですから、御存分になさって下さってもかまいませんよ。

そうそう、もう一つ、Aさんの悪趣味のこと、申し上げましょうか。こんなこと、いくらなんでも、恥かしいんですけど、思いきっ

て言っちゃいましょうか。

Aさんたらね、私の毛深い毛深いって言うんですのよ。今までに知っている女の中で一番だってね。ほんとうに嫌ですよ。そりゃ私も、大衆浴場や温泉の大浴場へ行ったこともありますから、毛深いのは、よく知っていますつもりですが、面と向かって、しげしげと見つめられて言われちゃ、頭にきますわね。

それで、私が怒ったら、今度は立派だって言うんですの。どこがってですか。御存じのくせに、あなたまでが私をからかうのは、およしになって――。

立派か立派でないかは、そのところは私にも、よくはわかりませんが、とにかくAさんに言わすと立派らしいですわ。ええ、そうです。色とか形とかを露骨な言葉で言われるので、私、困ってしまいましたわ。

あら、性能の方はどうかってですか？ その方も、私が顔を赤らめるようなことを何度も言いますのよ。その方で、私を困らせようと思って。そりゃね、色とかお道具の立派なこととは、自分でも見えますからネ、そんなものかと思わないこともありませんが、性能の方って言われると、どうもね。

名器だなんておっしゃったって、私にゃピ



ンときませんわよ。それよりも、私の大好きな責めをやって下さった方が、いくら申し込められませんか。

ねえ、ぼちぼちプレイを始めませんか。

今日はネ、私、思いつきムチで、ぶたれてみたいと期待して来てますのよ。お喋りの方はプレイが終わってからにして、縄とムチのお遊びの方を早く致しましょうよ。ええ、そりゃ、いいですとも、お写真の方も、じゃんじゃん撮って下さって結構でござんすよ。

カラーでってですか。それだったら、私のウブ毛から毛穴までシャープに撮って下さいネ。ええ？　なんですって。私の鼻が立派だから、アップで撮りたいって。本当ですか。

鼻が立派だから、お道具も立派というのはそれは殿方のことでしょう。私じゃ、これでも、れっきとした女性ですから、関係ないと思うけどナ。そこが違うんだナ、はつきりと関係があるんですって？　へえ、そんなものですかね。私じゃわかりませんわ。

そりゃ、ねえ、私の鼻って、外人のようにこう、しゃくれているでしょ。舞台向きのする顔だって言われたことはよくあるけど、時たま高慢チキだって言われることもあるわ。

イケズすることがあるかって？　そりゃ時

と場所によりけりだわ。でも、言えることは、私じゃ、これにはと思う殿方には従順でサービス精神も旺盛で、思いやりもあるのよ。

好き嫌いはある方よ。だから、虫の好かない相手だったら、徹底的に、喧嘩してやるの。これは、鼻とは関係ないわね。

どう？　こうして、私の太い足をあなたの首に回して挟んだりしたら、お怒りになるかしらね。もし、怒られて私を縛って下さるんなら、私、本望だわ。だから、あなたを怒らすためなら、いろんなイタズラするかもよ。

ハイ縛ってちょうだい——じゃ、つまらないと思わない裸の身体と裸の身体をぶっつけ合って、その上で縛りあい縛られあってこそ愉快だと思うけど、どうかしら？

あなたの首を挟んだ両足、







離さないわよ。だから、ムチで私をぶってぶって頂戴！ 首から足が離れたら、あとは、背中でも、お尻でも、身体中、どこでも構わないから、そのムチでぶつのよ。

私やネ、素手だけど、体当たりして抵抗するから油断しないでね。荒海できたえた身体だから、案外手ごわいかもよ。ちょっと待っ

て。目にムチが入っちゃいけないから、水中眼鏡をかけとくわ。だから、どこをぶってもいいのよ。ええ、平ちゃらよ。皮膚は強いから血はにじんでも、流れることはない筈よ。

私がムチでぶたれて伸びたら、この縄でどんな縛り方で括ってもいいわ。そしたら、私の体はあなたの好きなようにしていいわ。ど

んなことでも自由になるって約束するわ。そのかわり、あなたの方が疲れて伸びてしまったら、私がこの縄で縛るかもしれないわよ。

あら、そんなに心配しなくて、私じゃ無茶はしませんよ。ええ、噛むなんて反則はいたしません。こう見えても正統派なんですから、安心して下さいネ。もし私があなたを縛るようなことがあっても、ごく緩く、ちょっとり可愛がってあげるだけよ。

私の可愛がり方ですって、そりゃ内緒ですけど、Mの男性だったら、きっと随喜の涙を流してよろこぶんと違いますか？ トルコ娘の経験？ そんなのはありませんよ。私のはネ、SM術の極意っていうんですか。この秘術にかかったら、どんな堅固な男性も、いちころで陥落してしまうんですからね。

いやいや、これは冗談ですけど、私が伸びても、あなたが伸びても、結果はあなたにとって、SMプレイの楽しみを、味わえるってわけ。

じゃ、ぼつぼつ始めましょうか。

写真は撮れないかもしれませんが、その方は辛抱して下さいネ。

あら、テープ切れちゃったの？ じゃあ、またね——。



## 団鬼六作



## 決定版

● 瞠目のサディズム小説総集篇遂に成る!!

昭和37年8月号に端を発してより絶讃を博し続ける「花と蛇」の文字通りの決定版が堂々八百有余頁の超豪華本として完成致しました。驚異的な人気を生み出したこの長篇サディズム小説は、現在尚「奇譚クラブ」誌上に連載中でありますが、過去四回の特集にも拘らず数多くの要望にお応えして、今回の総集篇発刊となつた訳であります。八十年の集積を味読して下さい。

● 瞠目のサディズム小説総集篇遂に成る!!

昭和37年8月号に端を発してより絶讃を博し続ける「花と蛇」の文字通りの決定版が堂々八百有余頁の超豪華本として完成致しました。驚異的な人気を生み出したこの長篇サディズム小説は、現在尚「奇譚クラブ」誌上に連載中でありますが、過去四回の特集にも拘らず数多くの要望にお応えして、今回の総集篇発刊となつた訳であります。八十年の集積を味読して下さい。

／＼内容主要見出し一覧／

第一章 発端 第二章 恐ろしい探偵 第三章 美人の脱走 第四章 華やかな宴 第五章 救済者 第六章 救済者 第七章 救済者 第八章 救済者 第九章 救済者 第十章 救済者 第十一章 救済者 第十二章 救済者 第十三章 救済者 第十四章 救済者 第十五章 救済者 第十六章 救済者 第十七章 救済者 第十八章 救済者 第十九章 救済者 第二十章 救済者 第二十一章 救済者 第二十二章 救済者 第二十三章 救済者 第二十四章 救済者 第二十五章 救済者 第二十六章 救済者 第二十七章 救済者 第二十八章 救済者 第二十九章 救済者 第三十章 救済者 第三十一章 救済者 第三十二章 救済者 第三十三章 救済者 第三十四章 救済者 第三十五章 救済者 第三十六章 救済者 第三十七章 救済者 第三十八章 救済者 第三十九章 救済者 第四十章 救済者 第四十一章 救済者 第四十二章 救済者 第四十三章 救済者 第四十四章 救済者 第四十五章 救済者 第四十六章 救済者 第四十七章 救済者 第四十八章 救済者 第四十九章 救済者 第五十章 救済者 第五十一章 救済者 第五十二章 救済者 第五十三章 救済者 第五十四章 救済者 第五十五章 救済者 第五十六章 救済者 第五十七章 救済者 第五十八章 救済者 第五十九章 救済者 第六十章 救済者 第六十一章 救済者 第六十二章 救済者 第六十三章 救済者 第六十四章 救済者 第六十五章 救済者 第六十六章 救済者 第六十七章 救済者 第六十八章 救済者 第六十九章 救済者 第七十章 救済者 第七十一章 救済者 第七十二章 救済者 第七十三章 救済者 第七十四章 救済者 第七十五章 救済者 第七十六章 救済者 第七十七章 救済者 第七十八章 救済者 第七十九章 救済者 第八十章 救済者 第八十一章 救済者 第八十二章 救済者 第八十三章 救済者 第八十四章 救済者 第八十五章 救済者 第八十六章 救済者 第八十七章 救済者 第八十八章 救済者 第八十九章 救済者 第九十章 救済者 第九十一章 救済者 第九十二章 救済者 第九十三章 救済者 第九十四章 救済者 第九十五章 救済者 第九十六章 救済者 第九十七章 救済者 第九十八章 救済者 第九十九章 救済者 第一百章 救済者

身代金奪取の失敗 涙の宣誓 連命の逆転 奇妙な三々九度 飼育される白い動物 悪魔と悪女の悪業 屈辱の地獄 逃走の恐怖と失敗の結末 悪鬼達の残忍な所業 落花無残の修羅場 淫らな美女の調教 すすまじいショーの展開 汚水にまみれた宝石 華々しき美女の屈伏 対峙する美女と美女 あくどい陥穽 羞恥図絵の展開 清純な令嬢の屈服 人身御供の令夫人 深窓の美少女とズベ公 小夜子への執拗な調教 変性色事師の登場

第四十四章 生れかわるスター京子 第四十五章 激しいスターへの訓練 第四十六章 低脳男と令夫人の結婚 第四十七章 愛弟子を調教する静子夫人 第四十八章 羞恥と屈辱の日本舞踊 第四十九章 悪魔たちの哄笑 第五十章 地下室の羞恥と汚辱地獄 第五十一章 珍芸を開陳する令夫人 第五十二章 淫靡な時代劇ショー 第五十三章 華々しきショーの展開 第五十四章 野卑な妾二人のいたぶり 第五十五章 ズベ公達の邪悪な責め 第五十六章 屈辱の中に泳ぐ奴隷たち 第五十七章 悪党の執拗ないたぶり 第五十八章 文夫と小夜子の屈辱的対面 第五十九章 勝ち誇る悪党一味 第六十章 中国伝来の秘法 第六十一章 緊縛された美女の泣泣 第六十二章 新しい餌食への触手 第六十三章 苦痛と屈辱の生地獄 第六十四章 恐怖の責め続く 第六十五章 結末なき責めの結末 第六十六章 甘美な拷問に悶える夫人 第六十七章 新しい犠牲の到来と静子の狂態 第六十八章 あくなく汚辱に泣く美女 第六十九章 ニューフェイスに飼育開始 第七十章 肉体の悪魔に魅せられた女 第七十一章 熱気を帯びたマゾの競演 第七十二章 女盛りの妖美な肉体 第七十三章 優雅な木馬夫人の崩壊 第七十四章 美女と野獣の奇妙な闘争

お申込は大阪市住吉郵便局私書函第41号。  
〒558 暁出版株式会社宛





式服はオムツカバー

# ウエディング・ベビー

江原美那子（カットも）

式場へ着いたので私は母代りの叔母と一緒に車を降り、控室へ入りました。控室には、会社の企画・宣伝部の佐々さんと保健室の牧村さんが式服を用意して待っていました。

一時間半ほどかかってセットを終え、私は美容室から再び控室へもどると、式服に着替えるためのスーツを脱ぎ、少しきつくしめすぎた新しいブラジャーの紐をゆるめました。いよいよ取り出されたドレスは、ベビー服を形どったもので、可愛いレースのフリルがついていて、裾は、とても短く、お臍のあたりまでしかありません。私はスリッパも脱がされ、ブラジャーとパンティだけの姿になり

ました。

皆で着替えを手伝ってくれますが、私は羞かしいやら、きまりが悪いやら、ずっと、うつ向いていました。

「さ、よだれかけなさって下さい。少し上を向いて、あごをあげて」

そして、最後に、思いもかけぬものが、二人の手で、そこにひろげられたのです……。

この結婚式に私達が少しも費用を使わず、しかも海外旅行までさせてもらえるのは、短大を卒業してから結婚のためやめるまで、三年間ほどお勤めをしたベビー用品メーカーの会社が、費用一切を出してくれる事になった

からです。でも一つ、条件がありました。それは、会社が用意した式服を着て挙式する事というのです。ミス〇〇県に選ばれた私の結婚は、この都市では一寸したニュースで、会社にとっても、よいP・Rの機会になるからなのです。

最初、彼は賛成しませんでした。私も一寸羞かしく、嫌でしたが、熱意のある営業マンとしての彼の立場が会社の上の方たちの目に少しでもよくうつるのなら……と考えると、承知したので。それと、正直言って、海外への新婚旅行にも気持が動きました。

しかし、まさか、こんなものまでそろえて



あるとは、思いもかけませんでした。控室の一方に、この雰囲気になぐわぬベッドが運びこまれてあり、白いシーツの上にドレスの下半分が、とり出されました。可愛いレースで、ふちどられた花模様の縫い取りのある大きなピンクのおむつカバーだったのです。そのおむつカバーの内側に張られた飴黄色の薄い生ゴム布の上に、牧村さんの手で晒木の綿のオムツが数枚、重ねられ、用意がすっかり、ととのいました。それは会社にいた頃、見なれていたビニール袋に入った小さな可愛い赤チャン用のものと違って、今日の私の結婚式のために会社が特別に作ったものでした。

「これも、しなきゃいけませんの？」

「そうなのよ。もちろん、なさるのよ」

「でも……」

私は、とまどい、ためらいました。

「さ、はやくなさって」

「羞かしいわ。このままで、いいかしら」

「いえ、その上からじゃ、駄目。本当にオムツするのよ。だから脱いで下さなくちゃ」

意地悪な牧村さん。でも、約束したからには仕方ありません。二人にせかされ、とうとう決心した私は、おずおずとパンティを下げ

セットした髪が乱れぬよう気をつけながらベッドに横たわりました。

「さ、ベビーパウダーを、はたきますよ。く

すぐったいかも知れないわ」

思いもかけなかった姿勢をとられ、羞かしくて両手で顔をおおったまま、じっと目を閉じて待っている私の身に、佐々さんと牧村さんの手でパウダーがはたかれ、お尻の下から腰全体を、おむつカバーのヒンヤリ冷たいゴムの感触で包まれてしまいました。大人用のおむつカバー！　そうです。こうして私は二十三にもなって、赤チャンのように、いやおうなくオムツをさせられ、薄い生ゴム張りの羞かしい、おむつカバーを、あてがわれてしまったのです。そして同時に、下腹部一面に、くすぐったいような、こそばいような感触が、ひろがりしました。胸がふるえるようなとても妙な心地でした。緊張と興奮と、そして冒瀆的な一種の錯倒した心理状態に陥ったとしても無理ありませんでした。

「美那子さん、我慢なさって下さいね。結婚式が終わったら、今夜から、もっと羞かしい事、しなくちゃならないのよ」

その言葉に、また私は赤くなりましたが、私におむつカバーをさせて下さる牧村さんのはげましの言葉が唯一の支えでした。

やがて、こうして牧村さんの手で前ホックが止められ、お臍のところまでギューとゴム紐が締められ、前でしっかり結ばれました。これで、やっとドレスの着付けが、すっかり終わったのです。

ベッドから起き上がる事を許された私は、全身が写る大きな姿見のところへつれて行かれ、その前に立たされました。

「どう。可愛いウエディング・ドレスじゃない？」

ベビー服を着せられ、よだれかけをつけ、おむつカバースタイルの自分の姿を、まざまざと見せつけられ、私は羞かしくて泣きたくなりました。しかし時間が、迫っています。

「さ、式場へまいりましょう。どうぞ」

式場へ向かうのも、両足の間にオムツをはさんで歩くので、不恰好ながら、股にならないように歩くには、どうしても小刻みに歩かなければなりません。おまけに一步一步、歩くたびに、腰のあたりでギューギューとゴムが音をたてるのです。

彼に手をとられて式場に入った私の奇妙な姿に、白い髭の神主さんも、げんそうな顔をしました。白装束に緋の袴の巫女さん達も私の奇妙なウエディング・ドレスに目を見はり、プツと吹き出しそうになるのを、あわてこらえ、こみ上げる笑いを押し殺している様子が、わかり、私は真赤になって思わず立ち止まってしまいました。

式の最中、のりとも耳に入らず、三三九度の杯も無我夢中でした。  
(おむつカバーをした花嫁さんなんて、初めて見たわ)



(イヤね。あれ、内側はゴムで出来てるのね  
大人用なのかしら)

巫女さんたちの、そんな囁きが聞こえるように思われました。

まもなく式が終わり、披露宴会場へ入りました。そこには親戚や友人、会社の招待客のほか、女性週刊誌や地方新聞の記者、カメラマン達が数人、前の方に陣どっていました。姿をあらわした私を見て、人々の口から、

「ホウ……」

と、ため息とも讃嘆ともつかぬ声が、あがりました。レースのひるがえる白い太腿の、つけ根のあたりに人々の無遠慮な視線を浴び私はそれこそ、このまま石にでもなってしまうくらいでした。

「ずいぶん、奇抜なドレスだな……」

「思い切ったアイデアだね。ベビー服と、おむつカバーか」

「なかなか可愛いじゃないか。さすがミス〇〇県だ。純白のベビー服とピンクのおむつカバーが、よく似合うよ。ちゃんと、よだれかけまでつけている」

人々の囁きに、私は耳のつけ根まで赤くなり、うつ向いたまま彼と一緒に正面の席へ進みました。モーニング姿の彼も、さすがに、てれくさそうでした。そして私達が一緒に席に着くと、フラッシュが、たかれました。私の、この羞かしい姿が明日の地方誌や女性週

刊誌に、センサーショナルな見出しの下に載るのです。そう思うと、牀中の血が熱くなり胸のときめきが、ますます高まるのでした。

式は長く、スピーチも長く、時計の針は止まったままで動かないんじゃないかしらと思われました。最初は社長さんの挨拶です。

「ええ、今日の佳き日に、こうして、若いお二人の結ばれます式が取り行なわれ、はなむけの言葉を述べさせていただくことは、私のよろこびとするところであります。新郎は、学術、品行、まことに申し分ない、わが社の模範社員でして、新婦もまた、その美しさから、わが社に在社中ミス〇〇県に選ばれて……」

そして、人々の、くすぐったそうな顔つきのスピーチが続きます。

「同僚として、彼は実に良いやつでして、私と一緒に入社して以来……」

「新婦の美那子さんとは、学校時代の仲のよい、お友達でして……」

「彼女がミス〇〇県に選ばれた時、私は心から喜び、是非すばらしい旦那さまを……」

お料理を形ばかりフォークで口もとへ運びましたが、喉を通りません。

(早く終わらないかしら。早く済んで……)

そう思いながら私は、うつ向いたまま、テーブルの正面のケーキを見たり、チラと彼の方に目を向けたり、早くこの場を逃れたくて

なりませんでした。

そのうち、困った事になりました。緊張が続いたため、式前にお手洗に行く余裕がなく式場へ入ってしまったからです。

尿意は、だんだん、つのって来ました。しかし、まだスピーチの途中で、席をはずすわけには行きません。最後は営業部長さんです。ふだんも、お酒を召し上がる方ですが、大分顔が赤くなっています。

「……ええ、かくの如く、わが社の製品は優秀でして、いうならば、このお二人も、わが社の優秀品とも申せましょう(笑)。さきほどから新婦が身につけておられるベビードレスよだれかけは実にソフトで快適な肌ざわりでして、赤チャンにピッタリです。このお二人の愛の結晶たる二世も、きっと、わが社の製品の愛用者になれるに違いありません(笑)」

私は、我慢できなくなりました。それでも必死に生理的要求を抑えました。

「……ええ、新婦の腰を包むおむつカバー。もちろん、これは赤チャンのでなく、新婦の体に合うようわが社において特別サイズで作られたのですが、わが社製品の特徴は一才から二才半ぐらいまで、赤チャンの体に合わせてサイズの調整が自由で便利この上ありません。もちろん、漏らしても肌着や布団を濡らしません。何か先ほどから新婦は、もじも



じしておられるようですが、この二十三才の赤チャンが仮に必要なにせまられましても、これをなさっているかぎり、席を立つ必要はないのであります(笑)。……しかし、濡れたままでは衛生的ではありません。これは冗談ですが、ここで新婦は、お色直しに席を立ちますが、なおベビー服や、おむつカバーを取り替えてもらう際に、きっと、わが社の〇〇ベビーパウダーをタップリ使用なさるに違いない事を申しそえて、私のスピーチを終わります(爆笑)」

やっとスピーチが終わり、私は顔から火が出る思いで、爆笑の中を立ち上がりました。この時、何とか耐えようと唇を噛みしめている私に突然、身ぶるいが襲いかかり、はっと思った時、少し粗相してしまったのです。そしてケーキにナイフを入れるため一歩、前に進んだ時、私の耐える力は限界に達し、身ぶるいととも熱いものが、とめどもなく、ほとばしり、股間が濡れて行きました。そしてそれが前から、お尻にあてがわれているオムツ全体に、ひろがりました。私は羞かしさのあまり、うろたえ、息が止まりそうになりました。……しかし、大丈夫だったのです。腿から少しも漏れず、誰にも気づかれませんでした。しかし、たとえ誰にも気づかれなくても、羞かしく、切なく、濡れたゴムが太腿にまつわりつく、おぞましきから、一刻も早く

解放されたい気持ちでした。

控室へもどると、佐々さんが別のおむつカバーを用意し、オムツをT字形に重ね、ベビーパウダーのふたを取って待っていました。私は取る手ももどかしく、紐を解こうとしたが、あせっているせいか、うまく解けません。牧村さんが、かいがいしく紐を解きホックを、はずしてくれました。

「マア、これ、どうなさったの？ アラアラ本当に出ちゃったのね。でも、ちゃんと用意してあって、よかったわ」

彼女はビックリしたような口調で、また私に、いやおうなく、さっきのような姿勢をとらせ、濡れたオムツを取ってビニール袋へ入れ、新しいのと取り替えてくれました。私は羞恥にもだえながら、奇妙なよろこびを抱きされるがまま、特製の大型ベビー用品をつけられたのでした。こうして、お色直しで、おむつカバー、ベビードレスから、よだれかけまで一切、新しいものに替えさせられ、再び席にもどる時、私は気持ちがやすらぎ、もうすっかり落ち着いて大丈夫でした。堂々と前を向き、むしろ、この姿が晴れがましく、嬉しいような心地でした。

無事、式も披露宴も終わると、出発の時間になりました。私達の新婚旅行第一日は、いきなり海外でなく、ゆっくりくつろぐため、近くの温泉宿に泊まる事になっているのです。

出かける準備のため、今日のウエディング・ベビードレスが畳んで私のスーツ・ケースにしまわれました。今夜のネグリジェに早替りです。もちろん、二枚のおむつカバーも一緒なのです。なぜって、今夜、彼を受け入れる時、お尻の下に敷くのにバスタオルやガーゼより、はるかに安心できるからと牧村さんが叔母に、すすめたからなのです。きっと彼もこのゴムの布の上で私を心から愛撫してくれるのに違いありません。スーツケースには今夜必要なガーゼ、脱脂綿、ちり紙などと一緒に晒木綿のオムツも何組か、しまわれました。こうして挨拶も、そこそこに私達は駅に向かい、皆に見送られて列車に乗りました。私は(二人っきりになったら、何でも好きな事して、思い切り私を愛してネ)

という思いをこめてニッコリ微笑み、やさしく温い彼の胸に、身をもたれかけたのでした。今夜、二人だけしかない白いタイルの温かい浴室で、私は誰にも見られず、くり返し充分、洗滌され、愛する彼の手でおむつカバーをされるのです。そう考えるだけで私の胸は高鳴るのです。私は彼の優しい手で、そっと手を握られながら私達の結婚式の陰の演出者、佐々さんと保健室の牧村さんに心からの感謝をこめて、ありがとうございます、ひそかにつぶやきました。

——(おわり)——



## ☆ Mモデル体験記 ☆

川野香代嬢に責められる

## 被虐夢幻陶醉境

淀

真曾夫



奇ク編集部から電話を貰ったとき、私は先ず夢かと自分の耳を疑った。

Mモデル志願の手紙を出してから、一度、塚本鉄三氏に面接されて、今直ぐにでもお誘いがあるかと思っていたのに、それっきり梨の蔭で、もう自分なんかは、Mのモデルに使用って貰えないのだと半ば諦めていた。

それでも、なんとか使って貰えないものかと懇願の手紙を出したり、塚本氏にもう一度会って呉れるように頼んだりしたのだが、氏も忙しいのか、或は、私のようなM傾向の男性は興味を持たれないのか、返事すら頂けなかった。

それが、奇ク七月号の八編集だよりVで、  
「○第二の春日ルミを目指す美しい川野香代という女性愛読者が名乗りを挙げてくれました。当年二十五才、男性を責めるのが何より大好きというサジスチンで、数年来、本誌を愛読しているそうです。責められたいというM男性を求めます。」という記事を見つけたのだから、私は早速編集部宛、川野香代嬢のモデルにして貰いたいと手紙を書いた。

そして私の熱意がやっと届いて、編集部から電話を貰うことが出来たのだった。

出頭を指定された観光旅館は郊外電車の駅



から近くだったし、詳しく道順を教えられていたので私には直ぐにわかった。

旅館の前に着いたのは指定された午後一時には三十分ばかり早かった。生垣の間から眺めると、よく手入れの行き届いた松の大本が茂っていて、玉砂利を敷きつめた道の向こうには直径二十米ほどの泉水があつて、その中央に噴水が白い水しぶきを上げていた。

その旅館の構えが、余りにも宏壮なので私は入るのをためらって、生垣の周囲をぐるっと一周りしてから再び門のところに戻り、入ろうか、どうしようかと迷った。

入ってゆくなり、洋服を脱がされて後手に縛られた上、サジスチンから思いのままに、いじめられるのではないか——（自分の心の中では、それを強く願っていたのだが）そう思うと恐ろしくなって逃げだしたくなった。胸がドキドキし

て顔がほてり、口の中が、からからに乾いてきた。

その旅館の門の前に立っているのさえ、心もとなく、そら恐ろしく、再び駅の前の方へと自然に足が向いた。

時計を見ると、一時十分前である。指定された時刻に、あと十分しかない。もし遅刻し

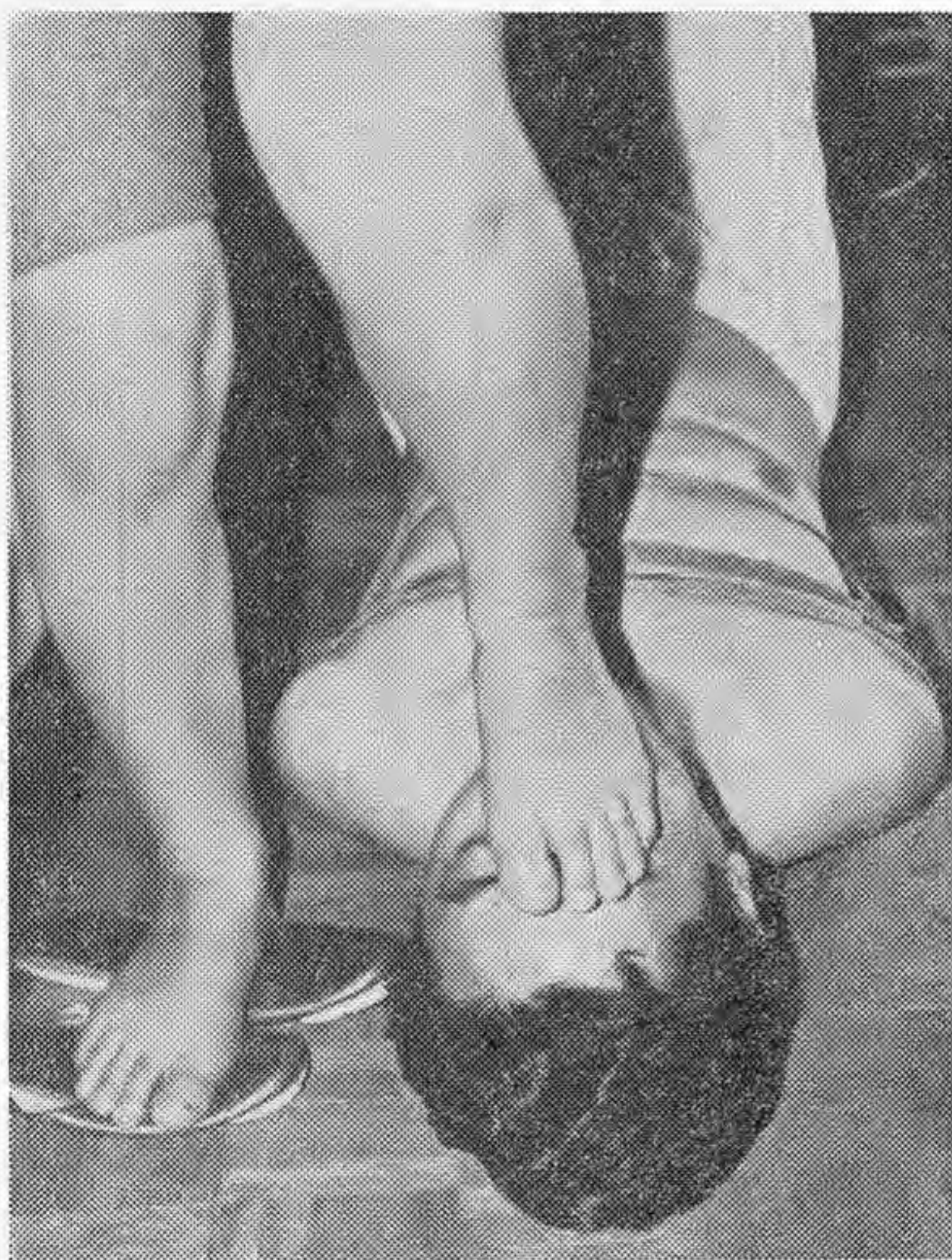
たら、それを理由にひどく責められるのではないか。或はもうMモデルとして使って貰えないのではないかと考えると、私は直ぐ引き返そうか、どうしようかと迷った。

駅前でウロウロして時間をつぶしているうち、一時が過ぎてしまった。私は意を決して駅前の公衆電話から旅館へ電話して、曉出版の方をといつて呼んで貰った。

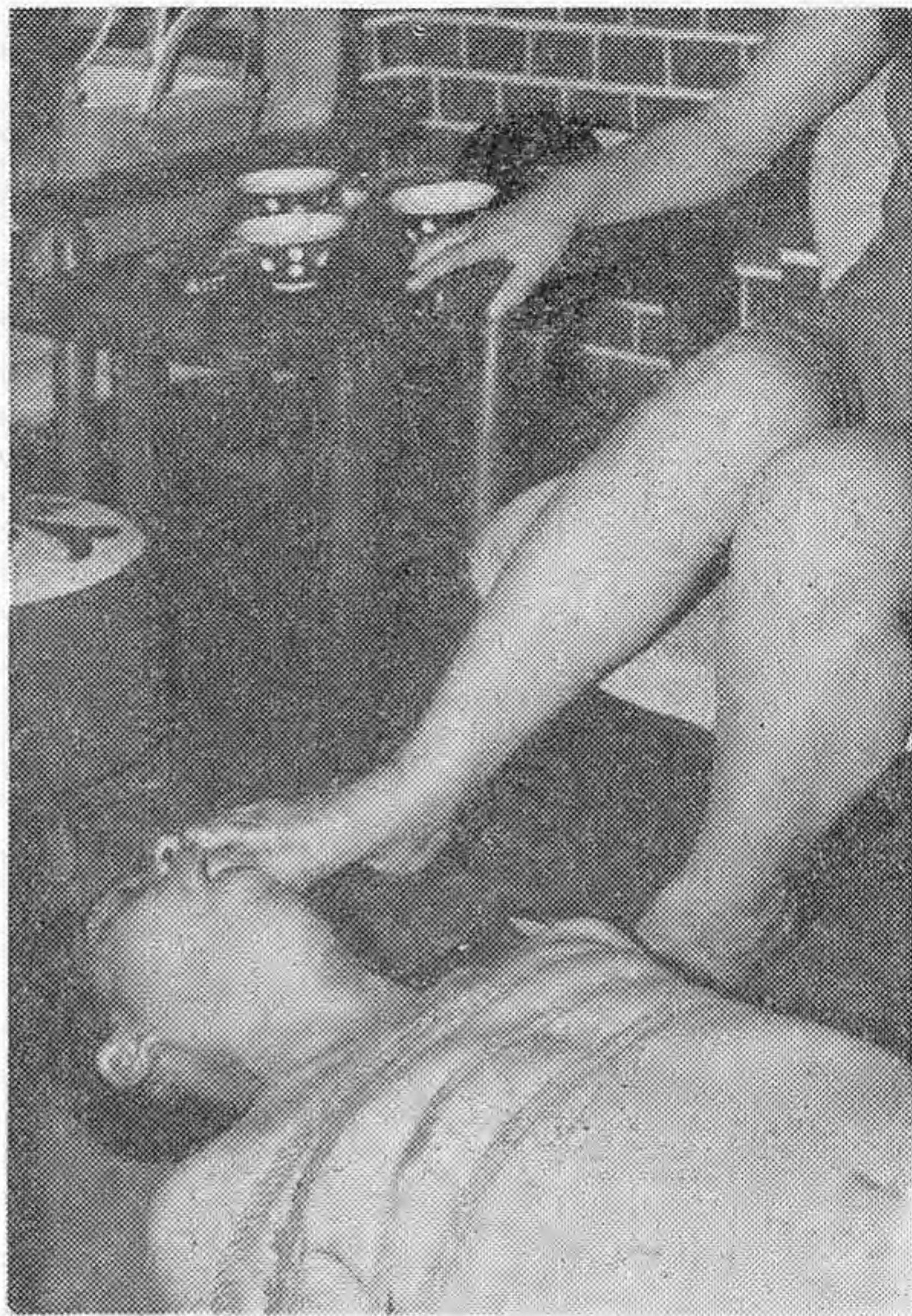
幸い、以前一度会ったところのある塚本氏が電話口に出られたのでホッとした。「なにをしるんだッ。さっきから待ってるんだよ。早く来んかいな」

叱られて私は、あわてて早足で旅館へ向かい、門を入ってから植込みの間を抜け玉砂利を敷いた道を歩いて玄関に着いた。

来意を告げると直ぐ二階へ案内された。庭を目の下に見下ろす事の出来る二階の部屋では、塚本氏が若い一人の女性を前にしてビー







ルをあふっていた。その女性が今日の女主人公である川野香代さんであった。

中肉中背で、きりっとした野性的な体躯の持主で紹介された私にニッコリと会釈されたときの八重歯が可愛らしかった。

お二人は、もう大分前から来ておられたらしく、食卓の上には食べちゃった料理の皿

が幾皿も置かれてあった。浴衣でくつろいだ塚本氏が私に言葉をかけてくれた。

「淀さん、食事は済みましたか。ビール一杯どうですか。プレイの前に、ぐっと一杯は、いいですよ。ああ、そう。それだったら、お風呂へ入ってきたら、どうです。この岩風呂は江戸時代からのものだそうで、中々見事

なもんですよ、遠慮せんと入ってきたら」

私がアルコール類は全然ダメだと言ったら電話で女中を呼んで私を岩風呂へ案内するよう頼んでくれた。塚本氏は、ちっとも待っていたという風ではなく、まるで昨夜から泊まり込みで温泉へ物見遊山に来ているといったのんきさである。コチコチに緊張しきっていた私の固さも大分とけてきた。

女中さんに案内されて階段を下りてから、いくつもの廊下を曲ってから洞門のような入口で自然石を敷きつめた石段を下りると、あたりは急に薄暗くなって、窟のような感じで周囲から水が、したたり落ちている。

地下室の行きどまりが岩風呂で、手前の脱衣場のところで、女中さんは、「ここですから、どうぞ、御ゆっくり」と言って、引き返していった。黒光りする岩にかこまれた浴槽は案外広くて、白濁した湯から発散する湯気には、ぷんと、かすかな硫黄の匂いがした。

風呂から上がって浴衣のまま二階の部屋へ戻ると、ベランダの椅子に腰を下ろしていた塚本氏が私を呼んだので彼の傍に跪く。

「プレイは向こうの洋間を借りているので、あちらでやる予定なんだが彼女がどうも写真撮るのを嫌がってるんで弱ってるんだ。だ



からプレイだけっていうことになるかもしれないが、彼女は何年もSMプレイの経験を持っているベテランだから、淀さん、大分いじめられるかもしれませんよ」

そう言って盛んに煙草をふかしている。私が黙っていると、塚本氏は、

「私は写真撮るだけの役目なんだからプレイのことは一切、経験者の川野香代さんにまかしているんですよ」

そこまで言うってから、急に声を小さくして私の耳に口を当てて、

「彼女はね、お座敷ショー専門でSMプレイをやっていたというんですから、君はきっと凄く責められるかもしれませんよ。私は観戦者の立場でゆっくり見学させて貰いますが、時々カメラを使いますから」

と言ってから、立ち上がって化粧している川野香代嬢のところへ行って、何やら話し合っていたが、二人して、一しきり笑って部屋を出ていってしまった。

一人残された私は手持不沙汰で窓の外の風景を、ぼんやり眺めていた。手招きも何もしてくれなかったから、ここで待っていたらいいのだろうか。それとも、気をきかして二人のあとをついて行った方がよかったのだろうか

か、と迷って立ったり坐ったりして落ち着かなかった。

二十分ほどして、女中さんが「こちらへ来るようにって、呼びです」と案内に来たので、あとをついて階段を下り渡廊下を通過して新しく最近建築されたらしい鉄筋コンクリート建ての方へ行く。モーター式になっていて

一軒一軒、区切られた建物が両側にずらりと十軒ばかり立ち並んでいる。

渡廊下伝いの部屋の扉をノックすると、内側からドアが開いて、私は部屋の中へ引っぱり込まれた。3平方メートルばかりの背脱ぎでスリッパを脱いで板の間へ両膝をつくと、目の前に川野香代女王様が真赤なランジェリーを





つけられて、右手に鞭を持って立っていた。

「そこへ、お坐りッ」

鞭で示された板の間へ私は無言で正座して視線を周囲に、走らせた。板の間の向こうは一段高くなっていて八帖ばかりの畳の部屋になっており、折り畳んだ蒲団の上に、どっかり腰を下ろした塚本氏が腕組みしたまま、私の方を見ているところだった。

女王様の鞭の先が私の浴衣の襟をはねのけ「こんなものは脱いでおしまい」

厳しい口調でそう命じられた。私はあわてて浴衣の紐をとこうとしたが、堅結びになっていたので一寸まごまごした。普通だったらそんなことはないのに、女王様に命じられてみると、早くしなければとあせるから、余計にまごつくのである。

「なにをボヤボヤしてるのッ」

忽ち叱声がとんで、女王様の右手の鞭が私の左頬にとんだ。痛いという感覚は特になかったが、これから自分は川野香代様の思いのままにされるのだというみじめな気持が、ひしひしと身を感じられた。

上半身裸になると、次はステテコとパンツを脱ぐよう命じられたが、それを私が自分の手で取り去るまで、背中や肩をいやというほ



ど女王様の鞭でなぐられた。なんといってもすでに異常に変化を見せている個所をさらけ出すことが、とても羞かしかったので、躊躇していたのであるが、鞭による強制で、無理に脱がされたことには、大いに昂奮した。

一旦全裸になってしまうと、あわれで、はじめなみっともない自分の身体を恥じて、私

はすくんだようになっていた。そんな私は鞭で打たれ足で蹴とばされて、奴隷の誓いを述べさせられた。

最初の興奮状態が一時的におさまってくると、私は更に羞かしさに襲われ、それが更に興奮状態へと、つながっていった。

椅子へ腰を下ろされた川野香代女王様は私





に這ってスリッパをくわえてくる様に命じられた。私が四つ這いになって三人分のスリッパを運び終えると、右足を挙げて私の頭をさすって労をねぎらって貰った。そして、御褒美といって、素足の足指を舐めさせていた。再びそのスリッパを四つ這いのまま口

にくわえて運んで、御褒美にもう一方の足の指を、なめさせていただいた。その辺まではまだ生やさしかったが、女王様が着ているものをかなぐり捨てられて全裸の目もまばゆいばかりの肢体を、私の前に晒されてからは、私はまるで生きた人形のように操られた。

かぐわしい香気を鼻孔いっぱい吸い込んで遅い臀部の重圧を顔面に、ぴったりと受けたときは、窒息して思わず失神しそうになった。息が出来ないというばかりでなく、余りの刺戟の強さに心臓がもたなくなった。

それから、私の望むあらゆる御奉仕を、女王様の神々しいばかりに美しい肉体に対する崇拜行為を続けた。時々、閃光電球のひらめきがしたような気がしたが、もうすでに夢遊状態に陥っている私には、周囲のことは、何も目に映らなかった。

長らく乞い願った夢想しておりながら、今まで果たし得なかったことが今、生れて初めてここに体験することが出来た。なんと甘美で身体をしばれさせることだろう。私は、それからの数十分、縛られたり、鞭打たれたりしたことは、かすかに記憶に残っているが、それ以外のことは何も覚えていない。

折角、体験記を書くようにと言われておりながら、文も字も下手だし、それに原稿用紙に作文することなど、とても不得手で、つまらない報告書になって相済まないと思う。

塚本先生がペンを改めて書いていただければ私としては幸いである。



## 連載・時代 S 小説

## 紫 蘭 の 門

(6)

## 再び豊香の裸身に

もう何がどうなっているのやら、多分、夫の和泉がそばにいすみにいることさえ忘れていたので

股開かせてのち

なお従順ならざる女あらば

拷問にかくるを至当となす

## 風 流 極 道 軒

はななかりうかと思われる  
くらいの狂乱状態に陥っ  
ている豊香であった。

右手と右足首、左手と



抜いてしまった裸身に、さらに種彦が四つ這いになって襲いかかり、四半刻ほども、淫らな律動を繰り返しサアッと、離れる。

「離れ業ですなあ、種彦先生」

畳にとび散った白い××のものを眺めて鳥尾芳年がニタツニタツと笑った。

この浮世絵師は、自分を振って、他の男に嫁いでいった女を責める快感に酔い痴れていた。しかも、夫がそこにいる。糞虫のように



縛りあげられ、猿轡をかまされて転がりながら、自分の妻が、三人の男に、姦され弄ばれているのを、眼をはり裂けるように開いて眺めているのである。

「今度は、三人がかりで行きましょう」

芳年は、和泉をからかうように云うと、

「儂が下。上はどうなさる」

「あっしが、受け持ちましょう」

種彦はさっそく豊香の鬚もたばも崩れてしまった丸髷に手をやって、ほてっているその頬に、顎をすり寄せていく。

「フッフッフ、そんなら儂は、乳房か」

前号梗概Ⅱ「豊太閤五夜のロザリオ」

をめぐって元禄屋たちの嗜虐の責めを受ける女たち。菊亭貴子——前右大臣菊亭政房の息女、七尺近い垂髪と黒漆のような腋毛、白綸子の湯文字に白蘭の肌をつつむ。久我雅子——三十歳、琥珀の肌に紫色の長襦袢がよく似合い、沈丁花の香りを馥郁と漂わせる。春田豊香——妖艶な薔薇を思わせる人妻、羅卒の鞭兵衛たちに夫の前で拷問され、苦悶する姿態を絵師に描かれる。千登世——豊香の養女十七歳、日本橋小町。小紫のお景——怪盗徳夜叉の情婦、こまたのきれあがった鉄火姐御、右太腿のつけねに黒子がひとつ、絶品の壺を持つと云われる。

利倉屋は、大きな熊のような掌で、がっきりと、凝脂のこぼれるような乳房を掴む。

「では」

芳年が、再び童文の単の前をさばいて、男の××を掴みだすと、

「どうですか、春田さん。自分の女房が眼の前で犯される気分は。フッフッフ」

二尺も離れていない所で疊に頬をすりつけている和泉の鼻先へ、一度××されて豊香の匂いの移っている××××をつきつける。

（ウ……ウウウ……）何を叫んでいるのか、

額に幾筋も血管をあかくうきあがらせて、和泉は、少しでも近より、せめて体当たりでもしたいのであろう、一寸刻みに這ってくる。

「おやめなせえよ。悪あがきは」

利倉屋が、その足を持って、ずるずると壁の方に、ひきもどす。

「ざまあねえなあ！ 春田。手前の恋女房だぜ、この女！」

横目で、憤怒に悶える和泉をニタリニタリと眺める芳年であった。

一方、肉のみちた肩のそばで種彦は、

「御内儀さん。嘔むと承知しないぜ。ほんとに許さねえぜ。もし、そんなことでもしやがったら、あんたのは、くりぬくし、亭主のも

のは根元から、たたききるぜ」

念を押しながらも、万一のことを考えたのであろう、部屋中に散らばっている元禄屋重右衛門の珍蔵品のなかから、径一寸、長さ七八寸、先の方に穴のあいた、皮袋をとりあげると、××にずるずると、かぶせていく。

「いいか、豊香。嘔むんじゃあねえぜ」

もう一度、念を押して、豊香の首のあたりに尻をおろし、××を、ガボッと、朱い唇のなかに押し込んだのである。

「ウウッ！ ウ……ウ、ウ……」

激しくせき込みながら、口を精一杯、開いた豊香は、強烈な種彦の男の臭気のなかで、ぴんぴんと全身を海老のように跳ねさせた。

下では芳年が、次第に早く……上下左右に振り、乳房は、利倉屋の掌のなかで、揉み擦られていく。しかも利倉屋の片方の手は、時々内股にのびて、芳年の××が入っている×××の上部の××した×××を、持っている鳥の羽で、撫でる、さする、摘みあげる。

「あ、あッ！ あ、ああ……あう！」

嘔り哭きが次第に激しくなり、

（あッ）から（ああおっ！）と云う、こみあげるような嗚咽に変わり、やがて、それが、「ああおお！ あ、あなたあ！ や、やめて



死、死ぬう！ 妾、もう、ダメ！ ダメよお！ あ、あなた！ おおう！ あおッ」

慎しみ深い女のものとは思われない、まるで、けだものの呻きにも似た声をあげた豊香は、自分から腰を振り乳房をふるわせ、中身のある皮袋が、朱い唇のなかでガボッガボッと音をたてるのにつれて、それを柔らかに噛み、のし……っている男の肉体を抱こうとするかのように、足首とひとつにして縛られている手首の縄を、必死で、ほどこうとする。「フッフッ、抱きてえかい。手足を縛られていたんじゃあ、思うような態位がとれねえ。それが、またよいものよ。無理に、やられる所に、まことの味がでてくるものさな」

汗と唾液と男の××とで、ねばねばしている乳房を飽きることもなく揉みながら利倉屋が嘲う。その呼吸が、豊香の頸から肩先にまたがっている種彦の尻にかかり、すこしななめになってのしかかっている芳年の顔に触れる。豊香の白く匂うような胴体に、三人の男が、皮を剥がれた白兔にむらがる野良犬のように貪りついているのであった。

「あおッ！ ひ、ひい！ きい！……」

内臓の奥からしぼりだされるような嗚咽は（おおう！）から、さらに（きいっ！）と変

化し、豊香は、自由にならない腕に精一杯の力をこめ、十本の指を握りしめて、襲ってくる悦楽の嵐とたたかう。そしてその悦楽は、たたかえばたたかうほど、強さを増し烈しさを募らせ、狭い穴を潜り抜ける颶風の激越さで柔らかい肉体を、いやが上にも祇弄しつづけるのであった。

「まだか！ これでもか！ これでも、まだ満足しねえのか」

芳年は、十数年間の恨みつらみを晴らすように、豊香の上で叫び、あいている左右の手を、自分の××のまわりに回すと、ぬるぬるとする豊香の×××との……を、あるときは柔らかく、あるときは爪をたてて……。

「きいっ……ひいっ！ ひい……」

もう滅茶苦茶に「M」字形の肢体をのびちぢみさせていた豊香が、思わず、齒並みを合わせたらしく、

「い、いてえじゃあ、ねえか、この野郎」

種彦が思わず跳びあがった。途端、××出された皮袋の先端の小さな孔から、白いねばっこい××が、×××で、豊香の鼻から、唇のあたりに……され、

「ウッ、ウウッ！」

まるで、強烈な鞭打ちでも受けたように豊

香の上体が、二度、三度と跳ねあがり、そのたびに利倉屋の巨大な××に、かえって、ふかぶかと一層深く……しにされて、

「あ……フフ……あ、わわわわ……ひいっ！ ひいっ！」

と二声、絶叫を部屋中にひびかせたかと思うと、ばたーんと、背中を畳におとした。

あとは、もう、口を大きく喘がせ、その端から、涎とも、××ともつかない液体を垂らし、乳房から下腹にかけて、大きく蠕動させるだけであった。

「おい、豊香、どうしたい。満足したのかいどうした、おい」

と利倉屋が、女の慎しみも羞恥も忘れて、左右に大きく開かれたままの両膝の間、濡れそぼった黒々とした×××をわけて、××の部分に、百足むかでのように指を這わせても、反応らしい反応は、かえってこなかった。

「フッフッフ……ざまあみやがれ！ 結構、楽しみやがったじゃあねえか」

鳥尾芳年が、徳利から酒を口のみすると溜飲をさげたように、足の指先で、豊香の×××を、もてあそぶように揉むと、

「フウウ……いい、気持ち……」

すっかり出してしまった種彦は、大きく両



手をあげて背伸びすると、これまた盃を唇に運ぶのであった。一方、利倉屋は、例の（妾たち夫婦をどのようにお責めになりましたしょうとも異存はありません）と記された書面を持つと、

「豊香さん。さあ、署名して貰いますぜ」

と、ぐったりとなつてゐる豊香を抱きおこし、右足のそばに置き、筆を、無理に握らせると、自分の手を副えて、

春田和泉 妻豊香 三十五才

と、署名させ、

「次は、旦那様だ。大人しくするこつた」

ニヤツと笑つて、がんじがらめの和泉を抱きおこすのであった。

和泉には、もう反抗する気力が残つてはいないようであつた。妻を救おうとして反対に捕えられてからというものの、悶えつづけ激昂し憎悪し、どうにもならない地獄の苦しみをうけつづけた、挙句の果てが今、眼前で展開された妻の豊香の無惨な情景——。まるで痴呆のように、筆を持たされ、自分の名を、豊香のそばに書き込むのであった。

「これでよし」

書面を覗きこんで三人の男たちは互いに笑い合う。とりわけ和泉の肩を軽くたたきなが

ら芳年は、

「春田さん。あんたの代りにこの豊香をせい一杯、可愛がつてさしあげますぜ。なあにあなただって、自分の女房の素っ裸を毎日、眺めるんだ。結構、楽しいことでしょうよ」

もう一度、高らかに笑い、足もとに横たわつてゐる咲き匂う薔薇の花のような豊香の裸身を、足蹴にして、くるり、くるりと回転させていくのであった。

同じその夜——、

この離れからものの一町もはなれていない土蔵群のひとつでは、豊香の養女千登世が、奇妙な責苦に喘いでいた。

## 昭吉とともに

両親の持つてゐる豊太閣丁夜のロザリオを手に入れる異として、捕えられた千登世は、かねて思いを寄せていた元禄屋の番頭昭吉和吉のために、処女の身を一糸まとわぬ素裸に剥がれた上に、穴沢流辱縛というおぞましい縄をうけて散々に罵られた末、土蔵の二階に閉じこめられていたのであるが、その夜、

「今晚は、ご機嫌いかが」

急な梯子段から頭をのぞかせた昭吉たちの

闖入に、ハツとして身をかがめた。

身をかがめると云つても、両手を別々に壁の吊輪につながれた軀。僅かに自由の残された両膝を必死ですり合わせ、上体をかがめて乳房をかくすほどのことしかできなかったが——そんな千登世の動作が、一層、ういいういしく眼にうつるのであるう、昭吉は、

「貴女のとつても好きな男を連れてきてあげたのよ。お礼を云つて貰わなくっちゃあ」

ガチャリと錠を外して入ってきた男たちを見上げる勇氣もなく項垂れてゐる千登世を、ジロジロ見降ろして、

「フッフッフ。今夜は私がお相手してあげようというのよ。このお方の前でさ」

崩れかけた結綿の髪をつかみあげると、

「よおく御覧なさいな。この方なのよ」

髪の付根の痛みに、顔を思わずあげた千登世が、その人物を、父・和泉の高弟であり自分の恋しい人である新五郎とわかるまでには裸蠟燭の焰が、二回、三回、またたく時が必要であつた。

「あつ、あつ……あ……」

つぶらな瞳を、せいっぱい開いたまま絶句した千登世は、瞬息ののち、

「きゃあああッ！」



咽喉が裂けたかと思うほどの絶叫をあげ、左右に開かれた両腕を力いっぱい振りしぼり、まるで、瘡<sup>おこり</sup>でもおこったように全身を疼<sup>いた</sup>牽<sup>ひ</sup>させた。

「そ、そんなに、騒いじゃ駄目よ」

当の昭吉が、心配そうに覗き込むほどの凄まじい千登世の狂乱であった。

一方、新五郎は――

これも同じく渾身の力を振りしぼって、緊縛された縄目や猿轡<sup>さるわ</sup>をはずそうというのであろう。縄尻<sup>しり</sup>を持つ黒馬を跳ねとばし、昭吉に体当たりを喰<sup>く</sup>わせ、もう一人の武士に、全身を鉄砲玉のようにして突っ込んでいった。

「馬鹿な真似を！」

その武士――北町奉行所与力工頭監物は、軽く体を開いて、それをかわし、たたらを踏む新五郎の背を、思う存分、蹴りつける。

猿轡の下から、声はあがらなかった。

代りに、ドサッと、鈍い音がして、新五郎の身体が、床に倒れ、その上に、四十貫の巨体をおしかぶせていったのは白豚――。

そのあとの新五郎の我武者羅な抵抗は何の役にもたらず、二寸角の赤松材の格子に、縄尻をとめられ、首を絡<sup>く</sup>りつけられ、両足を何カ所も縛り付けられてしまったのである。

「バ、バカな男ですこと！ この男！」

痛烈な体当たりを受けて、ひっくり返った昭吉は、裾のあたりを、はたきながらたち上がると憎々しげに唾を新五郎の顔に吐きかけ、

「いいこと！ 千登世さん。あたしが折角あなたのお相手をしてさしあげようと、ここにやってきたのに何よ、この男！ 殺すわ！ 殺してやる！ 私の千登世を奪った憎い男！ 白豚さん、貸してよう！」

と、白豚の脇差を勝手に抜きとり、きいっと、斜め上段に構えて、サアーツと切尖を新五郎の胸に擬すと、そのまま、ツ、ツウと、突き刺そうとする！ その刹那――

「きゃあっ！ や、やめてえ！」

絶叫が、千登世の唇から進んだ。

「やめて、やめて！ やめてえ！ お願い」外まで洩れるかと思われる悲鳴であった。

「や、や、やめて。新、新五郎さんを、殺、殺さないで、お願い！ お願いです！」

つながれた吊輪もきれよとばかり腕を悶えさせる千登世の姿は、哀れにも美しかった。

「待ちなよ、昭吉。女囚が、こうまで訴えておるわ。考えてやるべきじゃあないのか」

工頭が冷ややかに笑いながら云った。

「昭吉。何もその男、殺すまでのことはない

ぞ。第一、殺してしまったら、楽しみも薄らぐ。ここはひとつ、この女囚の願いごとをきいてやろうじゃあないか」

「だが、監物さま。この男、このままでは気がすみませぬ」

「まあ、まあ。その怒りはそこまで。お前、ここへ、千登世とかいうこの女囚の相手をつとめにきたのではなかったのかな。それに早くしないと、ぼつぼつ、肥田さまたちが、お見えになるぞ。その前にな、フッフッフ」

と手ずから一升徳利の酒を大盃に注いですめられた昭吉は、女に見まがうほどの色白の顔に、蒼白い翳<sup>かげ</sup>をうかべたまま、片手でうけとり、ぐいっと、ひといきに呑み干した。

「さ、機嫌を直して。早う、裸になつて、この女といっしょに縛られてみい」

工頭はニタツと笑って奇妙なことを、いい出したのである。

「は、はい……」

やっと怒りをしずめたらしく昭吉は、片手で唇を拭くと、

「白豚さん。黒馬さん……」

ぞっとするような声音<sup>こゑ</sup>を出して、

「私……これから、この千登世の相方<sup>あいかた</sup>をつとめまするによって、どうか、よろしく」



三つ指をつく所作までが堂に入った女形である。そのあと、齒の根をガチガチ鳴らせている千登世の右側にぴったりと寄り添って、「千登世。お前がひとりで裸にされているのを私は、もう、黙って見てはおれませなんだゆえ、御主人さまにお許しを願って、ともどもに責められることに」

と云う間も、しなやかな指は、むきだしのおおきな、どこか初々しさの漂っている乳房を、下からまさぐり、みのったばかりの桜桃の实のような桃色の乳首を摘みあげる。

「ヒイッ！ イッ、イッ、イヤアッ！」

「また、そのようなことを！ じゃあ、あの男を殺してもよいのかえ」

昭吉の言葉に合わせて白豚が新五郎の胸元に脇差をつきつける。

「イヤ！ イヤ！ やめてえ！」

「どっちにするんでえ！ ほんとに！ ぶっ殺すぜ！」

昭吉は、遂に業をにやして男言葉で叫ぶ。

「これだから、男知らずの女はあつかいにくくてかなわねえや！ 全く。もう、こうなったら……」

昭吉は、チラッと監物を仰ぎみて、

「工頭様。こうなったら、ここへ、こいつの

お袋を呼び出そうじゃありませんか。なあに、私は、この生っちょろい阿魔よりも、触れなばおちんという豊香の方にひかれているくらいのものでして」

「フッフッフ……面白い。この娘は、それでどうする」

「たっぷりと見物させてやりまさあな、隣の部屋から。ギヤマンの窓がまさあ」

「よからう」

工頭の一声で、黒馬が、豊香の責められている離れへと走り、白豚が、千登世を吊輪から外すと、高手小手に縄をかけて、牢格子のそとへ連れ出していった。

「この男は、このままにしときゃあしよう。」

男ですから、結構、楽しむことでしょうて」新五郎も連れだそうとする白豚に、昭吉はこともなげに云い、

「よく、見てなよ。お前の女房になる女のお袋が、どんなあられもねえ姿を見せるか」

工頭、昭吉、白豚の三人が、ものの、二、

三回、盃をやりとりしたとき――、

意気揚々とした種彦を先頭に、利倉屋、芳年、そして、豊香と、その縄尻を持った黒馬が、急な梯子段から姿を現わしたのである。

「これは、これは、工頭様。丁度、よいとき

に、お招きにあずかりまして」

かねての顔見知り、あらたまった挨拶をすることもなく男たちは床几に坐ったのだが、「ウウウウ……」

牢格子に磔られている新五郎は猿轡の下で唸る。今、男たちに囲まれて、荒筵の上に正座したのは、外ならぬ奥様！ 自分が櫛師になるために修業している、春田和泉の御内儀――しかも、恋人である千登世の母なのだ。

奇妙な呻きに気づいたのか、項垂れていた豊香が、ふと顔をあげたが、その途端！

「新、新五郎さん！ 新五郎さんでは！」

絶え入るような叫びをあげた。

「ど、どうしてこ、こんな所に！」

夫、和泉の前で罵られつくされた豊香のまえに、また、ひとり、羞恥をかきたてられる若者が現われたのである。

豊香にとって新五郎は、夫の内弟子であり上横町三丁目の家で、いっしょに暮している

間柄なのだ。しかも、千登世と二世を契り合

い、それを認めていた律儀で仕事熱心な若者であった。

「あ、あああ……」

豊香は、自分の周囲にたちはだかっている男たちに、憎んでも憎んでもあきたりぬ憎悪



を感じる。が、しかし……つい、今までその男たちの手で責めつづけられ、女の本能をあのままに曝け出された身。

(女って……どうして、こんな！)

「どうして、こんな、このような！」

胸のうちが、言葉になってついとびだす。

女の哀しさ——豊香のむっちりした乳房にも、波立っている下腹にも、いや、口のなかにまで、種彦や利倉屋の体臭がしみ込んでいるのである。

「豊香。約束したとおり……やって見な」

その利倉屋が、あかくそまった頬をついて、ニヤツと笑い、

「お前さんの相手を、昭吉さんがつとめてくれるとさ」

すると、昭吉が、豊香の正面に坐り、

「御内儀さん。私のお相手でよいかしら」

と云いながら、小倉の帯を解き始める。

「私、御内儀さんと二人で縛られることになっちゃったのよ。このお方」

と監物を指さして、

「与力の工頭様。どうしても私に相方あいかたになれと仰言るのよ。ことわりきれなくって」

結城織の着物を脱ぎ、黒七子の半襟のついた浅黄の下着をとり、単襦袢も捨てて、越中

褌ひとつになる。蒼白い肌であったが、さすがに男。肩も腕もいかつく、胸毛は多くはなかったが、太腿から脛にかけての毛が深い。「思ったより、毛深いじゃあないか、昭吉さん。さあ、腕を後に回しな」

白繩をかまえる白豚に、

「いやよ、私、ひとりじゃ。豊香おばさまもいっしょ。いっしょに、同じように縛りあげられるのでなくっちゃあ」

「フッフッフ……よかろう」

種彦が、繩を解いたが豊香は、逃げ出そうとはしなかった。

(逃げてでも駄目！ 私は、もう、駄目。駄目な女になってしまったのよう！)

心のなかで悲痛な叫びをあげつづける豊香であった。

そんな豊香の背後で、バシツと繩のしごかれる不気味な音がして、黒馬が、

「穴沢流恥極……いい繩ですぜ御内儀」  
なぶるように黒繩で肩口をたたいた。

「さあ、昭吉さんの真似をしなせえ」

白豚が、ものの一尺もはなれていない所で大きく胡座をくんだ昭吉を、さし示す。

「お二人さんを同時に同じ形で縛る。早く真似て、さあ」

黒馬に、きっちり合せている太腿をピシヤリと打たれた豊香は、凄艶な眸をあげた。と、息がかかるほど近くに居る昭吉の眼と、もろに合って、思わず、俯向うつむいてしまう豊香であった。

「おばさま。さあ、ほれ、このように……」

胡座した昭吉は『×』形に組んだ両足を少しずつゆるめて、両足の裏をべったりつけると下肢で『◇』(菱)形を描いて見せる。男にとっては何でもない姿であったが、女にしてみれば、死ぬほど恥かしい姿態であり、云うままになろうと諦めている豊香の決心を鈍らせる。

「早くしねえか、豊香！」

見かねたように芳年と種彦が、左右の太腿を抱え込み、無理矢理、開かせようとする。

「アッ、アアッ……」

後に倒れかかるのを黒馬が支える。

「いや！ 妾が、ひとりですますたら」

豊香は、激しく下肢で、二人の男を振りどばすと、ためらいながら脚をずらせた。

「足の裏をこうして、合わせるのよ」

「……」

もう無我夢中で豊香は、腰をゆすると、両膝を開き、命じられた態位をとろうとする。



「はれ、さ。もう、ひといき！」

懸声をかけた芳年が、結局は豊香の両足首をもって足の裏と裏をべったりと合わせる。

「その調子よ、おばさま」

昭吉の眼前、二尺のところに、豊満な下腹が激しく波立ち、くろぐろとした×××の毛が、曝け出されている。

「この匂い……おばさま。さあては、男の方と遊んでらったのね。留め伽羅の香りにまじって男の××の匂いがしてよ」

云いながら、昭吉は、両腕を背後に回し、

「どうぞ、お縄をおかけ下さいませ」

と首うなだれて見せるのであった。

「同じようにしねえか」

再び、バサツと云う縄で、床を打つ音がした。(どうしても、どうしても、やらなくっちゃあ、だめなのかしら)——豊香の視野のなかで利倉屋が、新五郎の咽喉もとにヒ首をつきつけ、ニヤニヤしているのが見えた。殺すぞというのであろう。彼等の常套手段であり、それが、どこまで真剣なのかはわからなかったが、新五郎の恐怖に脅える眼に、千登世の顔を思いうかべた豊香は、(仕方ないのだわ)と白い腕を背後に回すと、項垂れて、

「どうか、お、お縄をおかけ下さいませ」

と、震える声でいった。

上眼づかいに、それをみて北叟笑む昭吉の両手首に白縄が三巻き、

「もっと、つよく。もっと二の腕や胸にまできびしくおかけ頂きとう存じます」

白縄は、言葉どおり右の腕から前面に回り左へもどって、さらに五回、がっちり昭吉の上半身を緊縛する。女を縛ったことは何度もあるが、自分が縛られるのは昭吉にとって初めての経験であった。(男が縛られるなどいやなこった)と思っていたのであるが工頭監物の要求によって、いま、縛られてみて、別にさしたる嫌悪感は無かった。むしろ、きびしい縄目に、ある種の心地よささえ感じられる。眼前で豊香が、チラッと眸をあげて、

「どうか、もっと、厳しく前の方にも回して縛りあげて下さいませ」

と、潤んだ声で云い、その二の腕に黒縄が喰いこみ、ブルンと揺れていた乳房の上下が緊縛されて思わず豊香が、(アアッ)と顔を仰向けてのけぞったとき、その雪のように白い咽喉もとに、昭吉は、たまらない衝動を感じたのであった。

白縄が、首にかけられ、分厚い胸を走る二条の横縄におおされ、胴にかけられ、左右の

脇腹を二重に縛りあげる。

同じように、豊香も、縛られている。

昭吉の両足首がひとつにくくりつけられ、豊香の両足首もひとつにされて、もう、その縄が解かれない限り、女のもっとも恥かしい秘処を、誰に、どのようにされようが、抵抗ひとつできない、ただ、罵られるまま。そんな姿でしっかりと眼を閉ざして恥辱に耐えている豊香の姿態、ほんのりと伝わってくる肌の温かみに、昭吉の白い越中褌の一部が、みるみるうちに突……。

「おばさま、さあ、仰言るのよ。私と同じことを……」

昭吉は、興奮気味に、

「私はこのように、されまして、もう身動きひとつできません。この私の……」

ながい台詞であった。聞き終わった豊香は、やっとの思いで昭吉を見上げ、イヤイヤと首を横に振って見せたが、やがて、抗しかねて真赤な顔で、

「妾はこのようにされまして、もう身動きひとつできません。この妾をどうか思う存分にお罵りあそばして下さいませ。この胸も、この下腹も、太腿も、みんなみんな皆様方のものでございます。妾は皆様方の囚人、何をさ



れましても苦情を申しあげることとはできません。どうか、さあ、早く、存分に、なさって下さいますよう……」

(アッ、アアウ……)——云い終わったものの豊香は口の中が灼けつく様な思ひである。しかも、もう、一言、残っている。どうしても口にだせない言葉が！

「イヤ！ イヤ！ それだけはイヤ！」

「いやかい、そうかい。あと一言だと云うのに。この若い男も可哀そうになあ」

利倉屋の匕首が新五郎の咽喉元で光る。

「アアアッ……」

豊香は、激しく身悶えていたが、遂に、

「どなたさまか、わ、わたくしの、アッ

アアッ……やはり、云えないわ。妾、どうしても駄目！ 駄目だったら、昭吉さん！」

それは女として到底、口にだせる言葉ではなかった。

「ここだよ！ ここ、ここを何と云う！」

固唾かたづをのんで見守っていた監物が、手助けでもするように床几から立ち上がり、猿臂をむんずと伸ばして、豊香の×××のなかへ、大きな拳を突き入れた！

「キャアッ！」

この世のものとも思われない絶叫をあげて

豊香の全身が痙攣する。

「クッククック……まだ入らねえか、これでもか！」

昭吉を押しつけて真正面にかがみこんだ監物は、右の拳だけで強引に……する。

「ウッ……ウ……ウ……ン！」

ズブツと鈍い音がした。

「ここはな、×××と云うのだ。云ってみなその口で、その顔で云ってみな！」

余った左手で、豊香の肩と云わず乳房と云わず驚づかみに掴み、揉みあげながら監物が酒臭い呼吸を吐きかける。

「ウッ！ ウ……」

「×××と云うのだ！ 云え！ 早く！」

黒髪を乱し、玉のような汗をうかべながら豊香は、甘く、熱い呼吸をくり返していたがまるで、灼熱した鉛塊をのみ込むように唾をのみこんだあと、

「妾の、妾の……妾の×××を、どうか、存

分に、よ、よく、御覧になって下さいませ」

途端、豊香の×××のなかで、監物が、大きく、掌を、拡げた。

「キャアッ……」

再び、三度び、咆吼にも似た凄まじい絶叫が、豊香の乾ききった唇から迸った。

所詮、豊香も女、男の力の前に、屈伏するほかはなかったのである。

ズボツと鈍い音がして、右の拳を抜き出した監物は、しとどに濡れたその拳を、裸蠟燭おなこにてらすと、

「大きな女子おなこよ。並みの男じゃ、つとまらねえぜ、昭吉！」

ニタツと笑うと、昭吉の褌を取るように白豚に命じた。

女ほどではないが、やはり最後の布をとられるときの気持は、肌寒いものがあるのであろう。昭吉の顔に、始めて、お芝居でない羞恥のかげがチラリッと浮かんで消える。

あらわになったそれは華奢な平常の物腰からは到底想像もできないほど巨大であった。

「豊香、もう一度云ってみい！ 昭吉の云うとおりにな」

昭吉は、巨大な×××を……させながら、

「私は、囚人。どうか皆様方で縛って弄びなぶってくださいましな。さあ、次は、おぼさまの番よ。仰言……」

うっすらと眸を開いた瞬間、まるで、奔馬のそれのような×××がうつって、一瞬、何かしら……と、焼饅をあてられるような羞恥のなかで、眉をひそめた豊香であったが、それ



が、昭吉のものとわかれると、（フウ——ッ）  
と肉のみちた白い肩を掻き立て、ゴクン、  
ゴクンと、二度、唾をのみ下したあと、

「……妾の……妾の×××を、な、な、騷り  
ながらお縛りくださいませ！」

乳房のあたりまで真赤に染めて、もう、な



イメージギャラリー

『絢爛たる騷り』

岡

たかし

かばやけのように云いすてるのである。  
「よかろうぜ、白豚。ここから、縛法が男と  
女で異なってくるぜ」

「わかってる、わかってる」

白豚が、細引き状の紐を、黒馬は、より細  
いたこ糸のようなものを取り出し、白豚は、  
昭吉の右側で、黒馬は豊香の左脇から、それ  
ぞれ互いに縛られているのが見えるようにし  
て縛っていく。

もう床几に坐っている者は誰もなかった。

たちあがり、腰をかがめ、或は、四つ這い  
になって肘をついたりしながら、×××と××  
を、縛っていく二人の手付きを眼を皿のよう  
にして眺めている。

勿論、棒を縛る方が、紫や桜色の糸ごんに  
やくか、蛤の肉のような×××を縛るよりも  
容易であろう。

「できたぜ」

起ち上がった白豚の眼の下で昭吉の××は  
まるで、十数人の捕り方に、投縄をかけられ  
た男のように屹立していた。

「こっちも、どうやら。まあこの位か」

と、黒馬が、指さした×××は、丁度、少  
しばかり開かれた信玄袋の口のように、周囲  
を強靱な糸で、くくられていた。ただ、上部



のくろぐろとした×のなかの桜色の××に、三巻きされた金色の糸が、ながくのびているのが、異なっていた。その糸の一端を監物に渡した黒馬は、

「年増女の×××の匂いは、まったく男心を、とかすものじゃて」

と、両手の指を裸蠟燭にかざしてみて一本一本、分厚い唇で舐めている。

「フッフッ……穴沢流に恥極と云う緊縛作法があるとは……秘伝書にあるのか、それとも創始したのかな」

黒馬と白豚は顔を見合わせてニタリツと笑ったが、別にそれ以上、応えようとはしなかった。

穴沢流捕縛術——穴沢流薙刀の達人穴沢主殿助盛秀を開祖とする。盛秀は豊臣秀頼に仕え大阪夏の陣で戦死したが、一子ありて同姓刑馬といい駿河信濃の国境赤石岳で修練した後、明暦・万治の頃、尾張義直に仕えたとう。

「いずれにしても穴沢流とは、穴の沢……まったく云い得て妙。女体を縛るに最適とみたぞ」

監物は、手渡された金色の糸を、右手の人さし指で、もてあそびながら、その糸の伸び

縮みにつれて、苦痛とも法悦とも云える表情をうかべる豊香の顔を、満悦したように、眼を細めて眺めこむのであった。

「工頭様。もう少し責めてみたいと存じますが……」

白豚の求めに、軽く頷く監物。

「昭吉、いいな」

念を押されて昭吉は、

「はい。どのようにでもなされて」

「豊香は！」

「……ど、どのようにでも……」

「あとは！ はっきり云え！」

「は、はい。ど、どのようにでも、なされて下さいませ。アッ」

と跳び上がったのは、監物が糸を強く引っぱった、せいであつた。

「たちませえ！」

白豚が、芝居がかつて云ったが、とても起き上がる態位ではなかった。

「厄介なことよ」

利倉屋が、天井からおりた滑車の綱に、豊香の後手首の縄を結びつけ、種彦が、滑車をひっぱる。

ギ、ギ、ギッ……と不気味な音と共に豊香は、両腕が折れそうな激痛に襲われた。

「おっと、いけねえ。折角、お楽しみのところを、中断しちゃあ」

床几を持ち出した芳年は、ふっくらした尻を抱きかかえるようにして腰かけさせた。

足裏を合わせて縛った縄がゆるみはしたが両脚は、やはり『〇』形に開かれたまま。そのなかに、同じように中腰にされた昭吉の右

膝が、奥深くまで割り込んで、その胸毛が、豊香の頬をこすり始める。

むうとする男の体臭を豊香の鼻孔が、いやおうなく吸い込む。その巨大な××は、豊香のかたちのよい、やや上向きの脛のあたりに

触れて、その透明な××は、白絹のような肌を、うっすらと濡らし犯しはじめるのであつた。

「唇を吸いな、そのままで！」

利倉屋の言葉に、昭吉は、後手に縛られた大股開きの姿で、顔を近づけ、豊香の額から頬、鼻のあたりを舐め、上気して乾ききった朱い唇を、存分に吸いつけ、吸いあげる。

「あ、ああっ……」

×××を、監物のあやつる糸で刺戟され、唇を吸われる裸身は、やがて、濃艶な女の香りを、腋の下から、項から、膝から、胫からそのほか産毛の一本一本から発散させ、見守



る男たちを鉄片を吸いつける白色の磁石のよ  
うに誘いよせていくのであった。

「次は、立ってみな。昭吉」

白豚と黒馬が、二人の足首の縄を解くと滑  
車が、再び軋む。

ものの一尺の距離をおいただけで、向かい  
あって立ち縛りにされた二人のまわりから、

「昭吉、××たいか」

監物が、からかうように云った。

「勿論ですとも、与力の旦那。私が男だと云  
うことはこれ、このとおり」

十数本の細紐で、付根を縛られた××の×  
×を見下ろす昭吉に、

「手伝ってやれ！」

監物は、楽しそうに云い放つ。

「面白え……」

利倉屋と種彦が左右から豊香の太股をかか  
え込み、白い餅肌の尻を、もち上げるように  
して、腰をおとして待ちうける昭吉の××に  
……。

現在なら、さしずめ、「ドッキング成功」  
とでも叫ぶ所であろう。

もう、一刻にわたり責められて、官能の炎  
が十分に燃え、ぬるぬる……としている豊香  
の……。

「どうでえ。調子は！」

黒馬が背中をポンとたたいて昭吉に云う。

「どうも、こう、奇妙な塩梅で……」

腰を前後に動かしながら昭吉が、てれたよ  
うに云うと、

「悪い気持ちはしねえ筈だぜ。お互いによ。

なあ、お内儀」

利倉屋は背中、芳年と種彦は左右と、附添  
人のようにより添って、豊香の裸身を、昭吉  
の動きに合わせて行くのであった。

この光景を、どう形容すればよいのである  
う。人前で営むことを禁止された行為。それ  
を、緊縛された男女が営む。しかも、女のま  
わりには、三人の男がつきそっている！

穴沢流恥極——まったく、女にとって、こ  
れ以上の汚辱はないと思われる。

が、女は、どんな汚辱のなかでも、性本能  
の愉悦に身をまかせることのできる業を持っ  
ている。豊香とてその例に洩れず、四半刻も  
たつうちに、しかめられていた眉が開き、鼻  
孔を拡張、唇から舌をのぞかせて、

「はあ……ハア……ハア……」

と、喘ぎ、利倉屋たちの協力をまつまでも  
なく、自ら、乳房を昭吉に押しつけ、尻をく  
るくると、蠢動させはじめる。

昭吉が、大きく腰をひとふりした途端、弓  
なりに身を反らした豊香は、やがて、ぐった  
りと全身の筋肉という筋肉から力を抜いて、  
種彦たちの腕のなかに汗に匂う裸体をゆだね  
きったのであった。

「昭吉、果報だな。元禄屋の手中にある女は  
菊亭貴子、久我雅子、小紫のお景に千登世と  
この豊香、合わせて五人。そのなか、真実最  
後まで男に抱かれるのは、いまの豊香が始め  
てじゃ。その相手がお前とはもう、フッフッ  
フッ……」

「つい、最後までやってしまいましたが、旦那様にお叱りを受けるのでは」

縄をとかれた昭吉が、着物をきながら心配  
したように云う。

（罵るのはいくら罵ってもよいが、やるのは  
僕の許しを、えてからにしろ）

と、念を押されているのである。

「案ずるな。許しは、得である。おっつけ、  
元禄屋も、ここに現われる筈じゃ」

監物が、鷹揚に云ったとき、土蔵の扉が重  
々しく外から開いて元禄屋を先頭に勘定奉行  
肥田若狭、羅卒の鞭兵衛、斑猿、赤狐、和吉  
それに、怪盗徳夜叉の情婦小紫のお景が、全  
裸の身を、うつむき加減に入ってきた。縄尻



を持っているのは、青蛇である。

「元禄屋。堪能<sup>たんのう</sup>させて貰ったぞ」

肥田に軽く会釈したのち、監物が云う。

「ハッハッ……この場を見れば、いや、この土蔵に一步、入れば、匂ってきます。昭吉、味は、どうだった。ええ、果報者じゃな」

「旦那様、有難うございました。ついでに娘の千登世の方も」

「これ、図にのるんじゃない。千登世はまた別の使い途がある。このお景もな」

木馬責め、石抱き以下の拷問を受けた上に一刻あまりも海老責めにかけていたお景は、ここまで歩いてくるのが、やっとであったのだろう。よろめくように、荒筵の上、豊香のそばに、うつぶせてしまった。

「赤裸に剥がれた女兎が二匹か……して吐いたのか、元禄屋……」

「吐きませぬ。しぶとい阿魔でして」

ばい、鬚がすっかり崩れて、乱れてしまった黒髪を、驚づかみにした元禄屋は、

「お景。必ず、泥を吐かせてみせるからな。」

戊夜のロザリオ、必ず手に入れるぜ」

息絶え絶えのお景の豊かな柔軟な腰のあたりを、三度、四度と蹴りつける。

荒縄で縛られた白桃のような胸の双つの隆

起を裸蠟燭にてらし出されながら、お景の連娟とした眉にも、しっかりと閉ざされた眸をまもる長い睫毛にも、どんな拷問にも屈せず秘密を守り抜いたと云う女の誇りが、ただよっているかに思われた。

「縛りあげい！ 二人いっしょに！」

焦立たちそうに元禄屋が叫ぶ。

「穴沢流抱縛！」

鞭兵衛が、怒鳴る。

青蛇が、お景の、黒馬が豊香の縄をとくともう反抗する気力もない二人を、向かい合わせて坐らせ、お景の右肘と豊香の左肘を一つにして、何重にも、まるで松の瘤のようになるほど縛りつけ、もう一方の腕も同じように縛る。下肢はとみると、豊香の右膝にお景の左膝を合わせてこれまた幾重にも縛りあげた上、お景の右足首と、豊香の左足首に、それぞれ、鉄輪をガチャリとはめて、その鎖を牢格子に絡ませた。

「フッフッ……しばらく、考えることだ。お互いに呼吸<sup>いき</sup>をかけあってな」

二人の顔は、五寸とは離れていなかった。

「新五郎、どうじゃ、このあたりで考え直して、こちらの味方にならんかい。そうすりゃあ、恋しい千登世を存分にさせてやってもい

いんだよ」

元禄屋は、牢格子に磔けられている新五郎に一言、云いのこすと、

「席を代えて、さあ一獻」

肥田たちをつれて、土蔵から出ていこうとして、和吉を振り返り、

「あとで、そちらのお嬢さまを、連れておいで——」

と、壁の向こうを、あとで、さし示した。

そこには、千登世がいた。

母の無惨な姿を、時折、入ってきては、小さなギヤマンの窓から、男たちに、見せつけられて、あまりの光景に、生きた心地もなく嗚咽しつづけているのであった。

## 籤 引 き

「ほほう。これはまた初々しい美形じゃ」

正面の肥田は、和吉に縄尻をとられてよろめきながら入ってきた千登世を一目、見るや酒盃をおいた。

「なにさま、日本橋小町と噂の高い女でございます」

「近う寄れ。盃をとらせる」

肥田のそばに、ひきたてられ、肩を強く押



されて蹲まったものの千登世は、顔をあげることもできず、震えていた。

「また、きつう縛られたものよな。解いてつかわせ。心配あるまい」

「しばらく、肥田様。その前に」

鞭兵衛はそう云うと、千登世のあごに手をやって、

「千登世。よいな、肥田様始め皆様方の御云いつけに背くと、豊香の命も、新五郎の命もないものと思え。よいな！」

と、ドスのきいた声で念を押す。

「……は、はい……」

果たして、わかったのかどうか、千登世は二度三度、頷いた。十七才の処女にとって、ここ十日あまりの出来事は、地獄以上の刺激であったに違いない。縄を解かれると必死で蒼い翳のまだのこっている乳房をしっかりと抱いて、つぶらな眸に恐怖の影を宿す。

「汝を取って喰おうとは思わぬ。さあ、酌をせい。もそつと前にでて」

両膝をしっかりと合わせて、あやつり人形のように徳利を右手に持たされ、肥田の盃に酒を注いだ、左手は、しっかりと胸の隆起を押えたままであった。

カチカチと、徳利と盃の触れる音がして。

やにわに――

「愛い奴よ！」

猿臂を伸ばした肥田が、白く匂う肩を抱き寄せ、その勢いで一気に膝の上に坐らせる。

「あ、あつ、あれ！ お、お許しを！」

ばたつく足が、切台盤に触れて、小皿や鉢が乱れ散ったが、

「騒ぐなと申すに、これ！」

小兎を捕えた大熊のように、肥田は腕のなかで抱きすくめる。くらくらと、めくるめく程の男の精気に、千登世は、心の髄までが麻痺して、まるでもう氷室にでもいるようであった。

「元禄屋。こやつ、早く女にする方が面白味が出ようぞ。これじゃあ、どうもな」

「いや、肥田様。やはり、こう、暴れてくれる方が面白いもので。元禄屋、しばらく、女にするなよ」

酒が入った工頭が、遠慮なく主張する。

「ハッハッハ、これは困りましたな。勘定奉行様と鬼与力様。どちらのお云いつけに従えばよろしいのでしょうか」

元禄屋の視線を受けた鞭兵衛が、

「旦那。ひとつあれをやってみちゃあ」

「あれとは、これか」

と、意味あり気に徳利を持ちあげるのを、

「いや。それは、まだまだ。第一、破瓜の前ですぜ。こっちの方で」

鞭兵衛、自分の臍のあたりを指さす。

「なあんだ、爛酒かと思ったら臍酒か」

と云いながらも元禄屋、すすみでると千登世の右足首を、むずと捕えた。青蛇が左足を押え、赤狐が、肥田から千登世の右手を譲りうけて、部屋のまん中に、ひきずり出す。

「ヘッヘッ、あっしは、左手」

白豚が加わったから、四人の男に、四肢を押えられて、千登世は、もう、どこかくす所もなく全裸の軀を、仰向けにされてしまう。

軽くてうすく紗のような肌であった。

まだ咲きそめたばかりの白百合の花を思わせる肉が、激しく波立ち、顔を右に向け左に向け、男たちがのぞき込むのを避けようとする、避ければ、避けるほど、いやがれば、いやがるほど喜ぶ男心など到底わかるはずのない千登世であった。

「徳利！」

和吉から手渡された徳利を、犇めいている男たちの隙間をぬって、肥田は、まるで生物のように息づいている下腹へ降り注ぐ。

「アッ、アア！」



弓なりになって左右に動く腰を、  
「動くんじゃあねえってことよ！」

叱咤しながら、黒馬と利倉屋が、ふしくれ  
だった手で、ふくよかな腰を両脇から押え込  
む一方、そのついでに、斑猿が、大きく開か  
れた太腿のつけねのくろぐろとした×××の  
あたりを撫でて、ニタリツとする。

「抜け駆けは御法度だぜ」

云ったものの種彦のしなやかな指が、その  
くろぐろとした草むらのなかの柔かい×××  
の一部を……であった。

「じゃあ、飲ませて貰おう」

武士にはあるまじき四つ這いになった肥田  
若狭は、元禄屋と赤狐の袖の下をくぐり抜け  
て、千登世の腹に顎をつけると、小さな可憐  
な脛に、朝露のように閃めいている酒を、長  
いざらざらした舌で吸いあげる。

「ヒャアッ！」

蛭蟪なめくじの様に這い廻る鼻先や唇の、ぞおっと  
する感触と、下を受けもつ種彦たちのあくど  
いまでの指のうごきに、必死でかみしめてい  
た皓齒の間から絶え入るような悲鳴を、どう  
しようもなく千登世は、あげる。

「拙者もな」

監物が、肥田の反対側、つまり白豚と青蛇

の間に四つ這いになって、丁度、千登世の腹  
の下で、顔をくっつけ合うようにして、次の  
徳利から注がれる酒を待つ。

鞭兵衛が、酒を注ぎ、千登世が呻き、肥田  
と監物が、さきを争って、脛へそを吸いあげ、の  
けぞる裸身を、青蛇たちが淫らな笑いをうか  
べながら押え込む。五本、六本、七本……と  
徳利は次々と空になり、男たちは入れ代りた  
ち代り、千登世の脛を舐め廻す。

まるで、野良猫の群れに弄ばれる白鼠しろねずみのよ  
うに、千登世は、悶えつづけた。

もう、酒はどうでもよかった。可憐な裸身  
を求めて十人の男たちが、てんでに取りつき  
処女の躰のあらゆる部分を、まるで、羽衣を  
奪われた天女の裸身のように舐め続けた。

白百合しろゆりに似た香りはもうすっかり、その裸  
身から消え、代りに、酒と、唾液と、男の臭  
いが、腋の下と云わず項うなじと云わず、膝と云わ  
ず、まつわりついて、千登世は、半狂乱の有  
様に、陥ってしまうのであった。

床の間の南蛮時計が、ふたつ、鳴った。

その時である。

それが合図でもあったかのように、駆け  
込んできた男がいた。

「た、た、大変だあ、旦那！ お国さんが掠

われました！」

手代の金吉、日本橋の本邸から早駕籠をと  
ばしてきたのであろう、ふらつく足取りで、

「そ、それが文次郎の奴も一緒なんで」

「な、なんだと！」

いまのところ、五人いる妾のなかで、お国  
は、元禄屋がもっとも寵愛している女であっ  
た。それがごく最近、御家人崩れらしい文次  
郎と云う破落戸ごろうきと仲がよくなったという噂が  
あり、やきもきしていた。

「ま、まさか、駆落じゃあるめえな」

使用人達の前であることも忘れたように嫉  
妬をおもてにだして問う元禄屋に、金吉は、  
一通の書面をさし出した。

「こ、これが、抛りこまれましたんで。徳夜

叉の、徳夜叉の野郎……」

べたっと、尻をおろした金吉の頭上で、書  
状に目を通す元禄屋の顔が、怒りで、赤くな  
る。そこには、墨痕鮮かに次のように、認め  
られてあった。

天下の民、悉く飢ゆるとき、ひとり執権  
権貴と結托して私利を貪り奸獍かんねいを事とする  
汝、天誅を加えんと期したる所、今度は余  
が女性を強掠せり。よりて汝の妾を問夫共



々に奪うものなり。頃日<sup>けいじつ</sup>参上。徳夜叉

「ク……クソ！ 徳夜叉奴<sup>め</sup>！」

書状をにぎりしめる元禄屋の手が、ぶるぶると震え、額に、青白い血管を二筋、三筋うかびあがらせると、

「く、籤を引けい！ 千登世の水揚げは、肥田様、二番手は、工頭監物様、三番以下は、籤の順番！」

爆発した怒りが、高灯台の光に照らされてまんじりともせず横たわっている千登世の上に、ふりそそがれたのであった。

「さあ、肥田様。あちらで、どうぞ。あの部屋で、この女、散々おもちやに、してください。次は……」

と、他人事の様に盃を挙げている監物に、「おすみになるまで待ちましょう。おすみになりましたなら、私といっしょに、早速、日本橋の本宅にお越し願います！ 是が非でも北町奉行所の名誉にかけて、徳夜叉を捕えて貰いませぬことには」

丁寧な言葉であったが、口調には怒りがこめられていた。

「よし、よし。あいわかったぞ」

腰をあげた監物は、肥田と二人がかりで全

裸の千登世を抱えこみ、別室へと運ぶ。

元禄屋が、荒々しい足取りで、先導したことは云うまでもない。

取り残された連中は、歎声をあげると、早速、籤びきにかかった。

「ウ、オオウ！ 儂が、一番じゃ！ 一番じゃあ！」

先ず、奇声を発したのは、白豚であった。

「私が、二番じゃあ！」と昭吉。

「チェッ！ 六番とくらあ！」

「七番！」「十二番！」

最後に和吉が、

「私が、どんじりか」

と、皆を嫉ましそうに見やったとき、

「わ、私も……斑猿さんのあとでいいから私にも！ どうか、どうか頼みます。ねえ、いいでしょう」

手代の金吉が手を合わせて羅卒の鞭兵衛の裾に、取りすがったことであった。

その金吉の話によれば――

今日は、江戸御用祭。大伝馬町の諫鼓鶏を一番に、二番猿舞は南伝馬町、三番浦島の人形花出し以下、武内宿弥、熊坂長範、弁財天宝船、能石橋など四十五番にわたる山車<sup>だし</sup>が北は神田から南は芝口まで綺羅を競って練り歩

く。六つ刻であったという。その山車行列<sup>だし</sup>を

見物に行かないかと文次郎が、ふらりと訪ねてきて、二人揃って出かけたまま、四つになっても帰宅しない。心配になった老婆が、日本橋の本宅に報せにくるのと前後して、書状が、投げ込まれたと云う。

「こいつは当分、お国さんの探索で、女どころじゃあなくなりそうだ。今夜は、たっぷりとへどのでるほど、千登世のやつを抱いてやらにゃあ」

黒繩の黒馬が、肥田たちの入っていった奥の部屋を眺めて、やたらに盃を重ねた。

「兄貴、御忠告しときますがね、あまり飲みすぎると、肝腎のものが役に立たなくなりますぜ」

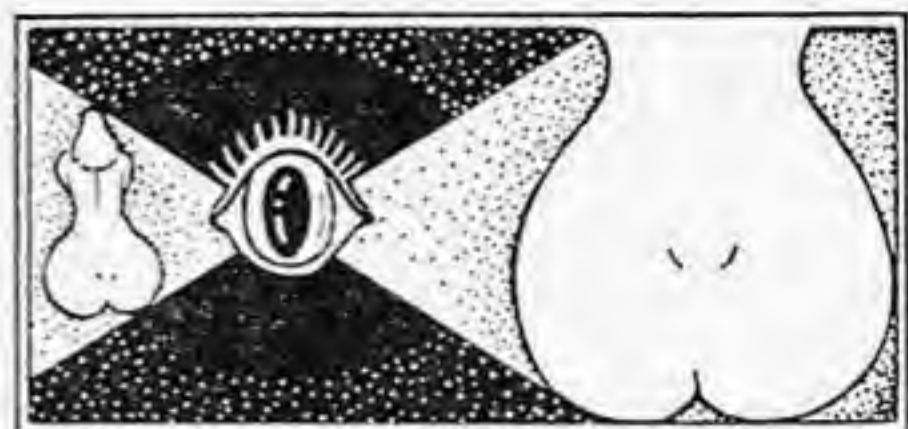
白豚が、からかうように云う。

「なに、ぬかす。酒の一升や二升で、なよなよしちまう黒馬様じゃあねえよ。酒が入れば入るほど、多々益々弁ずる天下の逸品よ」

そわそわしているのは黒馬だけではなかった。百戦錬磨の芳年や、為永種彦、利倉屋までもが、落着かぬ風情で、しきりに、奥の部屋に眼をやる。

六月もなかば、じいっとしていても汗ばむような夜であった。――(未完)――





~~~~~ 告 ~~~~~ 白 ~~~~~

(お臀の双丘)

バトックス讃歌

杉 本 弘 志

私は、ミニスカートのぞく二本の、女の太もも(勿論、若々しい美女でなくては困りますが)には、ほんとうに唇を噛んで口惜しく、目の前がクラクラッとするような魅惑を感じます。

口惜しいというのは、美しいと思うのに、衝動のままに抱き、触り、撫ぜることが出来ないからですし、ましてや、その美しい太ももの上にあるはずの、もっと美しいお臀を、スカートを捲くり、パンティを剥いで見たいという願いが、社会通念と私の勇気のなさから、望むべくもないからなのです。

そして、クラクラッとするというのは、それでも尚、望み得ない願いであることを忘れさせられるほどの、官能的な魅力をまき散らしているからなのです。

和服の美しさにも惹かれます。お正月とか卒業式に、若い娘が着飾った和服姿で歩くのを眺め、帯の下にぶっくりとふくらんだ可愛らしく魅力的なお臀に、ポヤーツとなつてしまい、やはり口惜しさでクラクラを覚えながら、着物というものは女のお臀の美しさを強調するコスチュームだと思つてしまいます。

ミニスカートだと、たしかに女の足の美しさは見られます。スラリと伸びた脚線、つやつやとした肌の張り、しっとりとした量感、両掌をつないでも握みきれないだろうと思わせられる豊かな太ももが、可愛い膝小僧からスラリと細くなつて足首に続く。たしかに美しいの一言に尽きます。

しかし私は、この脚線美は、その上にあるお臀を支えていればこそ美しいのだと思いま

す。お臀のほうがかもつともっと美しいのだといたいのです。ところが残念な事に美点を誇示する事には勇敢であるはずの女性にも似合わず、最大の美とっていいと思うお臀を街頭で見せてくれるヒトはいないのです。

それは、色とりどりの衣裳の上から、形や量感(これは満員電車以外には余り望めませんが)を観察するのも、たしかに楽しいですし、階段の下に居て、チラリとのぞくパンティからいろいろ想像するのも、私にとって決して無意味ではありませんが、でもやっぱりハダカのお臀そのものの魅力には及ぶものではないと思います。

そんな具合で、私はいつも口惜しさでクラクラの連続で、満たされた気分を味わったことがないのです。街にはこんなにも多くの美しい女体が、美しいお臀が、若鮎のようにピチピチと跳ねまわっているというのに、私には少しも廻ってこないのです。もちろんストリップ劇場に行ったこともあります。しかし舞台の彼女たちは、ごく限られた種類の女性ですし、私のお目当てのお臀は、あまり親切には見せてくれません。もし見せてくれてもきつと私の気持は満たされないと思います。私の求めるお臀は、舞台上には存在しないのです。

私は、お臀の魅力を発見してから、よく夢想したものでした。なんとかして肛門科が産

婦人科の医者になろう……と。そして沢山の女性の、美しいお臀を見たいものだ……と。また、大戦争（或は大革命）が起こって、憲兵隊長の私が敵の女性を裸にして拷問している場面が、絶えずといていいほど私の血を逆流させたものでした。

だが、現実には冷たく、空しい厚い壁となつて私の夢をハネ返すのみでした。それでも偶然の幸いは私に楽しい想いもさせてくれることもありました。

あの当時の私は、公共の洗面所に入出入りする女たちの姿に空想の楽しみを求め、扉越しに感じられる用足し中の女性の気配に幻想の快を味わっていました。それは、今は殆ど見当たらない男女共用トイレであったことが得難い幸運であつたわけです。そして更に幸運であつたことは、そのトイレの個室区切りの壁が、下のところをスカした造りであつたといふことです。多分、掃除しやすいように設計されたのでしょうが、私には、まるで「どろどろ」とでもいつているように思えたことでした。

この、設計者と建築主のご厚意に甘えることにした私は、その仕切り壁の下の空間にポケット用鏡を据えてみました。そして、使用者が誰であれ、その用途が何であれ、鏡は物理的作用を確実に果たすことと共に、それによって隣個室の部分的状況を見取ることが

出来ることを発見したのでした。その小さな鏡面に映つたお臀の一部を見た時の、私の躍り上がりっぱかりの気持は、とうてい、書きあらわせないものです。

しかし、少し時間が経って、喜びに逆上した気持が納まると、いくら念願の裸のお臀の面影を目前にしている、とても陶醉などしておられない状況に陥りました。気の小さい私のことです。これはもう「はつきりした犯罪行為だぞ」ということに気がついた以上、じつと観察を続けるなどということは到底出来ない芸当だつたのです。

かといって、この猛烈な誘惑を断乎として断ちきるほどの勇氣もない私は、以後、激情堪え難き状態、といえはおおげさですが、とにかく衝動的に何回かの決死行を繰り返したのでした。

それは、ほんとうに決死行という気持がびつたりする気持でしたが、それによって得た結論は、「女のお臀とは、なんと美しく素晴らしいものだろう」という、従来より、いや増した新たな讃嘆と憧憬だつたのです。

いろいろな個人差のあることも発見しました。図々しい感じの、すれた感じの、いかにも可愛らしいの、なんともいえず初々しいの等々、実にいろいろです。

今でも忘れられない、ほんとうに素晴らしいお臀は、円さといい大きさといい、ほんの

り桃色がかつた白さといい、全く見事な双丘で多分、女子高校生と思われる靴やストッキングの主のに行き当たった時には何日も何日も目の前に、ちらついたものでした。

あんな美しいお臀から、ほんとうにあの臭い塊りが出るのかと疑問に思い、信じられない気持で確認を期したこともありましたが、たいていは小用だけでした。もちろん、大のほうに行き当たったこともないではないのですが、うっとり出来るほどの美しいお臀の場合では、なかつたのが残念です。

一度、次から次へと顔を出す真白い塊りの連続にびっくりしたことがありました。あとで考えて、きっとレントゲン撮影用のバリウムでも服用していたのだろうと思いつきましたがなんと異様な感じがするものです。

また、いかにも苦しうにもだえるお臀の様子に、なんとかその女の顔が見たくなって出た後、すぐに追つたこともありましたが、誰が苦しんだというように澄ました顔をしていたのに幻滅を感じたこともありました。

私のこの犯罪行為は、断続的に一年ぐらいつつ続いたのですが、ある日の夜、声から想像して中年のおばさんに発見されたのが最後となりました。あの時、死にもの狂いで逃げた怖さは生涯忘れられないでしょう。「何してんのッ、鏡なんか使って！ いやらしいッ」というカン高い声と共に……。

〜 緊 縛 写 真 撮 影 行 〜

途方に

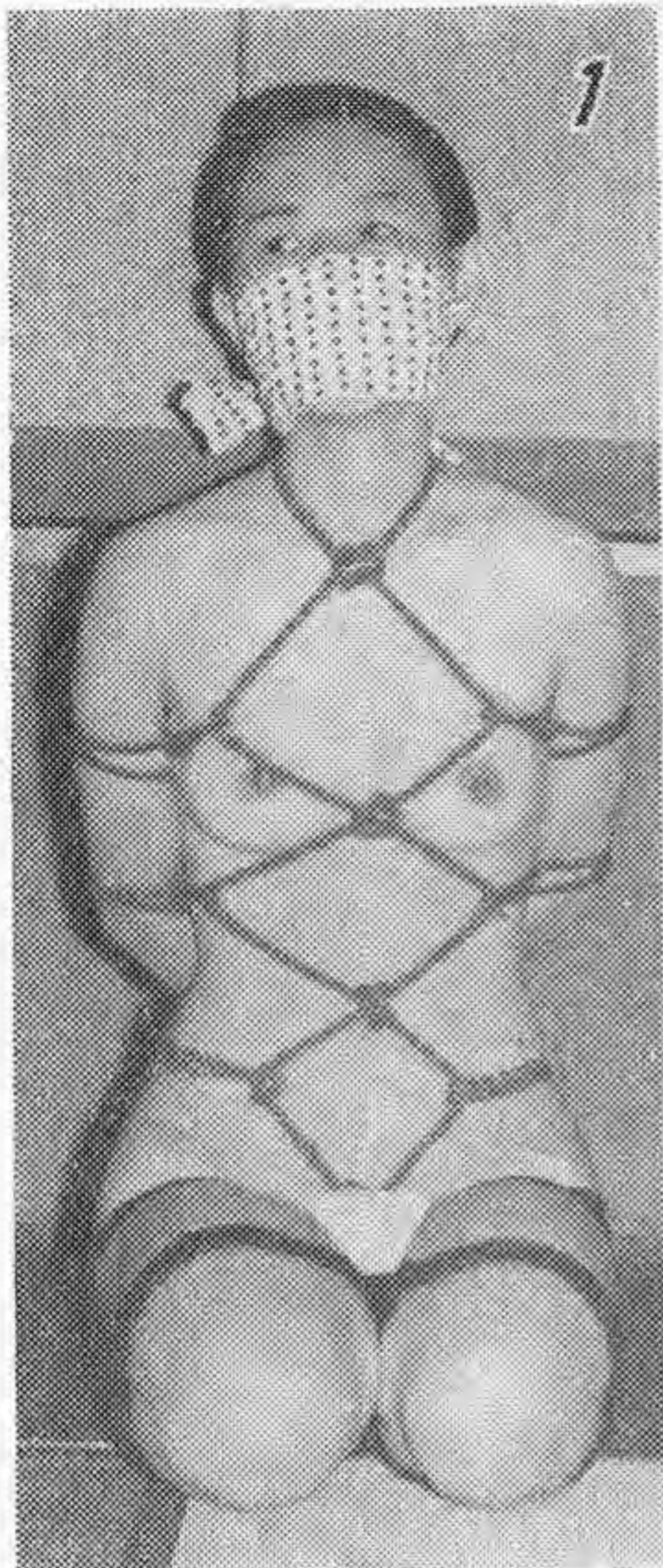
暮れる

那津子

城

章

夫



夕暮れ、ぼくらが、たどりついた山あいの湯の村は、何軒かの古びた宿屋が、ひっそり肩を寄せあって、しんと静まり返っていた。なんの予備知識もなく、やってきた、ぼくらには、それらの宿の、どれを選んだらいいのやら、皆目、見当もつかない。ここは、よっぽど温泉の湧きでる量が多らしく、鄙びた土産物屋の店先に小さなコンクリートの水槽がおかれ、そこへパイプで引かれた温泉が白い湯気をあげながら流れ落ちている。のぞいてみると、卵が幾つも、いれてある。お湯の温度の関係か何かで、白味が柔らかく黄味だけ固まった、茹で玉子ができるのだ。

そんな仕掛けを物珍しそうに眺めながら、あてもなく大通りを、ぶらぶら歩いて行くと大通りとはいっても旅館が数軒、土産物屋が二軒ほど、それに、しもた屋が何軒かという小さな部落を貫く道だから、たちまち出外れてしまう。また来た道を引き返してくると、最初は気づかなかった、ちよっと横に入る小道が目止まる。何という事なしに足を踏みいれると、そこにその宿屋が建っていた。

ゆったりと表に向かって開かれた玄関。前には小さな池があり、ささやかな噴水が夕日のなかで静かに水を噴き上げている。池のほ

とりには、さして大きからぬ木が一本、あわいピンク色の花を咲かせている。その、ほかで、しかも、どこことなく、艶やかな色合いからみて、多分、林檎の花に違いない。あとで、宿の女中にきいてみたら、やっぱり、そうだった。なんともいえず好ましい雰囲気があたり一面に漂って、晩春初夏の一日を歩き通して疲れ切ったぼくらを、ふうわりと迎え入れるようなその宿のたたずまいに、ぼくは思わずホッとして那津子を振り返る。

「どうだい？　ここは」

那津子も、ぼくと同じ印象をうけたと見え即座に答えた。

「いい感じね。ここに決めましょう」

春の行楽シーズンも終わりを告げ、夏の喧騒には、まだ間があるという、この中途半端な季節には客も少ないとみえ、予約もせずフラリとやってきた、ぼくらなのに、あの噴水のある池と林檎の木を見おろす眺めの好い二階の一室に通された。畳数は十二畳、部屋の二方には回り廊下があり、二人の泊まる部屋としては充分な広さである。

ぼくらを案内してきた宿の女中が、まだ部屋も出ないうちに那津子は、もう座布団の上にペタンと腰をおろし、

「あーあ。疲れたわあ、今日は」

この日、ぼくらは雪の山を越えてきたのだ。出で湯の村は標高一、二〇〇米、もう林檎の花が咲き満ちているというのに、三千米ちかいその山は、中腹から上はベッタリ豊富な残雪に覆われ、昨年完成したばかりのケールを利用すれば、ほんのハイキングに行くぐらいに考えて気軽にやってきた、ぼくらを、びっくりさせた。おかげで、ぼくらは悪戦苦闘、やっとのことで、その山を越えて、この山あいの湯の村におりてきたという次第。

「さあ、お湯に入ろう」と、そこに坐りこんでしまった那津子を促しているところへ、お茶や浴衣を、はこんできた女中さんが、「まだ、お客さん、どなたもお着きになっていませんから、ごいっしょに殿方のお湯のほうにいらしたら如何ですか。そのほうが広くて気がよろしいですよ」と、すすめる。

渡り廊下を通過して湯殿へ降りて行くと、廊下を中にはさんで男湯と女湯とが向きあってある。女湯のほうをのぞいて見ると、大きな鯉の群れている池が窓越しに見えて、眺めは悪くないものの、湯槽も洗い場も、それほど大きくはない。男湯のほうは、その三倍はあろうという広さで、自然の岩や石を積みあげ

て作った大きな岩風呂に透きとおった温泉が満々と湛えられ、それらの石のあいだには何か何か小さな針葉樹が二、三本、植えてまれいっそうの趣きを添えている。

「なるほど、こりゃあ、いいお風呂だ」と、ぼくは早速、裸になって浴室にとびこんだ。那津子も直ぐあとから入ってくる。滾々と湧きでる、すき通った、いで湯に身を沈めるとさすがに、ぼくも今まで気づかなかった疲れが手足のすみずみにまで拡がって行くような気がする。歩きなれない那津子は、もうグツグツタリとして湯船のふちの丸い石に頭を、もたせかけたまま目をあげようとしなない。

暗くなってから車で何組かの客が到着したようだが、かなり広い旅館のあちこちの部屋に入ってしまうと、あとは、ひっそり閑として、窓を閉めきってあるのに外の噴水の音が高く耳につくほどだ。

鱒の塩焼きに鯉のあらい、さまざまな山菜に蕎麦までついて、いかにも山の湯の宿らしい夕食が済むと、那津子は手を口にあてながら、しきりと小さなアクビを、しはじめた。

「つかれたかい？」と、きくと、「うん、ちよっとね。でも大丈夫よ」と答える。

『大丈夫』とは、もちろん、これから始める

つものの緊縛写真撮影のことをいつているのだ。

「よし、じゃ始めるか」

ぼくが立ちあがって、旅行鞆のなかからカメラとストロボを取り出すと、那津子も坐ったまま自分のバッグににじりよって、四条の黒い縄と豆絞りの手拭いを引っ張り出す。

夜ともなれば、自分の裸身にぎっちり絡みつく縄、そして自分の口をきびしく覆う手拭い。それらを那津子はバッグにいれて今日一日、肩にさげ、山を一つ越えてきたのだ。

縄も四本ともなれば結構、重い。その重みを肩に感じながら雪の山路をふみまどうとき、被虐にあこがれる那津子の心は激しくうずいたに相違ない――。

さて、ぼくらは、すでに宿の浴衣を脱ぎ捨てていた。ぼくと那津子が旅に出て部屋に二人きりで居る時は、二人とも裸になっているのが、ぼくらの習いなのだ。もっとも本当に一糸まとわぬ裸は、もっぱら、ぼくの方で、那津子は、たいてい縄で縛られ口には猿轡を嵌められているのだから、その意味では一糸まとわぬ素裸ではないわけだが。

例によって、そのプロセスを充分に楽しみながら何日もかかって作りあげたコンテをテ

ーブルの上に拡げていると、那津子はもう心得顔に手を後ろにまわして立っている。カメラにストロボをセットし終わったぼくは、縄をつかんで背後にまわり、交叉させた手首に縄をかける。ここで余り強く締めあげてしまふと、乳房の下を縛り、上を縛りして縄をグルグル巻きつけて行くうちに、だんだん手首が引っばられて縄が喰いこみ、十分もすると手の先が、しびれてくる。だから、初めはゆるすぎるくらいに縛っておいて、ちょうどいいのである。

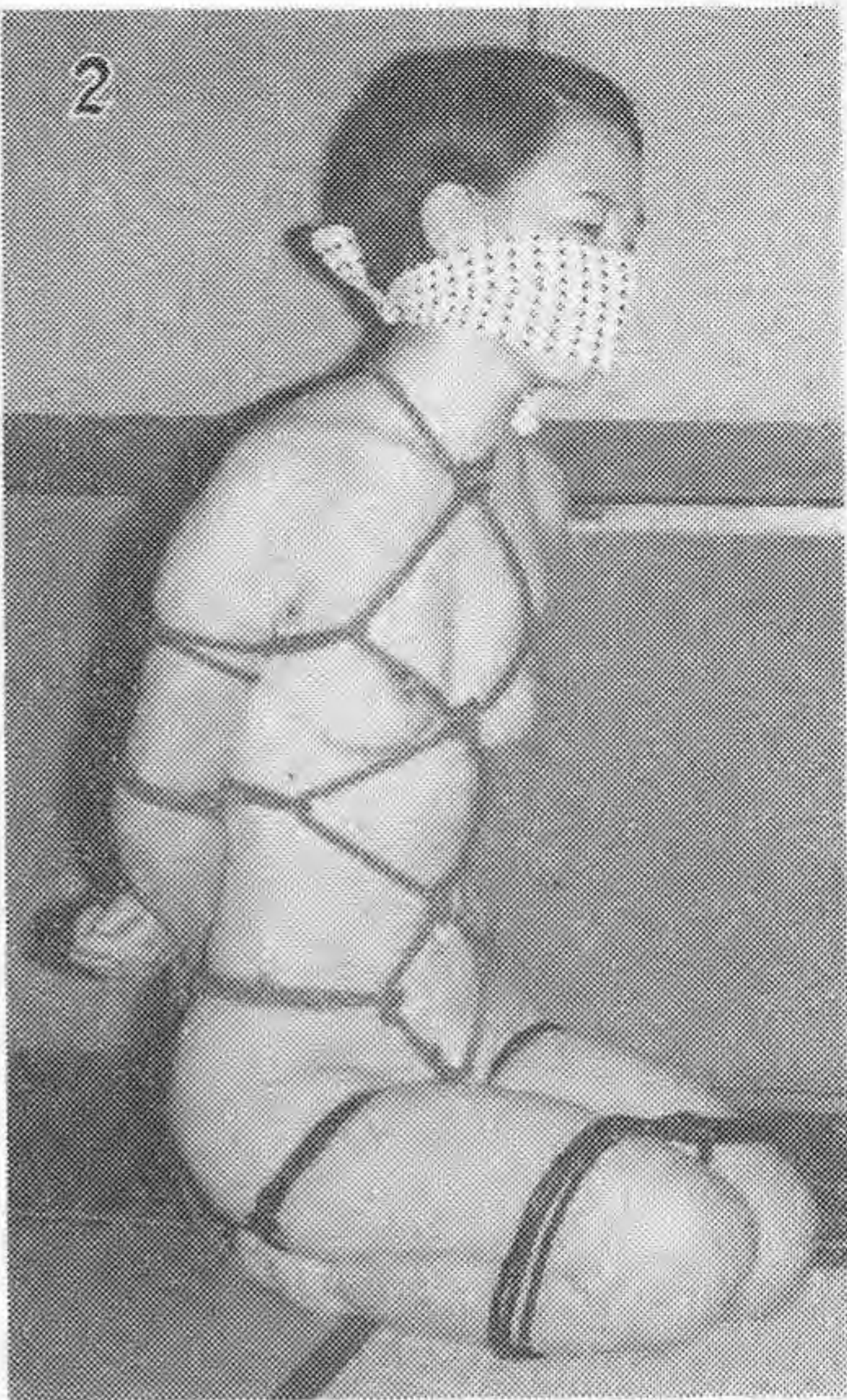
コンテによる第一の縄掛けは三重菱縄なのだが、この縛り方は手がかかる。三つの菱形を、それぞれ正しい形に描きだすことは容易ではないのだ。縛られるモデルのほうで、こっちの言うとおりに動いてくれないと、左右対称に、きれいな菱形の線を作りだすことはとてもできない。そういう点からいえば、この縛り方は実際的とはいえないだろう。拘束されまいとして反抗し、もがく相手に対してこんな縄掛けをすることは、まず不可能である。三重菱縄は、あくまでも遊びであり、そんな言い方が許されるとすれば、これは『趣味的』な縛りというべきだろう。

その三重菱縄も今夜は、まずまず綺麗な形

に縛れたようだが、さて、できあがった写真を見ると、やはり形が少々崩れており、とくに乳房の上の第一の菱形のかたちがよくなかったが、それは、あとの話。ともかく苦心惨胆、那津子のからだを、あっちに向け、こっちに向け、どうやら黒い縄で乳房の上と下、そして腹部に三つの菱形を描き終わると、撮影位置と決めた洋服掛けの戸棚の前に那津子を正座させ、豆絞りの手拭いで猿轡を歯ませる。いつもなら、足首を十握巾に縄で、つないで、部屋の隅に、あらかじめ置いてある手拭いとハンカチを一つずつ口にくわえて持つてこさせ、その上で猿轡をしてやるというのが、いわば、ぼくらのあいだの一種の儀式なのだが、今日は那津子が大分、疲れている様なので、残念ながら、この極めて効果的な儀式は省略とする。（じつは、この手拭い、買ったばかりの新品なのである。そこで鼻まですっぽり覆って後頭部でギュッと結んでも、糊がきいているせいか手拭いが、ぴんと張って格好がつかないのである。これは、やはり二度や三度は洗って糊気を完全におとし、顔になじむようにしておくべきだった）

それから正座した両足、大腿を束ねて縛ろうとすると、丸い膝頭を滑って縄が、つるん

と抜けてしまう。今度は抜け落ちないように、かたく締め上げると、那津子は「痛い痛い」と、猿轡の下から、くぐもった声で文句をいう。ふだんなら、これくらい強く縛っても黙って辛抱しているのに、やはりからだが疲れていると神経も苛立って、ちよっとくらの痛さも我慢できないと見える。止むなく妥協した結果、膝の縄は、しまりなく緩んでしまったが、そのまま正面からシャッターを切る



(第一図)。三つの菱形をつくる長い縄は、那津子に何ど染め直させても真黒に仕上がり、膝頭と腿のつけ根を縛った二本の短い縄が黒々と染め上がったのにくらべて、何やら薄汚れた感じがする。まっ黒に染め上がる様な、そんな質の縄を何とか見つけなくては、などと考えながら、那津子のからだを半ば抱き抱えるようにして向きを変えさせ、側面から(第二図)背面からとストロボの閃光を浴

びせかける。膝頭の縄はゆるんで、しまりがないが、腿のつけ根にかけた二筋の縄はグツと喰いこんで、いい効果を出したようだ。

いつも感じる事なのだが、緊縛写真の撮影を、ぼくのように助手もなしに一人で、やる場合、モデルを縛っては解き、解いては又、縛り、ポーズを変えるたびに身動きのままならぬモデルを抱きかかえては向きを変えさせ、カメラとモデルの間を行きつ戻りつしなければならぬのだから、からだも使えば神経もつかう。カメラマンたるもの、大変な重労働を強いられるわけだ。好きだからこそ性懲りもなく、こんなことを繰り返しているが、モデルの積極的な協力なしには、とても、うまく行くものではない。その点、那津子は、ぼくにとって、この上ないモデルだったわけだが、どうも今夜は調子がよくない。いま書いたように撮影それ自体が大仕事だと、よくわかっていくくせに、つい欲をだして、折角でかけてきたのだから、ことのついでにハイキングも楽しもうなどと二また、かけたのが、よくなかった。昔から二兎を追うものは何とやらというではないか。やっぱり旅の目的は撮影一筋に絞るべきであったと、いまさら後悔しても、あとの祭り。コンテには、びっし

りと書きこんであるけれども、今夜は、とてもこの通りには、撮影を進められまい。予定した計画は、いさぎよく諦めて、気ままなスナップを、いくつか撮って、おしまいにしよう。

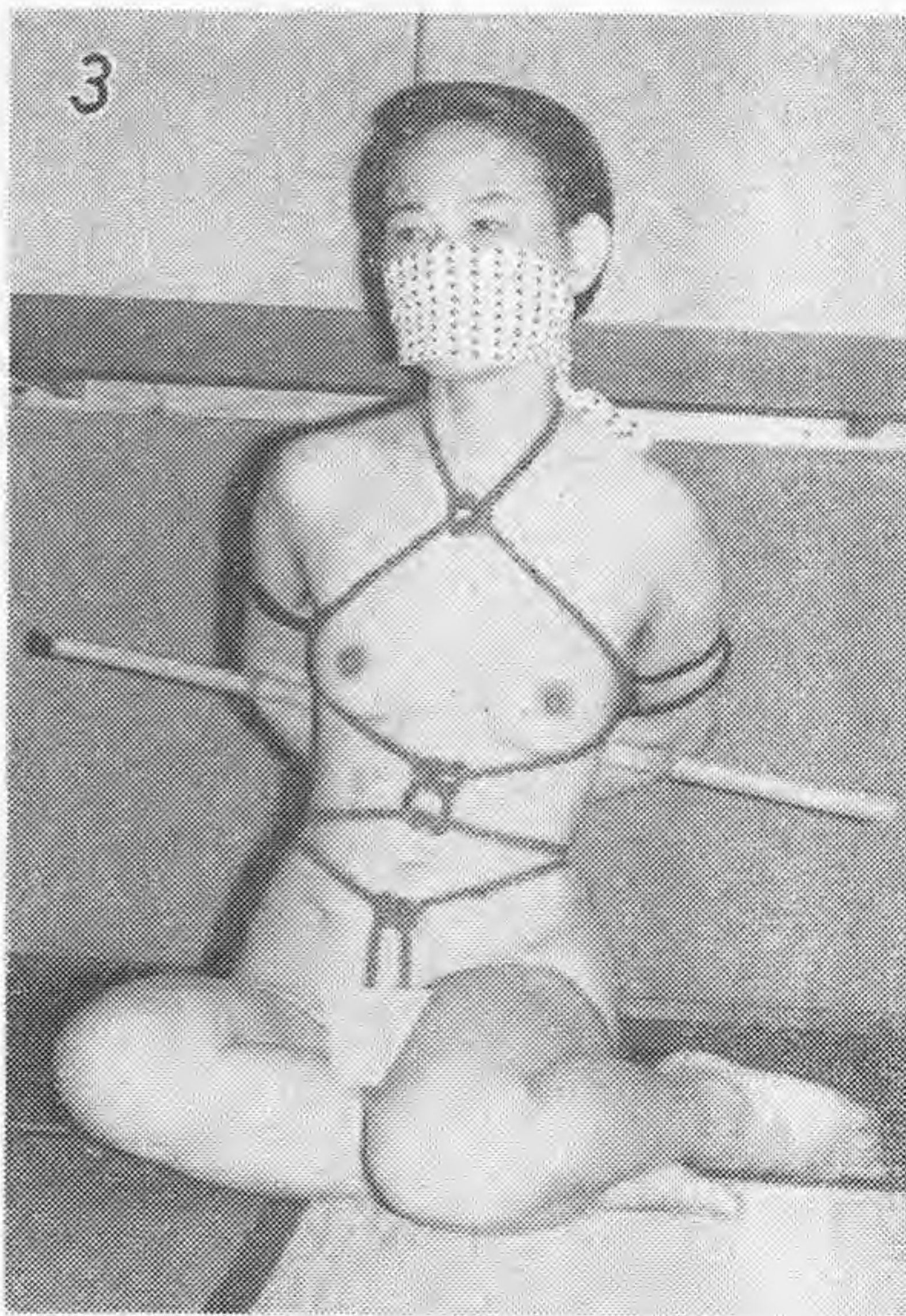
手早く那津子の縄をとき、「ちょっと中休みにして、お茶でも淹れようか」と、テーブルの前にあぐらをかく。那津子も膝を崩して横坐りになり、ポットのお湯を急須につぐ。その手首は、もちろん、二の腕にも、喰いこんだ縄のあとが赤く残っている。

「大分、深く喰いこんだな。痛かったか？」
二つ並べた茶碗に香り高いお茶をつぎながら、那津子は健気に答える。

「ううん、そんなでもないわ」

夕食に、あらいや、塩焼きなど、辛いものばかり喰べたせいかな、あついお茶が、のどにしみるようだ。

撮影している間は夢中になって気がつかなかったが、となりの部屋あたりで、女が二人話しあっているのが聞こえる。声だけでは、若いのか中年なのか、さだかには判らないが老人でないことだけは確かだ。話の内容は、まるで聞きとれないけれども、ひとりが何やら一生懸命しゃべると、相手が、ときどき相

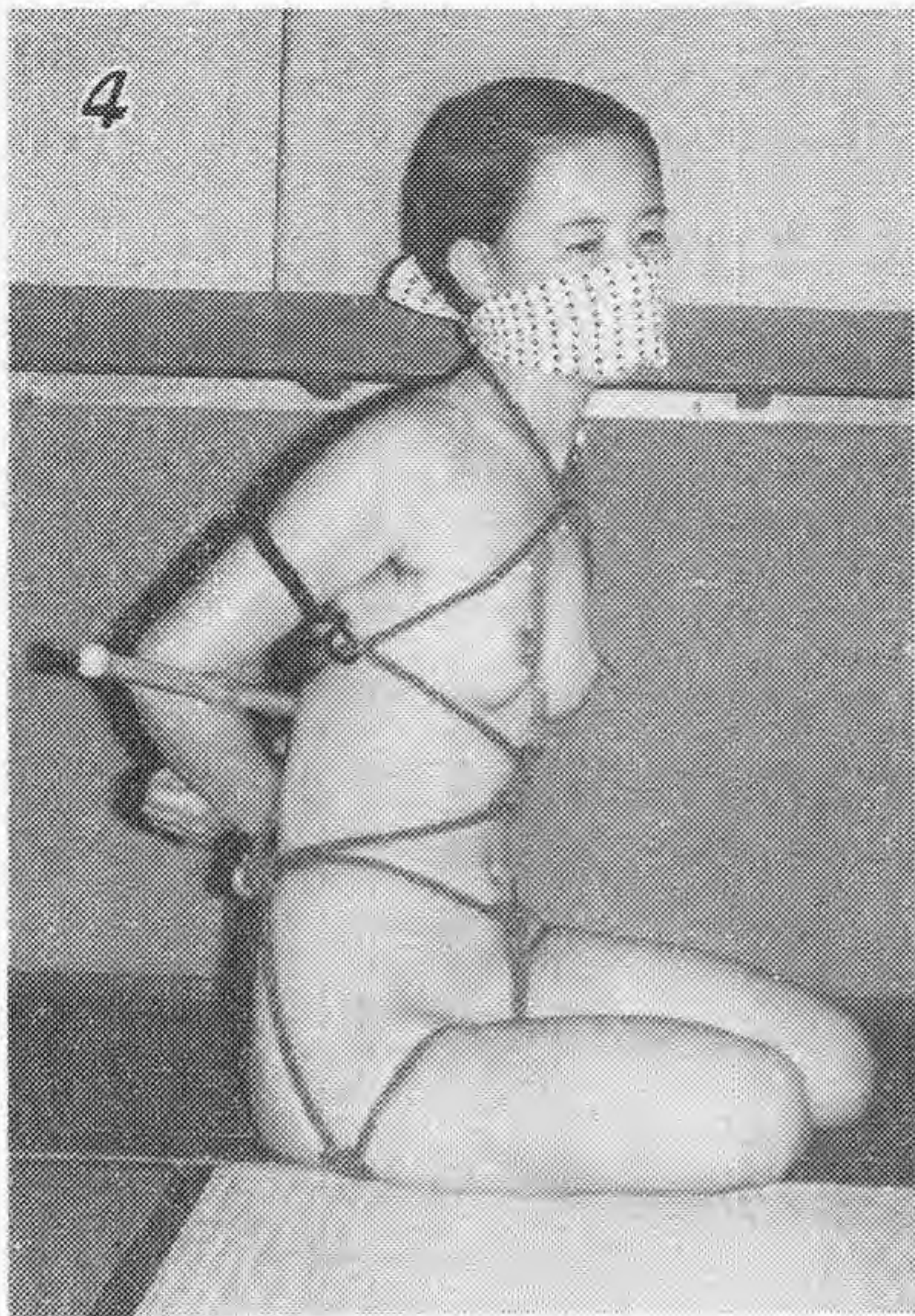


槌をうつては、また聞き入る。綿々と身の上話を物語っては相手の意見を求めているとでもいった調子だ。女二人、こんな山のなかの湯の村にやってきて、飽きることもなく何を語りあっていることや。いくら耳をすまして言葉は一向、聞きとれず、ふっと注意をそらせると、こんどは反対側、窓の向こうか

ら、さらさらと、水の落ちる音が聞こえてくる。

「さあ、もう少し続けようか」

お茶を飲み終わったばかりは、抑えかねて又小さなあくびを洩らした那津子に、声をかける。那津子は何やらものうげに、しかしそれでも素直に立ちあがる。そんな那津子を、い



たわるように、ぼくは言葉が続ける。

「あとは、いつものように、いろんな縛り方をしないで、一つだけ行こう。それに那津子は、あんまり動かないで、ぼくのほうが動きまわって角度をかえて撮るからね」

ぼくは黒い縄をしごきながら、乳房をかこんで大きな菱形を一つ、そして下腹部に逆三

角形を描くという、ぼくにとっては最も手なれたオーソドックス・スタイルに縄をかけて行く。

いくら、お互いに見なれているとはいえ、しめきった一室に那津子と二人だけ裸でいてしかもその那津子をギリギリ縛りあげて行くとなれば、そこは凡夫の浅ましさ、おのずと

濡れてくる。だから折々は那津子の舌でキレイに拭いとらせなければならなくなる。縛り終わって横坐りに坐らせた那津子の前に、ぼくが足を踏んばって立っと、那津子は一生懸命に、舌を動かして拭い清める。こんなときほど那津子が、いとおしく思われるときはない。ぼくは上体を前にかがめ、片手で那津子の髪をやさしく撫でながら、もう一方の手で後ろ手に縛り合わされた那津子の手を握ってやると、那津子もギュッと握り返してくる。

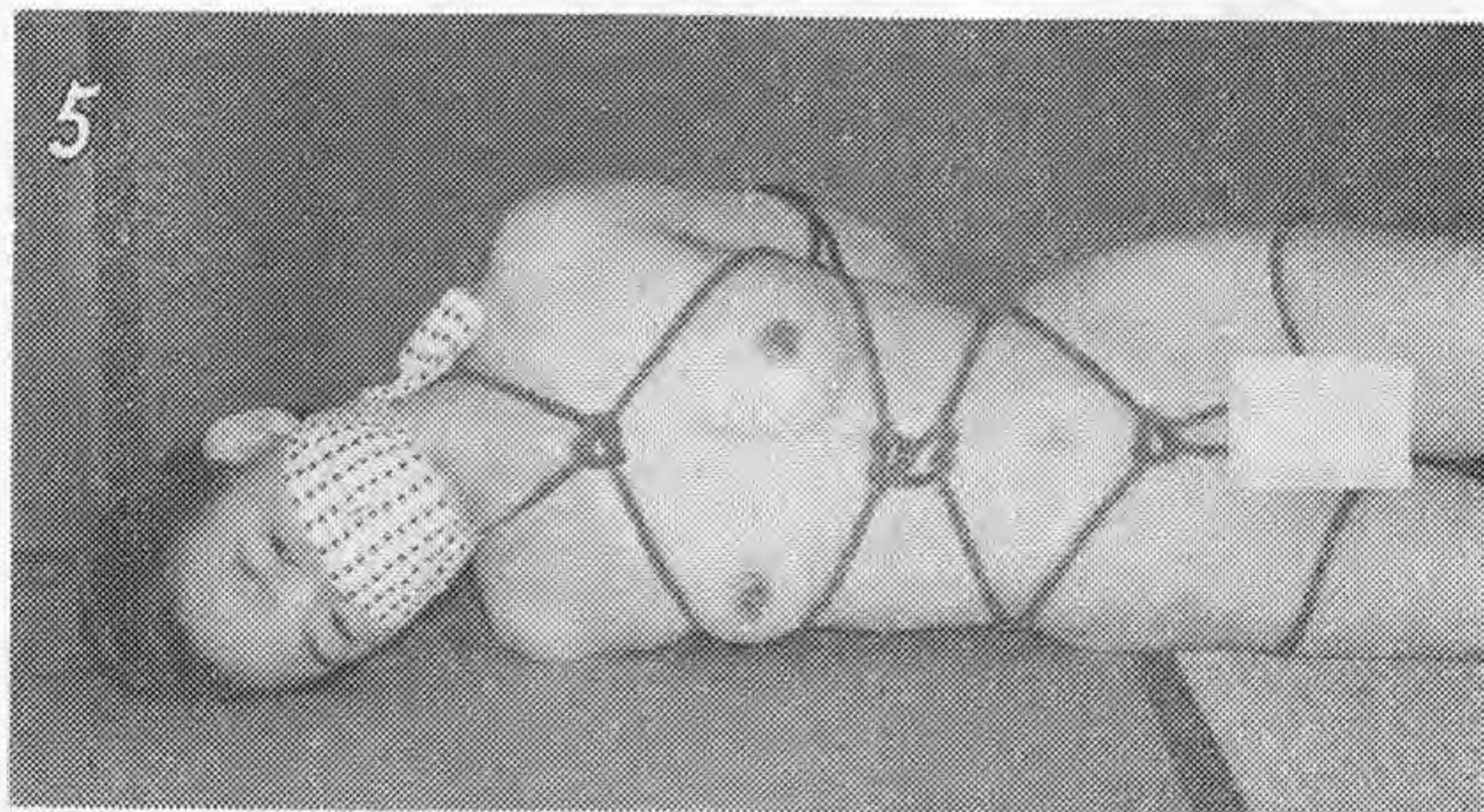
しばらくはそうしたまま、那津子の舌の動きを味わっていたが、やがてぼくは那津子の頭を押しやって、あらためて鼻まで、すっぽり覆う猿轡をかませ、それから竹の棒を両腕と背中のおいだに水平にさしこんだ。足枷にあるいは手枷にと、さまざまないし途を予定して、はるばる持ってきた棒だったが、コンテに書かれた計画を殆ど放棄した今となっては、もうたいした役には立たなくなってしまう。さりとて、まるきり使わないのも業腹なので、ほんの小道具として、役立たせた次第。だから棒は、さしこんだだけで、腕やからだにしっかり縛りつけたわけではないから何となく締まらない感じがするのも止むを得ない。

まず正面から（第三図）。横坐りに坐った那津子の太腿が、こんもりと盛りあがって、やわらかく美しい線を描く。上体を、やや左によじった那津子は、眉を少し、ひそめ気味にして焦点の定まらぬ、まなざしを、部屋の隅に、さまよわせている。

続いて斜め前から（第四図）。棒のために肱が思いきり後ろへ引かれ、たっぷり覗いた腋毛が、なまめかしさを添える。いつも、やかましく注文をつけるので、先の第二図でもそうだが、ここでも那津子は固く手を握りしめて、囚われの女の緊迫感を強めている。

さらに、この縄掛けのまま膝を立てさせたり、両足を投げださせたり、いろいろポーズを変えて撮ってみたものの、どうもあまり面白くないので棒はやめて、那津子のからだを押し倒す。ごろりと横に寝ころがったままグッタリとして身動きもしない那津子のまわりを、もっぱらカメラマンのぼくが動き回ってシャッターを押す。

正面からレンズを向けると那津子は、もうそうに目を細めて、こちらを見ている（第五図）。左の二の腕に巻きついた二筋の黒い縄が緩んでいるのに気がついてはいたが、今夜は那津子の気持が、こっちにも感染したと



見え、いつもなら手まめに緊めなおすところだが、そのまま見すごしてしまう。

こんどは頭の方へ回って、やや上から見おろし気味にカメラを向ける（第六図）。横にころがされた、からだを支えようとして、那津子は左手を開いて畳についている。その上さらに、からだのバランスをとるため、両方の二の腕を後ろにひいているので、肩胛骨の部分が盛りあがり、こんなふうに残る手に縛られたまま横にころがされた姿勢が、かなり苦しいものである事を物語っている。両腿をちぢめるようにしてピッタリと合わせ、那津子は目をとじてジッと動かない。髪がバラリと畳の上にひろがり、いかにも荒々しく、そこに突き倒された様な感じが、でている。

つぎは足のほうにカメラの位置を移して、同じように上から見おろす角度からストロボの白い光を浴びせかける（第七図）。盛りあがった尻の丘を、はすかに横切って伸びてきた縄が、腿のつけ根を二巻き緊めあげている。その縄が深く深く喰いこんで那津子の尻の肉づきを実際以上に豊かに見せているようだ。猿轡が顔の下半分を、すっぽり覆い、腕のつけ根からチヨッピリ腋毛も覗いている。われながら、なかなかムードのある写真がと

れたと思うが、惜しむらくは、ファインダーをのぞいて構図をきめるとき注意が、そこまで行き届かなかったと見え、膝頭の部分がチヨン切れてしまった。

それにしても、モデルが少しも動かずに、カメラのほう動くだけでは、そうそう変化もつけられない。いつかぼくも興冷めがしてカメラを下におくと、那津子を抱き起こしてさっさと縄を解きはじめた。猿轡をはずしてやる（こういうとき、いつも

ぼくは、縄の方から解いてやる。すっかり解き終わってから、ゆっくり猿轡をはずしてやるのだ。縛めをとかれて両手が自由になったのに、まだ猿轡をとる事を許してもらえないという状態は女に深い屈辱感、強い束縛感を与える。自ら猿轡をはずそうと思えば外せるのに、しかし、そうはさせてもらえないとき、女は手が自由であればあるだけ、それだけ意志の自由を奪われていることを感じるだろう）と、ホッとしたように那津子

が訊ねる。

「もう、おしまい？」

「うん、今夜はこれでやめにしよう」

と、ぼくは、いささか不機嫌に答える。

「まだフィルムが、だいぶ残っているんじゃないの？」

「のこっているけど、もう止めだ。那津子ですんで協力してくれないと、うまく撮れないからね」

「ごめんなさい。でも今日は疲れちゃったのよ。やっぱり昼間、あんなに歩いちゃ、駄目だわね」

そんな受け答えをしているうちに、ふっと一つの思いつきが、ぼくの頭をかすめた。いま那津子のからだから解き放したばかりの黒い縄の束を、那津子の方に差しだしながら、ぼくは言う。

「一つ、こんどは那津子が、ぼくを縛ってごらんよ」

「あたしが？ だって、あたしには縛り方が判らないわ。」

第一、そんなことしても面白くないじゃないの」

「まあ、いいよ、やってごらん。ぼくが縛る手順を思いだしながらやれば、出来るよ」
ぼくはクルッと那津子に背をむけ、両手をうしろに組んだ。

「じゃあ、やってみるわ。でも、うまく行くかな」

いかにも不承々々といった口調で言いながら那津子は、ぼくの手首を縛り合わせる。



「次は、もう一本の長い縄を首に掛けて」

と、ぼくの指図にしたがって、那津子は不器用な手つきで、ぼくのからだに縄を掛けて行く。

「それじゃ、ゆるすぎるよ」

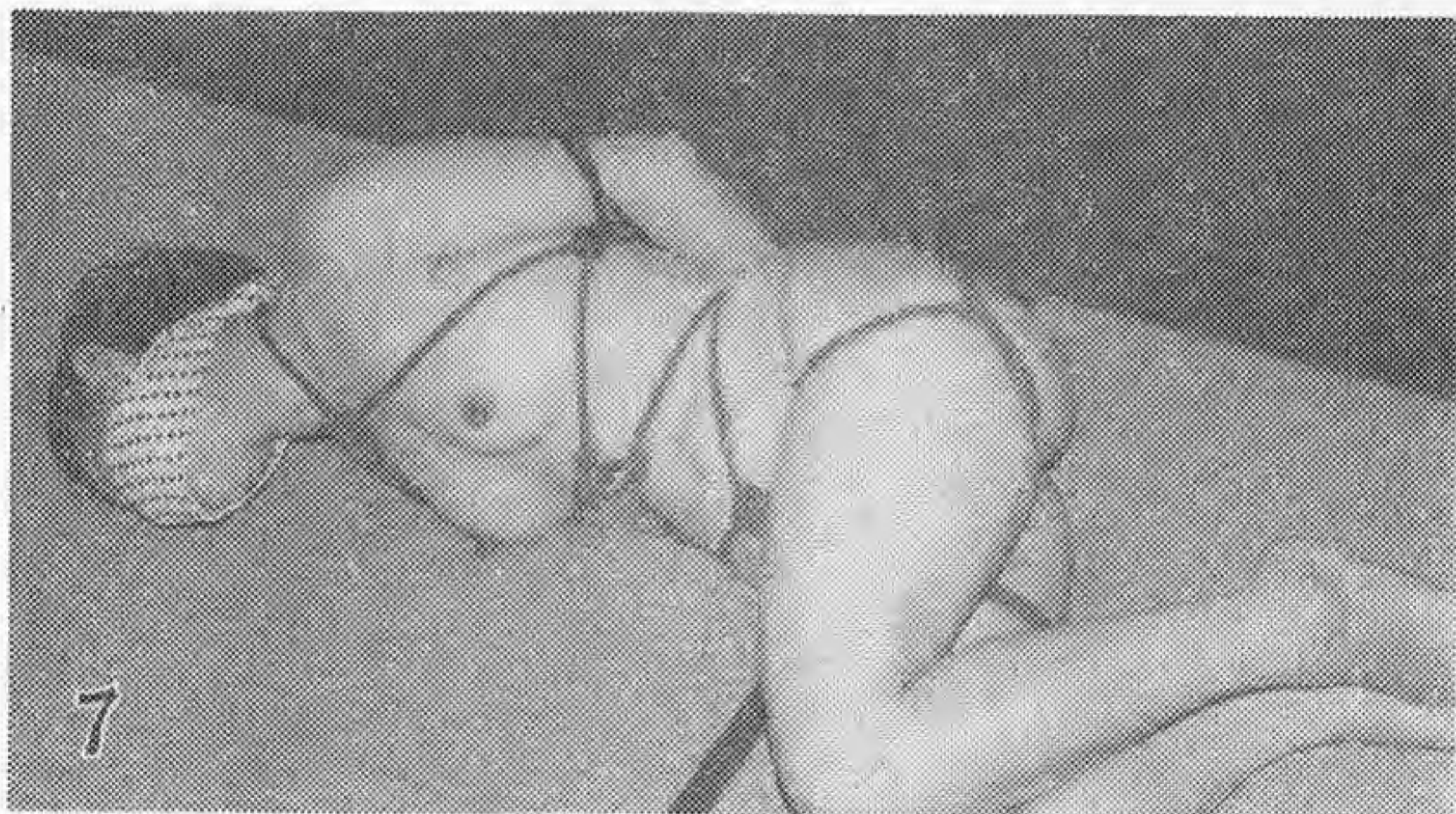
「あっ、痛い。そんなにきつく縛るなよ」

文句を言い言いしているうちに、どうにかぼくの上半身はぎっちり縛りあげられた。

「ホラ、その縄を下へおろして、股の間を通すんだ。それから、腿のつけ根を二巻きグルグルまいて、後ろの縄に連結するんだよ」

縛りが完成すると、ぼくは膝を折って坐りそれから静かに上体を倒して畳の上に寝ころがる。縛り合わされた手首よりも、むしろ、からだにピッタリ押しつけられた二の腕が両側面から胸部を、ぎゅっと圧迫する、その感じの方が被縛感を一層、強めるのを、何か、いぶかしいもののように思いながら、ぼくは目を閉じ『素裸にされて縛りあげられる』というこの初めての感覚を、何やら胸が、うずく様な思いの中で味わった。

ぼくが那津子と知りあってから、何年ぐらになるだろう。そして、いつの頃から、那津子に縄の味を覚えさせたのだろう。それらは、そんなに昔の事ではないのに、もうはっ



きりと思い出すこともできない。今では、ぼくが那津子と夜を共にするときには、そこに必ず縄と猿轡があり、それが、あまりにも当然の事となってしまうので、それらがなかった夜などは初めから存在しなかったような気がするのだ。

それにしても、ぼくは、ほんとうのサジストなのだろうか。そして那津子は生来のマゾヒストなのだろうか。いいや、そうではあるまい。異常心理学の領域に属するサジズムやマゾヒズムとは、ぼくらは無縁なのだ。なるほど、ぼくは好んで那津子を縛り、那津子は甘んじて、ぼくに縛られる。だが、それは、ぼくらの愛の交歓に先立って、その悦びを、一層、強め深める為の前戯でしかない。ただぼくらの場合、その前戯に、いささか『少数異端』の趣きがあるというだけだ。

そんな事を、あれこれと考えていた、ぼくは、ふっと我にかえって目をあけた。するとどうだろう。那津子は、ぼくから一米ほど離れた部屋の隅に、途方にくれたような顔をしてツクネンと坐っているではないか。ぼくは呆れて声をかける。

「おい、那津子。どうしたんだ？ ただ、ころがしておかないで、何とかしろよ」

「なんとかするって、どうするのよ？」
「いつも、ぼくが那津子にやっているように
こんどは那津子がやれよ」

那津子は、しばらく黙っていたが、やがて
言った。

「だって、女ならいいけれど、男がゆわかれ
ているなんて、サマにならないわ」

それを聞くと、ぼくは何だか急におかし
くなった。那津子は決してマゾヒストではない

けれど、極めて女らしい女なのだ。男が縛る

ことを好めば、その意に添うように至って従
順に縛らせる。そういう那津子に男を縛って

楽しむなどという気持は、まるでないのだ。

途方にくれた様な那津子の顔を見上げながら
チェホフの言い草ではないけれども、おまえ

は、ほんとに『可愛い女』なんだなと、ぼく

は心のなかで呟いた。

「それじゃあ、縄を解いてくれ。やっぱり、

ぼくが那津子を縛ることにしよう」

那津子は、そばににじり寄ってきて、ぼく
を抱き起こした。

いまのいままで、ぼくのからだにグルグル

巻きついてた黒い縄をつかみ、

「ホラホラ、手をうしろにまわして」

と、那津子の尻を軽くたたく。思いなしか

イソイソと、那津子は両手首を背中交叉さ

せる。

その手に縄がスルスルと絡みつき——那津

子はたちまち高小手に縛りあげられる。猿

轡用のハンカチと手拭いをテーブルから取り

あげたぼくは、それで那津子の口をふさぐ前

に、ぼくの口をぎゅっと押しつけ、しばし舌

と舌とを、たわむれさせる。

そうやって口を合わせたまま、縄でくくり

あげられた那津子の小柄なからだを強く抱き

しめたとき、ぼくの耳に噴水の落ちる音がひ

ときわ高くひびいてきた。その水のほとり、

しっとりと重い晩春の闇のなかにほのかに浮

かびあがる薄桃色の林檎の花を、まなかひに

思い描きながら、その花びらのような那津子

の唇を二つに割って、ぼくは丸めたハンカチ

を押しこんでいった。

☆賞金☆

優作 良作 秀作 佳作 可作

一篇につき 一篇につき 一篇につき 一篇につき 一篇につき

五万円 参万円 貳万円 壹万円 五千元

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここ
に新しく、「告白、手記、体験」の原稿を
広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな
告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字
塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告
白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表
したいという熱意のこもった原稿を求めま
す。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうま
さは求めませんから、実際に体験されたも
の、事実の裏付のあるものが大切だと思ひ
ます。従って必ず自作の未発表のものに限
ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲
載分としては、三十枚乃至五十枚が適当で
す。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さ
い。締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送り
いたします。応募原稿は読者原稿と区別す
るため「告白懸賞」とお書き下さい。

奇クサロン・さくサロン・キクさろん

夫婦プレイを楽しむ方々へ

三浦敬一



十二月号の奇クサロンで、井上浩氏が書いておられました「夫婦プレイ」のマンネリ打破Vについての御投稿を拝見致しましたが小生も井上氏の御説に

全く同感で、氏のお気持は、そのまま小生の気持だともいえそうに思います。
小生も、妻を縛りだしてから相
当な年月が経ちましたが、最近
はただ縛るといふことだけでは当初
のような感激を得られず、なんと

か変わった緊縛を、とばかり考えるようになっていきます。

しかし、あれこれと想を練った上で、このスタイルならと思いついた縄掛けを実際に妻の体に施してみても、いざ縛り上げて眺めてみると、今迄のと余り変わりばえのしないスタイルであつたりしてガッカリすることが珍しくないのです。

そんなことを繰り返す度に、辻村氏、塚本氏の緊縛に対するセンスの良さが、しみじみ感じられ只々感心するばかりです。
それでも尚、小生は妻を稽古台



にして、縛っては解き、解いては縛り、われながら涙ぐましい？ガッカリを繰り返かえしています。

幸い、妻は大変に従順でして、小生のすることには少しもさからわず、何でもいふことは聞いてくれるのですが、ただ情性でプレイを繰り返かえしているだけというほかはありません。

最近では、さすが大人しい妻も新鮮味が欲しくなつたらしく、他人とのプレイをそれとなく希望するような口吻を洩らすこともある状態ですので、夫婦プレイを実践しておられる皆様方の中で、この

短歌『玩具妻』

大野 怜子

晴着手に挙式の夜を思い出す、
縄ひとすじにおののきしこの肌

しごきこそわが下着なり今はは
や、それなくしては眠れぬ程に

わが肌を深くくびりしこの縄目
くまなく映す鏡ぞいとしき

貞操帯たまさか洗いて干場なく
部屋に吊るして客をおそれる

月ごとに大ききの増すわが腹に
うれしき触診夫のてのひら

後ろ手の縄目のままに受けし愛
木立ちの蔭でわれ犬として

寒菊の一輪立てはいとわねど、
しびれと冷えに腹の子を氣遣う

腸腔に羞恥の空氣しみわたる、
引き裂き刑を待つわれ不思議

冬陽さす窓辺に晒すこの縄目、
玩具妻たる暮らしぞうれしき

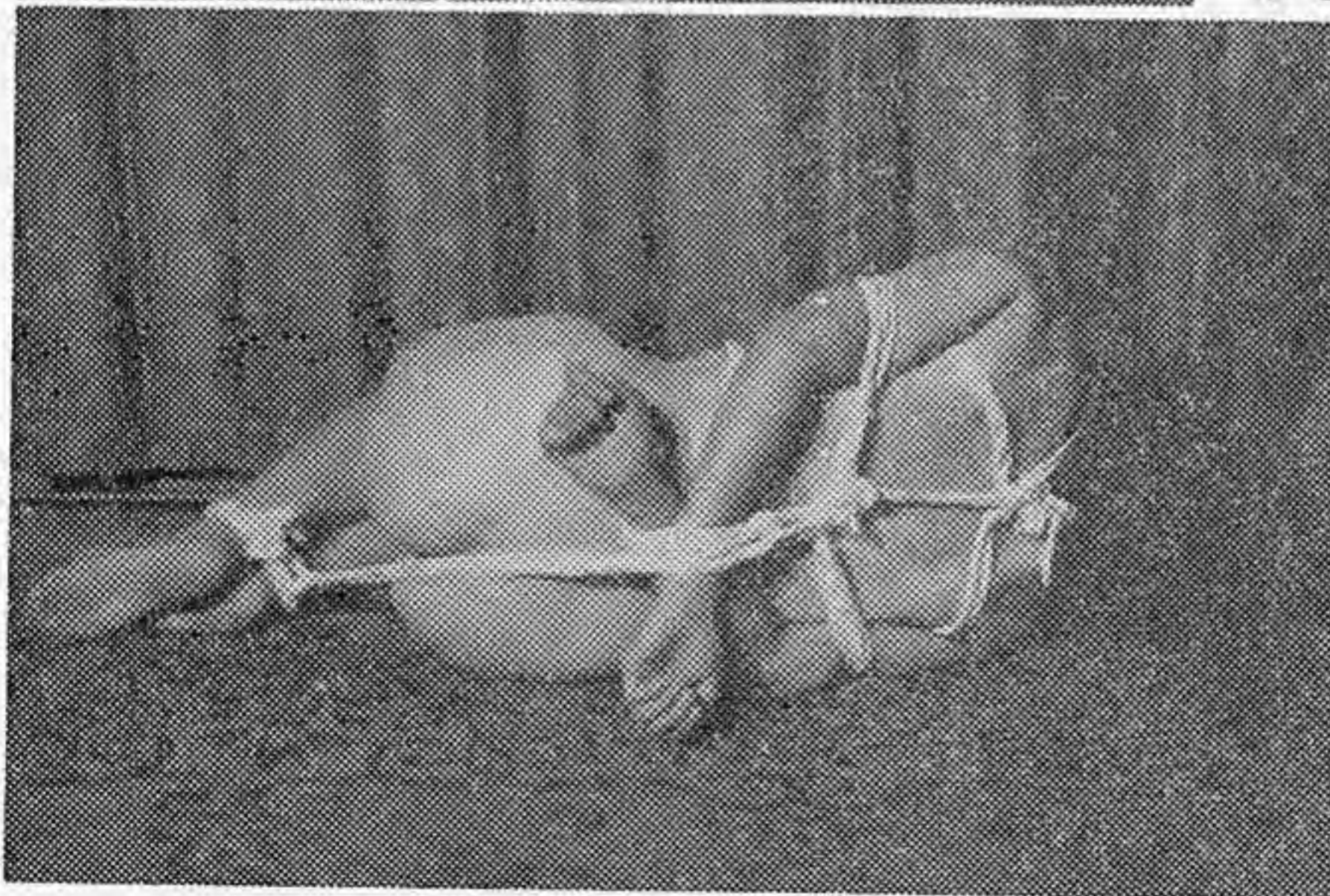


ようなマンネリ状態を如何にすれば切り抜けられるかについて、よい御経験なり御意見なりがございましたら、是非お聞かせ願いたいものだと思存します。

ここに同封しました写真は、小生なりに努力して撮影したライカ判三十数枚の中の一部です。幸いに、先達で編集部でDPEをして

貰いましたので焼付は鮮明です。適当なものがありませんでしたら掲載して下さって結構です。

一度、妻の純子を提供して、ベテランの方々に緊縛プレイの真の醍醐味を知るための手ほどきをして頂きたいものだと思いますが如何でしょう。



辻村氏のカメラハントには取材されましたが、今度は塚本氏のカメラポで、強烈な緊縛とSMプレイの味を妻の純子に与えて戴き小生の夫婦プレイを一層、生彩あるものにしたいと願っています。



—＜第九十二回＞—

辻 村 隆

一月号に『私のビタ・セクシユ

アリス』を発表された杉本弘志氏が、昭和三十年頃『アリス』への讃歌』という一文を投稿され、彼が仏文専攻だったので、エイナスと英語読みせず、アリスとフランス語読みして使ったのが、爾来現在のように普及してきたと自負しておられ、最初にアリスなる言葉を使ったのを誇りにしておられるのに、いたく驚かされた。

詮索好きの私のこと、早速その当時の旧号を次々調べてゆくが、一向に見当たらない。何しろ、昭和三十年という、奇クにとっては大厄年のとして、爛熟開花、全盛時代を迎えた三月、警察の不当弾圧で、箕田氏始め、関係者、そしてこの私に迄も累が及んで、五月号で中断しているのである。約半年間の空白があつて、見るも哀れな、薄っぺらな白表紙で再刊し

たのが、三十年十月号。

念の為、風俗誌として出発した昭和二十七年六月号より根氣よく繰ってゆくと、あつた、あつた。

昭和二十八年八月号に住田弘志というペンネームで羽村京子さんの宛の、前掲のエッセイが掲載されていた。それ以前までに、確かに「アリス」なる杉本氏の新造語は見当たらない。現在のSM同好者なら殆ど知っている、この「アリス」という、表現の美しい言葉が、十八年有余の昔、奇クから発表されたということは、誠に嬉しい極みである。

市井の小説家、作家諸氏も、この語字を、あえて当然の様に使用し、かくいう私も又、大いに借用していたが、今更になって、この人の新造語には、謹んで敬意を表したいのである。

× × ×

性に対する女性の羞恥が、最近頗に薄れつつある時、残された羞恥の対象を、私はここに見出して

いた。排泄と汚穢にまみれるポイントの觀念が、今後も存続する以上、ここは羞恥の、とっときの場所のように思えてならない。私のSMプレイの興味は、近頃とくに、こ

こへ集中するようになっていた。アリスなる呼称は、既に一般普及化して久しい。かつては肛門菊座、絞り染、チューブの口、も

っと極端になると、尻の穴と、ズバリ呼ばれる時もある。かつて、サド、マゾの略称として、SMの語を普及させた如く、沼正三氏によってハルンをネクターと讃えて、神酒化した如く、羽村京子さんは、A感覚と称えた

が、アリスに対し、何かもっと素晴らしい、愛称はないものであろうか。ポルノ小説が、どんどん出廻り始め、実に盛り沢山な、性的新語がつくられてゆく。辞典を引いても、見当もつきそうもない代替語が、セックスの表現に、堂々罷り通っている世の中である。

SMカメラ・ハントに、アリスに対する新造語を作ってみよう

と散々無い智恵を絞ってみたが、杉本弘志氏の名句「アリス」にかわるような、いい語句は浮かんでこない。

ノズルという筒口で、むしろ男性的であるし、アーチとなるとどうも門が広すぎて、しまりがな

い。サドの「悪徳の栄え」では、専らアリスが、主流を占めているので、渋沢竜彦氏は、訳すに、相当努力されて、江戸好色本などから、代替の隠語を探されたが、第三の性のここに、奇クならではの呀っというような代名詞があれば諸賢では是非、発表していただきた

いと切望している。アリスに対する興味は、既に世界的であることを、先日、観た映画「肉体の悪魔」が立証していた。

物語の核心は、キリスト教徒の新教と旧教の相剋であるが、坊主頭、振り立てての、尼の群れの、全裸の酒池肉林は、余りにも凄まじい。主キリストとの姦淫を夢みるような、けしからぬ修道院の尼僧の婦長が、夢の中の姦淫を事実として伝え、荒くれ男共によって戒律的な拷問をうける。優に数リットルは入りそうな、

すごく大きい浣腸器に、ドロドロした浣腸液が吸い込まれ、押えつけられた尼僧の、ころもの裾をたくし上げて、大量浣腸を行い、肉体に果喰う悪魔を追い払おうとする。キリスト教徒の対立なんてどうでもよい。浣腸シーンの迫真力は思わずゴクリと唾をのむ凄まじさである。そして、これが一つの断片——。全篇を蔽って、おどろおどろした妖気の立ち籠めたポルノ映画。一見を奨めたい。

× × ×

ニセの辻村隆が存在するのにはビックリした。

私の名で、女性宛に手紙を出し例のハズかしい映画「性倒錯の世界」の、女性の反響をきく、モニターを募っているのである。

便箋三枚に書かれた内容は、モニターに名を藉りて、SMプレイの内容、意義などを、かなり露骨な筆致で、綿々と書き綴っていて最後に、モニターとしてではなくこうしたSMプレイを伴う性愛を実際に体験されるのなら、一万以



理恵女々 再生

沢潟しの

上十万円迄の謝礼を以て、何時でもお迎えします云々と、どうやら本心は、そこにあるらしく、かなり熱心に奨めて結んである。

可怪しいのは、その女性が連絡する先で、奇巧の私書函番号、出版編集部、辻村隆宛になっていくことで、若し本当に彼女が連絡して来た時、このお節介なニセの辻村隆、どうする所存だったのであろう。

こうしたことが判明したのは、そのニセの私から差し出した手紙が、当の女性の住所が、宛先不明で、編集部に送られてきたのを私宅に転送されてきたからである。

(大阪市住吉区粉浜中一ノ八、浜口明美様)

私は、貴女を全然知りませんしヘンないたずらですから、辻村と名乗る男が現われても、絶対相手にしないで下さい。

この手紙の消印、兵庫県の西宮東である。私のファンは嬉しいけれど、度を過ぎると、誤解を招いて困ります。

詮索好きの私のこと、あれこれ推理した結果こんな結論が出た。

SM気のある男があるホステスと遊んだ時、偶々女性はSMに関心を持っていた。男は奇巧を見せ

辻村隆は親しい仲と詐称する。オレが伝えれば、辻村は映画のモニターを求めているから、きつとキミにも出してくるよと告げる。自ら書いた手紙が、運よく彼女の手許に届いた頃を見計り、カメラ・ハントを、辻村に依頼されたとい

って、あわよくばSMプレイへと持ち込む算段。カメラ・ハントを例月よんでいれば私に対する浅薄な知識位は持てようというもの。住吉の、粉浜周辺は、知る人ぞ知る、ホステスのアパートの巣である。彼が慌てて書き忘れたか、件の女性、わざとアパート名をいわなかったのか。かくて配達不能で私の手許へ入ったという次第。こんな推理も、あながち立たぬこともない。

× × ×

十一月五日の、サンケイ新聞夕刊に、(島一つ、売れる日もあり百貨店)という見出しで、不況ど吹く風とばかり、広島県竹原市沖の無人島、瀬戸内海の相賀島がデパートで売り出され、岸和田市の実業家によって、三千五百万円で落札されたというニュースは、誠に羨ましかった。買った白井某は「社会福祉施設、とくに、こどももの楽天地にしたい」と、奇篤そ

のものの方であるが、私なら、そんなテライは捨てて、同じ楽天地でも、SM同好者の天国、パノラマ島奇譚めいたものに仕上げるに違いない。

大阪商人のド根性で、心齋橋のそごう百貨店も、どえらいバーゲンをやるものである。もうおそろく、売りに出した四つの無人島はすべて買手がついたと思うが、せめて、その一つでも、同好者の手によって、フリーSMプレイの天国にならないものか——と、そんな大それた金の持ち合せもない私は、しきりに、ゴマメのハギシリ噛んで、惜しがり、口惜しがっているのである。

高々としたセンターポールに、汐風に吹かれる美女の逆吊り。常設の十字架。灼熱の太陽の下で、

躍進新年号を読んで……

福井桃子に魅せられる

東村和年

11月22日、仕事が終わっての帰り道、明日は休みというのに別に行く所もないので行きつけの本屋へ立ち寄った。何か面白い本はないかと探していると本屋の主人が

裸身をおつけ合って、SMのプレイに興じる男と女——。

そんな夢が叶えられたらなあと思っても、私のような心掛けの悪い男にとっては、所詮はユメの又夢のような他人事ではないようである。

× × ×

衝撃の告白を送ってきて、私風に訂して編集部に手渡した岸悠子英雄夫妻が、九月頃から、来る来るといい乍ら今以て実現しない。二人の旧婚旅行も、日が経てば日常の生活に支配され、再会の熱烈な欲びにも、いつしか馴れて、のびのびになっっているようである。彼女とのプレイを期待し、ハントするつもりも意欲も次第に薄れ、今やあなた任せの状態だが、いざとなれば、特別の急を要する用件

でもない限り、東京からは仲々訪問しにくいらしい。

旅行に、かなりの費用も要するとだし、お互いの仕事もあって、数日の休暇がとれぬのかも知れない。

長年、ハントに願望した憧憬の女人、悠子。彼女に対する、秘めた執念は、今も烈々と私の心をこがし続けている。一日千秋とは、このことであろうか。

そんな折、箕田氏から、耳寄りな話が持ちこまれて来た。

十月号の奇クサロン欄に、愛妻の緊縛図を發表された、若山巨人氏が、好意的な便りを編集部に寄せ私から誘えば或いは若山夫人はカメラ・ハントされてもいいという、願ってもない連絡であった。

一五七センチ、五七キロ。豊満

な若山夫人で、育ちのよい、おっとりとした顔立ちの、美人でいらっしゃる。

三浦純子夫人を誘ったように、渡部好美夫人とプレイしたように心秘かに被虐の願望を抱き乍らもそれを口に出来ぬ、つましきである。

早速にでも、お便りしたいと思っても、箕田氏の返事は、住所が判っきりしないということであった。若山氏も直接購読者の一人で編集部で住所が分かっているように思われているようだが、あなたの県下の直購の方は多い。伊都子夫人に直接にお手紙差し上げる機会を、一日も早くつくって戴きたいと切望しています。

編集部宛に住所をお知らせ下さい。

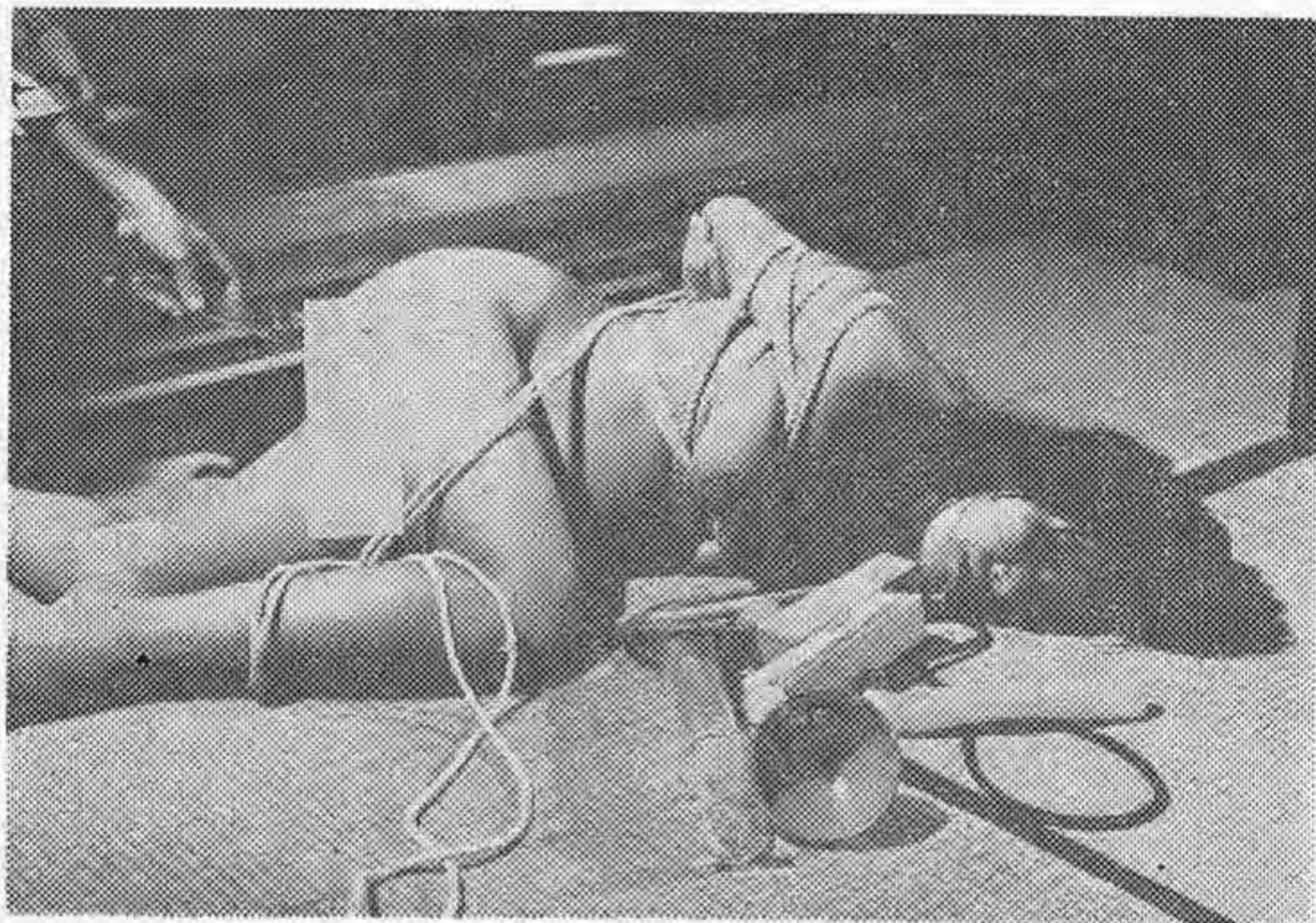
眠わっていたが私は家へ急いだ。家に着くなり取るものも取りあえず包装紙を開いてみたら、今迄とは異なった表紙が目にとび込んできた。何か高級な書物の様に見えるのは新年号だからイメージチェンジしたのかなと思った。今迄にも増して奇クが一回りも大きくなった感じがする。

SMという言葉がテレビなどに

登場しSMに無関心だった人も、手軽に書店で雑誌や本などを見る事が出来るようになった昨今、しかし、これらの雑誌は質よりも量というわけか何か同じ写真が違った雑誌にも載っているようだ。前号に掲載された文や写真が次号にも載せられてあり、何だか毎号毎号、同じ物を読まされている様な気持ちにさせられる。

そんな中で奇クは毎号毎号、目新しい内容趣向で読者を堪能させてくれるのには頭が下がる思いがする。新年号を一通り見て一番目についたのは旧年号にも増してフォトの掲載が多くなったのが目につく充実した内容で写真入りなので、今迄に増す読みごたえもあり、興奮度も満点である。テレビ流でいえばボクマンゾクウーである。

新年号で印象に残った読物を挙げてみると、まず一番にマダム芙美代の告白「浣腸って素敵ネ」である。福井桃子さんの前月号「縄にまつわる私の体験」に続いたの告白文であるが、マダムの文章を読んでいると何だか自分も一緒にプレイをしている様な気持ちになる。話しかける様な文章に、マダムの優しさが読者に伝わってくる様である。今月号の告白「浣腸って素敵ネ」を、読む（見る）と我々の夢を満たしてくれる思いがする。



喫させてくれる。次の告白文を大いに期待している。

二番目は「拷問ショー」これは今迄あまり使われなかった高圧電流を使つての責めである。「花と蛇」に似ている様だが「花と蛇」にはなかった責めなので違った興味を持って読ませて貰った。欺された順子が松山老人の家へつれて来られ親にも見せた事のない肉体を男達の前で一糸まとわずさらけだしベッドに縛りつけられ乳房圧迫器を使用しての乳房責め、そしてムチ打ちそれも普通のムチではなく皮バンド状の一寸おきに釘がとび出している物での責め、水責め、飲めるだけの水を飲ませる人間ポンプ責めは普通我々のプレイではとうてい出来ない事なので、読んでいて凄く興奮した。しかし、もっと驚いたのは電気に依る処女破りである。鉄製の箱

の突起した棒状の物に電流を通し胎内に電流を通じさせるといふ責めである。結局、順子は狂ってしまったが、よくこんな責めを考えたものだと思う。鶴見浩二氏の今後の活躍を大いに期待する。

そして第三番目は奇クの人気読物SMカメラハントである。辻村氏は今月号に「桎梏より遁れて」と「知りたい年頃」の二篇を発表されているが、いつも思うことだが、よくもまあ、こんなに次から次へとストーリーが浮かぶものだと感心する。カメラハン「知りたい年頃」では辻村氏の女性に対する思いやりが文面によく出ている。「いいんだらう縛って」「まだ我慢できる」など一寸した会話の中にも長い経験から女性心理を巧みにとらえ次のプレイへ移行するあたり心憎いばかりである。

毎号如何にしてプレイの強烈さを誌上に出すかという研究心。ともすればマンネリでファンにあきられる所を氏独特の節回しで毎号違った女性を責める事等、私にとってはうらやましい限りである。ちよっぴり嫉妬を感じる。辻村氏のバイタリテイにあふれる若さは若い女性とのプレイによって保たれると思う。御活躍を祈る。

全裸で後手に縛られ足を左右に開かれ前に浣腸器を置いてあるフォト等8枚に及ぶ写真がのっけてプレイのダイゴ味を十二分に満

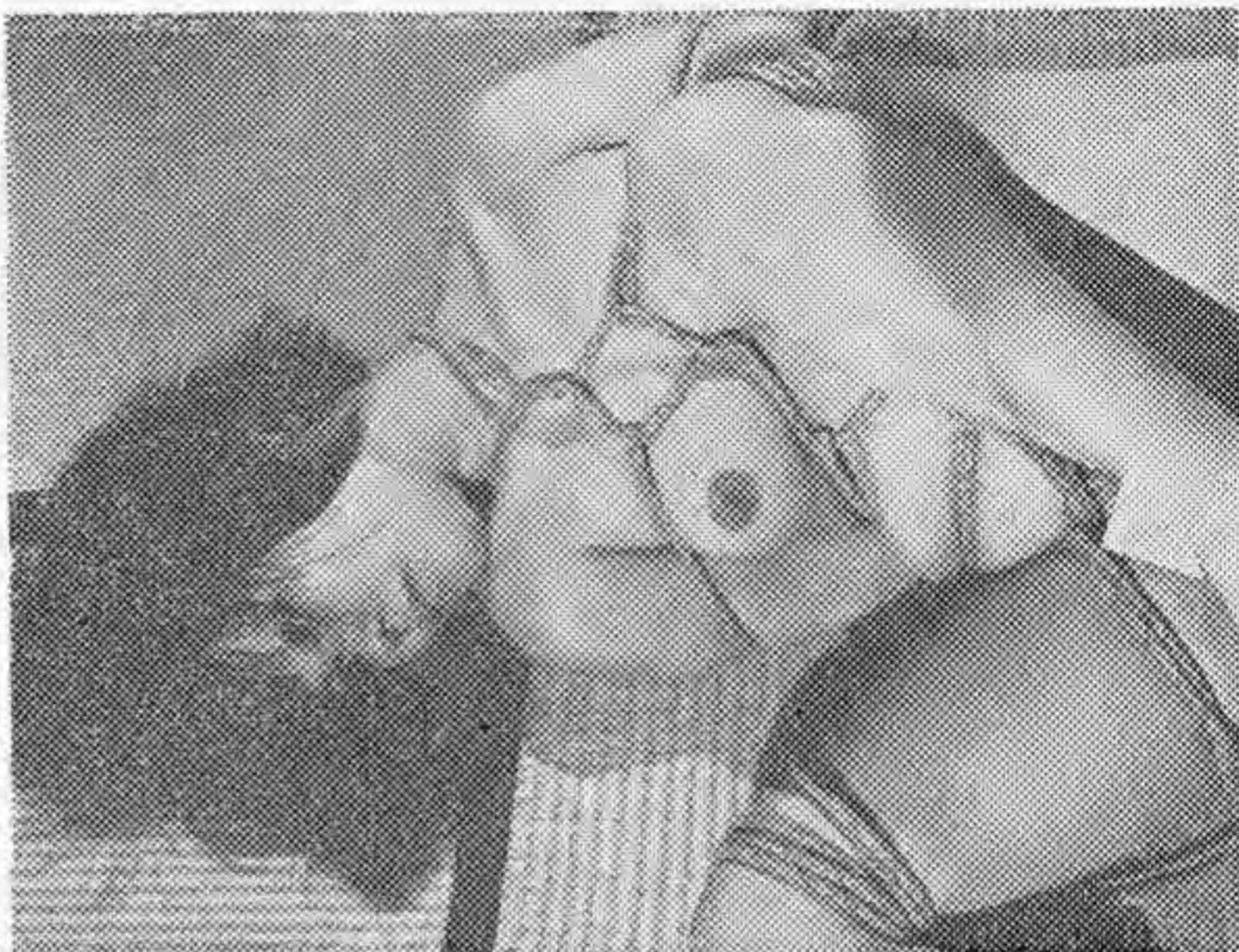
女性愛読者同志のSMプレイ

被虐を求めあった二人

小 杉 千 恵

十一月中旬の日
暮れは早やすぎる
ほど早く、五時ス
ギなのに夕闇が私
をとりかこんでい
ました。

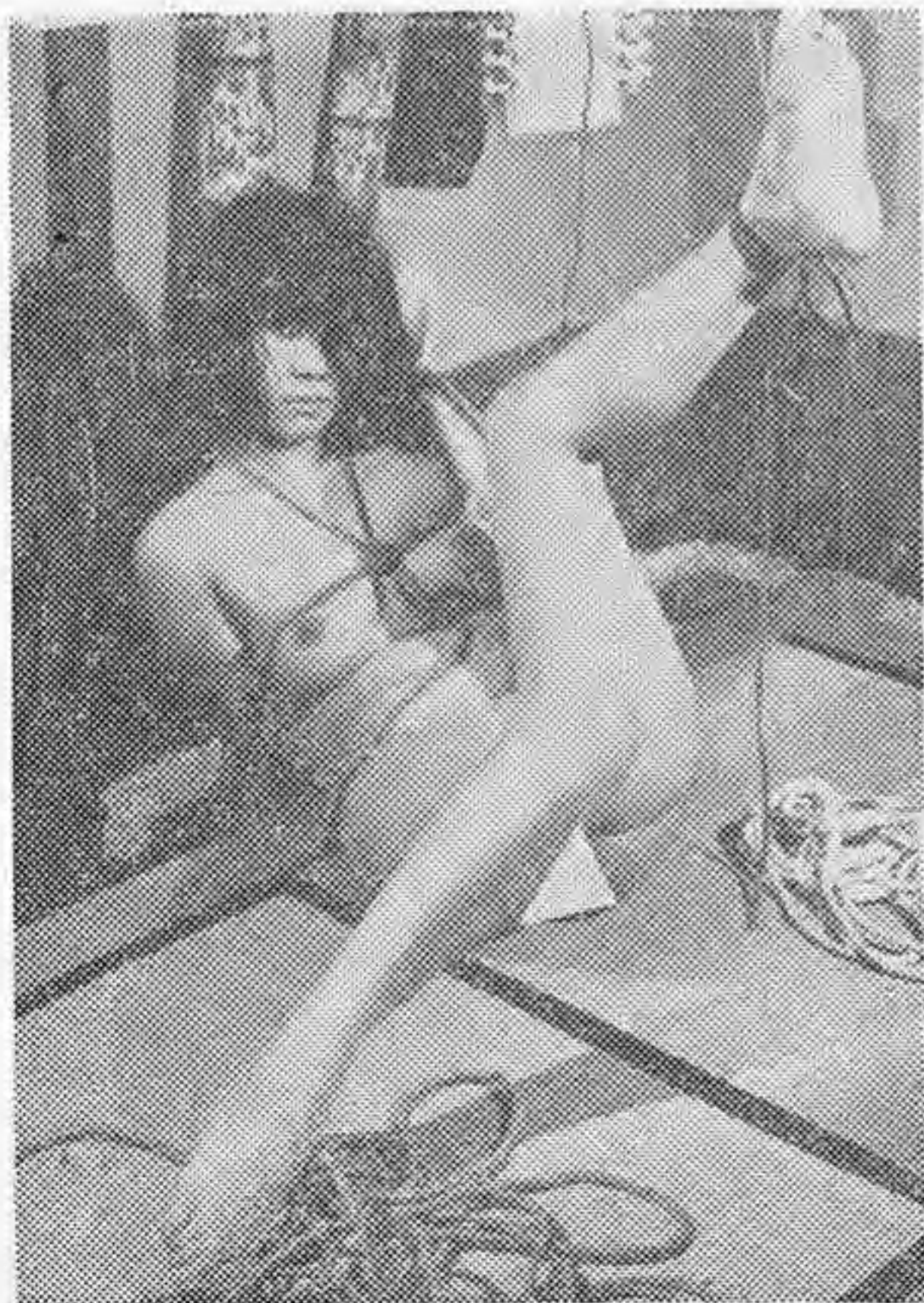
二十六才の人妻の身でありなが
ら未婚の頃からの被虐願望の想い
を絶ち難く長い間、投稿を続けて
まいりました私が、自分でわから
ないまま「深田菊子様のレポを」
とお手紙を差し上げてしまったの
です。熱情の激しさが編集部に通
じたのでしょうか、詳細打合せの
親書を手にしてしまいました。



菊子さまが若い同性になぶられ
ることを、どう解釈するかわから
ないので、菊子さまをあらかじめ
全裸にして縛っておいてから途中
で私を部屋へ招き入れるとの事で
した。そのため、男性の方が一名
だけ、私との待合せ場所に迎えに
来て下さるので、その旨諒承され
たいとお手紙でした。

その時、なんにも感じませんで
したが、こうして暮色の中に、た
たずんでおりますと、ひょっとし
たら、私は菊子さまなどのいない
野卑な男性ばかりのところへ連れ
込まれてしまうのではないかと不
安に思い始めた頃、私の前に一台
の立派な黒塗りの乗用車が、とま
りました。

部屋に入った途端、私の不安は
かき消され、驚きと悦びの交錯し
た複雑な感情で胸がドキンドキ
ンと鳴りました。生れて始めての凄
まじく美しい光景を見たのです。



日本座敷の二間つづきの丁度ラ
ンマの真下に三枚の座布団が並べ
て敷かれ、その上に身に一糸も許
されない恥かしい姿で両手を頭上
に万才させられた形で固定され、
両足首にロープを結びつけられて
ランマに、まるで赤ちゃんが母親
にオシメをとりかえて貰っている
ような有様で八の字形に、美しい
両肢をつり上げられている深田菊
子さまを見たのです。

菊子さまも予期しない若い女性
の闖入に、思わず小さな悲鳴を洩
らしました。部屋には、もう一人

一輪花、慶子よ

小西一郎

一輪花、悲しき運命耐え忍びし
あわせ摺めとただ祈るのみ

○

ボクはバカで醜男やよってに、
キミの手記を読ましてもろた時に
ジーンと胸にくるものと、ガック
リするもんがあったんや。
流暢な文章、サスガ大卒や。詩
がお好きやナ。ボクのトツツアン
がいうてた。詩の好きな人は、心
の美人や、て。キミは心だけとチ
ャウ。顔も体も揃うたホンマの美
人や。それやのに、と思たらジ
ンときたんや。ガックリのほうは
いわんでもわかるやろ？

若い未亡人、頑張ってや。ボク
も妻を亡くしたんや。ボクが殺し
たようなもんやけど。スピードオ
ーバーは恐いなア、ボクが運転し
てたんやけど。あの時、もし縛っ
て乗せてたら？ と思うたらゾッ
とするわ。けどホンマに辛かった
さかいキミの気持もよう分かる。
はよ幸を掴みや、縄に依ってナ。

○

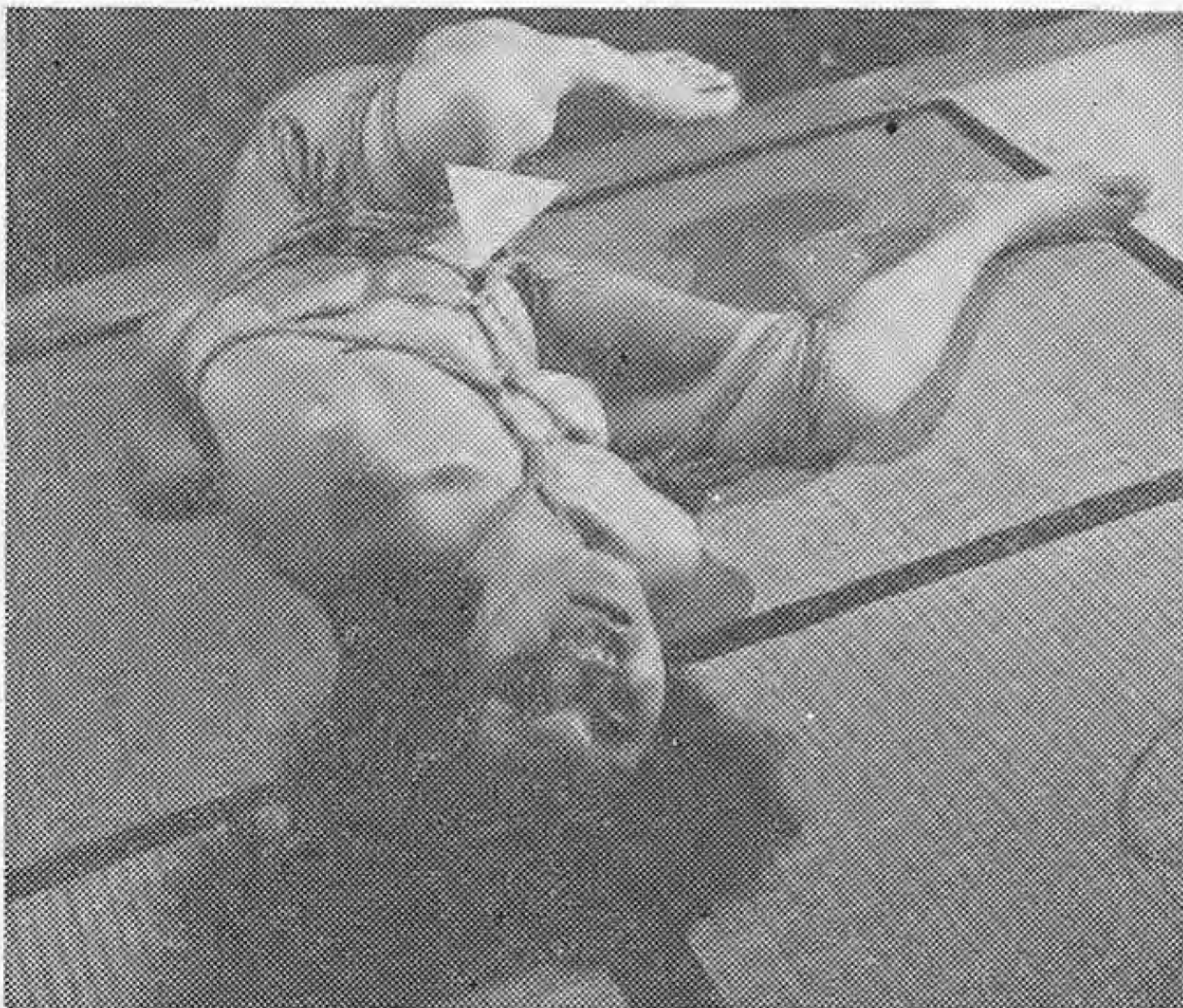
一輪花、素肌で吸い込め縄の味
Mの生甲斐尽くるはあるまじ

介添えの男の方がいらっしやいま
したが、その方が、「こんなこと
約束してないわ」と控え目に抗
議される菊子さまの一番恥かしい
個所がまともに見える場所に私を
坐らせ、私が菊子さまと同じ読者

通信女性の小杉
千恵であること
を告げました。

そして私が決
してサジストで
もなく、またレ
スピアンでもな
いこと、それに
菊子さまの被虐
の美しさから自
分自身の被虐願
望を満足させよ
うと願っている
女性であること
を彼女に kanssa
ふくめるように
説明して下さい
ました。

私は目まいを
覚えながら、菊
子さまの縛られ
たお姿を十分に
観賞させていた
だき、おすすめ
により大小二個



のパイプを軽く使わせたが使わせて
いただきました。浣腸させてはし
いという気持ちが強かったのですが
この方は、恥かしくて私は言い出
せませんでした。実はハンドッグ
の中に、イチジク浣腸と小型の浣

腸器をしのばせてまいりましたの
ですが、これすら、皆さまの前に
は、とり出す勇氣はありませんで
した。

ほんの少しの時間でしたが、菊
子さまを、より一層、羞かしめる

ために私を、わざわざ呼
び出された効果は、あっ
たようです。

そして、他の男性の方
々も、こんなヘンな女性
である千恵に対して、大
きな好奇心を持たれたよ
うで、いろいろと質問を
されるのですが、恥かし
がり屋の千恵は、十分の
お返事をようしないので、
その点では失望を与えた
ようでした。

あんなに礼儀正しくし
ないで、もっと千恵を淫
らな女として扱うなり、
もう一人のモデルとして
「縛ってやろう」と言わ
れたら、千恵もひょっと
したら、ズロースを脱い
でいたかもしれないが
紳士的？ な編集部の方
は、そんなことも言われ
ず無事に家へ帰ってま
いりました。

新年号読後感……志賀三平

貴誌愛読以来、既に六年。その間、世の移り変わりも激しく執筆者や登場人物など、入れ交わり立ち交わりしているが、毎月毎月、発売日が待ち遠しくて、いつも真

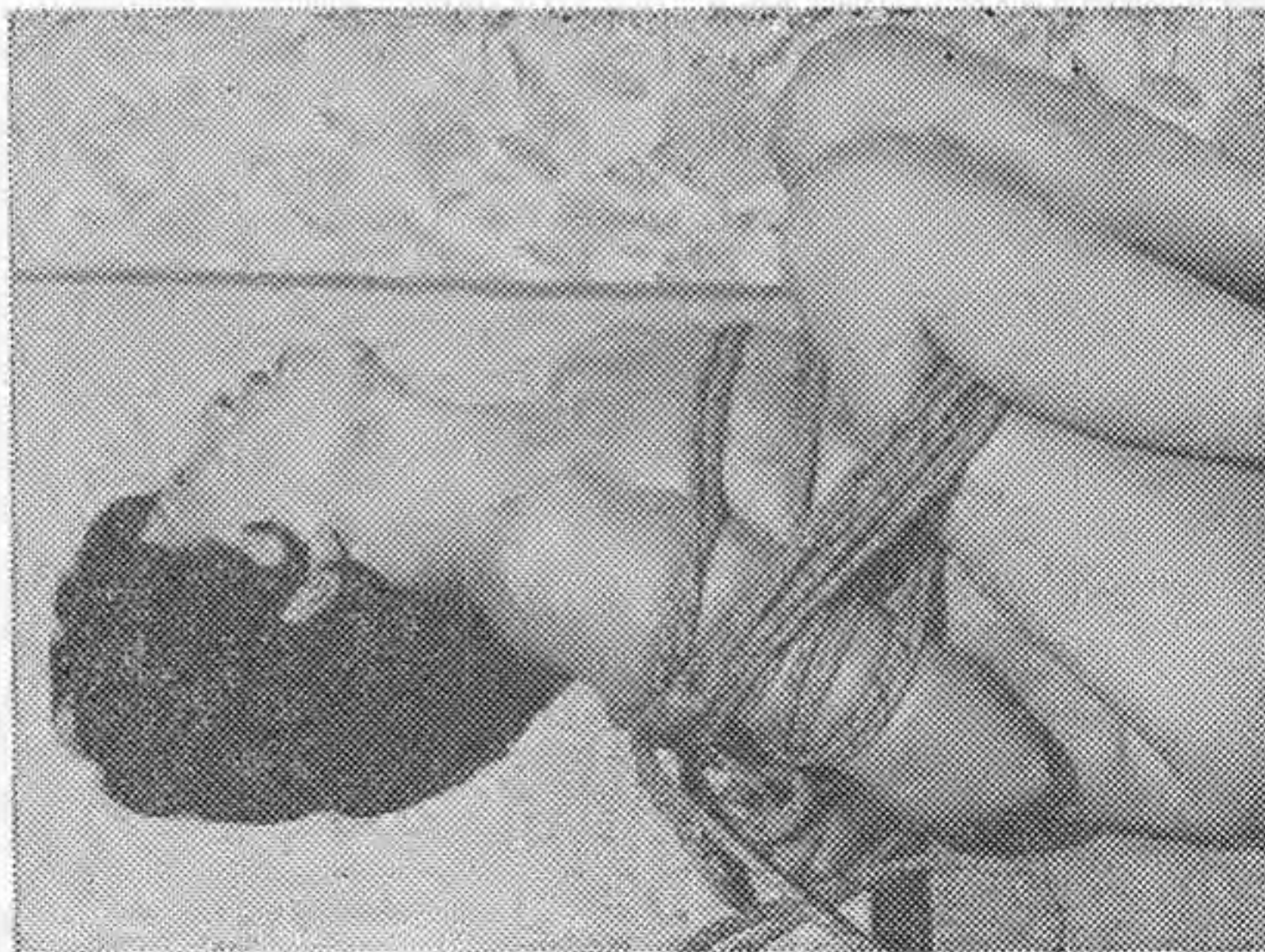
先に書店を訪れては、買い求めていた僕の心には交わりはない。買い求めた貴誌を只一人自室に籠って読み耽る時、僕はSMの夢幻境に遊んでいる錯覚に陥り、この世界の住人になりきってう。

時には、この世の

女性の総てがM女ではないかと思ったり又眼の前の女性を緊縛してみたり、股間責めにしてみたり、乳房を責めてみたり妖しい夢想は尽きること知らない。しかし、実際はそのような女性が眼の前に現われる筈もなく、はかない望みを貴誌で慰め、緊縛フォトを眺めることによつて、僅かに昇華している。

そんなS好みの僕にとって貴誌1月号は全くショックの連続で脳天から足の先

まで、しびれさすに十分だった。昨秋から、とみに写真の充実してきた貴誌ではあるが1月号に至つて僕は衝撃的なパンチを受けた。毎月毎月、よくもこのように新しいM女が登場するものと悦にいつていたが、深田菊子嬢、高村浩子嬢、江口淑子さん、福田桃子



さん、荒尾慶子さん、森川美紗さん——と、いずれも若くて美しい女性の縛られ姿に涎を流して、快いS心を、くすぐられていた。

それが1月号では、またまたM女の新人松本たえさんが現われ、僕のS心を百二十％満足させてくれた。塚本鉄三氏のカメラポルターージュ『全日空機で来た女』はまさに僕を有頂天にさせた。流暢な流れるような文章のうまさもさることながら縛られて、うっと

りと恍惚境をさまよっているような、この松本たえの表情は、なんと素晴らしい事だろう。文章を読みこの写真を見た僕は、思わず電流にかかったよう、S度に拍車がかかってしまった。

猿ぐつわを噛まされた表情もさることながら、42頁、45頁の猿ぐ



浣腸タバコ責め

域野道一

つわのない悦虐表情は全く以てたまらない。S好みの僕を容赦なく夢幻の世界へさそい込んでくれるのに十分な内容であった。

1月号は「全日空機で来た女」を筆頭に僕の心を奮わすに足る作品が目白押しに並んでいて近來にないボリュームのある号となっていた。マダム芙美代の告白で名をなした福井桃子さんの「浣腸って素敵ネ」もよかった。余り浣腸に関心のない僕だが、この語り口と写真には参った。まだまだ続くよ、うなので、浣腸だけでなく純粹の責めについて得意の饒舌で責めとSMを語ってもらいたいものだ。

益田茂夫氏の「憧れの深田菊子」を縛る」のトップに出た深田菊子

嬢の緊縛写真は、本当に僕の肉体の液体という液体をしぼりだしてしまった程、感激的な写真であった。猿ぐつわを噛まされて憂いを帯びた表情もよいが、綺麗な足が前に揃えて出されているのは可愛かった。二一八頁の菱縄縛りも菊子嬢の美貌を余すところなくさらけだしていて異存なし。

という、奇クサロンにも素晴らしい写真が載っていた。「佳人荒尾慶子さんを思う」に載っていたエビ縛りの慶子さんの写真。美しい、全く美しい。こんな緊縛美人だったら、好きにならないのが不思議なくらいだ。もっとも、僕のような素寒貧は好きにならなかったでしょうもないことだが。

御大、辻村先生のカメラハント「知りたい年頃」は僕の毎号愛読おかげの作品。さすがに僕の心を奥底から引きずり出してしまうような巧みさで、大沢妙子さんの可憐さを、よく表わしていた。

巻頭の渡部光雄氏の衝撃の告白「SM願望の終着駅」も全く驚きであった。よくぞここまで徹底されたと讃辞を呈すのみ。独身者の僕には夫婦の心情の機微はわからないが、それでも渡部氏の気持は同じS派として分かるつもりだ。一筋の羨望に似た気持を抱きつつ例の夢仙境に逃避した僕である。

に、妖しい空想妄想を描かせてくれた。中でも、今月号から掲載された鶴見浩一氏の「拷問シヨウ」はスタイルは今迄の作品に似ていそうでありながら、どこか少し違うぞ——という感じがする。何が違うのか、今後に期待したい。

連載物では極道軒氏の「紫蘭の門」が粘着性のあるタッチで時代物特有の空想の翼を無限大に伸ばしてくる。もっとも、ひどく責めよ、責めてくれ。同じく千葉青鬼氏の「大噴火」も凄く責めの連続で僕のS心をうならせてくれた。連載40回、よくぞ続いた。かくれたファン、ここにあり。頑張ってくれ。頼む。

さいこと。臭いに弱い私は参りましたが、ここで例のタバコ責めが相乗的に好結果を挙げたのです。

ドドツとくるまで8ミリで一部始終、追跡して一発の終わり。

彼女も、くさいのには滅法弱く、「タバコを吸いながらの浣腸だったら、まあやってみるわ。あら、やられてみるのが本当？」と言っ

2回目はマドロスパイプに変えさせましたが、排泄量は少なく、尻からタバコの白い煙がプシューと噴出。

て、吸えもしない葉巻を二本同時に啞えて吸いながら、という事になりましたが、ホテルの狭い一穴、便所で、スパスパやらせていると煙がバスにまで洩れてきます。ド

彼女は見えなから平気でふかしていましたが、8ミリを見たらきつと驚くことでしょう。どんな顔をするか、楽しみです。

浣腸タバコ責めのフォトが出来ましたら、またお送りします。

SM雑誌も手に負えないほど多いが、やはり奇クと、その中でも辻村先生のフォトは素晴らしい。私はいつまでたっても「タバコ責め」が忘れられずにいます。浣腸責め全盛の昨今、私もちょっと真似をと、可愛い女の子を素っ裸にして後手に縛り上げ、腰縄を打って、浣腸を試みました。しかし排泄時のくさいこと、く



山光純氏の

パロディ「花と蛇」に

期待する

梶 美鬼

S小説の極致、女体の隅々までをいじめつくした団鬼六氏の「花と蛇」が、ついに幕を閉じる。

私は毎号、辻村隆氏の「カメラハント」と「花と蛇」だけでも三百五十円以上の価値を見出していたものであるが、この二つがSM界に与えた影響は大きいと思う。夫婦プレイ・フォートの続出。女性モデルの名のり。そして、世のSMブームとポルノ出現への道標でもあっただろう。

夫婦プレイでは百分近い女性が「静子」の如く剃毛をうけ、辻村氏のハントでも、剃毛や排尿シーンが続出した。

多くのSMファンの先駆者的役割を果たした「花と蛇」そして夢の女性であった静子、京子、桂子、小夜子たちは去って行ってしまふのか。

静子に与えられたM性の開花。そして豊かな身に受けた数々のい

たぶり。浣腸責めにはじまり、多くの人目にすいつかれる羞恥責めや、アヌス責め。さらには大きく股を開かれての排尿責めなど、全く女体責めの極致であった。

蓄であった小夜子の開花。真白いパンティを足首にすり下げられたの生卵責め、可愛い上品なアヌスへの責めなど、今でも頭から離れない描写で、実に微に入り細に亘っていて、まるで、ねっとりとした搗きたての餅に指を突き立てたような思いにさせてくれた。

それが、ついに未完のままのうちに、想像の余地を私の頭の中に残したまま幕を閉じた。

団氏の小説は終わっても静子や京子や小夜子や桂子は死なない。私の夢想の中に永遠に生き続けてS心を満喫させてくれる。そしてその化身ともいうべき美人モデルに乗り移ってくれるのだ。深田菊子がいる。荒尾慶子がい

る。前田真知子がいる。大胆でハレンチな責めを望む美女のモデル志望者がいる。

静子の乗り移りのようなM女性の名乗りが続く。即ち、高村浩子であり、江口淑子であり、三浦純子であり、渡部好美である。

まだまだ居るであろう。さらにこれから続々と現われるに違いない。巷に溢れるSM小説の氾濫から見ても静子や小夜子の面影を秘めた女性はいくつもいる。

奇々十二月号では「贗作・花と蛇」が、山光純氏によってみずみずしい実りをみせている。団氏の静子夫人を、ダッチワイフに命を与えた幻夢の女性として磨き上げて、Mの追及をやめなかった。いや、Mを求めて更に美しくなっているのである。そして「花と蛇」を美事に受け継ぎ、もう一つの角度から、桂子をセックス奴隷として責めている。しかも嬉しいことに未完なのである。来月から、またまた楽しみが増える。

これからも、多くの団氏、多くの静子、多くの小夜子が出現するのではないだろうか。永久に「花と蛇」は生きつづけ、私の心に住みつき、女体を責める華麗な夢を見せてくれることだろう。

編集部だより

○山光純氏が団鬼六氏よりバトンタッチして『パロディ花と蛇』を引続いて連載して下さることになった。読者ファンの方々と共に誌面を盛り上げたい——と言っておられるので、アイデア提供につき皆様の協力を賜れば幸いである。

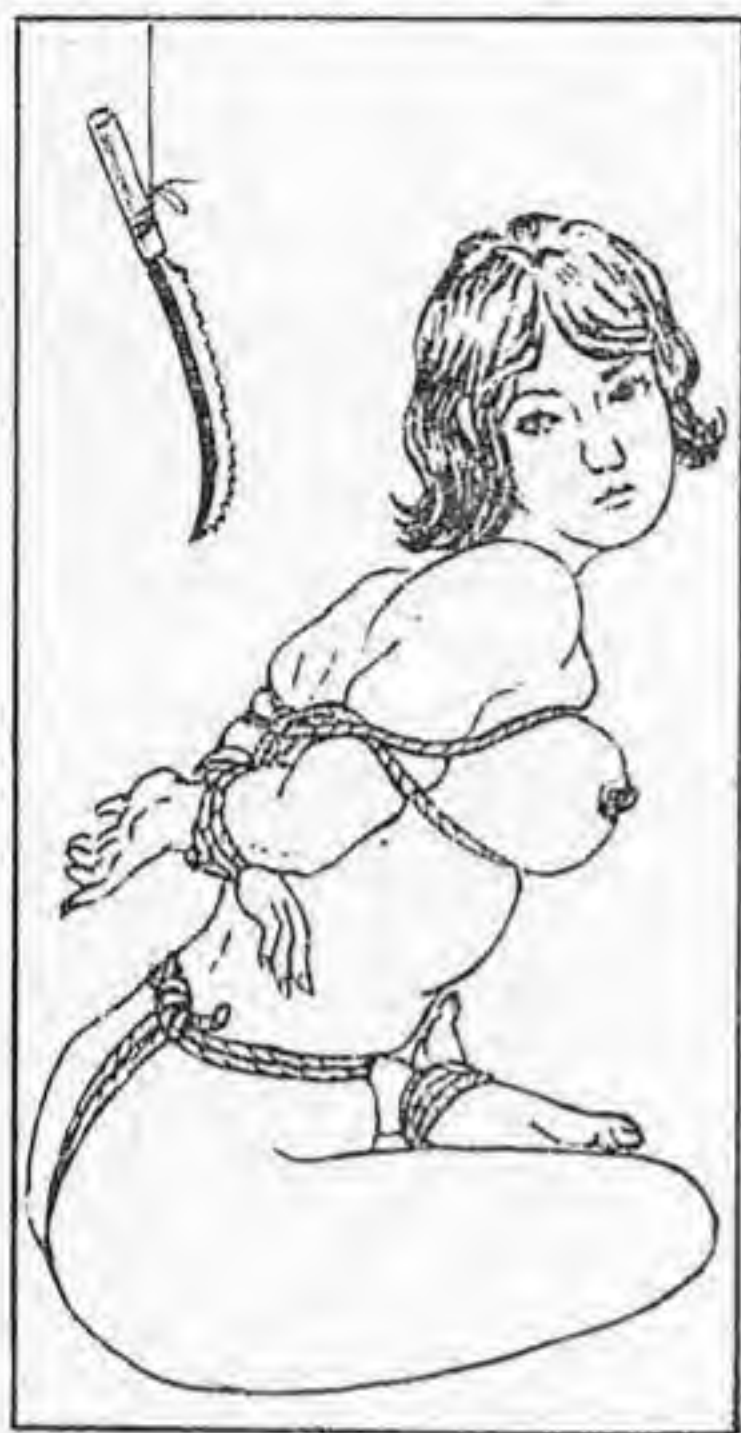
○兵庫県在住の大橋美代子さんは10月末交通事故にあい、左太腿部骨折という重傷を負われ入院された由、そのため、執筆中の告白文『逆さ吊り残酷記』は残念ながら掲載中止となった。

○M男を責めてみたいと言いだしたマダム美美代コト福井桃子さんは、またまた爆弾的な衝撃を与えようとした舌を吐きはじめた。これは彼女の身体的変化に関することなので編集部でも驚き且、弱り果てている。それは次号あたりで誌上で明らかにされるだろう。

○次々とM女性を開拓してきた塚本氏が芸者福竜(松本たえ)をどのように飼育してゆくか興味のあるところだが、今月号の「縄に恋した女」を読むと、差し当り『女シリーズ』でも書いて貰えそうな

『お帰りはご自由に』

— 堀 真彦 —



奇ク最近号を読みて

左 根 情 雄

貴誌奇譚クラブを久方振りに購読。辻村隆先生の「快樂のスーベニア」に魅了され、何回も繰り返し読み、眺む。SMマニヤなら、私ならずとも大なり小なり相似通う、カメラ・ハント的有形無形の共通体験を有する者が多いと思

うが、美紗の被虐美あふるるフォトや、とりかわされる会話の端々に、他人事ならぬマニヤの宿命を感受し、おのが想い出に耽りたること必定。

また、暫時みぬ間に誌上、美花百花爛漫を競うの感深く、奇ク健在をマニヤの一人として慶びに耐えぬ。福井桃子、谷山久美子、荒尾慶子、江口淑子、高村浩子、深

田菊子とその艶麗眩惑の美体に我を忘るる想い。

11月号と12月号のみを読みて言をろうするはおこがましいが、なかでも深田菊子嬢に寄する愛読者の想い、サロン欄や通信欄に満ちあふるる様、同好の士多しと慶賀の至り。加うるに、かの菊子嬢が読者通信より披露されたる真実のM女性と知り、驚きと喜びの交錯せる思いである。夢幻的なSとMの耽美の世界を身边に展開して数少ない自分達の性癖を、妄想の甘美な世界の中に遊樂させるを唯一の慰めとする自分ら愛読者の為に菊子が、いついつまでも誌上に、その妖美な美しさを再演して呉れ

ることを望みたい。

菊子よ。そなたの身に纏うは衣服にあらざりて縄であり、革製のベルトである。また、身を飾るは寶石や真珠のアクセサリにあらざりて、パイプライターであり、浣腸用の太くたくましい注射器である。私もまた、伏して菊子の美しさの前に、SMプレー・ルポ・ライター採用の夢を託する男性でありたいと望む一人である。生まれたままの姿の菊子を想うがままに縛りあげて、自由を失いて無抵抗な姿を曝す菊子を、足下に睥睨なし得た際のSの快感。男の本懐につきると存じる。滑車につられ、菊子が失禁するならば、直ちに囁るだけのアブ・ラブぐらいは、充分に心得ているつもりである。要するにSMの原点とは「快」にあり。その媒体は美しきM女にあると思う。そのM女達に現在豊富に恵まれた感深き奇譚クラブの有様を最近号に垣間見て、巷間のポルノばかりに堂々と対処しえる老舗ぶりを心強く思う。

前述の美女達が世評にめげず、大胆にMを求めて酔い痴れ、幻想と現実の間を快美な感覚の彷徨といった状態に、愛読者をして遊化せしめることを祈るのみ。

気がする。忙しい氏のことだからそう問屋が卸すかどうか疑問であるが読者と共に期待しておこう。

○敗戦時の北満に於ける日本娘の悲運を体験した筆者鈴鹿晶子さんの告白「北満哀歌」が送られてきた。第一回分「日本娘を襲う餓狼の群」はS小説「花と蛇」以上の生々しさで読む者の胸に迫ってくる。余りにも迫力のあり過ぎる描写のため編集部で手直ししているが、いずれ誌上を飾れると思う。

○毎月、精力的な大活躍を続けてくれている辻村氏のカメラハントの来月号は可憐「野村信子」次々号は渡部好美夫人を中心とした衝撃のハントハ輪舞のプレイVと予定されているが、岸悠子夫妻の都合如何によっては、辻村氏の手で緊縛された岸悠子がハント文と共に掲載されるかもしれない。

○「夫婦プレイの体験や記録」その他ハ奇クサロンV向の原稿を送付下さった方には編集部作成の緊縛フォトを贈呈しているが未入手の方は通報あり次第急送する。

○SM資料の処分を望まれる方はその内容をお知らせ下されば時価以上で買い求めたい。希望に依っては当方資料との交換にも応ずるので編集部宛、御一報頂きたい。

夢『静子の歌』
北川まりこ

観客に裸身を晒しあさましき
実演の日ぞ今日は悲しや

○
後ろ手のこの身に掛かる縄の筋
せめてものこと多かれと願う

○
数々の淫靡な芸を演じるは
お座敷ショーのスターとしてなり

○
一匹の性獣たらんと念ずれど
湧きくる羞恥いかにとやせむ

○
突き刺さる多くの視線に肌痛く
甘きネダリの言葉も途絶えむ

○
群がりて襲いきたりし客の手に
揉みひしがれて暗黒に陥つ

○
淫らなるいたぶり待つや胸丘の
二つの乳首さくら色して

○
じわじわと心の奥からこみ上ぐ
る被虐の期待マゾの悦び

○
凌辱を待ちて慄えるこの素肌
妖しき気持払うすべなし

告白

剃毛式と辻村先生

佐野 みさ子

奴隷妻みさ子は、もうそろそろ
三十才。肉体的にも今が一番成熟
している時です。すでにSMプレ
イも十数回になります。夫以外の
男性の前で全裸になり恥かしい開
股ポーズで、こけしやバナナを使
って写真を撮られたりしました。

○
しかし今までのプレイは特定の
男性ばかりであり、最近では少し
物足りなさを感じておりました。
そこで奇クサロンを通じて、みな
さまにお呼びかけを致しました結
果、たくさんの方々から、お便り

をいただきました。なかでも、中
宮さん、阪東さんのお二人は信頼
出来る方とお見受け致します。

○
でも、みさ子は少々困ってしま
いました。中宮さんを立てれば阪
東さんが立たず、阪東さんを立て
れば中宮さんに「何時になつたら
来てくれるんだ」と叱られてしま
います。そこで、みさ子は考えま
した。まず第一番にSM界でも又
マスコミにも有名な辻村先生のカ
メラハントのお相手をさせていた
だき、辻村先生にピーナスの丘の

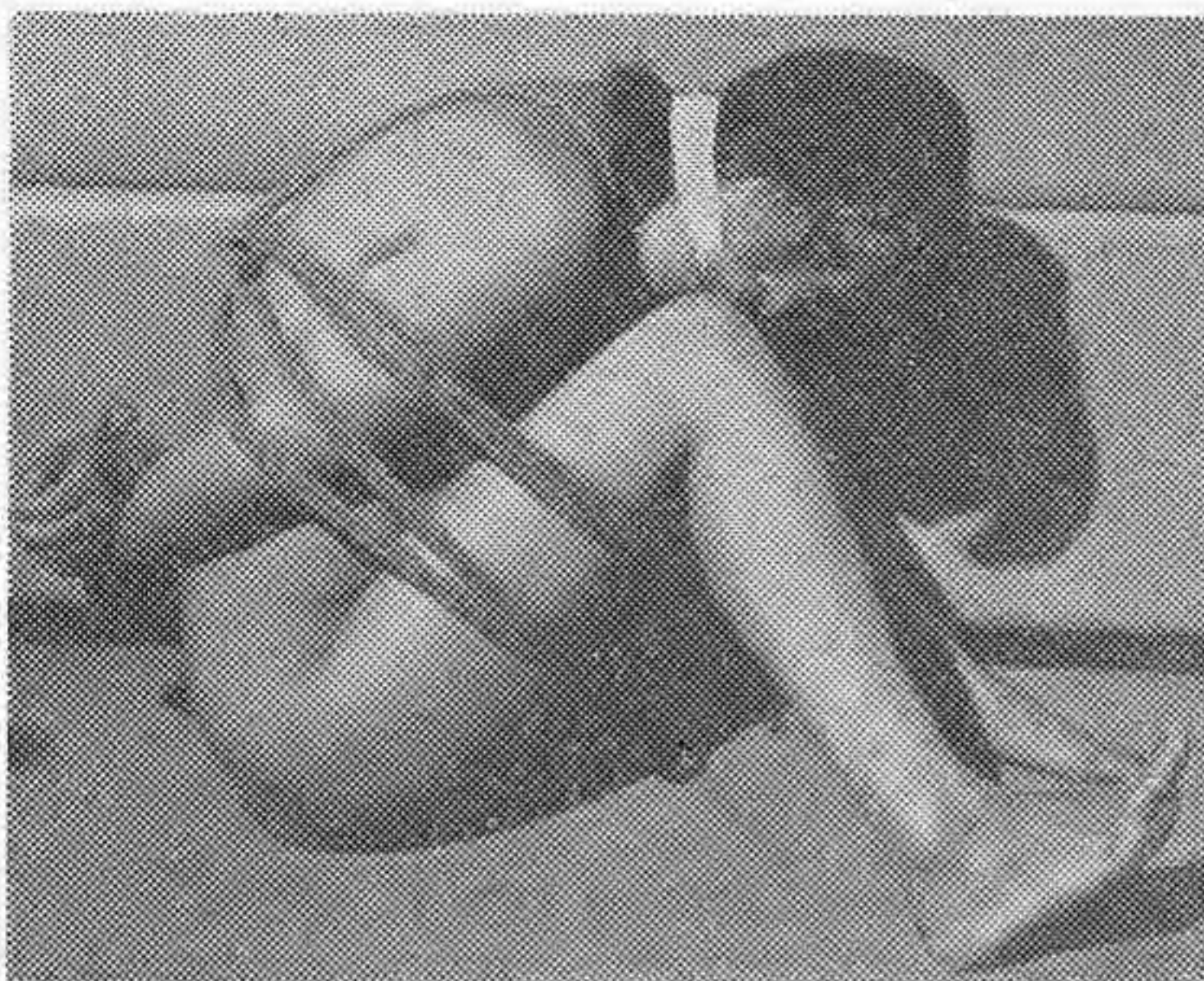


剃毛をしてもらいます。そして、
そのありさまは写真と共に誌上に
発表され、みさ子が完全なM女で
ある事を奇クファンの方々に証明
していただきます。

○
そして、その後で中宮さん、阪
東さんともプレーを実施したいと
思います。お初が辻村先生なら、
お二人共理解して下さいと思いま
す。剃毛されてこそ、本当の奴隷
になれるのです。

○
三浦夫人、渡部夫人、谷山久美
子さん、関谷夫人、みな剃毛され
ており、みさ子もその仲間入り
をしたく思っております。又そ
れを辻村先生の手でやってほしか
ったのです。二回目三回目は、ど
なたか希望される方にやってもら
うとしても、生まれて始めての剃
毛式には、ぜひ有名な辻村先生に
お願い致します。

○
そして逆立ち開股ポーズにして
ローソクを立てて電気を消し、人
間灯台として、気のすむまで女体
の神秘を眺めて下さい。剃毛され
てすべすべしたピーナスの丘から
下腹部へかけて流れる蠟涙のした
たりは、きつとみさ子にSMプレ
イの本当のよろこびを与えてくれ
ることでしょう。



△M女通信▽ 深田菊子様へ

乃美対造

深田菊子様。貴女を縛ってから早いもので、もう二カ月以上もたちました。しかし、私は貴女が忘れられません。

貴女を全裸にして後手に縛りあげて逃げまわらないように仰臥さ

せ、牝鹿のような美しい両肢を赤ン坊のオシメ替えのようにつり上げて拘束し終えた時、全身を貫くような雄の快感を感じました。

シクシクとすすり泣くかと思えば大仰に声をあげて笑う貴女の没入ぶりに、SMプレイに憧れて読者通信欄より姿を現実のものにした貴女の内面から盛りあがる起爆力の凄まじさを、いやが上にも感

知させられました。

SMに対して燃え上がる貴女の願望の焰を消さないで長く誌上の友として多くさることをお願いします。被虐への感情と甘美な感覚とのせめぎ合いから、虚飾につつまれた人間性を離脱した自然への到達が、新しい耽美への衝撃となつて、いどみあう息の合ったSMプレイへと、昂華していったと思います。

再会を夢見つつペンをおきます。御健勝を祈ります。

短信往来

柴利好さまへ

佐原陽一郎より

十二月号の誌上通信(中)を拝読し、拙劣な「太股錠」がお目にとまったことを身にあまる光栄に思っております。

同好の志というより、立派な先達に、道を説いてもらった様な気持ちで、妻と共に喜んでおります。

妻(二十一才)を奴隷として飼育しはじめてから二年の歳月が流れましたが、いまだ満足できるフォトもできず、奇ク読者サロン等の常連寄稿者から見れば何とも汗顔の至りですが、妻は誌上通信を見てから妙にハッスルして、先日はミニスカートの太股錠で地下鉄に乗ってきました。柴氏のアドバイスによりプラモデルの戦車のキャタピラーを大腿部の締めつけに使用し、両手錠の上に何気なくレインコートを掛け、鎖はスカートの内側から連結しておいたので、誰にも気づかれず、丸の内線の午後一のひと時を奴隷妻と共に大きな満足を得ることが出来ました。

ちなみに、私は女性の「ふとも

も」に対し、これまで「太股」の字をあててきましたが、よく考えればこれは私のいたるなさで、やはり柴氏が使われる「太股」の方が、その感じがでていっていると思います。それで私は今後、まったくフレッシュな「太股錠」を開発すべく、私が使用してきた「太股錠」を撤回致します。なお、腰枷その他の戒具について、柴氏の御助言を得られれば幸に存じます。

ふたたび誌上にてお目にかかる日を楽しみにしております。

○

牝犬みさ子へ 縛理大造より

みさ子よ、不貞を望む豊満なその体を、再び不心得を起こさぬ様になるまでこの私が責めてやろうではないか。私は室内は勿論、屋外プレイも非常に好む。だから牝犬の身体検査が済めば、牝犬自身の手で股間縛りをさせてから、私が嚴重に乳房中心の後手縛りにして、その上にコートだけを着せて映画館や山へ連れて行ってやる。外での責め具は主として私の黄金の指ということになるが、山ならば浣腸もある。室内に帰れば、海老縛りの人間灯台や、羞恥責めが待っている。私は本気だ。すぐに返事が欲しい。(失礼しました)

手製チュープ衣裳

土田 純一

同封の写真は、紀川氏の発表された「チュープ責め」を参考にし、て造ったチュープ拘束帯です。

自動車の利用したもので、首を縛って首輪に繋げるよう（1）にしてあります。また、臀部は露出するように切り抜いてあり、前のタレも、すぐにハネ上げられるよう（2）にしてあります。ご覧下さい。



いつもほんの小文ですのに、辻村先生のお目に止まっていた事を、楽我記で知り、驚きと喜びで興奮しました。又、通信欄の岡部生様や高田様に興味を持って頂いていることに感激しております。同趣味の様で嬉しいです。

股間縛りについて

夫婦プレーヤー

早木 夢二

男と女、どちらがよいか？と股間縛りについて私と慶子は、つまらない議論をすることがある。私と慶子は、今や菱縄は勿論、股間縛りなくして緊縛プレーは成り立たないといってよい。それほど股間縛りだから、これを巡って議論が沸騰？するもの、ムリはないというものである。

その結果、私が彼女の場合の方がよい、というのは当然と思うし一糸まとわぬ全裸に、きびしい菱縄股間縛りを受け、私に縄尻をとられて鏡に写っている、おのが全裸の緊縛姿を、うっとり眺め入っている彼女からすると、彼女だって女こそ股間縛りを十分、享受する特権があるのだというかと思っている。

「私、男の方が、ずっといいと思うわ」と、いいだすのだから、びっくりしてしまふ。

全裸の菱縄股間縛りにされた私も彼女に縄尻をとられて、鏡の中の自分の姿を、じっくり見せられ

るのだが、やはり彼女の、ふくらと肉づいた下腹に菱形の縄が、びったり喰い込んで、その二筋の縄が股間をくぐり、後ろから見ると、盛り上がった双丘の間から、ぽっこり姿をのぞかして、そこにも私好みの菱形をつくって、ぎっちり緊縛された両手首につながっている姿を見ると、女こそ、慶子こそ、股間縛りにふさわしいと思うのだが、彼女は彼女で縄をあやつって私をあこれと罵ることに夫婦プレーヤーとしての生甲斐を見つけているのかもしれない。

そういえば、菱縄を受け後手に縛られた全裸の私を中腰にしたり立たせたり、あるいは仰臥させて縄をぐるぐる巻きつけたり、根本を、ぐっとくっつけたりしている彼女を見ると、私はこの上もなく緊縛プレイの幸せを感じる。

そして鏡台前に私を立たせ、股間縄を時々ぐいぐい、ひっぱたきながら、「どう、いいでしょう？」と、しゃがみ込んでくる彼女なのだ。

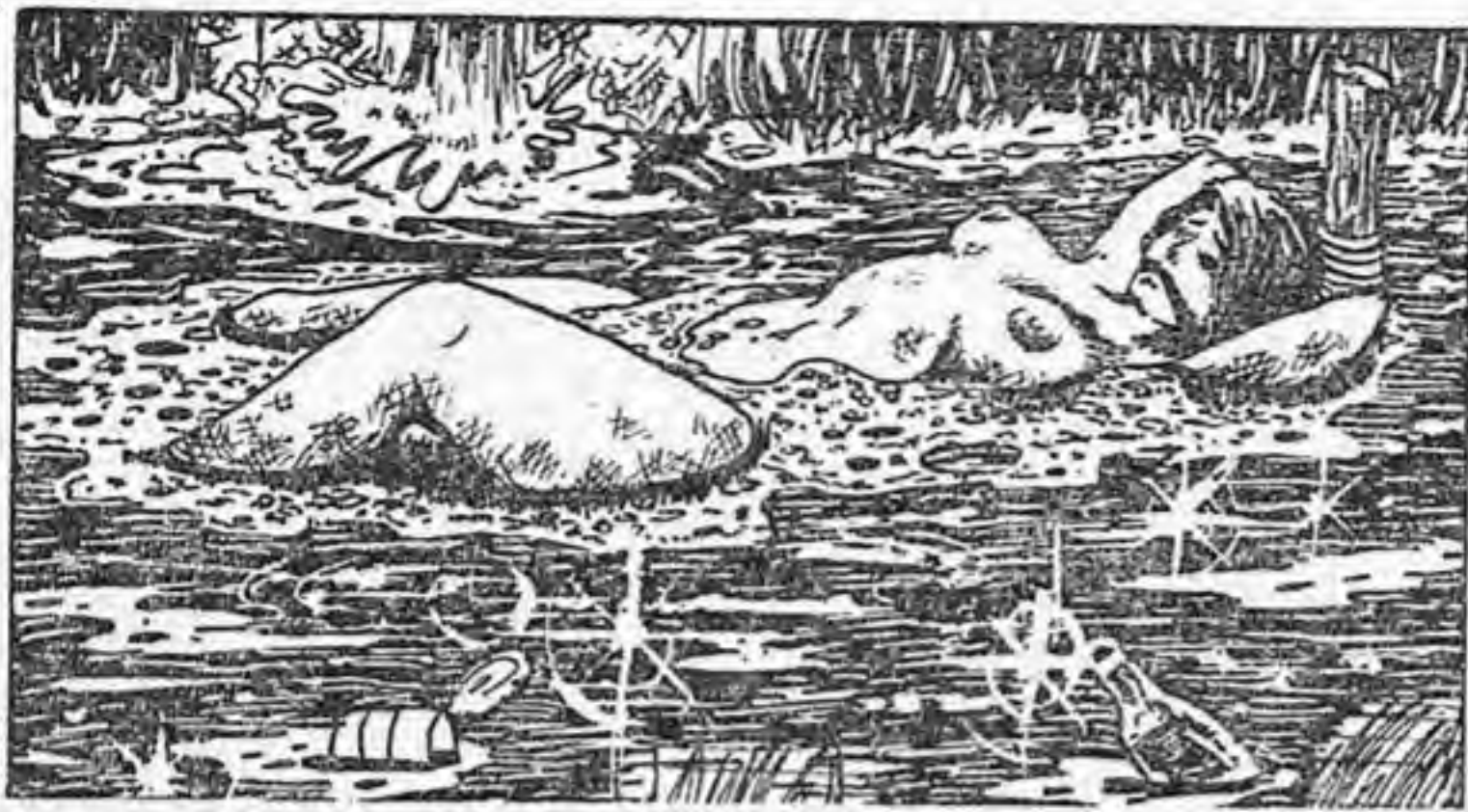
やがて、「ああっ、お役人さまあー」と、例によって、お白州に引き出された囚人になった私は彼女の愛情に応じながら、はげしく体をゆすってゆく。

映画「性倒錯の世界」を観て

中村

純

最近の出版物や映画は、SMやポルノばやりのようですが、真のSM愛好者にとっては、どれもこれも満足すべきものはないといっ



『ドブ川』丸鬼怒叉奴

て過言ではないでしょう。

以前の映画「日本拷問刑罰史」は、当時としては画期的といえ、ずいぶん私を喜ばせてくれましたが、これは歴史的な拷問、刑罰の姿を再現しただけのもので、SMプレイとしては全く不満でした。しかし、今度公開された東映の「性倒錯の世界」には、思わず感歎の声をあげざるを得ませんでした。私としては何といっても、辻村隆氏と渡部光雄、好美夫妻、それに谷山久美さんの四人がくりひ

最近の緊縛映画

東山映史

ボインの女王、谷ナオミの「指のいたずら」「獄門のお万」がヒットしたのか「続・指のいたずら」「壺地獄」が上映された。

尼僧になった谷ナオミのレスビアンを見せたりして、サービス満点であるうえに、最後には賭場で一暴れして悪親分に捕えられ、後手に緊縛されて犯されようとしたり、SMシーンを多分にとりいれ

ろげてくださった、トリックのないう、すさまじいまでの真のSMプレイに、すっかり魅了されてしまったといえます。

一糸まとわぬ好美、久美子のお二人が、長机に頭を合せて仰向けに緊縛されて受けるローソク責めを始め、逆吊り、水車磔、梯子の逆磔に加えて、鞭打ち、乳房いじめ、羽根針責め等のSMプレイ。実に素晴しかったという以外はありません。芯からのMであるお二人は、多数の眼前で責めさいなまれる欲びに、さぞ満足されたことと思います。

素顔の辻村隆氏のSM談義、耽

ている。

実は、その悪親分は最初に出た寺の坊主だったというオチもついている。

さすがに谷ナオミは豊艶で、そのボインは素晴らしい。

ボインの双壁と思われる珠瑠美の「豊かな感触（ふれあい）」は黒い霧の野球選手と競輪選手の兄弟を扱った、社会派の木俣監督の作品である。

珠瑠美扮するスポーツ紙の婦人記者が、悪は摘発するという正義感から、恋人の野球選手の黒い霧

奇房でのフォトリポート整理中のご様子などに、大変親しみを覚えた私ですが、辻村氏の、SMプレイは夫婦間のセックスにプラスするということ御持論には頷けながらも、しかしそれも夫婦共にSMに深い理解がある場合だけのことだろうと考えています。

むしろ、SMプレイはあくまでプレイであって、何も夫婦でなくとも、異性、同性を問わず、互いに充分に理解さえあれば一向に差支えないことだと思えますし、それが家庭生活、社会生活を破壊しないという条件付で、割り切ることも可能だと考えています。

をあげ、編集局長賞を受けるがその野球選手は永久追放になる。また、彼の弟の競輪選手に八百長を仕組む暴力団のオトリとして、珠瑠美と、その競輪選手の恋人、星エリが捕えられ、監禁される。珠瑠美は着衣の上からだが、乳房の下方を緊縛され、後手縛りでトイレに連行されるシーンなど見せる。星エリも手足を縛られ犯されかかったり、新人だけに大いに迫力があつた。

他には、杉村久美が「性魔」などで緊縛シーンを見せてくれた。

▲最新撮影V異色美人モデル緊縛フォト選

Y組新百態 大手札型印画紙 (9×13 極鮮明焼付)

各組 一枚一組 (送料共)

四組四枚 五〇〇〇円
 十組十枚 一〇〇〇〇円
 二十組二十枚 一八〇〇〇円
 五十組五十枚 四〇〇〇〇円
 百組百枚 七〇〇〇〇円

(郵便番号 545-91)

いずれも直接印画紙に焼付けた極めて鮮明美麗なフォトで複写ものは一枚も含まれていません。貴重なコレクションとして永久に保存して頂くに足る優秀品であります。お申込みは大阪市阿倍野郵便局私書箱第十四号天星社宛へ前金にて願います。

☆

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|
| 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 37 | 36 | 35 | 34 | 33 | 32 | 31 | 30 | 29 | 28 | 59 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|

女子大生前田真知子天然色緊縛フォト

本誌上に姿を現して以来、その手記と共に非常な人気を博しました。美貌の女子大生前田真知子嬢のカラーフォトは、広くファンの方々に要望されていまふたが、この新しく特写の機会を持ちましたので、好事家のお目にかけます。

柱縛りと脚挙縛り

大手札三枚 一組 一〇〇〇円
前田真知子 略号八八すき
肉づきのよいふくよかで美しい太腿を引き上げられて柱に全裸で縛られたM女の本領をあばく。

麻縄高手小手首縄

大手札三枚 一組 一〇〇〇円
前田真知子 略号八八すめ
黒ずんだ麻縄が真白い柔肌に喰い込んでピンク色に染まっていた美しいカラーでまた格別である。

荒縄強烈エビ縛り

大手札三枚 一組 一〇〇〇円
前田真知子 略号八八すけ
トゲトゲとした荒縄で情容赦なく強烈なエビ縛りに責められたば流石のM女も白肌を赤く彩る。

荒縄悦虐羞恥責め

大手札三枚 一組 一〇〇〇円
前田真知子 略号八八すら
赤い絨氈の上に荒縄でぎゅうぎゅう縛られた全裸の女体が芋虫のように浅間しくうごめいている。

悶える強烈海老責

大手札三枚 一組 一〇〇〇円
前田真知子 略号八八すへ
高小手に縛られた上二つ折りに屈曲させられた女体は秘所もあらわに畳の上を転々と悶える。

柔肌をくびる縄目

大手札三枚 一組 一〇〇〇円
前田真知子 略号八八すれ
正面と側面と横臥と、その姿態は変れども全裸の美しい女体に厳重に掛った縄目はむごたらしい。

緊縛女体をいびる

大手札三枚 一組 一〇〇〇円
前田真知子 略号八八すろ
身動きも出来ない縛られた裸身を目の下にしないで、思うがままにいたぶるのはS男子の本望である。

羞恥を晒す女体柱

大手札三枚 一組 一〇〇〇円
前田真知子 略号八八すそ
立柱に棒縛りになった女体は、加虐者の思いのままに、その嗜虐心の欲望の犠牲となって哭く。

◎右に掲げました総天然色のカラープリントは、美人女子大生前田真知子嬢の一系まとわぬ緊縛フォトばかりです。必ずや女体緊縛フォト蒐集家の方のお気に召すものと信じます。

☆深田菊子浣腸悦虐責めフェチフォト

「悦虐浣腸写真」

溶液を圧入される

大手札三枚 一組 四〇〇円
深田 菊子 略号八八みは
エネマと硝子シリンドラーで浣腸液を圧入される時の姿態と表情。

全裸で受ける浣腸

大手札三枚 一組 四〇〇円
深田 菊子 略号八八みふ
三種の浣腸器具でお尻を突っ立てたあられもない姿で施す浣腸。

イルリの嘴管挿入

大手札三枚 一組 四〇〇円
深田 菊子 略号八八みほ
二千CCのイルリガートルからドクドクと注ぎ込まれる溶液。

刺す浣腸器の恐怖

大手札三枚 一組 四〇〇円
深田 菊子 略号八八みち
百CCの硝子製ポンプの先端がズブリと突き刺さる浣腸の恐怖。

自ら施す浣腸悦楽

大手札三枚 一組 四〇〇円
深田 菊子 略号八八みそ
強制されて自分自ら浣腸器を握って施す浣腸の羞恥と被虐悦楽。

体内に奔流する液

尻つき出した四つ這いで浣腸液はグングンと体内に奔流する。

浣腸を楽しむ美女

大手札三枚 一組 四〇〇円
深田 菊子 略号八八みぬ
羞かしい浣腸もやがては自ら慰め楽しむ悦楽の小道具となる。

「オシメ着用写真」

大手札十二枚 一組 二〇〇〇円
深田 菊子 略号八八みめ
浣腸のあとオシメを装着する。ム製のオムツカバーを装着する。

おムツに排便する

大手札十二枚 一組 二〇〇〇円
深田 菊子 略号八八みし
オムツを当てカバ―を着けるまでの段階を順序を追って見せる。

生ゴムのオムツへ

大手札十枚 一組 一八〇〇円
深田 菊子 略号八八みせ
ヌメヌメとした生ゴムのカバー。オシメとの奇妙な組合せ。

◎以上発表しました「浣腸写真」は、お望みに応じて、お味と関心を抱く、お申し込みは前金にて、成し、大阪市阿倍野郵便局私書箱第14号、天竺社宛へ、お申し込みの上、どうぞ。

「秘蔵版写真一掃分譲品」

昭和四十年頃より四十二年頃にかけて天星社に於て分譲して、おりに止つて再開を強く望まれたが、最近になって特にお望みに限られ、増をいたします。御注文の方には、五日間の予定で、作成の上、早速御送付申上げます。

△Mフォト▽

馬乗り女王様行状記

大手札三枚一組 略号△よき 五〇〇円

花田沙登子 略号△わむ 八〇〇円

花田沙登子 略号△わむ 八〇〇円

花田沙登子 略号△わむ 八〇〇円

花田沙登子 略号△わむ 八〇〇円

花田沙登子 略号△わむ 八〇〇円

花田沙登子 略号△わむ 八〇〇円

花田沙登子 略号△わむ 八〇〇円

花田沙登子 略号△わむ 八〇〇円

花田沙登子 略号△わむ 八〇〇円

花田沙登子 略号△わむ 八〇〇円

花田沙登子 略号△わむ 八〇〇円

花田沙登子 略号△わむ 八〇〇円

花田沙登子 略号△わむ 八〇〇円

花田沙登子 略号△わむ 八〇〇円

花田沙登子 略号△わむ 八〇〇円

花田沙登子 略号△わむ 八〇〇円

花田沙登子 略号△わむ 八〇〇円

花田沙登子 略号△わむ 八〇〇円

花田沙登子 略号△わむ 八〇〇円

入墨女答打ち白洲糾問

大手札三枚一組 略号△よき 五〇〇円

山原 清子 略号△よき 五〇〇円

山原 清子 略号△よき 五〇〇円

山原 清子 略号△よき 五〇〇円

山原 清子 略号△よき 五〇〇円

山原 清子 略号△よき 五〇〇円

山原 清子 略号△よき 五〇〇円

山原 清子 略号△よき 五〇〇円

山原 清子 略号△よき 五〇〇円

山原 清子 略号△よき 五〇〇円

山原 清子 略号△よき 五〇〇円

山原 清子 略号△よき 五〇〇円

山原 清子 略号△よき 五〇〇円

山原 清子 略号△よき 五〇〇円

山原 清子 略号△よき 五〇〇円

山原 清子 略号△よき 五〇〇円

山原 清子 略号△よき 五〇〇円

山原 清子 略号△よき 五〇〇円

山原 清子 略号△よき 五〇〇円

山原 清子 略号△よき 五〇〇円

山原 清子 略号△よき 五〇〇円

山原 清子 略号△よき 五〇〇円

山原 清子 略号△よき 五〇〇円

山原 清子 略号△よき 五〇〇円

山原 清子 略号△よき 五〇〇円

山原 清子 略号△よき 五〇〇円

山原 清子 略号△よき 五〇〇円

山原 清子 略号△よき 五〇〇円

山原 清子 略号△よき 五〇〇円

美木乃々子 略号△もぬ 五〇〇円

美木乃々子 略号△もぬ 五〇〇円

美木乃々子 略号△もぬ 五〇〇円

美木乃々子 略号△もぬ 五〇〇円

美木乃々子 略号△もぬ 五〇〇円

美木乃々子 略号△もぬ 五〇〇円

美木乃々子 略号△もぬ 五〇〇円

美木乃々子 略号△もぬ 五〇〇円

美木乃々子 略号△もぬ 五〇〇円

美木乃々子 略号△もぬ 五〇〇円

美木乃々子 略号△もぬ 五〇〇円

美木乃々子 略号△もぬ 五〇〇円

美木乃々子 略号△もぬ 五〇〇円

美木乃々子 略号△もぬ 五〇〇円

美木乃々子 略号△もぬ 五〇〇円

美木乃々子 略号△もぬ 五〇〇円

美木乃々子 略号△もぬ 五〇〇円

美木乃々子 略号△もぬ 五〇〇円

美木乃々子 略号△もぬ 五〇〇円

美木乃々子 略号△もぬ 五〇〇円

美木乃々子 略号△もぬ 五〇〇円

美木乃々子 略号△もぬ 五〇〇円

美木乃々子 略号△もぬ 五〇〇円

美木乃々子 略号△もぬ 五〇〇円

美木乃々子 略号△もぬ 五〇〇円

美木乃々子 略号△もぬ 五〇〇円

美木乃々子 略号△もぬ 五〇〇円

美木乃々子 略号△もぬ 五〇〇円

美木乃々子 略号△もぬ 五〇〇円

美木乃々子 略号△もぬ 五〇〇円

大手札十枚一組 略号△わよ 二〇〇円

大塚 啓子 略号△わよ 二〇〇円

大塚 啓子 略号△わよ 二〇〇円

大塚 啓子 略号△わよ 二〇〇円

大塚 啓子 略号△わよ 二〇〇円

大塚 啓子 略号△わよ 二〇〇円

大塚 啓子 略号△わよ 二〇〇円

大塚 啓子 略号△わよ 二〇〇円

大塚 啓子 略号△わよ 二〇〇円

大塚 啓子 略号△わよ 二〇〇円

大塚 啓子 略号△わよ 二〇〇円

大塚 啓子 略号△わよ 二〇〇円

大塚 啓子 略号△わよ 二〇〇円

大塚 啓子 略号△わよ 二〇〇円

大塚 啓子 略号△わよ 二〇〇円

大塚 啓子 略号△わよ 二〇〇円

大塚 啓子 略号△わよ 二〇〇円

大塚 啓子 略号△わよ 二〇〇円

大塚 啓子 略号△わよ 二〇〇円

大塚 啓子 略号△わよ 二〇〇円

大塚 啓子 略号△わよ 二〇〇円

大塚 啓子 略号△わよ 二〇〇円

大塚 啓子 略号△わよ 二〇〇円

大塚 啓子 略号△わよ 二〇〇円

大塚 啓子 略号△わよ 二〇〇円

大塚 啓子 略号△わよ 二〇〇円

大塚 啓子 略号△わよ 二〇〇円

大塚 啓子 略号△わよ 二〇〇円

大塚 啓子 略号△わよ 二〇〇円

大塚 啓子 略号△わよ 二〇〇円

M資料分譲品一覽

○新人S女性出現○

遅ましき股に挟まる

大手札四枚一組 略号(あとお) 一〇〇〇円

素足の脂がべっとり

大手札五枚一組 略号(あて) 一〇〇〇円

縛った男をムチで料理

大手札十枚一組 略号(あさ) 一〇〇〇円

女王様の人間便器になる

大手札十枚一組 略号(あす) 二〇〇〇円

蠟涙の雨を全身に浴びる

大手札四枚一組 略号(あせ) 一〇〇〇円

尻の下につぶされた男

大手札二枚一組 略号(あた) 六〇〇円

エビ責めに弄ぶ女

大手札六枚一組 略号(あそ) 一四〇〇円

神酒を与える女神

大手札六枚一組 略号(あち) 一四〇〇円

咽喉輪を股責極楽

大手札四枚一組 略号(あつ) 一〇〇〇円

素足の足舐と嗅香

大手札五枚一組 略号(あこ) 一〇〇〇円

M男性を尻に敷く

略号(あこ) 一〇〇〇円

大手札六枚一組 略号(まく) 一〇〇〇円

人間犬の芸仕込み

大手札十枚一組 略号(あえ) 二〇〇〇円

女の尻に顔がつぶれる

大手札三枚一組 略号(あく) 八〇〇円

足指に挟んだ菓子

大手札二枚一組 略号(あひ) 六〇〇円

男を縛って弄ぶ女

大手札十枚一組 略号(あに) 二〇〇〇円

尻責めと股責め

大手札十枚一組 略号(あぬ) 二〇〇〇円

大男の訓練風景

大手札十枚一組 略号(みら) 二〇〇〇円

男を刺し殺す美女

大手札十枚一組 略号(みむ) 二〇〇〇円

男を尻の下に敷く

大手札十枚一組 略号(みう) 二〇〇〇円

女の足下にうごめく顔

大手札六枚一組 略号(みれ) 一四〇〇円

汚物を戴く男

大手札六枚一組 略号(みわ) 一四〇〇円

男を馬にする美女

大手札五枚一組 略号(みか) 一〇〇〇円

人間椅子の御褒美

大手札五枚一組 略号(みお) 一〇〇〇円

飼犬に餌を与える

大手札四枚一組 略号(みた) 一〇〇〇円

浣腸器で男を弄ぶ女

大手札三枚一組 略号(みつ) 八〇〇円

股で絞められる首

大手札三枚一組 略号(みね) 八〇〇円

芳香を嗅がす尻

大手札二枚一組 略号(みな) 六〇〇円

人間馬の調教プレイ

大手札三枚一組 略号(まの) 八〇〇円

足舐めの奉仕と強制

大手札三枚一組 略号(まわ) 八〇〇円

股責めにあう男の顔

大手札三枚一組 略号(また) 八〇〇円

女に縛られて弄られる

大手札三枚一組 略号(まひ) 八〇〇円

踏みにじられる顔面

大手札三枚一組 略号(まな) 八〇〇円

肩車に奉仕する青年

大手札三枚一組 略号(まは) 八〇〇円

男を縛って玩具にする

大手札三枚一組 略号(まて) 八〇〇円

首を太股で絞めあげる

大手札三枚一組 略号(まや) 八〇〇円

灰皿にされた男

大手札四枚一組 略号(そほ) 一〇〇〇円

裸女の長靴に悶ゆ

大手札四枚一組 略号(そに) 一〇〇〇円

美女に飼われる犬の生態

大手札三枚一組 略号(そろ) 八〇〇円

美女の手で縛られる過程

大手札四枚一組 略号(そと) 一〇〇〇円

女御主人に使役される男

大手札四枚一組 略号(そち) 一〇〇〇円

美女のおいしい足を戴く

大手札四枚一組 略号(そぬ) 一〇〇〇円

むしゃぶりつく素足の味

大手札三枚一組 略号(そは) 八〇〇円

凌辱と美女のなぶり者

大手札五枚一組 略号(そり) 一〇〇〇円

素足を舐める構図

大手札四枚一組 略号(そへ) 一〇〇〇円



確信するもの。奇クの継続的發展を、心から祈ります。(三重県津市・新町忠)

私はSM

奇クを知って早や二十年近くなります。二十二才の青年が四十才を過ぎる昨今ですから奇クの歴史も浅からぬものがあります。戦後の風俗史を顧みると、奇クという一風俗雑誌の存在も、まことに有意義なものと思います。昨今のSMブームを考えると、奇クの開拓者精神によって茨の道を進んできた歴史は決して軽々しく考えることは出来ないでしょう。場当たりには出来ません。場当たりでブームを当てるので創刊するキワモノ雑誌とは比較にならないものが奇クにはあります。といって今の政府だったら奇クに文化勲章を与えることはしないでしょうがそれは又それでいいのであって、金銭や名誉を超越した、輝かしいものが奇クの上に文化的所産として存在することを、我々ファンは

に興味を持つ21才の会社員です。辻村隆さんが、出演されていました東映々画セックスドキュメント「性倒錯の世界」を見て私なりの感想及び希望を述べさせて頂きます。一、二人の女性に対しての責め。台の上に全裸で仰向けに縛つてのローソク責め。身体を自由を奪ってローソクを口の中へおし込み人間燭台。そして蠟燭責め。ローソクの蠟骸が赤色なので私は嗜虐の血をかき立て胸の高鳴りをおさえる事が出来ませんでした。欲を言えばローソクを口にくわえさせ鼻に洗濯バサミ又は脱脂綿等で栓をし長時間放置して恐怖に戦く場面もあれば更によかったのではなかったでしょうか。二、荒縄を使つての縛り。荒縄を体にグルグル巻きつけてのハリツケ縛り(木馬責めも兼ねていた)そして裸体

を投げ矢の的にしての責め。乳頭には洗濯バサミが挟んであった。三、梯子を使つての逆さ吊り。この女性綺麗に除毛されていたので羞恥責めも兼ねていた。その他滑車を使つての逆さ吊り、荒縄でのムチ打ち等、いつもプレイを夢みる私にとり、この映画は欲望を十二分に満足させてくれた。辻村氏の活躍を、これからも期待しております。(神戸市・藤村敏三)

私は28才になるサド傾向の独身青年です。毎日、羞恥責め、奴隷などのプレイをしたく思つて居ますがガールフレンドにも話す勇気がなく本や写真等で気持ちをまぎらわしております。私と同年輩の友人は大体もう結婚してしまつていますが、自分の性格等考えると、どうしても結婚にふんぎりがつきません。最近の離婚の原因は、ほとんど性格の不一致即ち性生活の不一致だといわれています。という事は、私の場合、やはりマゾ的傾向のある女性としかうまくゆけそうにありません。最近結婚相談所もある様ですが、結婚の条件にマゾ女性と書いたら等とバカな事を考えたりします。私は奇クの中で、特に「花と蛇」の静子が

一番好きです。自分の妻をその様にして夫婦プレイをやっている方が私には羨ましくてなりません。私にとってSM抜きの結婚はほとんど何の意味も持ちません。SMを楽しみながらする結婚生活が今の私の一番大きな夢です。(神戸市・加治文夫)

十二月号大変面白く読ませていただきました。殊に、マダム美美代の告白の「縄にまつわる私の体験」で福井桃子さんの緊縛写真は大変気に入りました。両足を大きく左右にひろげられて縛られていたのなんか、私もあのようにして責められてみたいと思わず願つてみました。私が縛られるとか、責められるとかいうことに関心を持ちはじめたのは八年ほど前からですが、機会がありませんため、まだ一度もそういう経験はございません。女性がいろいろ責められていて小説や告白、それに緊縛写真が大好きなのです。なぜそんな風になったのか、自分でもよくわかりません。ふと手にした奇クが私のそんな心呼びよせましたのは事実ですが、奇クを見る前にも昔物語の継子いじめや少女小説の中の薄幸の主人公にひかれたりし

ましたので、その頃からそのきざしがあつたように思います。でも私の性格を決定づけてくれたのはやはり奇クを拝見してからです。私は一度結婚を経験しましたが田舎での見合結婚でしたので性格が合わず、それに子供が出来ませんため三年ばかりで破綻しました。今、都会へ出てきて一人で働いております。渡部光雄様ご夫妻や三浦敬一様ご夫妻、山本五郎氏ご夫妻、その他夫婦プレイを楽んでおられるご夫婦の方々を羨ましく存じます。私も福井桃子様のように勇気を出して誌上に緊縛姿をのせていただこうかと思いましたが、すでに若くなく（今年27才）それに身体に自信ありませんので、せめてプレイだけなら永年憧れていましたSMプレイを一度味わってみます。

〇 御送金についてのお願ひ

現金を普通郵便物に封入することは、郵便法によって禁止されています。現金での御送金の場合には必ず「現金の御送金」の額小為替、普通小為替等の方法もありません。普通小為替等の方法便宜上「切手代用」にてお願い致します。必ず「割増」にてお願い致します。尚、七月一日より郵送料金は値上に依り、送料変更がありますので御諒承下さい。

たいと念願しております。今勤めておりますところが日曜以外にお休みがとれず汚いアパートの一人暮らしのため時間的にも金銭的にも余りよゆうがなくて、せめてもの慰めに奇クを愛読しております。これから、私達ファンのため、よりよい緊縛写真や体験など、お載せ下さいますようお願い申し上げます。

（大阪府門真市・峯田節子）

ここ数年来の、貴誌の愛読者です。ずっと貴誌を愛読していて、全国にこんな沢山の同志がいられることを知り、大いに安堵すると共に心強く思っております。最近では、いろいろの組織作りが全国的に活発で、何々友の会といった会が続々出来つつあるようですが私達ファンのためにも一つSM友の会といった会合を持つてはありませんか。そのために二十数年に亘って、この道一筋に精進してこられた奇クが中心になってほしいものです。貴誌を真似たニセ物が沢山出ているようですが、私もいろいろ写真など集めてみた結果、奇クのもののが他社では太刀打ち出来ないよさを、持っております。やはり行き当りバッタリの思

いつきのものはゆるんだ越中禪のようであらう。観賞用にならない。いずれそうだったものはマンネリ化で消えてなくなると思いますが、なんといいっても永続性のあるプロ級の奇クがパイオニア的精神を発揮して音頭をとってもらいたいものです。奇クファンの方々如何お考えですか。

（東京都・深川豚七）

ふとした機会から御誌を愛読するようになった二十八才になる平凡な家庭の主婦でございます。最近同性的の方の投稿も多く大変心強く思っております。殊に福井桃子さんのように夫運が悪かったのに勇敢にしかも自分の思い通りに生活をつづけておられる方の告白を読ませていただき、非常に勇気をもたせてもらいました。また、かずかずの夫婦プレイを行っておられる方々の記事はうらやましくなりません。私は結婚して四年目ですが子供がいないせいか夫婦の仲は冷たく、一つ屋根に同居はしておりますが、ここ半年あまり夫婦の交りもございません。私は大柄なデブで決して美しい女ではありませんので御誌のモデルにとうような大それた考えももてません。

ん。といって平凡なサラリーマンの家庭で貯えとてありません故、離婚しても食べてゆくあてもありません。福井桃子さんのように生活力のある方だったらいのです。私は手に何の職もなく別れてしまえば明日の生活にも困りますので惰性で夫と冷たい同居生活をつづけております。読者の方々の中で、このような私を今の生活から引き出して下さる方っておられないでしょうか。私は力強い男性の手によって思いのままにもてあそばされ、そして夫婦プレイをしておられる方の様に燃え上がりたいたいです。こんなことは親しい友達にも話せず、一人で悩んでおります。四年間の夫婦生活をしておりますが、身も心もまだ娘時代のままです。よろしくお導き下さいませ。

（愛知県・久保田道代）

〇 軽井沢の落合葉子様。初めてお便りします。私は三十才になる公務員です。プレイの経験は何度かありますが未だかつて良きパートナーにめぐり合った事がありません。私の妻も色々と飼育して見たのですが、未だにMにはなれないのです。これから手を変え品を変えてやって見るつもりですが、

貴女のような初めからM性を持った人が私達夫婦の中に入って下さる事によって妻も感化されるのではないかと思ひペンを走らせました。私の責めは羞恥責めを中心に行つております。私は血を見るのは好きではありません。元々女性の身体は美を感じさせますが、その美しい物をより一層美しくする為に、縛り、又は飾り、責めて見たくなるのです。こんな私ですが若しお気に召したら、私達夫婦のパートナーとなつていただけませんか。
(千葉県・柏木浄)

奇ク発売日である今日、本誌を手にとつて福井桃子様がM男を求めておられるのを知り、さっそくペンをとりました。私はSMの経験はありませんが相当強度のMである事を自覚しています。希望がかなえられて桃子女王様の奴隷にしたいだけの日には、女王様の望まれるどんな残酷で屈辱的なことにも服従する覚悟でおります。全裸にされ犬の首輪でひきまわされ、ムチ、ローソク、針(鼻輪のかわりに鼻へも)流腸などで責められ、また舌での奉仕、人間馬、人間便器、どんなことでも御命令下さい。申しおくれましたが私は

20才、一七〇センチ、六〇キロです。どうか福井桃子様、この私を奴隷として調教飼育して下さい。
(大阪府・M自覚生荒木)

久しぶりに奇クを手にする。読者通信より抜擢されたという深田菊子を知りあわててペンを握る。素晴らしいM女性だ。ぜひ読者同志のルポを作らせてほしい。幸いにして現像焼付の技術は身につけてゐる。長らく遠ざかつていた奇クだが深田菊子の記事だけで、どっしりと重たい手ごたえがした。
(神戸市・さこんやすお)

奇クの読者の皆様、今日は。私も奇クを手にして早や五年目になります。この度お便り致しましたのは結婚を前提としてM女性を求めたく御一報した次第です。希望としまして24才から32才位までの方で結婚の経験者、又子供さんの3才位までの女性でしたら一向にかまいません。私は独身30才のS男性です。自分でもあまり良くもなし、まあ普通だと思つております。今まで何度も交際し又SMプレイに興じてみましたが全然趣味のない方々でしたので何か心のどこかに物足りなさを感じました。

| | | | | | | | |
|---|----------------|-----------|----------------|-------------|-----------------|------------|-----------------|
| 最新版分譲フォト
うら若き美女を緊縛する
印画紙直接焼付極鮮明写真 | | 逆エビ縛り吊り上げ | 大手札三枚一組 略号△ろて▽ | 逆エビ縛り晒す美形 | 大手札三枚一組 略号△ろす▽ | 白ロープの亀甲縛り | 大手札三枚一組 略号△ろへ▽ |
| 縄付きで愛してネ | 大手札三枚一組 略号△ろせ▽ | 棒責め開股縛り | 大手札三枚一組 略号△ろひ▽ | 開股開陳羞恥責め | 大手札三枚一組 略号△ろは▽ | 白縄の強烈縛り地獄 | 大手札三枚一組 略号△ろそ▽ |
| 可愛い牝犬の珍芸披露 | 大手札三枚一組 略号△ろり▽ | 開股責めの種々相 | 大手札三枚一組 略号△ろみ▽ | 菱縄縛り責める | 大手札三枚一組 略号△ろふ▽ | M女荒尾慶子のすべて | 大手札三枚一組 略号△ろふ▽ |
| 柔肌に喰い込む麻縄 | 大手札三枚一組 略号△ろし▽ | 海老責めで虐める女 | 大手札三枚一組 略号△ろめ▽ | 剌毛の美女を縛る | 大手札三枚一組 略号△ろふん▽ | 私をよく観賞してね | 大手札三枚一組 略号△ろふな▽ |
| 責め抜かれた結末 | 大手札三枚一組 略号△ろに▽ | 股間縛りにあえぐ女 | 大手札三枚一組 略号△ろち▽ | ベッド上での狂態を縛る | 大手札三枚一組 略号△ろふは▽ | 強烈菱縄股間縛り | 大手札三枚一組 略号△ろふい▽ |
| 高手小手縛り首縄悦楽 | 大手札三枚一組 略号△ろと▽ | 脚吊り柱強烈縛り | 大手札三枚一組 略号△ろも▽ | 荒尾慶子 | 大手札三枚一組 略号△ろふい▽ | 荒尾慶子 | 大手札三枚一組 略号△ろふい▽ |
| 深田 菊子 | 略号△ろも▽ | 深田 菊子 | 略号△ろも▽ | 深田 菊子 | 略号△ろふい▽ | 深田 菊子 | 略号△ろふい▽ |

(埼玉県・富士晴利)

私は大分、以前から奇クを時折
拝見している者です。投稿などと
いうことを余り考えていなかった
私ですが、十二月号で近藤恵美子
さんの「白粉花の誘惑」という可
愛い告白を拝見して矢も盾もた
まらず、ペンをとってしまいました
た。浣腸の大好きな私にとって、
近藤さんの告白はなんととっても
シヨックでした。世の中にこんな
可愛い女の子がいるなんて思わず
世界が明るくなったような気持ちで
す。近藤恵美子様や大谷美子様の
ようなM女性がこれからも次々と
登場されることを心から祈ってお
ります。そして未熟な私にもぜひ
経験を積ませて下さい。

(京都市・佐野喜久男)

奇ク12月号のM女通信にて高村浩子様、貴女の御文章を拝見致しました。同好の友としてお便り致します、私は現在神戸で喫茶店を経営する28才の独身男性です。私の顔は少しニヒリストな眉毛の濃いホリの深い端正な顔立ですが皆から温厚な好青年と言われております。年令相応の教養は身につけておると自負しております。前々からM女性を縛って思いきり責めてみたいと空想しておりますが、なかなかその夢は実現出来ません。毎月発売される奇ク誌によって私の不満を解消しておりますが、空想だけではどうも納得がゆきません。若し、およろしければ一度、私に責めさせて、いただけませんか。2DKの鉄筋住宅の用意ありここでローソク責め、浣腸、海老責めと、考えただけでも胸がふるえます。一度お便り下さい。

(神戸市・村上徹矢)

この度、貴誌12月号を購入しました。ユニークな内容に満足し今後も続けて購入したいと思っています。さて勝手乍ら私の感想や希望やらをのべますので是非参考にして頂きたいと思います。御誌は

女本誌一月号でへ全日空機で来た
ポライタとして登場した芸者福竜はル
稀なM女性であるが、二月号でも
へ縄に恋した女として誌上を賑
わしてゐる。ここに好事家のため
に印画紙に焼付した極鮮明な写真
を提供し謎の女性松本たえのM性
の神秘を抜抉して頂きたい。

バイブ責めに呻く

大手札三枚一組 五〇〇円

両足挙げ柱宙縛り

大手札三枚一組 五〇〇円

強烈黒縄縛り地獄

大手札三枚一組 五〇〇円

責めに陶醉する女

るのを防ぎ黒縄が無惨にも白肌に喰い込めば縄に恋した女福竜は喘ぎ泣きながら虫のうに這う。

猿轡と涕泣の瞬間

大手札三枚一組 五〇〇円

柱宙縛と逆さ責め

大手札三枚一組 五〇〇円

足を吊られた悦虐

大手札三枚一組 五〇〇円

とめどもなく慈液を流しながら

止めるために脚を吊り固定すれば

以上は、いずれも直接ネガから印

紙に焼付けた極鮮明な一粒選り

大阪市阿倍野郵便局私書

14号天竺社へお申込み下さい。

読む方と見る方と兼ね備え内容もユニークなものと思います。12月号の、山本五郎氏の「和装美の世」は、いわゆる汚らしさを感じさせない独特の作品と大いに共鳴を感じます。機会を見てカラーグラビアとしての掲載やカラーフォトの別売を切に希望します。貴社としてはグラビア等の削減を方針としているとのことですが、内容によつては収載されたいと願っている読者も多いと思います。結果的には相当数の写真を掲載されているのですから一考願いたいと思います。

(東京都・中野誠一)

奇ク十二月月号で福井桃子さんの「縄にまつわる私の体験」を読ませていただき、とても感激いたしました。ぜひ一度福井桃子さんと思う存分責めぬいてみたいと思います。踊りをやったこともあるとの事、大変好都合です。一度責め役に使って下さってもありましたので責めて責めて責め抜いてあげます。福井さんの御希望は全裸で逆さ吊りとの事、なんでも御希望にそいます。福井さんの水着姿を縛り上げ、さるぐつわをはめ、あなたのヒップを責めてみたいと思っています。福井さん、一〇一ペー

ジの写真はとても素晴らしいものです。それから福井さんに一言、逢つて下さる時には、ぜひクツ下をはいて下さいね。出来ればアミ目の白のクツ下を。福井さんの写真を見まして、とても好きになつてしまいました。ぜひ一度会つて下さいね。(静岡市・木原盛男)

私は御誌を読みはじめてから、まだ一年に足りませんが、その間でも女性の方々の投稿が大分目につきます。もっとたくさんの女性の方が、投稿されることを望みます。私も今度が初めてのお便りを出すのですが、私の周囲でも案外女性の読者も多いんですよ。私は東京の学校にいたのですが身体をこわして今は家に帰って家業を手伝っています。それでちょっぴり淋しく人恋しさもあってお便りを書きました。家は海に近くて都会の騒々しさもなくのんびりしています。私が刺戟が少ないように思います。私も二十三才、適齢期なのでもう結婚しちやおうかなと思ったりしています。とても奇巧的な内容が好きなんです。筆がたったら告白も書いてみたいし、縛られた写真もとられてみたい気がします。結婚するまでに、そんなアバ

☆浣腸関連資料の部☆

只今浣腸実施中

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
東浦ひかる 略号 (かみ)

強制 空 気 浣 腸

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
東浦ひかる 略号 (かく)

百CCのポンプ浣腸

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
東浦ひかる 略号 (かな)

浣 腸 責 の 極 致

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
東浦ひかる 略号 (かむ)

女体浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 略号 一五〇〇円
梨花悠紀子 略号 (れち)

強制 女体浣腸三態

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
絹川 文代 略号 (きか)

イルリガートル浣腸

大手札十二枚一組 略号 一五〇〇円
梨花悠紀子 略号 (いるり)

太い浣腸器で浣腸

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
東浦ひかる 略号 (かふ)

自分で浣腸をする女

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
遠藤百合子 略号 (ゆか)

浣 腸 器 と 女

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
絹川 文代 略号 (ほの)

エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大塚 啓子 略号 (るい)

イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 略号 六〇〇円
大塚 啓子 略号 (るは)

女体浣腸ブレイ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
大塚 啓子 略号 (ほは)

進ばしる浣腸液

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
大塚 啓子 略号 (ほい)

浣 腸 後 の 排 便

大手札五枚一組 略号 六〇〇円
大塚 啓子 略号 (へき)

便意に苦悶する女体

大手札五枚一組 略号 六〇〇円
大塚 啓子 略号 (へか)

浣 腸 さ れ る 清 子

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
山原 清子 略号 (かる)

浣 腸 に 興 ず る 女

大手札八枚一組 略号 一三〇〇円
山原 清子 略号 (かへ)

浣 腸 に 悶 える 女

大手札七枚一組 略号 一二〇〇円
山原 清子 略号 (かに)

イルリガートル

大手札十枚一組 略号 一五〇〇円
山原・東浦 略号 (かも)

グリセリン溶液注腸

大手札六枚一組 略号 一〇〇〇円
山原・東浦 略号 (かて)

ンチュールを味わってみたいと思
ったりしています。故郷へ帰って
まだ一月余り、ふるさとのナマリ
をなつかしく思っている娘です。

(和歌山・橋本文代)

私は二十六才になるSMに興味
のある良識を備えた青年です。勇
気をふるってお便りをします。M
の私は女王様のどんな御命令に
も忠実に従うつもりであります。
どうか女王様、お願いです。仰向
けになった私の顔の上にスカート
をまくり上げてお尻を押すつけ、
臭い匂いをかがせて下さい。Sの
女王様、私は忠実な男奴隷です。
男犬に飼育して下さい。どんな御
奉仕でもします。人間便器にでも
なります。女王様の思いのままに
して下さい。『マダム美美代』の
福井桃子様からもトイレとして責
めて下さい。川野香代様、古坂ナ
ミ様、小山郁子様、佐藤満代様、
徳満艶子様、また若い女王様、私
をトイレとして一生こき使って下
さい。

(福岡県・太田M作)

私達は夫婦で仲良く奇クを愛読
している者です。毎月発売される
奇クを楽しみに一月も欠かさず買
い求め冊数も相当になりました。

一月号もいち早く購入し二人でむ
さばり読みました。まだ結婚して
一年半しかありませんが妻は全面
的に私を信頼してくれて私の言う
ことだったなら何でもきいてくれま
す。妻はMというほど積極的で
はありますが奇クの内容は喜ん
で受け入れているようです。私は
カメラは持っているのですが他の
夫婦プレイを楽しんでおられる方々
のように写真をお送りできないの
が残念ですが、SMプレイとして
は或る程度のところまでやってい
ますし、単調になり勝ちな夫婦生
活にとっているいろいろと色どりが加
えられ今は面白くて仕方がありま
せん。一月号は写真の挿入が多く
大変参考になりました。田尻長洲
様の「夫婦交換プレイの提唱」興
味深く読ませてもらいました。私
達は二十五才に二十才と、まだ
まだ幼稚でとてもそこまでゆきま
せんが、先輩の方々の指導をい
ただければ幸いに思います。「夫
婦プレイの実践者の一人として」
の津山逸夫様。たくさん写真を
とっておられて、羨ましい限りで
す。私も写真を勉強して妻が若い
うちに、とおききたいと思いま
す。紀川和歌子様のお写真も素晴

浣腸と便意の苦悶

大手札三枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号(のけ)

高圧空気浣腸

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(むい)

浣腸場面大写真

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(むは)

施される浣腸

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(むろ)

浣腸をする女

大手札三枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆか)

自ら施す浣腸

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ちぬ)

浣腸器を弄ぶ女

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ちり)

浣腸を施される女

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ちら)

浣腸後介添排便

大手札六枚一組 一〇〇〇円
山原・東浦 略号(かね)

シリンドーにて浣腸

大手札六枚一組 一〇〇〇円
山原・東浦 略号(かた)

イルリガートル嘴管挿入

大手札六枚一組 一〇〇〇円
山原・東浦 略号(かち)

アイヌス浣腸補助

大手札四枚一組 七〇〇円
山原・東浦 略号(かの)

浣腸に興ずる清子

大手札四枚一組 五〇〇円
山原 清子 略号(うも)

浣腸される浣腸マニア

大手札四枚一組 五〇〇円
山原 清子 略号(うわ)

浣腸悦楽独りプレイ

大手札五枚一組 六〇〇円
美木乃々子 略号(ぬる)

施される浣腸の美味

大手札五枚一組 六〇〇円
美木乃々子 略号(ぬか)

挿入された嘴管

大手札四枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(るて)

襲いくる浣腸器

大手札二枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(るち)

女体浣腸独り遊び

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ると)

「全日空機で来た女」の記事と写
真は非常に良かった。この女性
は私の妻によく似ているのと妻の

家が四国なので特に関心を持ちました。早速、この写真を参考にし、て妻を縛り上げました。とにかく一月号はとても充実しているのうれしかった。

○(広島市・矢垣友彦)

12月号の「白粉花の誘惑」を書かれた近藤恵美子様に強制浣腸の大執行を行います。恵美子は宣誓を受けると僕のドレイになることを誓います。そしてスカートを脱ぎパンティーストッキング、ブラジャー肌着一切身につけているものを脱いで身体検査を受け合格すると手を後に回し、手錠をしてパンティーストッキングの猿ぐつわをして浴室に連れてゆき頭を下につけ両足を大きく開け、ひざをまげて恵美子は第一回の浣腸の洗礼を受けます。微温湯に石鹼を溶かした液を用いて注入し便意を訴えたらオマルをまたがせて排便させます。排便の後始末は僕がします。ジュースでも飲んで休みます。休み終わると両足を大きく広げ上にあげて頭と手からだ全体を支えます。そして恵美子は第二回目の浣腸を受けます。イルリガートルを用いて、ドナウ原液ビールなどを混ぜて一〇〇〇CC位注入しま

す。注入が終わるとソーセイジで堅く栓をし、T字型アナルバンドをはめます。恵美子は浣腸の極致に達して苦しみ悶えます。ようやくアナルバンドをはずして大噴出を観察します。それが終わると昼食をとりブランデー酒等を恵美子にすすめます。酔がまわると恵美子に目かくしをして寝室へ連れてゆき横になかせて第三回目の浣腸を施します。イチジク溶液にグリセリンを混ぜ浣腸器の先にゴム管をつけ注入します。注入が終わるとオシメをしてゴムのオムツカバーを当てます。しばらく経ってから目かくしの状態で浴室へ連れてゆき床にねかせてオムツカバーをはずしてオシメをとり出します。そして剃毛して汚物と一緒に流して恵美子は赤ちゃんになります。恵美子さん、僕と一度プレイしてみませんか。僕は21才、会社員です。(三重県鈴鹿市・山中英三)

○ たくさんのお便りありがとうございました。勇気を出して通信を書いてよかったです。よいお友達とおつきあい出来るようになります。ありがとうございました。厚く御礼申し上げます。

(大分県中津市・南加津子)

〔異色緊縛女性フォト集〕

△光沢印画紙極鮮明焼付▽

首縄高手小手全裸縛り

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いき▽

縄の痛さに耐える表情

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いめ▽

股間縛りは凄く締まる

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いあ▽

卓上の緊縛裸身は躍る

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いて▽

両手吊りの全裸体縛り

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いた▽

投げだした被縛女体

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いま▽

麻縄は白人の女体を裂く

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いゆ▽

縛られるのいや!

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いせ▽

私の裸をシロシロ見ないで

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いし▽

日本式後手縛りの痛さ

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いそ▽

白人女性をいたぶる魔手

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いや▽

金髪美女も縛られて台なし

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いも▽

異国女性の被虐の表情を狙う

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いむ▽

美しい白人緊縛の姿態

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いけ▽

逆エビ責めの外人女性

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いひ▽

雁字搦目で椅子に縛る

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いえ▽

落花狼藉のしとねの上で

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いう▽

妖艶な縛られぶりの沖縄美人

大手札三枚一組 四〇〇円
座間 明子 略号△ほけ▽

股間縛りの痛さに開股か

大手札三枚一組 四〇〇円
座間 明子 略号△ほへ▽

悶える厳しい縛りの明子

大手札三枚一組 四〇〇円
座間 明子 略号△ほて▽

椅子で演ずる明子の痴態

大手札三枚一組 四〇〇円
座間 明子 略号△ほと▽

観念して縄に身を任す

大手札三枚一組 四〇〇円
座間 明子 略号△ほあ▽

縄は豊満な柔肌をくびる

大手札三枚一組 四〇〇円
座間 明子 略号△ほさ▽

私は奇クを毎月愛読しているSMファンの一入ですが、私はまたSMプレイにも大変興味を持っています。今年25才の独身青年で、好きなプレイは浣腸と羞恥責めです。読者のM女性と思う存分SMプレイを楽しみたいと思っております。M女性の方、どしどし名乗りをあげて下さい。

(小田原市・丸井辰男)

一月号、福井桃子さんの「浣腸って素敵」は正に一九七二年の幕明けにふさわしい迫力ある浣腸記事です。しかも他誌がさし絵でゴマカシている浣腸表情を写真で示し文章を一層盛り上げた。特に一四二頁と一四三頁の浣腸写真は前者はイルクを後者はガラス浣腸器(恐らく百CCモノと思う)を

実際にふくよかな双丘の間に差込んで実感を与えたことは浣腸族にとって初めての見参であった。貴誌が浣腸一つにもおろそかにせず浣腸分野を追求している結果と思う。最近SMを扱った雑誌や写真集が続々発刊されているが、どれも出版社としての独創性がなく、いづれも形だけの真似に陥っている。読者は当初はそれでもワツと

飛びつくであろうが、どのSM誌でも変りばえがないと分ると、いずれは独創性のあるものに落ちつくと思う。その点貴誌の内容は絶えず斬新さがあり、浣腸記事にしても実在の人のルポないしは書きモノだけに大きな迫力がある。これはオベンチャラではないが真のSM界をリードするのは貴誌をおいて他にはないと思う。内容を見ないで買えるSM雑誌といえば貴誌ぐらいのものだ。とくに一月号の内容充実さは抜群で七二年にSMをかけようという旺盛な意慾が感じられ愛読者の一人として非常に心強く思うものです。

(東京都・千代田一郎)

奇クを愛読される女性の皆さん勇気と努力でSMプレイをやられん事をすすめます。ただ本を読んで観念的にあれこれ考えても肉体を通じての快楽は味わえません。骨の髄まで浸透するようなプレイでなくてはSMへの道は拓けません。人生短い生涯ですSEXを除外した真のプレイを望まれる女性の呼びかけを待ちます。志村加代様、現在お一人の由。私は奇ク購読歴三年のベテラン、三十二才の男性です。夫婦プレイばかり

美しき抜群の正面を晒す

大手札三枚一組 四〇〇円
座間 明子 略号△ほゆ▽

悦唐にむせぶ美貌のひと

大手札三枚一組 四〇〇円
渡部 好美 略号△ほし▽

責められて恍惚境をさまよう

大手札三枚一組 四〇〇円
渡部 好美 略号△ほひ▽

足挙げ縛りと開股縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
渡部 好美 略号△ほも▽

超羞恥責めの極致

大手札三枚一組 四〇〇円
渡部 好美 略号△ほせ▽

股縄は何んでも知っている

大手札三枚一組 四〇〇円
渡部 好美 略号△ほす▽

鼻責めの悦楽境地

大手札三枚一組 四〇〇円
渡部 好美 略号△ほめ▽

鼻を愛撫する責め

大手札三枚一組 四〇〇円
渡部 好美 略号△ほみ▽

蠟燭責めと臀部打ち

大手札三枚一組 四〇〇円
渡部 好美 略号△ほに▽

喰い込む股間縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
渡部 好美 略号△ほん▽

でなくても、婚前プレイも必要です。貧困とプレイは関係ありません。同性の縛りに対する情的感覚があれば、もうそれで貴女は立派にプレイすることが出来ます。私とプレイをやっているかどうか。きつと、満足されることと思えます。心豊かな貴女のことですから甘酸っぱいプレイが楽しめることでしょう。二十六才の安原チエ様、とっても御主人を愛しておられる由。貴女が強要されるようなことは、現今ではもうあたりまえのことです。傷つく以外のことはなんでもどんなことでもして上げて下さい。パンティのお古の件もまああです。同好者として羞恥責めや痛くない責めをしてあげたく思

(大阪市東住吉区・西原浩)

私が奇クを読みはじめてから今年で満六年になる。私が一つの雑誌を六年間も継続して読んだのは私の四十有余年の生涯で稀有のことである。何故、奇クの購読を中止できないのかというと、一つには辻村隆氏のカメラハント、二つ目には読者通信欄があるからである。団鬼六氏の「花と蛇」とか、芳野眉美氏の随筆とか、名文直筆の士は、それこそワンサと輩出しているが、正直いって余り心が魅かれない。辻村氏の流麗な文章と

生々しい迫力に満ちたフォト。そしてフィクションのない読者通信欄の生臭さ。その魅力故に私が六年間も奇クという鎖に拘束されて来、これからも喜んで束縛されたいと思っているのだ。今後ともカメラ・ハントの健在と読者通信欄の充実（たとえば回送台帳を設けるとか）を期待するや切である。

（仙台・みちのく駄弁生）

人知れぬ悩みに悶々とした日々を送っておられる山梨の阿部鈴子様。私のモデルに所望します。私は二十才の大学生です。機会があれば妙齡で含羞に富んだ女性の柔肌を思ふ存分、責め上げ、一大写真集を作り上げたいと思っています。今年夏休み、米国人の家庭でアルバイトをした時、Mの婦人の誘いを受け、責めの醍醐味を堪能しました。以来、緊縛、流腸責め等のSMプレイに対する熱情は、つのる一方です。そこで適当なモデルを探しておりましたが貴女のような積極的な女性を知り意を強くして、お誘いする次第です。秘術をつくして貴女の悩みの解消に努めたいと思います。貴女の同意を得られますことを確信しております。

（東京・美青年）

十一月号で土田氏が、私たちの呼びかけに早速お応えいただき、ありがとうございます。同好の友が欲しいと思っておりましたので土田氏の御返事は非常に嬉しく思いました。私どもも夫婦だけで楽しむより、心の許せる方々ともっと巾広く、おつき合いしたいものだと思っております。色々と先輩諸氏に御指導を願ひ、もっとSM、Pを深く理解し、私ども夫婦の生活に取り入れて楽しみたいと思います。土田氏御夫妻の今後の御活躍を期待して、フォトの発表を、楽しみにお待ち程、お願いします。後日、妻のフォトともども、感想をお送りしますので、よろしく御批評の程を、おねがいします。

（和歌山・紀川正信）

安原チエさんは御主人の前で流腸の羞恥責めを御希望ですが、私と一諸に如何ですか。私も同じ二十六才。鞭打ち等、痛みものともなう責めも大嫌いな私と偶然の一致です。貴女と時間をタツプリかけの流腸責めなら徹夜でもかまいません。私の流腸責めは二百CCの特大ガラス流腸器からエネマ、イルリや大人のおもちや屋で買っ

本誌愛読者美女緊縛姿態

膨満なる乳房責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
高村 浩子 略号 八ひら

片足吊りにもたえる裸女

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
高村 浩子 略号 八ひむ

初縛りに羞らう

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
高村 浩子 略号 八ひな

縛りは大好きなのよ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
高村 浩子 略号 八ひれ

芳紀二十才の羞恥縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
高村 浩子 略号 八ひつ

恥かしき緊縛ポーズ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
高村 浩子 略号 八ひよ

ローソク責めの妊娠腹

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
富田由美子 略号 八へえ

これが妊婦縛りだ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
富田由美子 略号 八へふ

前手縛りの妊娠太鼓腹

大手札二枚一組 略号 三〇〇円
富田由美子 略号 八へら

臨月腹を縄で縛る

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
富田由美子 略号 八へれ

稚妻の妊娠太鼓腹観賞

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
富田由美子 略号 八へあ

若妻妊婦全裸の羞らい

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
富田由美子 略号 八へう

メロンのような腹

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
富田由美子 略号 八へよ

一糸まとわぬ妊婦像

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
富田由美子 略号 八へや

強烈エビ縛り地獄

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
谷山久美子 略号 八ひあ

麻縄開股責め地獄

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
谷山久美子 略号 八ひて

開股縛りの強烈さ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
前田真知子 略号 八ひえ

白肌に喰い込む縄

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
前田真知子 略号 八ひま

後手縛り吊り上げに呻く

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
前田真知子 略号 八ひの

開股責めの醍醐味

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
前田真知子 略号 八ひこ

縄で汚す清纯乙女の肌

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
前田真知子 略号 八ひふ

エビ責めに映える柔肌

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
前田真知子 略号 八ひう

捕われの美女は泣く

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
前田真知子 略号 八ひや

た特製浣腸器等、国内にある浣腸器具は、すべて持ち合わせておりこれらを一つずつ、あるいは複数で色々組み合わせて貴女に浣腸しましょう。浣腸液も石けん水という初歩的なものから、食酢、グリセリン、ドナン等を色々組み合わせ調整して浣腸すれば、恐らく貴女の腸内は、しばらく苦痛を味わうでしょう。そして最後は、ドイツ製のプレイ用のドロツとした浣腸液を容赦なく注入します。さすがにプレイ用にふさわしく便意が数時間、継続的に襲って来てしかも便は少量ずつしか出ません。便意は、その人の体質によって異なりますが、私がある女性に試みたところによると、だいたい三時間前後、断続的に腸をしばらくうな便意が襲ってきます。恐らく貴女は途中で、あぶら汗をにじませて長時間にわたって少量の便を出し、もう貴女の肛門は感覚がなく開いたままになります。私は更に一番、大きい腔開口器を貴女のアヌスに差し込み、開口器が全開になるまで拡げます。そのときは十センチぐらい拡がります。正に想像を絶するアヌス責めではありませんか。

(東京・浣腸キチ)

○

福井桃子さんの「マダム英美代の告白」楽しく拝見しました。殊に写真、私を夢中にしました。というのも、私は以前に「鼻に狂う」という拙文(創作)を奇クに載せていただいたこともある鼻マニヤです。福井さんの肉の厚い如何にも柔らかそうな魅力的な鼻を見て、血がたぎりました。福井さんを思いきり縛り上げ、あの鼻を心ゆくまで責めてみたら……と思っただけでゾクゾクします。女の人の鼻を研究して、そして女の人鼻をつまみはじめて三十年。つまんだ女性の鼻、一千人以上、の私としては、鼻を見れば、どんな味か直ぐ分かります。苦悶に大きく口をあける福井さん。その鼻の孔を、さまざまに変形させ、愛用のカメラで写したいと思っています。福井さんは鼻責めを経験されたことがありますが、その鼻に他人から手を触れられたことがあるのでしょうか? もしなければ、ぜひ私に最初にその鼻に触れさせて下さい。そして思う存分、責めさせて下さい。(横浜・斎藤香根雄)

○

M女通信を拝見し、早速にペンをとりました。私は二十三才になる一サラリーマンです。毎月、奇

惨酷海老責め胡坐縛り

大手札三枚一組 四〇〇円

三浦 純子 略号△ひす▽

亀甲縛りと後手柱縛り

大手札三枚一組 四〇〇円

三浦 純子 略号△ひせ▽

足挙げ開股責めを拒む

大手札三枚一組 四〇〇円

三浦 純子 略号△ひし▽

臀部責めの悦楽境

大手札三枚一組 四〇〇円

三浦 純子 略号△ひし▽

三浦 純子 略号△ひも▽

髪を掴んでいじめる

大手札三枚一組 四〇〇円

三浦 純子 略号△ひさ▽

化粧室とトイレ責め

大手札三枚一組 四〇〇円

三浦 純子 略号△ひん▽

股間縛りと臀部責め

大手札三枚一組 四〇〇円

三浦 純子 略号△ひゆ▽

○

みなさま。おたよりをありがとうございます。菊子は、こんな夢を、よくみます。丸裸で後手に縛られて、多勢の愛読者のみなさんに虐められている夢です。ひどいポーズでオシッコをしてみせ、今度は四つん這いで、お尻をなぶられ泣きじゃくる私を、みんなで笑うのです。本当に多勢の方に責められたら、どんなに恥かしいことでしょう。とってもひどい恰好でいじめられ多勢の方に見物されながらヒイヒイ泣いてみたいものですわ。お馬鹿さんでしょう。

(大阪市・深田菊子)

○

東区の女王様。もう犬は飼っておられますか。あの記事を読み、何とすばらしいことだろうと思います。日夜、女性によって、いじ

(神戸市・責め男)

次号(三月号)は一月二十五日に発売いたします

めぬかれたら……などと夢みつつ果たされぬことだと思っておりましたが、こんな近くに女王様がおられるなら、私もぜひ飼ってみていただきたいと思います。もしも逆らったり手落ちがありましたらどんなお仕置でも耐えるつもりです。手足を鎖でつないでムチ打たれながら、トイレの掃除等に使役して下さい。浣腸されたり、太いロープで縛って拷問して下さい。浴場での奉仕、血のにじむような責め方で、ビシビシしごいて欲しいのです。顔面を踏みつけ、女王様のハイヒールを舐めさせて下さい。女王様、どうか私にも、その神酒を顔面にそそいで下さい。また細かいハリガネでがんじがらめにして、ペン先や刃物などでイレズミして下さい。一物質だと思っ

こき使して下さい。えさなどは余りやらず、朝の御食事の御世話など、いろんな手落ちをみつけ、そのたびに引っぱりたいたり、頭を床に踏みつけ、力一杯、押さえつけて欲しいのです。バットやロープホースの切れ端などで、あらゆる処を、しばいて下さい。日夜、責

めぬいて、顔の形の歪むまで、ありとあらゆる方法で、にくしみを込めて、いじめぬいて下さい。それでも文句はありません。一物質なのですから、言葉を発しないものと考えて下さって良いのです。ああ、女王様のために血にまみれ一奴隷、一物体として女王様の足下にひざまずかせて下さい。

(大阪市・無名居士)

大阪の大谷美子様。どうしても貴女とプレイしたく再び筆をとりました。多くの方々よりの申し込みを受け、まよっておられるようです。どうですか、多くの奴隷になってももらえないでしょうか。そして早く、よく好みの女奴隷として、飼育したいと思っております。まず、剃毛から始めます。ぼくが飼育するとき、貴女は直ぐ裸になれるように下着は勿論、服も最少限度しか着せません。そして教えたことを、目の前でやらせます。もし、まちがったりしたら、きついおしおきです。また、たてに縛ったまま、コート一枚、着せてキタやミナミの、混みを歩かし

ても見たいと考えております。他に、いろいろな責めも考えております。

(奈良・服部生)

一月号の小田原市・由美様。貴女は今では、ご主人のSM友達の前で小さい方なら、してみせられるほどのMに成長された由。しかし近所の手前、今一步、割り切ったプレイが出来ないと言うことはその友達が近所の方だからでしょう。それでは、ご主人の許しを得て、東京で他人の私とプレイしませんか。誰にも気がねのないところで……ご主人の目前で他の男性に全裸に剥かれ縛られてもあそばせ、なぶられ、羞恥責めの限りをつくされる貴女。そんな貴女を眺めながら、ご主人と私は酒をくみ交わすやも……そしてプレイが終われば、貴女は縦縛りの縄のパンティと縄のプラジャータを付けた上に洋服を着て、三人でお茶を飲みに行くのです。私は奇クを八年ほど愛読していますが、貴女同様、割りきってプレイできる相手がないままに、空しく時を過ごしています。どうか責めの小道具について、ご希望も、お聞かせ下さい。

(東京・大倉茂夫)

佐野みさ子様。貴女の写真の未載の奇クは淋しい限りです。私は貴女を思慕する愛読者の一人ですが、どしどし、いろいろなポーズを考え出して誌上に発表して下さい。豊かな乳房から下腹部、太腿にかけての成熟きった人妻の美しさは、娘達の及ぶところではありません。また、その美体がMの願望と羞恥に悶えるとき、新しい美が誕生していると思います。私の友人達も貴女を素晴らしいと言っています。皆の期待に答えて下さい。

(神戸市・大西弘明)

十二月号の安厚千江様。ぼくは東京都に住む二十才の男性です。今までSMプレイどころか女性の体さえ知らない空虚な日を送ってきましたが、先月あなたの通信を拝見して、思いきってペンをとりました。どうか、あなたの手で、ぼくを男に、そしてSMに開眼させて下さい。体格は身長一七三センチ、体重七十キロ。S八十パーセント、M二十パーセントくらいのもりです。特にローソク責め浣腸責めなどが好きです。また、ネクタールを飲ませていただけたら幸いです。(東京・孤独な男)

○本誌は口絵、グラビヤ写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に注意して編集したており、いよう、充分に注意して編集したており、すが、本来成人向として発行を企図しており、り、本係上、十八才未満の方には絶対販売さらないよう、特にくれぐれもお願ひ申し上げます。